江戸文學研究

文學博士　藤井乙男著

装幀 船川未乾

はしがき

江戸時代の文學について、特に興味を感じた部分や、新たに發見した資料に對する意見を集成したものが此書である。もとより文學史のやうに系統だつた記述ではないが、その時々の大勢や主要な人物事件はほゞ網羅し、且その中には前人未到の研究も多少はあると信ずるのである。

印刷後心づいたことで、次の二件を補足する。

假名草紙の作者の條に引用した筠庭雜錄の文に「淺井了意が浮世物語に井上小左衞門某悔草を作りて云々」とある。これは浮世物語卷二後悔の事の條に出て居るが、猶同じ了意の可笑記評判卷一物ごと後悔すべき事の評に「中比なにの小左衞門とかやいひしものの悔草三卷をつくりて現在の事はいふに及ばず過去未來をかけて三世をくやみしかどもまだ悔たらずやありけん胸ふくれ腹のはる病をしいだして身まかりけるもくやし」とあるを見いだした。されば大坂陣に討死したといふ一說の誤なることは明瞭である。

芭蕉と戀の文について、或人から寬文十二年正月の貝おほひの中に、衆道すきといふ芭蕉の自白があることを告げられた。よつて同書を見ると、

左勝

紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ　此男子

右

兄分に梅をたのむや兒ざくら　蛇足

左の赤いこんぶくろは大坂にはやる丸の菅笠とうたふ小哥なればなるべし右梅を兄分とたのむ兒櫻は尤たのもしき氣ざしにて侍れども打まかせては梅の發句と聞えず兒櫻の發句と聞え侍るは今こそあれわれわれも昔は衆道ずきのひが耳にやとかく左のこん袋は趣向もよき分別袋と見えたれば右の衆道のうはき沙汰は先思ひとまりて左を以爲勝

とある。句合歌合等の判詞は兎角文章のあやに制せられて、事實に遠ざかる弊もあり勝ちではあるが、まんざら心にないそら言でもなからう。寛文十二年は彼が二十九歳の時である。

大正十年四月　著者

江戸文學研究

目次

挿畫目錄

目次

江戸文學研究

藤井乙男著

江戸文學概觀

我が文學史中最も光彩絢爛たるは平安朝と江戸時代で、此兩時代はその中間に鎌倉室町四百餘年の溪谷を隔てゝ相對峙する高山の如き觀を成して居る。　單に江戸時代といふものゝ三百年の間には時に盛衰隆替は免れぬ、就中文學の盛なるは前に元祿あり後に文化文政あり、其間相距ること約百年で互に相對立して居る、而して元祿の文學はその主權京阪にありて、國學漢學より小說戲曲に至るまで大家輩出したに反し、文化文政に至りては、文學の中心全く江戸に移り、上流文學も俗文學もこゝに全盛

を極めた。之を要するに近世文學は元祿を中心とする慶長より寶暦以前まで約百五十年間と、文化文政を中心とする寶暦より明治以前まで約百年間の前後二期に分つが最も穩當だと信ずる。而して前期を更に分ちて慶長より寛文に至る間を第一期(寛文時代)とし、延寶より正德に至る間を第二期(元祿時代)とし、後期を分ちて寶暦より天明に至る間を第一期(明和安永時代)とし、寛政より慶應に至る間を第二期(文化文政時代)とすべきである。

前期中の第一期(寛文時代)は古書の刊行や古文學の註釋等現れて啓蒙の資となり、歴史文學、宗教文學、敎訓的の假名草紙、支那文學の翻譯等漸次流行して第二期の準備をなし、第二期(元祿時代)は浮世草紙淨瑠璃俳諧等の名匠輩出して燦然たる光輝を放ち、其後半期は西鶴を祖述する八文字屋、近松の後繼者竹田出雲、芭蕉の高弟等があつて、前半期の盛大には及ばざるも、猶その餘勢を保つて繼續した。前期の文學は後期に比して、すべて

大様(おほやう)でこせつかず、粗大で纖巧でないのが其顯著な特色である。風俗における元祿模様と小紋形、繪畫における師宣清信と歌麿北齋も同一の傾向を示して居る。前期の作家は學問の素養に於ては後期の人々に劣つて居るが創意において勝れて居る、後期は創意乏しく襲踏を事とし、編纂的衒學的で、著しく國學漢學の影響をうけて、材料においても文體においても却つて古典的である。

後期中の第一期(明和安永時代)は田沼の惡政より士氣頽廢し風俗亂れ、極めて不眞面目な時勢の風潮に乘じて、川柳狂歌狂詩等の流行となり、通人達が競うて黄表紙に滑稽を弄し、遊里の内幕を穿つた洒落本が行はれ、識者をして眉を顰めしめた。第二期(文化文政時代)は所謂大御所様時代で松平定信老中となつて前代懦弱の風俗を振粛し學問を奬勵したので、知識が上下一般に普及すると共に、一方には國學漢學の大家輩出し、一方には江戸小説の全盛期を見るに至つた。但し其後半は幕府の衰運に向ふ

と共に內外漸く多事にして人心に餘裕なく、隨つて文學も次第に下り坂になり、漸く前半期の惰力で年々多少の草双紙類と浮薄淫靡な爲永一輩の人情本があるのみで多く言ふに足らない。

之を要するに江戶時代の文學は、其種類頗る多く其行はるゝ範圍も亦極めて廣い。平安朝では詩歌小說日記の類のみで、それも單に貴族が消閑の娛樂に供するのみで、一般人民には何等の交涉もなく何等の慰藉をも與へない。江戶文學は之に反し國學漢學の如き高尙なるものより狂歌俳諧淨瑠璃小說等に至るまで、其品類多く、太平年久しく敎育普及し上下一般に知識進步せしより、上流者も下流者も各ゝ特殊の文藝美術を玩び、謠曲に對する淨瑠璃長唄、狩野土佐の繪に對する浮世繪、詩歌に對する狂歌川柳といふ風に、上下二流の文藝行はれ、一は保守的傳統的一は進步的革新的で、相對立して武家と町人との好尙を代表し、種類に於ても分量に於ても到底平安朝の比ではない。

平安朝の文學は優美風流を旨とし道德的色彩頗る稀薄なりしに反し、近世に至りては武士道の發達と儒教隆盛の結果は、戯作小說の上にもその影響著しく、忠孝節義を尙び實用敎訓を主意とする傾向を生じたるに、當路者が風俗の取締を嚴にし不健全なる出板物を禁止した以來、一層此傾向を助長し、馬琴が勸懲主義を標榜してから、天下靡然として之に化し、此主義を奉じなければ小說にあらざる如く考へられ、彼の爲永春水の如き淫靡な時勢に媚び、ひたすら挑撥的の筆を弄した者までも、我が寫せる女はたとひ野合私奔の者でも、皆一人の男に信實を盡すから貞操なしとはいへない、是も亦勸懲の一助なりとの苦しい言譯をなさしめた。

武士道影響

武士道は鎌倉以來戰亂の世を經て漸次其形を現はし、近世に至つて其內容外形大に備はり、利害共に著しくなつた。忠孝を旨とし節義の爲には身命を顧みず、然諾を重んじて武士に二言なしといひ、廉潔を尙んで食はねど高楊枝といひ、私欲の爲に自己の意志を枉ぐるを許すべからざる罪

惡とした。而して其弊は形式に囚はれ、矯飾に過ぎ、動もすれば殺伐に流れて妄に人を殺し、又自らを殺し、言ふにも足らぬ瑣細の事に意地を立てて命の取りやりをした。西鶴の武道傳來記などを見ると、是等の例は到る處に發見せられる。その義理といふが「單に一種の世間體や名聞心で、生命の安直さや、變通を知らぬ馬鹿正直さが寧ろ滑稽に感せられる。克己制欲を理想とした武士道に養はれた人物は、概ね單純一徹で、人情の動搖や複雜な性格を描いたものゝないのも自然の勢である。名譽を尊び家系を重んずる風は、階級制度の確立した此時代に於て亦著しく現れ、御家騷動、寶物の紛失、敵打、武者修行等が重要な小說の材料となつた。

佛教は室町時代よりも威力なく、人世は無常なり、富貴も恃むに足らずなどいふ消極的教義には、さまで興味を感せず、現世の利用厚生に重きを措く聖賢の教に多く耳を傾け、儒教は武士道と相並んで人心を支配し、平安朝以來の因果應報に代ふるに儒教主義の忠孝節義を以てし、彼は感情を

尙びたるに此は意志を重んじ、男子たる者が一婦人に愛着するが如きは、懦弱の極、武士の風上に置くべからざる所業とし、女子は子孫を儲ける用にして、親夫の爲には身を賣りても仕ふべきものとせられた。之を平安朝の男女關係と比べると非常な差異である。王朝時代の婦人は男子と自由に交際して、父母も相當の相手なれば之に檢束を加へないのみか、寧ろ之を奬勵する有樣であつた。從つて此間の關係は小說の好材料として常に用ゐられたのであるが、江戶時代の嚴格な儒敎は戀愛を容認しないで、男女七歲にして席を同じうせず、夫婦別ありの敎を立てゝ、妙齡の士女が交際を防ぎ、既婚の夫婦も人前では成るべくよそ〳〵しく振舞ふをよい事とした。父母のはからひで見ず知らずの男女が、夫婦となつて初めて互に顏を知るといふ例も決して少なからず、深窓の處女が花見遊山に出て偶〻一男子を瞥見して忽ち戀ひわづらひとなるといふ類も、必ずしも小說家の空想とのみはいはれない。されば奔放熱烈な戀愛を寫し

たものは、多くは町人の男女に限り、これすら父母はその子女の意に任せて婚せしむるが如き事なく、一家の體面を疵つけたものとして、世間體をつくろふ手段をめぐらすが普通である。此の如く良家の女子は上下一般に監督嚴重で、青春の男女が自由な戀愛といふ樣な小說の材料は極めて稀であつた。されど人間の性欲は一方に抑へられると他方にその逃路を見出さなくてはやまない、幾多の遊廓は公許せられて、身分のある者も此に出入するをさまで恥とは思はない、從つて遊女も亦是等の客に接する必要上多少趣味文字を解する者あり、武士道の感化は傾城にも及んで、義理と意地とを尙んで、身體は賣つても心は賣らぬと揚言し、茲にも格式階級がやかましかつた。かくて遊女は小說の重要な人物となり、之なくては殆ご一篇の小說を成さゞるの觀を呈し、遊廓は極樂淨土の如く遊女は歌舞の菩薩の如く寫されて遊廓讃美遊女崇拜の文學が續出するに至つた。これは當時の「社會狀態の實際であると共に、良家の婦人は儒敎

主義の壓迫を被り屛息萎縮して、自由に感情を發露し得なかつた所から、小說の人物としては活動乏しく精彩なく不適當であつたのである。かくて元祿の西鶴物、享保の八文字屋本、天明の洒落本、天保の人情本等、專ら此間の消息を傳ふるに努めたから、自ら卑野淫猥な物となつて、士君子の排斥を招いた。伊勢源氏のごとき古典ですら誨淫の書として斥けた儒者に、江戸時代小說の許さるべき餘地のないのは勿論のことである。西鶴が一方には武家義理物語武道傳來記の如き堅苦しき著述をなし、一方では放逸無慚な好色本を出したのも、能く此矛盾した世相を反映したものといふべきであらう。

以上いふ如く武士道と儒敎とは近世文學の哲學であるが、それは主として士分以上の道德律で、町人に至つては社會の上流に位し國民の模範を以て任じた武士ほど嚴格ではないが、町人にも自ら町人の道德律がある。武士の忠義を第一義とするに對し孝行を主とし、神佛を尊び家業を勵み、

身の程を知りて儉約を勤め金錢財寶を大切にするを以て其主意とした。此道德觀が一箇の教理となつて現れたのが心學である。心學といふ名稱は已に幕初にも見えて居るが、其宗教的形式を具備するに至つたのは、正德享保の頃京都に其教を説いた石田梅巖に始まる、梅巖の學は王陽明を本とし、之に神儒佛(道)を交へて一家を立て、專ら平民の爲に簡易通俗な道德を説いた。其弟子手島堵庵、堵庵の門人中澤道二と受け、柴田鳩翁が之について巧妙輕快な能辯で四方に宣傳して大に發展した。心學者流の説く所は畢竟一般平民の抱いて居た常識道德に組織を與へ説明を加へて從來の道義觀念を一層明確に意識せしめ、その良心を一層強く刺戟せしめたものといふべきである。されば心學の未だ興らなかつた時代の近松の戲曲や八文字屋の氣質物などに見える老人が子弟を訓戒する語氣精神が、心學者流の説く所と符節を合せたやうな所があるので、平民社會の道德觀念が窺はれる、三馬の小説にある教訓の如きは全く心學の

影響といふべきである。
終に臨んで近世文學の特色を說かんに、江戸文學は概して樂天的現世的で又娯樂的である。 こは幕府が四民の階級を確立し、各〻其分に安んじて格外の野心を起さしめず、武士は武士の格式を守り、町人は町人の身分相應にその範圍を出づるを許さず、新奇な說を唱へたり、見馴れぬ異器を造る者を罰し、ひたすら人民の向上心を增長せしむべき刺戟を防ぎ、先祖傳來の位地職業に滿足せしめ、小仙境の裡に泰平の惠澤を樂ましめた政策の力と現世的樂天的な儒敎の感化に因るので、佛敎の影響は淺薄平凡な因果應報說に過ぎない。 偶〻現世に不滿の意を表した諷世嘲俗の文字もないではないが、概ね皮相膚淺で深刻骨を刺すものなく、單に口頭の不平不滿で其內心は依然として現實に安住妥協して居るのである。 要するに口先筆先のからかひ半分で、世間にはこんな話せない手合がありやすと顚を撫でゝ居るといふ調子で、口ぎたない風來の罵倒も畢竟一身

上の不過から寛政の政治を諷した蜀山の狂歌も喜三二の黄表紙も、小面倒な事をいふものだ位の程度に過ぎない。で自己の見識を衒ひ世間を茶かして居る人も、其實は嬉々として太平を樂める一般人と同じく、現代の謳歌者享樂者である。

感情を抑壓し道義を偏重する風は、直接に世道人心に効果のないものは無用の文字とせられ、強ひて功利的道德に附會し勉めて敎訓の意を寓せんとするあまり、淺薄な因果應報說や窮屈な倫理說の奴隷となつて、不自然な結構描寫に陷つた、馬琴の小說はその代表者である。

個人の能力や個性を尊重しない時代の作品は、心理の描寫解剖よりも事件の變化複雜に興味をもち、人間個々の性格活動せず、善惡忠奸の型や老若男女の人情を分つに過ぎない、普遍性を描いて特殊性を寫さない、近松の世話物でも宗七の父と忠兵衞の父、天の網島のお三と重井筒のお雪の如き、親父氣質女房氣質はよく現れてをるが、個々獨特の性格は殆ど出て

ゐない、畢竟八文字屋の氣質物と五十步百步といふべきである、浮世繪の人物が只老若男女の區別があるのみで、どれもこれも同じやうな顏をして居るのも全く同一傾向である。馬琴の人物に至つては善惡正邪の概念を具體化したやうで、人情すら求め難きものがある。作者も讀者も階級を重んじ個人を輕視し、武士はかくの如く、町人はかくあるべきものと大まかに團體的に觀察して、それ〴〵其型にあてはめ、類型的描寫を以て滿足したのである。

要するに江戶文學は樂天的にして現世に滿足し、反抗革新の氣風を缺き、その目的は功利的敎訓的、その觀察は階級的團體的にして個人的特性を忘却し、その興味は心理的描寫よりも事件の複雜局面の變化にあつた、今日の小說が現實に觸れ自然を尙ぶに反して、理想的にして技巧を重んじ傳奇的遊戲的である。

江戸初期の三教一致物語

德川時代は儒教が佛教に代りて勢力を得たる世なることは改めていふまでもなき事ながら、社會の大多數なる凡俗に對する佛教の勢力は、中々に侮るべからざるものあり、されば此多數の俗衆を相手とする假名の書に於て佛教が却て儒教より盛なるも偶然にあらず、惺窩の假名性理、羅山の三德鈔、松永昌三の彝倫鈔等、儒教本位の假名書もなきにあらねど、あみだはたか物語(明曆二年)妙正物語(寛文二年)戒殺物語(寛文四年)夫婦宗論(寛文九年)等の他、鈴木正三、淺井了意等、緇徒の手に成りし佛教的假名草紙の多きに比すべくもあらず。

然らばこの儒教と佛教とは假名草紙にていかに接觸せしか、その教義を說く點に於て學者仲間にては互に相反撥衝突したれども、一般の國民間にてはむしろ融合調和せり、由來我國民は極端まで理窟を推し通さずし

てよい加減の所にて折れ合ふを好む性癖あり、儒佛二教の間にも著しき紛爭葛藤を見ずして、早くも三教一致を說く者續出するに至れり、三教といへば老儒佛を指すこと勿論なるが、我國にては老は俗間に勢力乏しきより、神を以て之に代ふるもの多し、かくして出來たるものを心學とす、心學は人或は石田梅巖が正德享保の頃京師に創設せし所となさんも、決して然らず、心學の名は屢〻幕初の書籍に見え、心學五倫書、心學教訓書、心學論、心學十界圖、心學問答等あり。

三教一致の理を說き、一般社會に教訓を與ふる書にして、就中有名にて勢力ありしを清水物語とす、此の書は淸水に參詣したる順禮の、一老翁と談話する體に擬し、道義の問答を以て一篇を成し、道教儒教を揚げて佛教を貶し「近き頃僧法師など師匠として國に益なく人の恨の種まきしは、なきに劣りなるべし」などいへり、又其序文に

文章のよきをこのむ人は、三史文選などを見るべし、道をしらんとねが

はゞ、四書五經をまなぶべし、和歌の言葉つゞきをもてあそばん人は、源氏物語のたぐひをよむべし、ひきごとのおもしろきには、昔よりこのかた記しおきたる和國草紙に、諸子百家の事、佛經などひきあはせたるおほし、今此物語は一つの心ざすところありとみるべし、心ざす所のほかは、いづれもいにしへのさうしにはおとれるならん。

とあり、著者が儒流なる事を推測するに足る、貞享の書籍目錄には朝山意林庵の作とす、確證なしと雖、必ずしも假託とも認めがたし、意林庵は幼にして父母を失ひ、僧となりて素心といふ、後還俗して儒となり、寛永中、大納言忠長に從ひて駿河に往き、幾くもなく致仕して京に歸る、承應二年後光明天皇に進講し、寛文四年七十六歲にて歿せり。(三浦博士の後光明天皇の御好學と朝山意林庵、史學雜誌明治四十五年四月參照)

寛永十五年十月の出版にて廣く世に行はれ、祇園物語の記する所に據れば、二三千部も賣れゆきて、書肆大に利を得たりといふ、さればこそついで

續清水物語出で、正篇も正保二年に至りて再版せられたり。

清水物語についで祇園物語のいづるあり、清水執行の作と稱せらる、此書は或人の清水物語の大意を語るを、僧の聽きて陽に之を敷演するが如くして、而も陰に之を駁せり、曰く

當世の體を見るに口わきの黄なる人、論語などの文字よみをなし、さて佛法の上をばあまき物やらん、苦きものやらんもしらず、はや鼻をたかくし、先祖よりの佛法を捨つる人あり、或はわかき出家の佛道にはものうくして、なにをがな便をもとめ還俗せんとの底ふかく出家の習に候はん道をばすて、世をわたる媒に四書などをすこし學び候て物しりがほし、わが還俗したるゆへを人にしらせんとて佛法をそしり候。

これ或は清水物語の著者に對する人身攻撃なるなからんや、又儒佛の關係を說いて曰く

佛の三綱五倫をむざとすてよと敎へ玉ふ事、經說にはあらず、(中略)もし

三五の道なく、假に出離を敎へたまひなば、衆生の心におよばぬ道なれば信じがたくあらん、これによりて五常禮樂を、佛法のきだはしとして人天敎もとき玉ふ、一經の中に我三聖をつかはして、彼震旦を化すといへり、孔老顏囘を申候、この三聖のもろこしにいでゝ、禮樂の道ををしへ人の心を善にうつす、是を初門として、佛法をひろめんとのためなり、禮樂前に駈つて、眞道後に啓くと申すはこれなり、此三五の道は、世の輪王も敎へ玉ふ故に、佛のをしへの人天敎なれども、出世の本意とは申さぬなり、右佛法の大旨をしりわけば、何の不審もなかるべし。

文章は淸水の平易なるに似ず、祇園は多く儒書佛典を引證して堅苦し、刊行年月は不明なれども淸水物語出でゝ後一二年間の作と見ゆ。

ついで寬永二十一年(初版は十九年か)大佛物語いづ、京都の大佛へ參詣したる行脚の僧と、佛神儒の三德に合ひたる人と見ゆる一貫といふ者との問答に託し儒道、佛道、風俗世敎等について說く所親切なり、此書の著者は

佛教諸宗に對する態度公平にして、いづれにも偏せざれど、特に禪を力說したる點より觀察するに、恐らく禪家の人なるべし、今文例として最後の一節を抄出すべし。

客僧云、如來禪祖師禪と云事ありげに候、いづれの禪にもとづきたるがよく候、一貫曰、されば禪は直入直指のみなれば、左右逢源に、爰に禪宗悟道の祖師一千七百人これありといへども、古則をのこしおかるゝは九百六十三人也、もし有緣信心の者ありて善知識にしたがへば、そのうち一則參しても悟道す、無緣の衆生はたとひ罷參をしても見性せざる者はむがんすなり、よし一則にても大悟すれば一千七百人の祖師の心に相合ふもの也、此事つがねて云ふときは本來一物也、ひろく物におよぼしていふときは天地萬物本來の面目にあらずといふ事なし、かるがゆへに祖師の見所人々千差萬別也、唯本有の自性を直に見、直に徹つて見性すべし、これ正にもとをつとむるの修行なり、かくいひおはつて其後

みればわれもなし又人もなし。

尙同類の書に紀物語、海上物語あり、紀物語は承應三年の刊行にて、或人都一見のため、田舍より京に出で加茂に參詣したるに、所々に幕打廻し、歌ふもあり舞ふもあり、心うかれて、とある幕の内をのぞきしに、うつくしき上﨟あまた打集ひて、年の頃十七八ばかりなるが三味線取直し、未生以前がいや又ましよ、何の因果に娑婆にでゝ、娑婆にでゝと、迦陵頻迦も是にはいかでと思はるゝ聲にて歌ひをさめたれば、そばなる上﨟、此小歌の心に感動して、頻に後世の心を起すを、今一人の上﨟の種々說得する體にて、一問一答、理氣の說をものべたれど、なほ佛敎殊に法華經をあげ、誠に〳〵末法今時之煩惱重病成者、是好良藥、妙法蓮華經を賴み申す事肝要なるべしと語り玉へば、一座同音に扨々殊勝有難き御事を承り候物かな、ひとへにひとへに賀茂大明神の御はからひとこそ存じ奉り候、先々明神へ參り申さんとて、歌に、ちり〴〵に鷲の高根をおりぞ行く御法の花を家づとにして

とあそばされ、座をたち玉ふと見れば、夢はさめ」たりと。書籍目錄に日心作とあり、何人なるかを知らねど、日蓮宗の僧たることと疑なし。

海上物語は寛文六年の板にて、これのみは古拙なる挿畫あり、恵中の作なりといふ、書中正三の功業を揚げ、又「正三道人は念佛草紙二人比丘尼といふ書を作して、五種の念佛とて、五段に分けて敎へ玉ふ、只今二十四段目の臨終正念の念佛といふを申すべし」などあり、恵中は正三の弟子にて、彼の驢鞍橋の筆記者なり、この物語は明曆二年八月薩摩へ赴かんとて、長崎より便船に乘りたるに、船中に六十ばかりなる坂東方の老僧あり、乘合の士農工商を相手に、近く譬をとりて道を說き、舟の薩摩潟に著くまでに船中の人々を悉く敎化しおほせたる樣に綴れり、此書は前揭數種の中最も小說的趣味に富み、且當時のおもしろき瑣談逸話に乏しからず、一人の、武士の追腹の可否を問ひたるに答へて、

此前去大名、死期の時餘多の小性を近付て云く、汝等定めて此度供を致

す成べし、と有りければ、各御請を申されたり、其中に一人進出で申しけるは、此御供においては罷ならず、御免有べしといひて退出す、時の人判じて曰く、心剛にあらざれば、死ぬ事を得れども生きる事を得ずといへり、生きがたき所を生きたる强ものかなと是をかんず、生きるも死するもたゞ義によるべきなり。

又「萬德圓滿には何と用ひ候はんや」の問に答へたる中に

此前宮本武藏といふ兵法者あり、十六歳より名ある者と仕あひをなす事六十餘度に及ぶに皆利を得たり、一とせ播州明石に住す、或時人來り案内をこうて無雙權之助と申者なり、承及候間御見舞申すといふ、武藏が弟子共出て見るに六尺ゆたかの男の太刀をさし、我におとらぬ弟子共を八人までつれたり、彼の權之助も名ある者にて內々聞及びし所に、殊に大勢にて來れば、武藏が弟子共おのゝけをたつる事すくなからず、折ふし弟子二人付居けるが、爰を一命とさわぎて、此よしかくといふ、武

藏楊弓をけづりて居けるが、是へいらせ給へといふ、則弟子共權之助を請じければ、其器量人に勝れたる大男、座敷へむずとなをる、折しも六月の事成に羽二重のひとへ羽織に大きなる朱の丸を付け、かたさきより帶しまでに兵法天下一日本開山無雙權之助と、金を以て書きたるを著たり、八人の者共も一面になをる、武藏が弟子共、是を見て既に一大事爰に極りたりと思ひ、はゞきもとをくつろげ、かの男に目を付けて居れども、武藏はたゞいかにもつねにして、楊弓をみがきながら、權之助殿とは御手前か、承及候へども終に不レ得二御意一御見舞祝著なりといふ、權之助も如レ仰たがひに御床敷候へ共終に不レ得二御意一候、今度九州筋へ心指し此所に船がゝり仕り、是に御入候よし承り御尋申候と、あいさつして頓て兵法物語になり、權之助申けるは關八州は不レ及レ申、奥迄も修行仕り手合を見候へ共我にあはする者なし、故に西國方へ兵法修行に罷下候なり、御親父無二の太刀は見申候へども、又御手前の代につかひなをし玉ふと

承る、ちと樣子を御見せ候へかしといふ、武藏聞いて、無二が太刀を御覽ぜられば別に替る事なしといふ、權之助強て弟子衆を合手に被成、是非共一太刀御見せ候へといふ、武藏曰くいや我兵法は打太刀をこしらへてつかふやうなる事にあらず、其故は何と打つてくるともあまさずとごむる兵法なり、左樣におぼしめし候て、御手前打太刀して御覽ぜよといふ、權之助よろこび、さらば某打太刀仕らんといひて、錦の袋より本より末まで筋がねを渡したる四尺餘りの木刀を取出す、武藏は楊弓をわりたる木のきれの二尺計なるをおつ取り立ちあがり、打つて御覽ぜよといふ、權之助透間なく打つてかゝる、武藏かの木のきれを以て、ちよい〳〵ととめて太刀を出させず、權之助太刀をかへしてなぐりければ、武藏が袖の下羽織のゑりに木刀のさき少し當る、此時權之助高聲にあたれり〳〵と云ふ、武藏聞き、いやかやうに當るをあたりたるとはいはず、かやうにあたつて何の用にたゝんや、さらば我當てゝ見せ申さんとい

ひて、又打合せけれ、權之助隨分うたんとおもふ氣色面にあらはれて打つてかゝりけれ共、太刀を出す事不叶、覺えずしさりけり、武藏座敷の隅に追つめ、ひしと眉間を打つ、俄に色付はれ上りたり、爰において權之助大に非をしり弟子と成也、武藏かやうの名人たりといへ共、佛法修行の力なければ臆する所あり、かれ又畫筆の名人成りけれど、在時主君より達磨の繪を書上ぐべしとの仰也、時に武藏情を出して書きけれ共、筆はたらかずして常よりも不出來なり、終に其日出來せず、ふせりけるが、夜半に不圖起あがり、我本意の兵法を出ださゞる故に繪不出來なりといひて、火をともさせ書きければいかにも見事に出來する也、後に弟子共此心尋ねければ、武藏答へて曰く、我兵法をうち落し、上に臆する故にかれざるなり、我兵法といふ太刀を取則ば、我もなく人もなし、天地やぶれて居るなり、何の高位下賤といふ事あらんや、此機を以て書く故に畫出來する也といひければ、弟子共大に感ぜしと也、古道人の曰く兵法者

は太刀を取りたる時は禪定なれども、太刀を置くとはやぬけて凡夫に成る也、兵法をば常住金剛心に住する故に、何事にあふてもぬかる事なく、萬事に使ふて自由なりと敎へ玉ふ事是なり、彼者隨分兵法の時は用ゐ得たりといへ共、繪に逢ふて臆したる事右の如し、專ら勇猛心を用ゐて大丈夫の人と成り玉ふべし。

茲に古道人といへるも故師正三石平道人の事なるべし、其語は卽ち彼が得意の仁王禪より拈出し來りしものにて、澤庵が柳生但馬守に對する訓戒も思ひ合はされて興味深し。

等しく三敎一致の物語といへども、其色味の配合は著者の立脚地を異にするに隨ひ、三敎の好惡おのづから厚薄なき能はず、厚薄の存する所やがて主張あり、特色ある所以なり、されど彼れをも棄てず是をも取らんとする時は、强烈なる色味を失ひて人心を感動せしむること深からず、後年石田梅巖によつて稍形體を備ふるに至りたる心學も、卑近通俗なる日常道

徳を無學なる平民に敎ふるものとしては、多少の功績を認めざるにあらざれども、宗敎としては權威なく活氣を缺けり、折衷說に名論なく混成酒に名酒なし、融和を口にして其混合なるに心づかざるもの世上その類極めて多し、戒めざるべけんや。

假名草紙の作者

元祿期に西鶴出でゝ浮世草紙の一體を創め新小說を興すまては、殆ど純粹の小說と認むべきものなく、足利時代の御伽草紙の系統を傳承したる二三の戀愛小說の外は、大抵儒佛の敎に基づきたる隨筆樣の敎訓的雜話を假名書きにせしものにて、之を假名草紙と稱せり。而して是等の作者中その名を知られたるは可笑記（寬永十九年刊）百八町記（寬文四年刊）の如儡子、悔草（正保四年刊）の井上小左衞門、爲愚痴物語（寬文二年刊）の曾我休自、他我身の上（明曆三年刊）小巵の山岡元隣、二人比丘尼（寬文三年刊）因果物語（寬文元年刊）の鈴木正三、海上物語（寬文六年）

如儡子
井上小左衛門
曾我休自

刊の釋惠中、伽婢子(寛文六年刊)浮世物語(寛文十年刊)等の淺井了意等なり。 如儡子は東北地方の武士にして江戸に出でし人なる事は書中の記事に據りて知らるゝもその他は一切不明なり、饗庭篁村氏所藏可笑記の奥書に湯村式部といふ人なりとありといふ。 井上小左衛門は筠庭雜錄に「悔草といふ草子は正保四年の秋刻梓としるす、作者の名なし、淺井了意が浮世物語に井上小左衛門某悔草を作りて云々といへる是なり、按ずるに大阪記に井上小左衛門四十四歲、元和元年道明寺へ鐵砲百預り、又兵衛加勢に出て討死すとあり、此說いかゞ有べき、又或說には、大阪籠城の諸人の內井上小左衛門定利、嫡男次兵衛父子共二條御城にて召出さる、今の新五郞が先祖なり、二男瀨兵衛は加賀家に仕へしが後に黑田に仕ふといへり、これに據ればこの草子は小左衛門老後に書ける事證すべし、書中(卷下)近年の饑饉といへるは、寛永の末年なるべし」とあり。 如儡子と共に武士にして文筆の才ありし人と見ゆ。 曾我休自はその書中に朝鮮に渡航せし事ある由を

いへる他に何等の徵すべきものなし、鼠が猫の襲撃を豫知する爲に猫の首に鈴をつけんとの妙案を出しゝも、愈〻實行の段となりて誰も進んで試みんとする者なかりきといふイソプ喩言の一話を記せるを注意すべしとす。以上はいづれも徒然草の系統をひきたる隨筆なり。「山岡元隣は而慍齊と號す、伊勢山田の商人なりしが、多病にして家業を廢し、京に出で北村季吟に學び、俳諧を以て知らる、又醫道をも學びたりと云ふ。寛文十二年四十二歳にて歿せり。傳記は百物語評判の終に出づ。」と藤岡氏の近代小說史にあり。誹家大系圖には「玄水、山岡氏、通名玄磷、抱甕齋ト號ス、京師六角通ニ住シ醫ヲ以テ業トス、吟叟ノ高弟ナリ、家書、身樂千句、俳諧仕樣、諸國獨吟、俳諧小式、吉野山獨案內、隨葉集大全、たからぐら、方丈記頭書、徒然草鐵槌補、多我身の上、水鏡抄、今川抄、風月往來抄、腰越狀抄等アリ、延寶三年ノ夏疫癘ニ冒サレテ沒ス、年記詳ナラズ」とあり。いづれか是なるを知らず、猶考ふべし。

淺井了意

淺井了意はその著作と傳へらるゝもの頗る多く、硬柔二方面に渉るより、或は同名異人なりとの説もあり、都の錦は一向の粹僧といひ、著書の序に本性寺昭儀坊釋了意とあれど、本性寺の所在明かならず、狗張子の序文に元祿四年に死したりといふ外に史料とすべきものなし。名人忌辰錄に「寶永六丑年九月二十七日歿す歲七十」とあるは何に據りたるにや、頗る疑なき能はず。此説を眞なりとせば、東海道名所記の成りし萬治元年は十八歲に相當す、二十歲未滿の人の筆とは到底受取りがたし。たとひ了意に二人ある事を許すとするも、其著書をふり分けて所屬を明にすることは頗る困難なりといはざるべからず。

鈴木正三

以上數人に比すれば鈴木正三の傳記は頗る明確なり、石田元季氏の評傳最も精詳なれば、同氏の快諾を得て次に轉載する事とせり。海上物語の

恵中

著者惠中は肥前蓮池の人にて正三に隨從す。其著海上物語につきては、既に前章「江戸初期の三敎一致物語」のうちに詳しく述べたれば、重ねてい

石平道人肖像

はざるべし。

鈴木正三

一

武士として恩賞の輕重大小を論ずる輩を嘲りて「武邊商人」と貶し、解脱の大法を渡世の業とする徒を罵りて「佛法商人」と斥け、世間の佛法を「慰み佛法」「でき口佛法」「向上佛法」「さび佛法」「活達佛法」「だて佛法」「悟り佛法」「へご佛法」と數へて「この外樣樣の私し佛法多しと雖も、皆これ病なり、我曾て好かず。我は唯朝から晩までできつと果し眼になつて居るが好なり。我も如是勤め、人にも如是敎ふるを佛法修行とす。我法は果し眼佛法なり」と喝破して「二王坐禪」を唱道し、「各も六具をして大小十文字にさし働かし、八幡と云てねち廻し、睨みつけて坐禪を仕ならひめされよ。古具足あらば御坊主達にも着せて坐禪仕習はせたし」。「鐵の弓に鐵の弦をかけたるが

如くに心を張立て奉公を勤むべし。是卽ち坐禪なり」。「侍は鯨波の中に用ゐる坐禪を仕習はで叶はず、鐵砲をばたくと打立て、互に鑓先を揃へてはツくと云て亂合ふ中にて急度用ゐて叟で使ふ事なり。侍は何とよき佛法なりといふとも、鯨波の聲の中にて用に立たぬことならば、捨たがよき也」。と說きて武士的禪法を鼓吹せし者は、卽ち三河武士鈴木正三石平道人なり。

正三は天正七年に生れ、明曆元年に七十七歲を以て逝きぬ。彼の少年時代には本能寺の變あり、朝鮮の役あり、彼の青年時代には關原の役あり。後ち大阪陣あり、豐臣氏亡び偃武の代となりたれども、なほ島原の亂あり。大阪陣の時は彼自ら弓槍を執りて軍馬の間に馳驅し、島原の亂には弟と共に彼地に赴きぬ。而して彼の生涯は慶安の亂後四年にして終りしなり。彼や洵に多事の時に其一生を過しゝなりき。元和元年は彼が三十七歲の時に當る。彼は前半生を戰亂の世に過し後半生を幕府の基礎漸

く固まり行き文教次第に廣まり行く世に迻りしなり。家康が學問を奬勵せし結果は碩儒相踵いで出で、佛門また時を得て有力なる名僧を出し、朝廷も亦いたく文敎を奬したまひしかば、貴紳上流はいふも更なり、曾て小瀨甫庵が「すたれたるもの、理學」(童蒙先習)と慨せしも、「祇園物語」によれば寛永十五年の出版に係り儒道を説ける「淸水物語」は「京や田舍の人々に二三千通りも賣り申せし也」といひ、(よしや、その數には多少の誇張ありとするも)正三が晩年に或る士に與へたる書中に「一、十二三箇年以來珠數屋隙なく成申候。一、京都大阪に於て佛師數多出來皆々隙無之候。一、在々處々より古佛を探し出し再興致候。此故に遠所々々にも大方朽損じたる佛もなく成候と承候。一、佛書の類殊外賣れ申候、此故に次第に古の法語等乞求め尋出して開板致候」。(石平反故集)といへるによりても、儒佛思想の當時上下都鄙に普及しゆける狀態をトするを得べし。この頃一書の出づるあれば或はその名をとりて後追、評判などゝ稱し、或は名をかへて

も辯難の書のつぎ〳〵にあらはれし事なども、亦當時の風潮を察すべきものなりとす。

正三は、實にこの時代に在りて、漸くに昌平に狃れんとせし武士を警醒して堅固質實なる精神を鍛へしめんが爲に武士道的修禪を說き、過渡時代の動搖せる人心に安立の地を與へんとして、世法を說き、かくて統一を須てる時代の要求に副ふ所あらんと欲せしもの、吾人彼の遺著に對して頗る興味を感ずるものなくんばあらず。而して彼はまた一面謠曲の批評を試み、若くはその改作を施すなど、文學上にも趣味を有すること尠からず。彼の遺著中「二人比丘尼」「因果物語」の如きは、假名草紙類に數ふべきもの、今その名によりて相類せるものを求むるも、前者に「七人比丘尼」「四人比丘尼」あり、後者に西鶴の「新因果物語」鷺水の「近代因果物語」あり。遡つて一休の所作なりと傳ふる「二人比丘尼」「骸骨」さては作者不詳の「三人法師」等に及び、或は遠く「日本靈異記」「今昔物語」より「沙石集」「元亨釋書」に至り、更に下行

して諸種の因果ものの因縁ものの怪談ものに及べば、文學史上また傳ふべきの書ならずとせず。この意味に於ても、彼やその名を忘れられざるの人たるべし。

二

正三の事蹟に就きては、「寛政重修譜一一五四一一五五」をはじめ、諸書にその傳記逸事等を記せりといへども、互に異同ありて、遽にそれと定むべからず。暫く彼此參照して左に之を述ぶべし。

鈴木正三、一の名は重三（しげみつ）天正七年三河國東加茂郡則定郷（盛岡村）に生る。九太夫と稱す。その祖鈴木刑部左衛門重善（善阿彌といふ）は紀州藤代莊司穗積重包の男にして、家世々藤代の著姓たり。文治中故ありて（或はその養子重家が源義經に會せんとて奥州に赴くを追うて東行し、途に脚疾を患へしなりとも傳へ、又重善の兄俊乘坊重源に從ひて三河に來りしなりとも傳ふ。）紀州を去り、三州高橋莊矢並（西加茂郡）に移る、承元三年十一月逝く年八十

九。善阿彌より幾世を經て、左京進、その子與六郎、その子帶刀、その子次郎左衞門、その子三郎右衞門重政、その子忠兵衞重次、重次は卽ち、正三の父なり。代々松平氏の幕下に屬せり。その妻卽ち正三が母は今川家の臣粟生筑前守永旨の女。重次四男二女あり、重三はその長男にして別家となる。はじめ飯高彌五兵衞貞次の女を娶る、鈴木藤左衞門の女後妻たり、後妻に生れし長男伊兵衞重辰は、父遁世の時これを伴ひしかど、出家はおのが願に非ずとて、正三の同母弟三郎九郎重成の許に至りて寓し、後ちその養子となれり。(以上、主として重修譜に從ひ、又三州擧母の人渡邊善次氏の調査せられしものに據る)。

正三、三河武士累世の血をうけて質朴勇敢に、又物を憐むの心深く、「人の爲に善きことなれば進んで勢を出し、殊に人の惡しきを見ては我を忘れて憐みしとなり」。(驢鞍橋)、かくて弟重成をして本家を嗣がしめ、自ら高橋莊に別家を爲して居り、關ケ原役にも戰功ありて嘉賞せらる。彼初め四歲

の時同じく四歳になりしいとこの死に會ひ、稚心ながらも何處へ往きしぞてふ疑を起ししを始として、「若き時より僧好き寺好きにて、如何なる僧にても僧にてさへあれば之に近づき」ぬ。(驢鞍橋)されば素より遁世の志あれど、なほこれを果さず。大阪の役には父重次弟重成と共にこれに從ひ、元和元年三月二十七日三州加茂郡のうちにて二百石を賜はるの旨朱印を下され、乃ち重成と駿府に於て家康に仕ふ。

「驢鞍橋」に、正三の古傍輩何某の語として、「始め權現様に仕へ給ふ。少し奉公の暇あることありければ、家を息男に讓り、下津間多寶院、關本最乘寺などに引込で僧に交り給ふ。又南泉寺大愚和尙のほとりにも寮舍を構へて、久しく居給ふ。其の後また世に出でゝ台徳院様に仕へ云々。」とあり。「渡邊幸庵對話」に「鈴木昌三云々駿州逐電數日行方不知云々」とて山上苦行の事を記せり。これも正三の事か。

家康薨じて後、江戸に出でて台德院に仕へ、元和五年大番に列し、同六年(重修譜には九年)四十二歳にして宿志を遂げて祝髮す。出家の後も俗名を

その儘音讀して法名とす。彼嘗て徒然草を讀みて悟る所あり、自ら「人の名も目なれぬ文字を付んとすること益なきことなりと有るを見て、我も是は德を得たるなり」といへりといへば、唯やすらかならんとてかく兼好流に法名を付せしものなるべし。それより殆ど寢食を忘れて修行し、諸國を遍歷して故山に還り、山中石平（やまなかいしのたひら）（西加茂郡石野村）の石平（せきへい）山恩眞寺に住しぬ。恩眞寺は舍弟三郎九郎が君恩を謝せんと欲して建立せし伽藍にして之をその兄に與へしもの、大將軍家の位牌を本尊の左右に安置すといふ。彼が石平道人といふもこの山名によるなり。さて彼が五十九歲のときに島原の亂あり、三郎九郎、養子重辰を伴ひ、松平伊豆守信綱に從ひて彼の地に赴く、落城に際し、三郎九郎本丸に先登して軍功あり。信綱凱陣の後なほ彼の地に留りしかば、その軍功を老中に告ぐるの旨信綱より書を與へて之を賞す。かくて寛永十六年十月天草荒廢の地開發の事を承りて彼處に赴き十八年九月天草の代官職となる。この時正三も共に天草に

至りて、吉利支丹宗門の習氣を滅し、その土を治めんが爲に寺院を建て、又「破吉利支丹」を著して、その土の者に示せり。この頃正三益〻禪機の妙に參し、「六十一の歳八月二十七日明くれば二十八日の曉、ばらりと生死を離れ惜に本性を契ふ」（驢鞍橋）思をなし、愈〻心を練りて工夫悟入し、慶安元年の夏江戸に出で、森川某の家に近く重俊院（重俊は彼の父の法名）を營みて居り、また某信徒が牛込天德院の傍に庵を結んで彼を住ましめしに居り（了心庵といふ）寂するの前神田なる舍弟重之の宿所に移り、明暦元年六月二十五日申の刻遷化せり。この日晩に及んで天德の勝地に如法に葬す。門人四十四人通夜して茶毘の左右を圍む。遺骨は之を天德院並に所住の三院に納む。冷灰を小壺に貯へ、天德院の北岳に埋んで無縫塔を建つ。春秋七十七、利生三十餘年、度する所數を知らずといふ。

正三に關する事蹟は、寛政譜、驢鞍橋、石平反故集、石平道人四相、武江年表、過眼錄、名人忌辰錄、三曉庵主談話、薩藩舊傳集、海錄等に見え、その他種々

の書中に散見せるものあり。しかも前述せる如く、彼此大に同じからず。葬地の如きもさま〴〵に記るされ、天德院の名さへ、或は天德山とし、天德寺とし天澤院とし、天澤寺とし、或は淺草とし湯島とし小日向とす。今弟子惠中が記せる驢鞍橋(萬治三年刊)に從ひ、片假名本「因果物語」を參照せり。もとより淺學寡聞誤謬定めて多かるべし。識者の叱正を俟つ。

三

正三の遺著は、延寶元祿等の書籍目錄によれば、盲安杖一冊、萬民德用一冊、驢鞍橋六冊、草庵雜記五冊、麓の草分(眞かな)二冊、念佛双紙(かなゑ入)一冊、因果物語三冊(同平假名繪入古板新板六冊)破吉利支丹一冊、でうす問答一冊、二人比丘尼二冊の十種を數へ、辨疑書目錄(寶永七年刊)には、鈴木正三の十一部とて、上記の中より「でうす問答」を除き、「海上物語」「反故集」を加へ、この二を惠中作とも云ふとし、「此の外にでうす問答一冊、因果小編一冊あり、或は惠中の作といふ」

としるせり。（海上物語は前の書目錄に、恵中作とす）。近代著述目錄（文化八年刊）には、はじめに擧げたる十種中の「でうす問答」を「でうす物語」に作り更に「自己安心」一冊を加ふ。承應四年秋の日付の下に如偏子の奥書ある「百八町記」第五巻に、「爰に鈴木氏禪門正三といふ道心者あり、佛法に歸依して年久しく修行熟得のよしいひなす。此人今時世俗利益の爲に三寶論と云一巻の書を綴れり。云々」。とあれば、正三の著として、また「三寶論」を加ふべし。慶長以來小説家著述目錄は則ち近代著述目錄に同じ。列傳體小說史には、「正三著作のうちに、七部の書と稱して世に傳はるは次の如し。」とて、盲安杖（承應四年板）麓草分（明暦二年板）因果物語（寛文元年板）破吉利支丹（同二年板）二人比丘尼（同四年板）念佛草紙萬民德用（未詳）を擧げ、「またこの外には、三寶論（承應四年板）驢鞍橋（萬治三年板）草庵雜誌（寛文九年板）でうす問答、自己安心（未詳）等あり」。とせり。所謂七部の書とは、恵中が數へて驢鞍橋に擧げたるものにして、「以上の七部は三寶の光を以て國土を照

し、普く羣生を度せんと欲す、師大願の至要也」といへり。されば所謂七部の書は、正三遺著として疑なきものとすべし、萬民德用は或は「四民日用」ともいひたるか、彼の語中時に之を引けるものあり、若しくは「四民日用」は別書なるか。(驢鞍橋中に「四民は去人武勇の上にて用るやうに書與へよと云に仍て書く次でに末の三段を書添て四民日用とす」とあり。又反故集にも、江州衆に與ふる書中に「四民日用書申候」と見ゆ)。盲安杖は正三俗の時朋輩に儒者ありて佛法は世法に背くといひしにより著ししものなりといふ、彼曰く「何としても初心にては心老(おとな)しく成難きものなり、此用には盲安杖がよきなり。」と。その書項を分つこと十、「生死を知つて樂みある事」より「小利を捨て大利に至るべき事」に至る、流布廣くして人の熟知する所なり。麓の草分も亦人の周知する所、この書は萬安和尙(承應三年八月寂)の所望によりて著せるもの、正三が自信ある所作にして、さる女人の此の書に依り慥に修行の法を得たりといへるを述べ、「我が書を見たる人の

中に是程見分たる人なし、皆世間の假名法語と一つに見るつればかり也」。といへり。上下二冊十七項に分つ。就中上卷義を守る段の如き、最も彼の心血を濺ぎたる所にして、「何と古人にも吾が如く義を專に敎へたる人ありや」。と豪語せし程なりきといふ。破吉利支丹の成れる由來は前に述べたり。說者の言を擧げては、「破して云」の語を以て破斥したるものなり。これも流布本少からず、又前二書と共に「禪門法語集」中にも收載せらる。念佛草紙は上下にわかれ、下總國豐田郡飯沼の莊太田の里なる井上又太郎の女父母の菩提を弔はんとて、二十歲にも滿たざるに髮をおろし、けんじゆ比丘尼と名をつけて諸國修行に赴きしが、同じ里に平內左衞門とて四十餘の男あり、彼の女の發心に動かされ同じく薙髮して行脚の身となり、貞安上人に會して念佛の安心を承け、その弟子として、名を叶譽幸阿といひ、慶長六年七月常州結城の人々と共に越前に赴き、翌年三月偶々彼の比丘尼が同國に來れるに會し法談せる由をしるして念佛の利益を

說けるものなり。此書は正三が松平和泉守乘壽の母堂の望に任せ、反故の裏に書き與へしものなりといふ。彼は由來禪法に心を傾くるに念佛の利益を說けるは、稍相容れざるものあるが如しと雖も、反故集にも「古人一則の公案を授け給ふ事念根を截斷せんが爲なり、又念佛の一行を授け給ふ事も同意なり、其の義正しきときんば南無阿彌陀佛と唱ふるも念根を截斷するの劍にして菩提の正因と成なり。又その義錯るときんば話頭公案なりとも有所得の念にして却て輪廻の業と成べし」といひ「御老母念佛油斷なき樣に朝夕御進め可有候、是第一の行なり、今時心得愚なる人は念佛を淺き事に思へり、是大なる錯也」といひ「一口にて成佛することは我を忘れて念佛するにあり」といひ、又は武士の念佛の申樣を問へるに答へて「武士の役義なる間敵のそなへを造り立、その中に一筋に南無とは飛込南無とは飛込自由自在に入るゝ程飛込念佛を申さるべし」。と答へたるなどにても、彼の眞意を窺ふことを得べし。

因果物語と二人比丘尼とは、彼の遺著中假名草紙類に數ふることを得べきものなり。

因果物語には片假名本と平假名本とあり。

片假名本は寛文元年秋の雲歩の序を附し、義雲、雲歩の同じく撰する所に係る。二僧共に正三の法弟にして、彼の荼毘の時にも侍せしものなり。その序中に曰く、

正三老人因果歷然ノ理、面リノ事ドモ記認メテ以テ諸人發心ノ便ト爲ント誓フ。師昔日人來リ左ノ如キノ事ヲ語毎ニ箇樣ノ事ヲ聞捨ニスルハ無道心ノ至也、末世ノ者如是ノ事ヲ以テ不救シテ何ヲ以カ救ンヤト云テ是ヲ集ム、云々。殊ニ此物語ハ元亨釋書砂石集ニ載スル所ヨリモ證據正シクシテ初心ノ人ノ爲ニ大幸アリトイヘドモ、只今現在スル人ノ假名有之以故門人堅祕シテ世ニ不出也。然ニ頃ロ犯者アリ、竊ニ

寫取テ亂リニ板行ス、剰ヘ外ニ序分ヲ作シ、恣ニ他ノ物語ヲ雜入シテ人ヲ瞞スル事不少。斯ニ於テ弟子等止コトヲ不得、師ノ正本ヲ梓ニ鏤メ、邪本ノ惑ヲ破ラント欲ス。若シ人邪ヲ捨テ正ニ歸セバ、菩提ノ勝縁此ニ在也。

と。この物語纂輯の旨趣の存する所は、麓草分、反故集、驢鞍橋にも見え、要は因果應報の免れ難きを示して、無智無慚の徒を導かんとするにあり。上中下三冊凡そ百三十條の物語を含み、記事の日付中最も後なるは慶安五年(承應元年)の事件なりとす。

平假名本は序者選者の名もなく刻梓の年月をも知らざれども、記事は承應二年のものあり。しかもそは第四巻にあり。さてこの書六巻中前三巻には凡そ六十二條の物語を含み、その中凡そ七條は片假名本に見ざる所なり。而して、第三巻の終りに、

世の人のため心ざしをあらためんとて、見聞し事を筆にとゞめてのこ

す者也。

とありて、文體自ら大尾を示すものに似たり。なほ第四卷以下第六卷までニ十四條の物語あれども、一として片假名本に載する所のものを含まざるが如し。彼の承應二年の記事を第四卷に收むることを考ふるも、片假名本の原本の成りたるは承應元年の頭にして、平假名本はその中より五十五條を拔き、之を三卷として、一たび取纏め更に以下三卷を增補して出版したるものにあらざるか。(日本小說年表に續因果物語の寫本にてあるよしをしるされたり。四卷以下の材料この書中より出でたるかも知るべからず)而して、平假名本の序に、

師の住居する處、室內更に一冊の書なし、只金剛經一卷過去帳一折のみ也。然りと雖も經文語錄の玄奥を詰問するに、決擇すること言下にあり。

とあるは、驢鞍橋の文と殆んど同じきを思へば、この書の出版は、或は寬文

元年のはじめの頃なりしかと想像せらる。同年秋の序を附してその十二月上旬梓行せる片假名本に「頃ろ」とあるも思ひ合せらるゝなり。兩本互に詳略あり、且つ兩者の說話の根となりし材料の時として他の書にあると照合すれば、斟酌を加へたる痕歷然たるものあり。而して又平假名本の方作意に富み、殊に第四卷以下に物語的色彩の深きものあるが如きも、讀過の際注意を惹けることとなりとす。

されば、平假名本は正三の輯錄せしものにはあらざるも、眞面目に應報を列敍して、道心を誘ふ便とせし原本より出でゝ、更に一歩を物語風に進めしものといふべきなり。かくて古人が幾多善巧方便の因果物語は、或は唐山の怪異譚を翻し來らしめ、又は更に奇に更に怪なる百物語的怪談を出さしめ、或は「天地山川動植古往今來の事に會通せずといふ事なし」てふ「和漢の達者儒佛兼學の老人」而慍齋先生の評判となり、或は「雪中の筍八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり」と現代式なる粹法師の「孝を勸むる一

助」となり、一方にはまた深く根ざしたる這般應報譚の怖しき「皿屋敷」となり「四谷怪談」となり、今なほ兒女の目を掩はしむるものあり。推移と染著と、辿り來れば、その徑路また多大なる興趣なくんばあらず。

五

二人比丘尼も念佛草紙などゝ同じく數板ありて、寛文三年、四年、五年等に出版せらる、一時流行の書たりしこと推知すべし。この書は、正三がその母の爲に筆を染めたるものなりといふ。文致なだらかにして處々に謠曲の文句を含めり。

謠曲は、正三が、甚だ好みしものにして、反故集に

一日語衆曰、各々は何より發心めされたるや、兎角緣有るもの也。我は謠を好きて謳ひけるが、定家の謠に、ふることも今の身も夢も現も幻も共に無常の世となりてといふ處が、不圖のりてより思付たりと也。

とある如く、發心の因緣また謠曲にあり、謠を謳ひて病人を癒したること、

謠曲を謳はせて機を敎へしなどの事は屢〻彼の遺著等に見ゆる所なり。

而して彼はまた一日觀世某に坐禪の要を傳へ、因に語りて曰く、

謠はよく作りしもの也、日本にて造りしものには恐くは一番なるべし。先づ詞よく續けたり、同じく節、仕形何れもよし。云々。熊野松風などの様なるが就中云はれまじきと思ふ也。云々。又班女に扇を出して、一つことを重ならぬやうに長う云ふたなどはさりとてはよい云様也。

（驢鞍橋）

と、さて、山姥を評し卒都婆小町を評し、遂に後者に對して若干の訂正を試み、之をおもかげ小町と題せり、文は驢鞍橋に出づ。「我がつくり直しけるを松平和泉殿見て觀世左近太夫に見せ御前能の時分させんと云て取給ふ也」。といふことも同書に見えたり。かく謠曲を好みたる故にや、二人比丘尼中にも時々その成句を用ゐ、例へば、

いやヽましいのヽ思ヽ草ヽ（松風）やるかたなく悲ヽみヽのヽ涙ヽ眼ヽにヽ遮ヽりヽ（柏崎）翠ヽ帳ヽ紅ヽ閨ヽにヽ枕

をゝならぶるゝ床ゝの上ゝなれゝしゝふすゝまゝの夜ゝすゝがゝらゝもゝ同ゝ穴ゝのゝあゝとゝ夢ゝもゝなしゝ。

(班女)

初雁の聲はきけども、其方よりの音信なし。鹿の聲蟲の音、思をそふる端となり、月の夜はねやにも入らず。(班女より來る)

の如きもの、枚擧するに遑あらず。全篇を閱讀すれば、此等の文句は必ずしも暗合に非ず、また謠曲が引用せる材料より引き出でしものとも覺えず。筆者が意識せしや否やは知るに由なきも、平生吟誦する所自ら筆端に上りしものなるべし。

かくて又この書はその文中に謠曲の成句成語を引用すること多きのみならず、「ふけゆく空ぞかなしき」。「なりはてぬるぞかなしき」。「かなしびそふるをりふし」。の如き七四一聯のものあり、

かゝるうき目を見ること、そもなにの因果ぞや。

後夜の鐘鳴り、東雲の空も、ほの〴〵と明け渡る。

の如き句法あり。この書の文體に至りては、全く謠がゝりにして、彼の「中頭の事にや」と筆を起して語り物めく御伽草紙風「さる間」とはじめて變化なき拍子に語をはめて運びゆく舞の本風にもあらざるなり。之に比すれば寬永版行の「七人比丘尼」は「跡とひ給へくれぐ〵」と、かきくどきたる玉章の、言葉のさてもあはれさよ」など歌比丘尼の繪解に似たる口調あるを見るなり。尙ほ比丘尼物に四人比丘尼あり。七人比丘尼は三人法師風のものなるが、こは戀物語にはじまり愛兒の死より菩提の道に入ることを叙せるもの、文辭修飾に富み謠曲古典などを引用すること多し。正三の二人比丘尼は同じ比丘尼物の名はあれども、上記の二者には類せず、寧ろ一休の作なりといふ二人比丘尼風の假名法語體のものなり。唯一休といへるは純乎たる問答法語なるに、これは稍趣向作意あるを異なりとす。一休のは古く刊行せられ、木活字板にて行はるゝものあり。同じく一休骸骨といふ者も、甚だ古くより世に知られたり。さて正三の二

人比丘尼は一休物によれる所少からず。例へば、
あるびくに山居してより、又びくに來りていはく、髮をそり衣をそめて
かくのごとくなり侍れども、未だ一大事の因緣を知らず、比丘尼になり
たるかひさらになしと思ひ、これまで參りて候。御慈悲を以て心得候
やうに御しめしあれといふ。答へて曰く、みづからも此の如くなり候
へども未徹の者にて候、去りながら心中の分、かたのごとく申すべし。
それ生死輪廻の根源を尋ぬるに、有相執著は妄念より起りて、わづかに
世間に著するなり、云々。（一休二人比丘尼）
客比丘尼申すやう、かやうに髮をそり衣を墨に染めて候へども、未だ一
大事の因緣を知らず、比丘尼になりたるかひさらになし、御慈悲に示し
給へといふ。老比丘尼答へて云、自らも未徹の者にて候へども、佛祖こ
の方數の趣聞きおきし事どもおろ〳〵申すべし。夫れ生死輪廻の根
本は假のこの身なるを忘れて、有相に執著する迷の心より貪瞋癡の三

毒の心は出來て、日夜我を攻むるなり、云々。(正三二人比丘尼)の如く、殆んど同樣なる部分あり。

或る人申されけるは、古は道心を起す人は寺に入りしが、今は皆寺を出づるなり。(一休骸骨)

この僧の給ふやう、昔は道心ある人は、寺に入りて知識の教を受け給ひしが、今は昔にかはり少しも道心ある人は寺を出でらるるなり。(正三二人比丘尼)

骸骨の文によれる部分亦此の如し。草堂の夜に骸骨の歌うたへる夢を見たりといふも、もとより材を採り用ゐしなり。

唯末段八苦を說き、不淨觀を說き、念佛の利益功德を說く處、正三平生の主張を述べたるものにして、「如露亦如電の心、胸に留つて、此心に離るゝ事なしと覺え候」と比丘尼のいへるに對して老尼が客の胸をとり「汝は何者ぞ何者ぞ」と攻むるを客のなほ心得ざれば、「いよ〳〵せめて胸板をつきいへ

いへとせめてつき倒す、客比丘尼起上らんとするをまた突倒し、打つていはくなし〳〵〳〵〳〵といへり、客比丘尼起上り手を打つて笑ひて曰くなし〳〵〳〵〳〵といひて禮をなす」。と述べたるなど、流石に二王坐禪の鼓吹者の口吻なり。又念佛の五種を擧げて之を說けるも、嘗て某の農人に示せりといふ念佛の用心と異なる所なし。さればこの書は須田彌兵衞の妻が夫の戰死の跡を弔へる事より始めて、草堂に骸骨の夢を結べる事を一休骸骨によりて記し、ある女人の家に寓して、その死に遭ひ、尸肉の日々に腐れゆくさまを見ることを九相詩によりて寫し、(九想のこと、九相詩、及その鈔またその圖など、古くより世に知らる)後ち僧に乞ひて得度し貴き比丘尼に法を問ひて大悟することを二人比丘尼によりて記述し、こゝに睛を點じて、念佛の利益捨身の本義を說けるものにして、その文の雅馴にして、綺語のよく讚佛乘の緣たると、叙事の悲哀なると相應じて、信心厚き當代世間に深き感動を與へたるものなるを想ふべきなり。

こゝに又、須田彌兵衞妻出家繪詞といふものあり。訂正增補考古書譜に一卷、和學講談所藏本、書畫共「不」詳としるせり。その起首に、
たとへば人の父母は火うちのごとし、かねは父、いしは母、火は子なり、これをほくそに打付てたくが如し。
とありて、「來りて暫くも」の二人比丘尼の發端に續く。この起首の文は卽ち一休二人びくにの文に同じ。（唯「打付ていわうたき木につくるがごとし」とあるだけ異なり）。この繪詞と二人比丘尼とは殆ど相同じく、日本小說年表には則ちこの繪詞によりて作りしものなりといへり。或はおもふこの兩者は異本にして只題名を異にせるものにあらざるかと。二人比丘尼の書名は、混雜して、正三のをも一休大和尙所作の如くせる「二人比丘尼物語圖會」あり。かく混雜を來すべき同じ書名を知りながら附するもをかし、一はもと須田彌兵衞妻出家の物語として別ちたるものならざるか。而して趣向も兩尼の會談を結末主要の處とし、文も據る所あれば、

之を正三の二人比丘尼とせるにはあらざるか。繪詞に就きては知る所尠し、なほ博識の示教を得ば幸なり。

六

所謂正三の七部の書に就きては、既に之を述べたり。茲に冗漫ながら聊か正三が如何に世法卽佛法を說きて世道人心に益する所あらんとせしかを叙すべし。彼は農人に對して農業卽佛法と敎へ、醫者の修行の用心を問へるに答へては、「先づ我は世界の病人を救へとの天道の仰付なり、この役人ぞと思ひ定め、身心を世界に抛つて、藥代の事をも何とも思はず、只天道に任せ奉り、一筋に醫を施さるべし。命を繋ぐ分は天道の擬あるべし、如是勤めらるれば機の熟せるに隨つて必ず德あるべし」といひ、瞽女に對しては、「小歌を以て後世を願ふべし、その哀なる聲美しびれたる節を本とせず、胴から聲を出してあぶなげなく歌ふべし、常に如是せば自然に禪定の機を覺ゆべし、能く熟せば歌はざる時も其機用ゐらるべし」といひ、餌

指に對しては「地獄には心が落つる也、鳥を殺す每に我が心を引攫んでは殺し殺しすべし、一切の心を殺し盡さば成佛也」といひ、時には船方に時には按摩に、皆それ〴〵業體相應の機を示したり。正三の念願書といへるものに、

世法則佛法也、若世法ヲ以テ成佛スルノ道理ヲ用ズンバ一切佛意ヲ不知人也、八金剛四天王五大尊各威勢ヲ振ヒ物ノ具ヲ著シ鉾刀杖弓矢ヲ持テナラビ在スナリ、此威勢ヲ用得ズンバ六賊煩惱ニ勝ツコト不可有、夫佛法ハ人間ノ惡心ヲ滅スル法也、願クバ佛弟子ヲ萬民ノ惡心ヲ治スル役人ニ被仰付、國土ノ功德トナシ給ヘカシト念願シ奉ル者也。

とあり、彼の吉野にて大峰かけ出しの山伏が大太刀を十文字にはき金剛杖をつき大童になつて通るを見て、扨も役の行者はでかい修行者であつたよとひしと機に移りて案じ出せりてふ仁王坐禪は、彼をして終生大阪在陣中の心を失はざらしめたり。而して彼は特に武人を敎化するを喜

び、「三州風のつくろいなき性に移らで叶はず、唯武勇を嗜み義を專とする機に移る法なる間、云々、北國にては越前、九州にては肥前薩摩と心ざしけるが、實も彼國々の衆には此頃聞人多く有」といひぬ。彼の假名草紙が文學上如何なる地を占むるかは之を措くも、吾人は南無大强精進勇猛佛の佛號を書して人に授與せる正三道人が如上の武士道的敎法に對して興趣を感ぜざるを得ず。しかもまた彼が「必ず沙汰めさるゝな、正三が沙汰ふッつといやなり」との大喝を恐れざる能はざるなり。

附記

正三の傳記は石田氏の援引せられしものゝ外に、石平道人行業記及び同辨疑あり。共に弟子惠中の撰にして漢文を以て記述せり。前者は元祿九年に成り後者も相次で成りしものゝ如し。石田氏の傳記と對照するに多少出入あるを以て、今其要を摘み譯述附載して參

照に供す。

正三の生年を天正七年とするは行業記も同樣なれど、何人かの旁註に正月十日と記入せり。少時高橋に適き七十騎の中某に養はる、天正十八年家康此七十騎を上總に徙らしむ、正三も同じく鹽子に往きて居る。一夜深更家狗頻に吠ゆ、戶をいでゝ視るに故なし、因て仰いで晴空を視て嘆じて曰く、一天平等差別あることなし、我性何ぞ人我生死を阻つと、こゝに人我を超脫し生死を打破して大自在を獲んと欲し、これより信を三寶に結び思を塵外に交へ、深く大道に志す、時に十七歲なり。慶長五年關原の役本多佐渡守の部下に屬す、時に二十三歲。既にして武官の暇隙に及び、或は下妻に往きて良尊禪師に多寶院に見え、又物外禪師を宇津宮の慧林に訪ひ、得る所あり。同十九年の大阪陣には本多出雲守の手に屬し、明年また秀忠の先陣に奉事して大阪に臻る、時に三十七歲。然して後江戶駿河臺に住止し、萬安

禪師を貴雲に訪ひ、慶洞上の大意を復擬す。元和五年高木主水正に列みして復大阪城に彊む、卽ち同朋の爲に盲安杖を書す、これ最初の製なり。江戸に還るに及び落髪遁世す、時に四十有二歲、猶子をして家を嗣がしむ。然して名を大愚和尙に乞ひしに、愚辭して曰く、公道價重し誰か名を按せん、舊名可なりと、故に正三を以て名とす。同七年復子隻杖徧く名宿を敲き五畿を廻り、咸く神社佛塔を拜す、明年大和法隆寺に投じ律を綜し經を學し一寒暑を經て、三河の千鳥山に入り、眞源を頤り工夫に凝る、臺巖本秀の二大老、師の道に歸して晨夕參承す。寛永元年石平の幽谷に盧を構へ、辨道慥々爾たり、諸方の雲衲遠近の男女翕如として筵に競ふ。同三年三河の野田に野塚焦煽して已まざるあり、師聆いて曰く、これ幽冥の苦患逼業の然らしむる所なりと、切に悲心を催して往いて、誦經す、塚火忽ち滅す、村民相共に之を異む。その焦塊丹の如し、之れを遐邇に饋りて以て目前の地獄な

るを視しむ。平生業報靈附の事を見聞する每に咸く筆記せり。後に二三子編輯し號して因果物語といふ。一日絕江長老來つて師の念佛を口稱するを難ず、師曰く、吾念佛は放下著の如し、只麼に放下著と言はんよりは寧ろ念佛を口稱せんは佗の耳邊に障らざるべしと、江對ふるなし。同八年大阪に往きて縣令鈴木重成の家に駐る。時に隱田の罪者あり、伏見奉行書を重成に通じて男女咸く死刑に行ふべしといふ。師重成に謂つて曰く、三河以來此の如き罪に女人の死刑なし、今始めて行ふは永劫の殃過にして不忠の事たり、縱ひ身命を喪ふとも之を訴ふべしと。重成三たび書を復して終に數多の女人を聽せり、是を以て隱田の舍財皆重成に賚ふ。重成師に推つて隱田死刑の精魂を拔濟せんといふ。師云ふ、極重惡人を薩ふは彌陀尊には如くなしと。便ち阿彌陀佛及び二十五菩薩の像を繢つて其迷衢を賚く。後其像を肥後天艸に奉安す、今の菩薩堂是也。師熊野に詣

し廻つて藤城を歴、鈴木氏の宗親を追薦し、若山に到りて加納氏の家を主とす、城中の諸士皆傾心歸座す、加納氏の爲に武士日用を書し、之に三章を續いで四民日用と名づく。月をこえて三河に歸り、矢並に往いて醫王寺を修す、これ宗親善阿彌の故蹟なるに由る也。明年新に佛殿を創し山を石平と號し寺を恩眞と名づけ、中央觀音大士左右は東照宮台德院殿の尊牌を安んじ、三時諷經恭奉鄭重なり。野外護に謂つて曰く、恩眞の住僧後道心の士なくんば無知の行者をして燈香を衞らしめ、硬く世間の長老をして住位せしむる勿れと。師又丹州の端巖に至り、萬安禪師の請に隨うて麓艸分上下篇を著し、又江府に往いて普く尼女尊卑を化し、二人比丘尼念佛双紙を書せり。同十九年重成肥後天艸の故戰場に吏たり、師飛錫して彼に至り重成に謂つて曰く、這地邪宗泛濫の跡なり、佛宇を造り正法を弘めば治敎休明ならんと。重成之を幕府に訴ふ、乃ち三百石を賜ふ、三十二宇を建て

中に淨土の一寺を構へ東照宮台德院殿の尊牌を建て、餘は皆洞宗となす。師破幾利支丹一本を書して寺毎に韞め、永く邪敎を斷たんことを誓ふ。駐錫三年、廻つて長崎を經て歸る。慶安元年江府に至り敎義の蘊奥を研窮し禪錄の大意を紬繹す、道俗貴賤雲從せり。同三年森川某菴を四谷にたてゝ師を請うて處らしむ、師此處にありて三寶德用を著す、三寶德用四民日用を合編して一本となし、之を萬民德用と名づく、第一の法典也。同五年熊谷某舍を牛込天德境内に構へ師をして居らしむ、卽ち了心庵と名づく、修行念願を書して、竟に最後の述書となす。迺ち說いて曰く、佛法は惡心を滅するの法也、佛弟子豈に其道を要めざらんや、佛弟子眞の道に入つて迷情を抽かんこと、是念願の外更に他なしと。同七年森川氏に寓す、夜話に僧曰く、頃日支那より課誦を渡來す、之を觀るに八十八佛中に南無大强精進勇猛佛ありと。師欣然として危坐して曰く、我この佛名を思恂すること

已に久し、是我が修行の證に出で給へるものなりと。自ら此佛名を書して四部の徒に授與せり。明曆元年春より師不豫なり、諸弟子を集め、二利の要復興の趣を遺付し駿河臺に徙る。疾夏に至つて漸次に重し、六月二十五日申のとき怡然として寂す、春秋七十有七、法臘三十六年。龕を天德禪院に送り夜もすがら佛事、翌日闍維、第三日に至つて冷灰を拂ふ、骨身淨きこと氷雪の如し、卽ち一壺となし、灰燼も亦此の如くにして天德の北崗に塔す、四部衆日夜禮拜巡塔す。後塔を下總吉倉の松山佐倉の東三里)に還す、兩壺も同じく韞む。二村氏某盧を鄰鄉植木に構へ師塔を保護す、故に塔鄰庵と號す。門人五十餘員、不三は衆中の老宿、師の在世中往いて河州稻田觀音院に居し二利を主張す。雲步は師の滅後豐後に適きて能仁寺を闢き、肥後に徙りて天福寺を創し以て師法を弘播す。野衲は大府に在り艸庵に窮居して機を覓め法の久住を揣り、緣を得て師の念願を遂せんことを冀

ふのみ。

以上は專ら行業記に據り悟道敎化等に涉る記事を省き、行實に關する大要を抄譯せしものなるが、幾分か石田氏の論文を補正するを得ば幸なり。尙行業記の末に鈴木氏の家系について附記せる全文左の如し。

鈴木氏家傳云、竺土摩伽陀國之大王來下本朝紀之熊野峰。乃大龍權現是也。有大臣姓穗積鈴木重忠者。今之藤城權現是也。重忠十有餘代之孫曰鈴木重基。是則鈴木三郞重家之季父也。家旣之奧陸高館。基亦不止。遂程漸進三河矢作。聆高館城落止住同州高橋庄矢並。于時鄕邑起戰干戈旣亂。邑人相擬招基乃爲將。基爲所重矣。後除鬚髮法名號善阿彌。玆有三子。嫡男十有餘代之孫曰鈴木重次。師卽重次之長子也。遂俾弟重成繼家師嗣于他而乃號九太夫。有二子。一男一女。復令猶子紹家。今之鈴木九太夫其孫也。實子時狄自以汛世。後平復而奉大猷院殿。今立鈴木伊兵衞尉其末矣。

行業記辨疑一卷は問答體に記せる行業記の註脚にして「旣行業記就。有小沙彌云。於中吾儕多所難通。有得聞與。予曰。將疑處來。相遜分。因設問

隨而辨之」との小引あり。以下行業記抄譯の文に關係多き箇所を抄出すべし。

問、菴主の如き老後に事す、初年の事これを孰れに獲るや。答、初年の事は嘗て三宅氏玄石鈴木氏木工翁及び長水長老に因つてその聞く所に遵ふ。玄石木工翁は廼ち師の近親、齡最も臘長なり、長水の歲末だ然らずと雖も師と同邑にして、曲に之を父母に聽くに由れり。中年の事は三智三政及び本秀禪師に知る。後年の事は予左右に在りて之を能くする者也。

問、台巖本秀二大老は、誰ぞや。答、倶に三州足助香積寺の前住後主なり、乃ち洞下實峰禪師の孫也。

問、石平山は孰れの領地なりや。答、師の嚴父よりして茲處に知たり、相承いで以て重成に至れる也。

問、佛及び二十五菩薩の像何が故に天艸に置くや。答、始め三州足助

の宮平に安立す、重成後に天草奉行となるに及んで像を彼の地に移す、これ敗亂の後佛像あらざるを以てなり。

問、醫王寺は善阿彌の故蹟なりと、これ出家なりや。答、然らず、老年の隱士なり、其居後改めて醫王寺を成す、所以に師其廢寺を修葺して之を與造したまへり。

問、天艸の諸寺創成して尊牌を安立することは只淨土寺の一寺のみといへる不審。答、寺々皆安立せるなり、その別つ所以は重成月の十七二十四二日肅詣して恭く之を拜す、是故に爾いへり。

問、何故に庵を了心といふや。答、熊谷氏某の名を了心居士といふ、之に由つて時輩呼んで了心庵と號す。

問、二利の要復興の趣とは何ぞや。答、二利とは自他の成佛なり、復興とは修行念願七箇條の如き也。

問、駿河臺は誰の宅ぞ。答、師の弟兵左衛門尉の宅也。

問、何が故に師塔を吉倉の松山に遷すや。　答、時に天德寺の八箇寺と總錄の諸寺と、宗門習學の事に依て公處を經ることあり、此によつて長水等倶に院を辭す、此時に庵を小石川に移し塔を吉倉の邑に立つ、吉倉は便ち鈴木九太夫の領地也。

問、不三はいづくの人ぞや。　答、筑後の人、姓は星野氏、壯歲にして師に從ひ發心出家す、乃ち師最初の子也。　雲步は豐前の英產、幼にして肥陽に來る。　野衲は肥後の生緣、相偕に十歲にして本郡流長院園岩禪師に謁す、行年十三にして同日に剃染し、十有九にして與に起つて坂東に玉り、叢林を經ること已に三霜、終に倶に世俗の學を辭して石平和尙に參する也。

問、石平は何れの流に依れるや。　答、先祖已來曹洞禪門に歸す、殊に洞上の密修を信ずること至つて深し、之に由つて知んぬべし。

禪僧と小說

禪僧中小說と最も關係多きは例の東海大和尙なり、その奇拔なる言行が世人の耳目を聳動せしめしより、口々に相傳へ汎く民間の話柄となり、針小棒大實に虛を交へ、無より有を生じて、事實譚とも小說ともつかぬ一休咄いでゝより、續一休話、田舍一休、關東一休、一休可笑記、一休諸國物語等相尋で起り、終に文化文政度の京傳をして本朝醉菩提を草せしむるに至れり、其他の禪僧に至りては此和尙程世間に人氣はなけれども、尙片々たる當意卽妙の贈答詩歌が、竹取物語の昔より駄洒落ずきなる我國民の歡迎を得て、小說雜書に記載せらるゝもの少からず、是等は固より好事家の假托にいづるもの多く、一々信を措くべきにあらずと雖も、猶參考史料たるの價値なしと云ふ可からず、頃日の炎熱永晝の消し難きに苦み、架上の書を亂抽して讀過せしものゝ中より、事の禪僧に關するものを抄出して、二

十餘篇を得たり。其人其事必ずしも信ずべからざらんも、當時の風氣好尙を察するに便宜多し、五山僧がいかに聯句に沈湎し、正徹がいかに歌人として聲望ありしか、策彥のみやげ談にも、多少の法螺はありたらんなど、想像するもをかしからずや。

○神無月の頃、尊氏將軍立花をあそばしける處へ、夢窓國師御出ありけるに、尊氏不レ計發句をあそばしける。

松を緯もみぢを經の錦かな

と夢窓脇をなされけるとなり

秋雨洒如レ絲

○幽齋と友長老と付合の句面白しとて、人の語りしは、假初に見るを羨む草の庵といふ句に、いつはりとなる人の言の葉と言ひ給ふ句は、相逢盡道休レ官去、林下何曾見二一人一と作りし詩の心にてつけられし妙句とかや。

○或人の語りしは、何たる人にても、我家の風俗何につけてもいづるなり、

たしなむべき事にやと云て諸宗の俳諧ありしを、面八句かきつけ侍る。
まづ眞言宗の發句に
　金剛界胎藏界の紅葉かな
と有りければ、曹洞宗脇
　そもさんか是秋の夜の月
第三は五山宗いたされける
　行盡す江南すぢに雁鳴きて
四句目は淨土宗致しぬ
　西より吹くは極樂の風
五句目は日蓮宗なり
　そこにこそくせものの佛やおはすらん
六句目は一向宗なり
　人にかまはず御文よむなり

七句目は儒者
　物しりの腹より出づる儒しやく道
八句目は醫師
　藥のまずはしのゝたまはく
○貧僧のありけるが、北山の麓に柴の庵を結びしに、友の僧はじめて行きてよめるとかや。
　何をがなまゐらせたくは思へども
　　達磨宗には一物もなし
とよみければ、返歌に
　一物もなきを給はる心こそ
　　本來空の一もつぞかし
○策彥と紹巴との百韻の漢和を見侍りしに、おもしろき句ども多き中に、

といに句に

秋風に飛び行く螢吹き消えて

と膾し給ひける。

又の懐紙の中に策彦

沙濕履無聲

といへる句に

忍ぶ夜の雨は中々たよりにて

としられける、面白き句ども也と聞きし。

○むかし伏見に江湖とやらんいひて、禪宗のあつまりて、毎日參禪參學に怠ることなし、一日上堂のありしに、趙州の有無とやらんといふ古則をあげられしに、上堂過ぎてかへる時、員琢といふ僧一首の歌をよみて高らかに吟ぜられし

趙州の有無の二つにほだされて

身は淀川のからふねとなる

と侍りければ、東堂きゝ給ひて、員琢々々とよび給ひけるに、やつと答へらるゝ、東堂の曰く、それがからふねかと仰せられけるに、員琢答話をせられける

寒松無聲風來吟

とありければ、又曰く風たゆむ時はと仰せければ

山虚有響

○東福寺の徹書記は定家の再來なりしとかや、其故を聞きしに、書記京なる歌友達の方へ齋に出られけるに、雪いと面白くふりければ、五條の橋にやすらひ、四方山をながめて一首よめり

とびきえて雲井遙にゆく鷺の

おのが羽こぼす雪のあけぼの

とよめりて、面白く思ひて、料紙を借りて書きつけ、京へいでゝ見せばやと、

道すがら吟行しけるに、京なる人、明日は書記御出とて少しまどろむ處に、夢のうちに定家來て歌を給はる、其歌書記のよめるなりしに、亭主此夢想を喜び、あくるを待ちかねて書付け、書記をおそしと待つ、書記來て門に入るとひとしく夢想の物語をする、書記不思議に思ひて、書きつけ給ひし歌を取出し、夢想の歌とくらべ見れば、てにはが一つ違はざりしこそ不思議なれ、亭主も奇異の思をなしけると也、是より世々に定家の再來は書記なりと傳へしなり。

○五山の喝食、連句に心を入れて他事なし、さる人いふやうは、兒喝食などは、又やはらかなる道をも御學問ありたるよし、ちと歌學をもなされよかしと、諫めければ、われらが家の詩連句からは、歌は習はずとてもよむべしと言はれけるに、さる方より歌を一首おくりける

君をのみ戀ひこがれたるたずさみに

かご田にいでゝ根芹をぞつむ

喝食返歌

われしらみふなあぶりたるあしもつり

せざの畑で午蒡ひきぬく

とせられけるこそ可笑しけれ、此返歌何とも合點ゆかず、皆連句の法にて返歌しければ、心は通せず、只字をのみ付けたり、おかしかりし言の葉なり、誠にいにしへの人も言ひおきし、詩作の連句はのびすぎて鈍なり、連句師の詩は利巧すぎて鈍なりといひしも、さもあらんかし。

○相國寺の横川和尙は名譽の作者なりしと也、ある時若王寺へ花見にまかれりとて、あそばされしとかや

若王花世界

とあそばし、殊の外御自慢ありければ、鼻が一尺ほど高くなりたまうたと、人皆申しける處に、虛空に聲あつて對句をいたしける、其對句に

富士雪乾坤

名譽の句なり、天狗やしつらんと、人皆奇異の思をなしけるとぞ。

○五山にはよろづの事きやしや風流をたしなむといへり、錢を何百文といふことを異名をつけていふ也

百　文　一指　一指は天龍一指禪といふより名付けしと也

二百文　黄鸝　黄鸝は兩箇黄鸝啼二翠柳一と云より名付也

三百文　木毬　木毬は雪峰の木毬とて手まり也、參徒來れば木毬を三つなげ出すにてつけたりしと也

五百文　煙景　煙景は五湖といふにつけしと也、五湖煙景有レ誰爭といふ句あり

一貫文　圓相　圓相是一圓相也一貫也、圓きによりてかく付たり

かくの如き異名をつけつゝいへり、風流なる事とさる人の云也。

○徹書記の頃は殊の外亂世なりしに、書記たはむれに歌をよみ給ひしにより、さすらひ給ふとなり、其歌に

中々に見ぬもろこしの鳥は出じ
桐の葉おとせ秋の夜の月

此歌の心は今の世の政事あしきにより、世が亂れし、禁裏にうゑおく桐は鳳凰の來儀をまたん爲なるに、此やうなる政事にては、鳳凰のくる念はなし、桐の葉を打落して、夜の月をさはりなく眺めたるがよし、見ぬもろこしの鳥とは鳳凰の事なり、此歌の底心は君をそしれる歌なるより、さそらひしとなり、さる程に書記の謫所へ歌友連共見舞ひけるに、七月十四日によみし歌とて語り給ひし歌に

中々になき魂ならば故里に
かへらんものをけふの夕ぐれ

此歌の心は命あるがつれなし、死にたらば聖靈になりて、此夕には歸るべきものをと、故里を戀しく思ひつる志、いとあはれ深し、扨此歌禁裏へ聞えしかば、あはれに思召して、めしかへされけると也、いとやさしき事共なり。

○夢窓國師嵐山に世をのがれておはせしが、庵より煙たちけるに、尊氏將軍狩に御出ありしついでに、夢窓の庵へ立ちよりてよめり

露の身を嵐の山におきながら
世にあり顏のけぶり立かな

夢窓國師の返歌

世にありと思はねばこそ露の身を
あらしの山の煙とぞなす

かくむそばしければ、尊氏おもしろく思召し、折々庵へ來り給ひしに或時夢窓にごり酒をまゐりければ、尊氏一首

隱居して心をすますものならば
にごり酒をばいかに飲むらん

夢窓御返歌

隱居してのむべきものは濁酒

とても此世にすむ身ではなし

○むかし五山の名ある僧、忍びて月見にゆかんと二人たくみしに、一人はまづさきへ出て、風景よきかたに立寄り待ち給ふ、今一人は酒肴せおひて跡より來り給ひて、戯れていひし狂句

重重重重重　　對句　　待待待待待

名譽の一對なり、重の字おもしとよむ時は仄也、ちうところによめば平なり、待の字おそしとよめば平也、まつとよむ時は仄なり、此の如くなる妙句即時に出ること、只人にはあらじと人の仰せられし。

○さる禪僧の語りしは、即心是佛といふ語を、頌に作りしを見侍るに、一の句は即の字を分け、二の句は心の字、三の句は是の字を分け、四の句は佛の字を分けし頌なり、其頌日本の作にてはなしと仰せられし。

有節非干竹　　三星繞月宮

一人居日下　　弗與衆人同

○いにしへ俳諧の連句はやりし時、名人の句とて人の語りしに

雲雁過二雲雁一　鹿々鳴明鹿
水魚達二水魚一　鶉々睡暮鶉
咄自二口邊一出　油因二油斷一斷
睡令二目下一垂　火以二火吹一吹

此句ども名譽なる句なり。

○惡事あれば又よき事あり、是を人間萬事塞翁馬といへり、此心にて五山の誰とやらんがなされし章句も名譽の句なり

任他紅葉落　塞馬月林間

此心は紅葉は見事なれども散りつくさばそれもよし、又林の葉ども落ちたらば月のさはりなくて一段よしといへり。(以上萬治二年刊百物語)

○昔東福寺の虎關、一文字をかく並べられし

月五(テラシテ)二中岩一閑居一(ヒトツサムシ)一

露九幽臺孤身一
一聞吽嶺猿梢亦
一送數年是輪廻一

○昔濟家の僧にあひ、名は何とといひければ、三清と答へぬるに、一派の僧今一人ありあはせて、自是三清第一名と戯れけるに、

濟家僧裡獨分明

と答へし。

○むかし六祖の唐臼ふめる圖の掛物を見て、さる者是は面白き様子なり、われも一幅ほしゝと思ひ、あるじに此祖師の事よく尋ね、宿に歸り知音の繪かきに頼むに、六祖といふ事を打忘れ、からうすふみの六藏を書きて給はれというた。

(以上寛文十一年刊私可多咄)

○昔嵯峨の策彦和尙の入唐遊ばして後、信長公の御前にての物語に、靈鷲山の御池の蓮葉は凡そ一枚が二間四方ほど開きて、この薫る風心地よく、

この葉の上に晝寢して涼む人あると語りたまへば、信長笑はせたまへば、和尙お次の室に立ちたまひ、泪を流し衣の袖を絞り給ふを見て、只今殿の御笑ひ遊ばしけるを口惜しく思召されけるかと尋ね給へば、和尙のたまひしは、信長公天下を御知り遊ばす程の御心入には小き事の思はれ、泪を溢すとのたまひけるとぞ。

（貞享二年刊西鶴諸國咄）

○いにしへの都、奈良の京二條村に住みける林淨因はもと宋國の人なり、花洛建仁寺第二世龍山禪師入宋ありける比、此林淨因にあひ給ひけるに、淨因も龍山に歸依して膠漆の交淺からず、元朝に至りて順宗皇帝至正元年に及び、龍山禪師歸朝したまへり、是本朝の人王九十七代光明院の御宇曆應四年なり、林淨因も此和尙の德を慕ひ、同じく龍山の伴侶となりて日本に來り、今の南都二條村に住居しけりとなん、昔は此村を奈良の町としける故、奈良の名產といふなる晒法論味噌のたぐひも猶爰にありけるとぞ、されば淨因も此里に足をとめばやと思ふ心より、まづ家業といふもの

なくてはいかゞと、思ひめぐらしけるに、古へ諸葛孔明が造りひろめしといふなる饅頭を始て造り弘めけるより、我朝の人普くもてはへらかし、吉事にも是を以てし、凶事にも亦用ゆる事にぞありける、然れども此家林の字をいはず、鹽瀬を以て名乗る事はそのかみ淨因が遠祖は詩人にして、林和靖なりとかや、詩人の後裔たれども、詩に鳴るにあらず、食類に名を得るは、恥を先祖に與ふるなるべしと思ふより、鹽瀬を以て氏とすとかや、扨此淨因奈良にありて作業(なりはひ)をつとめし内、いつしか病身となりて虚火を煩ひ、年頃をへて眩暈の心甚だ起りもてゆきつゝ、心地死ぬやう覺えしかば、常に龍山師の恵を思ひ、心に專ら觀じ念願すらく、我此度の病を治し命算をのべ給はらば吾本朝において儲けたる子のうち一人を弟子にまゐらすべしなど、佛に向ひかき口說くやうに祈り歎く事ひたすらなりしに、或日淨因が寢たる臥室の北に當る壁の後にあたりて大勢人のよりて、ひたと掘切りつこぼらとる音しける程に、看病の者共にいひて窺はしむるに更

に人ある事なし、如此する事七日に至りて壁忽ちすきとほり明かなること星の如く見ゆるに驚き、また看病の者に指さして見するに、是も人の目に見ゆる事なし、かくて一日をへて大さ盤の如し、淨因自ら立ちて窺ひ見るに、壁の北は妻の化粧しける所に設けたる一間なるに、思の外廣き野となりて、草なども生ひ茂りたる中に、農民とおぼしき者十人ばかり、手々に鋤鍬を取りて穴の前に立てり、淨因不思議さいふばかりなくて、此者共にとへば皆跪き答へていふやう、是は花洛建仁寺の龍山禪師に御分の地として、我々に命じ爰を開かせ給ふ也、臨瀨淨因の重病をうけ給ひつるを聞召して、我々に仰せて此道を開かせ追付此家に渡らせたまふ也と、いひも果てぬさきに先手の侍五六騎、馬鞍さわやかにいでたち列を備へてこなたざまに歩ませ來れり、その次は皆一山の僧と見えし法師共數百人、兒喝食花を飾り圍繞しける中に、龍山和尙は上輿に坐し給ふが貴く有難く覺えけるほどに、少し退きて首を傾け禮しゐたるに、穴を去るこ

と二三間を隔てゝ輿をかきすゑさせ、龍山のたまひしは、公が此度の病既に定業なり、殘れる命なしといへども、われ公が爲に冥官に到り、再三に歎き乞ひて十二年の命を申請けたり、けふよりして病を愁ひ給ひそと宣ふと思ふ内に、壁なれあひて元の如くなりぬ、さてかくありけるより日にそひて本復しける程に、やがて三人ありける子の内一人を具して、都に上り龍山の弟子となしぬ、卽ち今の建仁寺の内兩足院といへるの開祖、無等以倫なりとかや、誠に龍山の聖はるかに幽冥に通じけん、有難き僧なりけり。

（寶永三年刊鷺水御伽百物語）

藻屑物語と男色義理物語

藻屑物語は江戸時代の男色物の元祖といふべきもので、その事實は寛永十七年の事である、これは淺草の慶養寺に傳へた寫本で、燕石十種の第四輯に收められて居る。その梗概をいふと德川將軍の後見として時めい

た櫻川侍従の臣下に、伊丹右京といふ十六歳の美少年あり、同じ主君に仕ふる舟川釆女とて、これは十八歳の若者なるが右京を戀ひ慕ふあまり病氣になつた。釆女の兄分なる志賀左馬之助といふ者これを憐み、自ら媒して右京に契らしむ。こゝに又其頃召し抱へられし細野主膳といふもの右京に思ひをかけ、茶道節木松齋を媒として說かしめたれど、更に承け引かざるより怒りて竊に右京を討ち果さんと計る。右京之を知り、寛永十七年四月十七日の夜、逆まにこなたより押寄せて主膳を討ち、爲に慶養寺にて切腹を命ぜられしかば、釆女も慶養寺に駈けつけ、右京と席を並べて切腹したりといふ筋にて、當時の實說とおぼしく、文章も古風にてたゞたゞしく、小說としては見所少きものである。近古小說解題に、櫻川侍従とあるは、堀田正盛の事を憚りて、匿名にしたるならんと言はれたのは、さもあるべき事と思はれる。西鶴の男色大鑑卷之三(馬琴が卷二といつたのは誤)藥はきかぬ房枕の一章は、藻屑物語の事實をそのまゝ採り用ゐた

もので、文章も原文を可也多量に借用して居るが、本筋に關係少き枝葉を刈り去つて、例の簡潔適勁な筆つき流石にうまいもので、鉛を化して銀となすの手段は、遺憾なく發揮されて居る。さて此物語は、從來刊本なきものと思はれて居たのであるが、今回男色義理物語といふ書を書肆から見せられて讀んで見ると、それが藻屑物語に多少の修正を加へたのであることを發見した。此書は半紙本四冊で菱川派の畵を入れ卷尾に元祿十二年己卯正月吉日利倉屋小太郎板とある。文章は藻屑物語を少々改竄したに過ぎないが、書中の人名は皆改められて居る。大鑑は櫻川侍從を某侍從としただけで、其他は原本通りの人名を用ゐて居るが、此書では

櫻川侍從　唐橋侍從
伊丹右京　深見右京
舟川采女　三好采女
志賀左馬之助　志賀內藏之助

細野主膳　細野式部

節木松齋　澁川露齋

といふ風に、大なり小なり一々かへてある。右京の戒名の花童院劍、切、利、空居士も花童院見雪雪空居士となつて居る。貞享四年刊行の大鑑にさへ、原書のまゝに出た名を、今更何を憚りてかく變更したのであるか、新作物のやうに世間を欺くためか、慶養寺の寫本をそのまゝ刊行するが疚しくての申譯か、この二つの中であらう。

尚此書の外題と、刊行年月や書肆の名前の所には、入木ではないかと疑はれる形跡がある、貞享の書籍目錄に若道物語といふのが見えて居るが、或はそれを改題したのではなからうか、併し若道物語は未見の書で、只外題だけからの推測に過ぎぬのである故、もし若道物語を既に見られた人があるなら、其内容を知らせてほしいのである。

支那小說の翻譯

（剪燈新話と伽婢子）

德川時代の戲作小說に支那文學の影響が著しく現れたのは言ふまでもなく、文化文政時代で、元祿時代のものには其の痕跡が餘程微弱である。元祿にも通俗三國誌（元祿五年刊）通俗漢楚軍談（元祿八年刊）の類出たれど、是等は諸史小說を撮合して演義體に綴つたもので、後期の唐山小說をそのまゝ翻譯したものとは同樣に見倣し難いのである。元來支那小說が讀書人の間に玩ばるゝに至つたのは享保頃からの事で、寶曆になつては既にその翻刻翻譯が盛に行はれた。李卓吾批點の忠義水滸傳（二冊十回まで）は享保十三年に翻刻され、片假名交り文の翻譯では通俗忠義水滸傳、通俗西遊記、通俗醉菩提、通俗醫王耆婆傳、通俗金翹傳、いづれも寶曆七年から同じく十三年までの間に出たのである。

漢學は元來修身齊家治國平天下を目的とする倫理經濟の學問で、詩文は閑餘の末枝と考へられてゐたのであるが、時勢の推移と共に單に文學として之を樂む者を生ずるに至つた。享保のはじめ徂徠が李王の說に據つて修辭の學を唱へたのも、一つは此機運に導かれたので、それが又著しく此傾向を助長して、詩書風流を以て自ら高しとする文人肌の學者を輩出せしめた。服部南郭、祇園南海、柳澤淇園の如きは、その代表者として最も著しいものである。漢學の硏究が文學的に傾くと共に、從來の漢學者が輕蔑して讀まうともせず、讀めもしなかつた小說類が、當時のハイカラ文士によつて耽讀され、又は翻刻翻譯さるゝに至つた。現に柳澤淇園の遺文中にも麟兒報といふ小說の譯が斷篇ながら殘つて居る。寶曆に始まつた花柳社會の內幕を穿つた洒落本も、或は支那の戲文から出たのでは無いかと思はれる。洒落本の最も古きは寶曆七年刊行の異素六帖と聖遊廓とであるが、自分は之に月花餘情をも加へようと思ふ(月花餘情が

寶暦七年以前の刊本たることは別に考證あり)。此中異素六帖は書家で名高い澤田東江の戯作、聖遊廓は著者不明なれど、釋迦、孔子、老子の三聖が、李白の揚屋で敵娼と幇間の白樂天とを相手にして遊ぶといふ趣向にて、卷末に附錄として廓詞の唐音を出して居るなど、大抵作者の如何なる人であるかゞ窺はれる。月花餘情は献笑閣主人題といふ漢文の序文あり、本文も最初に江南妓邑記と題して、漢文にて島内の妓情を說き、次に燕喜篇と題し、國文にて青樓宴興の事を書いて居る。後の二書はいづれも大阪板で、大阪の花街を寫したものであるが、作者はいづれそんでふそこらの漢學書生のいたづらであらう。さてこんな物を一體何から思ひついたかと考へ及ぶは誰しも同樣であらう。最初の洒落本の三種が三種とも漢學者臭い人の手に成つてゐる所から、吾人の連想は直に李卓吾(?)の開卷一笑や曼翁の板橋雜記等に及ぶのである。懽内經、丫鬟賦、娼妓賦、幇間賦などの戯文を收めた開卷一笑や、金陵敎坊の繁華を說き、才子佳人の

情話を述べた板橋雜記が、支那崇拜のハイカラ文士に愛讀された事は勿論で、現に開卷一笑は寶曆五年巢居主人(都賀庭鐘)によつて傍訓と釋義とをつけて反刻され、板橋雜記は稍後れて明和九年山崎蘭齋によつて、手際よく俗譯のついた本が出て居る。洒落本が是邊から著意されたらうといふ吾人の推測は、强ち失當であるまいと思ふ。

支那小說紹介の功勞者として忘るべからざる人が三人ある。その一人はもと長崎の通事で、唐音俗語を徂徠に敎へ、又唐語便用、唐譯便覽、小說讀法等を著し、水滸傳最初の譯者たる岡島冠山、一人は史記や國語など四種の註釋では四鰯(シクジリ)の浮名を歌はれたが、今古奇觀等から佳篇を拔き出して、小說精言、奇言等の短篇小說集を編んだ京都の學者岡白駒、今一人は大阪の儒者で、巢居主人又は近路行者、千里浪子などの匿名の下に、短篇小說の翻案を試みて、英草紙(ハナブサ)、繁夜話(シゲ〱ヤワ)、莠句冊(ヒツジグサ)等を著し、白駒が四鰯の世評と同じやうに、本職の儒者よりも內職の小說が大當りであるなど丶當時の學者評

判記に書かれた都賀庭鐘である。此三人が先驅となつて、支那小說の趣味を一般社會に紹介してから、間もなく京傳馬琴等の讀本小說が起り、何々水滸傳の名を冐した戯作が、天罡地煞星のやうにやたらに飛出して、はては猫も杓子も唐山俗語を振廻し、御苦勞にも「閑話休題」と書いて「それはさておき」と振假名をつけたり、「這奇的」と書いて「こはめづらしき」などゝ讀ませて嬉しがるやうになつた。支那小說通を以て自ら任じ頻にいやみな高慢を並べた馬琴の讀書力も、今日から觀れば隨分怪しいものではあるが、兎に角力の及ぶ限り涉獵したことは疑を容れない。又當時舶載の小說も可也多かつたことは、寛政三年刊行の小說字彙に、援引書目百六十種を數へるに見ても知れる、舶載小說の購入者では江戸に北靜廬、浪花に木村蒹葭堂があつて、文士の後楯となつた。こんな風で小說や俗語の硏究が追々開け、只讀むだけでは滿足せず、自ら筆を執つて我國の戯曲小說を漢譯する者を生ずるに至り、四鳴蟬、日本忠臣庫、櫻精傳奇の類が出來た。

當時の小說家連中には、尾羽打枯らしても筆筒に孔雀の羽と、讀めなくとも書架に唐山小說の一帙も置かなくては、文士としての品位が保てなかつたのである。

今古奇觀、拍案驚奇、石點頭、八洞天のやうな短篇集の歡迎されたのは、讀むに倦まず、翻譯翻案にも手頃で入り易いからで、今日の西洋小說におけると同傾向で、元祿以前に剪燈新話や棠陰比事が、眞先に譯されたのも之がためである。 元祿以前には純粹の小說は讀めないものであるから、あちらの雜史隨筆類から材料の供給を仰いだ疑獄談を集めた棠陰比事は、慶安四年に棠陰比事物語として平假名繪入の草子に俗譯され、櫻陰比事(元祿二年)鎌倉比事(寳永五年)日本桃陰比事(寳永六年刊)後に本朝藤陰比事と改題等の摸倣作いで、大岡政談や馬琴の青砥藤綱摸稜案にも多少の材料を供給した。

剪燈新話は天文の頃我國に渡來して愛讀者も多かつたと見え、早く慶長

活字板に翻刻され、尋で慶安元年に整板に再刻されて居る。而してこれが最初の翻譯として世人の注意を惹いた了意の伽婢子(トギバウコ)は、棠陰比事物語に後れること十五年の寛文六年に出た。怪談物は之より前にも出て居るが、了意の平易流暢な文章に和げられた新奇な怪異談は、太く世人の好尚に投じたものと見えて、此書一たび出てよりこの體裁を襲うた怪談小説が天和貞享から寛政享和の頃まで絶えず續出して怪談物の一系統を成して居る。今その著しいものを擧げると次のやうである。

新御伽婢子	天和三年	洛下寓居
宗祇諸國物語	貞享二年	不明
諸國咄	同	井原西鶴
狗張子	元祿四年	淺井了意
諸國新百物語	同五年	俳林子
玉櫛笥	同八年	林文會堂
玉箒子	同九年	同
怪談全書	同十一年	羅山子

御前伽婢子　同　十五年　都の錦
御伽人形（回國一夜宿）　寶永二年　增田圓水
御伽百物語　同　三年　青木鷺水
近代因果物語　同　四年　同
大和怪異記　同　五年　不明
一夜船（怪談諸國物語）　正德二年　北條團水
怪談乘合船　同　三年　落月庵操巵
御伽空穗猿　元文五年　摩志田好話
御伽夜話　延享三年　安勝子
怪談登志男　寬延三年　靜觀坊
古今百物語　寶曆元年　說山
當世百物語　同　烏有庵
諸國怪談帳　同　七年　不明
新說百物語　明和四年　高古堂主人
怪談とのゐ袋　同　五年　臥仙子文坡
近代百物語　同　七年　鳥飼醉雅

怪談御伽童	安永元年	不明
雨月物語	同　五年	上田秋成
怪異談叢	天明元年	伊丹椿園
前席夜話	寛政二年	文榮堂
怪談旅硯	同　三年	紅葉園主人
怪談旅の曙	同　八年	波天奈志小浮禰
怪談藻塩草	享和元年	速水春曉齋

怪談物といふも一二分がたは怪談ならぬ物語のまじつて居るのが多い。

怪談物といふ名稱を廣げて奇事異聞談とでもすれば、近路行者の英草紙、繁野話の如きも、當然この一群に入るべきものである。英草紙、雨月物語を江戸讀本の父として重きを置く文學史家は、溯つてその祖父たる了意が伽婢子の功を認めねばならぬ。

伽婢子は剪燈新話全部二十篇の文章中より十八篇を拔き地名人名をも日本に改め、すべて我が國風に叶ふやうに翻案して、少しも譯文らしい臭

氣を留めぬ頗る手際な出來榮である。今其一斑を示すために少しく原文と對照して見よう。

天台訪隱錄

台人徐逸粗通書史、以端午日入天台山採藥、同行數人憚於涉險中道而返、惟逸愛其山明水秀、樹木陰翳進不知止、且誦孫興公之賦而賛其妙曰、赤城霞起而建標、瀑布泉流而界道、非虛語也、更前數里、則斜陽在嶺飛鳥投木、進無所抵退不及還矣、躊躇之間忽澗水中有巨瓢流出、喜曰此豈有居人乎、否則必琳宮梵宇也、遂沿澗而行不里餘至一衖口、以巨石爲門入數十步則豁然寛敞、有居民四五十家、衣冠古朴、氣質淳厚、石田茅屋、竹戶荊扉、犬吠鷄鳴、桑麻掩映儼然一村庄也、見逸至驚問曰、客何爲者、焉得而涉吾境、逸告以入山採藥失路至此、遂相顧不語、漠然無延接之意、惟一老人衣冠若儒者、扶藜而前、自稱太學陶上舍、揖逸而言曰、山澤深險、豺狼之所嗥、魑魅之所遊、日又晩矣、若固相拒是見溺而不援也、乃邀逸歸其室、（下略）

十津川の仙境

和泉の堺に藥種を商ふ者あり、其名を長次といふ、久しく瘡毒を憂へて紀州十津川に湯治しけり、病に相當せしにや、十四五日の間に平復し侍り、長次或日思ふやう、年ごろ聞傳へし十津川の溫泉の奥には、人參黃精と云ふもの生出て、尋ねあたれば多く有りと云、此慰みに近き所を搜し見ばやと思ひ、僕をば宿に留め、唯一人深く入りしかば、道に踏迷へり、一つの谷に下りて見れば、美くしき籠の流れ出ければ、此水上に人里ありと思ひ、水に隨ふてのぼるに、日は已にくれかゝり、鳥の音かすかに囀を爭ふ、斯て十町ばかり行くかと覺えし、岩を切拔たる門に到り、內に入りて見れば、茅葺の家五六十許り軒を並べて立たり、家々のありさま、石垣苔生ひて壁碧をなし、竹の折戶物淋しく蔦かづら冠木をかざる。犬ほえて砌をめぐり、鷄鳴て屋にのぼる、桑の枝茂り麻の葉おほひ、誠に住みならしたる村里也、樵りつみける椎柴、舂つきてほす粟粳、さすがに寂し

からずぞ見えたる、人の形勢古風ありて、素襖袴に烏帽子着て、行還しづかに威儀みだりならず、長次が立やすらひたる姿を見て大に怪み驚きて問ひけるやう、如何なる人なれば此里にさまよひ來れる、世の常にして知るべき所にあらずと云、長次有の儘に語る、こゝに一人の老人衣冠正しきが、蓬の沓をはき藜の杖をつきて、みづから三位中將と名のり、長次に向ひて曰、こゝは山深く岩ほ峙ち、熊猨むらがり走り、狐木玉の遊ぶ所にして、日は暮れたり、此儘打捨なば、是ぞ水に溺れたるを見ながら援はざるに同じかるべし、此方へおはせよ宿かし侍らんとて、家に連れて歸りぬ。

了意は博く内外典に通じ、和歌連歌の心得もあつた人だけに、能く原文を咀嚼して之に拘束されず、平易流暢にして然も姿致ある文章は近松西鶴以前の第一人と稱すべきである。　伽婢子十三巻六十七篇の文は剪燈新話に基づいた十八篇に加ふるに、剪燈夜話中の數篇や、是等と類を同じう

する奇事異聞を以てしたもので、新話中の聯芳樓記の如き原文の作意を改めて女を一人としたのは、姉妹二人が一人の秀才に私通するといふ筋が、敎訓上不都合にして、「兒女の閨を驚かし、自ら心を改め、正道に赴く一つの補とせん」とする主意に戻るからであらう。後人の便宜を思ひて、兩者の對照を表示すること次の如し。

前燈新話　　伽婢子

太虚司法傳……………鬼谷に落て鬼となる（卷三）
修文舍人傳……………了仙貧窮 附 天狗道（卷十）廉直頭人死司官職ニ（卷七）
鑑湖夜泛記……………（缺）
綠衣人傳……………易」生契（卷十一）

右の中愛卿傳を譯した遊女宮木野の一篇は、雨月物語卷の二「淺茅が宿」の粉本となつたらしい。同じ物語卷の三遊歷の俳人が高野山にて關白秀次の亡魂に遇ふ「佛法僧」の一篇は、有名な「白峯」と同型の著想であるが、これも伽婢子卷五の「幽靈評諸將ニ」と餘程似通うた趣がある。雨月の吉備津の釜の後半は全く牡丹燈に據つて居る。序ながら雨月卷二の「夢應の鯉魚」は說海にある「魚服」の譯で、是は既に早く怪談全書や御前伽婢子に翻譯紹介された程である。妖怪ずきで狐狸が人を魅するといふ事を固く信じ中井履軒にそんな事があるものか、皆心の迷だと、一言の下に排斥されて、執念深く履軒を怨み、何かといふと、懷（フトコロ）儒者の、世間知らずのと罵つた秋成其

人には、剪燈新話や伽婢子などは定めて日常愛讀の書であつたらう。金鳳釵記の一篇は怪談全書にも翻譯されて居る、此書は說海、說淵、太平廣記、異聞錄、搜神記などから怪異談を選り出して、片假名交りに和譯したもので、編者の羅山子は有名な林羅山であるか否やは疑はしい。

最後に注意すべきは、剪燈新話の紹介は、從來世にいふ如く伽婢子が先登第一の名を擅にする權利がない事である。それは著者が見聞した諸國の怪談因果話の類を集めた奇異雜談集と云ふ六冊物がある、出版の年月は不明であるが、書中の記事によると、著者は文明年中江州三雲の庄妙感寺に居た六角氏に仕へた中村豐前守といふ武士の子で、若年にして僧となり、丹後の府中に住み、其後諸國を遍歷したものゝ如く、其見聞談の年代は明應より天文十年に及んで居る。されば天文年間に出來たものと推定して差閊がないやうだ、怪談集因果物語としては最も古いものである。

貞享二年の西鶴諸國咄、同三年の婦人養草(金澤藩士村上武右衞門著)にこ

の奇異雜談集に據つた材料があるが、それらの事はさし置いて、此書の五六の卷に剪燈新話の譯が出て居る。

「新渡に剪燈新話といふ書あり、奇異なる物語をあつめたる書なり、今二三ケ條を取つてこゝにのするなり、剪燈とは蠟燭の心をきるなり、夜ふくるまでかたるといふこゝろなり、新話とは舊剪燈夜話といふ書あり、事ふりたるゆへに、あたらしき事どもをかたるゆへに新話といふなり、今唐のことばをやはらげ日本の詞になして記するなり」と序文を置いて、「姉の魂魄妹の體をかり夫に契りし事」「女人死後男を棺の内へ引込ころす事」「弓馬の德によつて申陽洞に行、三女をつれ歸り妻として榮花を致せし事」の題下に、金鳳釵記、牡丹燈記、申陽洞記、以上三篇の譯を物して居る。文章は記實に重きをおいた質朴な風體で、伽婢子の流麗とは、固より同日の談ではないが、新話翻譯の先鞭をつけたものとして顯揚すべきである。

之を要するに同じく支那文學を材料として借用した江戸時代の小說も、

文化文政期のものは俗文で書いた純粹の小説に基づき、元祿期のものは古文で綴つた雜史隨筆類に據つたといふが、兩者の著しい特徴である。

松永貞德の父祖について

德川初期の歌人俳家として有名なる貞德の名は普く世人の知る所であるが、一時は飛ぶ鳥をもおとす勢のあつた貞門の俳諧も、蕉風の勃興に及んで古風の名の下に輕蔑し去られて顧みる者なきに至つたため、通俗文藝宣傳の開祖たる此翁の事蹟も熱心なる研究者を得ずして今日に至つたのは氣の毒な次第である。今まづ其父祖について小研究を試みる事とする。

貞德の父祖について多數の書は、久秀の孫といふに一致して居る。その基く所は貞德の子である尺五堂恭儉先生行狀（尺五先生全集にあり）にあるらしい。今其行狀中必要なる部分を摘むと、同年（天正四年）九月二十七日、信長公命

長男信忠帥數萬騎攻信貴城、使佐久間信盛先登拔此城、久秀公入天守、欲使二男宗通宗勝出城、二男相倶請同死、………而久秀放火於天守、父子三人同自殺死矣、永種居士者久秀公季子而于時三歳也、久秀公之姨矜其孤弱、命乳母襁負之、竊出城、躬親撫養、而後隱惠日山東福寺、爲薙染之身隱浮圖、祖母歸心於蓮宗、陰招致之、去東福禪院、寓泉州堺之法華寺、後遷洛之本國寺、偶讀孟子、及不孝者無後爲大之語流涕、忽然而脫緇服代素衣、永欲保子孫、是先生之祖父也、昔在惠日山聞法華經楞嚴經維摩經圓覺碧巖禪錄及四書六經之講解、而儒釋兼學也、能書以入木道鳴世、依之都鄙學書書生、以金銀米錢代筆跡而學之、勝師者多矣、中葉在連歌之宗匠宗養門下、學歌藝詠和歌爲連歌、以風雅爲一生之遊樂、與紹巴同門也、在洛永種生貞德(下略)とある。永種が貞德の父たるは疑もなき事實なれ共、永種が志貴城から脫れ出た久秀の子であるといふ記事には疑を免れない。貞德の誕生は元龜二年で、志貴落城はそれより後るゝこと五年の天正四年である。此行狀の記事に據れ

ば子が父に先だちて生れた事になる。又貞徳の自傳ともいふべき戴恩記下卷五十三丁に天正元年に信長が兵を率ゐて將軍義昭を二條城に攻めた時、洛中混雜の有樣を述べて、

其亂に下京の殘りしは、年寄ども寄合、公方衆にかくし、信長公へ御禮申べきとあれば、尤然るべし、さらはなにをか奉るべきといふ處に、折節十四屋隆正が許に鶴あり、是目出度ものなれば、肴に定め御樽用意す、又軍の爲にもなるべしとて、俄に赤飯をむし、柴田修理亮殿を賴み、知恩院へ町を進上したりしかば、御機嫌よくおはして、路次すがらの土民百姓等に急ぎ罷上り、亂入せよと言付しかは、定而やがて來るべし、隨分はとられぬやうに防べし、猶是よりも下京は用捨せよと仰らるべきよし御諚ありしゆへ、上京公方を贔屓して亂入を妨手立仕りし事を、ふかくにくみ給ひ、關より東の數萬の物取ども、さしつかはされければ、或ははぎ取、土藏を打やぶり、或はうちころしふみころし、或は方々に放火せしほど

に、一家も殘らず燒のぼる、焔天にかゞやき煙のそこに泣おめくこゑ、叫喚大叫喚の地獄にことならず、下京は亂妨せざれども、財寶を邊土へのけ、或は東山、八幡、桂、嵯峨、愛宕などへ緣にしたがひて、足よはども落しつかはすとて、走りまどふ子をさかさまにおひぬる、丸が父母も子どもを引具し、北山の畑といふ所へ落けるが、路次の難艱中々いふにたらず、中にも迷惑せしは、ある山川の岩波たぎりて、かち渡りおもひもよらざるに、たゞほそきひとつばし有りけるを、おさなき子は右の手にてかゝへ、丸があねの六つばかりになりしを、左の手にてひき、よこさまにそろそろと渡られしを、こなたのきしより、それも子供を前うしろにいだき、見やりたれば、橋の半にて父が顏の色、下の水よりもあをくみえしと、後に母の物語有しを、いま思ひ出すに、父母の心のうち思ひやられてかなしくこそ侍れ。

とある。是で見ると永種は志貴落城前より下京に住居して、貞德の外に

長女まであつた事がわかる。 永種が幼少の時志貴城から脱出したもので無い事は是等で明かであるが、久秀の子であるか無いかが尙疑問として殘る。 誹諧家譜貞德の條に、父永種、(攝州高槻刺史入江九郎盛重之男五郎政重之長子、後改氏稱松永原註)母播州宇野氏女とある。 永種を久秀の子といふ明證のない以上は、此說の方が正しいのではあるまいか。 松永家の由緒書には政重の姉を久秀の後妻とし、貞德終焉記には永種を久秀の甥として居る。 誹諧京羽二重には「入江盛重の室は松永霜臺の伯母也、此腹に五郎政重を產めり」とあり、季吟菟藝泥赴第四上吟花廊には「播州高槻の城主入江五郎政次の孫松永永種の子也、母は冷泉の明融の息女ぞかし、政次打死の年永種四歲にて龜松丸といひしを、松永彈正一家の故に養子として、生長ののち本國寺の僧とせり、落墮して貞德をうめり」とある。

松永家と入江家との姻戚關係から永種が松永氏を名乘りしため、世間では久秀の遺子と言ひ囃したのではなからうか。 尺五先生行狀文の母堂

者駿州之太守入江氏、數傳至五代之祖攝州刺史盛重、盛重生政盛、政盛將死遺言、謂後嗣繼武業、則必當改松永以母黨入江爲氏、若不繼武業則以松永爲氏、是織田信長以爲暴勇奸强敵、忌誅於松永子族種類、變姓名改入江、其後信長公於洛本能寺、爲明智惟任遭弑、而後改入江爲松永とある。一體行狀の文は極めて拙陋で辭意明瞭ならざる點が多いが、兎に角松永氏を稱するに至つたのは、信長死去の後である事は然るべきであらう。家譜に貞德の母を播州宇野氏といふは藤原惺窩の一族でもあらうか、行狀に「永種者藤體胖惺窩先生之姪聟」とある。姪聟をメヒムコの意とすれば是も疑はしい、貞德の生れた年に惺窩は十一歲であるから、姪なる人の年齡が相應せぬやうである。貞德永代記に「冷泉妙壽院の妹聟」とあるは愈〻疑はしい。戴恩記には「丸が父は冷泉爲純公とは從昆弟なれば、定家卿を其鬼にあらずとも思ひ難し」と見えて居る、爲純は惺窩の父である。又行狀には貞德の妻を爲純の女とし、誹諧京羽二重には永種の母を下冷泉爲氏(?)の

女としてある。此の如く諸說區々であるが、冷泉家と姻親の間柄であつた事だけは慥かなやうである。永種は寶幢坊德庵と號す、その和歌連歌に名あつた事は所引の行狀の文に見ゆる通であるが、戴恩記にも「安休法師は亡父が門弟なり、連歌の古實を丸に少し傳られし人なり、丸が父は七歳にして、東福寺の喝食となり、二十日に法華經一部よみおぼえしほどの智惠なれば、文珠喝食と世に申せし人なるにより、多能なりき」とある。野史は貞德の傳記中に戴恩記を參照しながら、久秀の傳中には永種が志貴落城の際殉死したと書いてあるのは杜撰も亦甚しい。

元政壁書といふ文の事

世に深草の元政上人壁書といひ傳ふるものあり、その文は左の如し。

不幸にして世をそむける墨の衣にはあらで、髮ゆふがむつかしさに頭を剃り、柴の軒竹の柱身に。(をカ)輕う此に留おく心から、世の人を見るに

只身を思ふ業のみに足を空にし、吉野山のはなのあはれもしらず、深草の鶉の聲を聞ては燒てしてやりたいと計おもひ、後は何になる事ぞや、斯く靜ならぬ身は只人間のみにあらず、山を出る雲は雨を催さんが爲に鬧し、山の鹿は妻乞世話に聲の限り鳴く、是を思ふに此身程樂に隙な事はなし、惠心の作の佛一體持たれど、後世願ふ爲にはあらず、持傳へたる道具なれば御宿申計也、膝を入るの二枚敷、土鍋ひとつに埒あき、正月とも思はず、雜煮くはぬ身には聞かれまいとも言はぬ鶯の初音心よく聞、夜着蒲團持たぬ家には見られまいともいはぬ依怙ひいきのない窓の月をながめ、嵐吹く夜のさよしぐれ、降らうが降るまいが我身ひとりの苦にもならず、春の色(笆カ)のこぼれ種の夕顏、曲らうが筋かうが、あんな物ぢやと思ひ、睡る筈の目なればねぶたければ晝もかきこもり、歩く筈の足なれば、手の奴足の乘物、欲する所にあるけども、盜せぬ身なれば人も咎めず、極樂へ行て樂しみたいと思ふ慾なければ、地獄へ墜る恐れ

もなし、死するまで生ふと思へば、年の寄るをもへちまとも思はず、年をかぞへた事なければ、いくつになるやらしらず、覺えた事なければ忘れた事なし

あららくや人が人ともおもはねば人を人とも思はざりけり

松立てずしめかざりせず餅搗かずかゝる家にも春は來にけり

右は國學者傳記集成僧元政の條に、笈埃隨筆八を引用せしものに據る。京都帝國大學圖書館所藏の笈埃隨筆には此一章なし、また坊間往々元政自筆と稱するこの壁書を見ることあり、その文互に多少の異同出入あれども、まづ同一物と見做すべきものなり。

さてこの文の滑稽洒落なる、到底謹厚篤信なる上人の筆とは認容さるべくもあらず、されば前輩も既に種々の人物を拉し來りて其作者に擬せり。伴蒿蹊は續近世畸人傳巻三霞谷山人の傳後に附記して曰く、「世に元政壁書といふものあり、假名にざれごとのやうに書て、老莊のかたつかたを心

得しと思はるゝものなり、元政上人において沒交渉、假寢の夢にも上人を知らぬものゝいひふらしたるなるべし、其中に髮結ふがむつかしさに髮おろしたりといふことあり、又惠心の作のあみだ一體もちたれども、後世をねがふためにあらず、おやご申計也とあり、上人は出家以來持律戒愼の人なり、又日蓮宗なり、趣一向にたがへることは、眼識なき人といへどもしるべし、又ふかくさの鶉の聲を聞て、燒てしてやりたしとおもふ意もなしといへるはいかにぞ、鶉狩などいひて、殺生のために出る人は各別にて、およその人、鳥けだものゝ形聲を見聞て、食欲の念起るといふことは稀なるべし、深草のうづらといふより、やがて燒とりに意のつくは、あさましともあまりあり、是はもし生々の物識がほなる俳諧師などの、此里に住て書たる事やあらん、もし佐川田昌俊の作にやと花顚は疑ひしかども、是もあたらず、或は霞谷山人こゝに住て、風顚の趣頗似たりといふべけれど、戒定慧の說をみれば大きに非也、畢竟しられぬ事ながら、霞谷の名に付てこゝに

評して上人のために寃を淸むといへり。霞谷山人は深草の霞谷に棲みし隱者にて、「常の言に、法界は吾心也、心は吾法界なり、法界と心と初より二つなし、戒は吾宅也、定は吾衣なり、慧は吾食なり、これを法界に遊ぶといふと」同書に見えて、末に元政の讚を掲げたれば、同時代の人と思はる。

大田南畝はその一話一言八二十に、吳竹かな文と題して、

伏見に侍りし吳竹一生の境界

吳竹の伏見の里に世話（捨カ）人のありしが、哀我身ほど隙なる者はあらじ、惠心の無量佛一體、是あながちに念佛の爲にもあらず、持つたへし道具なれば御宿申迄也、上品蓮臺に生じて樂みたいと思ふ欲がなければ、地獄に落るくるしみもなし、死迄は生るであらう（と脫カ）思へば春秋の暮るゝ日をも壹錢とも思はず、寢る爲の日（目カ）なれば晝は（もカ）枕し、ありく爲の足なれば夜ひとへ（よカ）たゝきあるけども、盜ぬから人に咎められず、まがきの朝顏がゆがまうとすじこふと勝手次第也、あんな物と思

へば朝日にしぼめるも驚かず、薄のひらしやらするも其通にて、小夜時雨降らうとふるまいと、われひとりの苦みにもならず、雜煮くはぬ者にきかせまいと、鶯啼次第也、錢もたず人に交らぬ故、えこひいきなし、差入る月に膝を入る二疊敷にすんで、食櫃もたず、萬を土釜一つにて埒明け、覺た事なければ忘れた事もなし、年も數へざれば四十やら五十やら

老が身も定めて人のうみつらん父母計り見へたあめつち

「覃云、世に所傳深草元政壁書といふもの此文をあやまり傳へたる歟」と無造作に評し去りて、その出所も呉竹なる者の何人なるかをも言はず、思ふに誰かの隨筆雜錄類の中よりふと見出せるまゝ抄錄せしにもあらんか。南畝蒿蹊また笈埃隨筆の著者塘雨等の天明寛政頃は專ら此文を元政壁書と世に言ひ觸らしゝものと見ゆ、元祿寶永の頃には未ださる傳說はなかりしものゝ如し。然るに饗庭篁村氏は月尋堂の作今樣二十四孝の中より此文を發見して雜誌國民之友に掲げ、(後同氏の文集雀躍に收む)此著

者の筆は決して他人の文を取りて我作の中に混ずる如き卑劣なるものにあらず、一篇全體の文に混融して剽窃の痕なし、斷じて此璧書と稱するものは月尋堂の作なりとすべしとはいはれたりき。月尋堂はその傳記詳かならず、北京散人の別號あり、京都の俳人にて寶永五六年の頃五六種の小說を出せり、二十四孝は寶永六年六月の刊行にて、その文は卷六「名はいはじ親は長劍」の條の發端にいづ。

山城國伏見の里に秋山といへる人の、昔は備後の福山に仕へし身なりしが、世をやかましい物に思ひとり、不幸にそむるすみの袂にはあらで、髮結ふがむつかしさに頭を剃り、竹のたるきかやがのき、かゝるふ身を爰に取をき淨世をのぞけば、ひがしににしに行て歸る人みな善惡の辻を股にかけて、惡性に銀ほしいと欲面ひつぱる眼には、木幡の花の哀もしらず、深草のうづらもやいてしてやりたいと、耳からも鼻からも算盤はぢきて、めつたやたらにもうけたがるは、後に何うする事ぞや、其しづか

ならぬ事は、人倫のみにもあらず、おのへを出る雲は雨を催さんとていそがしう走る氣色、おかべの牡鹿は妻をこふ思ひを、聲のかぎりにはこびつくす、かへり見れば此身程ひまな者はあらず、惠心の作の無量佛一體、是必ず念佛の爲にあらず、先祖より持ち傳へし道具なれば、是非なく御宿申ばかりなり、未來上ぼん上しやうの蓮臺に座して、樂しみたいと思ふ欲なければ、地獄に落る筈もなし、死ぬる迄生てゐるであらうと思へば春秋のくるゝをも二文とも存せず、籬にこぼれ種の朝顔、ゆがまうがすぢろうが勝手次第なり、あんな物と思へば、日蔭にしぼむをけしからず驚かず、薄もほに出てびらりしやらりめさるゝは、いらぬ御世話の小夜時雨、降ろとふるまいと我一人の苦にももたず、寢る筈の目なれば晝も蚊帳にまくらし、歩くための足なれば、夜一夜あるけど、盜みせぬからは人に不審もうたれず、膝いるゝ二枚じきに糂粏瓶もめしつぎももたず、萬事を一の土釜に埒をあけて、雜煮喰はぬ者にはきかれまいとも

いはぬ鶯を樂み、夜着持たぬ家とてゐこひいきせずに窓もる月に打向ひ、覺へた事なければ忘れた事なし、年も數へた事なければ、三十やら四十やらしらず、かゝる道人末の世にはたぐひも非ず(下略)

かくて此無量佛が證據となりて實母にめぐりあふ一篇の因縁話を成せり。篁村氏の激賞せる如く、二十四孝の文は前數者に勝りて文意も能く通ずれど、全篇混融して剽窃の痕なしとは稍〻斷言し難きに似たり、これ必ずしも余が成心ありて迎へ見たる爲ならざることは、國書刊行會本についで原文を熟讀せられなば、何人も龍頭蛇尾の感なき能はざるべし。いでや月尋堂の二十四孝以前に既に此文世にありしを示さん、元祿十六年正月出版の好色敗毒散卷三「世をすて人」の一章を見よ、文章內容共に月尋堂にまさること數等、且これこそ前後相應して木に竹をつぎたるが如き痕なく、渾然たる一篇の才筆ならずや。

命(めい)あれば食あり、食して空居(たゞゐ)る者もなく、相應のたのしみもとめて、心を

やる事さま／＼なり、さりながら無性に銀ほしいといふ念さへなければ、苦をしらぬ故、別に樂みをこしらへねども、山川鳥獸みな心の友としなぐさむわざなり、爰に有無庵といふ隱逸あり、俗性いやしからず、壯年の時土州高知に仕官の身なりしが、世をやかましいものに思ひとり、不幸に染むる墨のたもとにあらで、髮ゆふがむつかしさに天窓をそり、和州當麻山のふもとに竹の椽に茅が軒端、惠心が作の無量壽佛一體、是もあながち念佛のためにもあらず、先祖より持つたへし道具だとおもふばかりに安置し、紙のふすまに茶瓶ひとつ、是より外には糂粏瓶さへなくて、膝をいるゝ計を、安じやすき庵と得心し、ねぶたければ晝もねる、目がさめたれば夜も寢ず、手の奴つかへば不奉公もせず、足の駕にはこあげをやとふ世波もなし、雜煮いはゝねど春くればこそ花も咲け、涼しさにあふぎとらねども夏は夏なり、外面の草の露けきは秋にやなるらん、笆に菊のこぼれだね、をのれとひらく色をよろこび、悠然として葛城山

をながめ、首をめぐらせば二上山の白雲無心にして岫をいづるも、我身にくらぶればいそがしそうにおもはれ、人音せねば晝さへ虫のこゝらなく草のむら〳〵、花薄の何をもひ入てまねくらん、いらぬ御世波の小夜時雨、ふろとふるまいとかまはぬ事也、歌よまねば詩もつくらず、おぼえたる事なければ、わすれる事もなし、未來は上品蓮臺に座して、樂をしたいとおもふ欲もなければ、地ごくにおつるはづもなし、しぬるまでは生て居るであらうとおもふばかりなりしが、ある時在世の人倫戀にしのぶの色里一見せばやとおもふ一念おこりければ、誰にへつらいもなく、十寸穂のすゝき後といはずに、難波の新町に夜見せの灯あぐるほどに行着、心まかせに見めぐりしが、俗のとき目かけたる川口屋が門に立とまりて様子を見るに、むかしにかはる繁昌、揚屋はいづれもかくぞあるべくひとりごちて感ずる所に、かぎりの太皷きこゆれど、かへるべき庵もとをし、今宵は爰にあかさばやと、端の住吉屋が軒の下に袖をかた

しきまどろみけるが、寅の刻ばかりにやあるらん、枕もとに人おとあまたしければ、首もたげて見るに、白髮の翁水ごろもに花色の尉斗目舞扇もちて、いかさま中入まへの大夫出立、金春八郎がたち姿にもおさおさおとるまじく見ゆ、此の外はみな人間のかたちにあらぬもの一めんになみゐて、翁が下知をうくるけしき、不思議といふもおろかなり、されども有無庵物におどろかぬ性念なれば、かの翁に向ひて、そも此ありさまは何と申す事にや侍るらん、まづ御身は何人ぞとたづねしに、翁完爾と打ゑみて、御坊の不審尤なり、それ物おほく集る所には其氣かたちをむすびて精靈あり、今茲にあらはれたるもの、此廓にてとりあつかふものの精なり、御身寄代の悟道人なれば結緣のために一々かたりきかせ申すべし、まづかく申それがしは、いにしへ秦の始皇の御代より千とせをへたる松の精なり、そのゆへは此里にて高位のよねを大夫といひ松といふことのはのちりもつもりて、かやうに形をあらはすぞや、又あれな

る大入道の目も鼻もなく、只眞白に雲のやうなるは、此里にてつかひすつる延紙の精也、又禿の口ばかりありてその色眞赤なるは、紅猪口の精、またそのかたち盥のごとくにて手ばかりうごき、そのくろさ烏のごとくなるは鉄漿の精、また裾のちぎれたる花色のときわけ着けたるは揉茎の精、またその色何とも見わけがたく、そのかたちぬらりひよんとして、たとへば鯰の目口もないやうなもの、あれこそ迂詐の精なれ、其外酒の精、吸物の精、伽羅の精、やきもの丶精、平膏の精、櫛の精、下紐の精、茶漬の精、おかしきかたちのかぎりなり、又はるかあなたに丁銀十貫目入の箱二百ばかり、中勘にも二千貫目とはたしかに見ゆるは、此里の繁昌につき分限者の精かとたづぬれば、翁のいはく、いや／＼それは丁箇ちがひ、あれは總女郎たちの借錢の精なりとをしへぬ。

廓名物の精靈を見ること、かゝる洒落の道心者にふさはしく、どこまでも浮世を茶かしたる筆勢、殆ど西鶴の壘を摩すといひつべし、六年以前にか

くの如き名文世に現れある以上、月尋堂は到底剽竊の汚名を免れがたかるべし。人或はいはん、此文の彼に先だち且彼よりも妙なることは異論なし、但これも亦何等か據る所あるにあらざるか、曰くさる事も絶無とは斷じがたし、されど余の鑑識を以てすれば所謂壁書なるものは寛文の以前のものに非ずして、西鶴一派の俳諧的新文體の勃興以後の作と認めらるれば、敗毒散の著者を以てその原作者となさんこと不可なきに近し、それが世に愛誦せられ一篇獨立の文となさんが爲に、好事の徒によつて屢ゝ添削改竄せられ、漸次拙劣蕪雜に陷りたるなるべし。

むもれ木

例言

茲に一冊の古寫本あり。その著者は固より、書名すら知られず。兼好がつれ〲草の風に倣ひたる隨筆なれど、文章は口語體書簡體など打

交へて强ひて古代めかさず、いと安らかに自由なり。卷末に「慶長四年初秋の比、あともも名のみばかりや志賀のから崎にて」とあれば、この種類のものゝ中にては、最も古きものにして、つれ〴〵草の系統をひきたる可笑記（寛永十九年板）悔草（正保四年板）犬つれ〴〵（承應二年板）誰が身の上（明曆三年板）等の先驅たるは勿論、從來古物語古草紙に擬せしものゝ魁と見做されし彼の枕草紙を學びたる小瀨甫庵の童蒙先習（慶長十七年作）無名氏の尤草紙（寛永九年板）よりも早し。而してその內容も後の可笑記悔草などの如く、ひたすら堅苦しき敎訓づくめならで、趣味ひろく、女若二道、宴飲、俚謠、園藝、武道等に涉りて、しかも後のものゝ如く、一々儒敎の道義觀に牽强するが如き風なく、洒脫樂易なる所を出色なりとす。

作者は何人なりとも知る由なけれど、もと歷々の武士なりしが、晚年世を遁れて都近き志賀の唐崎に隱居して、手づから花を折りて、佛に仕ふ

といふにもあらず、はた菽の羹に飢を凌ぐといふにもあらず、優游世外に閑臥せし頭ばかりの入道なるべし。書中馬武具などのたしなみを述べたる文章の多きのみならず、おのが使ひし小性の傍輩を殺害して逐電せし由を記せるなど、以てその前身を察すべく、老後の境遇もさまで不自由ならざりしは、此書全體の調子によく現れたれば、讀者みづから察すべし。

この時代に文武に通じ諸藝に渉りたる人は誰ぞと求むるに、まづは細川幽齋といふに何人も異辭なかるべく

すこしなりとも心得ずして叶はぬ事は、ものかく事、歌道、兵法、しつけかた、薬の心、金物のめきゝ、諸の中に覺てあしきといふ事はなけれども、ひと色さへ調はぬ人のみあれば、こま〳〵とかきつくすにをよばず、さはあれどもさぶらひたらん人のものゝかず、歌道などおもしろきともおもはぬは、あまり又にが〳〵し。

といへる一節など、多藝を以て人も許し、我も任じたる幽齋の語と見んもふさはしく、且此人には古今集の序に倣ひし古今若衆といふ戲作さへありと傳へらるれば、幽齋を以て此書の作者に擬せんこと旁々似つかはしからぬにあらねど、此書の文章は幽齋よりも輕妙にして雋味あり、且關原役の前年幽齋が江州に滯留せしことを聞かねば、まづは上述の如く世を遁れたる無名氏の作とは推定せり。されどかくいふも吾人寡聞の罪にして、既に書名も作者も明かなる遼豕なるやも知らず。偏に江湖博雅の垂教を待つ。

今この書を世に出すに方り、卷首にいだせる古歌の語を摘みて、假にもれ木と名づけ、一般世人の讀み易からんがために多く漢字を塡て、發音に變化を來たさゞる限り、假名遣をも一定したり。

明治四十四年八月二日

思ふ事いはで只にややみぬべき
我とひとしき人しなければ
何事もいはての山に年を經て
朽ちや果てなむ谷のむもれ木
口にいはぬさへあるものを、しるし置く筆に向へばますす鏡、手にとりて見ぬいしにへもなし、と心よき折々に筆を染め、心に寫るよしあしを、そこはかとなくこそ。
庭に木をうゆるも爰に一本、かしこに一本、ところ〴〵なるはあしゝ、その故は所せばくなりて惡しきこと多し。木のある方には大木小木暗くなるほど植ゑ、木のもとへ木の葉深くかきよせ、木のなき方は改めて掃ききりてあるべし。牡丹芍藥草花のたぐひ、間遠なるがよし。しげゝれば輪小く咲きてゆたかならず。常に修理してよし。東南の庭にありたし。
春は花夏は郭公冬薄雪に人は心、といふ小唄が面白く候、ちごも法師も荒

男も心にて候、かたち荒々しく鬼のやうなる男も心が細ければ、みめさまもいらず候。岸のはたの椿の枝も葉もねぢ曲りたれども、花の頃は池につゆ〳〵と花が咲きて出れば、人にもてはやさるゝぞかし。

世をすてゝ山に入る人山にても
なほ憂き時はいづち行くらむ

といふ古歌、此心は聞き所にて候、人間のたぐひにもいらで、このまゝ一期を暮らし候ならば、なか〳〵頭おろし深き山の奥に入り、鹿猿を友として死ぬるを待つたがましかとやゝもすれば思ふが、此歌の如く山にても亦何とか憂き事があらば、またとて故郷へ帰るなるも見苦しからんなど思へば、ひたぶるに山にも入られず、とやせんかくやあらまし、と汲んだりし酒をばほしかねたるばかりなり。

梅の花冬咲きたるは、春の萬花より猶一入にて候。

百千鳥囀る春の花よりも

冬咲く梅の鶴の一聲

內々如中今宵かの所へ御出可然候、ともには小性一人の體にて能く候、其一人の者にも口まめ粗忽なるは御無用にて候、浮名の立たぬやうにと存ずる事にて候。

逢ふにかへば命をだにも棄つべきに
よしや仇名の立つは物かは

とは申し候へども、命をすて候程ならば、猶々浮名を立てゝ入らず候。

和州にて神事の能ある時、ゆやのありしに、脇をする人よく出立ち、聲もよかりしが、つる〳〵と出、名のりに、そも〳〵これは平の宗盛なりといふべきを、平を打忘れて、宗盛なりとばかり言ひければ、芝居の中に耳早きをのこありて、やがて聞きつけて、それがしの宗盛ぞといひたり。いとをかしかり。

冬をよきといふ人あり。よき座敷に屛風などまはし、圍爐裡に火よい頃

に置いて空炷などし、床に花を活けて、よき若衆もひとり二人あるに、人のいふ事よろづにつけて能く挨拶し、物さら〳〵と氣合ひなる人一二人あり、炬燵へ足さし入れ、炬燵の中にて若衆の御足などいろひ、思ふ事語り慰むうちに、勝手より振舞をもてくる。よい程に物くひ、膳は元の所におき、皆々炬燵へ打寄り、赤塗繪をかける薄盃にては、たぶ〳〵とうけて飲めば、はやほき〳〵と酔出る折節、奇麗なる座頭茶をたてゝ來る、とりて飲めば、一方にては酒をのむもあり、又とこを枕として、うちころぶやからもあり、南の障子ひとまあけ、松に雪のかゝりぬるを見る人もあり、又は俳諧の發句をして附けよといふ方もあり。かく色々に遊びてこそ冬は面白からめ。ともに行きたるさぶらひ小者は、北向にたつる腰掛の風も吹きすくに、腰かけてゐれば、頬さき鼻など寒くて赤きが嵩じて、後には黒くなりて、すねなどは氷の如くに冷えて、手足も覺えなく顔をふところへさし入れ、ねぶらんとすれどもねも入りもやらず、夜話のとものの時は、すうずうとい

ひ、鳥の聲を數へてゐるより外の事はなし。家をもちてありとても、わび人などは朝夕さへ過ぎぬれば、火のあとなくつぐみて、臑をば股にて温め、手は息を吹きかけなどし、かゝる體にて何とて冬の面白からん。古歌に

朝ごとの木の葉を賴むわび人の
薪はよるの嵐なりけり

人を召使ふべき事、匠の木を使ふ如くなるべし。たとへば車をつくらんに長き木をば轅とし、曲りたる木をば輪とするやうに、その人々の分限を見て餘さず使ふ、名君とはいふなり。

あかしなれどもやよるくらや、さこそくらさのくらかるろ、竹のすかと切節の溜り水、澄まず濁らず出ず入らずの君さま。

よべまで中よくしみ〳〵と語りたりとも、今朝むかひの氣に合はぬ事があらば、そのまゝあしからん、お心得やれ。

遊山に御出候はん山心得申候、しかればこれより一ごにごろめき出候は

あしく候はん間、供の者や馬などは皆さきへ御遣り候て、かの樣とそもじ樣とは乘物にて、六尺に足早に御かゝせ御出行き候て、われ〳〵は住吉にまづ行きてあれにて待ち申さんと、いふ波のみぎはなる蜑の小舟に打乘りて、沖の方に出にけりや、沖の方に出にけらし。

氣合よき折節、南向きの書院によき硯筆墨添へ、品よき料紙に物かき遊びぬる、よきものなり。

抑も頃はいつぞの事なるらん、文治五年卯月二十日いまだ巳の刻ばかりなるに、物の具の金物はをりから色や勝るらん、ひらいた扇はくれなゐにして。

何としたるも(してもノ意カ)死ぬるといふ事を知りたるものが無いと見えた、勿論強くわづらひ、又年ふけて死ぬる知らぬ人はなし、それは知りたるにてはなし、大唐天竺の事は見ぬ程に知らず、我朝において足をはかりに尋ねたりとも、百歲まで生きたる人稀なるべし、たとひ百まで人每に生

くるにせよ、それとても二十五六までは物のあぢをも知らず、むさ〳〵とうち過ぐるに、又五十を過ぎては、目はかすみ耳遠く齒はぬけ物をもくひえず、次第〳〵に腰屈みあるきもなり難し。かくては生きたるしるしあるべからず、百年ながら達者にて過ぐるとも夢の間ならんに、ことさら百年の中、あとを二十五六年、さき四十年とつてのくれば、わづか二十年餘りの世の中なり、そのうちも今年はこぞを忘れ、けふは昨日を思ひ出さで、さきの事ばかりをこちを初めとして思ふなり。さありては死ぬる時の心には、只一日ばかり生きて死ぬるやうにあるべし。これを忘れていらぬ事に氣を惱まし身を使ひ、人によく言はれんとする事更に益なし、但しかくいふとて物毎にうちやぶりにせんにはあらず、せで叶はぬ事、あたりたる職などは、人のいはぬさきに能く勤め、其外のいらぬ事までを苦にする人がある程にいふ事なり。又かくいふも益なし、何というても我身の分別にのらねば皆々柳は柳、花は花にて、一期くらすなり、我はかく思ふによ

りて、けふの雨のつれ〴〵に書きつくる。

ところ〴〵おまゐりやつて、疾う下向めされよ、とがをばいちやが負ひまらしよ。

年久しくして人の心を知り、道遠くして馬の力を知るといふ文あり、此事萬事につたはるべき事なり、六尺の小唄が大できぢや。その小唄に曰く、何もならぬ〳〵、金がなければ何もならぬ、かく歌ふよしを聞き申候、いでかし候。若衆狂ひなどは氣味合を本とするなれば、さのみ金にはよるまじき道なれども、ひとしほと見えたり、今の世の中總別かくの如し。

宵の事を人が聞きて、もはや今日御城にてその沙汰御入候つる由承候、さて〳〵耳は壁につくと申候が、よべば壁のほとりにもあらず、あれ程の廣き座敷のまん中にて、しかも耳に口をさしあてゝ申候に聞え候何ともかともせう事がない事ぢや、よろづ〳〵御用心火の用心。

よき屋敷といふは東向きなるが、北と西に山を負ひ、ひがし南に人のえ越

さぬ堀あり、みなみ北の土居には冬木ども茂り、東より南へ少しかけて花咲く木間遠にあり、庭に池ありて、ほとりの大きなる松に藤かゝり、折節花の咲きたるが、池水に花の影うつりぬる、その池を水鳥そろ〳〵あるくなどは何とかあらん。

筆をとれば物かゝん事を思ひ、朱にまじはれば赤くなる、いはんや人と人とのつきあひ、心によりて花も見なんや。

ながむれば心もそれになりぞ行く

枯野のすゝき有明の月

さても〳〵いつぞや淺草の道にて露ばかり御物語申候、その時御ことわり申しつる如く、をりふし御見舞をも申さぬ事、無沙汰などと仰せまじく候、今程こなた式のやうなるふりたる者の遜りまはる事、一切のらぬと見え申候間、心とまかり過ぎ候、少しも〳〵心中疎略ならず候。

世の中にふりたるものは津の國の

長柄の橋とわれとなりけり

よき草子を雨の日など只ひとりゐてそろ〳〵見るに、あはれなる所を讀む時などは、さて〳〵只其人に向ふやうに心がありて、內方(うちかた)のもとぞくぞくとして、雨やらん涙やらんとゞめられず流るゝは、たれもかくあるか。草子を見、舞などを聞くに、聞手、見手、三通りあり、たとへば舞などに武藏房辨慶その日のいくさに、大長刀の鞘はづし、腕の力は覺えたり、長刀の金はよし、莖長(くきなが)におつとりのべ、西から東、北から南、蜘蛛手かくなわ十文字八花形といふものに、五十八人切倒し、大勢に手をおほせ、東西へばつとおつ散らし、長刀肩にうちかけ、ゆらり〳〵とのいたりけりといふ所を、いかにも底からまことにして、只今のやうに怖ぢおのゝく心する人、下の聞手なり。又いかに辨慶大剛の者なればとて、ひとりして一日の中に五十八人、切らん事思ひもよらず、舞は皆いつはりなどいふ人、これ中の聞手なり。 上の聞手は面白くあはれなる所をば、こゝは僞なり、只けふの慰みに聞くぞと

心得、又まことのうそ、うそのまこと、うそのうそ、なくかく(なにかくカ)色々あるべし、その味ひをあたまをかたぶけ、よく分別し聞く人、これ上々の聞手なり。かやうに三通りあると人の仰せられし、げにもと思ひ、けふ書きつけ侍るめり。

酒宴の時は大勢うち寄り、手拍子打ちおの〳〵大聲あげて歌ひ舞ひ、肴をむさ〳〵とくひ、酒あぶり〳〵と飲むと見えたり。かゝる時は我はあしきとて片隅へよりてゐたらんも惡しかるべし、又酒を飲む事ぞとて、右の如くむさ〳〵と飲みて醉ひたらんは、鮒のごみに醉ひたるに異ならず。かくいふを酒に醉ふなといふにはあらず、たとへかしましく歌ひ舞ひ飲むとも、それにばかり心を打傾けず、ちやく〳〵と心をへその所へやり、人の氣色を見、又は使はるゝ者など長客人にくたびれ、さこそむつかしかるらん、又はこちの酒をのむ風情などを、心恥しき人などのありてさげずむらん、又供のものどもも、今朝宿をいでたるまゝにて、ひだるくさむくた

びれて、門(かど)の腰掛につぐみて、こちの歌ひ舞ふ聲ばかりを聞きてこそゐるらん(本のマヽ)又かく酒をも飲み慰まん事、いつまでの命にてかあるらんなざヽ、色々に心を潛め、浮世の事なざ思ひ合せて飲みたらんこそ、酒のみたるにてはあれさて又かやうに云ふ事を合點(がてん)のすまぬ人は、さ思ひては酒も飲まれてこそ、酒は何事も打忘れ慰まんためなり、やくたいもない事をいふなざヽ必ずいふべし、こちの心は露もさにはあらず、月の夜雪の朝(あした)花のもとなざにて、友はひとりもなくとも、月花心を友とも肴ともなして、とりわけ心專らとなさば、酒のあぢはひ一入よく、さて過さんに及ぶべし。(べしやノ意カ)

心々に花をこそ見れと云ふに　　宗祇
山里の柴のいほりにひとりゐて

と附けられたるもこヽなるべし。さて又醉ひたらば手水うがひして、そのまヽ寢屋に行き、空炷してうちあをむきひさり寢たる、これこそ酒に醉

ひてましたるとはいはめ。
忍ぶ細路に、ふくべな、植ゑてな、おいてな給りそ、いさゝだに心のひよんひよんとして、心ひよくめくに。

　　ひとり寢て思ひこそやれ池水に

　　　　つがはぬ鴛鴦のおもふ心を

急度飛脚を以て申入候、其表いよ／＼かたく被仰付之段最盛存候、尙以御由斷被成まじき旨不申及候、當地別條なく候、猶近々可申承候、恐惶謹言

　　九月二十三日　　　　　　　　　　（花押）

少しなりとも心得ずして叶はぬ事は、物書く事、歌道、兵法、躾方、藥の心、金物の目利、諸の中に覺えてあしきといふ事はなけれども、ひとつさへ調はぬ人のみあれば、こま／＼と書きつくすに及ばず、さはあれどもさぶらひたらん人の物の數、歌道などおもしろきとも思はぬは、あまり又にが／＼しっさつと書く一筆のふみにても、人の心は大方知るべかりけれ、但しそれも

只一重に心得て、相聞たる文言ばかりを分別しては相違たるべし、よくよく靜かに思はずしては味ひ知るべからず、只々何事もその心得を知る人なし〳〵。

君をのみおもひ寢にせし夢なれば
わが心より見つるなりけり

といふは、げにもにて候、よき夢を見たるなどとて嬉しがるべき事にてもあらじ、されども心ならず不思議な夢は物の告にもなるべきや、知れぬ事のみなり。

人の方へ見舞はんには、よるか雨の日か、冬は殊に寒き時など、とものものなども多からずして行かんこそ、誠の志にもなるべけれ。遊山見物のかへさ、又は我もさびしき折ふしなど行きぬる、さら〳〵見舞にあるまじけれ、しかはあれども隣にても語るまじき人とは出會はぬものなれば、心ざしにもならん。

らくをもめされさ、大佛殿もさ、燒けたとさといふ小唄おもしろく候、何事も只らくにきはまり候、たとひ人の目口にかゝる事こそせまじけれ、心をゆふに成次第にしてあはらくやと思うたがましにて候、但し心をゆふに持つといふとも、生れつきて氣のび〳〵としたるは、ゆふに思ふにはなし、よろづに油斷なく世上をたしなむ人の事をいふなり、たとへば書物などをゆる〳〵と見て、氣のまう〳〵とする時は、端居して草花の青々としたるを見、露などを打たせ、心を涼しくし、あらせい〳〵としたるやと思ひ、うちあをむき大空をながめ、心を遊山と思ふなるべし、月見花見みな心にあるとなり。

とかく〳〵人と物語をするも、何もかも申すに及ばねども、生きてをるうち思ふ事をも言ひ、互に慰みぬるがましぢや、來世とやらんの事は片便りなればしかと知れぬ事なり、たとへ治定あるにもせよ、死しての事はおそし、ま近き今にきはまりたり。 死したる者をとぶらふ體を見るに、死人を

寺へ送りて行く時、見舞の人が十人あれば三日の灰よせには五人あり、七日には一人か二人なり、二七日などには何もなし。鏡といふは金にて鑄て顔をみる鏡ばかりかや、人の心をみ、世上の有様を見て、死しての後までを見る鏡にいろ〳〵あり。

山高み人もすさめず櫻花
いたくな詫びそ我みはやさん

さりとては頼もしき心ばへぢや。

かたな、脇差、その外金物の目利は本阿彌たけや、只の人にも目利する人多し、人の目利をする人なし、利發者ぢや、鈍な者ぢや、きびのよい人ぢや、きびあひのむさい者ぢやなどと、さつと一目見る事は誰も見るなり。

人のうへ鏡にかけてみる人の
我身になればなどく(も脱カ)るらん

さよめるやうに、さつと一目は見ぬ人もなし、さう見たは見たにてはなし、

心と目を澄まして色々に思案し、その品々を見分くるものなし、いづれも我心のやうになければ、善き人とは言はぬと見えた、大の無理なり。何と心なき卑下なる者もよき一言葉はいふなりと、つれ〴〵草にも書けり、柳は緑、花は紅と見る人なし、牡丹の花も見事、梨の花も見事、芍藥、櫻の花、桃の花、萩の花、武藏野の桔梗、苅萱、女郎花、見事はこれに限りたり、餘の花見られぬと云ふ事はなし、それ〴〵にいづれも花に一入はあり、其心々を味ひて見る人聞く人更になし。白玉の椿、薄色の椿、牡丹、芍藥、冬さく梅の花、てまりの櫻、梨の花、接木してみをとる事、ちやかさけか、(此邊誤脫アルベシ)これらをもて囃さぬ人ひとりもなし。されば人の心は大方一いろ黄(本ノマヽ)と見えたれば、物を分けて見聞く人稀にもなし。手跡これ又見知る人なし、よき手をもかゝりが氣に合はねば、惡しき手なり、見るもいやといふ、一切聞えぬ事なり。手はよくて讀めぬは、よき手のあしき手なり、惡しくてよく讀むる手は、あしき手のよき手なり、尊圓やう烏養やうに限らず、よ

き手といふは墨筆にも料紙にもかまはず、押付けて立ちながらそのまゝも書て、働き強く輕くよく讀むるが一段の手跡なり。

わけのぼる麓の路は多けれど
おなじ雲ゐの月をこそ見れ

末を人が知りそろはぬ。

心だに誠の道に叶ひなば
祈らずとても神やまもらん

などの末をば曉の夢にも知らいで、いやまう何ともかとも言はうやうも無いものは女めぢやぞ。

人のさせる刀、脇差をぬいて見るに、銹びて埃がちなるは其人の顔が見られてきびがわるい。

よそへはしゐにいた時、いざ謠は歌ふまいか、弓は射まいかなどとて、亭主の所望の時、腹中少しひもじなる時などは物が泌みいで、何ともなるまい

とは思へども、振舞を食ひたいとは所により時により言はれぬに、心も浮かぬ事などするは、何ともすまぬものぢや。

君子擇而後交、小人交而後擇といふ文あり、我ばかりかく有りたと思ひて、隨分功者がりつれば、昔もおれがやうなる者があつたと見えて、かゝる事を書きたり。

庭に木を植ゆる事、前にも書きつくるといへども、又思ひ出したり、草にても、木にても、只一色ばかり多く植ゑて益なし、色々とりませて植ゑたるがよく候、その故は第一四季によりて、花の咲く事なれば、さいさい珍しき花を見るなり。されば歌に

みわたせば柳櫻をこきませて
　都は春の錦なりけり

面白き歌や草紙、その外何にても見事聞事なるを、そとも聞分けぬ者あり、これは何としたる事やらん、熊野比丘尼や出家などのいへるやうは、人間

に生れてくるは、これ何と色々の苦惱をし、善をのみ行ひたるものが善き人と生るゝと語る、それを思へば深き事こそはかはるとも、人ならん人はおしなべてあらましの事は心得べき事なれども、一切合點のすまぬもの多分あり、さうでは無い、かうぢやよなふといへども、虛空なる方へ心をやりて、猶々合點せぬは、さて淺ましい事ではおりやらぬか。されども突き倒す神あれば引き起す神ありといふが、げにもさうあると見えた。沙汰の限きこえぬ男も知行をたんと取り、金をもちなどして結構に世を渡る也。これはすりきりて賢きよりは遙ましかと思ひ候、それにつき賢きすりきりより馬鹿な金持に知音が澤山なり。前に書きつくる如く、人の死したる時、見舞の人十人あれば、三日の灰よせには二三人になる、七日めには何もなし、まその如く今のやうに錢金を持つたうちは其分ぢやが、その人火事か盜人などに逢ひてすりきりたらば苦々しく際を立て人がこまい、そこを人はかねてより心得て、仕合よき時人が見舞ふとて、さのみ嬉しく

も思ふまい事ぢや、但しさうありとて物を投げ〳〵にせよにはあらず、其味ひを心に忘るなとなり。
油斷すまじきものは、馬具、雨道具、振舞の道具、著る物のたぐひ、さては家、刀、脇差、馬の事はいふまでもなし、刀脇差はせめて二日三日に一度あても拔いて見て、埃なくば銹びぬやうに拵をすゞしく潔きやうにしてさせ、馬は堅く肥し、爪に念を入れ、ひか〳〵と光る程のごひ、馬の氣合きゝみカ)ゆるやうに心もちすべし、馬ほど人の祕藏すべきものはなけれども、さはなきと見えたり。
謠をうたふ事、善き惡しきをば勿論なれども、謠といふものは聲を立てゝうたふ事ぞとて、節やらん何やらん伸べ縮めもなく、太く細くもなく、句も切らず虛空にうちあげて謠ふ人ばかりなり。その人の心には謠ぢやとこそ思ふらん、(木ノマヽ)謠といふものならば聲も立たず不器用なりとも、人の謠ふを聞合せ、無理にも節を謠はんと心得たい事ぢや、節を謠ふまい

ならば、謠の本をそろ〳〵讀みたるがましぢや、さてもさてもむざと謠ふなる第一合點のすまぬ事でもあり、其上そばにてかしましさ、心の内にてをかしさたまらねども、さうも言はれぬ事なれば、聞いてをるまでぢや。かくいふとて謠をよくうたへといふにはなし、それは謠ばかりに限らず下手な事をよくせよと思へばとて、何かならう、なせうといふではないが、其事につき其物につき品々の心持ある人尋ねてもおりやらぬ、あ只生木(なまき)に鉈ぢやまで。

若衆に惚るゝに、昨日まで近く寄りて物語などし、ねんごろだてし、俄にお憎みやるは、さて〳〵よく〳〵緣こそなかるらめ、憂い事ぢやと思へば、或人の曰く、惚れたといひて、若衆の俄にお憎みやる事一入忝し、その故はあれがおれに惚れたと思うて、苦にめさればこそお憎みあれ、惚れたとも惚れぬとも、何とも思ひやらずは、何程か憂からうぞと言はれて候、ざれことの金言也、さてさうではおりないか。

世を憂しと語らぬ人はなけれども
　身にくらべてぞ羨まれぬる
或人の曰く、人は只さしで口をきゝたるにきはまりたり、その故は深きよしの中などにゐれば、五位とも鷺ともわきまへぬが、ぎや〳〵と啼けば其聲について、やれあそこには鷺がゐるよと、其時氣がつくなり、しかれば歌に
聲なくばいかでそれとは知られまし
　雪ふりかゝるあし原の鷺
まその如く小身者すりきりなどは、こちから口をきかねば、名をさへ人が知らぬ程に、むざと口をきいて、あの人は異な人ぢやとなりとも言はれたがましか。ある歌に
常は只さし出ぬこそはよかりけれ
　いくさにだにもさきがけをせば

これは以前の心には相違なり。又こゝに

年ふり口病述懐きさくだて

引(印カ)籠したんゆたんふきこむ

當世いらぬ物といへる題にてよめる歌なり。しかれば前の心に大方相當と見えたり。

佛道に入らんには、よき長老などへ通ひて問はねばならぬ事ぞと、皆人が思うてゐ候、聞えぬ事なり。但し是程にない事をさへ、愚痴に合點をしすまさぬ者ばかりなれば、これはまだもにて候。そら恐しき言事なれども東岸居士も萬事は皆目前の境界なれば、柳は綠、花は紅、あら面白の春のけしきや〳〵とのたまひたり、そのうへ硫黄が島の舞などを聞くにも、風佛前に花を散らす、岸崩れて魚害す、その岸心なくして罪を得ず、されば五體は五つの假りもの、地水火風をかたどり、心は虚空の如くにて、形なければ色もなし、諸法は有無の二道にてありとも見え、又無しとあり、江口、放下、僧

阿國歌舞伎圖

京都帝國大學藏

この謠ども、いづれも聞事なり。放下僧に引かぬ弓放さぬ矢にて射る時は、中らぬしかもはづれざりけりと見えたり、さて〳〵人が知らぬはよ。

慶長四年初秋の比、あとも名のみばかりや志賀の唐崎にて。（終）

歌舞妓草子

京傳の骨董集に「於國歌舞妓古圖考」の一條ありて、そこに「慶長年中の繪於國哥舞妓圖（原本梅龍閣藏摸本著作堂藏）」と題して、二枚の圖と詞書の一部分とを摸寫して出せり。爾來女歌舞妓の事をいふもの、大抵此圖と尾張德川家の歌舞妓繪卷とに據らざることなきは、世人の熟知する所なり。然るにこの骨董集に引用せる原本も摸本も、今はいづくにゆきしか所在不明にして、余の寡聞なる其完本を見し人あるを知らず。頃日わが京都大學に購入せる一冊の古寫本あり、俗に奈良繪本と稱する體裁の横本にして全紙數十三丁、その過半は極彩色の古拙なる繪を以て、歌舞音樂の姿と貴賤見物の體と

を寫せり。圖は骨董集のそれと稍異なる所あれども、その詞書に至つては全く相一致するより觀れば、此冊子は京傳の見たると同じ書の別本なること疑を容れず、書體繪風また元和寛永を下らざるべく思はる。
出雲お國名古屋山左衛門(或は山三郎とも)の事は、諸說紛々して決定し難けれど、此冊子には山左衛門の亡魂現れいでゝ、お國と問答する體に作りたれば、山左衛門死去の後に成りしこと勿論なり、山左衛門は慶長九年作州津山にて同僚井戸宇右衛門と爭鬪して斬殺せられ、宇右衛門も亦其場に山左衛門の傍輩の爲に切害せられたりといふ說を信ずべしとせば、此書の成りして慶長九年以後ならざるべからず、恨之介草子(慶長中作)に「慶長九年の夏の末かみの十日の事なれば、淸水の萬燈とて袖をつらねて都人……欄杆に腰をかけ、これよりすぐに豐國へ、いざや我等は祇園殿、扨は北野へいざ行て、くにがかぶきを見んといふ人も有」とあり、書中の事實と慶長九年の年代と胳合せざる所あるより此の書の著作年代を疑ふ者あれ

ども、慶長九年に北野にお國歌舞妓ありし事は疑ふべきに非ず。山左衞門をお國の夫なりといふ說も汎く行はるれども、此冊子の記事に據れば一時の情交はありしならむも、夫といふべき位置にはあらざるべし。此點については丁意の東海道名所記に、「三十郞といへる狂言師を夫にまうけ」とあるが出據あるらしく、三十郞山三郞その名の近似せるより混同を來しゝものゝ如し。

さて山左衞門が死したる慶長九年は、お國が何歲の時なるかといふに、永祿中將軍義輝が屢〻お國の踊を見たりといふ說を暫く事實として考ふれば、義輝の弑せられし永祿八年を、お國が十五歲の蕾の花と假定して、も慶長九年は五十四歲の色も香もなき葉櫻なり、いかに美人に年齡なし、役者年知らずとはいふものゝ六十近い婆さんにあれほど世間が騷いだとは變なものなり、さればこそお國に二代ありとの臆說も起りしなれ。とにもかくにもお國と山左衞門との事蹟は今なほ茫漠として、信賴すべき

材料に乏し、此際歌舞妓草子の發見せられたるは、よし假作物語にせよ、多少珍とすべきかと思ふまゝに、左に全文を紹介する事とせり。原文は假名がきにて一般の讀者に讀み易からざれば、改めて句讀を施し、多く漢字を入れ、間々傍訓をも施せり。

都の春の花ざかり〳〵、かぶき踊にいでうよ、そも〳〵これは出雲の國大社(おほやしろ)に仕へ申す社人にて候、それがし娘に國と申すみこの候を、かぶき踊と申す事を習はし、天下太平の御世なれば、都にまかりのぼり候て踊らせばやと存じ候。

（繪）

古里やいづもの國をあとに見て、末は霞みて春の日の長門の國府(こふ)を過ぎぬれば、かゝる御世にもあふの宿(しゆく)、道せばからぬ廣島や、とひよる宮は嚴島、舟のとまりにならたの濱、釣するわざはうし窓の、月にあかしの浦傳ひ、なほ行末は世の中のなにはの事もよしあしの、若葉に風のふく島

の湊の波の治まれる御世には今ぞあふ坂や急ぐ心の程もなく都に早くつきにけり。

(繪)

これははや都について候程に、心靜に洛陽の花を眺めばやと思ひ候、をりしも春の事なれば名にし負うたる花の都、こゝやかしこの花見の遊び、花の袂を重ねつゝ色々の裳裾を染めて、木の下ごとに圓居して、歌ふもいとゞ面白し。

(繪)

そも〳〵都ほとりの花の名所、地主權現の花の色、鷲のお山に咲く花は靈鷲山の春かと疑はれ、大原や小塩の山の花盛、今も御幸や仰ぐらん、さて又返り眺むれば、大内山の花盛、近衛どのの絲櫻、千本の花にしくはなしと打眺め、天滿つ神にぞまゐりける〳〵。いかに申し候、今日は正(三ノ誤カ)月二十五日貴賤群集の社參の折柄なれば、かぶき踊を始めばや

と思ひ候、まづ〳〵念佛踊を始め申さう、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛なむあみだ、南無阿彌陀佛なむあみだ、はかなしや鈎に懸けては何かせん、心にかけよ彌陀の名號、なむ阿彌陀佛なむあみだ。

（繪）

念佛の聲にひかれつゝ〳〵、罪障の里をいでうよ、のう〳〵お國に物申さん、われをば見知り給はずや、そのいにしへのゆかしさに、これまで參りて候ぞや。思ひよらずや貴賤の中にわきてたれとか知るべき、いかなる人にてましますぞや、御名を名乘りおはしませ。いかなる者と問ひ給ふ、われも昔の御身の友、馴れしかぶきを今とても忘るゝ事のあらざれば、これも狂言綺語をもつて、讃佛轉法輪のまことの道に入るなればかやうに現れいでしなり。

（繪）

さては此世になき人のうつゝにまみえ給ふかや、さしてそれともいは代(しろ)の松の言の葉かず〱に、袖を聯ねてきた野なる右近の事と夕顔の花の名殘の玉鬘、かけても思ひ出ざるや、言葉の末にて心得たり、さては昔のかぶき人名古屋どのにてましますか。いや名古屋とは恥しや、なごやかならぬ世の交り、人の心はむら竹のふしぎの喧嘩をしいだして、互に今は此世にもなごやが池の水の泡と、はてにし事の無念さよ、よし何事も打棄てゝ、ありし昔の一節(ひとふし)を歌ひて、いざやかぶかん〱。

あ只うき世は生木(なまき)に鉈(なた)ぢやとのう、思ひまはせばきの毒やのう。

あ只お國は柚(ゆ)の木に猫ぢやとのう、思ひまはせばきの藥。

淀の川瀬の水ぐるま、たれを待つやらくる〱と。

茶屋のおかゝに末代そはば、伊勢へ七度熊野へ十三度、愛宕さまへは月まゐり。

茶屋のおかゝに七つの戀慕よのう、一つ二つは痴話にも召されよのう、

殘り五つ皆戀慕ぢや。

風も吹かぬにはや戸をさいたのう、さゝばさすとて疾くにもおしやらいで、お只つれなの君さまやのう、そなた思へば門に立つ、さむき嵐も身にしまぬ。

(繪)

いかにお國に申し候、これははや古臭き唄にて候程に、めづらしきかぶきをちと見申さう、今の程は淨瑠璃もござきといふ唄を歌ひ申し候、さらば歌ひ聞せ申さんと、つゞみの拍子打揃へ、調子をこそうかゞひける。

わが戀は月に叢雲花に風とよ、細道の駒かけて思ふぞ苦しき。

(繪)

山を越え里を隔てゝ、人をも身をも偲ばれ申さん、なか〳〵に歌に節とは思ひ候へど、それ吹く笛は宵の慰み、小唄は夜中の口ずさみとよ、あかつきがたに思ひ焦れて吹く尺八は君にいつもそふて(双調)ふ、別れて後は又

黄鐘

あふしき、春雨のしだれ柳のうちしをれたるを、見るにつけても此春ばかり。

世の中の人と契らば、薄く契りて末まで遂げよ、もみぢ葉を見よ、薄いが散るか、濃きぞまづ散る、散りての後は訪はず訪はれず、互に心の隔たれぬれば、思ふに別れ思はぬに添ふ、なさけは大事のものかの。

かぶきの踊も時すぎて〳〵、見物の貴賤も歸りければ、名古屋は名殘の惜しきまゝに、待てしばし〳〵、歌へや舞へや拍子に合せて打つつゝみの、とゞろ〳〵と鳴る神も思ふ中はよもさけじと言ひしも、いたづらに別れになれば、お國は名殘を惜みつゝ、又一ふしこそ踊りける。

お歸りあるか名古三さまは、送り申さうよ木幡まで、こばた山路に行き暮れて、ふたり伏見の草枕、八千夜そふとも名古三さまに名殘をしきは限なし。

（繪）

よく〳〵物を案ずるに、このお國と申すは忝くも大社の假に現れいで給ひ、かぶき踊を始めつゝ、衆生の惡を祓はんため、かゝるかぶきの一節をあらはし給ふばかりなり、あら難有の次第かな〳〵。

書物の體裁は全くお伽草子風なれども、文章は謠曲がゝりにて、末段「よく〳〵物を案ずるに、このお國と申すは忝くも大社の假に現れいで給ひ云々」とあるは、御伽草子の本地物の極り文句ながら、その次の「あな難有の次第かな〳〵」は又謠曲ぶりなり。これについて思ひ出さるゝは、明治四十五年佐々木信綱氏が校訂出版せられたる「新謠曲百番」中の「歌舞妓」の曲なり。趣向は彼此全く同樣にて、文章も同じき所多く、とり入れたる俗歌もほゞ同じく、此にありて彼になきは、「風も吹かぬに」「わが戀は」「山を越え里を隔てゝ」「世の中の人と契らば」の四首にして、彼にありて此になきは、「我は備前の鑄刀、思ひまはせばとぎほしや」「いかに鞍馬のくらかるろ、辿もこもらば清水に、花の都を見おろいて、お月でてから往のずやれ」「四角柱や角ら

しや、角のないこそ添ひよけれ」「そなた思へば東山、河原通ひに身をやつす」の四首なり。この二者いづれが前に成れるか、遽に斷言し難けれど、新謠曲百番中には、「花鳥風月」「信田」の如き、御伽草子、舞の本に依りたるものあると、文章の緊縮充實せるとより觀て、予は新謠曲の「歌舞妓」はこの歌舞伎草子を修正せるものなりと言はんと欲す。

附けていふ、カブキは俗言のテンガフの意なりとは種彥の說く所なるが、此文中の「さては、昔のかぶき人」「いざやかぶかん」など、いづれも浮れ戲るゝ意なることしるく、かぶき踊は卽ち戲れ踊の義なり。（大正三年七月十一日稿）

寬永十二年跳記

寬永十二年將軍家踊上覽の事は之を史籍に徵するに、寬永日記十二年の條に

七月廿一日、尾張亞相公、明廿日於二丸御茶被上之、紀伊水戸兩殿、可爲御相伴旨被仰出之、因茲紀伊亞相へ御使松平伊豆守、水戸黄門へ御使阿部豐後守被差遣之、不移時爲御禮、右忝奉登營御目見也、云々

七月廿二日、於二丸尾張大納言殿御茶被進、御能有之

七月廿四日、明廿五日、於二丸紀伊大納言殿御茶可被爲上之旨、今日被仰出也

七月廿五日、早旦於二丸紀伊亞相御茶被上之、御能被付之、其後風流頗入興給、御酒宴云々

とあり、こゝに採錄する跳記は、七月二十二日の御能の餘興として上覽に供せしものか、又は二十五日の風流とあるものにや、二十五日の亭主方は紀伊亞相なれども、餘興の風流を尾張公より出すことも有り得べきなり、尾張の士堀田六林の護花關隨筆に「寛永十二年亥柳營へ我公より踊被献候時の唱哥」として歌詞五章を擧げたり、其歌此跳記のものと一致せず、只其最後の歌の「さすが東の都とて、花は錦をさらすかと、四方の山々立出くれば、雪かとまがふ其花ざかり、知るもしらぬも面白や」とあるが、本文「かつ

しやうおどりうた」の第二章と近似せるを見るのみ。（也有と六林參照）思ふに踊献上の事一度にとゞまらず、再三ありしなるべく、編年大略寛永十四年の條に「今年再踊御上覽、去ル亥年七月御上覽之節之踊子元服仕、或は有故候而不罷出輩少々有之、然共大概咸亥年之輩、格式も又同然云々」とあり、又敬公實錄に、或傳に此踊を寛永十一戌年とする由見えたり、かたがた護花關隨筆と歌詞符合せざるは、たとひ同年にても別時のものなるべし。此頃江戸には中村勘三郎、都傳内、村山又三郎等の芝居公許せられて、若衆歌舞妓流行の折柄、名古屋山三郎、中村勘三郎の鄕里なりといはれ、夙に歌舞妓の開けたる尾張より、小姓踊献上の事ありしは、因緣淺からずといふべし。

跳子之次第に括弧内に記したるは、後人の付紙して記入せしものにて、伊織、金彌、辰之助などやまやさしき人々の何兵衛、何左衛門と、尤らしき髭親父と變りたる後の名を見るも、今昔の感深く、「木村一學大竹金彌後喧嘩」と

あるなど、そゞろに西鶴が男色大鑑中の人物らしく、その面影まで想ひやらるゝこそをかしけれ、さて此姓名は編年大略の記事と多少異同あり、今その相違せる分のみを摘記せんに

長野内記（後改天野九郎兵衛）　永田八十郎（後清左衛門）
堀田忠兵衛（一ニ右京）　寺町頼母（後源五左衛門）
須賀井吉十郎　本田竹之助（一ニ門右衛門）
深津左兵衛（後五兵衛御改易後馬廻）　駒井三之亟（後庄左衛門）

なほ編年大略には連名の後に「傳云、踊御上覽前日場慨(?)ニ未熟ニ而揃不申ニ付、俄四人減十九人罷出云々、四人撰出姓不詳、丑之年重而御上覽之節、四人之者ども罷出云々、公義踊惣奉行堀田加賀守殿、御家ニ而は鈴木與三右衛門ニ被仰付云々」とあり

衣裝持物の事は、敬公實錄にも見ゆれど、本文の方詳細なり、只注意すべきは當日尾張侯の服裝を記せる一節にして、「踊の節公御裝束、柿御帷子御上

下滅金御紋付ニ候、御出立は唐人御裝束御出立とも申」とあり、唐人御裝束との一説は餘りにけやけし、こは恐らく跳記の中踊の裝束と混同せしなるべし、滅金の上下だけにて芝居氣十分なり。

本文の文字假名づかひは、すべて原本に從ひたれば、若き現代人のために、聊か老婆心の説明を加ふべし、「すり薄」は「摺箔」「ゑよう」は「繪樣」「かるさん」は「袴の狹きもの」「てうち」は「手打」にて、持物なく手拍子を打ちて踊り、「うたあげ」は「歌上」にて、歌詞を唱する者、「ちらし」は曲調をかへて踊の手も繁く賑しくするをいふならん、「小六を吹て出る」とある「小六」は、「小六ついたる竹の杖、小六、本は尺八、中は笛、小六、云々」の小六節を笛に吹く意なり、伊勢踊は伊勢より起りたる踊にして、糸竹初心集に、「あの君さまは伊勢の濱そだち、目元にしほがやれ、こぼれかゝるゑ」の歌を載せたり、此踊は古くより行はれしと見え、武德編年集成巻五永祿四年の條に、今川氏直の懦弱を譏りて、「倭歌蹴鞠に耽り、伊勢踊亂舞に長じ云々」といへり、尚延寶の頃盛に流行せし事

は、卜養狂歌集、紫の一本等に見ゆ。
「中跳」は嬉遊笑覧卷五に「義殘後覺、入江大藏之丞口論の條、七月十五日の夜、藝州御城の馬場にて諸方の士小姓衆、三味線にて大をどりを始る程に、大藏も道場の太鼓三尺四方ありけるを、綱をつけて首にかけ、是を拍て中をどりを仕給云々、俳諧懷子五三尾線のこまなべていざや中をどり、佐夜中山集に古歌取こゝろしりき袖打ふりし中をどり、是は輪をどりの中に居て踊るにやあらむ」とあり、此推定違はざるべし、此跳記にも中跳のみは衣裝持物をかへて他と區別せり、尙兎園小說外集卷二所引西國諸家盛衰記第九に、中躍の名稱散見し、且西陲の豪族が華奢風流、むしろ江戶將軍のそれにも勝りし狀を知るに便なれば、長文ながら孫引すべし。

宗麟風流躍見物事

同七月天正二年大友入道宗麟、六人の老臣に風流の躍見物すべしと宣ひければ、六人の輩思ひ〳〵に風流を盡し、其用意をなしけるが、同き二十七

日、丹生島の城中にて見物ある、一番は佐伯紀伊介維教、風流は小原木と號し、躍子共一樣に女の出立にて、肌には朽葉の練を着し、上の小袖を脫かけ、白きくゝり帽子の端を長く下げ、金襴の前垂をし、小原木を金にして、櫻の作り花の枝に、眞紅の繩にて結付け、是を持、其謠一曲を聞けば

「小原木〳〵、召せや召せ〳〵、小原靜原芹生の里、朧の淸水の陰は、八瀨の里しらず、櫻の匂ふや此里の春風

「松がさき散る花までも、雪は殘りて春寒し、小原木召されよ、小原木召され候へ

と聲面白く謠躍る、中躍も金の小原木を戴き、又は荷ひ躍舞ふ、傘鉾の內にては、笛皷鐘太鼓にて是を囃す、二番は田原近江入道紹忍、躍は芭蕉躍と號し、躍子共箔の小袖を着、金熨斗付の大脇指を指、萠黄の片色の緒にて芭蕉を作り、切り破りて持躍る、中躍は芭蕉の葉を萠黄の段子を以まきて、是を作り持てり、三番は田北相摸守鎭周、風流は碇かづきと名づけ、

一番に船を作り、金襴にてつゝみ車に乘せて引出る、次に踊子共箔の小袖に、紅の糸の腰簑し、碇を金襴にてつゝみて是を持つ、中踊も碇を持、其小謠に

「綠樹影しづかにて〳〵、魚木に登る風情あり、月海上に浮んでは、兎も波も走るなり、面白の春べや、あら面白の浦の氣色や

と聲を揃て謠舞ふ、四番は朽網三河守鑑康、躍は班女と號して、躍子共女の出立にて、箔の小袖を着、上を脫かけて、くゝり帽子を戴き、竹の純金を以つゝみ傘扇を付る、中躍も是に同じ、五番は吉岡鑑直、躍は葛城と名づけ、躍子共箔の小袖を着、扇笠の上に雪を作り戴き躍る中躍も大なる作り雪を持出で、雪を打破り、金銀の箔を散して舞ひ謠ふ、六番は志賀伊豫入道道輝、風流は井筒と號して、井筒を作り柱を立、桔槹をしかけ、桶をば金襴にてつゝみ、眞紅の繩にて是を下げ、一方の重りに沈の榾を付け、側に火鉢を置、沈を刻て是を燒、躍子はくゝりの帽子を着、桶を金襴にてつ

つみ、金の棹にて是を持、中踊も斯のごとし、上下心も空にうかれ、感聲暫も止み間なし、宗鱗悦喜甚しく其返しとして、吉野靜の能一番あり、太夫は金春太夫なり、警固の士五六十人甲冑を帶し、長刀の鞘を金襴の折形にて是をつゝみ、能の間警固せり、御曹子新太郎義統より返しは、三輪の踊りなり、眞中に三間ばかりの金幣を立、踊子共も金幣を持踊て、其日の遊興は終りけり。

「三わけ踊」と「かつしやう踊」については、原本所藏者石田元季君の説に、謠曲三輪に「みわげ殘りしより三輪のしるしの古き世を語るにつけてはづかしや」の意より來りしならむ、歌詞に「人目忍びてかよひしに」などあるも緣ありげなり、兎園小説外集（前掲引文のものなど云）にも三輪踊あり、かつしやうは髻僧（がつさう）にて、頭に包み物なく被髮のまゝにて踊るより起れる名なるべしといはれたる、頗る肯綮に中れり。

歌詞は新作もあり、當時行はれしものをそのまゝ採り用ゐたるも、少しく

變更せるものも混ぜり、伊勢踊の歌の如きは、在來のものなるべし、「あの君さまは」は糸竹初心集の伊勢をどりの歌にして、「天にてる月」も松の葉の琉球組の中にあり、「柳はみどり」は「千代の恵」といふ組歌に、「千代の恵はよの、柳はみどり、花はくれなゐよ、人は只情、それ梅はにほひよの」とあり、「笛に寄鹿」は松の葉の端手片撥に「笛による鹿は妻ゆゑに死する、われらもさまにやつれ命すてうずよの」とあり、三わけおどりの第一章の「とへばとはぬとふりごゝろ、とはねばうらみてつりごゝろ」は、隆達節の「とへばとふとてふらるゝ、とはねばつらるゝ」に基くものゝ如し、固より是等の俗謡集は寛永十二年より後に成りたるものなれども、強ちに編集の時代を以て、跳記のものを新作として、之に基くものとは言ふを得ざるなり。

思ふに三百年前の踊にて、その衣裝持物等を傳ふること此の如く精細に、人をして當時の舞容を髣髴せしむること、此の如く歷然たるものは、他にその類多からざるべし百事新樣を趁ふの今日、試に梨園の少年子弟をし

て此舊容を學ばしめ、大正の宗麟家光を氣取るも亦一興ならんか。終に臨み石田元季君が藏本の公刊を快諾せられ、且種々有益なる助言を賜はりたる高意を深謝す。

大正三年十二月

寛永十二年亥七月跳

跳子之次第

松田外記（堀田三郎兵衛）　長野喜内（後ニ矢野縫殿ト改カ）
千賀新太郎（林武兵衛）　永田八十郎
堀田右京（堀田彦兵衛子カ）　熊谷內匠（熊谷與兵衛）
小瀨伊織（小瀨新左衛門）　寺町賴母（寺町彌五左衛門）
石川辰之助（石川五郎太夫）　毛呂三九郎（毛呂次郎兵衛）
久野左吉（久野市右衛門弟）　須加井吉十郎（洲加井惣右衛門）

木村一學（木村傳之允弟）　淺野庄藏（淺野文右衛門）

本多竹之助（本多紋右衛門）　稲生織部（稲生半右衛門）

深津左兵衛（深津五兵衛）　駒井三之允（駒井彦左衛門）

横井杢之助（横井十郎左衛門）　間島藏主（間島權左衛門）

大竹金彌（木村一學 大竹金彌後喧嘩）　寺尾勘平（臼杵彌左衛門手）

魚住平三郎（魚住半右衛門）

右二十三人之内うたあげ二人

永田八十郎　駒井三之允

てうち伊勢跳は跳子衆と同前之事其外は

中跳唐人之出立一人は狂言師

一繻子のじゆばん　但襟袖口にひだをよせすり薄

附りかるさん　繻子

一頭巾猩々皮　但ゑよう金入のさゝへり

つゞみうち　三人
太鼓うち　壹人
笛吹　三人
右役者之衆小袖二通　二十人分
一四ッかはり　繻子と白綸子金ニ而たてはぎうら紅梅
一綸子の染物　うら淺黄
一下着　白両めん
一ほうづゝみ　五通
一帶　繻子綸子　二通
尺八吹十人　小袖一通
一繻子にしゆろ　但金銀ニ而惣身にしゆろの葉茎共五ッ六ッ計すり薄うら淺黄
一帶　白綸子
一下着　白両めん

但金銀を段々におく緒しんくの糸
こゆび程にして笠の上に結び總有

一笠
右うちわ跳の先へ小六を吹て出る
禰宜　二人
神主　一人
一狂言師一人榊を持裝束
銀のもみゑぼし黄ばせをふのかりぎぬ
付りこんのさしぬき
一神主鈴をもち　ゑよう
まいぎぬを着した小袖すり薄
くれなゐの緒をつけ
壹人ごひやうしを持裝束銀の折烏帽子
白ばせをふのかりぎぬ付りこんのさしぬき
右伊勢跳の先へ出る也
あづま跳の裝束

一小袖　　立田川

付り地うこんのさや紅梅いろのもにぎ糸にて紅葉を手のひらほどにぬい物水は銀裾にたつ浪金裏くれなゐ

一下小袖二ッ之内

壹つはしろりやうめん
壹つはかたびら襟ひりんす

一帯繻子二ッ割

但あいだ一寸許なき三寸ばかりの金の丸

一あふぎ　　惣金朱の雲形

但二本宛持手さ腰にさすさりおささんがため也

一むらさきぼうし　　但おとりつゝみ

一うたあけの小袖　　うらくれなゐ　　鷺

但地繻子に白りうもんの綸子ニ而鷺を八ッ七ッ計縫付ゐようはぎんゐ

はしさ足はもにぎ糸に而ぬい物さわをば金紗糸裾にも金ニ而たつなみ
但なみかたわきまで

一小袖帯扇いづれも右同前

あづま跳のうた

一雲の餘所なるもろこしまでもなびけばなびく君が代にやふちよしいく千代までもかぎらじや〳〵チツホホホホテンチタツホホイヤ

一風と柳の我が中なればなびけばなびく君が代にやふちよしいく千代までもかぎらじや〳〵チツホホホホテンチタツホホイヤ

一見てややみなんかづらきの雲おもかげにたつ見しおもかげもなつかし見しおもかげもなつかしや〳〵チツホホホホテンチタツホホイヤ

一きりのまがきのますほのすゝきおもかげにたつみしおもかげなつかし見しおもかげもなつかしや〳〵チツホホホホテンチタツホホイヤ

一庭のさゝはらそよともすればおもかげにたつ見しおもかげもなつかし見しおもかげもなつかしや〳〵チツホホホホテンチタツホホイヤ

一夢かうつゝかうつゝか夢か只かりそめに見そめしまゝのおもかげ〳〵を〳〵チツホホホホテンチタツホホイヤ

ちらし
一たんだふれ〳〵やれあは雪の〳〵ふるに心の〳〵きえ〴〵と

うちわおどり装束

一小袖　　水車

地緋綸子車の大さ一尺五六寸但かたわなり
惣身に十計車は金なみは銀繪

一下小袖二ツ之内

一つは白兩めん一ツはかたびら
ゑり黄りんず

一帯

但ちりめん二ツ割べにがのこ
金にて雲形ぢらし

一うちわ　　軍配

付りこんの紗へりはしゆぬり柄黒し
ゑようは武藏野の月も薄も金但緒紅

一黄帽子　　但新包み

一うたあげ小袖　　金のたくりづな

前後に二筋但つなの留こいあさぎの
糸にて總なりにぬいもの

一下小袖帯團扇帽子　　いづれも同前

うちわ踊のうた

一花もむかしの色にさく今さら〲の中にてもなし同じうき世に同じ

身をテンホホテンホホイヤチチテンタホホしづはたおびのかたむすび只うちとけよ何か嵯峨野のおみなめしとやかくとくねりてもさてせんもなや

一なれて久しきまでの竹今さら〳〵のなかにてもなし同じうきよに同じ身をテンホホテンホホイヤチチテンタホホしづはた帯のかたむすび只うちとけよ何か嵯峨野のおみなめしとやかくとくねりてもさてせんもなや

一山のおくにも松風今さら〳〵の中にてもなし同じうき世に同じ身をテンホホテンホホイヤチチテンタホホしづはたおびのかたむすび只うちとけよ何か嵯峨野のおみなめしとやかくとくねりても扨せんもなや

一笹の一よも露のゐんいまさら〳〵の中にてもなし同じうきよにおなじ身をテンホホテンホホイヤチチテンタホホしづはたおびのかたむすび只うちとけよなにか嵯峨野のおみなめしとやかくとくねりても扨せ

んもなや

一ちかのうらはに引あみのひくとも人目のしげきあしがきそよ〳〵さらにつれなやあはねばちかきかひなき〳〵ちかのうら

手うちおどり裝束

一小袖　くれなゐ　石疊み

地繻子總身に石疊金銀但大さ二寸五分

一下小袖二ツ之内　一ツは白兩めん
一ツはかたびら襟白綸子

一帶　緋りんず二ツ割但金□（銀カ）こぼれ櫻

一ぼうし　白縮緬但はちまき

一うちあげ小袖　右同前

手うちおどりのうた

一須磨や明石のうらづたへかづく袖がさゝら〳〵さ鹽屋のけぶりたつふりまでもしほらしや

一わかのうらへも鹽みちくれば

一あまの鹽屋の夕けぶり

一田子のうらなる汐汲あまは

一なにをなるみのうらづたへ

一難波入江に汐みちくれば

一なだのあし屋の里々に

一春の海邊に住よしの

一伊勢の海邊に鹽やく蜑は

三わけ跳之裝束

一小袖　　　　あふぎながし

地緋沙綾金銀にてゑよう□□（水はカ）緑青彩色但扇惣身に六七本のうちたゝみあふぎひろげのあふぎ有

一下小袖二ツの内　一ツは白兩めん一ツはかたびらゑり黃りんず

一帯　　縄 但白縮緬五まはりふさし ろまかいのいさ五まはり

一ぼうし　　但新包み

一あふぎ　　總金朱の雲形

一うたあげの小袖　　きく

地むらさきりんず惣身に菊の花三
但ゐようはらんぎく黄うす淺黄紅梅
金銀のすり薄

一小袖帯ぼうし扇子いづれも右同前

三わけおどりのうた

一雨の降夜もふらぬ夜も門にたつ口(さカ)の名はたちてホテンタテンホホツ

ホハアとへばとはぬとふりごゝろとはねばうらみてつりごゝろ

一雪の降夜もふらぬ夜も

一しんのやみにも月の夜も

一風のふく夜もふかぬ夜も

一人目しのびてかよひしに

一こゝろづよやなおもふ人
一はやましげ山つくば山松風このはのさらり〳〵はら〳〵ほろとふる（ちらし）
ともつきせじよろづ代ふる〳〵君が代に

伊勢おどりの装束

一小袖　うらくれない。　からす
地白りんず繻子にてからす惣身に
十七八ばかりぬい付ゐようは金繍

一下小袖二之内
一ッは白りやうめん一ッは緋縮緬
但金ニ而蘿の葉すり箔

一帯縄　緋縮緬總くれない糸但金紗をいれて

一さらし　はちまき

一あふぎ　銀に朱の日の丸

一脇指　ごへい

但おどり子は銀うたあげ衆は金

一うたあげ装束　同前

伊勢おどりのうた

一これはどこおどり松坂こへていせおどり
一こゝろこそかよへ身はかよはねばあのおく山のひとつやへ
一いつもなく鹿がこよひはなかぬ妻こひ兼て露ときえたか
一いりあひの鐘は千里もひゞけあかつきなるなたのむ鐘の音
一あの君さまはいせの濱そだち目もとにしほがこぼれかゝる
一天にてる月は十五夜がさかりのあの君さまはいつもさかり
一おもひとこひとさゝふねにのせておもひはしづむ戀はうく
一おもひあらねばまつ風もさびしいつまで花のゑんとなろ
一柳はみどり花はくれなゐの人にはなさけ梅はにほひ
一笛に寄鹿は妻ゆへに死するわれらは君にいのちすてふ
右伊勢おどりがくやよりおどり出る舞臺一遍まはりひざまづきぬぎ
さげ有色々あいしらいあり扱かつしやうおどりにうつる

かつしやうおどりうた

一風もおさまるひさかたの〳〵ひかりのどけき春の日に四方の山々詠れば雪かと見ゆるあの花ざかりツクツタツホツテンタタトフトフチ、ツクツフホホフホホホ　しるもしらぬもおもしろや〳〵

一さすがあづまのみやことて〳〵春はにしきをさらすかと花のいろいろ　さきそめてつらさもうさもわする丶御代は　ツクツタツホツテンタタトフトフトツクツフホホツホホホ　しるもしらぬもおもしろや〳〵

一春やむかしの梅が香に〳〵こゝろも空にあこがれて花の下ぶしおぼろ夜の月やあらんとよむ言の葉はツクツタツホツテンタタトフトフトツクツフホホツホホホしるもしらぬも面白や〳〵

一ふじの高根に雲きえて〳〵雪のうへよりたつけぶり月にさはらぬ三保がさき松原遠くこぎゆく舟はツクツタホツテンタタトフトフトツクツフホホツホホホ　しるもしらぬもおもしろや〳〵

一千代をふれども武藏野は〳〵いつも若草もえ出て雪もとくれば春風におのが品々さく花の名はツクツタホツテンタタトフトフトツクツフホホツホホホしるもしらぬも面白や〳〵

一（ちらし）ちらさばちらせさら〳〵と花をも雪と見なさば見なせ春の山邊の春の山邊のこのもとに

右此書者寛永十二年亥七月
將軍家光公踊　上覽有之其節
御家ゟ御差上之踊哥並裝束等之記也
加藤氏カヂヤ丁下藏本恩借而寫之畢
文化九年申九月中浣

野田重堅

淡路の古謠

余が郷里淡路の古謠を集めしものに、國風謳歌篇といふ書あり、杵唄、連架唄、樵唄の目を立て、歌數すべて七百十九章を收め、間々註解を加ふ、平野安澄といふ人の編輯にて、國君の覽に供へしものなりとぞ、余いまだ其書を見ず、淡路古今紀聞抄錄する所五十三章中、稍趣味ありと思はるゝもの二十章を、更に抄錄すること左の如し。

よいぞよそろよいやならよそろ和御寮もおれもいやでそよ

白拍子の衣服を粧ひ飾る時、粧ふ〳〵彌粧ふ和御寮もおれも粧う

たといふ祝歌の轉訛なりといふ。

月は東に昴は西に御屋形様はまん中に

中八木村大土居繁榮の時の唱歌なり、中央の主を日に比し、東西の英臣を月昴に擬せしなり。

感應堂の城は緯なし機よたてこしらへておりもせず

石川紀伊守感應堂の城を築きし後、間もなく、慶長八年豐後國に所替となれり。

殿は深山へかい隠れたよ見えたは弓の筈ばかり

八木細川氏の鮎屋村五の瀬にて討たれたるをいふ。

大戸初尾で鳩の羽拾うた嬉しや殿の矢に矧がん

八木城主淡路守成春の射術を稱する歌なり。

委文通れば長田も戀し殊に長田は水處

委文長田水多きを賛美す。

四國西國及びはないがせめては國の巡禮なと

文明年國中觀音巡り始まる。

摩耶へまゐりて兵庫を見れば心は兵庫に身は摩耶に

摩耶は野田尾村の山にて、兵庫を眼下に見る。

鹽尾(しを)と志筑と一所ならよかろ間(あひ)の碁石山無かよかろ

廣田は廣し金屋は名所ぢきない千草山中よ

　ぢきないは味氣なきの意なるべし。

ぢきない千草山中なれど色よい花は山に咲く

花の繪島が唐糸であらばたぐりよせよもの皆宿へ

こゝは降ろとも鮎屋河内は降るないとし殿御の萱刈に

洲本見よとて賀茂まで往たら洲本隱しの霧が降る

娘やろなら賀茂へやれ親父賀茂は田所米所

山へゆかぬか八坪の山へびしよぎの柴の枝折りに

　びしよぎは龍眼木(みさかき)のことなり。

由良の湊に唐船つくる柏原山にをがの音

由良がましかよ洲本がましか由良がましぢやよ船つきぢや

　寛永八年由良より洲本へ城市を移しゝ時の謠なり。

佐野の常滿寺に蛇が居る〳〵と蛇ぢやげな大きな姥ぢやげな

慶安正保の頃佐野の常滿寺に炊婆あり、肥肉にして身長六尺有餘なりしとぞ。

百目だしてもわしや見たう御座る殿の大阪の川入を

諸國盆踊唱歌と山家鳥虫歌

「諸國盆踊唱歌」は種彥所藏の寫本を我自刊我書に收めて刊行せしより漸く世に知られ、近頃又國書刊行書の新群書類從中に轉載せられて一層廣く行き渡れり、それ以外には寫本よりなきものと思ひこみしに、京都帝國大學の藏本に「山家鳥虫歌」といふ刊本あり、繪入上下二卷(下卷は補寫)に分ち、諸國の風俗を見るべき爲に集めたる由の序文ありて、「明和八辛卯冬天中原長常南山序」としるし、畿内より始めて諸國の俚謠を集錄せることゝ盆踊唱歌に等し、只鳥虫歌の方にはおもなる國々の歌の後に、其國風を評

し、其所の異物奇談等を記したる文章を添へあるを異なりとす。種彥が寫本を得たる文政八年は明和八年より五十餘年の後なり、此寫本は刊本の鳥虫歌の文章の後を省きて抄寫せしものらしく、其證は山城の俗謠の終に

おはら木やめせ〱黑木さゝをめせ
　こくもうすくもきこしめせ〱

の一首あり、普通の俗謠にもあらず、又書き方もこれのみ二行に分ちて體裁はず、何となく唐突の感ありしに、鳥虫歌には山城の國風を評したる文章ありて、其末に大原盃といふものありとて其圖を出し、上に此歌を題せり、これだけにても盆踊唱歌の抄寫本たることを知らるゝが、尙鳥虫歌によりて盆踊唱歌の誤脫を正すべき箇所多々あり、且盆踊唱歌に缺けたる近江美濃飛驒信濃上野五ヶ國の歌も完備せり、今其歌を左に揭ぐべし。

近　江

△年たち返る御代の春松の緑の千代をまつ
△伊勢の山田のいまきり竹はお杉お玉のさゝら竹
△堅田船頭をつまにはいやよ月に二十日は沖にすむ
△何も職じやが鞍馬の職は馬に七束我身に二束馬の手綱を手にひきまとひ花の都に柴賣りに
△わしが殿御はあすから江戸へ足もかるかれ天氣もよかれとまりとまりに女郎なかれ
△大田原見たた江戸見たか大田原町はまだ知らぬお江戸に弓が千挺たつ弦引く殿はわがつまか

凡六首

美濃

△松になりたや有馬の松に藤にまかれてねとござる
△淺香山かや山の井の人の心の底みゆる

△底の見ゆるは誰が知る深い中とはみとせまで
△海がないとや此國に舟も帆もある高瀬舟
△高瀬舟には柴を積むわれは浮名の種をつむ

凡五首

飛驒

△佐渡と越後は筋向ひ橋をかきよやれ舟橋を
△橋の下には鵜の鳥が鳴くぞや何と鳴くヱヽぶりしやりと
△おまんの部屋で鳥蟬が鳴くいノゥ何と鳴くヤアつまこい〳〵と三聲鳴く

凡三首

信濃

△うれしめでたのわかとのさまよ知行ましますす程なしに
△逢ひた見たさは飛びたつ如く籠の鳥かやうらめしや

△籠の鳥ではわしやござらねど親が出さねば籠の鳥

凡三首

上野

△わしや此町の軒端の雀聲でき丶知れ名をよぶな

△殿御忍ぶはしんきでならぬくゃり九つ古川七つ十二小口の板戸を

あけて忍びこんだら夜が明けた

△戀となさけはきりあるものよしたておくるはみへのおび

凡三首

以上原本三枚半分を脱せり、尙此外山城に

△稻は刈取る穗に穗がさいてどこに寢さしよぞ親ふたり

河內に

△人のいひなし北山時雨くもりなき身は晴れてのく

挿畫中に記入せる

△我もむかでを射てとりて俵藤太の米ほしやの三首を脱せり。

序ながら刊行會本の「吉原はやり小歌總まくり」は「れんぼのきぬた」「きぬたのまき歌淨瑠璃」「かはり伊勢節」の三章（原本二枚分）を脱せり、古書の飜刻には細密周到の用意ありたきものなり。

此後和田維四郎氏より次の報告ありたればこゝに附載す。

藤井紫影君の「ほんや」第二號に載せられたる記事にて、此唱歌が山家鳥虫歌に載せたるものなることを知り、誠に面白き發見と存候、私は偶然種彥所藏の原本を所有し居るを以て早速に取出し、我自刊我書に漏れたりとて掲げられたる近江美濃飛驒信濃上野の部を照合せしに、全部原本にありて、一枚中に書きあり刊行の際此一枚を脱漏したることゝ存候、又山城河內の部に漏れたりと記されたるもの〻內、山城の分は原本にも漏れたり、河內の分は原本にあり、又挿書中に記入せる「我もむか

でを射て」云々の歌は、原本には信濃の部に記入しあり、些細の事ながら一寸申上候。

西山宗因

一口に談林と云へば世間の人は、佶屈難解で、字餘りの變調な句を連想するであらうが、併しそれは末流の弊を見たのであつて、開祖たる宗因は必ずしもさうでない。

貞德派の幼稚な駄洒落に滿足せずして、輕妙な滑稽、淸新な句法で新旗幟を樹てたのである。芭蕉も嘗て「先德多かる中にも宗鑑あり、宗因あり、白炭の忠知あり、上に宗因なくんば吾々の俳諧は今以て貞德老人の涎をねぶるべし、宗因は此道の中興なり」と云つて宗因を崇めて居る。

宗因が俳諧に志した徑路は、芭蕉と略ぼその軌を同じうして居る。初め西山次郎作豐一と云ひ、肥後八代城主加藤正方（風庵と號す）の侍臣で主人と共に歌や連歌を稽古して居た。寬永九年正方が奥州の磐城平の城主

へ預けられた時、仕を辭して京都に出で伏見に居を卜し剃髮して宗因と名乘つた。其頃京都で俳諧で名高かつた貞德門の松江重賴の門を叩き俳諧を學んだのは寛永十三年卽ち宗因三十二歳の時である。正保の初め頃大阪の天滿に移り住み、連歌の判者として生活して居たが、思ふ所ありて連歌の方の宗匠の地位を長男宗春に讓り、自分は俳諧を以て一派を起した、之れ卽ち世に云ふ談林風にして、延寶より天和貞享の頃最も盛にして一世を風靡したのである。然るに晩年に至り餘りに門下の俳諧が亂暴に陷つたので

何も早や楊梅の核昔ロ

の一句を殘して俳諧を止め、再び連歌に從事したが、天和二年七十八歳にして死んだ。芭蕉よりは四十歳ばかり年長である。宗因が黃檗の卽非の會下に參したのは寛文の頃であらう。

宗因の俳諧の特色は主として俳句の方面で、連句の方はもと〳〵連歌か

ら出た人なる故、其の特色は著しくなかつた。之を貞德派の連句に比較すると、漢語や俗語の使ひ方が一層自由であつて巧に人事より材料を取り、人情を穿ち、附合は言葉の緣にすがることを少くして前句の意味を受くることが多い、それ故に宗因の連句は其門下の如く亂暴なものではなかつた、前句の意を曲解して强ひて險怪な附方をしたり、又方式を全く無視するに至つたのは門人共の所業である。宗因の句も貞德派の句と同じく掛言葉や緣語にすがつた洒落もあるけれども、その洒落以外に自ら詩趣ありて才氣の豐なることは、到底貞德一派の及ぶ所でない、元祿の貞柳の狂歌と天明の蜀山の歌程に鈍重と輕快とを異にして居る。例へば

歌の道になれもさし井手の蛙かな

あらば價何か雄島の秋の景

宇治橋の神や茶の花さくや姫

貞德派は主に故事俗諺をもじつて洒落に用ひたが、宗因は古歌や詩の句

等を使つてそれに因つて滑稽化した。例へば

命なりさゆの中山香蕓散

の句は、西行の

年たけて又越ゆべしと思ひきや

命なりけり小夜の中山

により

からし酢にふるは涙か櫻鯛

は、黒主の

春雨のふるは涙か櫻花

ちるを惜まぬ人しなければ

より來り、又

峰入は宮もわらぢの旅路かな

は蟬丸の

世の中はとてもかくても同じこと
宮も藁屋も果てしなければ

に本づき、

聞くに聲の西南よりや秋⺇

は、歐陽公の秋聲の賦

聞有聲自西南來者

によつて居る。又謠曲の文句を引用して目先きを變へたり、或は謠曲の句調を擬したのも多い。宗因は謠曲は俳諧の源氏物語であると云つて居る。これは和歌に源氏を種とするが如く俳諧は謠曲を材料とすべきだと云ふ意味で、此の方面では殊に成功して居る句が多い、

時鳥いかに鬼神も慥かにきけ

の如きは田村の「いかに鬼神もたしかにきけ」の文句をそのまゝ應用して居る。その外に

里人の渡り候か橋の霜

小町像讃

おここそ風狂亂の姥櫻

から聲に鳴くは蓼食ふ虫候か

宿れとは御身如何なるひとしぐれ

よれくまん雨馬があひに磯清水

秋や來るのう〳〵それなる一葉舟

一葉の水面に散り浮くを見て、早くも秋の來りけるよと驚き怪しむ意を、謠曲がゝりに綾なしたる手際は殊に巧妙である。つまり措辭の上にも着想の上にも、從來の貞德派に見出すことの出來ない輕妙淸新な特色がある。渡邊支考が「耳に言葉のをかしみを得て眼に姿情の淋しさを知らず」と評したのは、語句の奇巧にのみ走つて幽玄な思想がないと云ふ意味であらうが、それは大體論としては當つてゐる、しかし中には蕉風の先驅

とも目すべき穩健な句もある。例へば

朝夕の人もめづらし今日の春

菜の花やひともと咲きし松の下

有明の油ぞ殘る時鳥

藥鑵屋も心してきけ時鳥

西行像讃

秋はこの法師姿の夕かな

白露や無分別なる置き所

等の句は、後の蕉風の中に混じても區別に苦しむだらうと思ふ。

宗因門下にて有名なるは、井原西鶴、北條團水、椎本才麿、田代松意、菅谷高政田中常矩等である。田代松意は寛文の末大阪より江戸に赴きその俳風を擴めた、次いで延寶三年師の宗因を江戸に迎へ益〻斯道の振興を計つた。當時の連句に

されば こゝに談林の樹あり梅の花　宗因

世俗眠りをさます鶯　雪柴

とある、以て其意氣を知るべしだ。斯くして江戸を風靡し、芭蕉、杉風、素堂等も亦談林派かぶれの句をやつて居た。

當時貞德風の俳諧は沈滯の極に達し、皆その無味に厭き〲して居たので、談林の新奇を喜び、貞德派の主要なる人々も來り投じた。京都の菅谷高政は自ら總本寺半傳連社(當時は何でも新奇なものをバテレンと云つて居た)と號して、江戸の談林と相呼應して新派の勢力を擴張して盛に貞德派を冷評した。それで兩派は或は著述に、或は辯論に攻擊し合ひ、遂に漫罵讒謗の極點に達した、貞德派は談林は俳道の切支丹なり、四條河原の道化芝居なりと罵れば、談林派は貞德の才は到底宗因に及ばないとやり返した。貞德派には學者多く、又多少議論の筋道も立つて居たが、談林派の方は漫罵に過ぎなかつた。それにも拘はらず、貞德風の活氣無く趣味

なきに厭いた人心は、新奇なものを望んで居つた時なので、大勢を如何ともすることが出來ず、延寶の末には天下の俳壇は談林の獨占に歸してしまつた。實に談林は貞德以來停滯してゐた俳界を一掃して、次に來るべき蕉風の爲めに道を切り開く役をしたのである。

芭蕉が宗因もし出でずんば貞德の涎をねぶりゐたらんと言へるは、その間の消意を窺ふに足ると思ふ。要するに貞德派は穩健で談林派は放縱であつた、一は句の姿を優しく、古めかしく、上品にすることに心掛け、一は佶屈にして新奇を喜び、卑俗なのも構はぬ、一は故事俗諺を援用し、一は詩歌謠曲を材料とした、一は道學的にして訓戒を寓し、一は藝術的にして放縱であつた。

談林派は形式內容共に新奇を求めた結果、その弊は形の上に於ては散文的となり、語格を破壞して不可解のものとなり、內容の上に於ては非詩的のものを生ずるに至つた。如斯ものは假令一時如何に流行しても、畢竟

一種の反動的風潮であつて、到底永續すべきものではない。數年の後西鶴や團水は俳諧より轉じて小說の方面に力を入れる樣になり、才麿は蕉風に投じ、談林風を以て終始した田代松意、田中常矩、菅谷高政等の如きは、却て俳人として今日世人に記憶されぬ樣になつた。天和二年宗因死し、三年には芭蕉派の虚栗集が出で、貞享元年には冬の日が出て漸く蕉風の盛んなるに及び、嘗て談林の勃興が貞門の人々をして其の舊調を改めしめしが如く、蕉風はまた幾多の談林の俳人を蕉風化せしめて、遂に蕉風が談林に代る樣になつたのである。以前談林風の敎をうけた鬼貫、來山のやうな人でも佶屈難解な調子を捨てゝ殆ど談林の特色を失ふ樣になつたのである。

西山宗因の松島紀行

梅翁宗因の句集には、享保十九年四世昌林が宗因宗春昌察三代の發句（連歌の）を集めて出版せる三籟集あり。俳句の方面には、安永六年（刊行は寛政十二年なるべし）浪華正檀林一炊菴の宗因俳諧發句集、天明元年刊行の江戸誹談林七世一陽井素外の梅翁宗因發句集あり、特に後者は拾遺後拾遺後々拾遺を加へて文化二年に再版せられ句數最も多し。かくて宗因が連歌俳諧の句はほゞ蒐集の手を盡されたるにちかきも、その文章に至りては寥々として世に知られず、僅に一炊菴の編せし宗因文集（寛政十二年）一冊あれども十數葉のものにて、前書つきの俳句集ともいふべく、文章らしきものは播磨路の紀行と西海頭陀の辨との二章に過ぎず、思ふに宗因は連歌俳諧に專らにして、芭蕉の如く文章に意を經せざりしものゝ如し。然るにこゝに稀覯の一篇あり、もと一陽井素外の藏弃にして、現今大

阪の富田仙助氏の手に歸せる松島一見記と題する自筆一卷卽ちこれなり。これ恐らく宗因一代の大作にして芭蕉の奧の細道に比すべきものならん。但し、芭蕉の文章は生氣潑溂として、その景情感興の惻々人に迫るものあるに、宗因のは依然として室町時代の連歌師の舊套を襲ふに過ぎざるを惜むべしとす。

宗因名は豐一通稱次郎作、八代侯加藤正方(風庵)の侍臣なり、芭蕉の藤堂蟬吟公におけるが如く、彼も風庵君と共に釋將寺の豪信法印といふに和歌連歌の道を學び、文雅のおぼえめでたかりしが、寛永九年侯が岩城平に預けらるゝに及び、仕を辭して身を雲水の行くへにまかせ、初め伏見の里に隱れ、次で正保の頃浪速天滿に移り住みて(去年九月大阪住宅　今もこの花より四方の春べかな　三籟集)天滿天神の月次宗匠となり、連歌の判者として暮らしゝが、一朝思ふ所ありて宗鑑守武の滑稽を慕ひ、終に談林風を創めて延寶天和の俳壇を風靡するに至れり。

風庵との關係は寛永八年に兩吟の連歌寛永千句と稱する者あり、又三籟集を撿するに

肥後八代城にて

萬代やうちはへ春の花の宿

加藤風庵本國寺石橋建立供養の日

橋柱たてし盟や世々の秋

西國下向加藤風庵興行

陰たのむ身の春なれや梅の花

加藤風庵追善千句に

朝顏の花はゆふべの昔かな

加藤風庵七回忌

七かへり卷きほす袖や露の秋

加藤風庵十三回忌

消えにきと見し世の影やけさの月

こゝに訝しきは「西國下向加藤風庵興行」とある詞書なり、宗因自ら西國下向せし折、風庵が興行せる連歌會の句とすれば、風庵退轉以前に於て宗因は既に致仕せしものと見ざるべからず、かくては從來の説と相扞格す、さては風庵が退轉後西國下向の事ありし際、いづくかにて連歌興行ありし時の意に解すべきにや。猶攷究すべき問題なり。なほ一炊庵編の俳諧發句集に、

岩城へ申贈る

春やまづ貴方に向ていはき山（初春やイ）

岩城の城主たび／＼御消息ありしに答奉る

關はあれど花になこその御意はなし（名のみイ）

岩城に春を迎ふるくれに

來る春や寅卯のむひとゐはき山

等の句あり、以て風庵との情誼の深きを知るべし。こゝに紹介せんとする松島紀行も風庵が再々の招きに思ひ立ちしなるべく、乃ち寛文二年五十八歳の春三月の初に家を出で、急がぬ旅とて七月二十日餘に、漸く勿來の關をこえて、岩城の城下に入り、附近の名所舊蹟を尋ねなどして八月中旬まで淹留し、舊主の好意に同行者をさへ給ひたれば、松島見物と志し二十一二の兩日をその賞遊に費し、再び岩城に歸り九月の末、別れを告げて白河の關にかゝり、時雨ふりそむる頃那須の篠原を過ぎ、十月初め武藏に入り、こゝも知る人の多くてとゞむるまゝに、江戸にて春を迎ふるに至りしなり。

文中挾む所の發句は大抵三籟集に入りて、その漏れたるは、月にかせをしまの蜑の初枕、松島やおしまはし見て月の舟、有明のつれなやたつた獨旅、雁よまて故鄕へ一書二所の關、いとま申し歸る山々しぐれかなの五句に過ぎず、こは俳諧の句と認定してわざと省きしものならん。猶三籟集に

は「遠く來て」を「遠く聞」と誤り、「旅もよしまぎるゝことなき年の暮」の中七を「事しげからぬ」とせり、素外編の句集に入りたるは「いとま申しかへる山々しぐれ」と「故郷へ一書二所の關」との二句に過ぎず、しかも「雁よまて」を「雁に傳へん」とあり。

因にいふ、大野洒竹の俳諧略史に、宗因の最初の連歌の師を寂澄寺の豪信法印とせり、寂澄寺は一炊庵編發句集の梅翁傳にいはゆる釋將寺と音相近く、且三籟集に「作州旅宿寂澄寺にて　木の本よそれも淺くや露の宿」の句あり、かた〴〵緣故ありげなれど、いまだ確證を得ざれば暫く梅翁傳に從ふ。宗因の享年については、七十三歲と七十八歲との二說あり、前者は俳諧家譜、誹家大系圖等の說にして、後者は梅翁傳の說なり、三籟集に、

七十七歲のくれに

あかずとや年の思はん老の暮

和州郡山にて七十八歲

たのしてふ世の春を見ん三笠山の句あれば、天和二年三月二十八日歿、享年七十八と定むべきなり。紀行の末に署したる有芳庵は、向榮庵、忘吾齋等と共に宗因が庵號の一なり。

* * * * * * * *

松島一見記

茲にひとりの翁ありけり、身はいやしくて四の民にもまじらず、かたちは釋氏ににて精舍にも住せず、心は山林にありながら、塵裏にはしるしれもの也、つくばの道を道として其友がらを友とす、一生旅程雲水にたぐひて、いたづらなるとし月をかぞふれば、六十にひとつふたつたらぬ齡也、靜に苔の扉をとぢ繩床におきふし、木鐘皷に眠をさますべき時しも、又あづまのかたにこゝろざし有ける、頃は三月のはじめになむ、もとよりすみ所もとむるにしもあらず、身をうき草のさそはるゝかたもなくて、こゝろのゆ

くさころにまかせて、春過秋來既文月二十日餘には、みちのくのなこその關をこえて、なにがしの城下にいたる、此地西北にめぐりて皆山也、山すくよかならずして茂林青々たり、南に川有、日夜東流して蒼海にのぞめば、東呉萬里の舟をつなぐゆほびかなる壯觀也、なこその關、さはこの御湯、野田玉川、をだえのはし、小川の橋、岩城山、此城外一二里のあいだに有、おの〳〵興ある所也、玉川の水上に城主優遊の地あり、東籬に菊を愛し、南山の紅葉時をえたり、茸がり川逍遙のたよりおかしきしつらひ也。

世をつくすわが所かせ下紅葉

海のつらにはとまやかたの休所有、大河かきねに流れ、潮水門外にみなぎる、子陵がいとなみにことよせて、日をくらし夜をあかす、さながら仙客にことならずして、斧のえも朽ぬべし、やう〳〵八月いざよひの頃、ちかのしほがまちかきにはあらねど、みやこよりだに思たつべきをともよほされて、同行をさへたうびにければ、道すがらくちずさびつぶやきもて、相馬殿

の知よしゝ給中村をすぎて、名取川をわたるとて、

むもれ木はいつの紅葉のなとりがは

仙臺にいたりつきぬ、大守領し給ふ所なればいふも更也、城郭は岩壁をたたんで雲にそびえ、うしろの山は衆木青みわたりて、所々黄ばみ紅葉したり、前に川有、しら波岸をうつてみなぎり落、たゞには過しがたくて

前の守たゞひと目にてみちのくの

仙臺川やまもり置らむ

是よりしほがまに五里有、其程宮城が原を行、おりしも秋のさかり也。

みやぎ野を都の嵯峨は花もなし

岩城をたちて六日にや、まだ朝霧のほどにかの浦につきぬ、聞ならく六十よ國の中々に詞を絶たり、河原のおとゞのむかしおもひやられて、かの朝臣の爰によらなんとながめしあまの小舟に乘て、霧のまがきのしまかへれなくさしめぐる。

浦山はいづくはあれどあま小舟
　かゝる所の秋の夕ぐれ
鹽がまや色ある月のうす煙
島かくすそれしも霧の離哉
さて松しまのたゝずまひ、やうかはりめづらかにて、いたりふかきくまぐまみごころおほし、其夜はあまのとま屋にやどる。
　いのちこそうれしくみつれ松島の
　　松の思はむよはひながらも
松島の夕を秋のゆふべかな
松島やをしまはしみて月の舟
あくれば二十二日そらよくはれたり、又一葉にさほさしてをしまが磯、にがしゃまのこる所なし、よのつねの松のえださし、岩のかたちもめなれぬさま也、あま飛雁の聲、友よぶちどり、さながら畫圖にむかふが如く、又詩

聲をきくに似たり、やう〳〵遠寺の鐘夕照をおどろかし、烟浦の歸帆もよほしがほ也、輿に乘じて來り今日のたのしみ何にたとへん、あとのしら波かへるさはしのぶの郡二本松、三春などいふ城下を過て、又岩木にかへり入ぬ、爰に又日頃ありて長月の末に、

千々の秋よしやわかれは命かな

有明のつれなやたつた獨旅

此度は白川の關にかゝりて、

遠く來てあき風分る關路かな

雁よまて故鄉へ一書二所關

みちよりたより有て、岩城へつかはしける、

いとま申かへる山々しぐれ哉

下野國芦野といふ所に、西行法師のよめる淸水流るゝ柳のもとにて、

時雨にもしばしとてこそ柳陰

なすのしの原をとをる。

風や時雨なすのしの原露もなし

神な月のはじめに武藏の國にいたりぬ、こゝにも又しれる方おほく、とゞめられてひと日ふつかとすぎ行に、雪あられがちなる空には老の出たちもいかにぞや、春待つけてなどいふほどに、師走にもなりぬ、ある人與行に

年もおしまたずしもあらず花の春

旅宿歳暮

旅もよしまぎるゝこともなき年のくれ

かくてとしあらたまり、あけ行空四方のけしきもいちじるし、天が下しろしめす御城下なれば、御門々々よりはじめ民の家居まで、しめかざりしたる千歳のかげに、さし出べきならねど、世をいはひ身をことぶく日なれば

御代の春四方の本たつ東かな

むさし野やけふは霞もなびく世の

右書寫のついでに一むかしすぎにしかたおもひいでゝ、

行末ときゝ春はきにけり

廿とせのあとのしら波たちかへり

みる心ちする千加のしほがま

有芳菴野子

元祿文壇の三偉人

元祿時代は我が文學史中最も光彩あり趣味ある時代で、種々の方面に人物の打揃うて輩出したことは空前といふべきである。玆には歌學漢學の如き上流文學の方面は暫く措き、通俗文學の爲に氣焰を吐いた西鶴、芭蕉、近松の三人について語らうと思ふ。

此三人の中で西鶴が一番年長者で、芭蕉は之より二歲若く、近松は又芭蕉より九歲下であるが、その事業の世に現れたのは殆ど同時といつてよい。

西鶴の初作一代男の出た天和二年はこれまで桃青といつて居つた芭蕉が深川の草庵に一株の芭蕉を植ゑ、初めて芭蕉庵と號した時で、近松が義太夫の爲に新淨瑠璃出世景清を作つた貞享三年は、芭蕉の有名な古池の吟があつた年である。此三人が京大阪江戸と三方に分れたのも面白い現象で、それが小說俳諧戲曲の三方面に各〻革新の事業を企て、いづれも立派に成功してその歷史に新紀元を開いた、元祿の通俗文壇は此三人によつて代表せられ、此三人ありて始めて價値あるものとなつた、啻に元祿文壇といふに止まらず、我が文學史は此三人によつて重きをなした。

さて此三人の事業を話すには、少しく溯つて元祿以前の文學界の有樣を述べねばならぬ、家康以來世々の將軍が學問の奬勵に心を注ぎ、學者を優遇し古書を蒐集し印刷を興したりしたので、まづ漢學が盛になつて、藤原惺窩や林羅山等が出て儒學を說き敎化を布いたが、一般庶民に汎く文學的敎育を施したものは俳諧である。詩や歌は上流社會の文學で、一般町

人の知識や趣味は殆ど俳諧によつて養成されたと云つてよい。俳諧は連歌の通俗化されたもので、足利氏の末山崎宗鑑荒木田守武によつて起されたが、當時戰亂の世の中で普く流行を見るに及ばなかつたが、徳川氏の世となり四民漸く太平を樂む寛永の頃に松永貞徳が出て斯道を以て天下を風靡した。彼は僧侶出の連歌師永種の息子で、歌道を細川幽齋や九條玖山公にうけ、連歌を里村紹巴に學び博學の人であつた。それが昔の連歌の規則を簡略にして俳諧の連歌を始めたので、當時一般の風潮漸く文藝上の娯樂を欲する時に方り、相應の學問もあり、又公家とも交際があつて——妙法院の宮堯然法親王から大佛の南に廣い邸宅を賜はつたといふやうな社會的位地のある人が、門戸を開いて汎く弟子をとつた事であるから、多數の門人が集り來つて其道を傳へ、俳諧は都鄙一般に普及するに至つた。彼の門人には種々の方面の人を網羅して、林羅山や深草元政のやうな漢學者もあれば、加藤盤齋や和田以悦や北村季吟の如き和

學者もあるが、その大多數は矢張俳諧の弟子で、大名もあれば職人もあり、坊主やら商人やら相應に名の聞えた門人が九十人あまりもあつて、是等の人々が又門人をとつて枝に枝を生じて繁榮した事であるから、其流行の有樣は想像することができる。

貞德の俳諧は之を足利時代の宗祇や心敬の連歌に比較すると指合去嫌などの規則は稍寛大になつたものゝ、思想も付工合もさしたる差異がなく、只彼は雅語此は俗語漢語、彼は多く景色を詠じたるに此は人事に屬する材料が多くなつた位に過ぎない、貞德も宗鑑守武と齊しく滑稽を主としたけれど、それは發句(俳句)の方で連句(俳諧連歌)にはその趣味が乏しい。而して其滑稽なるものは緣語掛詞のもぢりにあらざれば、故事俗諺を用ゐたまはりくどい駄洒落で、思想上の可笑味よりも言語上の遊戲が主であつて、詩としての價値がない、此一派を世に貞門とも古流とも稱するのである。

打解けて氷と水や仲直り

冬籠虫螻までも穴あしこ

七夕の仲人なれや宵の月

此の如き幼稚な俳風も寛永より承應の頃まで二十餘年間の俳壇を占領して流行を極めたが、いくらのんきな昔の人でもいつまでも之に滿足すべきではない。西山宗因が出て談林風を唱ふるに方つて、古流の俳諧は漸く衰微して俳風一變するに至つた。宗因は加藤家の家來で主家の退轉の際浪人となつて京都に來り、尋で大阪に移り一派を興したのである。此談林風は延寶から天和貞享頃まで最も盛んであつた。宗因も貞德と同じく緣語や掛詞やの洒落を用ゐたが、それは彼の理窟がゝつた言語上の遊戲以外に自ら詩趣が豐かで、貞德流の如くもつちやりと重くれた洒落でなく、頗る氣が利いて輕快な垢ぬけのしたものである。貞德が故事俗諺を使用するに對し、宗因は詩句や謠曲の文句を引き、又その口調に擬

して新味を示した。全體の調子も貞德のやうに生ぬるくだらけずにキビ〳〵と引きしまつて居る。

花や是春宵一刻ふる手形
天も醉へりげにや伊丹の大燈籠
あふげ〳〵いづくか王地なら團扇
宿れとは御身いかなるひとしぐれ

談林派の俳諧は古流の如く窮屈な規則を設けず全く自由に放任して、その材料も傳統的な古典趣味よりも現代社會の風俗人情を材料とした、此傾向は宗因の高弟たる西鶴の小說にも能く現れて居る、宗因の連句に

仕方ばかり押肌ぬいて十文字
賢うやつてすます借金

とあるは、そのまゝ西鶴の胸算用の「門柱も皆假の世のすまひ」の趣向であつた。かくて貞門俳諧の陳腐無味に飽いた天下の俳人は談林の輕俊新

奇を喜び、果ては貞門一方の大將分だる人々も續々談林派に來り投する に至つたが、此派は最初から自由無拘束を標榜した爲、其弊は內容や形式に强ひて新奇を求めて人を驚さんとした結果、動もすれば、獨合點の樂屋落になつて人に通じない句や、むやみに字餘りを使つて散文的となり、一方では、才に誇つて推敲を忘れ、多作速吟を以て自己の力量を示さんとし、西鶴の如きも延寶八年には「生玉に大幕打たせ、一日四千句の矢數俳諧を唫ず、當地宗匠親疎ともに連り、內五人の差合見、八人の筆とり、其の外名を得るも得ぬも稻麻の如くこぞり、竹葦の如くまとゐて耳を傾け、千句の矢先雨霰とふりかゝつて、執筆は忽ち疲れにけり」といふすさまじい有樣である。貞享元年には住吉の神前で一日二萬三千五百句を吐いたといつて誇つた。かく宗匠自らが速吟多作に誇ると共に、他人の句に對する批評も寬大に流れ、妄に高點を與へて人氣を取り、飮酒放談の間に句會を開き全く一種の遊興となつて、文學といふ眞面目な考を忘れるに至つた。

此點に於ては流石貞德派は貴族的な師匠の學風をうけて多少の學問もあり、俳諧も亦神聖な歌道の一端なれば苟くもすべきものでないと、會席には和歌三神を祭りなどした、之と反對に談林派は何でもすきな事をして遊ぶがよい、儀式作法もあつたものかといふ調子で、まるで會席は遊藝のひろめ、宗匠は幇間といふ姿になり、一時新奇を以て人氣を得た談林風も次第に墮落の底に陷つた。流石の宗因も餘りの事におぞ毛を振つて俳諧をやめて、本職の連歌師に復歸し、それから天和二年に歿したのであるが、其翌々年は芭蕉一派の『冬の日』の選集ができ、蕉風がそろ〳〵頭を擡げて次第に其勢力を得るに至り、嘗て談林の勃興が貞門の人々を感化した如く、幾多の談林俳人を化して蕉風とならしめた、西鶴もその頃は主として小說の方面に活動し、その俳諧も晩年は餘程おとなしくなり、その門人推本西丸は蕉門の徒と交つて從來の談林風を棄つるに至つた。

芭蕉は伊賀上野の城代藤堂新七郎良精の家臣で、その若殿主計良忠の近

習であつた。良忠は蟬吟と號してはじめ貞德の敎をうけ、その歿後は季吟を師として俳諧を學んだ、かういふ緣故で芭蕉も早くから俳諧に親み季吟とはかねて知合であつた。寬文六年四月芭蕉が二十三歲の時蟬吟が急病で卒去したので、芭蕉は若殿の遺髮を高野山に納めた後、其年の七月に上野を脫走して京に上り季吟の門に入り、傍惺窩の孫弟子である伊藤坦庵について漢學を修めた。此時代の句は多く傳はらぬが、寬文十二年二十九歲の時の三十番句合の『貝おほひ』の中に、宗房といふ名で古風とも談林ともつかぬやうな

きても見よじんべの羽織花衣

女夫鹿や毛に毛が揃て毛むつかし

の二句がある。此年九月江戶に下つたが、一向思はしい事もなかつたらしく、延寶二三年頃からボツ〳〵門人もでき、鯉屋杉風といふ御納屋御用達が世話をして、深川の六疊一間の家に住ませた。これが所謂芭蕉庵で

ある。延寶三年は江戸の談林派が黨勢擴張の爲に御大將の宗因を迎へ談林十百韻を興行して

されはこゝに談林の木あり梅の花　　宗因

世俗眠をさます鶯　　雪柴

と凄じい意氣込で宣傳を始め、その翌年は宗因の天滿千句、西鶴の大句數等が續々出て、當るべからざる勢であつた。從つて芭蕉も素堂(信章)も此勢ひに捲込まれて、兩吟二百韻(延寶五年)に

梅の風俳諧國に盛なり　　信章

こちとうづれも此時の春　　桃青

と談林を謳歌し、江戸三百韻(同六年)の卷頭發句には

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁　　桃青

と全く謠曲口調の宗因風を學んだ。延寶八年の「田舍之句合」や「常盤舍之句合」にも

何と夏羽織縮緬は重し紗は輕し

分限者になりたくば秋の夕暮をも捨てよ

薯は山を穿つて金輪際に自然生

麩といふものあり性水を好んで氷に遊ぶ

といふやうな其角や杉風の句に同情をもつて、談林風の奇怪な句に共鳴したのである。　宗因とも面識があつたと見えて、俳家奇人談の傳へる所に據れば、或日宗因が市村竹之丞座へ見物にいつた時、折節芭蕉も居合せて初めて對面した、時しも宗因の弟子が「子はまさりけり竹之丞」の句を得て上五を置きかねて、梅翁に伺つたら、おや〳〵と冠すべしと教へたので、芭蕉も其奇才を稱嘆したとある。　俳諧うしろひもといふ書に「芭蕉翁東武より上り、西鶴に會しける時に、難波津に只ひともとの紅葉かなとせられければ、それは挨拶武藏野の月と脇をせられ」たとあるが、これは頗る疑はしい、西鶴とは恐らく交際はあるまいと思はれる。

かくて江戸へ出でから十年餘も過ぎた天和二年、例の芭蕉庵が燒亡したので一時甲州路へ行脚に出たが、翌年門人共の好意によつて草庵が再建されて再び茲に落ちついた、有名な「虚栗」の撰集が出來た。これは談林から蕉風への過渡時代を代表する句集で、漢文直譯風の一體を以て新詩境を開拓せんと試みたものであるが、露骨淺薄で含蓄がなく、失敗たるを免れない。

髭風を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ

貧山の釜霜に泣く聲寒し

貞享元年東海道を經て伊勢神宮を拜し、暫く故郷の伊賀に逗留して、大和より美濃伊勢尾張と旅行した、その紀行が「野ざらし紀行」で、中に

碪打て我に聞せよ坊が妻

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙

の如き佳句があつて、一家の特色を發揮し來つた。此年尾張で冬籠りし

て、同地方の門人荷兮野水等と興行した五歌仙を『冬の日』といふ。蕉風連句の開基として頗る注目すべきもので、此年を蕉風獨立の紀元とすべきであらう、時に四十一歲。

霜月や鶴のつく〴〵並びゐて　　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　　芭蕉

その後引續き『春の日』『曠野』『瓢』の集が出て、元祿四年『猿蓑』ができた
これは蕉風の最も圓熟完成した時代を代表するもので、かくて同七年大阪滯在中痢を病んで五十一歲で歿した。
芭蕉が一流を立てたのは四十歲以後で、それより死に至る十年間、大抵行脚に出て「笠きて草鞋はきながら」年を暮らし、自然と同化し幽玄閑寂の思想を養ひ、一日も修養を怠らぬと共に、到る處その道を傳へ後進を誘掖したので門人は天下に滿ち、終に蕉風卽ち俳諧、俳諧卽ち蕉風といふ有樣となつた。貞門談林の徒が遊戲視した俳諧は芭蕉によつて極めて眞面目

に嚴格な態度を以て取扱はれ、最早駄洒落や輕口頓智のいひ放しでなく詩歌と同等の内容をもち、それと對等の位地を占むるに至つた。宗因の「世の中や蝶々とまれかくもあれ」にも輕快な浮世を茶かした一種の詩趣はあるが、芭蕉の「起きよ〳〵我友にせん寢る胡蝶」に至つては眞摯な人情の溫味が出てゐるではないか。談林の輕快だけでは滿足せられなかつたのである。

和歌連歌の因襲的趣味に因はれず、汎く詩材を求め新たに詩境を開き、和歌連歌に用ゐられた材料でも、一種新しい見方で鑑賞した。芭蕉が「春雨の柳は全體連歌なり、田螺とる鳥は全く俳諧なり」といひ、去來が「和歌は制法多く題も名所も限あり、法外に遊ぶことなし、此故に和歌の名所和歌の題定れり、俳諧は分量なし、題として俳諧ならずと云ふことなく、詩として俳諧に用ひずといふことなし、只和歌の見所と俳諧に睨む所に趣違ひあるのみなり、たとへば花は和歌の題、菜種は俳諧の題といふはよし、花は俳

諧の題にあらずといふは非なり」といつたのは、正に此意味である。

芭蕉は俳諧の內容を變化せしのみならず、形式に於ても談林の無法則を主張しないが、さりとて貞門の法式にも拘泥せず、まづ一通りは法式に據るものゝ、必要に應じて法式を打破つて束縛を甘んじない、前句に對する付方も、これまでの物付心付を變じて、匂響を以て付けることゝした。物付とは古く連歌時代より貞德時代までの習慣で、前句に出た詞の緣にすがつて付けるので、例へば

　　十王堂に秋風ぞ吹く
淨玻璃の鏡に似たる月いでゝ　　貞德
　　馬に乘りたる人丸を見よ
ほのぼのと明石の浦は月毛にて　　貞德（淀川）

心付は談林時代に盛に行はれたもので、前句中の詞によらずして全體の意味を受けて付ける法である。

はねつく〲と垣間見らるゝ　宗因
なまめいた男ありけり近隣　同
一封の書状に涙包みこめ　同
故郷の妻にやる金はなし　同　(西翁十百韻)

蕉風は前句の餘韻餘情を辿つて、卽かず離れず一種幽玄なる付方をするので、ちよつと見ると兩々獨立して何等の關係なき如くなれども、よく味ふときは、其間に微妙な連絡があつて、互に匂ひあひ響きあつて、何ともいへぬ微妙な音色が出る。

火ともしに暮るれば登る峰の寺　去來
時鳥皆鳴きしまひたり　芭蕉
灰汁桶の雫やみけりきり〲す　凡兆

油かすりて宵寢する秋　　芭蕉（猿蓑）

芭蕉は清僧のやうな恬淡寡欲の人で、浮華淫靡な元祿時代の俗界を離れて、幽清閑寂な自然に親んだけれども、極めて人情に篤く、謹嚴で社會的の禮儀作法を重んじた。門人の杉風は耳が遠かつたので、それを氣の毒に思つて終身聾の句を作らなかつた、それから門人の中に路通と云ふ輕薄な才子があつて芭蕉の勘氣を蒙つてゐたが、死ぬときには門人に遺言して、自分が死んでも、どうか路通を憎まず憐んでやつて呉れと云つた。路通も芭蕉が死んだと聞いて、遠方から晝夜兼行で驅けつけて墓前に慟哭したと云ふ事である。又非常に禮儀正しく嚴格であつたと云ふことは、或俳諧の席上芭蕉が附句に案じ入つて非常に手間が掛つた、それで書記役の執筆が退屈のあまり筆で爪に字を書いてゐた、芭蕉はそれを見て大變に不機嫌で文臺を下れと叱責した。さう云ふ風であるから其角や嵐雪なども成るべく芭蕉と同宿なんかしないで別に居る工夫をした。又

或時奥州磐城平の城主内藤露沾といふ俳諧ずきの殿樣の所に芭蕉と其角とが招かれた、露沾は煙草嫌ひであるから、芭蕉は遠慮して一服もその席では喫はなかつた。すると歸つて來てから磊落豪放を以て自ら任じて居る其角が大不滿で、一體先生は貴人の前に出たからと云つて、好きな煙草もひかへて喫はぬと云ふのは諂諛に近いでありませぬかと云つた。芭蕉は靜に、一體俳諧は小技ではあるが矢張一道である、されば風雅の中にも禮節を忘るべきものでない、作法を破るを磊落と思ひ、禮式を省いて風流と考へて居るのは非常な心得違ひであると其角を諭した。さう云ふ風な點のみを見ると、褊狹な人のやうに見えるが決してさうではない。弟子の北技が俳諧の爲めには一體どんな書物を讀んだらよからうかと尋ねた時に、讀んでわるい本と云ふものはない、儒佛より國書、謠、淨瑠璃何でも見るが宜しいと言つた、それから又、他流の人と交際しても差支ないかと聞いたら、それは一向苦しくない、交際して惡るいものは盜人と博奕

打であると言つた。指合去嫌などにも寛大で、自分はこの方面は不案內であるが、差合ぐりの上手といはれんよりは、俳諧に上手な方が望ましい、牡丹に芍藥を附ける事はまさか出來まい、これは心の好みであつて差合といふものではない、付けらるゝ働きがあるなら付けてよろしいともいつた。前にいふ通り極淡泊な人で色食の慾なんと云ふものは非常に少ない、蒟蒻が好物であつたのを見ても、變つた人であつたことが分る、婦人に關した話と云ふものは殆どない、自分が若し女房をもつなら、身分のある上﨟は元より不似合なり、さればとて遊女なんかも自分のやうな鈍物にはいけないし、黑木賣の女が一番よからうと戲談をいつた。それならば其句は禪宗坊主のやうな悟めいた抹香臭いものかと云ふに決してさうでない、戀の趣味をも能く解して居る。芭蕉の哲學は風雅の二字にある、外物の爲に心を役せらるゝことなく、天地自然に同化し四時を友とする時は、心の向ふ所天地皆俳諧、花に對しても面白く、味噌に對しても面白

い、風雅の心なきものは夷狄禽獸にひとしい、早く夷狄禽獸を離れて、造化に從ひ造化に還れといつた。要するに趣味の廣い人で、玉のやうな溫厚な中に毅然として侵すべからざる所のある立派な人物で、日本の文人中ではたぐひ稀な氣品の高い人である。

さて俳諧は右の如き變遷を經て、蕉風が天下を一統するに至つたのであるが、此芭蕉の俳諧は貞門や談林に較べて餘程高雅なもので、一種獨特の趣味の上に立つて居るから、本當にその趣味を解し之を味ふには多少其道の修養を積まなければならぬ、どんな人でも初めから同じやうに其趣味が十分に分ると云ふものでは決してない。芭蕉自身にも亦誰れにでも分ると云ふことを望んで居らぬのである、唯少數の同趣味の具眼者と共に樂まうとして居るのである、ひまつぶしの慰みにする俳諧、それもあつてよいけれども、自分のやる俳諧は決してそんな物ではないと云ふことを言つて居る、其處が餘程一般の聽衆や讀者を相手とする淨瑠璃や小

説とは違ふのである。　之を食物に譬へて見れば、雲丹とか鱁鮧とか云ふやうなもので、好きな人は何とも言へない乙なものだと云つて舌打をして喜ぶが、百人が百人誰れも旨いと云つて感心するものではない、中にはつまらない何處が旨いのかと云ふ人が隨分多い、殊に芭蕉が尊んだ幽玄閑寂と云ふやうな趣味は、晝夜算盤珠を彈いて損得に目角を立てゝ、たまたま骨休めと云へば、酒色の外に出ない元祿時代の町人なんかに十分に理解されべきものでない、談林の俳諧は蕉風とは違つて、其趣味は卑近であつて流行の新しいことを云ふとか、人情世態を寫すとか、餘程一般の人の耳に入り易い、從つて一時大に流行したのであるが、是とても小説や淨瑠璃程廣く行かぬ、矢張作者卽ち讀者、讀者卽ち作者と云ふ有樣である、斯う云ふ文藝を樂む範圍と云ふものは廣いと云つても限りがある、一般向きの娛樂となるべき文藝が、是非此穴を埋めるために無くてはならぬのである、雲丹や鱁鮧では腹が脹れない、もう少し脂濃いしつこい物で、誰にで

も旨くて腹の脹れる牛鍋流の文藝が必要である。西鶴の浮世草紙や近松の淨瑠璃がそれである、此西鶴と近松の二人は丁度芭蕉が連歌や貞德派の俳諧の束縛を脫して新しい詩境を開いたのと同樣に、是迄の古い文章や古い型を破つて、さうして端的に社會人間を寫さうと企てたものである、元祿以前の小說戲曲と云ふものは、丁度貞德派の俳諧が古臭い故事や諺を使つて氣の利かぬ洒落を繰返して居るやうに、足利時代から承け繼いだ極り文句をつらねた美しさうな言葉を並べ立てるばかりで、極めて影の薄い活氣のない感情も何も移らないものであつた、之に反して西鶴や近松は借物でない自分の觀察と自分の文章で以て現代の社會や人間を寫した、それで是迄のものとは全く面目を一新した生氣溌剌たるものが出來たのである。德川の天下も元和偃武から元祿までは彼是れ七十年もたつて、太平の餘澤に文化も著しく進步して生活の程度も高くなり、人民は皆太平に醉うて嬉々として樂むと云ふ有樣である、殊に三府の

繁昌はとり〴〵で、江戸は將軍の御膝下で政治上の中心、京都は禁裏樣の御座る所で、文化の中心であるが金力に於ては到底大阪には及ばない、大阪は商業の中心であつて諸大名の庫屋敷がある、堂島の米相場は全國の大勢を左右する、日本全國の賄所と言はれて居る、江戸は武士の威張つて居る所で大阪は町人の幅を利かす所である。町人を相手にする文學が大阪に起つたのは當然の勢である、西鶴は元來大阪の生、宗因や近松は京都から大阪へ移つた。芭蕉のやうな枯淡な脂氣の少ない出世間的の人物は、大阪のやうな所に歡迎される人ではない。

當時の成金黨の驕奢は隨分甚しいものであつて、江戸の紀文、奈良茂、大阪の茨城屋幸齋、淀屋辰五郎など皆有名な者である、是等の町人は大した敎育もなく理想が低くゝて道德の制裁と云ふものも強くない、從つて金に任せて勝手な事をするから風俗が自然と淫靡になる、遊女と野郎が元祿文學の二大材料であると云ふのも戀愛が肉感的であるも是がためであ

る。

西鶴は芭蕉と違つて一向傳記が分らない、唯大阪の鎗屋町に住んで俳諧の宗匠をして居つた、始めは談林の驍將として色々な俳書を著してゐるが、師匠の宗因が死んだ天和二年卽ち彼が四十一歲の時――芭蕉の「冬の日」が出來たのと同じ年齡である――始めて好色一代男を書いた、それが非常に當つたので、續いて二代男、五人女、一代女と云ふやうなものを著し、後には好色本を止めて武道傳來記、武家義理物語、永代藏、胸算用と云ふやうな武士の話や町人の遺緣算段を書いたものを著はした。芭蕉より一年まへ元祿六年に五十二歲で歿した、江戶の紀文に其角が附いて居つたやうに、西鶴は天王寺屋など云ふ豪商の取卷になつて遊里に出入して居つた、又本屋から原稿料の前借をして本を書かない中に死んでしまつたと云ふやうな話も傳つて居る、元來談林派の俳諧は新規な流行や風俗なんかを材料にして世態人情を寫すのを主として居るもので、是が一變すれ

ば寫實小說となるべき傾きがある、延寶五年の西鶴の大句數から一例を出すと、

胸の火や少し心を置炬燵
揚屋ながらも初めての宿
何と亭主かはつた戀は御座らぬか
昨日もたはけが死んだと申す

といふやうな調子で、少々テニハを加ふれば、すぐに好色本の一節が出來上る、西鶴の才は特に世態人情を寫すと云ふやうな方面に適して居つた、それにこの時代には遊女評判記や野郎評判記が盛んに行はれた、其風潮は延いて熱心な遊廓研究者を出した、畠山箕山と云ふ男は奥州の端から九州まで遊歷して、三十年以上も掛つて色道大鏡と云ふものを書いて居る、西鶴もさう云ふ時勢の風潮に促されて遊女評判記を小說的の形式で綴つたのが即ち此一代男である、之より前に評判記以外に『催情記』(明曆

三年刊)や『たきつけ、もえくゐ、けしずみ』(延寶五年刊)といふ類の好色物もないではないが、是等は皆隨筆風の書き方で、一代男のやうに纏つた物ではない、西鶴の物は全く目新しい趣向である上に、文章は多年俳諧で鍛へあげた腕の冴えた簡潔な力の籠つたものである所から、非常な大喝采で江戸の方にも僞版が出來るといふ勢であつた、それから乘氣になつて、矢繼早に二代男五人女と續いて出して、小說の方に熱中して居る中に、蕉風が次第に盛んになつて、談林の林に秋風が吹きそめたので、遂に本職の點者の方は疎かにして、小說家として身を終るに至つたのである。今日より見れば、西鶴は文壇の大立者、新小說の創立者であるけれども、彼れ自身は芭蕉のやうに眞面目な理想を持つて、俳諧を以て風雅に達する唯一の道と信ずるやうな、そんな抱負や自覺があつた譯ではない、唯世間の風潮につれて濁波を上げたのである、好色本は畢竟遊女評判記の變形である、されば元祿の書籍目錄にも評判記も同じ所に並べて、著者の名も現はし

てない。

さて一代男は世之助と云ふ男が七歳の時に始めて戀を覺えて、三府を始め諸國の色里でたわけを盡して、日本も遊び飽いたと、六十歳の時に好色丸と云ふ船を拵へて女護の島に遠征に上つたと云ふ筋で、諸國の遊廓の有樣や遊女の批評を書いたもので、それが世之助と云ふ主人公に依つて連絡されて居るといふまでゝ、一章々々が有機的に繋つて居るのではなく、別々の小話を一筋の紐で繋ぎ合はした形になつて居る、つまり評判記のきぬを十分に脱いで居らぬ、二代男は更に逆戻りして、一貫した主人さへない。所がそれが段々進化して五人女や一代女になつて完全な小説體になつた。晩年になつては流石に西鶴も年の劫で、町人物や何かには折々眞面目くさつて、人は若い時は十分働いて老年になつて勝手な面白いことをして十分樂しむがよいと教訓めいた事を言つて居る。西鶴は今日いふ所の純粹の寫實家とはいへない、往々輿に乘じて誇張した點も

あるが、兎に角此時代の空氣や氣持を多く想像を加へないで描寫した一種の寫實家で、近松の樣に美しい情緒や感傷的な氣分を交へずして赤裸々の人間を寫した。社會の表面を寫すと共に其裏面をも見逃さないで無遠慮に極めて辛辣に描いて居る。芭蕉は俳文を論じて「世上の俳諧の文を見るに或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢音を入れ、詞荒く賤しくいひなし、或は人情をいふとても、今日のさかしき隈々まで探り求め、西鶴が淺間しく下れる姿あり、我徒の文章は慥に作意を立て文字はたとひ漢章を假るとも、なだらかに言ひつゞけ、事は鄙俗の上に及ぶともなつかしく言ひとるべし」とあるが、そのさかしきくま〴〵を探つて淺間しく下れることを無遠慮に書き立てゝ、さうして鄙俗の上に及ぶとも懷しく言ひとると云ふやうなことは西鶴は決してやらない、酒色の歡樂に醉ひ狂つて居るこの時代の人を見ても、別に淺ましく思つたり愛想を盡かしたりしないで、其處が浮世の面白い所であると云ふ方に悟つて、平氣

で砂埃を浴びつゝ人込の中へ入つて共に踊り狂ふと云ふ樣子がある芭蕉に至つては騷々しい人込を避けて靜な場所に身を置いて、餘所ながらヂット見て居ると云ふやうな態度である、西鶴は何處までも元祿時代の人物であつて、芭蕉は元祿の人としては確かに變物である。

元祿時代は打續いた太平が齎した物質的文明に醉うて夢中になつて、十分に自己を反省する遑のない享樂時代である、町人は金力を得て武家より裕福になつた、敎育もなく理想もなくして富を得た町人は、何に依つて自分の慰藉を求め、又何に依つて自分の虛榮心を滿足さすことが出來るであらうか、階級制度の悲しさには幾ら金があつても町人は何處までも町人である、名譽や權力を以て世に誇ることは到底出來ない、此に於てか遊廓や芝居と云ふものが町人の極樂淨土になる、其處に行けばどのやうな贅澤をやつても僭上をしても、誰れも咎める者がない、威張り次第に威張つて大盡樣と奉られる「町人の身ながら太夫買て禿に足をひねらせ、太

鼓に輕薄笑させて、寢ながら酒のんで、四つ袖の大夜着かづいて伽羅くべて股火をすればとて、天下の御法度を背かざれば何の咎なし」(手管三味線)此樣な別世界に無理想無敎養の人間が狂ひ遊んだ有樣を有の儘に描寫したのであるから、其文字が卑猥に陷つたのも自然の勢である、さうして西鶴自身も亦この踊り狂ふ渦中の一人である。かく一方では歡樂世界の耽溺者であると共に、一面において彼れは傍觀者の位地に立つて、冷靜なる態度を以て人間の弱點や醜い所を觀察したのである。芭蕉は浮華淫靡な世の中を厭うて、無心の山水に放浪して寂寞を樂みながら、遙に人間の美しい點、人生のブライトサイドを認めた厭世的樂天家であつて、西鶴は放縱淫靡な世界に狂ひ遊びながら、矢張人間のダアクサイドを見逃さなかつた樂天的厭世家ともいふべきである、西鶴は一寸さきは暗の夜で神も佛も當てにならない、世の中は面白をかしく暮すが得であると云ふ現實主義の人である、之を近松と較べると西鶴は想像を加へずして事

實を直寫し、道德的觀念が乏しい。近松は想像を加へて事實を詩化し醇化して、それに道德的色彩を付加して居る、西鶴の物を讀むと、惡ずれのした通人の皮肉を聞くやうで、近松の方は同情の暖みがあつて、溫和な世馴れた老人の敎を聞くやうな感じがする。

西鶴の鋭利な觀察や簡勁な文章は我文學史中に獨歩すべきもので、元祿以前の小說と云ふものは、まだ純粹の小說らしい體裁をなして居らぬ、或は儒、佛、道、此三敎一致の主義宣傳を旨として、通俗的敎訓を說いた隨筆的のものや、或は文學的名所案內の類であつて、偶〻『恨之介』や『薄雪物語』などと云ふ小說はあつても、それは淸水の花見に行つて美人を見初めて戀病になつて、腰元の手引でやう〳〵妹背の契を結んだと云ふやうな、如何にも古臭い趣向を古臭い文章で、型の如く極り文句の形容澤山に述べたに過ぎない、畢竟足利時代の墮落した物語の系統を其儘に受けついだので、何等の面白味もない、然るに西鶴が出て昔の型や極り文句を排斥し

て、當時の言葉を以て當時の社會を寫し、生氣潑剌たる新小說を出した、是が西鶴の偉大なる所以である。 馬琴は西鶴を罵つて無學文盲と言つたが、それは時代を知らぬ暴言で、元祿時代と文化文政とは一般文化の程度が違ふ、元祿時代の俳人としては相應の素養もあり、古典の知識も一通り備へて居る、馬琴のやうに讀書から得た知識をむやみに並べ立てられては隨分閉口する。 近松は西鶴に較べると多少學問が廣くて、和漢の故事や典據などを澤山使つてあるが、流石に旨くそれを消化して所謂鉛を化して銀となす手段を取つて居る、西鶴に至つては故事典據などは餘り採らない、手近な諺などさへも近松に較べると、用ゐ方がズット少ない、それからテニハを省いた引締つた俳諧的文章が讀者に新味を感ぜしめる、「暮に及べば椋橋山の麓に、かすかなる草の屋に折しも秋の半、穀竿の音のみ、里の童ねぢ籠、雨蛙の家などして、塵塚より鉈豆といふもの、いとをかしく生ひ下りたる垣根」など具象的で讀者に與へる印象が強い。 從來の小說

では美人を形容すれば、月の顏、柳の眉、花の唇など、よいことづくめの極り文句を並べたてる。近松は流石に新しい譬喩を使つて居るが、想像の分子が多くて實際に適切でない所がある、西鶴に至つては何處までも寫實的で、どんな美人でも必ず何か缺點を見出して書いてある、非常な美人で何處にも點の打ち所がないと思つたら、物を言ふ所を見ると下齒が一枚缺けて居つたと云ふやうなことを書いてある、其人物にもそれ〴〵モデルのあることは、惡口をいつた場合はその遊女や野郎の名を隱して、「こゝに名をいふまでもなし、後には知るゝ事なるべし」とか、「爰に遠慮す」といつて居るので察せられよう。かく西鶴は舊態を打破して小說に一新體を創剏し、幾多の追隨者を出したのである。

西鶴以前の小說がつまらなかつたと同樣に、近松以前の淨瑠璃と云ふものも殆ど見るに足らぬものである。淨瑠璃は足利の末に起つて、牛若が奥州へ下る途中で、矢矧の長者の娘の淨瑠璃姬と契つた事を語つたので、淨

瑠璃と云ふ名が出たのであるが、最初の間は扇拍子で盲法師などが語つた。それが慶長の頃になつて三味線を合せたり、人形に掛ける事をし出して、次第に流行するやうになつて來たが、その始めは幸若の舞曲や御伽草紙の樣なものに、少しばかり修正を加へて語つたのであるが、段々盛なるに從つて新作も出るやうになつたが、それとても孰れも足利時代の物語風の系統を引いたものであつて、唯事柄を次々に述べ立てゝ行く敘事風の文章で、時間や場所の移り變りなど一向無頓着で、今子供が誕生したことを云つて居るかと思ふと、二三行立つと「かくて若君十五歲になり給へば」と云ひ、今鎌倉のことを話して居るかと思ふと「急げば程なく都に着き給ふ」で直ぐに京都に飛んで來て居る、こんな文句に合してどうして人形を使つたのか、殆ど想像に苦しむ次第である。さうして其材料は多くは荒唐無稽な英雄談や神佛の靈驗を書いたもので、現實の生活とは殆ど無關係な夢のやうなものが多かつたのである、それを近松が出て其作風

を一變したのである。

近松は西鶴と同じく經歷が能く分らない、或は西鶴の俳諧の弟子であつたとも云ふが、是も確かなことは分らぬ、又生國も色々異說があるが、兎に角二十歲前後の頃は京都に居つたと云ふことは確實で、芝居國で名高い彼も若い時は都萬太夫座(四條の歌舞伎芝居)の拍子木を打つたり、道具を直したりしたものであると、當時の評判記類に見えて居る。で一時下廻の役者でもやつて居て近松姓を名乘つたのではなからうか。萬太夫座所屬の俳優に近松勘之介、同京之介、同梅之助などいふ名の見えるのも注目すべきであるといふ說は傾聽すべきである。當時の狂言作者は皆役者出であることも、かたぐ\思合はされる。延寶五年彼が二十五歲の時、萬太夫座のために弘徽殿の怨靈で藤の花が大蛇と變ずる趣向を構へて大喝釆を得た。此脚本は今日に傳はつて居ないが、弘徽殿鵜羽產家と題する淨瑠璃に此趣向を再び使用してゐるので其趣を知ることが出來る。

その翌年坂田藤十郎の爲に夕霧名殘正月を書き、元祿元年には水木辰之助のために今源氏六十帖を書いた、この他歌舞伎脚本で貞享、元祿、寶永の頃に書いたものが數種傳はつて居る。かく歌舞伎狂言の作をすると同時に、井上播磨掾や宇治加賀掾等の爲に淨瑠璃をも作り與へた。

義太夫が未だ獨立せずして京の加賀掾座にあつた頃から、兩雄互に其才を認めて、默契する所ありしもの丶如く、義太夫が大阪に下りて竹本座を創立するに方り、出世景清の新作を與へて、出世の二字に前途の幸多からんことを祈つた。此頃近松はまだ京都に住居してゐたが、元祿十六年大阪に下り世話物の初作「曾根崎心中」に大當りを得てから、全く大阪に尻をすゑ、專ら義太夫の爲に思を凝らし筆を走らして年々幾多の新曲を出し、太夫の妙舌と作者の靈腕と相待つて浪花名物の隨一となつた。

彼が淨瑠璃の初作は、いつ頃何といふ作がそれであるか不明であるが、これは井上播磨や宇治加賀の語物中に求むべきである、然るに播磨の物は

板木が燒失して傳はらない、加賀の物では「赤染衛門榮華物語」が延寶八年正月の刊行で、今日までに發見された物の中では最も古い、その翌年に「東山子日遊び」や「つれ〲草」が刊行された。延寶八年は近松の二十八歳の時であるが、實際の初作は猶これより二三年溯り得ようと思ふ。初作から貞享三年の「出世景清」に至る頃までは、殆ど古淨瑠璃の形式をそのまゝに襲踏したものであつて、文章も結構も共に多く言ふに足らぬ、正に巣林子の練習時代と見るべきである。此時代の作は事件の顚末を敍說するに止まり、對話の呼吸圓熟せず、結構も單純に過ぎず、すべて戲曲としての用意を缺き、舞臺上の効果を閑却して居る。時間空間の移動についても只物語風に敍說して舊套を脫して居らぬ。

さりながら聰明な彼は長く此陋習に囚はれなかつた、實地の經驗を積むに隨ひ、やがて物語風の舊套を脫して戲曲の新體を創立するに至つた。かくて言語應對の緩急疾徐おの〲其宜しきを得て、無心の木偶に魂を

入れ、嬉笑怒罵眞に迫るを覺えしめたのである。

近松の作百餘編、その中世話物は二十三篇で割合に少い。上方の歌舞伎芝居は最初から寫實風の世話事が多く行はれて、その方面で成功した藤十郎のやうな役者もあつたが、淨曲は傳統上から時代物に限られたやうになつて居たので、近松も最も此方面に精力を注いだのであるが、元祿十六年五月興行の切狂言に始めて「曾根崎心中」を出して評判を得てから後世話物を書き出したので、此時が既に五十一歳であるから、七十二歳の歿年まで約一年毎に一篇を出した割合である。近松は西鶴よりは三十年ばかり後の享保九年に歿したから、三人の中では一番後輩で又一番長命であつたのである。西鶴の小說は最初から成功して居るが、近松は寧ろ西鶴よりも芭蕉の方に進步の順序が似てゐる、芭蕉の俳諧が最初貞門や談林に彷徨いて居つた樣に、近松も最初の間は古淨瑠璃の眞似をやつて居つた、中には舞曲本や謠曲の丸取りのやうな所もあつて、兎角物語風に

流れて戯曲の體裁を具へない、時間空間の移變りにも極めて無頓着なことをやつて居る、是等の短所をスッカリ除き得て、立派な戯曲の出來るやうになつたのは、芭蕉と同じやうに四十歳過ぎてからである、名作と言はれるやうなものは五十歳以上のものに多い、時代物は仕組が波瀾變化に富んで見た目は賑やかであるが、荒唐無稽な夢のやうなことが多くて、今日の人には面白くない、世話物になると是と反對で、其事柄も尋常で人物も亦普通有觸れた男女で、能く此時代の女房氣質、遊女氣質、若者氣質、老人氣質が寫し出されて居る。世話物は孰れも事實に基いたものではあるが、之を寫すに方つては必しも其事實に拘泥せずして、自己の溫和健全な人世觀を以て之を醇化し詩化して、敵も味方もそれぞ〲道理あるやうな同情に富んだ筆を以て描いて、吾々をして如何にも人世の曖みを覺えしめる、西鶴のさかしき隈々を探り求めたのと違つて、極端な寫實は藝術でないと云ふのが近松の見解である、近松の言葉で云へば藝と云ふものは

實と虛との皮膜の間にあるものである、いくら美人でも實際通り忠實に寫生をしたならば、却つて醜い所が現はれて愛相がつきる、實際を寫す中にも亦大まかな所があつて始めて藝術になるのであると言つた西鶴が下等な若衆を相手にして疥癬の手を打ちかけられるのを「嬉し悲しい」といつたり、人中で太夫が放屁したのを「面白の春べやな、天晴口說の本だて」と興じたのとは、全く反對のいき方である。之を要するに近松は樂觀的の詩人である、心中のやうな悲慘なことを書いて居つても、其調子は何となく華やかで陽氣な所がある、西鶴の作は飲めや歌への歡樂の中にも何處となく暗い影が伴つて居る、近松の作は濕ぽい悲みの中にも何處やらに光明がある、同じ材料を取扱つたものでも、西鶴の人物はひねくれて捨鉢になつて世間に反抗すると云ふやうな所があり、近松の人物は素直であつて浮世の義理には飽くまで服從する、西鶴の人物は往々世を詛ふやうな言語を放つが、近松は一死を以て義理人情の衝突を調和し得たもの

として、未來の成佛を樂むと云ふ風がある。

以上の三人は其人物性格に於てもそれ〴〵違つて居り、又活動した方面も違つて居るが、孰れも元祿文學に新機運を導いて從來の面目を一新した人々である、傳襲的の舊套を打破して古い型に依らず、前人の思想を其儘に借り來ることをせず、自己の見聞感得に基いて眞實を寫した點に於て相一致して居ると思ふ。即ち芭蕉は天地四時の情景を寫し西鶴は現實の社會の表裏を暴露し、近松は義理人情の曲折を描いた。此傳襲的の思想形式を排斥して新しい文學を起したと云ふことが、此三人の偉大なる所以である。

芭蕉と戀

一道の祖となつた人は兎角後世の崇拜者から箔をつけられて、超人間のやうな性格に仕立てあげられるものである。我芭蕉の如きも其一例で

恬淡寡欲一生不犯の淸僧のやうに、一部の人々に思はれて居る。成程芭蕉の傳記には妻帶した事もなければ、情事に關した記事も見えぬ、しかし彼の經歷の明かに知られるのは中年以後で、二十三歲の時主家を脫して京都に走り、五六年在京して寬文十二年九月江戶に下り、延寶四年深川の芭蕉庵に入るまで、十年間ばかりの若盛りは、全く不明であるから何ともいへない。生來虛弱な體質で豆腐や蒟蒻のやうな淡泊な食物を好んだ點から考へても、性慾の方面にも淡泊であつたらうが、華奢淫靡の元祿時代に血の氣の多い靑春期を京江戶に過したのであるかち、その方面は全く風馬牛であつたとは到底考へられない、數年前故大野洒竹氏が淺生庵野坡の門人風律の隨筆「小ばなし」中に師野坡談として、「壽貞は翁の若き時の妾にて、とく尼になりしなり、其子次郞兵衞もつかひ被申し由」とある一章を發見し、それに力を得て芭蕉句集中の

尼壽貞が身まかりけるを聞て

数ならぬ身とな思ひそ魂まつり

の句を見つけ、沼波瓊音君などは芭蕉樣ようこそ妾を持つてくだされたとまで(從來の芭蕉觀に反抗の意味もあつて)驚喜したのであるが、此句以外には、壽貞云々との不得要領な手紙が二通あるのみで、餘り有力な證據も出ないやうである。その節自分もちよつと雜誌藝文に書いた通り、肥後八代の俳僧文曉の芭蕉談(自筆寫本)には、壽貞は芭蕉の乳母となつて居る、文曉の芭蕉談は芭蕉の僕次郎兵衛の談話を、長崎の卯七が聞書した事になつてゐるが、これも大分疑はしい點があつて、芭蕉の臨終を書いた花屋日記――同じく文曉の手から出た――と共に大に考證を要するもので、容易く贊同しがたい。とにかく「数ならぬ身とな思ひそ」だけでは、妾でも乳母でも差支ないやうである。

かういふ譯で芭蕉蓄妾説も證據不十分であるが、この説が動機となつて一般の芭蕉に對する考が大分變つて來て、芭蕉と雖も無論若い時は遊び

もしたらう、イヤ芭蕉は女より寧ろ若衆好きだらう、吉野へ遊んだ時杜國が萬菊丸と童らしい名を名乘つて件したのも、此趣味だといふ人もあつた。趣味といふ言葉には必ずしも實行を件はぬからよいやうなものゝ、吉野行の元祿元年は芭蕉四十五歳、杜國はその翌々年に歿して居るから、いくら若く見ても三十歳以上であらう。四十過ぎての芭蕉にかういふ想像を加へることは無理であらう。

さて萬菊丸の一件はまづ寃罪として、然らば芭蕉に此趣味なきかといふにそれは疑はしい、何しろ女若兩道繁昌の時代、殊に上調子な談林風の渦中を出でなかつた寛文延寶天和年中の句には

梅柳さぞ若衆かな女かな

艶なる奴花見るや誰歌のさま

（延寶五年春

さりなりを長柄の橋も作るなり　　信章

能因法師若衆の時　桃青

貞享元祿中にも

　　圃角扇に讃を望むに

前髮もまだ若草の匂かな

名月や兒達ならぶ堂の緣

　　少年を失へる人に對す

埋火も消ゆや淚のにえる音

梅柳の句は西鶴にでもありさうで、少年を失うた人に對する同情も甚だ深い。まんざら其道を解せぬ人でもなささうだ。

女を詠んだ句は可なり多いが、それ等の中から又主材は女でなくても、とにかく艶氣のあるものを拾ひ出すと

　　（寬文延寶天和中）

後家の秋物の哀をとゞめたり

（貞享元祿中）

紅梅や見ぬ戀つくる玉簾

猫の戀やむとき閨の朧月

粽ゆふ片手にはさむ額髮

行末は誰が肌ふれむ紅の花

遊女の畫讃

枝ぶりの日に〳〵かはる芙蓉かな

紅梅と猫の戀の外はいづれも主觀的態度を離れて、傍觀的に詩化されて居る、次に連句の方を觀るに

（延寶六年）

ゆづられし黄金の膚こまやかに　桃青

小糠みがきの革袋あり　信章

旅枕油くさゝや嫌ふらん　信德

鰯で假のちぎり燒かるゝ　桃青
はかゆきにさく〳〵汁のうす情　信章

裏かへす疊破れて夢もなし　信徳
蚤に喰れて來ぬ夜數搔く　桃青
君々々爪のさきほど思はぬか　信章

神代もきかず百文の戀　春澄
靈寶の枕草子をふし拜み　桃青

（延寶七年）

もしもみつちやに戀やさめなん　杉風
岩橋の夜の小袖を引かぶり　桃青
一汗ながす谷川の月　同

以上は談林時代の附合で、貞享元祿頃のものとはちがつて、餘程肉的でありふざけて居る。一體延寶天和は談林の全盛時代で、延寶三年には談林の總帥梅翁宗因が江戸へ下り、十百韻を興行して大に氣勢を張り、翌四年は宗因の天滿千句、西鶴の柾木葛等續々梓行せられ、芭蕉も此景氣に浮かされて、信章(素堂)との兩吟二百韻(延寶五年)に

梅の風俳諧國に盛なり　　信章
こちとうづれも此時の春　　桃青

と梅翁を謳歌し、信章信德との三吟江戸三百韻の發句にも「あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁」と謠曲がゝりで、宗因の口調を摸倣して餘念なかつた。延寶八年の其角の田舍之句合、杉風の常磐舍之句合、いづれも甚だしい字餘りの奇怪極まる句體で、それを激賞した芭蕉の鑑識も隨分怪しいものである。天和三年の虛栗は漢詩直譯風の一體をもつて、談林以外に新詩境を開かんと試みたものであるが、淺薄露骨で到底失敗の作たる

を免れぬ、しかしながら彼が都會趣味享樂主義を去つて、閑寂幽靜の天地に立脚地を見出さんとする傾向は、此頃から漸く微光を洩らして、貞享元年の野晒紀行中の句は、蕉風獨特の體を備へ來り、その冬尾張に冬籠して、荷兮野水等との五歌仙冬の日に蕉風俳諧の基礎を確立した。芭蕉が浮華輕佻の談林風を脫して、眞に自己を見出したのは四十歲以後の事で、その歿するに至るまでの十年間が、彼の人物事業の眞價である。

（貞享五年）

さま〴〵の香薫りけり月の前　　越人
　人一代の戀をとふ秋　　芭蕉

（元祿二年）

あやにくに煩ふ妹が夕ながめ　　越人
　あの雲は誰が涙つゝむぞ　　芭蕉
行く雲のうはの空にて消えさうに　　越人

（元祿三年）

さま〴〵に品かはりたる戀をして　　凡兆

浮世のはては皆小町なり　　芭蕉

蒜の香によりもつかれぬ戀をして　　芭蕉

暑氣によわる水無月の蝸　　尙白

（元祿六年）

上置の干菜きざむもうはの空　　野坡

馬に出ぬ日は內で戀する　　芭蕉

談林風の卑陋な淺ましい隈々をさらけ出したものと違つて、じつとりしたおちついた情味がよく出て居る。前に出した粽ゆふ片手にはさむ額髮や、蒜の香は源氏箒木の面影で、あやにくに煩ふ妹の夕ながめは空蟬の餘情があり、人一代の戀を浮世のはては皆小町なりと達觀し、馬に出ぬ日

の戀を憐んだ所に、芭蕉らしい同情が見える。是に於ての彼は全く風雅の天地に其の身を置いて、人なつこい眼で浮世を覗く傍観者の態度である。

枯淡な芭蕉の傳記を徴に色ざる女性は、芳野紀行に「其日の歸るさある茶店に立ちよりけるに、蝶といひける女、あが名に發句せよといひて、白き絹出しけるに書きつけ侍る、蘭の香や蝶のつばさに薫す」とあると、奥の細道に「けふは親知らず犬もどり駒がへしなどいふ北國一の難所をこえて疲れ侍れば、枕引きよせて寢たるに、一間隔てゝ面の方に若き女の聲二人ばかりときこゆ、年老いたるをのこの聲も交りて物語するをきけば、越後の國新潟といふ所の遊女なりし、伊勢參宮するとて、此關までをのこの送りて、あすは故郷にかへす文認めて、はかなき言傳などしやるなり、白波のよする汀に身をはふらかし、蜑の子の世をあさましう下りて、定めなき契、日日の業因いかにつたなしと、物いふを聞き聞き寢入りて、あした旅立に我

我に向ひて、ゆくへ知らぬ旅路のうさ、餘り覺束なう悲しく侍れば、見え隱れにも御跡を慕ひ侍らん、衣のうへの御情に大慈の惠を垂れて結緣せさせ給へと涙を落す、不便の事には侍れども、我々は處々にてとゞまる方多し、只人のゆくにまかせて行くべし、神明の加護必ず恙なかるべしと言ひ捨てゝ出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし、一つ家に遊女もねたり萩と月」とある二條である。芳野の方の女は土芳の語に據れば「此句はある茶店の傍に道休らひして佇みありしを、翁を見知り侍るにや、內に請じ、家女料紙持出て句を願ふ、其女のいふ、われは此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍るなり、先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其の頃浪華の宗因此處に渡り給ふを見かけて句を願ひ乞ひたるとなり、例おかしき事までいひ出て、頻に望み侍れば、否み難くて彼の浪華の老人の句に、葛の葉のおつるのうらみ夜の霜とかいふ句を前書にして、此句をつかはし侍るとの物語なり、其名を蝶といへばかく言ひ侍ると也」とある。北國の宿に

てひたすらおのれを頼む一人旅の女の心細さを、つく〴〵哀と思ひ泌みながら振捨てたるは、富士川のほとりに棄子の泣くを見て、猿を聞く人棄子に秋の風いかにと吟じ去りたると同一情懐であらう。

嘗て黑木貢を見て、「身の賤しきを思へば、官女もかたらひがたし、心の鈍きを思へば、傾城も猶まじはりがたし、もし妹背をなさんに此おなごをなん」といつたのも、ざれ言ながら風雅の外に心のない樣子が見える。行脚の掟に「女性の俳友に親しむべからず、師にも弟子にもいらぬ事なり、此道に親灸せば人をもて傳ふべし、總而男女の道は嗣を立つるのみなり、流蕩すれば心敦一ならず、此道は主一無適にしてなす、能くおのれを省みるべしと戒めたのも、彼が操持の堅きを見るに足りよう。

要するに芭蕉も元祿時代の兒であり、食はず嫌ひの木强漢でもないからその靑年時代には多少女若兩道の經驗も無いでなからうが、中年以後蕉風建立以來は全く純潔無垢の人であつたらうと思はれる。

西鶴讃

「鯛は花は見ぬ里もあり」
酒と女のなき國やある。
伊丹諸白、博多練、
さいた、おさへた、
なみ〳〵注ぎやれ、
可盃をとりあげて、
酔うて踊れば、面白の
巷の埃、花の雲。
「小判見知らぬ」丹波の
奥の山猿が
とろり眼におさん視る。

算用高い大阪商人
しやなりしなりのお姿に、
十露盤珠の桁はづれ、
どうなりと候べく候に、
しめて寢た夜は
神も佛も賴まれず、
春は小判の色ぞかし。

浮世狂ひの劫つもり
永代藏の棟も落ち、
殘る寶のこれ一つ、
それも肌身を離れたる
文反古の破障子、

内外(うちと)へだてぬ秋風に、
覺めても悔いぬ
昔の夢の紙衾(かみぶすま)。

蝶がとまれば
馬屎(まぐそ)もなつかしく、
花が咲くとて
糞土(ふんど)の根をほじる、
かきさらけたる一代男、
その世之助の五十年、
「浮世の月を見過し」て
「稻妻に悟らぬ人の」
をかしさよ。

「古今役者大全」寛延三年刊に曰く「天和三年四月河内國藤井寺の開帳の時、もどり道にて小山といふ在所にとまる人多く、大阪の名ある大盡と西鶴同道して酒おもしろく汲みける、鄰には前の澤村小傳次、竹中半三郎、小松才三郎、尾上源太郎とまりけるを、一つに成つての大酒のうへ、小傳次申しけるは、一日駕にゆられし故か、血の道が起りしやうなといふを、立役の源右衛門、いかに女形なればとて、男に血の道とはと笑ふを、西鶴きゝとがめ、ちいさき時より女のいふ言葉をのみ習ひこみし故、いさゝかの頭痛をも血の道との言葉、日比のたしなみ思ひやられし、女形は假初の言葉も女なるこそよけれと褒めしとなり、されば舞臺も本の女と見えしと也」と。　遊女野郎に接近せし西鶴が梨園の事情に詳しかりし事は、其著男色大鑑が一種の役者評判記なるにてもしるく、自笑其磧以前に評判記の筆を執りたりと

の傳說にても知らるれど、近松の如く自ら劇部に携はりて、脚本に筆を染めたるを聞かず、只淨瑠璃に凱陣八島、曆の作あるを傳ふるのみ。當時俳人にして淨瑠璃の作あるもの錦文流、櫻塚西吟あり、西吟は西鶴の門人、その作亦多からず、多能多作は必ずしも誇るに足らず、西澤一風が小說院本の兩天秤に徒らに多量の駄作を荷ひしが如き、固より賞するに足らねど、西鶴の作が僅々二種に止まり、それすら一は西鶴の作にあらずといはれ、一は丸本の傳はらざるに至つては、返す〴〵も遺憾の念なき能はず。さて此二作を以て西鶴の作とすることは、一風の「今昔操年代記」(享保十二年刊)に起る、其說に曰く。

寅の年(貞享三年)京宇治加賀掾難波に下り、今の京四郎芝居にて西鶴作の淨るり曆といふをかたられければ、義太夫方には賢女の手習並新曆として兩家はりあひ、つひに義太夫淨るりよく、嘉太夫がた止みぬ、其の次のかはりがいちん八島是も西鶴作にて評判よき最中、出火して加賀掾は是

限にして京へのぼられ、又々なじみある都において操をはじめ、だんだん珍しき淨瑠璃をかへ、音曲修行三十餘り、花洛においてたのしみ、寶永年中卯の初春二十一日に往生し、自證院本淨道融居士となれり。

一風は享保十六年六十七歳にて歿せし人なれば、西鶴よりは二十三歳、近松より十二歳の弟なれど、當時大阪にて書肆を營み、傍ら小說戲曲の作に從事せし者なれば、其說信ずべきに似たり。然るに凱陣八島には近松門左衛門の署名ある十行本發見せられてより、西鶴の作にあらずと認めらるゝに至り、曆は今に發見せられずして、故幸堂得知氏の如きは近松の杜曆の粉本となりしお三茂兵衛の世話淨瑠璃にあらずやとの臆測說を出すに至りき。是等の說は果して的中せるや否や。

昨冬坊間をあさりて、ゆくりなく小竹集と題する小册子を發見せり、貞享二年八月六日、北御堂前安土町、森田庄太郎開板にて、加賀掾の段物十五章を收めて、西鶴の序文あり、其序と目錄とを左に掲ぐ。

東西〳〵淨瑠璃はいやしき物とて世に捨草の種なるを宇治加賀掾一流を語るに聞に萬事の吟味謠にかはる所なく人のなぐさむ業となりて七本骨の拍子扇を貴人の手毎にふれられし事にぞする〳〵迄も今といふいま耳に穴ありてよき事を聞覺之外なく嘉太夫口まねをして月待下舟小風呂のうちにて此一ふしのやむ事なし我も老樂の何がなと思ふに鞠に足よはく揚弓に眼定まらず時に大竹集を求めて明暮是を見しに懷中のならざるを用捨して節章を改め小竹集に移しぬ是なん小は大を叶へる一册也

貞享二乙丑年七月十六日

難波　西鶴

* * * * * * * *

凱陣八島　　よしつれ道行

同　　くはんじん帳

同　花子
暦　しやれ物がたり
同　あさがほ姫道行
同　ふじの十二月
藍染川　梅の名よせ
同　べんの君道行
よつぎそが　むかしがたり
同　虎少将道行
同　風流の舞
伊呂波　大師歸朝
同　いろはのまへ道行
平安城　みさほのまへ道行
三社託宣　てる日のまへ道行

序文によれば内容は大竹集と同物にして、只それを小本にしたるが如く思はるれど、然らずして大竹集（延寶九年刊）と共通せるは平安城の一章のみにて他は悉く別物なり。之を他の加賀掾の段物集と比檢するに、花子の一章

は「紫竹集」元祿十年刊に、三社詫宣は「竹子集」延寶六年刊に出で、花子、三社詫宣、暦を除きたる餘の十章は、悉く西澤一風の編せし「淨瑠璃加賀羽二重」に收めらる。されば暦は丸本の傳はらざるのみならず、其一章すら他の段物集に收められず、今回發見せられたる小竹集によつて始めてその隻甲片鱗をあらはしたるなり。

さても此書の卷頭に收めたる凱陣八島は、西鶴の作にあらずして近松なるべきか、余の見たる近松の署名あるものは皆比較的新らしき版のみなりき、後版にては假令署名ありとも、必ずしも信據すべきにあらず。西鶴が自ら編せし書に、後輩たる近松の作を麗々しく卷頭に据うる事は當時の作者氣質に背けり。近松の物は義太夫以外の人の爲に作りし舊作までも、もとのまゝ或は多少の改删を經て、一再ならず竹本座の勾欄にかくるが常なるに此作のみ其事なし。是等の點より考ふるに、凱陣八島は確實なる證跡の擧らざる限り、西鶴作とする一風の說を抹殺するは尙早か

らんと思ふ。

次に暦の内容や如何。

暦

しやれ物がたり

通ひ路や姿の入れ物三枚肩、おろせが急げば中宿の、貸編笠のめつけ、紋丸のうちに二つ星、是も逢ふ夜はおり姫の、あまのあべ川かち渡り、嬉しやたれやら招きぬる、てごしの新七末社にて、粋の出立のかへ衣裳、男自慢や戀知りや、わけよき都の大臣と、虎若や宇右門はばつと出口の茶屋よりも、さきへ知らせて待つ暮に、揚屋町へぞ三重恨みながらも月日をおくる、さても命はあるもの、嘘で堅めし身の勤め、是いたづらの外ぞかし、扨も我、親の爲とて色里に、苦界十年と定め、禿の時はすたるなり、扨水あげの初姿、髮も形もかへ小袖、しやなら〳〵〳〵と歩みゆく、素足素顏のなよやかに、昨日に變りけふよりは、宿屋の噂も、樣つけて呼びましや、おふお立ちなされませはしくも、あとより遣手のせめくれば、仕舞

太皷のやるせなく、紋日〳〵の物思ひ、頼む方なきをとこ蜑の、いくたび沈む身あがりの、かねの別れやまだ夜ふかきに、捨てゝ行かるゝ床ばなれ、すいた男は寢ても覺めても、夢にも更にわすれられず、格子を叩くを合圖にて、戀の中戸の腰かけや、是さゝやきの橋となる、忍び〳〵の間夫ぐるひ、たんと氣の毒ある時はいつそ殺して貰ひたや、アヽまゝならぬ世の中に、思はぬ客にも逢はねばならぬ三瀨川、流れの身こそ悲しけれ、それさへあるに無理口舌、言葉の山に登りつめ、書ける誓紙も聞馴れて、神も罰をばあて給はず、たとへば爪を放つとて誠の爪とな思しそよ、諸譯知らずのおてきたち、かしこ顏をばし給へど、こちの仲間の仕懸にて、遂に身代たゝまする、ましてや親にかゝりなど、死に一倍も借り絕えて所の住まひもならざると、聞けば我から我心、思ひまはせば恐しと思ふばかりぞ誠なる、扱親方の手前より四度のしきせの其外は、皆借錢と積りゆく年の暮すぎ、わつさりと正月買のはつ君は、神ぞいとしさかはゆ

さの餘り〳〵てそれながら、更に勤と思はれず、あはれねのびの松ならば根引に成てしのぎくる、くるわの苦患をのがれんと、嘘に誠の物語、隨分しやれたる男共、それはさうよと不便がり、白けて座敷は見えにけり。
近松ほど暢達ならねど、此翁得意の境地とて流石にうまき物なり、「嘘で堅めし身の勤め、是いたづらの外ぞかし」は宛然たる浮世草紙の口吻にて「おふお立ちなされませはしくも」の掛詞は新案なり。手管の指切、死に一倍の借金、隨分しやれたる男の氣の毒顔等、いづれもそんでふそこらにて、御馴染の顔ぶれなるもをかし。

暦　　　　あさがほ姫道行

忍ぶ路のべくらぶの山の夜も明けず、やしほの岡のむらつゝじ、濃きも薄きも戀ひ迷ふ闇の錦と眺めすて、まだ山かづら引く方に、覺束なくも呼ぶ喚子鳥の、傳授は聞かず耳無山、片輪車に積む柴の、櫻やあたら春をしむ、花の八重ぶきせぬ家ぞなし、家もあらなくに三輪が崎、綾杉芽ぐむ

木の間より、神のひもろぎ物さびて、ふりにし事もいそのかみ、人の影さへ埋れ井の、井筒に〳〵玉の井筒に袖ぬれて、別れ比翼のはがい山、飛立つかたは飛ぶ火野や、今いくかありて旅おさめ、わがたらちめふる里へ歸り三笠山さほのかり、二十五絃は夜月に彈じ、雲居のやどり生駒嶽、松は時雨の染め殘し、衣のうらに寄せ貝の離れて逢ふも姫貝の、嬉しや憂きを忘貝、あさり鹽吹うつせ蛤簾貝、舟はでてゆく帆立貝、荒い風をもようやよやよ、よぎ厭はれし三津の浦風濱風、ハアさむいぞやア丶あはれ浮寢の旅の空、けふはつ島のたよりかと、戀ひ渡りぬる武庫の川、心のあさみしらずくし、知らぬ道とてはかぎらず、たれかつげ野のつま鹿も人に聞けとや夜たゞ鳴く、秋は悲しさまさるべし、それを思へば夢の浮橋廣田の宮、生田の小野の花がたみ、手毎に摘みしつばなまじりの、つくつく〳〵つくづくし、わけてすぐろの薄原、いつか招きて草枕、それも叶はぬ世なりせば、しうしんのつの松原いざり火の、燃えあがりては消え

ては燃え、まなく時なくこり須磨の、寢覺に騷ぐ鈴舟の、おぶさは空にゆふ雨の、身を淩ぎゆいなみ野や、しづくの涙のさゞれ川、君が柵強くとも破れやなきにやれ扨今、あらはれ渡るほの〴〵のこの浦にぞ着き給ふ、うさもつらさも哀れさもさもあらめ〳〵、さもこそあらめさもあらめと、聞く人每におしなべ皆絞らぬ袖こそなかりけれ。

貝づくし名所づくしの道行、その絢爛華麗、ひとり巢林子をして雄を稱する能はざらしむ。西鶴が此種の文における手腕亦侮るべからざるなり。

曆　　　　富士ノ十二月

ながめなり富士は日本の蓬萊山、峰は削り成せるが如く其高さ測られず、かくて兼政廣信は勅命に隨ひて、ぎやうやに入る月出づる日を考へ、陰陽の高櫓、登りて見れば甲斐が根にけふも白雲立ちにけり、まづ正月の山の姿細眉つくる薄霞、春山笑ふかと思はれ聲の鶯、初朝の雪まだ殘る竹取の、翁がむすめのゆかりかや、誰が結びおく玉笹の、こぞの栞の戀

の道、覺えて迷はぬ人もなし、二月は雲に入る鳥の別れや歎く涅槃の空、釋迦はやり水、をちこちの峰は八葉ともいへり、喜見城の遊樂も心の月の影二つ、みつしほを荷ひつるゝや田子の浦、あづまからげの鹽衣、いさま波間のうき仕業、彌生の花の吹雪、吉野は磯に鳴澤の景を都にやさ女、駕たてさせて此所たゞは本意なと夕づく日、西に傾き入間川、水に音あり松に聲、旅の寢覺と名付けたる琵琶かき鳴らして歌ひける、白日青天も賴まれず、朧の夜の山見えぬは人の心の雲、櫻に嵐月に雨、世にや哀れのまさるらん、卯月はさくや水車の、浮島が原ゆく螢、里のわらはの打ちとめて光を埋む玉澤の、水鷄や叩く川あそび、淺瀬の沼の花がつみ、笛に太皷に風車、己がさま〳〵日ぐらしや、五月の空は梅の雨、晴間の山を畵にかきていざ唐土の人に見せん、扇面逆の美山なりと、譬へてこゝに詩を作る、世々の歌人の眞砂の種、神代にまきて盡きせざる末は興津の川社、扨六月は富士まうで、白衣の袖はさながら雲、難行難所攀ぢのぼる、懺

悔々々六根罪障おしめに八大金剛童子、南無淺間大菩薩、さつと消えにし罪科も、其夜降りつゝ絶えぬ氷室の谷深し、七月は棚機の逢瀬ありとや、いざ來て三保の松原こえて〳〵清見寺、かねの拍子がちやん、ちやんとして扨面白い、面白いぞやたぐひなき名を望月の今宵しも、二千里のかの故人の心言葉もいかで及ばんと、眺めに飽かぬ中空に、初雁がねの雲間よりちら〳〵〳〵〳〵とつれて、鳴くねを菊月は、四方の山々色どりて、今車を駐めてそゞろに愛す楓林の暮、もみぢをたけば煙の山是、あたゝめて飲む時は、劉伯倫が樂みも、終に事足る盃、三國一ぢや酒になりすまいた、扨十月は山路きのふ時雨して、急ぐ足柄箱根なる葉守の神の瑞籬も梢さびしく、霜月はなほ風の森のしたへの白妙に、それとも知れずすくみ鷺、身の色こぼす曙に、せはしき聲の枕より、旅泊の夢のさめて行く年の暮には、野も山も雪に風情を奪れて、枯れ〳〵枯柴ねぶりける、それが上にも霙霰のとだえなく願ひの晴天あらざれば、兼政廣信

心中に南無大日權現、衆生の爲の御方便、奇特をあらはし給へやと、天に向つて祈らるゝ、時に風雲晴れつゝき、日月和光のめぐりをつもつて喜び勇み山下あり、大和の國へぞ急がるる。

富士十二月の景事は外題の暦といふに叶へしなり。上掲の三章のみにては全體の結構如何を知る能はざれども、幸堂氏の推測せし大經師昔暦とは全く關係なき時代物なることを知るに足れり。嗚呼西鶴の慧才敏腕往くとして可ならざるなき、戯曲にも亦この文藻あり、眞に奇才といふべし。偶然なる機緣より凱陣八島と暦との二曲は、西鶴の作として操年代記に紹介せられたれども、加賀掾等の語物なる無名氏の作中には、尙若干此翁の手に成りしもの潛在せるなるべし、戯曲界またこの先達あり、巢林子ひとり其功を專らにするを得ざるなり。（大正六年三月）

浮世花鳥風月と浮世榮華一代男

種彦の好色本目錄に

好色四季はなし　四冊年號なし

外題かへ好色堪忍記　元祿十一年

又改て花鳥風月　正德三年目錄は別に彫改めたり

如斯三度外題をあらためたり、一の卷は春のこと二は夏三は秋四は冬の事を書たり、四季はなしは元祿五年書目錄に見え、又外題をなほしゝが元祿十一年なれば、貞享の印本なる事は論なし、作ぶりはなかくおもしろき書にて後年八文字屋自笑が作にて世におこなはれし榮華男まめしちさいふは此書より出たるものなるべし。

とあり。「好色四季はなし四冊年號なし」と記せるより見れば、種彦は「四季はなし」と題する原本を見たるが如く考へらるゝが、それには疑はしき點

あり。近頃珍書同好會より謄寫版にて印行せる「花鳥風月」は、種彦の舊藏本を底本に用ゐたりと見えて、表紙裏に種彦の識語あり、其文次の如し。

浮世花鳥風月トアルハ正德ニ外題ヲ改シモノナリ

原外題（此書原板の時榮華云々と云外題ありし成べし八文屋本も此外題に依りしなるべし）

○好色四季はなし　四册

（一ノ卷は春の事をかけり二ノ卷は夏三ノ卷秋四ノ卷は冬故に四季咄とよべるなべし）

元祿五年の書目錄に見えたれば其以前の印本なる事は論なし、目錄は外題をあらためしときに彫いれしものとおぼし畫風も大に異なり「原板の時榮華云々と云外題ありし成べし」といへるは、花鳥風月の柱に「榮花」の二字あるよりの推測とおもはる。而して元祿五年の書籍目錄に四季はなしの名見ゆるより、之を花鳥風月の原本と推斷せしにあらざるか、一の卷に春二の卷は夏三四は秋冬の事を書きたる故に四季咄とよぶといへるも、實は花鳥風月がしかあるより、逆に之を四季咄に推し當てたる

にあらぬか。もし種彦にして四季咄といふ原本を見たらんには、よし出版年次は不明にもせよ、今少しく記述の材料あるべし、花鳥風月本の目錄のみありて本文なきにも心づかず、西川風の繪の目錄の上に入りたるを見て、「目錄は外題を改めし時に彫入れし物とおぼし畵風も大に異なり」など曖昧の語を弄すべきにあらず。四季はなしが果して花鳥風月の原本なりや否やは、其書の發見せらるゝまでは、輕々しく種彦の言を信頼すべからざるなり。

今夏予閑に乘じて元祿前後の小說類を涉獵せしに、浮世榮花一代男といふ四冊本あり、讀みもてゆくに、花鳥風月と同書なるに心づきて、兩書を對照せしに、榮華一代男の方には次の序文あり。

美女はおとこの命を斷る斧成と古人の言葉。有時戀の山入して花は連理の枝をきるにつきず。鳥は夜每の別れを惜まし。月は更にたはふれ酒の種とも成。花鳥風月の中に遊んで。色にそめたる身は。長

生のせんだく仙家にちとせの流れをしるぞかし。されば世界は廣しむさし野の戀種の中に住ながら。色しらずの男のありしを。陰陽の神の道ひかせ給ひ。俄に浮世の榮花物語。是を見る人虚實のふたつ有。時に移れる心にして見る事。同じ夢にも玉殿の手枕しばしも樂しみふかし

元祿六のとしの春

松壽軒

西　鶴　[松壽]

又目錄は縱三段に書きて花鳥風月の如き額畫なく、卷尾に

元祿六年

酉正月吉日

江戸日本橋青物町

萬屋清兵衛

大阪心齋橋上人町

雁金屋　庄兵衛

京　油屋　宇右衛門
松葉屋平左衛門　板

とあり。而して各巻の初にある浮世榮花一代男の文字も入木彫替らしき點を認むる能はず。是に於て予は浮世榮花一代男といふが花鳥風月の原本なることを主張をんとす。

花鳥風月に關丁となりたる巻二三丁目同好會本十九丁の文は左の如し。

「烏丸の氣違ひ後家。新町通りの有明後家ひがしの洞院の鶉後家。一條の米屋後家出水の歯ぬけ後家。姉が小路の釣鐘後家寺町の細目後家。是であみだの四十八後家とて皆殊勝貌して。諸寺諸山への日參是いつわりの見せかけ珠數。さりとは〱おそろしやぢごくのづしに戀の中宿ありて。後家のやりくりばかりして世をわたれる者ありしが。つら〱是をおもふに五十過たる女の何がおもしろかるべし。

扨も浮世かなつまる所がよき物給はる欲にきこえておかし。其出合宿に色ざかりの男振かの町の太夫もかしらからなづむ程なる風義に。白髪ぬくを仕事にせられしかたより情らしき文ども取替して。戀があまる」

又花鳥風月卷の一第四章「僞にちるはなおかし」は目錄のみありて本文なし。卷の三第四章「風流のざしきおごり」も同樣なり。是等は長文なれば茲に掲出する能はず。好色堪忍記と題するものは未だ見るを得ざれど兎に角版木の賣却せらるゝ毎に書名を變へ、摺板も紛失せしものなるべし。

此書序文に西鶴の名を署したれども信僞疑はしく、よし序文のみは西鶴なりとしても、本文の其筆にあらざる事は具眼者の首肯する所なるべし。況や西鶴は貞享三年の一代女に好色本の筆を絕ちて武家物町人物に移り元祿六年八月はその歿去の時なるをや。

近松門左衛門像

松山米太郎氏藏

巢林子讚

太平の春闌に霞幕、
のどかな顔を押し並べ、
浮れ足なる花衣、
こゝを瀬に寄る人波は、
浪華名物隨一の
竹本芝居繪看板。

あれ〳〵あれを見よ
御伊勢樣の御威光には
虎も猫ぢやと、肩肱張つて
和唐內ぶる髭奴。

あのひがいすな徳兵衞を
土足にかける九平次づら、
わしや憎うてと、口曲げる
ぼつとりものの曾我贔屓。

一世の人氣、一管の筆、
虛實の界に詩を求め、
皮膜の間に美を探り、
死ぬもあはれ、殺すも道理、
金(かね)につまつた心中も、
やさしい『戀』に救はれて、
樂しく渡る三瀨川(みつせがは)、
きたなき底は見ぬぞよき。

巣林子書簡

義理人情を經緯に、
織り成す文や綾錦。
筑後が咽に玉を吐き、
紘聲冴えて神悸き、
辰松が腕に木偶の
眼血走り脈振ふ。

この翁逝いて二百年、
浪花の春のさびしさよ。

巣林子の書簡

近松門左衛門の書簡は世に傳はるもの極めて稀にして、今日までに世に

知られしは、大阪平瀬氏所藏の葛粉の文、東京松山氏の妹背海苔の禮狀、故攝津大掾の紀州行ことわり狀と久原文庫收藏の四通に過ぎず、而してその宛名は松山氏所藏の分の不明なる他は、皆和田忍、笑又はいせや清三郎宛なり。（拙著近松門左衛門參照）和田忍笑は奈良邊に本宅を構へて、大阪と紀州とに店をもちたる人らしく、いせやといふ屋號にて、同人なりと認むべき證あり、即ち尼崎行ことわり手紙の添書に

近松が名のみ殘りたる手跡御所望に付進上仕候へ共下私こそ念比に語りければ甘心仕候へ他仁は兎も角もあれかしこ　いせや忍笑

　近松と名のみ殘して今ははや遠山松の音づれもなし

とあり。頃日予が手に入りたる手簡も、同じく忍笑宛にてその全文左の如し。（蠹蝕と讀みがたき箇所とに□をあつ）

尙々京も□事無之先度之□□菊之丞芝居のやぐらより火柱立さてくんしゆ之由にて候以上

十八日二十日之御兩通並御扇一握路次無恙相屆則淸兵衞樣御持參難有共恭共御禮之申樣無之候足手息災に候はゝすく／＼□□(起而?)躍舞申程に奉存候別而外に無之物貴樣之よりは見さま各別人之信もふかく御座候殊に御仕舞被遊候御扇日本之能仕廻は唐土聖代之舞樂音樂と存候夏殷周之三代と申に堯舜出世し給ひ樂ヲ起樂之音聲調候はぬは民不和候樂調りて禮おこり禮樂之道は聖人之風ヲうつし俗を和し玉ふ道ノ始ニ御座候和國にては神代の神樂是樂之本ソレニは一々堂上方御家々秘傳本拍子末拍子本末之うたひ物言語ニつくされず候神樂ノ字ノへんヲのけつくり計申(サル)樂とよませ申候是則能も神樂より出聖代神代の風被存候又申樂の上下ヲ取田(デン)樂と申も能のやつし元は樂より出たる事御座候か樣之事誰も存たる事物しりがほニ人ニ御咄御無用御座候我等心之悦之餘り申進候遠慮なしに樣々之御六かしき事共賴參此埒明んと被成候事よほど之御苦勞今にてはうとましく奉

存候多門女共難有かり念比之衆中も頂戴仕候瘧(?)疫疼(?)其外惡恙之
見入もおそるゝ事手裏にて候家之守り子孫之寶難有奉存候被下候御
方定而御秘寶茂可有之貴樣之御取成故と難忘忝奉存候先御禮申上不
苦候はゞ宜御取成奉賴參候萬事御上リ之時御相談可申候
一弓矢九十三翁さのみ御苦□被成被下ましく候此間はよほど御床敷
くはやく御上り奉待候
一多門ばゝへ每度御言傳忝奉存儀尙々大形ニ被成少又御上り被成候
へかし珍敷御咄も承度候我等も此大老病に土用無事におくりふしぎ
之存命しれぬが世にて御座候猶期後蒙之時候

恐惶□□

六月二十三日　平安堂信（花押）

和田忍笑樣貴報

人々御中

尚々我等も四五日は［　　　］今朝は少快□□ねて居て文かき候故思ふ樣になく人にかゝせては心いき通し不申いきている事の心やすき樣ニ成度候又申候御狂哥之返哥と奉存候へ共御扇に對し狂歌所にては無之候本歌を詠じ可申候

裏打紙に

亡父近松平安子之文無紛正筆予に裏書と有ければ

なくなりてのこるは人の筆の跡むかしを今に思ひ出しも

同苗　景鯉誌之

とあり。景鯉は巢林子の子息多門の俳名なるべし。

此書簡は文面より推測するに、巢林子が終焉の年（享保九年）の六月二十三日の消息にして、平瀨氏所藏の葛粉の文に先だつ約一月のものなり。忍笑の周旋によりて、由緒ある貴人の舞扇を手に入れたる禮狀とおぼしく、その嬉しさに舞樂の講釋をはじめ、神樂、猿樂、田樂について、所謂物識中間

にうけられし神字の省略説をもちだし、（神字を分ちて「申樂」と名づくといふ説は、翰林胡盧集に見ゆ）入懇の人々にも惡病除けになるといふ其扇を戴かせ、かへす／″＼斡旋奔走の勞を謝したるなり。只此文中訝しきは「弓矢九十三翁」の文字なり、これを巢林子自身の事をいふものとせば、その年齡（近松の享年七十二歲也）合致せず、いかなる意とも解し難し。敢て大方の示敎を望む。

前に述べたる尼崎行ことわり手紙は左の如し。

尙々新春之御慶今日申候お袋樣へもよく／＼奉願候以上

如仰昨夕は得貴意忝奉存候、天氣相之事此方も御同然とくと見合、道も少かたまり候はゞと奉存候、扨又今日之尼崎、私も幸く＼ちと申尼崎近所へも參度候へ共、替り淨瑠璃之相談御座候故、乍存心に叶不申候まゝ御同道仕まじく候近比殘念／＼、明日にも紀州へ極り候はゞ今日之尼崎御延引のれ（なノ誤カ）かしと奉存候、猶期貴面候　恐惶謹言

二月朔日

今日之御祝義目出度奉存候、貴様御家内□(一字不明)は今日元日御祝可被成候

近松門左衛門

伊勢屋清三郎様

今源氏六十帖と四季御所櫻 附 槌屋梅川

宮崎三昧氏は嘗て新小説(第六年第一巻)に元祿四年水木辰之助が江戸に下り、市村竹之丞座に演せし『四季御所櫻』は、同元年都萬太座にて興行せし『今源氏六十帖』の改題なる由いはたれりき。余此頃その『今源氏六十帖』を始めて見たるが、三番續の狂言にて、巻首に「上　正月ことはじめ(付り)六ぽうふつたりやすゞのおと、中　正月つまはじめ(付り)ねこのつなむすんだりやねほれがみ、下　正月まゆはじめ(付り)けさうぶみよんだりやいろがるた」とありて、おもなる役割は、すみのゑなるをの介(立役)大和屋甚兵衛、いもとひめまつ(太夫)水木たつの介、あいおひいくよの介(立役)坂田藤十郎なり。

筋はすみのゑ家のお家騷動にて、繼母の惡心にて、異腹の長男鳴尾之助を勘當し、實子の妹姬松を弟刑部左衞門にめあはせ家督を繼がせんとするより事起り、姬松は今源氏といはるゝ相生幾代之助と相思の仲なるを、後室は詐計を構へて幾世之介と姬松とは實は眞の兄妹なりとて、その中を割かんとするより、例の有名なる猫の所作となり、「姬松は手飼の猫の綱をひき、あゝ猫なれば兄弟夫婦となるよな、おれも猫になつてなりとも、幾世樣と夫婦になりたいと、思ひの一念にて、そのまゝ猫の體となり、折節蝶二つ舞ひさがれば、ねらひて捕らんと狂ひしは淺ましくも不便なり。」

京傳の近世奇跡考に「元祿四年京四條より始て江戶に下り、市村竹之丞顏見世に、四季御所櫻と云四番つゞきの狂言を興行す、之を辰之助が土產狂言と云、辰之助はる姬の役、第二番目に鎗おどりの所作、第三番目にから猫の所作をせしに、江戶中こぞりて賞美し、此狂言を見ざるを恥とせしよし、猫の所作の意趣ははる姬の役にて、戀ひ慕ふ男わが實の兄なること知れ

て夫婦となりがたきを悲む折節、兄弟の猫の戀するを見て羨み、遂に我身猫となりて胡蝶に狂ふ狂言也………………その節の狂言本新板四季御所櫻といふ書四册あり、珍書といふべし」とて、辰之助の鎗踊と猫の所作の圖をすきうつしにして出せり。余は未だ四季御所櫻といふ四册本を見る能はざれど、猫の所作より推して、今源氏六十帖とほゞ同樣のものと考へらる。されど三味氏のいふ如く單に改題といふにとゞまりて、全然同一の物なりや否やは稍疑なき能はず。六十帖は前にいへる如く三番續、これは四番續なるに、外題も四季御所櫻とありて四季の景物を取り入れたるらしきに、彼は上中下とも正月を背景とし、女の名も姫松とはる姫とのちがひあり。思ふに多少はぬきさしもし變更もせられしなるべし。さて近松の萬太夫座の狂言藤壺怨靈の趣向が、後年再び弘徽殿鵜羽産家に用ゐられし如く、此猫の所作も亦津國女夫池(享保六年二月上場)に蒸返されたり。則ち淺川藤孝の臣冷泉造酒之進と將軍義輝の御臺所の侍女清

瀧との戀中は、一朝思ひがけなく兄弟なりとの報告に二人は動顚して、「今は兄樣妹の禮儀もあり、指合をくるしやそばへも寄り憎く、はつとばかりに叫ぶ聲、兄も振上げ見かはせば、衞士の焚く火は顏にもえ、身には消えつつ玉の汗、昨日の床に引きかへて、今日の逢瀨の背中ごし、泣くより外の事はなし、折もこそあれ妻戀ふ猫の二疋づれ、庇の屋根に呼びかはし、泣き焦れ戀に牡丹の睡もさめて、檐の柱を下りつ上りつ戲れ狂ひ、人目も恥ぢぬ聲々、淚の眼に造酒之進きつと見やり、牝牡同じ毛色は彼奴も兄弟、飛鳥にあらざれば、飛鳥の心を知らずとは、其は人間、畜類は其氣を知り我をおのれが友とする、エ、無念や是非もなや、見る目もうたていぶせしと吹き消す燈火、彼の猫も兄弟か、ア、羨しい、兄弟夫婦と契りても、人も咎めず譏られぬ猫になりたい〳〵、こちや猫じやといひつゝも、そばへ〳〵と立寄るさし足、兄は遁れん〳〵とそろり〳〵の偸み足、屋根には猫の妻戀に焦れ狂ひ纏れあひ、軒の筧をふみはづし、庭の古井に二疋づれ、たんぶと落たる

水の音、なう悲し、可愛や助けてやりたいと、見れども水の底深く、しばしは跪き苦みて終には聲も絶えはてたり」猫の自滅は畜生の身のよき手本ぞと、二人は水死を謀りしも、胤腹ともに異なる兄弟なることわかりて、めでたく夫婦となること、六十帖と同様なり。

湯漬甑水といふ者の作なる御入部伽羅女（寶永七年九月刊）に、近松の冥途飛脚にて名高き梅川につきて次の如き文あり。

今年の春より梅川といふ新町の女郎籠入してより久しい事ぢやが、不思議なるかな、手足爪さきのあのうつくしさ、髮のゆひぶり、いつにても爪をかくすは猫の變化にうたがひなし、こなた衆も國への土産に女郎の道中といふものを見ておきやれと、爰にても見立られし處へ、槌屋の梅川それ來たはと人の山（卷三、飛脚は月にお三度大盡の條）

つちやの梅川くもりなき其身の仕合、佛神の御加護にて世間ひろき御めぐみに、あひに相生の松よりすぐれしはやり女郎（卷五、義理より深い

槌屋の梅川の條)この記事を事實とすれば、梅川は一旦牢舍せしも、許されて後新町に二度の勤めに返咲の花を咲かせしものと見ゆ。かくては忠兵衞との關係も客と女郎との尋常一般の間柄にして、巣林子の院本にいふ如き死生を許せる深い中にはあらざりしものゝ如し。義理人情の搾木に見物の涙をしぼりとる近松の世話物も、實際は此の如く淺ましく興さめたるが多かるべく、瑰麗なる彩筆に寫し出されたる心中も、「銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるが一人もない」といへるが眞相なるべし。

淨瑠璃雜考

金屋金五郎浮名の額

「早稻田文學」九月號に、水谷不倒氏が小三金五郎の淨瑠璃についての考證あり。小三金五郎を謳ひしは、祭文最も古く、淨瑠瑠は之を襲ひしものな

らんとて祭文の一章を揭げられたれど、豐竹座の「金屋金五郎浮名額」は未見の書なりとて、慥に證迹は擧げられず、余は寫本にて此書を一讀し得たれば、其梗概を記して、未讀の諸君に示し、併せて不倒氏推測の通り祭文に基けることを證すべし。

小三はおのれを根曳にせんといふ大盡客を盛り潰し、其醉臥するを窺ひ幇間となりて其大盡に隨ひ來れる金五郎を捕へ、互に口說の末、「もういふ事もしまひ〳〵、御座んせ寢よと寄添へば、いかさま首尾は今宵なり、爰かそこかと見る所に、大盡うんと寢返れば、二人驚き慌てゝ枕もとに畏まり、犬の子〳〵と、聲を揃へて叩きつけ、又手を鼻に押當てゝ、互に顏を見合せて、わな〳〵震ひ居たり」女はさすが大胆に思ひ定めて、あらはれていかなる憂目に遇ふも厭はずと迫るを、「此年月鼠にさへ知らさぬ中をあらはして、互の爲になるべきか」と立たんとする男の「耳に物いはせ、互の帶を繼ぎ合せ、端を二人が腰につけ、引くを合圖に逢ふべしと、わざと寢間を遠ざか

り、おのが臥戸に入りにける、客は寢耳に聞き濟し、扨は彼奴等は腐り合ひ不義を働く下づくろひ、思へば憎し」何とか恥を與へんと思案して、我と頷き、そしらぬ顔の高鼾、小三はそつと起き上り、烟草の煙吹くふりして、燈火を吹き消し、合圖の帶を引きけるに、大盡向ふに立ちまはり、そろりと曳けばそつと寄る、小三は金五と心得、帶をたくり、手を取つて、掻口説けども返事なし「ア、心氣、怨口説も時による、こんな時はいはぬが粹、あのうんつくが起きてから、何にも物がないわいな、コレどうぞいの〳〵と、帶を引寄せ恨む時、金五郎目をさまし、樣子をきいて氣をまはし、扨は小三が惡性にて又こそ外につまもとめ、まさしう逢ふに極つた、捕へて存分とくべしと、そろり〳〵と差足によると見えしが、大盡小三を取て押へ、ヤイ此ないたづら者のいき畜生、旦那や我が目を掠め、間夫の男を引入れて、ハテ結構なざせう骨、男がいき面見ておいて、きつと御禮申さんに、ヤレ火をとぼせよと呼ばる聲」に、亭主下男驚き來りて、火を燈せば、意外にも大盡と小三なるに

紀海音肖像

金五は吃驚敗亡、遁げんとするを大盡引捕へ、折檻の上、小三を根曳の約束をも變改したるより、親方は怒りて小三を綿屋といふ娼家に轉賣するに至る、かくて小三は金五郎との浮名たつにつれ、客も次第に落ち、且は男のおとづれ聞くこともまして逢ふこともならず、悲歎に沈みゐるを、傍輩女郎の打寄りて、さま〴〵慰め居る處へ、「どれ衆共、綿屋の門に立ち塞り、額の小三は爰に居る、何と客になるまいか」と、どや〳〵入り來るといふにて、此段を終り、以下「道行」として章を改む。

「戀ゆゑに身は陽炎のありやなし、情一つを忘れかね、しばし逢はぬもつらけれど、過ぎつる首尾を思ひやり、我とひかへし心の駒、今は離れてゆく足の、何長町の一やどり、客屋の内も夢結ぶ、頃しも霜月二日の夜、星にまがへる白雪の、ふりつむ道を高足駄、杖傘を只頼め、我世にありし身なりせば、かかる憂目はよもあらじ、誠に小三と我中は、あのほりづめの二つ井戸、どちらを見ても深ければ、客の障りと親方が、堰いてふつ〳〵逢はせねど、初め

の程は町方の客と連立ち通ひつゝ、折にふれては逢ひしかど、後は親方其手もくはず、今は詮方涙の雨や、風の吹く夜も雪降る夜半も、かぶと頭巾で顔隠し、あふ夜あはぬ夜空定めなき、今宵の首尾を祈らんと、高津の宮を伏し拜み、千日筋の橋の上、角の芝居は我住みし、流れも清き加茂川ののしをに身をば任せつゝ、やがて顔見せある筈と、かたらばさぞや喜ばん、心地も之にさそはれて池田屋、待てば北島屋、たとへいかなる三原屋にならば、それからそれまでと、獨りおもひを駿河屋と、さま〳〵心くらはし屋、我もし浮世を去るならば、跡にのこりしあの人は、姿あだなや墨染の、尼が崎屋で身はぬれ衣、わくかわかぬかつゝ井筒屋の、二階座敷によねをばつみて、湊屋までも漕ぎよせん、戀の相場のとりやりに、負勝のない色所、借りましよといふ聲は、只耳をこすりてかしがまし、爰はゆるせと立聞きし、京屋、伏見屋、薩摩屋のかごを過ぎこし見やりつゝ、小さんが住みし綿屋なる、向ひの軒に立ちとまり、しばらく樣子を窺ひける、されども首尾のあらざれば、綿

屋の門に立ちとまり、内をのぞきつ、格子にたち、詮方なさの涙聲、坂田藤十郎杉山勘左、さては玉川半太夫、其外役者の口眞似し、我を知らする心いき、あはれなりける戀路なり。」(附點の文句は祭文と全く同文なり)小三はそれと聞くより、表に走りいでて、雪の中にしよんぼり佇める金五郎に取縋り、互に慰めつ、慰められつ、まめで勤めよ、病うて下さるなと、さらば〳〵の泣き別れして、立ち歸る金五郎を、路に要して役者仲間の小野山宇治右衛門、小三を多年執心なれば、我に讓れといふ、金五郎之に答へて、相手は遊女なり、勝手にするがよし、我知る所にあらずと言ひ棄てゝ、通り過ぎんとするを、小野山の後にひかへし大岩岸右衛門、鈴木伴右衛門の二人、口を揃へて仲間の一分立て、宇治右衛門に逢はしてやれといふ、金五應せず、三人拔きつれて蒐るを、危く遁れて家に歸りしが、あはれなるかな金五郎、切なき戀に身をかこち、嵐烈しき夜もすがら通ひしより、身を痛め、枕も上らぬ重體となりしを、弟八十郎、傍輩瀧岡彥右衛門、山下又四郎、萬右衛門、太夫元の

しほ等、親切に介抱せしも、其甲斐なく「さらば〳〵の涙露、霜月廿日の朝嵐」に、はかなく消えにけり、かゝる所へ小三は髮振亂し、かち徒跣にて驅け來り、金五郎の屍に抱きつき、悲歎の極自殺せんとするを、ありあふ人々に留められ、死ぬに死なれず、黑髮を切りて「我形見せめて未來も友白髮、身にそひ給へ、南無阿彌陀佛〳〵」といふ聲も、狂氣の如く見えにける」云々。祭文に據りし文句は前に附點せし他に、小三が愁歎のうちに「悲しい時の神たゝき、伊勢、石淸水、春日のや、お多賀の社、扨は又、高津、生玉、天王寺、はだしまゐりの願こめて、つまの命をせめてさて、わたしが年の明く頃まで、生かせてたべと、身にかへて祈るしるしも無い事か」とあり。

同一の材料に據りし宇治加賀掾の淨瑠璃「難波役者評判」は、今も未見の書ながら、「南水漫遊」所引の道行の一章「墨染の尼が崎屋で、身はぬれ衣」の次に「色がくろけりや大黑屋じやと、人が名たつりや、すこしはわくや」の一句、「浮名額」になし」と「額の小三は心から、風呂屋のつとめ引かへて、同じ憂身も品

かはる、茶屋の山衆の仲間入り、綿屋といへる親方の、氣象もよしやかの人の、爲と思へば恨なし」の一節は全く同文にして、其他同書に抄出せる二三章も殆んど同文にして、多少手爾波等の伸縮あるばかりなるが、唯金五郎最期の場を寫せし文「哀れなるかな金五郎、せつなき戀に身をやつし、雪霜霰雨の夜も風も厭はず行き通ふ、思ひかさなるやまふの床、今は枕もあがらねば、次第々々に朝顔の、日かげ待つ間のうき命、終に空しくなりければ知るも知らぬもおしなべて、扨々惜しや藝ざかり、あつたらごとの南無阿彌陀といはぬものこそなかりけれ」とあるを「浮名額」には「あはれなるかな金五郎、切なき戀に身をかこち、通ひし故に身をいため、今は枕も上り得ず、次第々々に朝顏の、日影まつまのうき命、扨も是非なき風情なり」として、そこへ弟八十郎藥をもちて見舞に來り、つゞいて傍輩役者、終りに小三も來合はすことゝしたることゝ、すべて前にいへるが如し。因て思ふに「浮名額」は、宇治の淨瑠璃「役者評判」を聊か增補したるものにあらざる歟、文章の連

續よりいふも、趣向の立て方より觀るも、増補すべくして、省略したりとは思はれざれば也。

椀久末の松山

三木竹二氏嘗て「新小説」に都一中の正本「椀久末の松山」を紹介して、其筆力意匠より推して、近松の作ならんと臆斷せられしを、其後の「早稻田文學」に水谷氏之を駁して、必ずしも近松とは推斷し難き由、いはれたりき。元より筆力意匠のみにて、其作者を定めんことは證據薄弱にて、早計たるを免れざれども、余は猶三木氏に賛成する者にて、文章著想以外に有力なる證據物件を提出せんとす。

「天の網島」の發端、なまいだ坊主がてんごふ念佛に「樊噲流は珍しからず、門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて、貫木逆茂木引破り、右龍虎左龍虎討取つて、難なく過ぐる月日の關や、なまみだなまいだ〱〱、迷ひ行けども松山に、似たる人なき浮世ぞと、泣いつ、エヽ〱ワハ〱〱笑ふつ、狂

亂の身の果、何と淺ましやと、芝を褥に伏しけるは、目もあてられぬ風情なまみだなまいだ〱〱ゑい〱〱〱〱、紺屋の德兵衞、房に元より濃い染込の、內の身代灰汁でもはげず、なまみだなまいだ〱〱〱」とある、初と終の一くさりは、いふまでもなく「國性爺」と「重井筒」の文句にて、その中間なる「迷ひゆけども松山に」云々の一節は即ち「末の松山」下之卷「椀久狂亂道行」の一節なり。

「冥途の飛脚」に、梅川の傍輩女郎が一口淨瑠璃に「傾城に誠なしと、世の人の申せども、それは皆僻言、譯知らずの詞ぞや、誠も噓も元一つ」と自作「遊君三世相」の文句を語らせたる「心中二枚繪草紙」のお島に「おきに戀路の〱まだいろは船、惚れてはの字の帆が見ゆる」と長々しくも「用明天皇職人鑑」の道行を謠はせたる、いづれも自家得意の章句を引用したるものにて、小唄謠曲はいざ知らず、淨瑠璃の文句を名もなき作者の曲中より借用するが如きは、高く自ら標置する近松の、斷じてさる不見識を敢てすべしとも思

はれず、況んや前後の文句を、自作の「國性爺」「重井筒」より取りながら、中間の一節のみ、他人の作に頼るが如きことをや、故に余は一中の「末の松山」を以て近松の作とする說に贊成せんとする也。

紫竹集

宇治加賀掾の「門弟敎訓」といふ書は、同人の藝風經歷見識等を見るべき究竟の材料にして且世に稀なる珍本なれば、其全文を紹介すべし(用字送假名原文の儘、たゞ讀易きやうに句讀を加ふ)

門弟敎訓

凡予一流の淨瑠璃は、謠狂言の音勢を父とし、草紙の文勢を母とし、修行する事四十餘年、四音假名開口淸濁を宗とし、そゝらず緩ます、節拍子にかゝはらず、只位はかせ、程うつりもぢり、はこび、持合、引廻し、色うき、あたり、體用、長短等の故實をふまへ、詞地色地ふしの品をみがき、流義を究む、拍子は是身より出る惡心、程は外よりすゝむる善心、善をもつてみがき、傳をもつてすゝがすは、いかで淨瑠璃の光耀、音曲の眞理にかなはん、かゝる差別も辨へず、己が聲拍子にまかせ或は他の惡拍子に位をうばはれみだりに語りちらすは、偏に本心を忘るゝ、狂人

共いひつべし、又習はずして草紙のふし付を見、或は又聞語にするは、是實僧淨瑠璃と云成べし、諸藝共にいか程利口發明の人とても、口傳を受ずして、道に叶ひ、功至る事有べきや、藝の奥底かぎりしられず、必ほむるにのらず、卑下をなし、雲井の月、貴賤の老若男女、海中の龍魚鳥畜風雨瀧川の音迄に心をよせ、猶懈怠なく修行有べきもの也

元祿十年丑仲秋日

徳田加賀掾㊞

此門弟教訓、予六十三歲の秋認故、七九集と書たけれども、前々の題號の竹の緣あれば、紫竹集とあらはすなり。

* * * * * * * * * * *

延寶六年の秋竹子集、其以後大竹集、竹葉集など、予一流の淨瑠璃の語樣しるしぬれば、今又あらためん品もなけれども、六十三に及び、露命はかられれば、せめて古き弟子共に、我死後のかたみにもと思ひ、元祿十年仲秋に、門弟教訓の一紙をおくる、しかるを銅駝坊書林九兵衛、折節節揃新板催すの間、其序にと是非望によつて、もだしがたく加筆せしむるものなり、されば竹子竹葉集に事あらはすといへども、其品心にかくる人なきにや、只生付たるうは聲にて、引まじき所を引、まはすまじき所をまはし、一息〳〵に扇子をうつ拍子にかゝはり、文字のきゆるも、假名のにちあふも、ましてや位はかせもなく、めん〳〵の我流と云物な

らんかし、かなしきかな、我死して後はわれがちに成り、淨瑠璃の本意を失ひ數年の修行あだにすたらん事こそ口惜けれ、末の世に此道すく人あらば、集の斷をかんがへ拍子をみがき、文句明らかに、とかく假名の消ぬやうに、地色詞に拍子なき物なれば、扇子打事なかれ、地ふしにさへしげきは、かしかまし、いやしゝ
一藝に器用の無器用、無器用の器用有、器用の無器用はならふ覺ははやく、忘るゝ事又はやし、これ無器用におとるなり、無器用の器用はならふ事おそけれども、忘るゝ事かたし、是誠の器用なり、人毎にすゝむ拍子と、たゆむ拍子有、すゝむ拍子はさしあたりよきやうなれども、ゆうなき故わるし、たゆむ拍子をみがきぬれば、本間の拍子になる、是をゆうのある藝といふてよし、勇力の人はすゝます、たゆます、おどろかす、武藝はもちろん、音曲筆の道皆同斷とかや
一藝の下手にかぎり、人のそしるを立腹す、これあやまり也、口惜くばなど修行せざるぞ、そしる人は我身の師と思ひ、そしらるゝ所に心を付、常によく修行し、合點ゆかずば尋聞べし、とふは一人へのはぢ、とはぬは萬人への恥なるべし
一淨瑠璃は段々長き物、たとひよく語りても、數段の中にて只一字あやまりては、能語りたるにあらず、千ばいのうるしの中へ、蟹の足一つ入とやらんなるべし
一節付しやうを便りに語るは、大き成ひが事、それにて成事なれば諸の本程委細にしやう付たるはなけれども、ならはずしてうたふと云ことなし、先わけし

らぬ浄瑠璃を聞に、平安城の道行なれば、はたるもわれが身にそひてと語る内に、四所持有、予が一流には一所ももつ事なし、是皆悪拍子のなすわざ、浄るりはかたらで、しやみせんをかたる成べし、地くばりにより、もたでかなはぬ所こそもつべけれ、謡も下手のうたひは、芭蕉の曲舞なれば、水にちかきろうたいはともちうたふ、是皆習はずして生付たる悪拍子のなす所、是にて思ひしるべし

一位はかせは、上一人より下萬民一切の生類雨風水音迄にある事也、程といふはそゝらずたゆまず、是を本間拍子と云、うつりとは拍子より程に移り、程より拍子にうつり、地よりふしにうつり、外の曲より地にうつり、地より外の曲にうつるをいふ、もぢりとは拍子を程にもぢり、程を拍子にもぢり、たゆまずそゝらずして、みぢんも油断なきをはこびとしるべし

一持合引廻しと云は、地ふしにある事也、或はふし送り、みさほはとゆる所、みさきにすゝめども又曉のと語る所、皆是持合廻し程うつりもぢり也、雲のまゆすみほのかにても同前、鏡山又しやんと立たるみかみ山、皆定るふしなれ共、文句がふしをもつ文勢を母とすと云にて合點せらるべし、或は又スヘテ、文勢にてさまぐかはれども、ゆきかたはかはらず、此外ふし所のとめ、いづれを聞てもすはらず、只可盃をみるやう也

一我幾年語る数百段の浄瑠璃、いづれが易しと思ふはあらず、中にもむつかし

き段八曲有、一小原御幸、二身延、三菅丞相、四松風、五明石卷、六花子、七草刈、八葵上是也

一すべて諸藝をたしなまんに、酒宴遊興色欲にふけ、他念ありては、中々上手に成がたし、只一心に其道々に打なづみ、たとひ月を見花をながむるとも道の心をわすれず、寢ても覺ても油斷なくてこそ、他にすぐれめ、せつなの懈怠は一生のけだいとしるべし、されども、惡にはうつりやすく、善にはもとづきがたし、しりぞくものは大海のごとし、すゝむものは一滴のごとし、むべなるかな〳〵

一一生夢のごとしといへども、修行の間を思へば年久し、既我十七歳の春、あはれ世上に名を發する藝をあたへたべと、三十番神へ祈誓をかけ、年來諸藝の家に出入し、其道々を見聞に、丹誠をつくす者にも、其家の子ならねば秘事を傳へず、然ば望たりぬべき類もなし、逆心をつくし修行するならば、たとひいか體の藝にてなりとも、淨璃瑠に心をよせぬれども、ならふべき師なし、たとひ師なくとも音曲の法を守り、うすきをあつくし、おもきをかろくし、みがくに甲斐のなからんやと思ひ、謠狂言或は平家舞小歌迄の音勢を窺ひ、たゆむをすゝめ、そそるを引しめ、終に我一流の淨瑠璃とす、親類のいかり、朋友の意見、わらひそしるといへども、念願むなしうせんやと難行苦行し、四十一歳にて京都に出、芝居を取立、今年二十四年つゝがなく相勤む、道に達せしとは更に思はねども、或時

は高位高官の御前に召、前代未聞の御褒美に預り、又は國主佛者儒者音曲者にも訪なうけず、愚藝といへども他念なくつとむ故、佛神の御あはれみと有がたし、かくのごとく多年きざみ、はたき、せんじ、しぼり、修行し、淨瑠璃の難病を治する藥方をおろかにし、法にもあらぬ毒をこのみ、或は自身手合の惡調丸をもつて、剩予が直弟子と僞る者、世上にはびこると聞、是則寶曆淨瑠璃と云成べし、しかはあれど、弟子にもあらで弟子と名乘も、予が面目にもやあらん、聞入御ひいき賴入存候以上

成業の苦心を說くこと詳密に、後進を警むること親切なり、末段「しかはあれど、弟子にもあらで弟子と名乘るも、予が面目にもやあらん、聞く人御ひいき賴入る」といへるも、ゆかしき心入なり、一道に達する者の言ふ所、皆佳ならざるなし、さて此文のつぎに、例の八曲小原御幸以下八段を掲げあり。

此「小原御幸」は謠曲のそれに據りたるものにして、宇治新太夫正澄の奧書ある正本「大原御幸」(五段物)の第三にいづ、つぎの「身延」は日蓮の略傳にて、生誕より遷化までをあら〳〵と叙せり、謠曲の「身延」とは文句いたく相違す。

「菅丞相」は配流中の事を記し、薨後その靈、延曆寺座主の所に現れて、例の柘

榴を含んで火炎を吐くことを叙せり「外題年鑑」宇治加賀掾語り物の部に「天神御本地」といふあり、其一段にもや。「松風」は九分通り謠曲そのまゝ、明石巻」は紫式部石山寺に參籠して、八月十五夜の月漫々たる湖水に映るを見て、暫く水想觀に入りたるに、忽ちに自然智を悟り得て、作るべき物語心のうへに浮び、夢ともなく現ともなく、月下に物現れて、光る源氏が須磨明石のさすらひを、眼前に見るといふ筋にて、丸本源氏供養中の一章なり。「花子」は義經が秀衡の館に滯在中、或夜その弟姫千草の前の許に忍びて、海誓山盟の首尾を惚氣たらたら、一圖に辨慶と思込みて、語りきかせし其人は、意外にも北の方の假裝せるにて、大敗亡を極むる滑稽の一段は、狂言花子の趣向を借りたるものにて、「凱陣八島」の第四に見ゆるもの、卽ち是なり。「草刈」は賴政の遺孤龍田の前、父の最期所を弔はんと宇治に赴く途中、猪早太の船頭となれるに邂逅し、共に其舊跡を尋ねしに、二人の草刈童ありて、委しく當時の有樣を物語り、且賴政が打敷きて自害せし扇を傳へもちた

りとて、それを姫に與へ、千部萬部の讀經より敵を打つて修羅道の妄執のほむらを消し、孝行の燈をかゝげ給へ、我等は佛果を得んと、假初に顯れ出でし萩薄の靈魂なりと語りて、扇の芝の草蔭に消え失するといふ筋にて、詞藻は謠曲の「賴政」に負ふ所多し。　こは「源三位賴政」の第三段にて筑後掾の正本と同物なり。「葵上」これも謠曲丸取にて、只始の方に貴船の社に仕ふる寂念法師といふ者、六條の御息所が神前の大杉に打込みし二十四本の大釘を拔き棄て、且社殿に奉納しある弓矢を以て、御息所を射殺す事を書き添へたり、外題年鑑にも「葵の上」といふ外題見ゆ。

以上八曲、概ね謠曲に出て、文辭も七八分までそのまゝなるものあり、文章・は「花子」「草刈」の二曲稍見るべし。　要するに加賀掾の淨瑠璃は、文章も曲節も、二つながら謠曲を距ること、いまだ遠からざりしなり。

元祿時代の京都小說家

近世文學の發達變遷の大勢を觀察するに、元祿を中心として慶長より寶曆の頃に至る約百五十年間と、文化文政を中心として明和より慶應の頃まで約百年間との、前後二大期に分ち得べきが如し。而して前期の文學技藝は、之を後期に比較するに全體の調子、概して粗大にして纖巧ならず、元祿模樣の派手にしておほまかなると、小紋染の地味にしてこせつきたるとに譬ふべきか。文學に及ぼせる儒敎の影響も後期ほどに著しからず、儒佛の敎旨に基きたる敎訓的の文學も多く出でたれども、後期の馬琴に依つて代表せらるゝが如き窮屈に切詰めたる物に非ず。又地理上よりいへば前期の文學は其主力上方にあり、契沖や近松や西鶴に匹敵すべきものは一人も江戸になし。之に反して後期は文學の中心全く江戸に移りて、京阪は微々として振はざる有樣なり。

元和偃武以來六十年を經て、世は漸く太平の化に浴し、衣食足りて生活の餘裕を生じ、一般世人の知識も進歩せしかば、學問技能を以て身を立て名を成さんとするもの種々の方面に起り、活氣に滿ちたる清新の文學技藝を以て此時代を飾れり。國學の茂睡、契沖、漢學の仁齋、徂徠、俳諧の宗因、芭蕉、院本の近松、小說の西鶴、繪畫の師宣、光琳、歌舞妓の坂田藤十郎、市川團十郎、淨瑠璃の江戶半太夫、竹本義太夫等、いづれも從來の因襲舊慣を打破して、新に一旗幟を樹てたるものなり。此の如く東西共に有爲の人物を出したれども、要するに上方の方に重みありて江戶は未だ衡を爭ふに足らず。さて一口に上方といふ中にも京阪兩地のいづれにまづ新文藝の起りしかば注目すべき問題なり。

京都は桓武天皇以來の王城にして、戰國以後疲弊せりと雖も、尙文化の中心として學問は公家の手に保持せられ、一般人民も輦轂の下にあるを誇とし、田舍侍の寄り集れる江戶や、素町人の幅をきかす大阪などと違ひ、諸

事上品にして高尙なる趣味を有すとの自信厚く、「京の町人は五位の位」といふ諺さへありて、町人すら無位無官の田舍武士や素町人とは各別の品格ありと自負せり、さらば此の如く歴史的文化あり因襲的趣味ある地に新文藝は起りしか、否々、歴史的文化と因襲的趣味とは常に新文藝の發生を阻害せり。京都人の保守的精神に富み、骨董的趣味多きは、今猶昔の面影を存せり。新しき物は下品なり下作なり、見るに足らずと頭より排斥し去りて、古典舊型に執著し、茶湯香道伊勢源氏古今集ならでは納らぬ所也。殊に國學歌學の如きは昔よりの本場本元、公家の本職、古今傳授の一巻を後生大事に握詰めて、梅雨明の雷が鳴りても放さばこそ、黴の生えた所が無上に尊く、虫の喰つて讀めぬ所に直打ありと思へり。貴族的保守主義の情弊盛なること此の如き地に、國學や歌學の自由研究の起るべきにあらず。されば二條冷泉両家の歌學に對する陋習を喝破せし戸田茂睡は、田舍侍の集合せる江戸に起り、萬葉の新研究は長流契沖によつ

て、素町人の都たる大阪に起り、いづれも堂上學風の感化を受けざる人々に依つて、唱道せられたり。人或は問うていはん、然らば仁齋の復古學は如何、貞德の俳諧は如何、皆京都に起りし新文學に非ずやと。曰く漢學の勃興は時機最も早く、嘗て明經博士船橋秀賢が道春の朱子新註を用ゐて諸生に講說するを難じ、之が制止を請ひし時、家康は學問は註の新古を問はず、只理のある所に從ふべしと言ひて之を拒絕せり、堂上家の漢學に對する敎權は早く既に亡び、中江藤樹山鹿素行の如く程朱以外の學說を唱へ、或は之に疑を挾むものさへ出でし程なるを、是等の後に仁齋が復古學を唱へしとて、契沖の事業とは同一視すべきにあらず。貞德の俳諧は著しく妥協的態度を帶び、前に荒木田守武によりて一旦打破せられし連歌の法式を復興したるものにて、從來の連歌と著しき等差なく、只俗語や漢語を用ゐ、掛詞の地口を弄せしに過ぎず、依然たる舊趣味に囚はれし生溫き滑稽なればこそ、何の抵抗もなく成立し得たるなれ。談林の新風を唱

へし西山宗因は京を去り大阪に行きて革新の旗をひるがへし、羽翼まさに成つて京師の貞門を突き、惡戰苦鬪の末漸やくその本城を陷れたるなり。

淨瑠璃も最初は京都に起りしも、兎角新奇の事を歡迎せぬ土地柄とて、在來の謠曲說經等に壓され、徽々として振はず、却て因襲的趣味の壓迫少き江戶において急速に發展し、薩摩淨雲以來種々の流派競ひ起りて、流行を極め、機運大に熟したる此、淨雲の門人虎屋源太夫上京して、再び京都の淨瑠璃を振興せり。其後宇治加賀掾出でて都人の人氣を得しが、此人の淨瑠璃は謠曲を少しく和げたる弱々しき上品なる節回しにて、その得意とせし語物も葵上、小原御幸、松風、源氏供養など文句も八分方謠曲のまゝなり。加賀掾の曲中近松の作もあれど、大抵謠曲舞曲等を丸取りにし、又はツギハギしたるものにて、只黴臭き古典的臭氣を感ずるのみ。近松が舊趣味の束縛を脫して新機軸を出したるは、元祿十六年京都より大阪に移

り、曾根崎心中を書きしを紀元とす。近松や義太夫が大阪に出でて始めて十分にその驥足を伸ぶるを得たるは、地理上經濟上の關係もあれど、京都人が常に舊趣味に執著して新文藝に冷淡なる點與つて力あり。小説においても亦然り。京都の小説家は古典の引用や、古文學の焼直しをなして、徒らに學問の素養あるを誇る癖あり。これ亦例の伊勢源氏古今ならでは納まらぬ京都の風氣に基くものなるべし。西鶴もし京都に生れて、彼が如き破格の文章と古典の蔑視を恣にしたらんには、果して最初より都人士の好評を得たるべきか、必ずや無學文盲放逸無慚言語道斷の作者なりと罵らるゝこと、恰も談林派が貞門一派より受けしと同樣の非難を被りしならん。元祿以前の京都小説家淺井了意、山岡元隣等は通俗的敎訓話の作者にして、未だ純粹の小説家といふべからず。小説は實に西鶴によつて新紀元を開かれたるなり。而して是亦京都にいでずして大阪に起れり。さら

ば京都はどこまでも上品ぶりて、西鶴の如き下品なる文學は入れぬかといふにさに非ず、いつも後れ馳せに人の尻馬に乘りて澄まし顏なり。談林派を散々に罵りたる末それに降り、淨瑠璃も初めは歡迎せずして、江戸に盛になりし頃漸く逆輸入をうけしが如く、西鶴の小說の景氣よきにつけて、之を摸倣する者續々相起れり。

西鶴の好色本は天和二年の一代男を初作とし、貞享三年の一代女を打留として、それより筆鋒を武家物、町人物に轉ぜり。然るに京都にて之が模倣者の出たるは元祿年中にて、烟月堂林鴻の好色產毛は出板年月不明なれども、元祿の初頃なるべく、由之軒政房の好色文傳授は元祿十二年、(或云初版は元年なりと)同じ人の誰袖の海は同十七年、好色軒圓水の好色大振袖は同十六年の出版なり。

右のうち林鴻は貞門の俳人荻野安靜の門人にて、堀江氏名は重則、別に雲風子と號す、大津の人、後京師に移り、車屋町通竹屋町上ル町に住し、書畫を

能くし、俳諧京二羽重、永代記反答、あらむつかし等の俳書の著あり。烟月堂の名は宋の林鴻が泊涌金門の詩句、烟生楊柳一痕月に取れるなり。產毛は例の好色物語の短篇集にて、趣向文章共に西鶴に近く、模倣としては最も成功せるものなり。由之軒も俳諧師なるべけれど、其傳記未だ明ならず。團水は增田氏、其雅號より察するに北條團水に私淑せるものか。此人正本屋の芝居評判記に筆を執り、又別に御伽人形の作あり。此二人の作は文體西鶴よりも寧ろ八文字屋風に近似す。是等の人々はいづれも其作少くして多く言ふに足らず、西鶴の祖述者好色本の傳統者として注目すべきは、八文字屋本の作者江島屋其磧なり。今少しく八文字屋本なるものについて語らんに、こは元來役者評判記より發達せるものなり。役者評判記は遊女の評判記や細見の類に倣ひしものにて、貞享元祿の比より殆ど每年出版せられ、西鶴團水等も亦之に筆を染めたりといふ。元祿十二年三月始めて八文字屋より役者口三味線を出板す。京大阪江戶

の三卷に分ち挿畫あり、問答體の批評頗る詳密なり。八文字屋は麩屋町誓願寺下ル町にありて、正本屋九兵衞、鶴屋喜右衞門と相並んで、古くより淨瑠璃本の出板書肆なりしが、口三味線を出して以來、年々評判記を賣出し、好評を得て殆ど獨占の姿となれり。これ其文章挿畫體裁の他に勝りて善美なりしに因る。八文字屋の主人安藤八左衞門、自笑と號し、その出す所の書は自作の如く裝ひしも、實は其磧の作なり。其磧は通稱江島屋市郎左衞門、先祖代々京極通誓願寺前に大佛餅を賣つて家業とせしが、後業を轉じて誓願寺通柳馬場に引移れり。其磧家をつぐに及び遊蕩のため家產を傾く。されど文才ありて能く世態人情に通せしかば、自笑これに托して評判記の筆を執らしむ。其磧は又正本屋より賴まれて役者一挺鼓といふ評判記を作りしに、自笑之を憚ばず、其關係を絕たしむ。是に於て正本屋は其作を圓水に托せり。かくて其磧は八文字屋專屬の作者とはなれり。

八文字屋本の浮世草子の始は元祿十四年の傾城色三味線にして、こは三都を始め諸國遊女の名寄に、遊女に關する小話を附錄したるものにて、全く役者評判記と形式を同じうせり。かくて漸次出板を重ぬるに從ひ、細見評判記の體裁を離れて純然たる小說體を成すに至る。色三味線につヾいで傾城曲三味線、傾城傳受紙子、野白內證鏡、傾城禁短氣等を出し好評ありしが、作者と板元との間に利益分配上の爭ありしと見え、正德四年正月に至り其積は其子の名義を以て、新に書肆を開き、自作の評判記役者目利講を出板し、其開口に從來八文字屋より出せる書は皆自己の作なり、我こそ評判記類の本家本元なれと呼號し、其二月八文字屋よりは役者色系圖を出し、之に對する反駁を載せ、爾來六年間互に鎬を削りて相爭ひしが、總方共に其不利なるを悟り、終に步み寄り折れ合ひて、享保四年正月役者金化粧を自笑其積の連名を以て出し相和解せり。されども此後の著作は皆明に其積の名を署し、且八文字屋以外の書肆菊屋などよりも出板せり。

かくて其礸は元文元年六月、七十歳にて歿しぬ。

八文字屋本の聲價を揚げたるはその傾城物にして、文學史上の位置正に西鶴の一代男と相當るべきものは傾城色三味線なり。此類の書は其外形大抵評判記やうの横本にて、俗に枕本と稱せらる。文章は溫和流暢にして、秩序整然、前後一貫、娓々として語り、循々として說き、西鶴の氣まぐれにして暗示的なるに似ず、警拔奇峭の妙は彼に劣るも、委曲周到の巧は彼に勝れり。蓋し西鶴の如く雜駁險怪なる文章は溫雅なる京都人の嗜好に適せざるならむ。當代の風俗習慣等の描寫に重きを置かずして、專ら人情を精密に寫すことに力めたる點は、近松に似て西鶴と反せり。西鶴は衣服髮飾などうるさきまで精しく寫し、人情は略筆にて急所々々を强く太く書くといふ流義なり。

其礸は又西鶴の永代藏、胸算用等の町人物に相當すべき作あり。善惡身持扇、商人軍配團の類是れなり。是等はいづれも一篇每に獨立の小話集

なるが、又時代物、御家騷動、俗解物類の續物の作あり。百姓盛衰記、西海太平記、當世御伽曾我、義經風流鑑の如き是なり。俗解物は西澤一風、都の錦等のなせる如く古代の事をもすべて現代化し、大磯化粧坂の遊君も島原新町のそれに等しく、曾我兄弟も義經も皆當時の遊冶郎や大盡と少しも擇ぶ所なし。こは現代謳歌の風潮の一斑を現せるものにして、近松の淨瑠璃も菱川の浮世繪も皆同一揆なり。御家騷動の結構は淨瑠璃歌舞妓と等しく、若殿の放埓、奸臣の陰謀、寶物の紛失、忠臣の苦節といふ順序を經て、めでたし〳〵の大團圓に至るを常とす。而して是等の時代物は淨瑠璃又は歌舞妓の種を流用したるもの甚だ多し。例へば大內裏大友眞鳥が竹田出雲の同名の丸本に基き、契情阿國歌舞妓が嵐三十郎座の女歌舞妓千代始に據れるが如し。要するに八文字屋本の時代物は小說として價値多きものにあらず。

最後に注意すべきは、其積が氣質物を始めたることなり。こは西鶴の永

代藏、武道傳來記の如き町人氣質武家氣質の小話集より暗示を得たるならむが、さりとてその創刱の功を沒すべきにあらず。況や西鶴とはおのづから別樣の趣致ありて、輕妙自在機智橫溢、諧謔の中に敎訓を寓し、人情を盡したるをや。正德五年の世間子息氣質を初として、世間娘氣質(享保二年)浮世親仁形氣(同五年)世間手代形氣(同十五年)皆佳作と稱すべし。其磧歿後、明和安永の比に至り永井堂龜友、增谷大梁等盛に氣質物を著し、一時大に流行したれども、いづれも狗尾續貂の誚を辭する能はず。此他寶永の頃に西鷺(御前獨狂言―寶永二年刊西樂(世の是沙汰―寶永三年刊)などいふ京の作者あり、いづれも西鶴に私淑せし名稱と見ゆ。元祿太平記に「いでや都の好色文の達人西村市郞右衞門筆を振ふて西鶴を消すといへど、是亦學問に疎ければ其誤なきにしもあらず」と評判されし市郞右衞門は書肆の主人にて、好色心中女(貞享三年)好色注能毒(同五年)浮世祝言揃(元祿三年)等好色本の作多けれども、是等はいづれも文學の範圍外に脫出

したるものにして、江戸の桃林堂蝶麿の流亞なれば、評論の限にあらず。

西鶴の町人物武家物の摸倣者は尚二人あり、北條團水と月尋堂と是なり。團水又團粹、滑稽堂、白眼居士等の號あり。　兩替町通二條上ル町に住み、晩年東洞院に移る。　西鶴が俳諧の門人にして、師の歿後浪花に赴き、その草庵を守ること七年にして京に歸り、寶永八年正月四日四十九歳にて歿す。一生涯清貧の人なりしといふ。俳諧家譜、誹家大系圖、俳諧京羽二重著はすところの俳書に團袋、特牛（コトヒウシ）、彌之助、秋津島、塗笠等あり。　戲作に新武道傳來記、晝夜用心記、一夜船、新永代藏等あり。　新武道傳來記と新永代藏とは西鶴の武道傳來記と永代藏とに據れること言ふまでもなし。　晝夜用心記（寶永四年刊）は詐譎騙盜の話三十六種を取合せたるものにて、多くは當時の實說なるべく、支那の杜騙新書の類なり。　卷六なる「子を思へば晝の闇」の一章は、嘗て紅葉山人が茶碗破といふ斯講談に仕組みしものにて、殊に面白き話なるが、こは中川喜雲の私可多話（萬治二年序）卷三に出で

たる小話を敷衍せしものなり。兎に角用心記と新永代藏とは此人の傑作なるべし。一夜船(一名怪談諸國物語)は諸國の奇事異聞を集めしものにて、西鶴が諸國ばなしの類なり。之を誹家大系圖に「團水の名あれども別人なり」と斷じたるは、何に據れるか頗る疑ふべし。又諸國の正月風俗を書き集めたる正月揃といふを、團水の作としたる書あれども、此著者の白眼居士は全く別人にて、貞享四年に好色破邪顯正を著して西鶴を罵りたる東山の僧なるを、後には書肆のさかしらにて團水と入木したる書まである由、柳亭種彥の辯あり。本朝智惠鑑(正德三年刊)武道張合大鑑の二書、共に團粹の序文あれども、文體正月揃に酷似し、儒佛の引事いたづらに多きに徵すれば、是も東山僧白眼居士の作にあらずやと疑はる。日本小說年表に寶永四年の千尋日本織(袋とあるは誤)を團粹の作としたれど、こは別人の作にて團水は只序文を書きたるまでなり。種彥の柳亭筆記には江戶僧神秀著とあり。京攝戲作者考に團水の作として男女色競馬を

擧ぐ、その外題より察するに好色本らしけれど、未だ見ざれば何とも言ふ能はず。尙西鶴の歿後その遺稿として出板せられし書には、團水の補筆せしもの少なからざるが如し。

月尋堂は其傳記明ならず、北京散人、看花齋等の別號あり。元祿五年の俳書高砂子、正德四年の伊丹發句合に月尋の名見ゆ、その同一人なりや否やを知らず。鎌倉比事(寶永五年)今樣二十四孝(同六年)子孫大黑柱(同)兄弟𠮷惡車(同)等五六種の戲作あり。文章は西鶴を學びたれども、團水よりも一層平明暢達にして、八文字屋風に近づけり。此人の子孫大黑柱は永代藏の類にして、儻偶(テレン)用心記(寶永六年刊)は團水の晝夜用心記と全く同種のものなり。(儻偶用心記は明和中世間用心記と改め、序文にある月尋の署名をさへ定延と變更せり。定延は天明七年に珍翫鼠育草といふ小冊子を著せし人なり。帝國文庫の珍本全集に月尋の作として武道眞砂日記を收めたれど、こは明和九年の再版本にして、原本は文武さゞれ石と稱し正

德二年の序文に石別子とあるのみなるを、年號を削り作者月尋の四字を入木せしものと見ゆ)。

西鶴出でて其摸倣者續出し、小說の作風一變したるも、尙一方には前代の餘風を存して、敎訓物怪談物も並び行はれたり。敎訓物怪談物の大家淺井了意は長命にして、元祿四年まで生存したれども、こは寛文時代の代表作者と見るべきものなり。此人の作にて有名なるは伽婢子(寛文六年刊)及びその續篇狗張子(元祿五年刊)にして、いづれも諸國の奇事異聞神仙怪異の譚を集めたるものにて、剪燈新話に基きたる作なり。此系統を繼承せるものに、林文會堂、青木鷺水等あり。

文會堂名は義端、通稱九兵衞、伊藤仁齋、伊藤固庵の門人にして書肆を業とし、文林良材、文法授幼抄、扶桑名賢文集等の著あり。了意の狗張子を出版したる緣故あるより、おのれも之に倣ひて其後篇になぞらへ玉櫛笥、玉箒子等を著せり。正德元年五月八日歿、墓は三條蹴上佛光寺廟にあり。

鷺水は別に白梅園、三省軒、歌仙堂等の號あり。雛屋立圃の門下にて、御幸町通二條上ル町に住む。俳諧新式、俳諧指南、俳諧良材等五六種の俳書の他に、和漢故事要言といへる諺を集めしものや、鷺水閑談といふ隨筆の著あり、戯作には御伽百物語、近代因果物語、古今堪忍記(新堪忍記とも)新玉櫛笥等あり。是等は了意の流を汲みたる作物なるが、別に西鶴の好色本系統の丹前艶男といふ著ある由なれど、未だ寓目せず。元祿太平記の記する所に據れば、當時の名優中村七三郎の事を記したるなりといふ。俳家大系圖に鷺水を評して「弱冠ヨリ才智衆人ニ秀デ殊ニ俗事ノ文詞ニ妙ヲ得テ著ス所ノ册子井ノ西鶴ニモ劣ラズ」といへるは甚だ覺束なし。文會堂も鷺水も達意の文といふのみにて才氣に乏し、學問は兎も角小說家としては多く言ふに足らず。享保十八年三月二十六日歿す、行年七十六。前最後に少しく毛色の變りたる作者を紹介して、此一篇を終らんとす。前に時代物を今樣に引直すこと元祿時代の風潮なる由を述べたるが、之と

同様の趣旨にて俗譯の一體を立てし者に都の錦あり。即ちその風流神代卷は神代紀の俗譯、風流源氏物語は源氏の桐壺箒木を俗譯したるものなり。俗譯といふも元より忠實なる飜譯にはあらず、原文以外の入れ事もあれば、故らに猥雜なる文句を加へし所もあり。高天原の神々も粋様扱ひにズント開け給ひ、平安朝の貴公子も「當世はやる吉岡に大紋つけて淺黄裏、繻子のかへしの二重帶、鬢付とろりと刷毛長」の浮世大盡、どこまでも元祿化せられたり。（風流神代卷の紙尾に元祿徒然草、及び風流源氏の空蟬、夕顏、若紫の卷、續刊の豫告あれど、是等は上木されずして止みたるものゝ如し。）此人の傳記は從來世に知られず、或は錦文流と異名同人とさへ誤り傳へられしが、明治二十九年六月の早稻田文學に、饗庭篁村氏小說家の人物と題する一篇を掲げ、その中に都の錦が寶永元年霜月十八日獄中より差出しゝ訴狀を發表せられたり。其文は始に本國常陸宍戸郷宇都宮八田之流右大將頼朝公同腹兄左衛門尉知家二十一世、生國攝州大阪宍戸鋏舟、申三十歲と、自己の身分系圖を記し、次にその來歷を語りて、もと攝

(播の誤か)州佐用郡の鎭守佐用姫神社の神主を務め、八田上宮内少輔光風といひしが、二十一歳の時、學問修業のため上京して、伊藤仁齋の門に入りて經學を修め、傍北村季吟、烏丸資慶について歌學を學び、和漢の書に眼を曝らすこと六年、たま〳〵惡友に誘はれて島原通ひを始め、金につまりて三條繩手にある祖父の所持町屋敷を詐計を以て密にうりこかし、爲に親族緣者の勘當をうけ、大に窮困し、翌年二十七歳の春新黑谷門前に引込み小庵を結び、佛法修行に志し、山科大宅寺の月波和尙に參禪し、名を鋏舟と改め、糊口のため假名物語を作り渡世すること二年六ヶ月、その後立身のため同學の紹介狀を得て、元祿十六年四月三日江戶に下り、添書の人を尋ねたるに、火災のため行方知れず、十方に暮れて町々徘徊せる中に、無宿改の役人に捕へられ、同年十月薩州山ヶ野金山に流されしが、同囚の怨をうけ、居るに堪へず、一旦逃亡せしも忽ち捕へられて入牢の身となり、餓鬼道の苦堪へがたければ、寧ろ早く首を刎ねられたし、自分が京都にて都の錦

といひし由緒は諸藝太平記といふ書にあり云々。

饗庭氏は之に附記して「此の訴狀によりて獄中の苦を免され、同國鹿籠の金山に徙されたり、此所にては、はや取扱もゆるやかになりけん、寶永五年に播磨榻原三冊を著はす（赤穗義士の事なり）其他著作ありしならんがいまだ知らず、薩州藩市來辰右衞門といふ人、都の錦の詩歌等持傳へたる中に、寶永七年と記したるあり、首を刎られん事を願ひてより、七年はたしかに生たるなれど、其後の事を書留たるものゝ山ヶ野鹿籠にもあらずといふ、惜き事かな」といはれたり。

饗庭氏以前に都の錦について記したるものは、中根肅治氏の小說家著述目錄（明治二十六年六月刊）に「元祿時代人、或曰錦文流同人、或曰通稱宍戸與一」と記し、双木園主人の戯山小說通志（明治二十七年八月刊）に「宍戸鋏舟、初の名は光風、或は光景に作る、澤風軒、又黃金洞裏山人と號す」と記し、次に前述の訴狀とほゞ同樣の事を略說し、播磨搨原、道芝乃露の二書

をその著述として擧げたれども、宍戸鉄舟の都の錦なる事については、少しも言ふ所なし。

右の訴狀の出所については、余の寡聞なる未だ知る所なけれども、之を彼の著作に照合するに著々證跡ありて、ほゞ信を置くに足るものゝ如し。彼は他の小説家と異なりて、頻に手前味噌を並べ、盛に自己吹聽をなす癖あり。その著風流日本莊子は神道儒教の立場より、世態人情を批評して氣焰を吐きしものなるが、篇中の主人公なる友部彌市は幼より學問に達し、聰明無比なりしに、二十歳頃より山谷通ひを始め、父母の勘氣を被り、元祿十三年の秋袷一枚を與へて勘當せられしより、俄道心に頭をまろめ、東海道を流浪して京に上り詫住居する由を記し、博學自慢に當時の學者歌人を引合ひに出し、事々しく和漢の書物を並べ立て「和文にいらざる聖賢の語を澤山に引集め、所々に性理の沙汰」うるさく、どこまでも高慢臭きが中に、新町の游女お琴の美色を形容して「松の位の若綠、常盤の色の名に高

き天人の迷子といはるゝ程の器量、宍戸與一が假名文、菱川の浮世繪も及ばず」と臆面もなくほざいたり。與一は彼が通稱なるべく、本書の主人公を彌市といふも、之に因みし名と聞ゆ。

又其著御前お伽婢子卷四に「淸白節義の士を抱ゆるに大分の知行を以て呼ぶと雖も得べからず、古への伊尹、今の伊藤維禎是なり、忠貞の士を求むるに刑罰を以て脅すとも得ること能はず、昔の伯夷、當世は宍戸光風が如き是なり」といへる一節あり。伊尹と仁齋との比較も變なれど、伯夷と宍戸光風に至つては愈ゝ珍なり。又元祿太平記(一名諸藝太平記)卷六に「此頃京都にて八田光風、四書授蒙句解二十卷に述べらるゝ由なり、此書板行なり候はゞ初心の便りといひ、本屋の金箱なるべし」とあり。彼が宍戸又は八田の姓を稱し、光風、與一といひしを見るに足れり。風流神代卷、御前お伽婢子等に雲休堂の印あり。戲曲小說通志にいふ所の澤風軒又黃金洞裏山人の號は未だ見當らざれども、想ふに流謫後の稱なるべきか。

光風が甞て神官たりし事の實際らしきは、風流神代卷に神道の奥義を語りて「此口傳は銀三枚、中臣卜部同斷なり」など註し、『沖津白波』卷三に播州佐與郡佐與姫の社に鬼面を被りし賊の籠りし記事を掲げて、土地の百姓源右衞門の直話なりといへり。有力なる證據とはいひ難けれど、此土地に緣ありげなり。又大宅寺の月波和尚に參禪したりといへるも事實らしく、御前お伽婢子に載せたる宗的といふ禪僧の記事を見るに、全く素人の筆とは思はれず。

彼が著述は左の如し

東海道敵打 元祿曾我物語　六冊　元祿十四年八月跋 同十五年正月刊
御前お伽婢子　六冊　元祿十四年十一月序 同十五年正月刊
風流神代卷　六冊　元祿十四年十一月序 同十五年正月刊
風流日本莊子　五冊　元祿十四年作
沖津白波　五冊　元祿十五年五月刊

風流源氏物語　　五冊　元祿十六年正月刊

最後のものを除きては皆元祿十五年の出板なり。されば訴狀に元祿十六年四月に江戶に出でたりといへると能く合へり。たゞ一つ疑ふべきは元祿十四年冬序とある梅薗堂の元祿太平記に、都の錦の才學を褒めあげたる末に「惜いかな都の錦、その功いくばくもあらずして、行年二十七を限りに西海の浪の泡と消ゆること、洛中書林の涙ぞかし」とある事なり。訴狀によれば流罪は元祿十六年十月なり。然るに太平記の記事によれば、元祿十四年の事となりて二年の差あり。饗庭氏は太平記の記事を傳聞の誤なりと一言に斷ぜられたり。かくいへばそれまでの事なれど、元祿太平記は種々の點より觀察して、都の錦が自己吹聽の匿名作とおぼしき證跡あり、こは既に水谷不倒氏が其著列傳體小說史に唱道せられし所にて、西鶴を貶して都の錦を揚げ、又伊藤仁齋を推稱したる二點より推斷せられたるが、此他にも尙有力なる二三の證據あり。太平記六卷に京の書

肆と參宮道者との問答に托して曰く

京歌書の外女の敎になるべき文は婦人養草、女訓抄、鏡草、女郎花物語抔にて、やがて嚴島の尼の作られたる嫁入道具と申物出來申候、極めて重寶なる書にて、女の身の上に於て敎へ誡をしるし、大和唐土の故事を連ね、萬女のもてる調度めく物漏さず書集め候、此書板行いたし候はゞ、上は几帳の扱髮、下は茶の間の投島田に至るまで、一部づゝ買ふて、櫛箱に納め給へかし、此書の作者嚴島の尼の事は、御前於伽婢子にくはしく見え侍り候

而して御前お伽婢子には、此尼の履歷を記し、且「此尼の集置きし娶入道具といへる草子あり、すべて女中の玩草に面白き物なり、十二冊あり、僕之を寫置きたり、やがて板に行ひ世の助にせんことを思ふ」とあり。お伽婢子は元祿十五年正月の出板、太平記は同じく三月の出板にて、此間中一ヶ月の違あれど、當時の印刷術にては板木に手間取る事ゆゑ、無關係の局外者

がお伽婢子を讀みたる後、文作して太平記に書載せて出板する程の餘裕なし、お伽婢子の著者ならでは出來得べき事ならず。又前に引用せし八田光風が四書授蒙句解二十卷の出板豫告の如きも、著者か書肆かの他には知らぬ事にて、例令知るとも殊更にいふべき事に非ず。尙太平記に昔より今に至りて見醒せずして面白き物は、御伽婢子、可笑記、意愚智物語なるべし、又近年板行ありしには宗祇諸國物語、武道傳來、御前御伽、是等は萬代不易の書なり。

とあり。貞享二年の宗祇諸國物語や、同四年の武道傳來記と、二ヶ月前出板の御前お伽を並べ擧げて、近年板行せし萬代不易の書とす。言者の何人なるかは問はずして明かなるにあらずや。此他思想において、用語例において、太平記は都の錦が著書と符節を合すが如き點甚だ少からず。以上說く所に因つて太平記を都の錦の著書と斷定せんか。訴狀にいふ如く江戶にて無宿改の役人に捕へられて、元祿十六年薩州へ送られしが

事實ならば、みづから「西海の泡と消ゆる」とは豫言出來ぬ筈なり。此の解決甚だ困難にして訴狀の記事を眞とすれば、太平記を錦の作と認定し難く、太平記を錦の作とすれば、訴狀を疑はざるを得ず。今此矛盾を調和せしめむ爲に、試みに說を立つるに、俳道の野心家獅子庵支考が、門人の名に托して自己の終焉記を作り、暫く身を潛めて天下の形勢を窺ひしが如く、都の錦も亦京に居り難き事情ありて、自ら身を隱す覺悟を定め、平家の都落に擬して、出傍題に西海の泡と消ゆるといひしが、偶然讖をなして薩州に追放せられしより、吾人をしてかく考證に勞せしむるにあらざるか。彼の學問自慢は到る處に學者や書物の噂をならべ、ほと〳〵人をして却走せしむ。思ふに彼は小說を書く外に、書肆の相談相手となりて、翻刻すべき漢籍の選擇をなし、又は諺解類の俗書を作りて口を糊せしならん。太平記にその出板を豫告せる根源塵滴問答大成なども、彼が筆耕になりしものなるべし。兎に角相應に和漢學の素養あり、文章も流暢平明にし

て、西鶴の如き破格や俳諧調なく、往々七五調の掛詞多き道行振を交へ、好んで故事を引き詩歌を用ひ、古典的衒學的にして、時としては文中の古語に註釋を施せるなど、明和の建部綾足と似通へる節あり。是等は彼が學問自慢の餘弊なれども、亦通俗趣味の大阪に對する京都の好古趣味を代表せるものといふべし。元祿太平記五巻に京都の書肆が大阪の書肆に向ひ

最前貴様都の錦をおとしめそねみ、西鶴を褒め過ごし、西澤を取上げ給へど、浪花の作者に小學か大學を讀ませて見たい、字面一通もろくに濟むまい、さらば假名草子を作る程に、源氏か狹衣を取出し沙汰なしに聞て見やれ、義理はさておき讀癖さへ醫者坊なるべし。

といへるは、能く此間の消息を傳ふるものにあらずや。かくて古典通を鼻にかけ、和漢の引事業々しく、眞面目臭つて敎訓的の語を吐くかと思へば、時々必要もなき所に淫猥なる文句を陳ぬるなど、全く此時代の風潮を

現せり」彼は表面には西鶴を無學と誚りて自ら高くせんとせしも、內實その文才には感心せしものと見えて、「憂ひがちなる秋の夕横堀に流るゝ塵埃をば西鶴の目に錦と見まがひ、春の朝茶臼山の櫻をば雲かと望みおぼしける、誠に西鶴こそわけの聖なりける、西鶴なくなりて濡れの文とゞまれり」と讃せり。彼は西鶴は勿論其積ほどの觀察も文才もなけれど、兎に角一風變りたる作者なり。錦の風に倣ひし者に隱士梅翁あり。洛陽散人容膝軒とも號す。風流源氏の後を繼ぎて、寶永四年より引續き若草源氏、雛鶴源氏、紅白源氏等、年々源氏の俗解を出せり。

之を要するに京都の小說家は舊趣味に囚はれて、自ら新機軸を出して流行の魁たる能はず。文學史上の大立物となれるものなし。就中その錚々たるものを求むれば、元祿以前に於て近世小說の祖たる淺井了意と、元祿時代に於て西鶴に基づいて之を一變せし江島屋其積と、この二人を推すべしとす。

（明治四十四年二月）

播磨椙原について

前章の文を發表したる後饗庭氏の藏書を借覽したる文學士靑木存義君より左の報告あり、之によりて訴狀の出所を明にし、併せて戲曲小說通志の說の所據をも知り得たるは一に同君の賜なり。

此書は上中下の三卷に分ち、上は四章（八枚）中は三章（八枚）下は五章（九枚）にて、扉の文字は次の如し。

此一卷亥の冬十二月に書終るべきをさはりありて子の夏の末に事なれりといへども雲路を隔つる風の通ひ行方しれず吹ちらし侍るにより今又改正して送るといへり

（朱書）

播磨椙原

于時寶永五載六月十日ヨリ依索

獨樂無二雅伯書鹿籠金山

流人

鋏舟居士判

卷末には奥付と奥書あり左の如し

寶永伍載六月下四天

追而

道芝の露　一卷　右義士切腹の事並性氏改名辭世などのす

報讐記次第

一武家不斷枕　三卷　一同增補　四卷

一同大全　五卷　一同評判　五卷

一同綱目　六卷　一同參考　十卷

一赤穗評義傳　二卷

奥書に

安山作兵衛親芳

寶暦十一年鐵舟直筆を以寫之於鹿兒府也

松岡十太夫が書添

金山流人鐵舟が事山ヶ野鹿籠の兩金山にて委敷書留たるものもなく口傳に覺へたるものさへなくて自筆の物も餘多ありたる由なれども今持傳へたる物もなく人〻山ヶ野山先役市來辰右衛門といへるものゝ持たる詩歌有料紙は杉原半切と見へたり口裏に宍戸宮內少輔光景異名鐵舟とあり

予

奉

公命移居於從長野寶山于鹿籠寶山

□□（二字不明）漢和野吟綴三首以述兩山進退之情趣矣且有訪慕離別亦追―

和歌二首

爲客寶山三十年生前賜有降於天
移居又是黄金地初見鹿陽花月圓
ときはに金花さくみたからの山より山のさかへみそめん
栖かふる里もさかゆく君が代のおなじ恵みのながれ汲べき

追加

此程久しく馴むつびし人々の今日かよ明日かなんど別路のいと
う慕ひつどひて聞へ侍りぬかねてしも名殘のことこそ心一つに
思ひせまりぬれば今更いらへもあへで
かねてをしき心ならひぞみな人の名殘とといへば袖ぬらすかな
かくなん名殘のみさりとは心ひかるゝ事にもあるものかはと思
ひつゞけて
したはしと思ひすてゝも思ふかたにことわりあへぬ我なみだか
な

寶永七（上章攝提格 孟冬上旬）

黄金峒裏山人

澤風軒

陳隆㊞

印文棟隆の二字白文

扨垂水安山が寫したる播磨椙原を寫し終文字の虫付又は消したる處などゞ校合のため鹿籠金山の闕市兵衛が本を借りけるに鐵舟が牢訴の寫をさへに取合借りけり此文も書添へて鐵舟の事尋ぬる人の爲にす

（饗庭翁藏の寫本此處切取りありされど牢訴の文ありしは前後より推知するを得）

右之牢訴の文には鐵舟素生等能知れたり鐵舟或は鐵秀と書しは相分らず光風と光景と相違あり何れか是なるを知らず後の人相糺し給へかし

文久二年壬戌八月二十三日垂水御屋敷にて書添て於朝様へ差上げる

となん。

(右は饗庭翁藏の播磨椙原(寫本)により一字一句も改めず書抜けるものなり)

千那と角上

大正五年の秋頃であつたと思ふ、自分はふと思ひ立つて、江州堅田の本福寺を訪うた。その目的はいふまでもなく千那の事蹟探究の爲で、蕉門往復の書類でも殘つて居りはせぬかと云ふ發見慾にそゝられたのであつた。住職は極めて慇懃に客を引いて、種々な抄物を見せられたが、これといふ目ぼしい物もなく、千那の白馬紀行と角上の瞬匕亭記とを借り受けて、秋雨蕭々たる湖上を渡つて歸つたのである。

千那は本福寺の十二世で、法名明式(風俗文選の略傳に妙弍に作るは非なり)權律師となり、退隱後は感應院といひ、享保八年四月十七日寂、享年七十

三。角上は其養子で十三世の住職、法名は明因、退隱して潦游院といひ、延享四年五月八日八十四歲で歿した。誹諧家譜に七十三歲としたのは、千那の享平と混同したものと思はれる。角上の子が明絮角々、その子が明隨末角(寛政五年三月二十九日歿六十八)で、四世打續いて俳諧に遊んだ僧家である。角上といふ名は、蝸牛角上の爭などいふ意から出たものかも知れぬが、其角を慕うたものらしく、手蹟もそれを學んだやうに見える。

さて白馬紀行は宗祖親鸞聖人の遺跡巡拜を思ひ立ち、寛永五年三月二十八日を門出とし、四月二十九日江戶に著き、それより鎌倉、金澤、常陸、越後、信濃等の神社佛閣を巡りて、九月中旬再び江戶に歸着したる紀行にて、詩歌俳句を多く挾んでをる。その跋文に、

高祖の遺蹟を拜せんとて、さいつころ杖を翅にして東北の山海にかける、予もとより西湖のかたはらに住み、常に漁樵にともなひて、風雅の道にくらし、行先の見ること聞くことに、唯いひなれしざれ言ばか

りにて、他の耳を養ふとにはあらず、聊か我旅懐をのぶることしかり。

感應院主法の諱は明式、俳諧の字は千那、正德三とせ冬佛名滿日これを書

とある。極めて敬虔な態度で佛恩祖德を述べたもので、俳文としては、稍藻思に乏しい。句も其時其場の卽興を無造作に發しただけで、取出して紹介する程の物はない。千那の文章は、この他に尙白の撰した忘梅集の序、許六の韻塞の序と、風俗文選の中に近江八景序とがある。

角上は退隱後、京の三條橋東に住み、その家を瞬七亭と名づけ、專ら俳諧に遊んだ。其知己朋友に依賴して亭の記を書かせたものを集めたのが、卽ち瞬七亭記の一篇である。詩文歌句を寄せた人人には、祇空、千梅、羽十、淡淡、風竹、大圭、洒堂、羅人、巴人等の俳人より儒流桑門に及んで、頗る多數である。亭は粟田口にあつて、左は靑樓、右は花街、市店前に列し、招提後に接し、極めて雜沓な狹隘な場所であつたが、角上は更に意に介せず、鈍甘と命名

した六十許りの老僕に薪水の勞を取らせて、誰彼となく客を迎へて、茗を烹、俳を談じたとある。瞬匕と名づけた譯は、矢島宗明といふ人の文に、亭何以名二瞬匕一、曰瞬變瞬化瞬往瞬來之義也とある。

敬雨庵祇空の記に、角上の身分を說いて、「このぬし(角上)や、そのかみ水尾の流を源に注ぎ、中比淨土眞宗に入て、その星霜や三百四五十年にもふりぬらん、六街の貫主と內陣に院家とつらなり、權大僧都法印に禁官をつみて、川鰭古大納言實陳卿の猶子なり、殊に將軍家より寺領を下しおかれ、代々の位牌を佛室に置く、所は志賀野洲栗太の三郡をしめ、東西の頭官をいただき、近鄕の末流處々に分れ、檀越およそ五六千、この蘭若を慕ふなんめり云々」とある。俳諧の方面では千梅の記に「風雅の鋒先に至ては勇猛活然と、もとより手だれの大將にして、湖西堅田の本城を堅うし、大津打出の出丸に、花實流行の軍配をひらめかして、西海道の風騷人を追ひまくり、猶此瞬匕城に出張しては、風雅に富み、矜つたる京勢を引受け、每席の誹戰にも

敵に押附を見せず、其陣頭には敬雨大圭の俊哲あり、淡々、巴人の强敵あつて、常に花を降らせりとぞ、予は本城の股肱なり、頻に後詰の催促に驚き、駈鼠に鞭を揚げて是に題することしかり」とある。

誹諧家譜に據れば、瞬七亭類燒後、湖南に歸り三井寺の傍に卜居し荷庵といつたといふ事である。

以上が白馬紀行と瞬七亭記とから見出した事實の要點で、この外に紹介すべき程の事はないのであるが、何か手がゝりをと、種々の俳書を涉獵した序に、書きとめて置いた千那角上等の俳句を左に披露する。

木蓮花あぢな所を見付けたり　　千那

木蓮花鈍な所を咲きにけり

おもひ子を叱るに似たり雉の聲

法隆寺開帳南無佛の太子を拜す

御袴のはづれなつかし紅の花

逢坂のかたまる頃や初櫻

紙屑や出代るあゝとの物淋し

それ〳〵の朧の形（なり）や梅柳

海山の霞む冥加や生れ國

神の門たぞや箒を梅の闇

痩藪や作り倒れの軒の梅

如月や身は思はねど押やいと

八十八夜

ふく病につれなき霜の名殘かな

常齋にはづれてけふは花に鳥

乏少に梅咲く月のおぼろかな

かへる子やともにこくなる後の物

牛より馬場引返す燕かな

流れ行く雲雀は滋賀の花觸か
やよ雲雀足はなくても大事なし
たてわかる山三井寺や雉の聲
江を渡る梅や白髭打下し
涅槃會や末代なれば物を食ふ

軒近き岩梨折るな猿の足
隅田川艪の音夏を始めけり
燕の菖蒲に迷ふ家路かな
手を伸べて覆盆子くひけり馬の上
(手を伸べて馬上に摘みしいちご哉)
蠅打てあとにはながめられにけり
唇に墨つく兒のすゞみかな

皮むくも物むつかしき粽哉

草臥れて三井に歸るか時鳥

思へども蚊を殺すこと夏百日

舟曳の妻の唱歌か合歡の花

夕立に踏みなかへしそ渡舟

髭共が座にかたぶくや麥の秋

罌粟散てさゝらけのなき匂哉

扇打いかに持つらん汗ぬぐひ

信樂や尉が家督の山いちご

追悼

清次は天性物に愛敬ありて貴賤親む事厚し、一生は盧生が夢に五年長じたまひ今五十年ありともわかるゝ日はうかるべし、いつの時編してか叡嶽の麓に馳走す、世渡る道に苦むかと見れば風雲に嘯き山水に樂む、今は彼國にして嘸樂むらん。

村樗これや形見の下凉み

高燈籠晝は物憂き柱かな
秋風や萩のりこえて海の音
山鳥を休めて鷹の別れかな
名月や無事に穗を出す竿はづれ
菊は猶捨てじ佛のたてがらし

初雪や一返ふりて散紅葉
初雪や波に伊吹の風外れ
初雪や横川の杉の三分一
いつまでか雪にまぶれて鳴く千鳥
忍ぶ夜の蹕こそばき木の葉哉

しぐれきや並びかねたる紗舟

水涕に誠見せけり御取越

（氷涕に誠ありけり御取越）

人を吐く息を習はん冬籠

氷魚といふ名こそをしけれ年の暮

厚衾夏の酒債と諷ひけり

（下五、一本笑ひけり）

横雲を聲の別れや鉢叩

南都旅店

誰のぞく奈良の都の圃の桐

芭蕉翁悼

月雪に長き休みや笈の脚

曲水や筆の流るゝ御溝川　角上

江東の李由が祖父の懷舊の法事に各々經文題の發句に彌陀の光明といふ事な

小服紗に光をやどせ玉椿

つばくらのうかべてすべる柳哉

こてまりや娘持たる豆腐茶屋

かしこさの脱で行きけり梅の花

楮草やさはとて色の白からず

早乙女は古笠ほどが上手かな

奈良漬の瓜見て參れ加茂田中

小僧ども庭にいでけり芥子坊主

夕顏やしづが湯殿は石瓦

大きなる噫一つ秋のくれ

名月に得たりや柿の刻はさみ

山寺に山椒くさき火燵かな

芭蕉翁悼

芭蕉葉の寒しと答ふ聲もなし

蕎麥粕の枕の音のさむさかな

寒夜普門樓にのぼる

霜ながし夜の都のとばかり也　角々

俳人惟然の稱呼について

芭蕉門下の風狂僧惟然の稱呼は、イゼンであるかイチンであるかゞ疑問で今日までまだ決定して居らぬ。或人は鬼貫句選の中に

惟然が伊丹の我の宿に來りていふ句

秋晴れたあら鬼つらのゆふべやな

とりあへず

いせんおじやつた時はまだ夏とあるのを證としてイゼンであるといへば、それは惟然を以前にかけた洒落であつて特別の場合だから證據には成らぬといふ。

成程これにも理窟はある。然るに此頃偶然四山集といふ句集を手に入れた。それは元祿十六年に菰洲の編集したもので、惟然の門下及びその流風を慕ふ姫路の人々千山(紀文の千山とは別にて姫路の人惟然門、享保十三年歿)盾山、元瀧、菰洲等の作を主として惟然、鬼貫、智月、舍羅、月尋等の句を交へ擧げて居る。今その中から惟然の句を拾へば

この風に舟とは誰かたれ〳〵か　盾山
しつかりとこそわかれわかれつ　惟然
けふもくれる明日もあさても稲かるか　盾山
おし合てねよみんな冷たら　惟然

ひごろへだてぬ中を社その巻この巻鶏にみだれなから今思ひ立るゝ四山集に幸するものえけらし盾山ヿ洲産土ははりまの姫路の風骨そのまゝ烏口をひとつにする事洛の無量坊が燈下に社　烏落人

また爰でその月ならばその月か

よい節句でござるごなたも菊の花　惟然
　はし立にあそびて
あつちからこちからも猶與謝の海　いせん
　旅關眺望
天氣やらあれやら少と沖が鳴ル　惟然
　ヿ洲の人におくれたるを悼てをの〳〵
ぜひもなき世と思はれつけしの花　惟然

高瀨川納涼

今こゝへ何所から蓮が來たら嘸　いせん

右の如く二ケ所だけいゝせんと假名書きにしてある、これで見ると鬼貫の洒落も無理でなく、やはりイゼンが正しかつたのである。誠に瑣細な事ではあるが、その瑣細な事がいつまでも引懸りになるのもうるさく、且四山集の如きあまり世に知られぬ片々たる小冊子は、亡佚し易いものであるから、確證を見つけたを幸に、こゝに書きとめて置く。

來山と鬼貫

談林派の掉尾の作者として注目す可きは、小西來山とその親友なる上島鬼貫とである。此二人は年齢に於ては芭蕉より後輩なれど俳人として世に認められた時期より云へばむしろ先輩である。

來山は幼少の頃より談林派の前川由平に就て俳諧を學び、初め萬平と號

し、又宗因にもついて二十歳前後既に名を成し、晩年大阪の今宮に住んだ人である。この人の句は飄逸洒脫に加ふるに蕭散の氣を以てし、蕉風と談林とを融和した趣がある。

わが寢たを首あげて見る寒さ哉

時鳥濡れて帷子一つなり

元日やされば野川の水の音

花散りてよい古びなり一心寺

見返れば寒し日暮の山櫻

僧ひとり師走の野道梅の花

行水も日まぜになりぬ虫の聲

雨方に髯があるなり猫の戀

この人の特色は手輕く俗語を使用することである。

飯蛸のあはれやあれで果てるげな

花咲いて死にともないが病かな

愛子を亡ひて

春の夢氣のちがはぬがうらめしい

若楓一降りふつて日が照つて

短夜や高い寐賃を出したこと

秋立つや蕢漬も澄み切つて

添竹も無いにけなげに此菊の

花ならば花野の花にわけがある

一體談林派の人は殆ど皆前句付の選者をやつて居る、それで自然俗語を用ゐる調子を俳句の方にも移したものと見える、從て中には俳句と云ふよりも寧ろ前句付と云ふ方が適當かと思はれる樣な句もある。例へば

短夜を二階へたしに上りけり

早乙女やよごれぬものは唄ばかり

松の月枝にかけたりはづしたり

併し之れを一時談林派が奇抜な調子を以て人耳を驚かす事を力めたものと比較すると調子が穏やかになつて、其の著眼も優れた所がある。彼の集中談林調の句を拾つて見ると、次の如きがそれである。

蓬萊に熨斗の高橋かけまくも

蛙々土のけて見ん歌の種

甲人形人にうしろを見せざりけり

手なし坊叉もや秋のたつか弓

鬼貫はもと伊丹の酒造家であつたが、後に家道衰へ大阪に出て一時鍼醫をしたと云ふことである、此の人の書いた「ひとりごと」によると、寛文元年春伊丹に生れ、此地は昔から連俳の好き者が多かつたので自然其風化をうけ、八歳の折

來い〳〵と云へど螢は飛んで行く

と口號み、それから俳諧を嗜んで、十三歳の時貞門の高足松江重頼と師弟の約を結んで古風の俳諧を學び、十六歳の時より宗因の風流に心移りて談林の風調を云ひ習ひ、異體異形の句を吐き散らせるが、一朝深省して思ふには、古風と談林の俳諧は共に言葉を巧にし、姿を飾るのみにて心淺し、つら〳〵よき句と云ふを思ふに、言葉に巧みもなく、姿に色品をもかざらず、サラ〳〵と詠み流して、然かもその心深し、古風、談林の詞藻作意に拘泥するは、未だ道の至れるものと云ふ可らず、尙深き奧もやあらんと自ら安んせず、延寳九年の頃より深く思ひ入つて、五年を經て貞享二年、二十五歳の春「まことの外に俳諧なし」と悟りて、詞藻作意に汲々たる弊を脫し得たりと云うて居る。この貞享二年と云ふは、卽ち彼の芭蕉の有名なる古池の吟のあつた年である。

鬼貫は一方に於ては談林の梅翁、西鶴、才麿、由平、來山、團水等と交り、又一方

に於ては蕉門の惟然、支考、嵐雪、舍羅等と交際し、雙方の俳風をうけた人である。芭蕉は年齢に於ては十九歳の兄であるけれども、俳壇に名を認められたのは鬼貫の方が却て早い。來山や鬼貫は早熟であつて芭蕉は晩成の人であつた。されば「ひとりごと」の中にも、わがもとに三度び來りし桃青と云ふ男、その質さかしとも覺えざりしが、今はいつしか諸方をいちじるしく振舞ひ歩りくよ、と云うて居る。併し晩年には芭蕉に對して敬意を拂つた樣である。又「ひとりごと」の中に不易流行を論じて「古風も昔は當風、いま當風と思ふもいつしか古風とならん、共に作り求めたる句の姿によりて新古の名はあれど、修し得てまことの道を行きたる人の句は幾年經とも新古の差別あらず」と云ひ、又「句を作るに姿言葉をのみ巧みにすれば誠少し、只心を深く入れて姿言葉にかゝはらぬこそ好もしけれ」と云ひ、又「眼前のことを云へば、言葉淺くも意味深くして幽玄に通ふ」と云へる類ひ、何れも姿言葉にのみ奇巧を求め、惡る氣取りにひねくつた調子の

弊を厭うて、ずらりとしてわだかまりの無い句の姿に誠の詩美を寓せんと心掛けたものであつて、芭蕉の著眼せし所と略ぼ同様である。

されば鬼貫の俳風は、自然の儘にして、飾らず、作らず、平易率直を旨とし、意の赴く所に任せて、語の雅俗を選ばず、飄逸淡泊の中に味ひがある。只其の弊は餘り無造作に言ひ放つて、平凡無味に陷る點にある。例へば

風が吹く梅の荅はしつかりと

しよろ〳〵と常は流るゝ大堰川

庭前に白く咲いたる椿かな

鶯の鳴けば何やらなつかしう

又切字の無い句が隨分多い、それも矢張巧みを求めないと云ふ論の結果かも知れぬ。是等は吾々が見て餘り平凡であつて慊らぬと感ずるものであるが、併し彼自身に於ては寧ろ得意の作であつたかも知れぬ。「七車」の序文に

夫れ俳諧の道に入ること、初心を離れて上手に至り、上手を離るゝ所名人ならん、上手とは句を面白く作るを云ふ、名人とは左のみ面白き聞えも無く、底深く匂ひあるを云へり、尚その奥に至りては、色もなく香もなきをこそ得たる所と云ふなるべし

と云うて居るが、畢竟まことの外に俳諧なしと云ふ立場から、極端に陥つたのである。此人の句も矢張俗語を盛んに使用するのが一特色である座五に不了語(花の何の、此菊のの類)を好んで用ひることも來山と共通である。

踏んでは花を破り踏ますしては行く路なし

野の花や月夜恨し闇ならよかろ

草麥や雲雀が上るそれ下る

二月二日京に住所を求めて

北へ出れば東へ出れば花の何の

鶯が梅の小枝に糞をして

春の日や庭に雀の砂あびて

月尋が妻に別れし悼み

春の夜の枕嗅ぐやら眼がはれた

二月末惟然に訪はれて後餞別

いなうとの花の前なれやとめられぬ

田家

六月や臼をほさうぞ搗臼を

そよりともせいで秋立つことかいの

何と菊のかなぐられうぞ枯れてだに

何と今日の暑さはと石の塵を吹く

寝て冷えて空也聞ことてさめはせぬ

いざさらばござびろく飲うで千鳥聞こ

惜めども寝たら起きたら春であろ

冬は又夏がましぢやと云ひにけり

「何と今日の暑さは」「冬は又夏がましぢや」は前句付の風調である。鬼貫も來山と同じ樣に前句付の點者をして居たから、俗語を使用することは其の影響なるべきも、尙一つ考へねばならぬ事がある。鬼貫の師匠なる松江重頼は貞門の俳人であるけれども、連句の中に好んで俗語を使つた人である。「貞德誹諧記」と云ふ書に、貞德を初めとして貞門の有名な人の獨吟百句を集めてある、その中に重頼の獨吟もあるが、之れは大變他の人々と違つて居る、その二三を示せば

寒空も君を思へば行かでやは

汲むおなさけも戴きたやの

さよひめやあはれ戀死にこがれ死に
　虫もおもひに飛○び○込○む○か○い○の○

　猪名野のいなと言はで誓文
有馬山ありしなさけをわ○す○れ○よ○か○の○

と云ふ樣な言葉使ひがある、それ等の感化をも受けたものと思はれる。兎に角或點に於ては、來山と鬼貫とが句風に於て頗る共通の點が見える。

この俗語使用と云ふことは、おのづから天然よりも人事風俗と云ふ方面に興味を持たしむる樣になる。天明の太祇も俗語を巧に使用した人であるが、太祇の句も人事風俗に關係したのが多く、中には殆ど前句付の資料と同一なものが見える。例へば

行く女袷著なすやにくきまで

蚊帳に居て戸をさす腰をほめにけり

彼の後家のうしろに踊る狐かな

鰒喰ひし人の寢言の念佛かな

是等も「や」「かな」「けり」などの切字を除けば、やがて前句付の句となるべきものである。

高野の玉川

谷水や風に漂ふ月の糞

世人多く「大德の糞ひりおはす枯野かな」といふ蕪村の句に驚倒して、鬼貫が「月の糞」を知らない。村の句は只遠く其姿勢から想像したので實物は見えない、鬼は直に其物に着目して、しかも一點臭穢の感がない、月光の美化によるといふものゝ作者の手腕驚くべきである。鬼貫の文また作爲の跡少く淡雅愛すべきである、其著ひとり言、能く自然の風物禽蟲を觀察

して、著眼凡を拔いて居る、今會心の數章を摘出する。

春の月は暮れそむるより朧だちて、物足らぬけしき

夏の月は灯を遠く置きてながめ深し

秋の月は窓に軒に海に川に野に山に

冬の月は一むらの雲の雨こぼしゆく隙を照していそがし

春の雨は物ごもりて淋し

夕立は氣晴れて凉し

五月雨は欝々さゝびし

秋の雨は底よりさびし

冬の雨はするごに淋し

柳は花よりもなほ風情に花あり、水にひかれ風に隨ひてしかも音なく、夏は笠なうして休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水に浮みて風に步み、冬はしぐ

れにおもしろく、雪にながめ深し。

蟬は日のつよき程聲くるしげに、夕暮は淋し、又山路ゆく折節、梢の聲谷川におつるも涼し。

虫は雨しめやかなる日、籬のほとりにおろ〳〵鳴き出たる、晝さへ物哀なり、月の夜は月にほこり闇の夜は闇にむもれず、あるは野ごしの風に、おのれおのれが吹き送る聲いつ死ぬべしとも聞えねど、秋限る命の程ぞはかなき、つくねんとして夜も更け、心も沈みて何にこぼるゝとは知らぬ涙ぞおつる。

鴈はひとつ〳〵山越えて跡なく見果つる、舟の上にて古郷のかたに行違ふ聲、又つがひ〳〵並びゆく中に、はしたなる鳥のまじはりたる、いづくの

網にかゝ身を失ひけんと、妻の心ぞ思ひやらる。

乙由と支考

伊勢は守武以來俳諧の流れ常に絶えず、蕉門の末輩に岩田涼菟あり、山田の神官で神風館と號した、其門下に麥林舍と稱した中川乙由がある。此二人は伊勢派の勢力擴張に最も功あつた者であるが、其句風は俗惡卑俚にして月並派の本山といふべきである。

大勢の手に餘りたる螢かな　　涼菟
さし當る用もまづなし夕涼　　同
浮草や今日はあちらの岸に咲く　　乙由
花さかぬ身をすぼめたる柳哉　　同
月花の目を休めばや時鳥　　同

の如き其特色を示したもので、俳諧を俗化した罪は、此伊勢派と支考の始

めた美濃派とが張本で、蕪村が支麥の徒と罵つたのも尤もである。支考は禪宗の坊主おちで、同輩と爭うて寺を出て伊勢に赴き涼菟に從遊し、その紹介によつて蕉門に入つた。名譽心の强盛な野心家で、自ら「風雅は名聞の器なり、我は浮世を相手にして俳諧の名に狂せん」といつた。芭蕉が强ひて人の解するを求めず、同好の二三士と箇中の眞趣を味ふを樂んだ風雅は、彼に因つて名聞の方便となり、一般世俗を相手とするものとなつた。芭蕉が俳諧は俗談平話を嫌はずといつたのを、極端に說き曲げて、「俳諧は俗談平話なり、中品以下に風雅をひろむるためなり、中品以下の言行を以て中品以下の人を導かんに何かは學び難からん、我門の學者達は門前の姥に聞き合せて合點をせねば俳諧にあらずと、己が心のいきすぎを恥づべし」と專ら俗衆に入り易き易行道を立てゝ、俳諧宗の法然親鸞を以て自ら任じ、十論、續五論、古今抄等種々の書を著し、故翁の直傳なりと稱して、盛に自己の勢力を張らんとつとめた。著書の動機が不純で、議論

も今日より觀れば蕪雜ではあるが、當時の俳人の作としては、隨筆的のものから脱して、多少組織的に一種の詩學詩論といふやうな物を建設せんとした努力は買つてやらねばなるまい。異端邪説として同門から罵られたものゝ、兎に角一通り筋道は立つて居る、之に對する越人の駁論「不猫蛇」の如きは、只一片の漫罵雜言たるに過ぎぬ。この人も句は下手で、得意の

歌書よりも軍書に悲し吉野山

片枝に脈や通ひて梅の花

牛叱る聲に鴫たつ夕かな

などもあまり感心出來ぬ。

是までか〳〵とて春の雪

梅が香の筋に立ちよる初日かな

山吹に春を渡して青葉かな

いづれ劣らぬ立派な月並である。俳諧古選の編者三宅嘯山が支考を評して「この子もと僧たり、故に其學粗ゝ二敎に亙る、選述文を以て自ら高うす、發句に至つては許六と魯衛の政のみ、十論、古今抄等の作託語多しと雖も、間々確論あり、諸邦の末學靡然として敎を奉じ之を仰ぐこと斗の如し、而して其弊や杜に膠して瑟を鼓す、之を概するに議論鼓舞その長ずる所云々」と云つたのは適評である。美濃派の勢力盛なるに從ひ、伊勢派は之に同化せられ合して一個の上方風となつた。上方風は江戸風の意味のあるやうな無いやうな、わかつたやうで分らない謎語に陷つたに反し、平明易解を尙ぶより卑俗に流れ品格乏しく、野夫村童の雜談に過ぎないものとなつた。

大淀三千風

三千風は伊勢飯南郡射和村の人で、本姓は三井氏、別に師につかず獨立獨

行、延寶の頃一日獨吟三千句を吐き自ら三千風と號した、西鶴の二萬翁と稱したと同樣である。無不悲軒、寓言堂、呑空、東往居士とも號した。日本周遊の志を起し、まづ仙臺にゆき留まること十五年、天和三年春仙臺を發し、元祿二年夏に至るまで前後七年で行脚を終り、晩年相州大磯に棲止し文覺上人が作つたといふ西行の像を得て、四方の寄附を募り三都の遊女にまで勸進して、西行庵を建て、其傍らに祐成の妾虎の像を置き、鴫立澤の故跡だと稱して、一聲や犬西行に時鳥と詠じたので、世人から犬西行と呼ばれた。支考と共に賣名心の盛んな男で、文章俳句共に衒氣滿々嘔氣を催さしめる。貞享三年の作、射和村延命寺地藏院九景の中から抄出する

神山群鳥

神山雪消えて松もくろはの群鳥

金剛櫻陣

山は金剛の杵にして花を打出す非情櫻

皆並麥園

かいなみ錦をしきたへ川音の蟬麥を染む

長谷素雪

長谷山雪吹閉帳をして松もなく

寺前扁鐘

鼾うらがれて夢世わたる寺前の鐘

虛栗調に似た字餘りで、詩趣更になくコケおどし一方である。元祿十二年作の本朝十二景は口調は不正になつて居るが、街氣俗氣は更にぬけぬ。

富士

涼しさやはじめて不盡に後むく

松島

松島の嵐や月をほういく

箱崎

扇植ゑて雪に咲きけり浦の松

象

下闇にねいる西行ざくらかな

朝熊

不盡朝熊荷ひてしわる三日の月

松江

大千を引籠む潮や鱸網

明石

ほのぐや此時浦の五月雨

これだけ山氣のある策士で、何程の成功を贏ち得なかつたのは、その根據地が交通不便の東北に僻在したからでもあらう。四月四日を自己の命期なりといつて、鳴立澤を出てゆくへを暗らましたといふことであるが、近年射和村の共同墓地で其墓が發見されたが、それには寶永四丁亥年正

月八日とあつた。これも支考が自ら終焉記や追善集を出したのと能く似て居る。
芭蕉が奥羽旅行に仙臺地方で歡迎されなかつたは、三千風一派が堅めて居つたからだといふ説があるが、果して然りや否や、近頃發見された芭蕉談後編に次の一話がある。逆流は三千風の門下で其賛を書いた人である。
「貞享元祿の比伊勢松坂の人の由、三千風といふが鴫立澤寺を建立とて、日本國中勸進せしことあり、此人長崎に暫く逗留せしが、或時いへらく、今江戸に芭蕉桃青といふものあり、俳諧は上手なり、しかし埒明かぬ俳諧なり、たまく\に發句一句作りては四五日も七日も其の句を案じて、漸く一句を成就す、我は百二百の句を作ることは一瞬の間にあり、夫故に一日に三千句を作りて、自ら三千風と號したり、去り乍ら追付日本國中は芭蕉が一風となならん、其故は其性柔和にして、しかも和漢の學に渉り、博識多才にし

てしかも天然と大人の相あり、萬人の歸敬すべき人なりといひしとぞ……

……崇福寺逆流禪師の物語なり」。

横井也有

也有名は孫右衞門時般(トキツラ)、名古屋藩の重臣で、祿高千五百石、七代宗春八代宗勝に仕へて御川人御番頭等の職を勤め、寶曆四年五十三歳の時、前津の里に退隱して優遊自適、文墨の樂に耽り、天明三年八十二歳で歿した。文武の諸藝に達し詩歌俳諧を善くした多能の人で、俳諧は獨學なれど、支考の俳諧は俗談平話なりとの說に贊同して、彼の雅語艶詞を用ゐて高雅を裝はんとする曉臺一派に反對して、通俗にして滑稽なる句を好んだ。支考の續五論を揚げてその十論を斥けた事は、次に抄出する管見草で能くわかるが、それにしても也有の句が餘りに雜俳趣味に傾いたのは、紀逸の武玉川や川柳の家內喜多留の影響もないではなからう。武玉川初篇の出

た寛延三年は也有の四十九歳、家内喜多留初篇の明和二年は六十四歳の時である。也有の句「晝顏やごちらの露も間に合はず」が單にやをはにかへて、武玉川六篇に出でゐるのも偶然の暗合かも知れないが、その趣味の接近を證するに足りる。

大將は負はれて出るや螢狩
暗がりに座頭忘れて涼かな
女房に一夜ふられん根深汁
蓬萊に見るや浮世の慾ぞろへ
公家の手に豆でかしたる子の日かな
食へもせぬもの引きに出る子の日哉
くさめして見失うたる雲雀かな
稲妻やくさめを一つしぞこない
よい時に桶屋休んで時鳥

小便はよその田へして早苗とり
刈る時に生む腹もあり早苗取
物まうの聲に物着る暑かな
芋賣は錢にしてから月見かな
庭ばかり流行る醫者ありけふの菊
仲國が耳に邪魔なる砧かな
提灯の旦那を請る夜寒かな
其寒さ煮て取返せ大根引
六月の狀で窓張る寒さかな
足と鍬三本洗ふ田打かな
蠅が來て蝶にはさせぬ晝寢かな
埃溜の薄や下駄の穴目〱
後の月芋が垣根は荒れにけり

麥一畝踏まるゝ櫻咲きにけり

切字を除けて、上下に句を置換へでもすれば手もなく川柳に成る、試みに少々やつて見よう。

螢狩大將は背に負はれて居

女房に其夜振られる根深汁

白い手を豆だらけにする小松引

小松より小松菜なりと引けばよい

くさめして雲雀の行くへ見失ひ

刈る時に産む腹もある早苗とり

小便はよその田へする早苗とり

物まうの聲に物着る暑い事

仲國は砧の音をうるさがり

其寒さ煮て取返す大根引

「蠅が來て蝶にはさせぬ」は新に手數をかける迄もなく、既に古人の句がある。曰く、

蠅が來て晝寢の顏を皺にする

也有のくだ見草

也有が俳諧に關する意見や雜話を書いたものに管見草と題する一卷がある、寫本で傳はつて、多く世に知られぬものであるから、茲にその數章を抄錄する、この序文は寶曆十一年の辛巳の年となつて居るが、他に「寶曆七丑の年卯月の六日前津の半掃庵にて五十六翁記之」と、ある本もあるが、內容はさしたる相違もない。文中武の柳居とあるは、旗下の士で佐久間三郎左衞門長利といひ、乙由や沾州に學び、寬延元年に六十三歲で歿した人である。

我に俳諧の一癖あり、病已に膏肓に入るといふべし、ことしは耳順の年もやゝ冬籠の頃となりて、蘿の門さしこめたるつれ〴〵のすさびに、若うより思ひよれる事共、反故の裏に書置きたるを捜し集めて一部とし管見草と題す、必ず人を訾らんとにはあらねど、諂はぬ筆に任せたれば、おのづから人に罪負ふ事もありなん、よしそれも他へ洩すべき物ならねばと、みづから許して隱栖の遺稿とするのみ

寶暦辛巳の年孟冬　　半掃庵散人

武の柳居物がたりに奥州をめぐりける時、所の翁に國ぶりの事ども問ひ侍る中に聞き侍る、田植の時所の長まづ秋の實りのめでたかるべき事共祝詞をあげけるよし、其事本間狂言の開口風流に異ならず、しかれば祖翁の句に風流の始や奥の田うゑ歌といへる、誠に謂あり、猶句々にかゝる事共あるべし、ゆかしき事なりと。

又曰く唐崎の松は花より朧にての句、始は唐崎の松や小松が身のおぼろとあり、それを花より朧にての句に改め給ふの由さだかにありと、然れば此趣向を胸中にのこし置き、象潟の雨や西施がねぶの花と申して、かさねて出し給へりと見えたりと、さもあるべし。

山櫻死葺く物まづ二つの句は、長嘯の山家の記によれりとぞ、是を解せざる者を文盲淺見といふべからず、長嘯は人の先達とする歌よみにはあらず、擧白集も近代物にて兎園の冊なり、歌よむ人の必ず見るといふ書にはあらず、翁は各別なり、後人是に習ひて此等の書藉を根とし本歌とはすべからず、却て識者の嘲を得べし。

蓮二坊いでや十論の趣を世に敎へんとならば、翁の直弟支考のまゝにて廣めんには彌ゝ人に信せらるべし、然るをみづから終焉の記を書て、支考を古人として其弟子の蓮二と名のりて後に文操十論を著したるの心、そも何故ぞと見るべし、みづから翁の名を借りて此說はなせども、もとより

私の新製なればさすがに心に恐るゝ所有て萬の科を支考に課せざる、諺に云ふ足に疵ある故なり、然るを世の人此深意に心づかず、終焉記も只偶のめづらしき趣向なりとのみ思ひてやむは、指を見て月を見ざるが如し、予此傷を見ぬきたるは、五論と十論の邪正を見知りたる眼ある故なり、人目をさましてよく察すべし。

詩の三百も思無邪の三字を出ず、易も時の一字と聞く、和歌も俳諧も傳授口決の多きは畢竟下手が師匠をする爲なりといふ一語に看破すべし、されば詩文には傳授口決もなし、さる故に師家とて代々定れる家なし、其世其世の上手が師となれり、下手が師匠をせざるなら道々の立派を見るべし、心をつけて見よ、十論にいはゆる傳授口決白馬經一字鈔の如き一隅を揚げて三隅をかくし、人を釣る餌の如き私欲の巧は五論にたえてなし、五論は俳諧の爲にして、十論は俳諧繁昌の爲なり、繁昌は私欲なり、されば五論を崇め十論を卑むは此故なり、但此數ヶ條は渡世俳諧の妨となれば、判

者點者には沙汰すまじき手の內の論なり。同じ小袖を臺に積むも膾を皿に盛るも積方あり、盛方あり、句作に骨折るは飾に似たれども此心なくしてあるべからず。

也有と六林

也有といへば例の出色な俳文鶉衣の作者であると領かぬ者はあるまい、然しもし此書が出板されずして、寫本のまゝで傳はつたなら、也有その人も尾張藩以外に洽く文名を馳すること、今日の如くに至らなかつたらう、此點に於ては鶉衣を出板して世に紹介した太田南畝は、文壇の恩人であると共に也有の恩人である、而して南畝に此書の稿本を供給したのは、卽ち六林その人である、されば鶉衣を讀む者は此の二人者の功勞を忘れてはならぬ、南畝の事は改めていふまでもないが、六林の事は知らぬ人が多いやうであるから、少しく紹介の勞をとらうと思ふ。

六林、通稱は堀田治右衞門、名は方舊、字は維新、恒山と號し、別に紀六、護花關末足齋、蝙蝠庵、森々園等の號あり、父を正英といふ、その先は紀氏、紀六(其六とも)の號はその本性に因みて紀六林を下略したのであらう、護花關は書齋の名で、園春蝶護華といふ唐人の詩句に基いたのである、漢學は松平君山の高弟で、俳諧戲文は也有を先輩と仰いだ、仕途は諸職を歷て先手物頭となつたが、安永三年正月老病致仕して逍遙自適、寛政三年七月二十日、八十三歲で歿し、名古屋城南の總見寺に葬つた、著述には護花關錄稿三卷、護花關隨筆若干卷ある。

家系について自ら語つて曰く、「堀田は紀氏の支流にして、武內宿禰十代の孫、紀大人二十一代の末孫尾張守之高、正應二年尾州中島郡堀田村に居す、此頃堀田と稱す、此之高をもて中興の祖とし、今に至て瓜絲綿々として榮をなす、之高四代の孫に名彌三郎尾張守正重、南朝元中十四年尹良王南朝より上野國へ赴き給ふ時供せし、永亨七年十二月二十九日尾州津島に至

る、これより子孫津島に居住す、正重五代孫孫右衛門入道正定、其男三郎右門正則、其子治右衛門之重これ我高祖父なり……治右衛門之重壯年織田信雄卿に屬し、長湫の役には小牧山を守らる、後丹波少將秀勝に隨て、朝鮮に於て武功多し、一人の韓人を擒にし以て歸る、其持つ所の長鎗を奪ふ、歸帆の後又囚をして主從の緣をなし終に家長とし召仕る、其子孫わが家父の時迄存在せり、奪ふ所の鎗今に家に傳ふ……後に秀秋に仕へ、慶長六年稻葉內匠頭等と一黨して備前を去り客遊、聽て忠吉公に召出れ千石を賜ふ……師友の交情については、贈答の詩歌の外に材料となるべき者は頗る乏しい、只左の二條を採錄する

坤六四括囊（程傳朱義言括結囊口不出露也賈誼過秦論囊括四海云々）

君山先生つねに予が多言を戒めて萬事に括囊せよと敎訓ありし、誠に君子の言なる哉、今もより〱その敎をつゝしむべきと座右に記す

此抄書（護花關隨筆をさす）の中、白華翁（天野信景）の談話及び鹽尻の中よ

り記せる事多し、予弱冠の比その末席に遊ぶ故、今も其高誼を慕ふ餘意なり、外に神祇祭祀略說、儒者名義集等に翁の華冑及びその行狀のあらましを記し附けて是を上木せばやの志あり

護花關錄稿は詩文集で、詩二百三十四首、文七篇より成り、詩は七言律殆ど其半を占めて居る、也有と關係あるもの五六首を抄出する、知雨亭、遯窩、皆也有の別號である。

過知雨亭、同君山先生賦

衡門閒寂意悠々、靑眼堪歡論去留、東嶺月華浮檻霽、前津雨色送鐘幽、陵僣隱人應慕、金馬陸沈君自休、勝槩總餘閒居興、暫時談笑有風流

初秋集前津知雨亭、得風字

郊墟爽氣報梧桐、共賦秋華倚竹叢、醇酒豈徒河朔趣、淸歌應與郢中同、原頭雨過披山色、樹裏牕開對海風、莫笑高陽生故態、疎狂此夕任飛蓬

長至前日雷雨、寄懷知雨亭主人

雷動初陽日色高、今朝寒雨散江皐、應迎樓閣千山靜、堪羨文章一世豪、心計空勞桑氏算、生涯難學庖丁刀、公餘儻伴探梅興、多少風塵任濁醪

九日陪君山先生、登横遯窩翁知雨亭得心字

秋滿高樓丘壑陰、幽栖節物轉蕭森、山含短景連紅稻、風入雙松和素琴、叢菊重陽偕醉客、江湖此日惹長吟、羨君元自甘飛遁、天外芙蓉不斷心

和北遯窩元日韻

莫道人間駒隙年、子綦隱几嗒焉眠、早鶯嫩草幽棲趣、流水高山相識緣、菡萏原頭逃薄俗、蓬萊島上逐群仙、春來雪後歌招隱、乘興更浮剡曲船

和横遯窩翁見寄懐

空翠當窓惹夕曛、秋光無處不迎君、西風遙自傳淸嘯、欲向蘇門攀白雲

余の見たる護花關隨筆は初編十卷、二編三編各五卷、四編五卷、併せて二十卷、初編の卷尾に「于時天明二年孟夏念五日隨筆の初編草稿成る、猶餘齡あらばこの末二編嗣で記すべし七十三翁未足齋散人」とありて、四編の末に

は「寛政元年己酉十二月廿七日八十叟未足齋抄出」とあり、也有、君山、磯谷滄洲、岡田新川、人見璣邑、深田九皐、津金鷗洲、千村鵞湖、細井平洲等尾藩名流の序跋がついて居る、內容の七八分通りは、和漢諸書の抄錄、交友の詩歌文章等で、自己の見聞又は所感をしるした所は二三分がたで稍物足らぬ感がある、思ふに六林が幼時親炙したといふ同鄕の先輩天野信景の隨筆鹽尻に倣つて出來たものであらう、也有の序文に「硬き所は乾鮭のごとく、齒强き學者も嚙易からず、その輭なる所は豆腐のごとく、柴ふ(ウカ)る賤夫も嘗めてよく甘ふべし、我ごとく病勞れ老ほけ蓬蒿に隱れて伴なき者の日を消する事、護花關隨筆に過たる物なし」といつたのは、適評である、今その中から趣味ありと思ふ數則を拔く。

正德乙未年五月十一日東都御能開口新井筑後守作之

それ日の光に山高く動かぬ御代は百とせの後猶よろづ代〳〵かけて若竹の葉の生つゞく松のみどりは操にて目出度かりける時とかや

寛永十二年亥柳營へ我公より踊被献候時の唱哥

一　つくばねの峰つゞきに引く横雲のながき春日の恵もひろき君がかざしの八千代の椿秋は長月折る袖匂ふ菊の下つゆ淵となるまで

二　陸奥のを島松島名もなつかしや心へだてそ離が島の霧間にかくるゝ芦わけ小舟よそにこがれて思ふもくるしあはゞ立名もよしや世の中

三　いせの海千ひろ百ひろ底しらねども君が心の倚ふかければ思ひそめてもつれなのふりや松の枝立ふたみが浦の逢はば立名もよしや世の中

四　よしの山花は嵐にちりつくせども枝に殘るゝ青葉のあるにせめて我にもくちばとなれや一夜おち葉の風もふけ風

五　さすが東の都とて花は錦をさらすかと四方の山々立出くれば雪

かさまがふ其花ざかり知るもしらぬも面白や

「寛永十二年跳記」(名古屋石田元季氏藏)といふ書に、此時の踊子の名前、衣裝持物、唱歌を詳しくしるしてあるが、右にあげた歌は何故か出てをらぬ。

遯窩翁雜談のついでにのたまへり、近松門左衞門が作れる淨るりの文句には雅趣多し、中にも、門に松たつあしたより桃に柳にあやめふく、軒の燈籠二度の月、菊の節句や年の暮、とわづか一二行の内に、四時の變遷をいひ盡したるなどは、名達の古人の文章にも希なりと誠にしかり、今の作者の及ばざる所なり、かゝるよしなしごとも、其翁在さねば、懷舊の餘り書きつけ置けり

古白拍子の謠ひたる歌とて、飛鳥井家に傳ふ、題を水の宴曲といふ、節奏(ふしはかせ)も付てあれども秘して不傳、其詞に云

水のすぐれておぼゆるは、西天竺の白鷺池、じんしやう許由にすみわた

る、昆明池の水のいろ、行末久しくすむとかや、賢人の釣を垂れしは、嚴陵瀨の河の水、月は影なかれもるなるは、山田のかけひの水とかや、茅の下葉をとづるは、みしま入江の氷り水、春立つ空の若水は、汲むともつきもせじ、つきもせせじ（岡島玄達筆記）

天鼓の謠に、人間の水は南、星は北にたんだくのとうたふ、これは何の據ぞとある人問ふ、謠古抄には古句なりとばかり記す、拾葉抄には圓悟禪師の語なりと載せたり、これを以て答へしに、又問て曰、其時代いつの比いづ方の人にやと、爰に於て予寡聞を慚づ、一日磯谷滄洲に逢て、これを尋ぬれば、予が言葉いまだ終らざるに、遮て答ていふ、それは後醍醐帝の時、元朝より僧明極とて得智の禪師來朝して、參內の時、天上有星皆拱北、人間無水不朝東と奏せし語なり、此拱の字をたんだくと訓す、くはしき事は太平記のそこ〳〵にあり、それに據て見よと答へぬ、滄洲が强記博聞感歎の餘り、記して遺忘に備ふ

また同じく敦盛の謠に、草かりの吹く笛ならば、これもまた青葉の笛と思しめせ、住吉の汀ならば、こま笛にや有べきとうたふ、住吉にこま笛の事いかんと問ふ人あり、これも知らず、ある好士に問へば、樂家に右方左方といふ事有、南都の樂人を左かたといふて唐樂なり、住吉天王寺の樂人を右かたとて高麗樂なれば、もしこれらやよせなるべきか、くはしくは知らずといひし、重て滄洲に逢て尋ぬべし

鶉衣の中に六林文集序の一篇がある、芭蕉、支考、許六三人の文品を論評して、俳文の作り易からぬ旨をのべた末「我友護花關の六林子が文章、章ごとに玉をつらね錦を綴れり、我常に目を驚して三の舍を避るに至る、他はいさ知るべからず、本州誰か其右に出む、されども音を知る人は稀に、巍々洋洋もいたづらに猫に小判の耳なければとて、包みて光を世にあらはさず只獨の樂とす、頃日みづから輯錄して予に小序を求めらる」云々とある、此文集は今日に傳つて居るかどうか、自分はまだ寓目しない、蜀山人の尾張

二老傳に、所著護花關鎌稿及隨筆若干卷、其他戲文不遑枚擧云とあるから隨分あつたのであらうが、果して也有の推賞したやうな名文であらうか大に疑はしい、鶉衣の跋や隨筆中に散見する雜文俳諧などの手際を見ても、也有よりは二三段は慥におちる、蜀山人は博覽無不該通、最好誹諧連歌又好戲文、殆伯仲於也有翁、而質實有餘雋永不足といつて居るが、殆ど伯仲すの「殆ど」も程度問題で、兄弟にも一つ違ひも十違ひもあるから、强ひて褒め過ぎであるとはいはぬが、所謂雋永足らずで、才氣に乏しい、その懸隔は蜀山人の狂歌狂文と岡持、金雞等のそれと位の程度であるが、とにかく尾張では也有についで此人であらう、也有の句集蘿葉集には六林の漢文序があり、又也有と唱和の漢和聯句に峨洋篇の一篇あり、誠に影の形にそふ如く始終離れぬ莫逆の親友で、也有を說く者は六林を忘れてはならぬ。

寄未足齋歌　　　　　　　　也　有

未足齋〳〵未足齋のあるじ、試に物とはむ、そもや花にめでゝ、春の日の

足らざるか、傾く月を惜みて、秋の夜の足らざるか、目に物の足らざるか、心に物の足らざるか、世にいふ長者富に飽かず、蟻の如くにいそがしく蠅の如くに集るは、あるじの常に笑ふところ、茶漬に菜の足らぬ日も、酒に肴の足らぬ夜も、人に未足の名はしめして、未足を求むる心なし、君が心我知りぬ、未足は知足なる事を、未足齋のあるじなる哉

足して見ぬ心や月の十三夜

○　　　　　　　　　　六　林

筆まめも上手藝とは似てもにぬなま物しるのみそくさいなり

六林文集『まにふむで』

也有と六林の一篇を草してから約十年目の今日、友人石田春風の珍藏にかゝる六林の文集まにふむでを見ることを得た。正續拾遺の三冊より成り、合計八十二篇を收めてある。今その中から自叙その外八篇を抄錄

することにした。かねて想像してゐた通り也有と比べると、想像力も乏しくヒユーモアも少く到底同日の論ではない、蜀山が質實有餘雋永不足の評語は全く適切である。武陽官邸記は也有にも同じ題目があつて、二人の天分の優劣を較べ見るに便利であらうと思ふ、摺小木傳は也有の摺鉢傳を摸倣して及ばざること遠しといふべきである。猶石田氏の所藏に六林自筆の苦佐雙子と題する一篇がある、これは寶暦八年七月名古屋より東海道を江戸に下つた紀行で、道中の見聞を詳しく記して所々に俳句を挾んであるが、記實を旨として文藻に乏しい。それは彼自らも認めた所で卷末に左の識語がある。

これは道中思ひ出るにまかせて、とまり〳〵にて書付候得ば、文章を作るにてもなし、なんぢ等に見せていさゝか示さんとの書捨也、他見をはづるものなり、誠におろかなる理くつくさきくさ草子なり

寅七月二十三日東都市買舘五段邸舍にこれを記す

紀　六　林

小十郎殿

彌　八殿まいる

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

自　叙

文章に古今なく、はた文章に古今あり、そのなしといふは、古今人情おなじければなり、其有と見るは、風移り俗かはればなり、さは此有無の間に遊ばむ人、などか文章の風味をも甘なはでやはあるべき、かくいへば、唐人の寢言に似て、大和言の葉のはしくれには、いさ獻立の間違も知らず、されど俳諧の甘みも、嚙分てやうやく佳境に入らむに、發句は客のひとつうけ持たる盃にて、脇は亭主の肴のはさみたるさまなり、それより樣々の附合は取ざかなに何よけんなど、もとめ出たるが、厚味ばかりは手おもしとて、間に

は苣に酢味噌の取あへぬぞ、折からのけしきも見えて、一座の興をも添ふるならむ、かつ俳文の一體をいはゞ、膳に八珍のきよらを盡し、さかなに四時の滋味を備へて、吉良小笠原のすり足に、目八分にすへかけたる二の膳あり、三の膳あり、向づめの尾ひれはねたるまで、照應起結の規矩にはづれず、さりながらそれも是も料理人の鹽梅ひとつにて、吸物に花柚かほらせては、昔の人の袖を思はせ、膾のけんの細き手際には、四角四面なる親仁も我を折れば、兎角に新奇の取合せは、時と物との氣轉を第一にすべし、あながち山海のはつ物をもとむるのみ、料理の富貴とはいひ難かるべし、爰に於て、文章に古今なし、はた文章に古今あり、其有無の間に遊べともいひけん、然るをわが手づかみ料理の鹽からきをもつて、鯉の庖丁者にも並ばんとするは、誠に咽のかはく類ひなれば、是をや世人のまにふむでとは笑ふらめ

寶暦癸未季秋念日

張州　護花關　六林散人

芋印亭記

護花關とは、官途のいとま、螢に醒め雪に寢る竹窓を、君山子の與へ給ふ號なり、爰に俳諧の莚をもふくる折も有て、和漢かけ持の宿りとはなせり、此程半掃庵のあるじ、芋印の二字を惠み贈られしより、あらたに姿情の談合所は定まれり、そも此文字は何より出たるや、とは何ものぞと尋ぬる人あらば、其傳は殊に秘事ながら、我もとより生得疎懶にして、たま〳〵一句一篇を得ても、是に施すべき印章をたくはへず、必用ひずして叶はぬ時は、芋の切々に朱をもて名字を記し、是を押て間を合せける事久し、さればいさや川のいさとも答へず、此翁の許へ誰かはもらしけん、秘傳の朱印いと興ありとて、其儘芋印とは召れけるなり、かの關は君山子の名付親にして、此亭はこの翁のゑぼし子なれば、いづれに左右のけぢめあらんや、かなたに

春の花を護り、下枝に休む蝶の南華老人の夢に伴へば、夏だに秋の月をむかへて、三顧の外なる嘯きに盛親僧都の笑ひを催し、芋のしるしも爰にあらはれ、おなじ臭味の音信も絶ねば、例の物ぐさが胸算用せし、大厦高樓のもくろみも、此一かまへには及ぶまじとぞ

問はゞ見よ芋をばせをの植所

右已卯秋

武陽官邸記

住めば都の月もさし入ると、紫隱里主人の宣ひし、旅居にならふも嬉しくやう〳〵籠り馴たる心地して、雲を繼ふ夢結ぶばかりにはなりけらし、板壁のあたり、爰にも誰か植捨けん、一もとの柳所の名をしえ顏に、麴塵のいろも、やゝ彌生の末つかた、此麴町の官邸に、一とせの宿りは定まりぬ、内窓はるかに死ふくもの二つ三つ、遲櫻の葉越にもれいでたるは、何某の天神

なりや、はつ鴈の名も、やがての秋ゆかしく見めぐらせば、今はみよし野の田面にあらぬ家並のはてしなく、富士みなみ吹かはりて、新樹卯の花に、時鳥きゝもらさじと朝起して、官途にはしる日は、晴たる空を悦び、または火あやふしなど觸るゝ夕べは、雨の音もうれし、されども遠見の太皷苔むして、鳶鷺かぬ御代なれば、此日は殊に隙も得たり、營中の晝はねぶたく、茶番の夕は哀なり、名にしあふ名所尋ぬる日もありて、馬にまかせて事問へば墨田川の鳥は白く、赤木の森のわくら葉照添ふ青山あたりにて、琵琶聞つけたるも、白金ちかき長者が風も、皆客中の吟魂をなやます、あるひは半日の閑ありて、二階の窓をひらけば、同じ詠めの御土居間近く、芝青み、羊蹄花さき、並木の松に音なく、往來もみな故郷の客にはあらず、遙峰は四時の雪の儘ながら、五月雨近き雲にへだつ、そも朝の豆腐より、宵の蕎麥切賣までこれ等の品々、起臥のさま庭のけしき、貧乏檜の唐がらしも、塵塚の蓼穗も先達の筆に預けて爰に洩しつ、我もまた、足らで事たる心はおなじと、こと

足らぬ言葉に、此旅情を述ぶる事にこそ

世話のない窓になじむや閑古鳥

右丙子夏

鳥譜

聖代の鳳凰は、見ぬものからいふよしもなし、彼の胡蝶になりし毛唐人の寓言に、九萬里羽うつ沙汰こそ、そら言の方人なれ、百千のさえづりを、品定むるもおこがまし

海涼しき鶴脛も、雨もりの手傳にも賴まれず、十萬貫の路錢も持て、揚州の通し駕籠にやとはるゝ愚さよ、千代のためしの龜の尾山に伴ふも、持佛の三具足に等類は遁れず、事足らぬ鴨の脚も、着(き)丈(たけ)の世話すくなかるべし、是を繼がば愁へ、これを切らば痛みなん、長に誇るべからず短きを悲しまざれ

いづこの飛脚の生れかはりてか、今も越路の文は傳ふらん、社日に入替るつばくらには、去年のしるしの糸も見えつゝ

鶯は法華を囀り、餘力あれば文をも學びけるや、綿蠻たる黃鳥、または不相還本栖など、竹の子藪の飛啼なるべし、鳴もおとらずと看經して、秋の夕暮に則清法師を泣せける

鷹の早わざには何か及ばん、さるを野守の鏡に影留められて、へ緒に苦しみ餌にほださる、さはあれ、つながるゝ故に高位の御こぶしにも召れける、それを犬も傍輩とは、いかばかりの無念ならん、草枯れて眼すゝどきあしたこそ、いとゞ奉公ぶりは見えたり、四十八の眷屬もちしゆへ、鳶梟のえせものも交るは、平家に宗盛といふ巣守ありしに同じかるべし

よりのもざけて揚る雲雀の、もろく落るは、糸加減のきれたるや、虫の音までと思ひし庭に鶉立して、噺の先折るもわびし、抑汝が前生は畑鼠ときく、げに〳〵風も身にしむ粟にむれて、鳴子の世話をやかしぬる

聞くたびのめづらしさに、僧正は初音の號を蒙り、數ならぬ身のこたへに其人の行過はそしられける、落月の置去りに、風騒の腸をたつ、蜀帝の魂とは十王經にも見えず、誰が梓のうらにや寄せけむ

つゝ鳥は暑氣ちかく、みそさゝゐは寒し、かんこ鳥は野寺の庭に雪の下咲きちりて、小僧の晝寢驚かすかと聞ゆ

大晦日に啼くは、掛乞に聞きまがえて出違ふべきを、誰が門さして水雞の敲きありきて、夜半の雨を知らすらん、また水干着たる小宿ぐるひを、いもがりと古みたるを、川風につれて千鳥の啼くも、其替名を呼ぶやうなり

鳩の友よぶに降照りを知る畠天文あり、雞のそら音に戸を明けし其番人も、空耳とやいふべき

雉とよめば耳だち、きゞすといへばやさし、短夜にも山鳥の尾のぬひあげもならず、彼はつま戀に狩られ、是は獨寢にかこたる、人にもかゝるたぐひは多し

烏とは凡烏と讀みしを、己が美目とおもふや、凡鳥のよみくせにて、留守の門に題して嘲られしを、桐にも住心に悦びけん、烏羽玉の夜に、啼かぬ聲聞て、生れぬ先のむつき定めと、物いまいに嫌はれ、有明のうかれ聲に、ねざめのやもめを泣かせ、いとゞあほうの謗りにもあふならん、されど月の兎に一對せる光ある名と、姑蘇城外の霜の曙とは、汝が一生の譽れなるべし海に入て蛤となり、雀燒の名は鮒に奪はる、犬君は迯してむつかられ、廷尉は門の羅に是を捕ふ、おのれとさわぐ羽風も靜まり、閑窓に枕を推し筆をとれば、百になりても躍忘れず、先達のすさび羨ましくて、黄吻をかへり見ず、鸚鵡の眞似に似たるも、勸學院の囀り、舌きれ雀の片言なれば、公治長殿の耳にも聞きわけがたき一篇ならむ

右己卯春

未足齋記

いつも月夜に米の飯とは、いやしき詞ながら、足る事を知れとの教なるを、や、此軒は維摩の大衆を入れんとにもあらず、長明が持はこびの勞もからず、庭はもとより掃はぬ草に月もやどりて、客あれども酒なし、酒ある時は肴なし、荒れたき儘に住みなせしを、ことし東都より歸りし比、貧家も淸く地を拂ふと、人の諫めうけがほに、箒とる日も折ふしは有て、半日の閑を愛に偷み、やゝ晝寢の枕かたむくる所とはなせり、そも恐ろしき毛虫といふものも、蝶と變じては花に戲れ、風に狂ひ、荆枳の名はむつかしけれど、處々の春風に香を送れば、げにも歌人騷家の吟魂をなやますやさしさは有りける、さらばむくつけき人心も、うつさばなどか賢きより、賢きにも似ざらめや、さは我狂態の、かの虫のたぐひにも、劣れるは耻しと、此感有て愛に名づけ、みづから未足齋といふ、いかにやと問ふ人あらば、一名多義の子細に

ほこりていふ、凡才智はさらにもいはじ、衣食ともに乏しく、いづれをか足れりとせんや、と、あるひは身息災の書替なりとたはぶれ、または近比の諺に、自慢くさきを味噌くさいといへば、わが傍若無人なるをもいふなんど、あらぬ戯談に取なせども、誠は味噌部屋の隣に、白き花の夕べ知り顔なる其風の香のゆかりとは、めづらしき讀癖ならんを、知る人は察すべし、此屏に文あらん事を、羅隱君に乞ひ奉りし、幸に金玉の章を賜りぬ、是を座右にかけ置ぬれば、蓬蒿朝夕の光りを生じ、錢財衣食はたらねども、住居はまつたく足れりといふべし

自半掃菴先生傳言の移文

近きころ羅隱君へまいりて、半日の閑話有しついでに宣へる事あり、此程何某なるをのこ來りていふ、君が繪賛やめ給へ、多く望む中には、ひそかにそれをあきなふ族もありとか、いとにくしとなんと、我爲思ひがほにいふ

なり、答へて、さりやよくぞ諫められし、げに〳〵尤にこそ、さりながら予が思ふところは、いさゝかたがへり、先に故有て繪は筆をとめぬれど、其後此繪にかの繪にと、何を望む方へは心にうかむ儘を、筆にも任せたるを、とり傳へて賣りもすらん、かれは錢なき故に賣り、これは錢有て買ふ、錢ある者の、錢なきに通用せば、ひとつの助ともいはん、かの東坡が扇のためしもあればや、など是をしも防ぐべき事かは、されど去年より今年は、筆に懶く成り行けば、それにはかゝはらず、今より繪賛のこと、大かたは辭し侍らん、實にも風情ある繪のみならば、朝夕に見るとも飽くかたあらじを、山水人物のふつゝかなるが、俳諧に預からぬ類も多く、或はけふも竹、翌も竹と、あたりのそよぎも耳かしましく、又來るも福祿壽、又もてくるも布袋どのと、いとゞ腹ふくるゝわざなれば、さきには遲滯の恨もあるべし、さてやいな舟のいなにはあらぬも、まづは筆をとらじといひやりぬ、汝此事をそこ〳〵へ言ひも傳へよかしとの命をうけ給はれり、よつてすぐさまに、四方の諸

公へ告げ申事しかり、さはあれ此後とても心まめにもおはして、かいやり給ふとも、僕が聞きたがへて、此傳へにそら言しける物よと思ひゆるして、あながちにかの主をなとがめ給ひそ

摺小木傳

爰に摺小木といふ男ありけり、世にすね松のふしくれ枝より出て、家ごとのはしりもとに、朝夕つとむる身ながら、常に燕趙悲歌の士をや慕ひけん世のたのもしき人とかぞへられ、七草のはやしにそやされて、我身のころぶをも知らず、物くさ太郎の仲間よりは、浮世のたはけ、起きて働くと謗るべし、抑前生には、いかなる因をか蒔きて、今爰かしこのせはやきとは成しぞや、杓子せつかいの親類より、よその臺所の板元までも、愁苦をおのが任と心得、あるひは夫婦いさかいの中直し、又は福引の笑草迄にも、四方よりもちかけて頼むに引ず、つかはるゝに勞せず、足を摺小木にして、三百六十

日片時も口を明けて笑ふに暇なく、ちり埃にまぶれて、春の行衞をしらず、花の盛に山廻りもせぬを、なぞや足引の山師のかずに、うしろ指さゝるゝも口惜けれど、いかゞせん、たま〳〵取扱ふ事の成就すれば、おのが智慧あり顏に高慢の羽根をはやし、出すりこ木の淺ましさは、摺鉢のすみかに尻もすわらず、機の糸ほすおもしにふらつき、洗濯物の横槌にやとはれ、あたまがちにあがき倒れて、味噌くさいみそくさいと、人々に鼻おほはるゝこそあやしけれ

初鰹賛

贈四方赤良

山の手の滋味、時なる哉〳〵、朝まだきより聲のいさましく、いけ擔子にさゝ波たちて、靑嵐のこゝらまでも吹送れば、嘸な鎌倉を活きて出けん、小田原河岸は丘をなすべし、いにしへ水の江の浦島が子に釣られ、今はた俳諧師の窓には、山郭公とともに待ちわびぬるものを、なぞやならびの岡のよ

しあしごとに、其素性を書きさがしけん、青樓の肴鉢に、料理人の鼻おごめきて、からし酢の匂ひには、張氏が蓴鱸のもゝ尻をもとゞむべし、雉子燒の限りなき風味は、聖人も嗅たばかりて捨てさせ給ふまじ、實や現在の果に、過去の未來を知るとか、見よや人、かれが身の後も、たゞ木のはしのやうにふしくれ立ちながら、やごとなき雲の上までも、まづ鹽梅の臣に召れて朝夕の八珍も、これがたすけならざるはなし、初鰹々々、賞すべし誇るべし

丙午夏

西行上人記

東都四方赤良より求めに應ず

此上人は、藤のうら葉の家を出て、墨の衣となら坂や、この世を一束三文と見捨てゝ、名とはうら表なる、東下りと出かけ、まづ神風の內外に、忝なみだをこぼし、二見の蛤に貝合の昔を思ひ、鳴海の声のこきいろを詠めて、その北なる春日井原の何某の寺に付飯くらひにて三とせばかり杖を休め、ふ

づから像を木に刻みて、草菴の留守居にさし置き、佛には櫻の花を奉り捨て、うかれ出られしよし、それからは鎌倉の猫の段なるべし、かの菴も後の世にいたり、寢耳の洪水に押流して失せぬれど、其所は今も西行渡ドと古跡殘れり、はるか過ぎて川下なる、ひら村といふ所の芦刈をのこの鎌にかゝれる朽木を見れば、紛れもなくかの像なりけるを、あちやこちやと手車にするてとり傳へし果は、我友臥雲坊が許にひめ置きしを、此程同志の東甫世話やきにて、其舊跡に一宇を再興し、是を安置せんと、只今建立の催最中なり、その地は熱田潟より、木曾に横ぎる驛路なれば、好士の旅人は尋ね給へかしと、此むだ言を吐く趣は、此春東都の四方先生の社中に、上人の記を集め給ふと聞くとひとしく、我國にも其舊跡はのこれるものをと、味噌あげたりける未足齋、そのきさらぎの望ちかき日、禿筆を走せて呈し侍る

類句

詩歌でも俳句でも偶然古人と相似るものと、意あつて前人を摸倣するものと二種ある。有意に前人を摸倣するは、腐を化して新となし、鉛を煉つて銀となす底の手腕なくては、妄に試むべきものでない。楊萬里は杜詩の薄雲巖際宿、孤月浪中翻と庾信の白雲巖際出、淸月波中上とを比較して出上の二字勝るとし、庾の永韜三尺劍、長捲一戎衣と杜の風塵三尺劍、社稷一戎衣とを比して杜の勝と定めた。放翁は韓翃の門外碧潭春洗レ馬、樓前紅燭夜迎レ人から出た晏叔原の門外綠楊春繫レ馬、床前紅燭夜呼レ盧を評して、氣格乃ち本句に過ぐ之を剽といはずして可なりと評した。俳句には殊に等類が多く偶合も生じ易い。貞門の松江重頼は、立圃の「螢火は川の瀨中の灸かな」は貞德の「螢火は野中の虫の灸かな」の燒直しだからといつて、犬子集に入選を拒んで、互に確執を生じ終に兩人とも破門せらるゝに至

つた。

時鳥〳〵とて寢入りけり　調和

時鳥〳〵とて明けにけり　千代

これは暗合か、何主を誤り傳へたのか、いづれにもせよ兩存の價値はない

來年は〳〵とて暮れにけり　露川

明日の事〳〵とて年暮れぬ　也有

來年こそはと期待してゐたのと、マア明日の事だと、のばし〳〵したといふ所に、ちがひがあると言へば、いはれぬでもない。

初雪に此小便は何奴ぞ　其角

何奴が草鞋すてたる淸水哉　也有

其角から趣向を得來つたのであらう。

妙身童女を葬りて

霜の鶴土へ蒲團も被されず　其角

母の喪に墓にまうでゝ

されば迚墓へ蒲團もきせられず　瓢水

どちらも俗意俗情、共に取るに足らぬ。

入道のよゝとまゐりぬ納豆汁　蕪村

僕等のよゝと盛りけり根深汁　召波

よゝと盛りけりでは、全く語を成さぬ、珍らしい詞を強ひて使はんとする者は、いつも召波の二の舞をやるのである。

紅梅や比丘より劣る比丘尼寺　蕪村

納豆汁比丘尼は比丘に劣り鳧　召波

納豆汁ではどう劣るのか更にわからぬ。

祇園會や僧の訪ひ寄る梶が許　蕪村

七夕や讀歌聞きに梶が茶屋　召波

此に擧げた召波の句中では一番よい方であるが、讀歌聞きにがちと拵へ

過ぎたやうで、僧の訪ひ寄るに及ばざるを數等である。手腕の大小は爭へぬもので、殊に師匠を摸倣した所に、著しく優劣が顯はれる。

白露や角に目をもつ蝸牛　嵐雪

白露や茨の刺に一つづゝ　蕪村

同じやうな見つけ所ではあるが、それ〴〵別樣の趣あつて面白い、茨の刺に一つづゝ置きたる露のきらめきたるは、數の多きだけに見る目に心地よい。

淨草もあちらの岸にけさの秋　百川

浮草やけふはあちらの岸に咲く　乙由

語は能く似て居るが意は全然別である、但し兩方ともよい句では無論ない。

憂き我を淋しがらせよ閑古鳥　芭蕉

閑古鳥我も淋しいか飛で行く　乙由

これは和歌に所謂本歌どりの類であらうが、おのづから別種の趣がある
麥林舍の集中ではまづよい部だ。

蕉村の評卷と書簡

蕪村の評點せし句卷を見しに、青朱兩色にて「路傍槿」「春盡鳥啼」の點印あり、共に芭蕉の句をとりたるも面白し、その評語あるものと高點の句のみを抄出すべし。

一家はまだ寐もやらぬきぬた哉

おふた子の聞なれて寐るきぬた哉

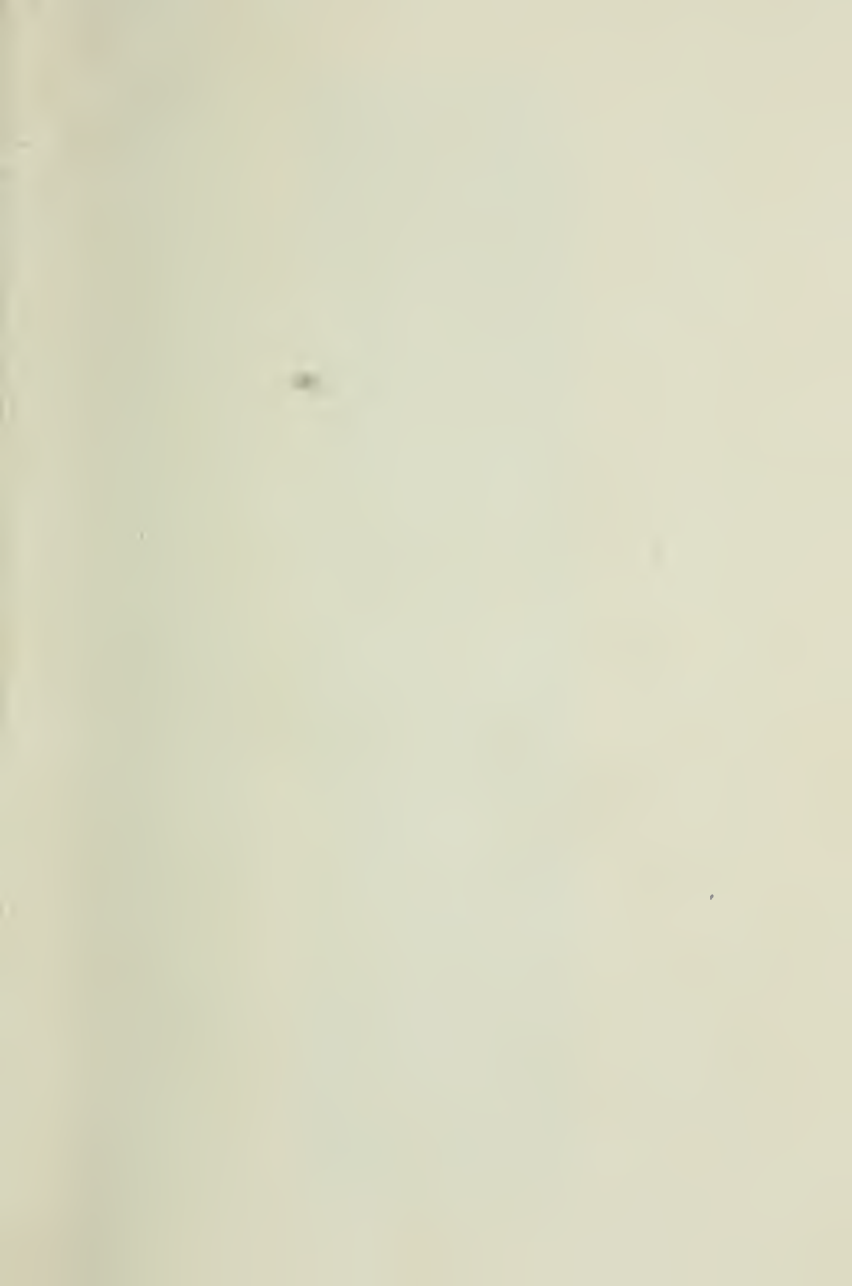
　よき句なれどもかの塩辛きといふ趣向ならん歟

古寺や飼ふともなしに紅葉鳥

　もみぢ鳥俳かいには不好

一夜さは不自由も雅（うれし）なり鹿の聲

　雅なり不好

蕪村書簡

いたづらに花瓶の心や雞頭花

柳ちり萩もこけたり夜の雨

橋より梢見下す紅葉かな

漢畫山水を見る如し

匂ふほご少しは染つ蓮の飯

菊酒やおなじ噺も老の伽

さび鮎やまだ起々の渡し守

起々の渡し守のきげんには澁鮎よりは

若あゆのかたしかろべからん

爪青き野飼の駒や草の露

おかしき案じ所珍重

種ふくべ退けて家根ふく葛家哉

馬下りて行や矢矧の橋の月

灯燈を羽折に隱すうづらかな

琴の音も妙なる桐の一葉かな

ひくう飛秋の雨夜のほたるかな

娘の子橋にまたせてもみぢ哉

高雄楓橋と成とも題なくては聞えず

茸狩や花には行ぬ所まで

よき句なれど趣向古き心地す

牛部やに蓑虫の鳴や後の月

今の世の蕉門の流行體也

稻妻やすゝきの中の傍示杭

笠敷て火打取出花野哉

飽までも拾ふ木の實や京の兒

蕉流にはあられど

むく鳥の渡りしあとやひとり住
細道をすゝきの埋む庵かな
外からも淋しき家や黄鷄頭
火を消して月に更行礎かな

右　五十章

漫考

夜半翁

家藏蕪村手簡一通は、洛北一乘寺村金福寺に芭蕉庵を再興せし天明元年頃のものにして、宛名の佛心子はその何人なるを詳にせず、碑文をかきし清絢は越前の文學たりし淸田儋叟、名は絢、字は君錦、永田俊平名は忠原、東皐と號す、平安の書家なり。道立子はこの再興發起の魁首自在庵道立にして、氏は樋口、名は敬義、清絢の仲兄の第二子にして、芭蕉が漢學の師たりし伊藤坦庵の曾孫なり。俳句二首、前なるは秋聲會編の蕪村句集拾遺に

收めたれど、後なるは未だ句集類に見えず。

一蕉翁碑銘石摺一枚相下申候是はさく出來いたし候而洛東ニ石碑を建申候則右の碑正面ニ打碑いたし候ものにて候文章は淸絢先生書は永田俊平之右之石ずりは道立子より足下へ牛房の謝恩ニ遣被申候筈ニ御ざ候きいまだニ候やそれ故先づ愚老ゟ一枚進申候さても〳〵いそがしく候て中々發句も無之候あとよりくわしく申候

二月二十一日　　　　　　夜半

佛心子

低い樹に鶯啼や晝下り
紅梅や黃鳥とまる第三枝
おかしからず候ことも書付候
一當春帖は相休申候而さくらのすり物出申候貴句も加入いたし度候

少々高直ニ付候摺物故社中へ費刻料余ほどかゝり申候御望に候やいかゞ〳〵

諺と文學

諺は經驗の返響なり、衆智の結果なり、哲學の一斷なり、時の古今之なき時なく、洋の東西之なき處なく、學者も之を喜び、詩人も之を用ふ、されど一種貴族的文化の盛なる時代には、俗諺と呼び、俚語といひ、下世話と名づけて之を卑めたり。ロード、チエスタアフイルド曰く、縉紳者流は曾て諺を用ひずと、アリストートルも嘗て諺を蒐集して、爲めに誹謗をうけたりとかや、されど有名の作家は、皆悅びて之を用ひ、セキスピア、チヨーサア、モンテエーヌの如き、いづれも之によりて其文彩を加へたり、我國にても、近松最も巧に之を言語文中に挿入し、其諺なるや否やを、辨別し難きまでに調和せしめ、降りて八文字屋の徒亦之に倣へり『當世誰が身の上』に「かやうに申

す果腹の內から乞食にもあらず、さもかうもしたる町人の、昔は見ぬ京物語なれども、此樣な暗い夜さりも、定紋の挑灯つらせて、戀に外聞つくろひ月夜に釜の座といふ所にて、竹の林にあらねども、七けん口の家さへ五箇所もつて、肩で風切つたる昔の劍」といへる、此數行中に「腹からの非人なし」「見ぬ京物語」「月夜に挑灯も外聞」「戀に外聞」「月夜に釜ぬく」「肩で風切る」「昔の劍今の菜刀」の七箇の諺をとりまはし、からみつけたる、勉めたりといふべし。其他也有の俳文の如きは、全く諺を生命とさせるものにて、もし之を除かば一部鶉衣はもぬけのからとなるべし。　王朝文學に至つては、源氏、枕草紙を初め殆ど絕無といふも可なり、彼の巷談街說を書き留めたりといふ宇治拾遺物語の如きすら、僅に「寶の山に入りながら手を空しくする」「受領は倒るゝ處に土をつかむ」「祈禱は母にさせよ」「後の千金」「孔子たふれ」等の四五を存するのみ。　抑も諺が中流以下に專ら行はるゝは、今日の社會と雖も猶然り、芝居は無學の早學問なれば諺は無學の哲學なるべし。　彼の平民

文學を唱道する人々は決して此研究を怠るべからず。也有は好みて滑稽を弄し、人事を詠じたる人なり。贅物に頓才の見ゆる他は、別に上手といふ程の句なし。只芭蕉以後にありて、俗諺を句中に取り入れたるは此人の特色なり。

竹も亦子ゆゑにくらし木下闇
子をすてぬ世とて藪にも幟かな
鷺のたつ跡も濁して田植かな
抱いた子は負うた子よりも暑かな
餅になる蓬や麻の手もからず
井の内や山吹知らでなく蛙
百までも踊れ鹿島の宮雀
三筋足る顔とも見えず猿廻
物ずきの虫はきてなけ蓼の花

美濃近江おきてや語るけふの月

行秋や尻も結ばぬ糸すゝき

湯の辭宜の雪になりけり年仕廻

行春や一寸先は木下やみ

餓鬼のものの虫の來てとる灯籠哉

いさよひの芋や十日の菊の顔

筆とむる春に仇名や手六十

三文もせぬ矢を鳫に案山子かな

末二句の本據は今知らぬ人もあるべし「算用十六手六十」と「鳫は八百矢は三文」といへる古諺に基けるなり。

八千八聲といへる杜鵑は、いかさまにか鳴くらむ、我は其句を作れども、其聲を聽きたることなし。いつも初音の心地こそすれと、賞むる歌人あれば、聞くたび毎に胸惡き反吐とぞすと罵る俳諧師もあり。人々の耳こそ

をかしきものなれ。

いづ方に鳴きてゆくらむ淀とぎす　重供

音羽山おとゝぎす聞くこなたかな　意敬

始終り程とぎれずの聲もがな　永治

一聲は寢耳にほつとゝぎすかな　德元

鳴き習ふ聲やいろはにほへとぎす　政公

ひつついて鳴け闇の跡とぎす　忠也

人並にきかぬや耳ののろとぎす　秀重

鳴聲や本尊かけはし杜宇　作者不知

八幡のお山で聞くやはとゝぎす　宗賴

はづませて鳴くや拍子の程とぎす　正章

迚も鳴かばいかにも聲のふとゝぎす　秀重

狂歌にも此類の奇聲頗る多けれど、さまでは初音もうるさかるべし。諺

と結びつきたるものは、

親に似ぬ聲は鬼子か杜宇　作者不知
春なくや怪我の功名ほとゝぎす　靜壽
名人もなかずばそしれ時鳥　正章
後やとよむ初さゝやく郭公　重定
忍ぶなよ天知る地知る杜鵑　武淸
時鳥ながおとゝひや他の始め　宗賴
岩さへも物はいふとよ蜀魂　作者不知
いち聲に二ふしもあるや時鳥　正依
蝙蝠が王する里がほとゝぎす　弘永
鶯に他生の緣かほとゝぎす　重久
大名も大耳はせじ蜀魂　重賴
さゝやくも八町ひゞけ郭公　重方

鳴きゆくや十方檀那杜宇　　作者不知

以上の句は、いづれも俳諧は滑稽なりの教義を金科玉條とせる時代のものなり。されば俳句其物の價値は何程もなけれど、吾人俚諺を研究する者の上には、其惠頗る大なり。第三の句は「名人人を誹らず」「ならずば識れ」の二諺を結合し、第四は「初めのさゝやきは後のごよみ」といふに據り、第七の句は「岩も物いふ」に據れり、第十一の「大名は大耳」第十二の「さゝやき八町」これも今は多く耳にせず。是等の句は貞德派の句集に前後相望む有樣にて、諺を知らざれば其意を解する能はず、されば此一派には夙に諺を蒐集したる毛吹草、世話盡、かたこと等の著述あり。

赤本と西洋文學

坪內博士嘗てわが百合若傳說を以て、ホーマアの物語にあるユリッセスの話を傳へたものとして、その類似の點を擧げられた。大分久しい前の

事で今はその考證の詳かな點は記憶しないが、もし此説が正鵠を得たものとすれば、西洋文學の我國に輸入された最も古いものであらう。豐後壹岐上野地方に傳はつた口碑は、いつ頃であるか元より明かでないが、舞の本に百合若大臣があるので、ほゞ其時代が推測される。之に次いでイソプ物語が文祿二年に天草の耶蘇教會から羅馬字綴りで出版され、それから元和寛永の活字本や萬治版の繪入本も出來たが、その外には一向東西の交渉を窺ふべき異人くさい文學は見えぬ。

貞享四年出版の籠耳(五巻)といふ書は四十一種の俚諺を題目として、その起源を說いたり解釋をしたり、或はその諺に適合すべき例話を記したものであるが、その巻一、藝依(道賢の一章に次の話が見える。

そのかみ大藏といふ狂言師十歳ばかりの時、さる方の能にて山姥のあいを語りし時、脇いでゝ名乘をなのりて道行のうたひ出しを忘れたり、脇師もさる者にて柱のもとへより、所の人の渡り候か、これは都方の者

にて候、信濃の國への道行を敎へて給はり候へといひければ、大藏出あひて、都をいでゝさゝ波や、志賀の浦舟こがれゆく、末はあらちの山こえて、袖に露ちる玉江の橋と御尋ね候て、御通りあれと敎へけるは、誠に後の狂言の名人とよばるゝ程の者なれば、幼少の時よりわが藝に發明なる所あらはれたり、後生長るべしとかや。此大藏成人の後、鶉をすきて飼ひける、或時江戸へ下るとて、道中旅籠屋の門に籠に入れて鶉のかけてあるを、通りがけにふと聞きければ、鳴く聲ふとく七さがりの名鳥なり。大藏きくと否や、はや此鳥ほしくなりて、いまだ日も八つ時分なれども此旅籠屋に俄にとまりて、重ねての江戸上下に常宿にせんなどねんごろにいへば、亭主夫婦も喜び馳走をする。さて件の鶉を所望せんと思へど、亭主も秘藏すべきを卒爾にいひかけんも無下なりと遠慮してえいひ放たず、是非に上りには所望しかけんものをと心巧みして、下りにはまづ立ちぬ。さて江戸をしまひて上りざまに、件の宿にとまり

て亭主夫婦をよび出し江戸みやげ何がなと思へば心ばかりとて、女房には淺草島一端、亭主には金子一歩に阿部川の紙子を添へてとらせける。夫婦よろこび槌にて庭をはく。さて件の鶉に氣をつくれば、下りに聞くにたがはずいよ〳〵よき鳥なれば、夜あけなば立ちざまに所望しかけんと、夜もすがら心工みしてやう〳〵立ちざまに及びぬれば、大藏亭主をよびて、さて〳〵無心がある聞きてくるべしやといふ。亭主きゝて何事なりとも御心置なく仰付けらるべしといふ。しからば亭主近頃秘藏に思はるべけれども、飼ひおかれたる鶉もし我手に入り候はゞ何よりも過分に存ずべしといふ。亭主きゝて横手をちやうど打つて、さて〳〵いかなる御無心ぞとこそ存じ候へ、いとやすき御用にて候ものを、その鶉はいつぞや子どもが野にて捕へ來り籠に入れ飼ひおき候が、何も肴御座なく何がな御馳走にと存じ、その鶉をけさの御料理にしめて使ひ申したり、けさあがりました燒鳥は、その御所望の鶉にて

候と申しければ、大藏與をさまし心だくみもいたづらになりて、にがにがしくも立ちいでぬ。淺草島に金一歩はあつたら事の。

この鶉についての話は、紅葉山人が鷹料理といふ外題で翻譯されたデカメロンの話と、その組立が頗る類似して居る。これもオデッセスと同じやうに外國から流れこんだものであらうか、或は全く偶然の暗合であらうか、余は坪内博士の說にもいさぎよく同意を表しかねる位であるから、まして只話の筋が似て居るといふ外に、何等の傍證もない此話を西洋種とは固より斷言はせぬのであるが、只東西蒙求の好題目として世人の注意を求めるにとゞめる。

茲に一つ暗合として看過し去るには、餘りに類似が著しく思はれるものを發見した。それは「只とり山のほとゝぎす」といふ赤本にある三個の小話である。この書は椎園の舊藏で今久原文庫の收藏に歸して居る。惜しいかな後半五葉(下卷)は紛失して只一冊五丁を存するのみで全豹を見

ることが出來ぬ。上下欄に分ち上欄四分の一だけを文章に充て、四分の三は繪になり、詞書は「おゝこわや」とか「いんや〳〵」「ごつこいさ」など極めて單簡、僅に一二語に過ぎぬ至極古風なものである。表紙裏に左の識語がある。

此冊子のうら打するとて切りほぐせしに綴糸の處に赤き紙少しばかりづゝ殘りてありき案るに是赤本の表帋なるべし睡餘小錄に載せし寶永の繪冊子猿蟹合戰も文段と繪との間に罫引ありて此冊子の如し畫風は此冊子よりちと古しされ共文段と繪を二段にわけしさま同じきを思へば此冊子も寶永正德中のものにや

椎園誌

椎園は德川幕府の士で蜂屋茂橋といひ、赤本黑本類を多く收藏し、椎實隨筆、椎園叢書、椎園袋等の編著があり、天保頃榮えた人で、右の識語にいふ所は信用するに足るのである。さて次に此書の全文を掲げるが、原文は殆

ごすべてが假名がきであるから、讀者の便宜を計り適宜に漢字をあて、又句讀をもつけておく。

▲むかし〳〵の事なるに、隱れ里のほとりに、萬德長者といふ人あり、七珍萬萬寶くらからず、男子五人もち給ひ、それ〴〵に嫁を取り、孫彥やしやご息災にて、榮華に榮えおはします、又第一の寶に金銀なる木をもち常に孫どもを集め、木のうへに上り、金銀を取り孫どもにひろはせて慰みとし給ひけり。

▲ある時長者孫どもをつれ、鷺の大ぶんゐる沼へ行き、長き絲に泥鰌をつけて投げこみければ、鷺どもが泥鰌をくひてはひりいだし、その泥鰌又よの鷺がくひてはひり、一度に五十も六十も取り孫どもにとらせけり。

▲ある雪ふりの事なるに、孫どもに小鳥とらへくれんとて、窓口を少しあけ、杓子に飯を入れておき、又手を墨にてぬり、飯を入れて持ちければ、

雀ども杓子と思ひくひにくれば捕へ、又くればつかまへ、少しうちに五六十捕へ、孫彦どもにくれければ、子ども喜んでてんでに持ちて遊びけり。

▲又鴨の大ぶんゐる川に行き、まづふくべを川へ流しければ、鴨どもよりてつゝきけり、又あとよりふくべを被りゆきければ、鴨どもふくべと思ひ、つゝく所を捕りては腰にはさみ、又くればはさみ、二三十とり岡へあがれば、鴨ども一度に羽ばたきをして立ちける程に、長者をちうにひつさらひ、虚空をさしてぞあがりける。

▲こゝに又七福神たち隠れ里に集り給ひ、御酒宴なかばの所へ長者はどうと落ちければ、福神たち驚き騒ぎたまふ中に、強きは毘沙門天少しもさわがせ給はず、長者が手を取り、おのれはいかなる者なれば、歴々の酒なかばの興をさますます曲者、いかにいかにと問ひ給へば、ありし次第を申しける。

▲さるほどに福神達、長者を召され、汝むやくの殺生を好むといへども
まことの殺生にあらず、孫どもを慰めんための殺生なれば、咎をゆるし
（以下缺）

この鳥を捕る話は悉くバロン、マンチョウゼンの中のものと同樣であつて、單に暗合とはいひ難いやうに思はれるが、如何なものであらう。マンチョウゼンは西暦千七百九十二年の作といはれ、我寶永の初年は西暦千七百四年で正德の末年は千七百十五年であるから、ざつと八九十年の間隔がある。余は西洋文學には門外漢で、マンチョウゼンの精しい成立は知らぬが、年代からいへば日本の話が外國へいつたやうに見えるが、或はさうでなくして、彼も我も或コンモンオリジンを有するものか、それとも單に暗合に過ぎぬか、その邊の研究を世の識者に仰がん爲に、この問題を提供する次第である。

因にいふ、天明三年(1783)刊志水燕十作唫多雁取帳（うそしかりがんとりちやう）といふ黄表紙には、金十

郎なる者雁國へ赴き、氷りついた雁を拾ひ、幾つとなく腰にはさんで仕合よしと歸りかけたが、太陽の昇ると共に雁は生氣づき一時に羽ばたきして、金十郎は遙かの天上へ舞ひ揚り、圖らずも大人國へ落下する趣向あり。これは明らかに只とり山から思ひついたものである。

縣居翁の書簡

賀茂翁記念號の心の花に何か書けよと、佐々木博士より御話であつたが、自分は縣居翁の傳記にも事業にも、別に新しい發見や意見を持たぬから、近頃久原文庫で一見した二通の書簡を披露して責を塞ぐこととする。さして內容に富んだものではないが、これまで餘り世に知られて居ぬやうで、博士の「眞淵と宣長」や彌富氏の「名家書翰抄」にも見えぬから、何かの參考にもと寫し取つたのである。

此度加藤大助殿便に先書認候中又御狀到來、彌御淸福歡喜之事也、先者

御狀も相屆候也、とかくに麻布などよりは甚遠く候へば遲滯がち也、

一初まなびにひまなび此度遣候事先書に申せり、但にひ學は旁へかし候て、いまだかへらず候て、さて〳〵延引きのごく故、此方の本を添て遣候、かくては書體はわろけれども、其許にて御改書被成候樣賴入候、御改書の後此本もはや返しに不及候。

一日本紀先右?近など本にて字の違を改、訓も少々被改候もけいこ也、かかる事功を積ざれば熟せぬもの也、何とも拙者在命之內暫も御下候へかし、神代次に崇神天皇あたりまでの訓を御改置候はゞ、末はより〳〵に御考も出來べし、其下には萬葉又は先書に申せし如く、祝詞多く書給へ、神家にて祝詞をかゝでは叶はぬ事也、それ卽神學と成候也、又總ての文の本とも成候。

一島田人の歌見せ給へる、一通りは聞えたり、庭田家も一通りの事也、かのいにしへもまれなるとは、皇朝の言にあらず、唐詩に人生七十古來稀

といふを用ゐたる也、歌にからことを用ゐし事古今にも少々はあれど、元來皇朝の古學なき人のわざにて心ひくき事也、皇朝の古事千萬なるをばおきて、他國の事を用んやは、

今十五日中納言に任給へり

此事田安中納言の御前にもしか被仰し也、心高き人はたれもいふべき事なるを、今までいふ人聞えざるは無學故也、且日本は日出の國にて人長命也、此國にては百歳稀也とこそいはめ、七十八十は多き事也、から國は命長からねばさいへり、天竺は五十に至るは少しといへり、その國々の樣をもしらで、七十をから人にならへることをこなれ、京家の人々も物の心知人なければとがめざりし也。

右につかはさるゝ歌、或人いとすゝめぬるとも、よしなく遣されんにもあらず、されどよし有人にてせめば、その人へとてやり給へ、そのよしはし書に書たり、歌の事詠草にしるしつ、其外の歌なほし遣し候、今少しに

候まゝ御情入られ候へ、此度諸方文通繁々略之。

五月十九日　　　　　　　　　　　　　　眞淵

土萬呂兄

右は翁の門人遠江平尾村廣幡八幡の祠官栗田土滿に與へたもので、書中田安宗武卿の中納言に任じ給へる事見ゆれば、明和五年七十二歳の時のものと推測される、加藤大助とあるは、宇萬伎の事で、同年大阪へ勤番の砌これに托したものであらう。後進を誘掖奬勵する懇切な情が紙上に溢れてゐる。「拙者在命の內暫も御下り候へかし」とあるが、土滿は果して翁の意を滿たしたかどうか、今詳しく調べる遑がないが、その翌年十月に翁は沒したのである。土滿の著述に神代卷葦芽抄や岡廼屋祝詞集のあるのは、翁の意を空しくせなかつたと言ふべきである。

頃來御訪悉得芳意候、被命候地名之假字考候而其刻御記被置候傍に記候、日本紀には專ら字畫之多きを歌などに用候は他とまぎれぬ爲にて

も可有之候、五百洲の事もし書とられ候はんならば、今いほざきといふは好事のわざにて、こゝはもと五百洲といひしと、古老の傳へたるなどの意少し有べきもの也、さもなくばとかくに難ずる人多く侍るべし、まつち山などの事は必御除可然候、文體のみ宜候ても千載を經べきものに候へば、實を傳へざるは徒ごとに候へば、御こゝろ得有べき事と存候猶拜面之刻と申殘候也。

四月二日　　　　　　　　衛士

通魏兄

通魏といふのは如何なる人か知らねど、江戸の名所の事など記した書を出版する希望があつて、翁の意見を求めたものらしい、翁の庵崎や待乳山に關する考は、旅のなぐさの中に「辨基がまつち山夕越くれば庵崎のとよみしは、田口の大夫の下野に下る時の、淸見が關の田子の浦の歌につゞきたれば駿河國にあるべし、かのみほの浦をも古は御廬浦と書て、庵崎御庵

崎とともに此同じ所にて、庵崎の清見が關ともよみし也、後の人は古きふみをよくも見ざるにや、隅田川は武藏と下總のあはひにのみと思ひて、辨基が歌もそこにつらね、今はそこに庵崎といふ名の村さへ侍るといへり、夕越くればといはん程の山も侍らぬものを、事好の者の皆古ことを失へるもの也」とあるので明かである。

此後三村清三郎君より源涵魏、金龍子と號し、醫を業とし、金龍山下に住むとの教示を得たから附記しておく。

江戸後期の京阪小說家

上

德川前期の文學は種々の方面に於て、京阪が江戸に對して優勝の地步を占めたるは、今更いふまでも無く、所謂元祿文學は卽ち上方文學なりき。然るに享保の頃より學藝の中心漸く京阪を去つて江戸に移らんとする

兆候現れ、寶暦より明和安永を經て江戸文藝勃興し、文化文政に及びて其隆昌を極め、京阪は殆ど顧みられざるに至れり。

上方小説の衰運は八文字屋本の凋落より始まる、八文字屋本の作者として正德享保の頃名聲高かりし江島屋其磧は、元文元年七十歳にて歿し、その後繼者として迎へられたる多田南嶺も寛延三年に死し、八文字屋の主人なる初代自笑の子其笑、其笑の二子瑞笑、自笑相繼で箕裘を襲ひ、著作出版に從事せしも、依樣葫蘆、屋上屋を架する駄作に全く人氣を失ひ、明和四年版權を他に讓りて退轉の止むなきに至れり。かくて八文字屋なる小說本の版元は亡びたれども、その形式內容の上より所謂八文字屋本なるものは、猶餘喘を保ちて、明和安永の際京都には永井堂龜友(初め兵作堂と稱す)大阪には增舍大梁等ありて、其磧の子息氣質・娘氣質等の筆意を摸して、何々氣質と稱する小說を濫發せしが、いづれも愚作拙作にして、多く言ふに足らず、唯和譯太郎(上田秋成)の諸道聞耳世間猿・世間妾形氣を出色の

物として注意すべきのみ。

文化文政時代に江戸に榮えし京傳・馬琴等の讀本は、その源泉、上方に在り。大阪の儒醫都賀庭鐘の英草紙・繁夜話は八文字屋本の衰頽期に出でし小說にて、讀本の元祖と稱せらる。前者は寬延二年、後者は明和三年の刊行にして、共に九種の短篇より成り、材を今古奇觀等の支那小說に求めて、巧に翻案したれども文體用語に漢文脈を混じ、簡勁質直にして八文字屋本の平弱暢達と相距ること遠し。庭鐘の作は此の他に垣根草・莠句冊あり、俱に同類の書にして、秋成の雨月物語は是等の書に啓發されたるものなり。漢學が明朝詩文の影響をうけて、倫理經濟の學より離れて、文學として硏究せらるゝに至り、祇園南海・柳澤淇園等の文士詞客を出すと共に支那小說の硏究起りて、岡島冠山・岡白駒等が支那小說を翻譯或は訓點せしより、漸くその風化現れ、之に親しむ者增加して、化政度の小說は恰も明治の小說が泰西小說に負ふ所多きが如く、殆ど其材料を唐土に仰がざるも

のなきに至れり。

建部綾足の本朝水滸傳(安永二年刊)を先驅として、佐々木天元の日本水滸傳(安永五年刊)椿園主人の女水滸傳(天明三年刊)等、水滸傳の翻案續出し、寛政八年には馬琴の高尾船字文、同十年には京傳の忠臣水滸傳出で、江戸の讀本小說漸く盛ならんとするに至れり。前者は仙臺侯の巷說を水滸傳に牽合し、後者は忠臣藏をそれに附會したるものにして、共に馬琴京傳の讀本の初作と目すべきものなり。爾來此二人は相競爭して讀本小說の著作に熱中し、その他の群小說家もこれに倣ひ、文化文政時代は江戸讀本の全盛期となりて、京阪小說界は月前の星の如く、殆ど世人の眼中に認められざるに至れり。

京阪の讀本が叙上の如く多く顧みざれしは、作者に京傳・馬琴の如き傑出拔群の士なく、畫工も豐國・北齋等の如き一代の人氣を負へる者なく、岡田玉山・石田玉山・淺山芦國等の稍古風にして、時世粧に貼切ならざるがその

主因にして、製本の粗惡なるも亦その一因なるべし。

上方の讀本作者には、安永天明の頃椿園主人あり、通稱浦邊源曹、伊丹の住、安永八年の今古小說唐錦・怪異譚叢を始として今古奇談翁草・坂東忠義傳・本朝小說兩劍奇遇・女水滸傳・深山草等の作あり、挿畫も多くは自畫なり、その作風は英草紙・繁夜話の風を摸したる短篇集にして、文藻はこれよりも數等劣りて、殆ど話の筋書といふに留れり。これと同時に名所圖會の著者として世に知られし秋里湘夕は、忠孝人龍傳・保元平治鬪爭圖會・赤ぼし草紙等の作あり。湘夕の後繼者と目すべきものに、文政天保の頃、池田東籬亭あり、繪本通俗三國誌・繪本吳越軍談・北條時賴記圖會等を著す。この二人は京都の人なり。共に編纂演義を旨とし純然たる作家を以て目し難し。江戸の高井蘭山に對比して、猶劣るものといふべし。

寛政九年岡田玉山の繪本太閤記出でて頗る評判よかりしが、その後江戸にて歌麿の書きし太閤五女花見の圖、其筋の忌諱に觸れて罪を被るに及

び、その餘波ひいて此書も絶板を命せらるゝに至れり、此書玉山の署名あれども、玉山は只その畫をかきしのみにて、實は竹內確齋の著作なり。確齋は篠崎三島の門人にして詩文を能くし、徒を集めて敎授す、文政九年五十九歳にて歿す。阿也可志譚(文化九年)繪本玉藻談(文化十四年)等玉山の名を署するも、實は皆確齋の著作する所なり。次で手塚兎月・栗杖亭鬼卯の二人あり、兎月は別に橘生堂・北溟等の號あり、古志路の章・敵討朝妻舟等文化三年より文化八年迄の間に十餘種の作あり。鬼卯は通稱を大須賀周藏といひ、遠江日坂の產にして、享和の頃河內佐太に居り、後大坂にいで、文政六年八十三歳にて歿せり。嘗て煙草を鬻ぎ、店の障子に「世の中の人と煙草のよしあしは煙となりて後にこそ知れ」と題したる狂歌、樂翁侯の目にとまりて感賞せられたりといふ。著作十餘種、就中更科草紙・長柄長者黃鳥墳・月桂新話等有名なり。南水漫遊・擬陽落穗集等の隨筆の著者として有名なる濱松歌國(通稱布屋淸兵衞、文化十年歿五十二)は、その本領は

狂言作者なれども、又忠孝貞婦傳・今昔二枚繪双紙等讀本の作あり。最後に著名なるは曉鐘成なり、通稱木村彌四郎、鷄明舍・鹿廼舍眞萩・晴翁等の別號あり、關根只誠の名人忌辰錄に晩年丹波福知山に遊びし際、百姓一揆の爲に檄文を草して獄に下り、萬延元年六十八歲にて牢死せる由いへり。牢死說は關根氏の耳聞に屬するか、この他に見る所なし。浪華人物志及び門人二世鐘成が晴翁隨筆の序に記する所を擧げて傳記の參考に供ふ。

大阪籠屋町酒造家の男にして文事を好み、其初め專ら狂歌を詠みて鹿廼屋眞萩といひ、別居して雜錄の著述を業とす、傍ら浮世繪を松好齋に學びて畵けり、著述の書多く世に行はる、當て心齋橋筋博勞町に住し、檜にて御殿造樣のものを店に造り、奈良の名產京都福井氏にて製する有職器の類を售りしが、此店天保の季幕府改革令にて停止せられしかば東成郡天王寺村に美可利家と號け一園を作り、一茅舍を設けて此に住み、薙髮の後難波瑞龍寺前に寓し、手鍋庵と稱し未曾志留坊一禪と戲號

す、嘉永六年癸丑の春門人安部貞昌に鐘成の號を讓り、自ら晴翁と號す晩年生誕の地に還り、萬延元年庚申十二月十九日歿年六十八、墓は西成郡大仁村西樂寺にあり、其著述西國三十三所名所圖會・東山名所圖會・攝津名所圖會大成・淡路名所圖會・小豆島名所圖會・其餘枚擧に遑あらずと云。（浪華人物志）

先生姓は源、名は明啓、通稱木村彌四郎といふ、蓋しその先は宇多源氏にいで、數世本府鑑街の人なり、幼きより著述をこのみ、家業を舍弟に託し居を荒陵の邊にトし、鷄鳴舍鐘成と戲號す、甞て著すところ童蒙教訓・民家必要の雜書、其外稗史小說滑稽の戲作等多く擧て數ふべからず、後に難波の里に住し南坡老人と稱す、然るに去し嘉永六年癸丑ごし翁還暦の賀を表せらるふし、僕に其戲號を讓り晴翁と更む、爾して頃年鑑街祖舖のちかきに居を移し、傍邊に枸杞の木を植ゆ、不圖繁茂して枝檐をめぐり叢をなせり、見る人奇とす故に枸杞菴と稱す、于時翁齡既に古稀に

ちかし(下略)(晴翁隨筆序)

この人の著述は雜駁にして隨筆・名所圖會の類より滑稽本・草双紙の系統に屬するもの等多種多様なれども、讀本としては朝比奈巡島記の續編豪傑勳功錄・忠孝伊吹物語等あり。 二世鐘成は師に先だちて萬延元年三月四十四歳にて歿せり。

此他、狂歌師鐵格子波丸(木津屋周藏)の繪本葦牙草紙、五島清通(東町奉行附同心增田勘藏)の螢狩宇治奇聞・和漢の染分、岡田玉山の門人速水春曉齋の繪本金花談・繪本楠公記の類、尙多けれども、今一々僂指するに耐へず。 要するに上方の讀本小說は、兎月・鬼卵等二三子を除きては、江戸の第二流作者にも拮頏するに足らず。 その多くは繪本何々の名稱を冠して、玉山一派の插畫を以て、僅に婦幼の注目を惹かんとす。 德川前期における京阪小說の殷盛に比して、その凋落振はざるや甚しといふべし。 然れども近世小說史を究むる者の、京阪小說の元祿前後をのみ喋々して、その化政期

を度外して、全然一顧の勞をとらざるは、これ亦公平なる史家の態度といふべからず。偶〻江戸にありしが爲に、二流三流の者まで穿鑿紹介せられ、京阪にありしが爲に、それと同等或は以上の者も、その存在を認められざるに至ては、小說史のため將た本人の爲に、その不幸を悲しまざるを得ざるなり。

下

前章には主として讀本及びその作者について述べたれば、茲には滑稽本及び洒落本の事に關して說く所あるべし。

そも〳〵滑稽本なる名稱は德川時代には通用せられざりしものにて、馬琴の所謂「浮世物眞似めきたるえせ物語」膝栗毛・浮世風呂の類は、皆糊入みよし紙半截にて、半紙本と小本との中間なる大さなるより中本と稱せられたり。されどその內容の滑稽を旨とするものは必ずしも中本形に限らずして、半紙本の體裁を採るものも亦多かりしを以て、分類の必要上滑

稽本なる名目を立つるに至れり。　而して此名目が一般に用ゐらるゝに至りしは、朝倉無聲氏の小說年表などが準據として弘く參照せられし効果なるべし。

滑稽本はその源を敎訓風の浮世談義に發す、その最も古く最も有名なるは寶曆二年江戶出版の當世下手談義(半紙本五冊)なり。　此書は靜觀房好阿(兩國橋邊の手習屋山本善五郞)の作にして、工藤祐經の靈が芝居へ傳言して服裝の時代違ひなるを咎め、都路某太夫が江島に參詣して辨財天よりその淫靡なる樂風を叱責せらるなどの事を、面白可笑しく綴りたるものにて、作者の目的はその序文に「貝原先生の大和俗訓家道訓はむく／＼和々として極上々の能化談義、自笑其磧が娘形氣息子形氣は表に風流の花をかざり、裏に異見の實を含み見るに倦まず聞くに飽かず、是を當世上手の所化談義に比すべし、予が此草紙は新米所化が田舍あるきの稽古談義、舌もまはらぬ則だらけ、智者の笑は覺悟のまへなり、されど敎化の志は

能化にもおとらじ」とあるにて知らるゝ如く、寺子屋の師匠だけに殊勝なる心掛にして、警世諷俗の丸薬を飴に包みたるまでにて、純粹の小說を以て目すべからざるものなり。その體裁は每冊十四五葉にて二三の粗畵を插めり。

此書一たび出でゝ摸倣の作續出し、當風辻談義・錢湯新話・當世花街談義等現れ、漸次里俗敎訓よりも却て惡風煽動の傾向を生じ、寶曆の末に風來山人の根なし草・志道軒傳等出でゝ敎訓の意を離れて滑稽專一となり、終に一九三馬等の中本の滑稽物を生ずるに至れり。江戶の滑稽本が槪して中本の形式を採るに至りしは、享和二年の膝栗毛を以てその始とすべきか。（膝栗毛以前にも多少中本形のものなきにあらねど其影響微弱なり）京阪は中本形のもの少數にて長く半紙本にて繼續せり。

洒落本は遊里の光景を寫しその內情を暴露するを目的とす、されば前掲の花街談義（寶曆四年刊）の如き、事專ら遊里に關し迷客芳原境女品、諸客誤

道品、新造茶引品など法華經まがひの章を立て談義風を裝へるも、その性質は洒落本と殆ど擇ぶ所なきものなれど、洒落本は一に蒟蒻本又小本とも稱して、半紙半截に概ね土器色の唐本表紙をつけたる一册物を呼ぶ名稱と定まりたれば、その範圍おのづから限定せられざるを得ず、洒落本が此體裁を採るに至りしは享保年中吉原細見の附錄として刊行されたる兩巴巵言・史林殘花(共に漢文)の形式を學びしものならん。京阪の洒落本は寶曆の頃出でしものは大抵小本なれども、その後は滑稽本と同様多く半紙本なるより、蒟蒻本小本などの稱呼は廣く行はれずして、粹書と稱することと多し、但し粹書といふ名義は洒落本のみに限らず、談義體の滑稽本も內容の粹道宣傳なるものをもいひ、又延いて爲永一輩の人情本をも指すことありと知るべし。

さても小本形の洒落本は何より始まるか、從來は明和年間の作と稱する遊子方言を以て之に擬せしが、早く寶曆七年正月江戶版の異素六帖、同年

六月大阪出版聖遊廓（一名雪月花）あるより舊說は破れて、今は專ら此二書を祖とするに至れり。されど此說もなほ研究の餘地なきに非ず、寬延二年大阪版に泉臺冶情と題する小本一冊あり、大阪の人氣役者中村松兵衞死して冥土に赴き閻魔王の寵眷を受くることを叙し、贈答の狂詩を載すること多し、內容に於ては稍〻洒落本の特質を缺き、寧ろ風來の根なし草の先蹤ともいふべきものなれど、森羅萬象（二世風來）の田舍芝居の如き題材全く遊里以外にあるものをも、其形式より洒落本と許す以上は、是も亦洒落本たるを得べし。假に一歩を讓りてこはその內容の上より暫く異素六帖元祖說を破るに不十分なりとせんか、別に大阪版の月花餘情といふ小本あり、獻笑閣主人の序文ありて、次に江南妓邑と題して漢文にて島內の妓情を說き、次に燕喜篇を題して、花情といふ嫖客の妓樓宴飲の光景を寫せり、此一章異素六帖よりも遙かに多く洒落本の本質を具備せり、その刊行年月は記載せざれども之を推知すべき旁證あり、卽ち寶曆七年正

月刊行の穿當珍話（一名比言指南）は島内の比言の師匠の宅へ門人等來り會して、互に地口を鬪はす趣向にて、知曉といふ門人の詞に「花情丈の事に付て彼是致し御無沙汰申しました、扨花情丈氣之毒で御座ります、［先生］何と致したな［知曉］また餘程盡されまして此度は松風ではないが、鹽ふみに上鹽町邊へ閑居の身分となられました」とあり。例の自家廣告の手前味噌にて、同一作者が既件の書を吹聽するものと認めらるれば、月花餘情は少くとも寶曆六年以前の作ならざるべからず。

同じ獻笑閣主人の著に猪の文章といふ小本あり、遊女の事を評論體に述べたる書にて、序に辛未の春とあり、此辛未は寶曆元年と推定すべく、探花亭主人の百花評林（後に浪華樂府と改題）は太夫天職鹿戀等の妓品を花に喩へ、一々漢文と和文とにて評語說明を加へしものなるが、其序文に「丁卯春正月之吉」とあり、この書名は享和二年の洒落本評判記花折紙に見えたれば、その丁卯は延享四年と推定せらる。是等の事實に據りて寶曆七年

の異素六帖以前に大阪に於て早く小本形の洒落本發生せしを知り得べく、洒落本を江戸起源とする說は承認し難しと思ふ。兎にも角にも江戸には寶曆年間の洒落本は異素六帖一部の外なきに、大阪には上掲の外に陽臺遺編·嬉陽英華·煙華漫筆·浪花色八卦等、寶曆年間の作と認むべきもの多數なるは、洒落本の爲に氣を吐くものといふべく、殊に聖遊廓の孔釋老の三聖が李白の揚屋で遊び、その後編列仙傳が孔子の命を受けて子路が日本國の風流視察に來り、六歌仙の案內にて吉田兼好が營める茶屋に遊ぶなど、隨分思ひ切つて世の中を茶かしたもので、後年江戶の作者唐來三和をして三敎色の名作を出さしむる粉本を與へたり。而して是等の作者の如何なる人たるかは今知り難きも、献笑閣主人や桂井蒼八(古文鐵砲前後集の著者)や、いづれも相應に漢文の素養ありて、篇中往々艶史や隋史遺文や杏花天などの新渡小說の噂あるを思へば、蒹葭堂や都賀庭鐘などの感化をうけし漢學生の道樂仲間なるべく、島內を陽臺·嬉陽·南陽·江南·南

江と呼ぶなど、江戸の北里・南品よりも、ずつと手數のかゝつた惡氣取といふべし。
寶曆に勃興したる大阪の洒落本は、明和安永以後さして勝れたる作者なくして一向振はず、之に反し江戸は安永天明に至つて隆盛を極め、京傳その牛耳を執りて名聲嘖々たり。京阪には到底之に頡頏すべき作者なくいづれも團栗の背くらべ、談義風の舊套を脫せずして、もつちやりした輕口に、いつも古めかしい粹の講釋、氣のきかぬこと夥しいものなりき。中について安永五年の風流裸人形は南地の遊女が座敷と部屋との有樣を純粹の大阪詞をもて寫し出せるものにして、江戸における遊子方言の地位に匹敵すべきものか、次で寬政五年の北華通情は曾根崎新地の世界にて、佳作の一と目すべく、その卷首に掲げたる北地の光景を叙したる長文は、京傳の客衆肝照子の長序と光彩を爭ふべき華麗の文辭なり、作者春光園花丸の履歷を知らざれども、當時大阪に國丸(玉雲齋貞右)といふ有名な

る狂歌師あり、門下の高足皆何丸と稱せしより世に丸派といへり、花丸も亦その門流の一人ならんか。　卷末の著書目錄に、こと葉の玉、北華通情、燭光西廓記、放蕩三客卷、うきふし雜話、下拙珍語あり、燭光西廓記以下未見の書にして、その在否を知らず。　文政九年出版二斗庵幸雄の北川蜆殼は半紙本なれども、內容は純大阪式の對話より成れる北地の洒落本なり。　是等をまづ大阪洒落本の目ぼしきものと見て可なり。

京都に至りては萬事舊慣に泥み流行に後るゝ土地柄とて、長く談義風の餘臭を去らず、製本も長く其形式を守り、純粹の洒落本といふべきもの極めて少し。　此方面の作者に狂詩を以て有名な畠中銅脈、俳諧師として知られたる西村定雅あり、銅脈の片假名世醉記、針の供養は未見の書なれば其內容如何を知らず、阿蘭陀目鏡は半紙本なれど、全篇對話より成れる洒落本なり、風俗三石士は素寒貧の三石侍が所々の茶屋をぞめき廻る趣向の小本なれど、是は歿後の出版也。　京都の洒落本にして、稍注目すべきは、

文政五年大極堂有長の作河東方言箱まくらなり、鳴東妓家の裏面を描ける作にて文章才氣見るべき者あり。狂詩の書賛や「安宍先生(中島棕隱)の太平二曲に受惡御客金故靡の場なるべし」といへる評語や、安宍が序文を附せる風俗三石士と同樣の體裁版下なる等より考へて、此書或は棕隱の匿名作にあらずやと疑はる、京攝戲作者考にも棕隱には漢文戲著の他に國字小說の作もある由いひたれば、旁々しか思はるゝなり。醉齋の褋士一覽は京の遊廓を外國地理に擬したる作にて、京傳の新造圖彙と喜三二の青樓名娼圖會(娼妃地理記)とを綜合したる氣味ありて繪の意匠を見るべきもの、粹川子の外國通唱も亦た外國語らしき名稱を遊廓に附會せしが思ひつきといふべきのみ。序にいふ圖畫に滑稽機智の意匠を發揮したる京傳の奇妙圖彙・小紋雅話等の後塵を拜せしものに大阪の曉鐘成あり、滑稽漫畫・和談三細圖會等是なり。俳人としての定雅はホト、ギス第六卷第二號に水落露石氏の紹介あり。茲にはその遺ちたるを補ひ、且小說家と

しての方面に及ぶべし。　定雅は通稱みすや甚三郎といひ、京都三條柳馬場に住み縫針を商ふ、壯年の頃遊蕩に耽り產を破り、文化の初頃知恩院町に退隱し俳諧著作を以て口を糊す、浪華玉水館著、皇京盧橘庵の校と署せる廓中掃除に、嫖客と遊女と相對して互にその隱微を訐き合ひ、負けず劣らず論爭する處へ「うすごろ〳〵の凄き相方にて、坊主天窓に青黛ぬり菩薩出の足に紺足袋はき、死んだ五雲が涎沫垂れぬやうな宗匠らしき懷親仁忽然と顯れ出、我を誰かと思ふ、かくいふは醉雅靈神とて、我と我手に醉といふ字を名に附くくらゐの醉じやもの、醉でなふて何としやう、其醉雅がいふ事をよく聞くべし」とて總方の言分を批評し、且自己の履歴を語りて、「我もいにしへは終日終夜色里へ入込、親兄弟の　見を用ひず、通ひ盡せし甲斐あつて、自然と里の諸わけを覺へ……親の讓りの金銀を落花微塵遣ひちらせし故金花亭と遊名を呼ばれ、居宅の角屋を賣りこぼつて、天窓は丸ふ剃りこぼち、今は世に無きかげの醉雅明神とあがめられ、色里近くに

跡をたれ、靡の帳合をしてゐること地府の修文郎にひとし」とあり、靡雅は別號の靡川と定雅とを合せて垂加の音通をきかせ、金花亭は亭號の椿花亭を匂はせたること明かなり。盧橘庵の何人たるかは不明なれど、馬琴の羇旅漫錄下に「盧橘といふ人は筆耕と戲作をして家內五人を養ふ、かくも筆耕に作者をかねて渡世にする人大阪に盧橘一人なり、この人予逗留中大に深切にもてなさる」「盧橘が著述度々書肆に損をさせたれば、後には絕て行はれず、京にうつり住み、又大阪口繩坂にて賣卜せしが、文化辛未ゆくへしれずなりぬといふ」とあり。もし此人ならば橘庵漫筆(一名東牖子)嗚呼矣草、忠雜狙等の隨筆を著したる田宮仲宣といふ者なり。定雅の知恩院町の住居生活の樣は、椿花文集(天明七年刊)の白梅樓の記に詳なればこれを抄出せん。

そのかみ此ほとりは、戒光寺の舊跡にして、松柏枝を並べ、千草深く茂りて人家稀也と聞傳へしが、今は萬屋いらかを列ね、せちに產業を事とす

かゝる市中に小扉を設けて壁ぬりそへ簀つゞくりしより、古疊を並べて臥戸とはなしぬ。かたへなる炭櫃によりては粥を焚き澁茶を涌して漸く朝暮の飢を凌ぐ、机一脚、焼鍋二つ、琴一面、茶碗三つ、古き書笈其外夜の物より外貯ふべくもあらねば、いと安く世を送りて聊か山林の閑居にも似たり。又せばき庭の面のかきほはやれて犬の通路となり、堀くづれてはわらはべや踏みあけつらんと見へて、たれ繕ふ者もあらねば、おのづから苫深く露きゆる時なく、蔦朝顔は軒にまとひ、小笹がくれに音を啼く虫のさま〴〵、さすがに昔忍ばれていと哀深し、さゝれぱとて、ひたぶるにかゝる哀を求めたるにもあらず、只箒とる事のむつかしくて捨ておきたればなるべし。其中に予が好める花なれば痩せたる梅の一本をうゑたり、誠に竹を愛せし王子猷が徒にはあらねど、ある時は茶に興じ、或時は酒に興じて朝暮徒然の友とはなしぬ。されば白梅の名にしめて、みづから白梅楼とは號し侍りぬ。

梅一木爐にたく程の落葉かな

猶この近隣の妾宅、藝人、茶人、灸師、貧僧等の生活を描きたる「そのとなり」（文化三年刊）と題する戯文一冊あり。晩年その居を眞葛原に移し俳仙堂と稱す、事は曉鐘成の遺稿曉翁隨筆（寫本）に詳かなり、曰く

洛東俳仙堂定雅は京師の人にして、樗良の門に入り俳諧をもつて世に名高し、嘗て丈草が所持せしといふ芭蕉翁の涅槃像の畫圖の一軸の事をかねて聞き及ぶといへども、只名のみにして知る人だに無きが故に、文政六年十月畫師岸雅樂助岸駒に乞て、是を圖せしめ秘藏せり、（中略）例年の芭蕉忌に是をかけ、門人等を集會して追薦を催せり、爾後門弟朝陽俳仙堂を相續し、此一軸を讓り受けて藏す、然るに故あつて朝陽は芭蕉堂蒼虬の跡を嗣ぎて、自分の門人蔦雨にこれを讓る、蔦雨故鄕の坂本に歸る時、定雅の遺弟佾美に讓り戻せり、佾美後に同門鸞山に讓る、故に今の俳仙堂鸞山これを所藏す、俳仙堂は洛東下河原の東にありしが、終に

廢して遺物俳仙堂の額（加茂甲斐守筆）水月の文臺、翁の木像（首は幻柱庵の邊にありし椎の木にて刻み胴は杉あら彫に造）等をも當時鷺山の家に秘藏せり。

定雅は天明より文化文政へかけて俳壇に立ちし人なれば、その句も初期の間は天明復與の機運につれて平淡の中に雅味あり、蕪村几董等とも交際ありて、續明鴉、五車反古等にもその句入りしが、晩年は次第に墮落し殊に戲作に沒頭し、劇場花街を題材として俳句を以て洒落本的情趣を詠せんと企て、洒落文臺、仕方俳諧、外國通唱等を作し「オヽしんぞと云ふてすわりし火鉢かな」「身賣場を扇に忍ぶ涙かな」の如き句に耽りしより愈々俗化せり。

天明三年彼が三十九歳の時、徒然草の口調を摸したる戲作徒然睟が川を存在の名を以て出しゝに、案外好評なりしより得意になりて睟川子と名乘り、後編まゝの川、裸百貫等同類の書を著すに至れり、作意文才共に多く稱するに足らざれども、他に作者の乏しかりし京都文壇には相應にもて

はやされしと見えて、この類の戯作樂屋方言、䑓士一覽等大抵䑓川子の序跋を見ざることなし。䑓川又翠川、粋川とも書し、兼好に因みて艶好とも猿猴とも稱せり。年表及び前述の他によし野紀行、反古瓢文化七年文集反古瓢文政五年等の編著あり、又彼の作りし端唄に力餅、かじかの二曲あり、狂詠の長唄一首を茲に掲げてその技倆を窺はしむ。

女の芝居見る長歌

見る事の稀なる芝居まれに見て心ときめく花道に、霞の幕をほのぐとあけてし並ぶ歌舞妓男をの男のすなる女形、月の眉ずみ花の顏、粧ひたつる秋の山、衣裝は野邊の唐錦、色に染むてふ若殿は阿房排の戀の闇、黑裝束のうばたまの玉の寶を奪ひゆく、跡白波や立役の忠義を盡す君が爲、たくみかしこき樫の實の一人思案も、有明のともし火細き影の唄、吾妻ぶりなる今樣に妻をしろなし、身替の我子に迷ふ夜の鶴、なく音忍べば見物の殊に女の貰泣、袖を濡らしつ鼻かみつ、取亂したる辨當のまゝ

さへくへぬ涙川、涙流せばその跡はをかしい事もあり磯海、深き淺きをとりませて、神祇釋敎戀無常、藝をつくしの果太鼓、けふ一日の樂みもあだに暮れゆく花木槿、しをれて戻るわがうちは、元の浮世の芝居ごと、咋日はよそに見しぞはかなき。

文政九年八十三歲にて歿し、二條樋口善導寺に葬り、法名を俳仙堂寂譽定雅禪士といふ。水落氏は死歿の月日を二月十二日とし、京都名家墓所一覽には十一月二十六日とす、それ孰れが正しきや、未だ之を確むるの機を得ず。

京阪作者の傳記は上述二三子の他は多く傳はらざるを以て、次にそのおもなる者の年表を掲げて一覽に供す、〇符あるは小本にして他は半紙本又は中本なり。但し未見にして符を付し得ざるものも二三なきにあらず。

京阪滑稽本及洒落本年表

書名	冊數	作者	年代	地
○泉臺冶情	一	無文館措大子	寛延二年	(阪)
○穿當新話(比言指南)	一		寶暦七年	(同)
○聖遊廓(雪月花)	一		同	(同)
滑稽雌黄	四	桂井蒼八	同　九年	(同)
○古文鐵砲前後集	一	同	同十一年	(同)
青樓叢書	一		同十二年	(同)
○聖遊廓二篇列仙傳	一	先賢卜子夔	同十三年	(同)
○間似合早推	一	史魯德齋	明和六年	(同)
片假名世酔記	一	銅脈	安永元年	(京)
針の供養	五	同	同　三年	(同)
○風流裸人形	一		同　五年	(阪)

大平樂婢女行國字解	一	銅脈	安永元年（京）
○得手勝手	一	浪華散人魯佛	同　九年（阪）
徒然睟が川	五	睟川子	天明三年（京）
○仕方俳諧	一	同	同（同）
睟ケ川後編眞々の川	四	同	同　五年（同）
粋宇瑠璃	五	盧橘庵	同（同）
好言草	五	同	同　六年（同）
當世粋の源	五	前川來太	同　七年（阪）
○言葉の玉	一	春光園花丸	寛政五年（阪）
○北華通情	一	同	同（同）
虚實柳巷方言	三	香具屋先生	同（同）
養漢裸百貫	五	睟川子	同　八年（京）
戯言浮世瓢簞	五	呉句堂主人李春	同　九年（同）

青樓阿蘭陀鏡	五	銅脈	同　十年	(同)
野暮枝折	四		同十一年	(阪)
○昇平樂	一		同十二年	(阪)
樂屋方言	五	鐵炮堂主人	享和四年	(京)
噓の川	五	粹川子	同	(同)
當世底佐賀志	五		同	(同)
○外國通唱	一	粹川子	文化元年	(同)
古今馬鹿集	四	同	同　二年	(同)
遊女文章大成	一	同	同　三年	(同)
○こゝろの外	一	遊數里夜行	同	(同)
遊女大學	一	粹川子	同　四年	(同)
足毛識(あしげのこまごと)(脚栗毛)	二	同	同	(同)
當世廓中掃除	五	玉水館	同	(同)

青樓千字文　一　同　六年（同）
褋土一覽　二　醉齋　文政三年（京）
○河東方言箱まくら　三　大極堂有長　同　五年（京）
滑稽漫畫　一　曉鐘成　同　六年（阪）
長唄馬鹿集　一　粹川子　同　七年（京）
北川蜆殼　二　二斗庵幸雄　同　九年（阪）
和談三細圖會　一　曉鐘成　天保十三年（阪）
○風俗三石士　二　銅脈　弘化元年（京）
色道禁秘抄　一　大極堂有長　嘉永元年（同）
無飽三才圖繪　六　曉鐘成　同　三年（阪）

刊年未詳

○月花餘情　一　獻笑閣主人　（阪）
○同後編陽臺遺編　一　同　（同）

○猪(しし)の文章(ふみ)　一　同　（同）

○百花評林（浪華樂府）　一　探花亭主人　（同）

嶠陽英華　一　（同）

浪花色八卦　一　外山翁　（同）

○煙華漫筆　一　張葛居辰　（同）

南遊記　一　（同）

○閨中奇譚　一　（同）

秘事眞告　一　普穿山人　（同）

○肉道秘鍵　一　品動堂馬乘　（京）

新織藝子洒戲　一　（阪）

花街風流解(さとふりげ)　三　大眼子　（阪）

○青樓洒落文臺　一　粹川子　（京）

○百人袷　一　同　（同）

綾足と秋成

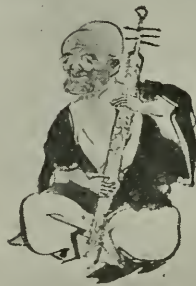
——同事異文——

德川後期の文士を相撲番附に見立てるなら、その幕内に東建部綾足西上田秋成といふ取組は、誰が見ても異存のない所であらうと思ふ。二人とも小手の利いた多藝多才の畸人で歌もよめば俳諧もやり、國學を修め小説を書き、衒氣があつて强情我慢な點まで共通である。

二人者の閲歴が又尋常でない。綾足は津輕藩の家老職の二男だといふが、早くから國を飛び出して長崎へ行て繪を習つたり、東福寺の坊主になつたり、それから還俗して俳諧師になり、延享四年二十八歳の時始めて俳諧南北新話を著し、江戸に住みて俳諧を業としたが、一朝眞淵について古學を修めてから尚古主義にかぶれて、俳諧を以て日本武尊と火燒翁との唱和に始まるとし、之を旋頭歌の片歌といふからは、十七字十四字のもの

上田秋成自傳

（神田喜左衛門氏藏）

上田秋成自賛像

（神田喜左衛門氏藏）

は短歌の片歌であると稱して、片歌二夜問答、同百夜問答、片歌道のはじめ等の書を著し、伊勢の能褒野に碑を立てたり、華山院右府に片歌道守の染筆を請うたりして、自ら片歌の元祖を以て任じ、俳諧者流の文字に暗きを嘲り、動植物の名稱も一々本草の正字に據り、稻妻を熱閃、鶯を喚起鳥、夕顏を壺蘆などゝ書いて、頻に學者がつたが、識者の冷笑を買つたばかりで、一向反響がなく、僅かに相摸下野上野邊に多少の信者を得たのみで全く失敗に終つた。彼自ら慰めて曰く、俳諧は無用の仇言なりと知りたるより止めぬ、又片歌の用ひられぬは本來の覺悟なれば、畵を以て糊口の料とす、たとひ人は用ひずとも、片歌の元祖は我なり、之が爲に俳諧といふ寶の山を出て片歌といふ淵に身を投げたりと。

この尙古癖は彼の小說に及び、その西山物語の如き、記紀萬葉祝詞伊勢源氏等の古語をつゞり集めて、うるさくも一々その出所を分註するといふ爲體(ていたらく)で、しかもその古語の使用法が生半可で恥の語はいかなる場合にも

「やさしみ」で押通し、犬侍を犬じもの侍などゝやつて居る。出來才子多く書を讀まず、秋成も文才は數等すぐれたれど、古語の使用法には隨分いかさまが多い、係結を誤つたり、自他を混同したり、おぼすといふ語を敬語と心付かず、思ふと同樣に使つて居る。

秋成は綾足より十五歲の年少で、秋成が俳諧の切字を論じたる也哉抄を出した安永三年に綾足は五十六歲で歿したのである。秋成は娼家の女の私生兒であるが、上田某といふ富商に養はれて、青年時代は遊蕩な生活をして、一向學問をつとめず、只天性の才子で、道樂半分に歌をよんだり、俳諧をやつて居たが、明和三年三十三歲の時、始めて加藤美樹に逢うて國學を修めてから次第に學問に興味をもつやうになつた。此年に出版された世間狙や妾形氣は、遊蕩時代の見聞を材料とした八文字舍風の碎けた筆致であるが、明和五年西山物語の出版と同じ時に出來た雨月物語は、文章に稍古典的臭味を帶びて來た。間もなく養父は死ぬ、家は丸燒けにあ

ふ、十方に暮れて糊口の爲に俄仕立の醫者修行、醫は意也で、ゆがみなりの匙加減も、一日に二度三度も病家を見舞うて親切づくめで可也の評判をとり、一時は家を買うて新築するまでの餘財を得たのであるが、隣家の愛兒を誤診して盛り殺してから一念發起、天明八年五十五歳で、斷然醫業をやめ、それから京都へ移つて、南禪寺畔に寒酸な生涯を經た事は人の知る通である。

晩年は清貧を樂んだ風流漢のやうに見えるが、その實偏屈と貧乏が自慢の名譽心の強い男で、私生兒といふ先天的の僻みと、若い時の我儘育ちが累をなして、宣長や履軒に喰つてかゝつたのはまだしも、親切に世話を燒いた蘆庵や月溪までも嘲つて、自己の不遇を憤つた。しかし綾足のやうに大びらに世間的の運動をしなかつた爲に、一寸見ると秋成の方が高雅に見えるが、その衒氣爭氣は畢竟陽性と陰性との差別に過ぎぬ。此二人が共に俳諧から國學に入り、それを利用して小説を作り、それが共に馬琴

の讀本の先蹤をなした因緣や、著述筆耕に衣食して、終身文士として生活した經歷の類似からして、何か兩者間に多少の交渉でもあれば面白いと考へて居たのであるが、數年來秋成遺稿の蒐集を思ひ立つて、小山曉杜、水落露石二氏所藏の遺書一切を借受けて調べて居る中に、偶然次のやうな關係を發見した。

小山氏所藏の膽大小心錄——國書刊行會本に收めたものや、數年前藝文に發表した自筆本とも異なる別本——に、

契沖の著書を買ひ集めて、物識にならうと思ふたれど、とかく疑ひのつく事多くて、道はかいかなんだを、江戸の宇萬伎といふ人の城番にお上りで、綾足が引合して弟子になりて古學といふ事の道が開ける、初めは綾足が敎へよといふについて學んだれど、とんと漢字の讀めぬわろで物問ふたびに口をもじ／＼として、其後にいふは幸ひ御城内へ宇萬伎といふ人が來てゐる、是を師にしてといふたが緣ちやつた。江戸人な

れば七年が間文通で物問ふ中に、五十そこらで京の城番に上つてお死にやつたのちは、よん所なしの獨學の遊びのみにて目があいたと思ふ。これあるかな、綾足が明和三四年頃京阪に遊び、講説の筵を開いた時、秋成も其徒の一人であつたのである。綾足は寶暦十三年九月に縣居門に入つて居るから宇萬伎とは同門の親みで、紹介人となつたと見える。綾足が秋成の師として物足りなかつたのは、さもあるべきであるが、どんと漢字のよめぬわろと罵倒した秋成は、果してどれ程の學力があつたのだらう。蜀山人のいふ所によれば、秋成の句讀の師は、英草紙の著者である都賀庭鐘だといふ。蒹葭堂や十時梅厓とも親交があつたから、多少漢學は出來たらうが、秋成の作つた漢文を見ると、和習澤山の變なもので、餘り大きな口のきける代物ではない。藤簍冊子には水無瀬川の一篇より他に見えぬが、是も自筆の原稿と比べると、餘程違つて居る、恐らく村瀬栲亭あたりが手を加へて、あれだけにしたのであらう。それでも彼は自らまづ

いと言ひながら、漢文を十數篇も書いて居るが、馬琴と秋成はこれが無い方が人助けであらう。

二人の交渉は是のみならず、綾足の西山物語を必ず傳はらざる書と罵倒して其實説を記して居る。西山物語は綾足が明和四年京都に遊んで、西八條村にあつた巷談に基いて結構したもので、當時之を仕組んだ傾城大和草紙といふ歌舞伎狂言もあつたといふ。物語の荒筋は京の西山の松尾に大森七郎といふ者あり、老母と妹かへ弟惣治の四人暮しなり。その從兄弟に同姓八郎あり、その子を宇須美といふ。七郎の母病氣の際、八郎は其子宇須美を介抱の手傳に遣はしおきたるに、宇須美私にかへと行末を契る。後八郎は西國大名に抱へられて祿を得、家富み榮え、七郎は家道次第に衰へて、兩家漸く疎く、或日七郎妹の爲に結婚の事を申込みしに、八郎拒みて應せず、七郎は妹を婚禮姿にて伴ひ行き、最後の談判を試みたるも、猶應せざるより、妹を殺して歸るといふが主筋にて、それに寶刀の祟、女

の幽靈などをあしらひたるが、文章の古典的なるのみにて、人情も能くあらはれず、興趣も乏しきものであるが、之に對抗して必傳を期した秋成の文も、秋成として出來よからず、思ふに晩年の書き放しにて、老懶推敲を經ざる爲であらう、秋成は才子なれば、文章は一氣呵成で多く苦心せざりしならんと思ひしに、その草稿を見れば、幾囘も書き改め、最初のものと最後のものとは全く面目を異にし、甚しきは初稿とは、殆ど別物の如き觀をなすものあり、篋簍冊子に載せた歌文なども原稿とは異同頗る多く、出版の際ひどく修正を施したと思はれるのである。

さて此文は秋成が歿前三年の作で、大森七郎のモデルたる渡邊源太に邂逅した興味に驅られて筆をとつたので、秋成の文に據れば八郎は本名團次、宇須美は右内である。　綾足は八郎を純然たる敵役とせずして、その結婚を拒みたる動機を卜者が不吉の緣談にて、兩人の爲に災厄あるべしといふ言を信じての事としたのは、悲劇の功果を減殺するだけで、甚だ要領

を得ぬやうに思はれるが、是は當時の事を直に書いた爲に、八郎をも全く强慾無道とするを憚る事情ありしならんと思ふ。綾足は尾鰭をつけて小說にする爲に、寶刀の由來や、武藝の仕合や、一向前後に緊密な關係のない事を作り設けて、却て散漫に流れ統一を缺いた感があるが、秋成の文も删潤鍛錬を施すべき餘地が多い、所詮この一篇だけでは、十分に二人の技倆を軒輊するに足らぬ、秋成の趣味文品の綾足に勝ることは勿論であるが、是を十分比較評隲せんには、同じく怪談を取扱つた綾足の漫遊記と秋成の雨月物語、前者の紀行文梅日記櫻日記卯花日記と後者の山霧記岩橋記などを見るべきである。

秋成の文は長篇であるが、從來全く世に出でぬものであるから左に全文を掲げる。

文化三年卯月十七日、けふふたら山の大神の祭こゝに行はせ給へり。

又こゝに一里ばかりなる山里の圓光寺といふ山寺に詣で侍る。閑室和尚と申す大德の、大神、駿河大納言と申せし昔に近くまゐりてつかふまつられしが、かばねを乞ひて、この御寺をひらき住ませ給ひしとぞ。木立いと深く茂りあひ、池の心廣く瀧の音さゝやかながらあはれ也。御宮居は高き岡の上にいはひ奉るといふに、人々に扶けられ、辛うじて上りつき見奉れば、この御あとにはかゝる假初づくりしたるもありけりと、却りてたふとくも拜まれさせ給へり。又室の御内にけふ御姿繪を懸けられたり、その左みぎに十六騎の御姿、ともに御いくさ立のかたちなり。左の方松平甚太郎殿、榊原式部大輔殿、大久保七郎右衛門殿、鳥井彥右衛門殿、大久保次右衛門殿、高木主水佐入道殿、服部半藏殿、蜂屋半之丞どの、右の方酒井左衛門尉殿、井伊兵部少輔殿、本多中務大輔殿、平岩七之介どの、鳥井四郎左衛門殿、內藤四郎左衛門殿、渡邊半藏どの、米津藤三入道殿なり。いづれの所の御軍立にや、恐れあれば問ひもとめず、

御おろし寺主かはらけ取りはじめ給へり。此座につゞへる人々の中に、はやうより參りたる翁あり、渡邊源太と申す齡六十を越え給へど、わらは顏してうるはしくおはす。酒好み給ひて物のたまへるけはひ、いさかはらか也。此翁の事一たびは世に響き聞えたれど、今は四十とせ過ぎたりし昔物語なれば、かくて世におはすとも知る人なく、我もそのかみこの目ざまし草を傳へ聞きし時、かゝるますら雄も世にはあんなるはと思ひしが、生きてけふたいめすることそ、齡といふものゝかたじけなきなれ。あないせし大澤はもとより知る人にて、この昔がたりを時時聞えられし。此事なまさかしき人の西山物語といふ事作りなしたるは、却りてよき人をあやまついたづら文なり。もろこしの演義小說こゝの物語ぶみ、その作れる人のさかし愚にて、世にとゞまると、やがての時あとなく亡ぶるにいちじるけれぱ、いふも更なりき。是もはやくに亡ぶべき數にぞありける。

さてこのまさし事おろそげにては書きとゞむまじけれど、いつはりならぬ語言して後長く傳へよとぞ思ふ、讀み見ん人繰言めきたるを推し量りして、又こと人に語りつげよかし。　此翁の又さきの翁の世よりにかありけん、この里にては門高く人のおぼえいみじかりし家の、時を失ひて貧しくおはしけり。　はらから多きが皆母刀自ひとりをおし戴きて、何事をも御爲には露たがはじとつかふまつられけり。　又同じ氏人の是は引きたがへて、山はやし田はた多くぬしつき、もとよりふりたる家なれば、富に誇りてなんありける。　をのこ子ひとりもてり、實樣にて惡しき行ひせず、家のわざ怠りなきを、父喜びて早くよき妻あはせてんと、こゝかしこ繭ごもりなるを擇ぶ程に、この貧しき家とは親しき族にてありければ、常にいきかひて遊ぶ程に、ますら雄の次のおと姫とみそかに物ら言ひかはしけり。　母の見あらはし給ひて示さるゝには、彼の家は昔々遠つ祖の住わかたせ給ひて、かたみに親しみ助け合ひていと

頼もしく、多くの年あまたの世を經たりし也。今の翁はさいはひ人にて、年々富み榮ゆるには、我方の貧しきをいみじがりつゝ、事のためしざもゝ大かたに改めて、疎き方にのみもてなす、このしわざは彼の人のみにあらず、世に榮えんずる人は、必ずしかひがみねぢけて鬼々しく、あだし人にもおのが心に叶へるには親しく問ひかはし、族の人には情しき事なく、却りて忌み憎まればやとし構へるぞかし。ましてこち〳〵に枝さしわかれつれど、根ざし一つの家なれば、是をよき事とはせで、いみじく恥與へつべきもの也。佐野の舟橋とく取り放ちて中絶えよかしといとこまやか也。御敎へかしこまり侍る、御ゆるしなき事し出でたる罪ゆるさせ給へと、泣く〳〵いひつれど、猶かたみに情しく忍び〳〵に逢ひにけり。今は敎へ傾ひて、強言せば淵にや沈まん木にやさがりなん、言ひ結ぶとも彼の人かたく許すまじ、只是が思ひやりばかりにとて、兄のますら雄召して、しか〳〵の事いかゞ思ふや、大島のからき渡り

して成ると成らざるを人していひよせよとなん。打畏まりて、御心のまに如く必ずうけ引くまじきに、懸橋せんは世の常ながら、もしいかさまに言はれて恥見んより、只さし向ひて言はんには、人ぎきうたてからまじといふ。いかさまにも計れ、とても喜ぶばかりの事あらじにはと云ふ。其夜かの家にいきて、忍びやかにかう〳〵の事なんある、もし御許しあらんには母喜ぶべし、若き者らが心も落ちゐん、貧しく育ちてよろづうひしくこそ侍れ、御宮仕への一つは怠るまじくといふ。翁打嘯きて、かたはら痛き事なり、氏こそ一すぢなれ、今は世を經て疎々しきのみかは、わらは人ひとりだに使はせず、菜摘み水汲ませ、落穂拾はせて生ひたたせし者の、わがうからやからの交りいかでせん、筋よろしくて貧しからぬ、又市人の富み榮えたる方々いひ入れ來たる此頃也。我子のさるいたづらごとせしはこゝに諫むべしとて、塵もつかず言ひ放つ。無禮なり、かくあらめとて、母のの給ひしよとて、強ひても言はず立ち歸り

て、思し給ふにたがはぬ夷心なり。をさなき者にはまづ聞えん、猶こまかに敎へ給へといふ。荒夷がなどうけ引くべき、かれ富みたりとておのが世よりにもあらず、吉祥天女をいつの世にか宿しまゐらせし、吾家には御姉君と申す黑暗天の入らせ給ひしにこそ、かうも衰へつらめ、あなうるさの富人やとて、爪彈きしておはす。

さて弟姬召して、しかつきなくいふ也、今はたゞ思ひ絕えよとなん。打泣きてのみあるを、若き心には世をせばく思ひなして、親のの給ふ事をさへ背くは非道なり、日々に疎からば物言はざりし昔にかへるべし、おのが心を心として親を苦しめ奉る罪重しかし、此世後の世猶いく世を恐しきもの等にさいなまれん事を思へよと。是にも答なく淚を袖におさへて立ちぬ。

かしこの翁も我子呼び出でゝ、親の心に叶ふまじき、常にも知りつべし、あの貧しき者らがために我門柱も朽ち倒るべし、只今たゞ改めよと、眼

かごくしくてさいなむ。御心にたがひし事いかでせんとて、そこ立ちて、おのが臥戸に入りて、心地あしとて物もくはず、衾打被きてけふ暮れぬ。翁外より歸りて、猶かくて在ると聞きて、戸あらゝかにやり放ち、このしれ者よ、あのかたなりのみ女と思ふか、都に出て人の家につぶねせば、飯炊ぎ庭門掃きなどして、あかゞり足ならんものよ、かゝるまちゝをさくわえて、つひの世にはこの里住だにえすまじき也、刀自我にばかり物いはせてもだしをるいと心なし、猶こまかに言ひ聞かせよと、罵る罵る、いはうじ立ち代りて、御心のきすぐに矯め直すまじきは、兼ねて知りたるにあらずや、いかばかり言ひ堅むとも、神の結ばせ給はぬはいかにせん、思ひくづをれて身のいたつきとならん、不孝の罪かろからず、とく出でゝ内外の事、田畑をも見巡れよとて、かしらをかゝへ上げて出だす。にぶくに立ちあがりて事ども行ふ。又かしこの弟姫は母のお前ににじり出て、度々教へ諭させ給ふ御ことわりの、骨身にしみとほり

て侍るを、たゞ鬼々しき心のおもひをもやさせて死ねと教ふるにぞ、胸つぶれてうつゝなく侍る。さらば尼になりて佛に仕へ奉らんと思へど、親兄の御心に背きて入るべき道にもあらじ。あはれ今までの命ぞとおぼしなして、御暇たまはらばや、只怨みつべきは男の心なり、親ゆるしなくは一たびはいづちにも逃げ隱れて、出で交はる世を待たんといひし、猶慰めかねて死は易し、ひたぶるに賴みてあれと言ひしは、きのふの事なり、我まづ死なん、いひがひなき人の音づれは待たじとて、深く思ひ定めたるつらつき也。母打守りておはせしが、せうと呼び出て、この子は物のつきたるぞ、されど犬猫のさまにてあらん彼が後の世いとほし、かの翁が心は常の事也、右内こそいふがひなけれ、養ふとも捨つるともいかにせよかし、つれ行きてかしこにて事行へよとて、思し定めてのたまへる。夜にまぎれては物のつきたりなど人いはん、あしたを待ちてとて、其夜は入り臥しぬ。

山深からねど世離れたる所なれば、鳴く虫のね松の嵐、たかむらの風に通ひていと悲しげなり。母は夜中過ぐるまで持佛の御前にたきくゆらせて、阿彌陀ぶちみそかに念じておはす。弟姫ひまなき涙の玉をや數へて明かすらん、いつも寢さむる鐘の音をけさはおそしと厨に出でて柴たきほこらす。鳥のやどり立ちゆく聲にせうとも起き出でゝ、うまいして心よしとて、烟くゆらせつゝ、母の御目さめばまた綠言もやあらん、とく行かん、かたちとりよそほへと云ふ。かしこまりぬとて、白き小袖に帶結び垂れ、かしら髮長きを解きすべらして、けはひよく打笑み、母の臥し給ふかたを伏しをがみして、いざと云ふ。母君え堪へず起き出でゝ、女はよき家に娶らるゝとも、又其家のをしへを戴きて、おのが心なる世はなきものなり、たま〳〵義と信との爲に刄にふし縊れなどするを、烈女とて誤り傳へたれど、思へ、それぞ身さいはひ無きものゝ、死に迫りたる男だましひにてこそ、これに敎へられて命おとしなん、貞操に

かへて孝忠にたがふ罪かろからず、かく歸るべからぬ迷ひ路に入りたるはいと苦しからめ、とく行けとて、涙かけず奥にゐざり入り給ふ。せうと、迷ひ路なれど一すぢなり。わがさす枝折につきてこよとて、さきに立ちて出てゆく。誰が家もまだ朝けの煙軒をもるゝ頃なり。かしこにはけさみおやの祭する日なりとて、法師迎へて誦經終らぬ所なり。かくて入り來たるを見て、家の内こぞりて怪しむ。せうと翁の前に居向へば、弟姫つと添ひてうしろにをる。何事すらん、いみじき物狂ひとかおぼすべし。けふ召しつれしは、此頃よりことわりさま〴〵云ひ聞かすれど、一たび立てし操に玉と碎けても死のまたきに習ふまじく、ただ暇たまへといふ、一人木にさがり淵に浮び出て、親兄の名を汚すべきには、彼の庭をたまひて死ね、翁許さずとも男のもと也といふに、すゝろぎ立つ。母のつき添ひゆきて見苦しからぬさまに、とり行へとあるを承りて我來たる也。右内いづこにぞ、親大事なりとて、人の子を犬猫と

や思ふ。こゝに出ていとまくるゝ由いひ聞かせよ、其後ともかうもせんと云ふ。翁あざ笑ひて、こゝなる者はをとつ日の夕暮にまぎれて失せぬ、必ずそこに隱されしと思ひて尋ねもせず、親の心ならぬ者家には入れじと思へば、我子も犬猫なり、歸りくとも養ふまじ。このふるまひ何事ぞ、俳優（わざをぎ）とかいふ者らがあやつり工むに習ひて我をこしらふるよ、とくいねと、聲荒くまなこ見張りて恐しげなり。打笑ひて、親に似ぬ木隱れの女々しさよ、たゞ放たれて我もとに來らば聟にせん、死にたりとも聞えぬにはいふかひなし。今はいかにするとかへり見れば、はた死なんとおぼして、いづち知らず出で給ふならん、かた時も後れてあらじ、御手給はらずは懷の物もていさぎよからん、願ふはこゝに只今といふ。其爲にこそ母の附き添ひ行けとはの給ひしなれ、こゝ汚さん、御許しなくともといふ。えせじと思ひて、いづれの所なりとも心にまかせよとといふ。さらば同じくは佛の御前にこそとて、花つみたきくゆらせたる

に向はす、手合せてうつくしう居り。せうとうしろに立ちて刀拔き放すを見て、今は驚き惑ひつゝ、これ支へんとするにおよび二つ疵つけるにおちて、しりへすゝみするひまに、弟姫のかうべは膝の上に落ちころぶ。家の人々誰もしかするやと、こゝかしこに這ひ隱る。せうとは首を取り上げて、佛の御前に奉りおきて座を改め、今はおほやけの御沙汰を待たんとて、面の色聊かも變らず、朝け乞ひて快くくひ給へり。

里長聞きつけて、わなゝく〳〵此有樣を見とゞめて、彼の家に聞ゆべく走り惑ひ入り見れば、母は窓のもとに棚機(たなはた)女(め)のわざしておはす。まだ露知らずこそ、源太殿こそ物狂ひとなりて、しか〴〵の事し出でたまへりき。此里のはじめより聞きも知らぬ事なり、いかゞし給ふらん、道理はさておきて、渡邊の家々は昔よりめいぼくあるを人たふとみて侍るを、いみじき疵もとめ出で給へりといひつゝ、慌て惑ひ立ちさうざく。母刀自機をもおりず、さてはしかつかふまつりつるとか、いかにせん不

便の事よとて、猶うつ箙の音亂れず。又是におち惑ひて、昔物語に渡邊といふつはものゝ鬼を捕へしといふ、室に此氏人は鬼にもまさりてお、はすよとて立ち去りぬ。

かくてやむべからねば、都のかしこ所へうたへ出でぬ。やがて召し給ひて、はじめ終問ひ明らめ給ひ、若くはやりたれど親のしかせよと許したることなり、母こそたけきに過ぎたれ。又團次は心強く見る〳〵殺させしは、我手してあやめしに同じ、刀許されておほやけに參りまかんづる者のことわり暗しとて、ともに人屋に繋がれたりける。月日經て二人とも罪ゆるされ家に歸りて、今はほまれを都田舍に聞えあげたり。團次の翁はこれ聞く人每に憎みあへたりけり。けふ此翁の人に交りて、いとうらやかに心よけなるを見れば、そのかみのありのすさび、實にしかこそ有りつらめと思ふ、猶くはしき事は漏らしつべし。老がたゞたゞしき筆には又も瑾つけやすらん、さるはあぢきなかるさかしら言

なりけり。けふは又下の御社の御影もり奉りて、こゝ過ぎさせ給ふ日なり。還幸(くわんかう)にいきあひ奉りて、道芝にぬかをつき立てゝ拜みたいまつる。うたつかさの四位五位あまた、手綱控へて乘りつれたり。あを馬に絹笠おひかづかせたる、是なん神の御影なりと申す、御あとへは神ごもたち四位五位鞍鐙きら〳〵しく、あつふさは入日に輝き合ひて、げにも紅(くれなゐ)こそ色のつかさなれと、いみじく覺え侍れ。昔も拜みつれど、けふこの山里にいきあひ奉るがめづらかなり。目のかぎり見渡されて、廣き野に滿ち〳〵て立ちつらなりゆく。神代の事もとはかゝるに猶まさりたらめど、今は繪そらごと也、是は。

瑞龍山中隱者　七十餘齋書

傾城倭莊子と棧道物語

藝文本年一月號に「綾足と秋成」と題して二人の關係を叙述し、綾足の西山

物語と同材料を取扱うた秋成の文章を紹介した時に、この巷談を歌舞伎に仕組んだ傾城大和草紙といふ正本があると述べておいたが、是は物之本作者部類の頭註に見える小津桂窓の說に據つたので、實物を見ての上ではなかつた。然るに頃日坊間より傾城倭荘子といふ半紙本六冊ものを發見して、その實否を糺すことを得た。

この書の出版は文化十五年正月で、狂畫堂淺山芦國の似顔畫を入れた頗る詳密な脚本である。當時大阪で松好齋、春好齋、芦國などの畫を入れた脚本の出版が流行した風潮に伴うて、世に現れたものゝ一つである。

因にいふ芦國は大阪の人、俗稱布屋忠三郎といふ、須賀蘭林齋に從ひ畫法を學び蘭英齋と號す、後に芦國と改め、浮世繪を專らとし、俳優今昔物語の畫作を始め、春景淺茅原、伊呂波國字忠臣藏、敵討巖流島等正本の挿畫多し、文政元年五月五日歿す、年四十餘。

この脚本は五段より成つた御家騷動の極めてこみ入つた筋立で、その梗

概を紹介することは困難であるが、例の巷談を取入れたのは、その四段目であるから、そこだけをざつといへば、北畠家の家老近藤軍次兵衛、妾腹の子雷八を殿の胤と僞りて育て上げ、行く〳〵主家を押領せんと謀る、相家老越野官太夫これを悟り、それとなく雷八を他家へ養子に遣はしたる後、軍次兵衛を國外に追放す、軍次兵衛嫡腹の一子佐國をひきつれ大和に行きて大庄屋となり、專ら貨殖に耽る。越野家は官太夫の死後、その嫡子勘左衛門浪人してこれも大和に趣き、母檜垣妹小槙と共に軍次兵衛の隣村に詫住居をなす。然るに小槙は軍次兵衛の悴佐國と私に惡緣を結びしより、兄勘左衛門は母の懇請もだし難く、節を屈して妹を引連れ、軍次兵衛の許に至り辭を低くして佐國の妻とせんことを乞ひしも、軍次兵衛惡罵嘲笑、傲然として聞かず、勘左衛門今は是までなりと、涙を揮つて妹を斬ること、綾足秋成の記する所と同樣であるが、脚本の方では小槙の死と同時に佐國も自殺し、軍次兵衛の悔悟となり、相思の男女の魂魄胡蝶となりて

花園に舞ひ樂む一節を設けたのは、佐國といふ名に因みたる設色にして又倭莊子の外題の因つていづる所以である。 佐國の自殺は事實には背くが、脚本としてはこの方が穩當な取扱で、同情をひき易い。

今一つ秋成物と脚本との關係について言ふべき事あり、西澤一鳳の脚色餘錄初編上の卷に、小說棧物語の一話と題する文に曰く

水滸の棗商人の條を原として、上田秋成が作の小說に棧物語（板本五冊）と云有、是には若輩の旅人八九人連にて、岐蘇の奥山をわけ行に、一人の僧にあひ、名所古跡を問ひなどする內、夕陽に及びければ、僧の案內によつて山寺に一夜を明す、其僧精進酒ながら客にすゝむ、此酒蒙汁藥（しびれぐすり）入有て、不殘賊の手に死す、一人の壯士辛うじて其場を遁れ出、谷を越遙向ふに燈火ある孤家にたどり行、身の危難を語る、此家の老女も彼山賊の黨にて、再び爰にて賊に出合と、宋公明が流罪の旅中の艱難に混じて作せし物也、寛政十一未年九月、角の芝居にて近松德叟、此一話を作して紅楓秋葉

話二段目に仕組、月本始之助李冠（二代目嵐吉）同じ年比の侍七人連にて山路に迷ふ、文五郎の僧（矢馬さも云俳名美男）山寺へ連歸つて、毒酒を飲せ六人の若侍を殺す、山賊の張本潭石（本名玉島幸兵衛）奥山（爲十郎なり）數多の手下を隨へ財を奪ふ、始之助一人は辛うじて寺の破風口へ遁れ出、蔦葛を傳ひて谷底に落る、此道具せり上となり、本舞臺へ孤家をせり出す、藁屋根一面に蔦かづらまつはらせ、枝折戸の下手は谷川にて筧の水、反古張の障子正面に古き大佛壇をすへ、此家の老女漁江（三枡徳次郎）娘桂に巴江（芳澤いろは）にて、苧桶糸車を出し、宵邊（よなべ）仕事の體、花道中程へ始之助亂髮、著物も所々破れ、谷底へ轉び落たる體にてせり上る、寶樹寺の絶頂より、落入し此谷底、所詮一命はなきと思ひしに、滴る雨露に咽を潤し、不思議に一命助りしも、秋葉權現の加護なるかと、刀を杖に孤家へたどりつき一宿を賴む、老母快く留て酒を買に行跡に娘始之助に惚て、此家も山賊の寄場なれば、我を縛りて早く此場を遁るべしと進む、始之助も娘の懇志を悅びて、末は夫婦と契約して外面

へ迯去る、老母かへつて、旅人は何國へと問ふ、娘母に樣子を告て、親子共潭石に養はれし恩有ゆへ、ぜひなく惡事に組すると愁歎の內、佛壇の扉を內よりひらき、拔道より忍び入りし賊首潭石委細を聞取、恩しらずの老婆めと手込にし、娘桂を妾とせんと云、母諫め兼て自害し、娘を谷川の外へ迯す、始之助は始終を聞、蔦葛を切れば、藁屋根落て孤家碎くる、娘桂と始之助は危き場所を西東隔てゝ遁れ去るを、此一段の幕と仕組あり、此狂言大に評よく、後京都へ持行、けいせい棧物語と外題して、小說を潤色せしを知らしむ、棧物語に淺草の孤家石の枕と混じてせしも、舊は水滸傳の條より出で、小說歌舞伎と變化せし也。

此一文は大に世人を惑はし、秋成に棧物語といふ作あるが如く考ふる人もあれど、是は全く一鳳の思ひ違ひにて、棧道物語五冊は江戶の作者雲府館天步の作で、寬政十年の版である。　秋成と同時代で、且棧道物語、邂逅物語など、いづれも雨月物語風の短篇集である所から混同したのであらう。

脚本の秋葉話は繪本棧物語と外題を改め、松好齋の似顔畫を插み六冊本として、倭莊子と同樣のシリーズで出版されて居る。

尙添ていふ、同じく一鳳の傳奇作書初編下卷、近松德叟が傳中に、「紅楓秋葉話是は其一年前棧物語とて小說の中に云々（脚色餘錄と同意なれば略す）夫を種として脚色せし者也、後京都にてせし時は、けいせい棧物語と外題に賦しけり、けいせい花山崎俠競廓日記芝叟が寶油郎けいせい筥傳授は中入に仕組、三つ目筑紫權六チギリンタイの齣は上田餘齋が作の小說秋雨物語の中に有一話を取組り」とあり。筑紫權六の齣は如何なる仕組か、いまだ其脚本を見ざれば、少しく斷言し難きも八九分までは寛政十一年正月出版流霞窓主人江戸の人の著秋雨物語四册物短篇集客逢難の一章に據りしものと思ふ。秋成には春雨物語ありて秋雨物語なし。秋成は生田傳八郎の遺孤なりとの浮說を傳へて、世を惑はしたのも一鳳なるが、それは本人も虛實の程を知らずとことわりたれば罪淺し、棧道物語や秋雨物語を秋成の作と言

ひ切りたるは、粗忽の罪免れがたし。倭莊子の事をいふついでに、秋成の著述についての誤傳を正しおく。（大正七年四月）

秋成雜考

怪談とのゐ袋（明和五年正月刊、皇京臥仙子文坡編）卷四、伏見桃山亡靈の行列の事といふ一章あり、其文に曰く、

明和二年の事なりき、彌生中比山城の國伏見の桃山に花ざかりなりとて友とする人一人二人ともなふて桃山にいたり、終日桃の花盛をめでゝ宇治見臺に酒をくみ、興に乘じて日のくるゝを忘れ、京師の見物人もやうやうにかへりつくる時、さらばと立て京をさして歸る、いかゞしたりけむ、道にふみ迷ひてあちかこちかと徘徊する折柄、はるかのむかうより提灯たいまつ星の如くかゞやかし來るものあり、定めて大名高家のいづくへぞ行給ふならんと、立とゞまり見ゐたるに、程なく近よるまゝ

前驅の武士きびしくいましめ、殿下のお通りぞ下にをれよとよばはつてゆく、驚き平地にひざまづきぬ、程なく二行に列をたてゝしと〳〵とゆく、供奉の人々皆衣冠びゝしく、御輿のあとは烏帽子狩衣騎馬うちまじりておびたゞし、夜の事なればわかちがたき事あるべきに、その顔ばせ衣紋までこと〴〵くよく見えたり、輿の中なるは年の比はたちばかり、束帯にて手に丸き物を持て見入給ふ體なり、扨一時ばかりあつて、おさ人とおぼしき人乗物にて供人あまたの内壹人の袖をひき、いかなる御方にて渡らせ給ふと尋ねければ、豊臣秀次公にてましますと答へて皆々行過ぬ、三人は茫然と御跡を見やり立居たるに、東の空しろ〴〵とあけたれば、道あるまゝにたどりければ、佛國寺の前に出しとその人の語りし

これにつき思ひ合さるは、秋成の雨月物語佛法僧の條なる、高野にて夢然親子が秀次の靈に逢ふ話なり、雨月物語は明和五年三月の作なれば、秋成

も亦この桃山亡靈行列の風說を聞込みて、よき種ござんなれ、風說のまゝにては働なしと、高野山に持込みて此一篇を構へしにあらじか、時節を三月の末としたる、行列の樣といひ、夢然が「京人に語りしをそがまゝにしるしぬ」と結びたるなど、とのゐ袋の記事とよく叶へり、元祿以後多くに出でたる怪談物は、全く作者の想像に成るもの少くして多少の出據あり、隨つて共通の材料乏しからず、現に雨月の「夢應の鯉魚」の如きも、一度都の錦の「御前お伽ぼうこ」に用ゐられたるものなり。

蜀山人が藤簍冊子の後序に「辛酉祇役浪華、得見餘齋翁、邂逅相遇、願適談劇、翁手書歌若文數篇見贈、吉光片羽、可以爲儀、意在筆先、如不覺其難者、然甲子有崎陽之命、倉皇上道、道過浪華再見翁」の文字あり、辛酉は享和元年、甲子は文化元年なり、富岡桃華君所藏の俗牘此後序の由來を見るに最もたよりあり。

いにしいぬのとしみやこ百萬遍とかやの門邊に手をわかちにしより、

その百八の數とりなる米算紙の數々くりかへしながめつるを、こたびはからずもしらぬ火のつくしにゆくべき事ありて、蘆がちるなにはのやどりに、玉笥ふたゝびあひ見つる事のうれしさを何にかつゝまん、貧吏の旅よそひにきあまりぬべく

○昇道人のまめやかにものし給ふ御集の後序、やう〳〵つゞり置候へども いまだ稿を脱せず、此次の便につけて上可申候、但文中に思召も候はゞ無御遠慮可仰下候、少々和文を論じ候處ひがおぼえも無覺束、いづれ此月の末の便に上可申候、若亦思召も無御座候はゞ、御集の紙のたけを御記し被下、その上にて板下に淨寫いたし上可申候

○罪なくて支配所の手すさみに岩原紙さたはぶれに名づけ候紙御覽可被下候、御一笑の餘り一言の筆を染られ候はゞ此紙も光をますす可候

十月十日　　　　　　覃　拜

上田翁　几下

「少々和文を論じ候」とあるは、「若夫古今集序之駢儷也、三鑑之典實也、勢語之簡潔也、源氏之繁富也、可謂金聲而玉振之也者矣」云々とあるを指していふ也。

さきに余の秋成遺文を編集せし後、次の二章を發見したれば茲に補足す、遺文中に掲げし雛祭の詞は、この歳之七賦中の一節なることを知り得たり、三河の人石川三碧氏の所藏にて、香川景嗣頼三樹の序跋をそへて一巻とせり。

女誡服膺は蘆庵門の田山敬儀の著にして、一名を女誡國字解といひ、文化二年の刊行なり。

あらたまの年立ちかへる雲井わたりの御ほぎことをはじめて、春日野まがふ若菜つむより絳桃碧桃の下水に流るゝ盃のいにしへを汲み、藥玉のおのづからなるためしをかけ、栲はたちゞ姫の織物のたくみを乞ふ祭の席に、上元の燈火の中元にたがひ來れるをあげつらひ、そが菊の

今めかしきよりは山路なる岩根の花の露をとめ、冬至のもちひつきつきに年のはてのゆたけきよろこびまで、みやびやかにかいつらねられたる、いとめでたからずや、しかれば此の巻ををさむる審廬ぬしは本より、一わたり見む人も、はた端書するおのれも、此翁の言の葉のごとちよろづ代と數へてもみむ齡たもちてしがなと思はざらめかも

瑞龍山隣村處士

香川景嗣

六十五齡而誌

年のなゝふ

年たちかへるあしたの空のけはひなん、きのふに變りてきはだ〳〵しきを何にかはたとへむ、人の御うへにては上達めわらはの初もとゆひして冠裝束いみじく、ひたひ齒黒けざやかに大人び給へゝにやさいふ人のあれど、それは思ひかけまじき御あたりの事なればおきぬべし、山々

の霞をかしう曳渡して、里の門々の戸ざし靜なるに、雪の中なる花のありかもとめ顔に、鶯の初音囀りたるにほひか也、柳が枝わかきは烟のやうにて空に立靡き、芽のつぶ〳〵とはり出たるもなつかし、若菜つみにと友かいつらねてゆけば、春日野ならぬ野やはある。　根芹とづるうすら氷、子日の松に雪のむらぎえして猶寒き比ほひは、埋火のもとに親はらから里におりたるむすめなど居めぐりて、何くれと物語しつゝいとにぎはしきよそめも睦じう樂しけれ

春雨やゝはるゝ空に百千とり〴〵の聲、ほがら〳〵と草木の青く立榮ゆる中に、櫻こそ芽のふくらかに末枝はつ〳〵も匂ひ出たる、いとこそ嬉しけれ、桃の花ひとへは麗はしきを、あら染とて髭むつかしげに生ひたる仕丁等が、ふつゝかにふりはへたらん袖の色にや目馴れさせ給ふらん、唐土人の此花の林のしたゆく水に舟浮べ、杯やり巡らせつゝせし

遊を、こゝにも仁賢の玩び初め給ひしより、代々のためしの如になんありしとか、ひゝな遊昔はうへわらべのあまがつに手與まいらせよなど、いつとなき御なぐさなりしを、たが家の風よりや祭りそめけん、御臺ささげ瓶子に桃柳さし加へ、蓬のもちひいとをかしう作りなしたる、けふ母子なしとなをさなき人の御爲にいひそ、時は彌生の三日四日の空のけしきなん、いとのどけき頃の遊なりき

五月五日きそひ狩とて、物の部のさつ矢たばさみ駒なめて、野山の茂きを分け入る、いとめざましな、さを鹿の隱れかねて飛びかけるを追ひつめ、射伏せられていと情なきを、藥獵とて大君の御めぐみのかしこき一つ也、續命縷組の糸の色こきませて、たかなどにもにほはせ、時しる花々折添へて、祭の葵かつらとともに忘れざまにて、茱萸の帒にかけ改め給ふとや、色香こそさめにたれ、いと宮びかにて民草のあたりにはまねぶ

べくもあらず、軒深くあやめあふち門々の旗さしもの風に鳴らさせ、日影にきら〱しくて賑はしき、玉うちとて加茂堤の西東の岸に人たちなみ、河づらを礫打越すは、めざすかたきの時にとりてやある、さる騒しきあたりにはおのが五月なりとも時鳥の囀きも渡らじを、外のへの野邊にいほり住してあらん人の、をちかへる聲を面杖して聞きふけりたらん、いとものごけかりける

神代に栲はたちゞ姫と申して天照大神のおほんぞ織りて奉らせしを始に、なべてをみなのまめ業としもなりんたる、あまの河邊につま待つ星の契とかやといふ物語にとりまじへて、ふん月七日の夜の祭とするよ、ぬさのかけ糸梶の葉の手習草はかなげに、このわざの巧ならんを乞ひ願ふなりけり、又中の五日の夜をはじめに、軒毎に燈あか〱と月影に照しかはしつゝ、花鳥のかたちをかしう作らするに、人のたゝずみ賑

はしき、是はもろこしの上元の燈とて、む月の中の五日の夜の玩びなるを、こゝには中元の今宵揭げたり、是をば孟蘭盆會とてなき人奠るたむけわざに取違へたりな、よろづの事あしきもよきにと取りなすを、こはいかにぞやとも云ふ人のありき

菊は今の都となりてもろこしより渡せしが、承和の帝の殊にめでさせ給ひしなめに、人のたくみになむ千種には成んぬと、いにしへにも是に似るものなききようらさなるを、彭祖といふ人に見せざりし、いとくちをし、したがれをさへかぐはしく、此流をくめば千とせの齡延ぶるいみじきみ藥とぞ云ふ、是も九日の御賀に取りはやし給ふは、唐ざまにならはせ給ふ也、きせ綿とて花の色々に染めなして霜を傷ませる、こは上局達の御手ず(さ)び也、山路の岩根によそほひ咲きたらんがなかるべき花こそ見るめなけれ

冬至といふ日霜月の望の頃にありて一陽來復すと、明經記傳の家々、法師のむろの戸に至るまで、喜びすと酒くみもちひ煮て遊び樂しむを、或物識の陰陽といふ事もろこし人の諺ごとにて、是もて萬をことわり盡さまくするよ、月日の惠みのあからさまなる外は、かたちなき物をあなしれ〴〵しといへり、むべ〳〵しくは聞ゆれど、春夏秋冬といふも寒暑溫凉のあだし名也とはいはざる、心とて身にそひたるも誰とう出てその形は見とゞめし、喜怒哀樂のあるじをいかで形いかにとあなぐりとめざる、さるこちたき事はいはであれかし、喜びする家にはさいはひ來たるといふ、來たらずしもあらじ、暇あらばよき友招きて遊ばむものをとおのれは思ふ也

數ふれば吾身につもる年月を送り迎ふと何いそぐらん

此歌の心ことわりめきたるを、家富み榮え子うまごひとりも失はで、前に居なみさせたらん人は、かけても思はずやあらむ、物は皆新し(き)ぞよき、人は只ふりぬるのみぞ貴かりける、夏冬しらず裘著たる山人もはてばていかならむ、再び世には出こずぞある、契之といふ頭陀法師の李唐の末に市町に出て物乞しといふが、宋の代に又あらはれてあるきしを見しといふ物語につきて、彼土こゝにもめでたき神の數に祭りぬるは、たゞ齡ばかり心ゆかぬものゝあらねばなるべし、年の暮れゆくさま老も若きも喜びはすなりけり、門毎に松立なみしりくめ繩ゆゝしく引渡したるに、米薪こぼるゝばかり積つゞけて車ながら曳入れさする、今の時の人とよすめもいと賑はしき、きぬ配りとて色あひ花々しくてうじたるを、ぞう(そカ)の親しき疎きまゝに送りかはす、誰かは羨まざらむ、倭姫の命の世記といふふみを讀みて見れば、鶴を大年の神といはゝせ給ひし、此眞鳥穂長の稻をくひもちて、酒賣おほん神のみとしろ田の湯種にた

いまつりしを、あかぬ喜びにことほぎし給へるなめに、千とせの齡は知らずかし、たゞ幾ひさのためしに繪にも寫して玩ぶ事となりぬ、さてめでたきてふ事は千とせ八千歳此國もろこし夷の邦々まで聲にあげて歌ふ事、人の心はおよそ同じかりけり

歌に

かぎりなくよはひ保ちて春秋を
　千々よろづ代と數へても見む
　　人々算へても看よかしな

瑞龍山中無腸隱者

七十三齡而再寫

曰首春曰上巳曰端午曰七月曰重陽曰冬至曰臘、無腸老人以國辭賦之、名曰歲之七賦、簡明流麗、風韻有餘、間論和漢俚俗之謬、亦閑々說去、不見張目、夸大之態、爲甚有味、世人優遊此七節中而不自知、又何暇一々賦之、三樹賴

醇識

女誡服膺後序

道に法あり、法に敎あり、さとすといましむはをしへのえだ葉なり、これをきゝ知りて守るは、をみなのをみなしき也、おもてには秋の葉の色ににほひ、なよ竹のなよびてあらんにも、うらには松かしはのかたきみさををたてよかし、いにしへにほまれある中にも、親をとこのかなしき世にしたがひて、刄にふし水に入したぐひは、をみなにして男心したる、されどいかにせん、身さいはひなさが、ついのためしどもを、常に心におくべくもあらずと思ふを、春の野に老がつみつること草の、ちりにぞあらば道に捨てよかしと云、文化二年二月、需めのまゝにしるしぬ

七十二翁餘齋

自筆本膽大小心錄

上田秋成の隨筆膽大小心錄の一部分は、明治三十八年二月及び四月の帝國文學に亡友藤岡東圃によつて始めて世に紹介され、次で大正二年十月國書刊行會出版の新燕石十種中に其全部三卷を收錄されたが、いづれも傳寫の誤多くして意義の不明なる箇所が少くない。今回余の見ることを得た自筆本は、大阪の富田仙助氏の珍藏で、分量は少いが文章に大異同あり、且流布の三卷本に洩れた所もあり、かた〴〵珍しいものであるから改めて玆に紹介する事とした。

(一)(二)(三)(四)(七)(十一)(十二)(十四)の八章は流布本にも見えるが、文章は餘程ちがつて居る。例へば(三)の文でも流布本では只「蒿蹊云」となつて居るが、自筆本には「蒿蹊と云賣ものが云」となつて、「商人歌合」の皮肉が一層適切に利いてくる、又末の「常につば吐ちらして物よくいふ人もえこたへず云

々」と、蒿蹊が平常の面目を想見せしめる所も流布本には只「默して答へず」とのみ、あつさりと書いてある。(七)も風韻自慢から以下の文は全く流布本に見えぬ、(十二)も「儒者論語醫者傷寒論」以下の毒語は同じく出て居らぬ、但(十四)の京を不義國といつた「或儒者」とあるを、流布本には村瀨栲亭と明言してある。

「秋の雲風にたゞよひ」の歌は、餘程得意のものと見えて、秋成が曾根好忠の毎月集に倣つてよんだ三百六十首の中から、九十首ばかり選び出して自賛自評を加へた歌集にも、まつ先に此歌を出して、書名をも秋雲什と命じて居る。この歌は萬葉十の「秋風の吹き漂はす白雲はたなばたつめの天津領巾かも」からヒントを得たのであらうと思はれる。人丸の事は眞面目に研究した歌聖傳といふ著述がある。二書いづれも自筆の稿本を水落露石氏が所藏して居られる。

おもふに流布の膽大小心錄は、秋成が老後興に乘じて、時々書きちらした

斷片を、羽倉信光が取纏めて淸書したのであるから、それが必ずしも全部といふ譯でもなく、又會心の部分は何遍も出たらめに手習半分書きちらしたので、同じ意味の文章にも、互に出入や繁簡があるのであらう。自筆本も隨分奔放な書き方で、讀みにくい處も可也多く、文章の連絡も不十分に思はれるが、そこに蔽ふべからざる氣が咄々人に迫る概がある。句切と濁點とを施した外、文字假名づかひは一切原文のまゝにした。

大正三年八月十三日

膽大小心錄

書おきの事

歌よむといふ人都なれば多し、皆口まねのえまねぬ也、師家も我に來らさんとて、そなたは貫之の口ぶり也、定家卿のたくみによく叶へりといふに、さてはとおもふが貫之にも定家に〔も〕口まねばかりもえせぬぞかし(一)

蘆庵われに意見して云、何わざもせであるはいとほしき也、人の歌なをして世に交りたまへ、そなたはかたは心な人じや、たゞ人をかしこくしてやると思ふておしやる、こたふるは、人をあはうにするのではないかといふたれば、いかりにらみて、其ことわりいかにと、こたふ、人は親のたま物ぞ、世のわたらいかしこきも、しらぬ事學べば必おろかになりだし、すぐれてよくするは天稟にて、千人に一人なるべしといひしかば、長き息をつきて返答なかりし(二)

蒿蹊と云賣ものが云、職人うた合久しく絶たり、そなたとつがふてよまばやといふ、よむはいと安きほどの事也、題號をかへてならばといひしかば、何と題せんと問、商人歌あはせとしたしといひしかば、常につば吐らして物よくいふ人も、えこたへずてありし也(三)

かなづかひと云事、もとなき物なりしといふ事かいてあらはせしに、江戸の春海が、そなたは學文に私する人じやといひこせしかば、そなたは師の

いふたとをりをいつまでも守る歟、私とは才能のあざ名也、むかしよりわたくしせぬ人、智者にも才士にもなし、堯が舜にゆづり、又禹にゆづるもよい事ながら私也、三隅の網の一隅を我に來たれといひしが、私のはじまりなるべし、殷の後は宋一國にて姫氏四十二國とは、なんと私の親玉ではない歟、其餘は云にたらず、東家の久兵衛どのも聖敎を立て、自然の人情にたがふて、神口の口にはやりの中士をうばゝれしを始にて、指を折れば事のなるとならぬところそあれ、わたくし心のない人はおじやらぬ、ましで天下をとつて代るはわたくし也、財をぬす(め)ば賊也、國をぬすめば侯となる、侯の心に仁義ありとは、ぬす人たけ〲しい私ごと也、口がようてもしおほせぬ人は運とやらのないわたくし人也、そなたの師の眞淵も、たんと私はいはれたぞといふてやつたれば、御もつとものみに二たびはえいはず、陰ではいろ〱とそしるとぞ

大佛の柱は已にやけにけりせゝる蟻どもたんとわいたりといふて、あい

手にはならぬ㈣

韓退之が前のほまれあらんよりは後のそしりをといはれたは、文章の親玉じやと東坡がいふて、唐三百年に文章なし、李愿が盤谷にかへる序にいたりて、我筆とりてはこれを思ひて口ふたがる、あゝまゝよ古今にきやつを獨歩さしてやれと云しは粋言ながら前のほまれも後の訾も、みなひいき／＼の私也、孔夫子が出て、われがよいとおしやつたらしらず、人にはちともほめられたいと思ふは、十すぢもたらぬ狙ごのぢや㈤

秋の雲風にたゞよひ行みれば大はた小幡いもがたく領巾、といふ歌をよんだはと人にかたりしかば、都鄙の歌よみの皆あしく云よし、遠くの人はしらず、我ところへ來る人の中には、たれもこの歌の味のしれる人がない、古體じやの今體じやのと、又人のいふは中世の古いところじやといはれると、口まねばかりの狙ごののみ、腹になんにもないから、此うたの味がしれてたまるものか、小家かり又小庵をかりて、いつかぞの商ひせらるゝ歌

よみの、命の中にはしれまい事じや、さしてよいといふのではない、古意にて古體にて等類ないかと思ふたのなり、秋風吹白雲飛と云を、ちとおもしろがらせたのみ、調のたかき事は自まんじや(六)翁わかき時は俳かいとかいふ事を習て、凡四十ちかくまで是よりほかの遊びはなかりし、其時は師の口まねせん、何がしのやうにはえなろまいとのみ思しに、四十にならん頃に人のいふは、歌よめはいかいはいやしくといひしかど、歌はお公家さまのまねが出來るものかといひしかど、すゝめるにまかせて、しものれんせい殿のお點をこひしに、そなたはよい口じやとおほめなされて、物とへばしほらしい事よく問ふ、いつぞは考へておかうとおしやつて、ついに御返答なし、契沖の著述をかいあつめて、獨學のあいだ又二三年、うま伎といふ人にあいて、師とかしづきたれど、江戸の人故七年があいだに、文通でとふた事わづかなり、此師も五十過てはやく世をさらせしかば、二(三たびカ)獨學にてそれも市井の醫の奔走にいとまなけ

れば、こゝろにおもふたばつかりじや、いせの宣長といふ人の著述を、人のつてにてかりしが、是も心にたがふ事多し、おもへば〳〵歌も文も云たい事いふて遊ぶがよしと心がついて、師家といふわろ達のいつはり言もしれて、これから誰にも交はるはいらぬ事と一決したりし、師といふ人もありしかど、ないに同じく、又はいかいをかへりみれば、貞德も宗因も桃青も口まへのみの者ども也、古人は心のまゝにてありしも、うつせどうつらぬが人の性質なり、濁り江の水草しげらせて、いつ月がうつらうぞ、下手な口は親のたま物、しよ事がない、心はおのが物なれば、人丸もつらゆき定家後京極も、よい事はまねんで、わるい所は捨小舟、ろがいなしにこぐじやてや、七十五さいの今日にいたりては、友はすつきりとなし、されど歌よみの三松長太郎が問よれど、やすんでいなしやれじや、獨學孤陋今はとんと師匠なしの名なし草、花がさいてもたれもつまぬぞ、師のすじに入て又其すじを出て、よからぬ所を見てすつるほどの氣前がなけりや、なんでも出來る

事でなし、師を學べば師の半徳を滅すと、その半とくはどれほどであろ、獨學の心ざし立ては跡をかへり見れば、高い山から谷ぞこ見れば、師匠かわいや恥さらすじや、食祿も藝技も天禀とおやのたま物なれば、下手じやとてしや(う脱カ)事がない、梅に鶯、道成寺、三輪おさだまりの事では、風韻といふ事にはいたられぬ、風韵といふ事うまれ付と習ふていたるとあり、習ふていたつた故、さてもしんどい事じやあつた、儒者も今の世のは文章詩作の商人で、三條通りの絹やの八兵衛どのが、風韻なしに男ぶりをつくるのじや、里冠歌七を見ねど見るやうな〳〵、世を見れば酒のんで、餅くふて、こい茶ねぶつて風流じやと覺つた人のみ也、ある人さめてのあんかけは、きらいもあろといひし、是小天地の確言也、女郎かいに問て見た事あり、今ではなんといふのが第一じやといふたら、おのが買のが第一じやと是も確言也(三)

美人はもとより鼻欠もめくらも、男だかへずに正月はせぬ也、首のいるは

はじめのみ也、心があふては首はどふでも大事ない(八)金といふ奴はさても〱悪人じや、たんとつむほどつみたくなつて、人のもかちおとす心になつて、さて又くづれてしまうじや、奔走日夜やむ事なしといふたはきこえた、金が敵といへど、錢がかたきとはいはぬ、錢は善じやと注すべし、一文から一貫まで、毎日〱はしりあるいて、丁人も士も乞食も出家も分相應に助けらるゝ也、錢さへあれば金はいらぬものじや、四文せんの用考てはことがまし、時々一文につかふ人是は善根じや、錢の通用天下第一の寶也、魯褒が錢神ろんは貧乏ひがみのすね言じや、いつも月夜にこめの飯、へらぬ物ならせに百文、其うちは月夜はなくてもすむ(九)聖人と云東どのなりの久兵衛どのも、ちよといつはらるゝ事があつた、江河へ大きな物が流れて來たをとり上て見たら、外は青うて中はしろい(うノ誤カ)て又赤うてとあるを、是萍實也とは出たらめじや、西瓜としらぬさきの事よといふた人あり、家語の孔子と左傳の孔子と論語のと、人がちが

ふやうなり、どうである、彼萍實の出たらめを學んだ人のいつはりは、からべたなるべし(十)

人丸はさつてもやつし形ぢや、萬葉集の中にたんとある歌が大かたが女房ぐるいじや、京にも田舍にも遠國にもくいさがしだらけで、五十にたらいでしぬる時、みやこのによんぼが〳〵と泣てしなれたは、まことに若い時のこゝろじやてい、四十こして陰心が陽心にかはりても、腎虛火動の火とまる樣じや、白髮の老人のすがたはいふにもたらぬあだ夢じや、火止ルといふて火事のゆかぬに信心せいと云て祭る人もあり、又火にたゝるといふ人もあり、腎虛火動の火がたゝるなるべし、家持卿はさても〳〵人丸よりは男ぶりよろし、人がらもよろし、女がたんとほれた事じや、業平を姪首と云は、中將どのゝふしあはせ也、高子の君と述子の君との外には、惡名もないに藤原家にいまれての東くだりじや、筆のまはる人がいろ〳〵とやつし形にして書たるよ、源氏物がたりになりひらの名をやくたすらん

とは書れたり(十一)

陶淵明がおしやるは、書をよんでその書の大旨をこゝろへたら、跡はくだくだしくすますは愚じやといはれた、無絃の琴で味はひてたのしまれたと同般じや、今の世の人はえこせぬせんさくして、注解をつとむるは愚人じや、儒者ろん語、醫さは傷寒ろん、歌よみは萬葉集、無絃の琴よりはよりかけた糸で、よしのゝ山を雪かと見れば、五尺いよこの手ぬぐひと彈ならひから、何じやませな事じや(十二)

歌はちと習ふたれど、書は惡七兵衛のめくら書じや、ある人何によると問はれた故、草隷のはじまりを書のじやとこたへた、羲之も、献之も顔魯公も東坡も米元章も、かしこまつた事はいやじやといふた(十三)

田舎のものゝ我國にたま〳〵よい事があると、日本一ちやとほこる、此くせは京の人にあるぞ、京によい事が一多いかはりに、いつちわるい事がある、十六年前に京に住うと思ふ時に、ある儒さの京は不義國じやほどにと

示された、今一名貧國の不義國といふべし、不義は貧からの事、太平の後百餘年あまりに、金がすつきりとない國となりて、不義に落入たのじや、貧をしみといふ事は京の人が第一ばんじや（十四）

食菜の好みは京の人よし、難波人は無鹽に富て好者なし、しかれどもあまりにこのみ過て、禁忌の毒にあたらふもしれぬ、しかれども何をくうてもあたらぬ物じや、延喜の大膳正膳内膳の式を見れば、今くはぬ物多し、天子さまも昔は脾胃がつよかつてじやあろ、鹿肉は必脯にしても度々まいる事よ、野菜も薤蒜のたぐひを十二月の月などにめされしが、ない時は干菜にしてたくはへたはいぶかしき事也、萬國の中に五穀がこの國がいつちよいによつて、米ほしや綿ほしやと、蠻人もむさぼりにくるじや、米くはず、綿あたゝかなどしらぬ先の心でくらせばよいに、とかくおたがいに垣を固くし、内を守るが大事じや、長隊と云てあかぬは鄙情也、三ばいの飯茶酒にもせよ、滿たらばすんだことじや、まだいふ事があれど、あゝくたぶれた

くたぶれた手がなへた（十五）（花押）

黄表紙鼻下長物語

鼻の下の長い者は長生をするといふが、鼻の下の長いのは取りも直さず氣の長い標象で、氣忙しくては長命はむつかしい、美術院展覽會は院展、流行感冒は流感と諸事押詰つた世智辛い世の中では、偶〻閑が出來て小説でもと披いて見れば、切羽つまつた人生觀で脅かされる、芝居を覗けば獨白澤山の理窟責に考へさせられる、是では少々位靜座法や深呼吸をやつた所で肩の伸びるすきも無い、まして鼻の下においてをやだ、其段になると江戸時代の文化は暢氣なもので、年年正月毎に出版の無數の草双紙は小供衆方の御慰みとは表向き、實は頤鬚くひそらした大供衆の御慰で、これは出來ました、一寸乙でげすなど〻脂下つた按排は、誠に天下太平めでたう候ひける次第である、せめて正月だけでもこんな氣分になつて見た

いものだと、百年許り跡戻りして長命の勘定を合はすつもりで、茲に取り出したのが

芝全交の鼻下長物語

原文通全部假名がきで御覽に入れると、いよ〳〵妙であるのだが、そこ迄氣長に辛防される讀者も無さゝうで有るから、殘念ながら、漢字交りに書直しました、之を炬燵の上で御子樣方相手に三十三遍繰り返して御讀みなされば、三萬三千三百日の御長命は屹度請合申すと爾云

* * * * * * * * *

茲に法性寺の入道前の關白太政大臣さまと申すは、物を叮嚀に聞き給ふ事が御すきにて、或時御家老の三なめかけた三かけた、ひつちくでつちくほうねん坊通太左衛門といふ者を召して、京の三十三間堂に佛の數が三萬三千三百三十三躰ござると申すが、誠に三萬三千三百三十三躰ござるか、見て參るべし、其序に山王の櫻の木にお猿の數が三萬三千三百三十三

疋ござると申すが、これも誠に三萬三千三百三十三疋ゐる事か、實否を糺して參れと仰せ付けらるゝ、頃しも十月中の十日の事なりしが、叮嚀なる御方ゆゑ繰り返し引繰り返し三十遍程仰せられける故、丁度山王の櫻の木のあたりで、御晝御膳を召しあがられ、それから又あとを仰せられ、一日にすみきらず、日が暮れてやつとすみ、御夜食をあがつた所が九つ過ぎぞ有りがたき

(詞がき)

殿樣「まろも大きに口がすくなつた、ちと休んでいはん、お身も烟草にでもしやれ」

家老「尾籠ながら私は手水がもるやうになりました」

茲に又法性寺の入道前の關白太政大臣さまの奥方を、きくきり菊桐三きくきり合せて菊桐むきくくきりの前さまと申すは、これも物の言ひにくい事や、聞きにくい事がお好きにて、お局の川原撫子の石竹といふ女中を召

して仰せらるゝは、此度三なめかけた、三かけた、ひつちくでつちくほうねん坊の通太左衞門事殿樣の御使に京の三十三間堂へまゐるさうな、もし多くの佛の其内に、のら如來〳〵三のら如來六のら如來とて、のら者の佛が有る、必ず之を讀み込まぬやうにしたがよい、又そのそばに一寸御小佛があるによつて、おけつまづきやるなと申すべし、外にも賴みたい事があるによつて參るべしと、使をやり給ふ

奥方「けさ油揚をたべたせゐか、今日は大ぶんくもじが滑べる、晩には風車のおよごを申しつけやれ」

お局「御口上の趣をふた晩さらひますが、まだ申されませぬ」

女中「奥樣はたしか小田原の外郎から入らしつた、うへつ方に似合ぬ口まめな奥樣なれど、三日程かかつて、いゝやつと仰せ付けらるゝ」

又或時法性寺入道さまは、奥さまの大つみと殿樣の大まりと、いざや大まり大つみ競べ遊ばさんとて、御家來に親も嘉兵衞子も嘉兵衞といふ者あ

り、此の兩人におてつだひを仰せ付けられ、この御使の口上も五六日かゝつていゝやつと濟みけるが、兩人御錠口へ來かゝりて女中へ申すは、いかなくゞり戸もくゞり〳〵くゞつたが、御錠口のくゞり戸は、くゞり惡いくゞり戸で、くゞられませぬから、あがりませぬと、親も嘉兵衛子も嘉兵衛親嘉兵衛子嘉兵衛子かへ親かへともに申しましたと、仰せ上げられて下されと賴む

「お話のついでで御座るが、今朝召使の錢獨樂めが徒跣で逃げました、小使に困ります」

女中「其通り申習ひまして、明後日あたり申上げませう」

御錠口の取次の女中は、やう〳〵親も嘉兵衛子も嘉兵衛が口上を覺えて、殿樣と奥樣へ速かに申上げれば、扨々其方はよう言ひにくい事を覺えたと御感心遊ばし、其儘ならば奥が大つみとまろが大まりと、いざや大まり大つみくらべは止めにしようが、其代に向の鶴は白鶴首か黑鶴首か、あれ

こそほんの眞黑々の黑鶴首か白鶴首か、見てまゐるべしと、親も嘉兵衛子も嘉兵衛親かへ子かへ兩人に申付けてよからう、何ときついものか、ア、口がくたびれた、ちと休まう

女中「是程に申上げまするは、並大體の事ではござりませぬ」

殿樣「和主はよく口がまはる、其褒美に繻子緋繻子繻珍の帶をとらせう」

女中乙「わたしらもせめて向ふの塀に丸穴一つでも言ひ習つて、御褒美を戴きたい」

さても御局の河原撫子の石竹どのは、やうやく四五日かゝつて、奥樣の御口上を覺え、ほうねん坊の通太左衛門が方へ參り、あざやかに饒舌立て、外に御用もござれば御上りなされましといはれて、通太左衛門返當に當惑する

通太左衛門「拙者などは京の三十三間堂の佛の數さへ、まだ覺えませぬに、かやうな御使、いやもう年が寄りましては、根が薄うなりまして、こん

な事は出來ませぬ」

お局「私も此間中この御口上にばかりかゝつて居りまして、地口を一つ申すまが御座りませぬ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是迄が上卷五枚で、中下の二卷にもまだ〳〵やゝこしい早口問答がごつさり出て居るが、氣の長い拙者でさへ、少々辟易の體であるから、まして讀者諸君は猶更の事と存じ、先づ今日はこれで切りあげ、跡は又御正月の三つある時の事に致すでござらう

昔の原稿料

格子目の中へ窮屈な字を書いて、一枚何程といふ金に換へる著作者といふ商賣は、昔からあまりごつとしたものではない、今日は德川時代に比べると出版も容易くなり、購讀者も殖えたやうであるが、その代り著作者の

數も增し、物價も騰貴したから差引大した違ひもあるまい、德川時代にも草双紙の類には多數賣れたものもあらんが、それは今日の御伽話や鐵道唱歌の類で、正當な標準にはならぬ、嵩山房の唐詩選は當時未曾有の賣高であつたといふが、果して何部賣つたのであらうか、まづ二千も賣れたら大々的歡迎とでもいふのだらう、風來山人の根無草は三千賣れたと作者自ら吹聽してゐるが、實際はどんなものか、併し今日でも三千部は成功のうちださうなから、餘り大きな顏も出來ぬ、されば著作者が原稿料不足を訴へるも尤であるが、書肆の思ひ切つて出せぬにも理由はある、儒者側の原稿料は材料缺乏で斷言は出來ぬが、内々は咽から手が出るやうにあつても、表向は高楊枝ですまさねばならぬ御身分柄、いづれは本屋の番頭から仁義だてに拜み倒された事でがなあつたらう、馬琴の作者部類に「昔は臭草紙の作者に潤筆をおくる事はなかりき、喜三二、春町、善好などは、每歲板元の書賈より新板の繪草紙錦繪を多く贈て新年の佳儀を表し、且其前

年の冬出板の草双紙にあたり作あれば、二三月の頃に至りて、その作者を遊里へ伴ひ、一夕饗應せしのみなりしに、寛政に至て京傳馬琴のみ殊に年年に行はれて、部數一萬餘を賣るより、商賈蔦屋重三郎、鶴屋喜右衛門と相謀りて、初て草双紙の作に潤筆を定めたり、こは寛政十八年の事にて、當時は京傳馬琴の外に潤筆を受る作者はなかりしに、後に至りてさしもあらぬ作者すら、なべて潤筆を得る事は、件の兩作者を例にしたるなり(中略)さはれ當時と雖も名の世に聞えざる素人作者は、入銀とて多少の金を板元の書賈に遣して、その作の草紙を印行さするも多かりき、今もなほさる作者も稀にはあるべし」といつて居るが、その最初の原稿料は戯作者撰集に「京傳が作る洒落本も從前は潤筆を收めざりしかば、當り振舞と稱して馳走し、或は反物などを贈りたるが、屢ゝ戯作を依賴するに付、娼妓絹ぶるひより初めて肴代金壹兩を贈り、其後一部一分又は二分位づゝ潤筆を收むることになりしが、仕懸文庫は無類の大當りなりし故に、潤筆三分を收め

一夜青樓に招待して饗應せりといふ」

肴代の金壹兩は絹ぶるひのみに對する原稿料とは見られない、一分又は二分位といふを眞正の潤筆料と見るべきである、酒落本は三十枚内外の小本であるから、當時にあつてはよい報酬である、絹ぶるひも仕懸文庫と共に寛政三年の出板で、其前年酒落本禁止の令ありしを犯し、上包に敎訓讀本として賣出したるが發覺して、爲に板元の蔦重も作者の京傳も罪を得たのである、然るに馬琴が潤筆料の定りしは寛政七八年の事なりといふは、自分が潤筆を取るやうになつた年へ引込んだので、例の何事にも京傳馬琴と一列にいひたがる名聞心である、馬琴も後には堂々たる大家になつて、八犬傳一輯五册に二十五兩といふ報酬を得るに至つたが、まだ此頃はとても京傳と同格にはいかなかつたのである、京傳馬琴は第一流の作者であるから報酬も從つて高い、さて第二流に至つてはどんな者であつたらう、茲によい資料が出たから長文ながら全部引用する、宛名の河内

屋は大阪の有名な書林で、松亭金水(文久二年歿六十六)は初め手跡の師匠であつたが、爲永春水の人情本の筆耕をしてから其手心を覺えて、後には小說家となり、下手な人情本や讀本を書いた男で、文中にある丁平は八犬傳八輯以下の出板元たる丁字屋平兵衞である。

飛脚便を以啓上仕候追々春暖相催候處已來御揃愈御壯榮被成御座奉歡喜候扨過日積翠閑話彫刻出來仕候に付上納本其外三部御遣し尤大傳馬町丁平殿ゟ被差越候處右者幷並表紙裏に書林堂號有之右にては兼而申上候通藏板之廉にふれ候間差出候義難相成依て丁平殿ゟ掛合之上白幷にいたし外題はり付表紙裏之方は白紙に取かへとち直し差出申候尤當月八日上納本相濟候につき左樣御承知可被下候此上御都合次第貢弘願御差出之義いつにても差支無之候間左樣御承知可被下候

一丁平殿ゟ御書狀之趣を以談じ有之候は佐野鹿藏之傳記讀本に被成

度趣早々取掛相認候樣に被申越候然る處兼而御賴御座候粹書別紙之通手まり唄三人娘と申外題にて一番取仕組もはや出來に及び候間一まづ此本を御覽に入候尤前々之ふり合と違ひ當時は專ら人情より筋を競ひ候體に相成申候に付是は一體種もよろしく隨分可然被存初編脫稿仕候尤小本は一編にては行屆不申引續二番は是非〳〵賣出し不申而は不都合之よし兼而承り居候得共一度にも行屆不申候間先一番入御覽候御一覽之上有無可被仰聞候御彫刻に相成候て二編も直樣出來可仕候尤丁平方え御書狀之趣にては粹書出來不申候はゞ鹿藏の傳讀本とやうに被仰候得共小本と讀本とは又格別之儀殊に御地にては小本一二番位御彫刻之義は至而簡易之樣にも承候間何卒毬唄並鹿藏傳本兩樣とも御出板被下候樣仕度野生元來拙著にて仰無覺束方も御座候得共隨分骨折丹誠仕流行におくれ不申樣に著編可仕候此段宜御勘考早々貴意被仰下樣奉待候尤粹書之方は是迄當地板元衆先例之通

作料一編に付五百匹つゝ有之此段も御承引被下引續二番相認候事に付何れに成ともかはせ御ふり向御手形いたゞき其店より請取候樣仕度此段御本家にても都而右之振合に候間御聞合之上可然御取計可被下候佐野鹿藏之方は丁平殿引請に相成候と存候間是は右御店にて時々請取候樣にも可仕哉尤讀本十一行通例之品に御座候得は一編作料金五兩申請度候間此段も御承知可被下候右は諸御店一統之例に御座候先は右用事迄申上度早々如斯御座候但稿本差上候而萬一思召無之候はゞ御返却相成候而も不苦候得共御本家其外之仁御望も可有之は御世話被下度候いづれにも早々御返書若又右三人娘之方何れにても御望無之候はゞ是又直に御差もごし可被下候當地外々申談差出候樣可致候以上

三月十日

松亭金水

河內屋藤兵衛樣

尙々時候折角御厭可被成候先日は御地大火之よし御案じ申所々にて承合候處御宅邊とは餘程隔り候場所にて書林方は一同御無難之趣大慶仕候依て別段御見舞書狀も差出不申候

右の文によれば人情本が一篇(通例三冊)五百匹(壹兩壹分)、讀本一篇(通例五冊)五兩が當時普通の相場と見える、之によりても馬琴の聲價群を拔きし事が明にわかる、安政二年出板の讀本仙桂奇錄といふは二世爲永春水の作であるが、其原稿料もやはり金水のいへる如く五兩である、

覺

仙桂三篇

一金五兩也　　作　料

同

一同壹兩貳分貳朱也　　筆　工　料

右之通慥に請取申候以上

十二月廿五日　　爲永春水

河内屋
　新助様

仙桂奇錄の挿畫をかいた柳川重信の手紙もあるが、それは恭しく畫料爲替手形送付の禮を述べたばかりで、惜いかな金額を記してないから割愛した。

序に馬琴の書簡に據つて賣價や發行部數の事を調べて見ると、八犬傳七輯下帙(三冊)仲間賣正味十二匁とある、石魂錄後集は賣捌人丁字屋平兵衛が慾張つて、上帙を仲間賣正味十五匁としたので高い〳〵といふ評判のみで、漸く二百部捌いた、此版元は素人であるため賣捌を丁字屋に依賴したのである、馬琴の勘定では江戸賣四百部、登せ貳百部合計六百部賣れなくては版元の板代が返らぬ、七冊で惣元入七十金かゝつて居るといつて居る。天保六年正月出版の金瓶梅は「二日に二百部出來うり出し、同七日

迄に千四百部製本出來、處々へ配り候へ共遠方へは尙行わたらずとて、小賣よりさいそく被致手廻りかね候間、板元見世にてはうらずに小賣へわたし遣し候よし、正月八日に板元年始の禮に罷越、右之趣申述大悅に御座候」とある、天保六年三月二十八日付の書簡には「八犬傳二月二十一日うり出し候節三百部製本いたし、少々不足には可有之存候へ共、急候故その通りにてうり出し候處、本日八時頃にうり終り、あとより參り候者に本無し、彼是被申甚こまり候に付、二十一日夜は諸職人不睡、終夜すり仕立等一時にいたさせ、翌二十二日晝時迄に五十部製本出來、右あとより參候ものへわたし、やう〳〵息をつぎ候よし丁子屋申候」とあり、同年閏七月十二日付のものには俠客傳四集は「板元丁平參り候節聞候處、五月中旬はかし本や共錢なき時節の上、うり出し前夜より雨さはり、彼是にて當日甚不景氣の仕合のよし、三百部の製本わづか八十六部うり出し候よし、尤晦日迄もかし候はゞ三百部輙く出拂ひ候半なれども、かし候てはうり立むつかしく

候に付、一部もかし不申候、依之かし本屋等ほしがり候事は山々に候へども何分錢なき故に右の仕合に候と申候」とあるを見ると、讀本は初版を三百部とするが定例のやうである。

馬琴と北齋

京阪の小說は最初から讀本の體裁を取つたので挿畫がすくない、西鶴の浮世草紙でも八文字屋本でも、每冊多くて五六面に過ぎぬ、つまり讀ませるが主であつて、畫はお愛嬌たるにとゞまる、隨つて作者も後世の如く畫樣に注意することが少く、畫工も亦事々しく署名などはせぬ。西鶴物は蒔繪師源三郞、吉田半兵衞、八文字屋本は西川祐信などが書いたのであるが、いづれも小說の挿畫には名を出さず、源三郞は人倫訓蒙圖彙、半兵衞は女用訓蒙圖彙、好色訓蒙圖彙、好色貝合、うるほひ草等の繪本にのみ署名して居る、祐信も亦同樣である。(新堪忍記の署名は珍しい例である)かやう

な歴史的習慣から、上方の小說は文化前後江戸小說の影響を著しく受けるまでは、畫工の名は殆ど閑却されて居た。

江戸の小說は根本が繪本から發足して進化しただけに、作者と畫工との關係が京阪とは大に違ふ。猿蟹合戰や鉢かづき姫や淨瑠璃狂言の筋書のやうな、簡單な繪解を專らとした赤本時代や黑本時代は畫工卽作者で、近藤淸春、奧村政信、富川吟雪などが麗々と署名して、畫家以外の作者の署名することは却て後れて居る。小兒の展翫から大人の讀物と變じ、內容が滑稽洒落を旨とする黃表紙時代になつても、猶畫工の名のみにて作者の署名せぬものも少くない。畢竟是等の草双紙は繪が主で文章は從である、繪入小說でなくて字入繪本である。いかにその文章詞書が氣のきいたおつりきな物であつても、其輕俊奇警滑稽突梯な畫がなくては其妙味の過半は失はれるのである。論より證據、博文館本の黃表紙百種を見るがよい、繪なしの文章ばかりでは殆ど讀む氣になれず、讀んだ所で何程

の興味もない。されば其繪組は作者の最も苦心する所で、いかにしてて自然に反した形を成さぬ形や、無形の空想を有形の畵面に旨くこじつけて巧に現すべきかは、太平樂な時代ののんき千萬な作者の頭を一通ならず惱ました所である。春町や京傳や一九のやうに自由に繪のかける作者は此點において頗る有利な位地に在る、自分で畵の出來ぬ馬琴のやうな作者は構圖の趣向に苦むのみならず、畵工に注文をつける面倒が想ひやられる。併し洒落氣の多い時代の事であるから、畵工も案外呑込みがよくて却て作者の注文以上にでかしだてをしたかも知れぬ。清長、俊滿(作名南陀伽紫蘭)北齋等が黃表紙の作に手を出したのを見ても、此間の消息が窺はれる。されば草双紙に對する作者畵工の功績は、五分五分或は四分六分とも觀るべきもので、作者と畵工とが連署するは、當然の權利といふべきである。而して此既得權から畵工が增長して、讀本時代になつても作者と其功を爭ふやうな勢をなした。

黄表紙が時事問題に觸れる事を禁ぜられて教訓物や化物話になり、再轉して御家騷動や仇討物となつて、段々說明の文章が長くなるに隨つて、紙數增加の必要より合卷となつたが、それでも尙不十分であるのと、又一方には支那小說の感化を受けて京傳馬琴等の讀本が起るに至つた。これはその名の如く文章を主としたもので、其體裁は元祿の西鶴物に逆戾りした半紙本で插畫が少い。畫は少いが元祿とは時勢も違ひ作者も畫工も進步し、世間も亦多年繪双紙に慣され來つて目が肥えて居るので、よい加減な間に合せでは承知せぬ、作者も多少文字ある讀者を相手とする雅俗折衷體の讀本にふさはしいものをと一思案をして、從來の女子供ばかり相手の合卷草双紙風でなく、幾分か高尙らしい繪をと心がけた。それには漢畫の手法を交へた北齋などが最も調和を得たものであつた。かくて小說界の泰斗曲亭馬琴と浮世繪師の巨頭葛飾北齋とは相提携するに至つた。一體馬琴は頑固細心、北齋は磊落粗放で其性質は餘程違つ

て居るが、いづれも自分の技藝に熱心で、其作品は覇氣、衒氣、俗氣に富んで、著しく一家の癖のある點は頗る能く似て居る。馬琴の文章が和漢雅俗を折衷したのと、北齋が浮世畫に狩野派や明畫洋畫を取込んだも面白い對照である。小說界の馬琴の位地は正に浮世繪の北齋の位地で、年配經歷も殆ど逕庭なく、長壽で健筆多作、自信の强い事も同樣である。晩年の不運や雅號の多い事などは比較の限ではないが、何となくそれまでも思ひ出される。

北齋が是和齋や魚佛の名を以て、有難通一字（天明元年刊）や鎌倉通臣傳（同二年刊）の黃表紙を著したのは、馬琴の初作盡用而二分狂言（寛政三年刊）より八九年前である。寛政十二年時太郎可候の名を以て、竈將軍勘略卷を蔦屋から出版した時其卷末に「不調法なる戲作仕差上申候、是にて御間に合候はゞ、何卒御覽の上御出版可被下候、初而之儀に御座候得ば、あしき所は曲亭馬琴先生へ御直し被下候樣、此段よろしく奉願候、云々」と記してある。固より初作では

ないが、時太郎可候の作名を著したるが初故から言つたのであらう。寛政十二年頃は馬琴も既に數十種の黄表紙を著して、相應に世間から認められて居り、且版元の蔦屋には以前番頭を勤めて居つた關係もあり、寛政六年馬琴の福壽海無量品玉の挿畫をかいた緣故もあるので、旁々曲亭馬琴先生を名指したのであらう。　北齋は此後も黄表紙の作があつて、前後十種ほどもあり、それが強ち拙作ともいへぬに、馬琴の作者部類青本作者の部に、時太郎可候の名を載せぬのは如何なる故であらうか、尤も可候といふは見えて居るが、その傳記には文化年中に死歿した人とあるから、無論北齋の可候ではない。（馬琴はこの可候の歿年月墓所一覽に出て居るといつて居るが、一覽には出て居らぬ、）
馬琴の八犬傳に相對すべき北齋の傑作北齋漫畫は、八犬傳の初篇に後ること二三年にして文化十四年に成り、その十三編は八犬傳の完結と前後して天保の末に出來たのも、不思議な因緣で、勢力旺盛な二老の面影が偲ばれる。　かくて北齋は嘉永二年四月九十歳、馬琴は其前年十一月八十

二歳で地下に歸した。

今兩人の交渉を一目瞭然たらしむる爲に、馬琴作北齋畫の黃表紙、讀本の年表を掲げる。

福壽海無量品玉	三册	寛政六年
遊君操連理餅花	二册	文化四年
敵討身代利名號	六册	同　五年
玉櫛笥石堂丸物語	三册	文化年中

* * * * * * * * *

小說比翼文	二册	享和三年
石言遺響	五册	文化二年
敵討裏見葛葉	五册	同　三年
墨田川梅柳新書	六册	同　四年
新編水滸畫傳初編	十册	同
標注園の雪	五册	同
新累解脫物語	五册	同
三七全傳南柯夢	七册	同　五年

賴豪阿闍梨怪鼠傳	九冊	同	
椿說弓張月	三十冊	同	七年完成
南柯後記	八冊	同	八年
青砥藤綱摸稜案	十冊	同	後編五冊は翌年刊行
皿々郷談	六冊	同	十年

北齋が初めて馬琴の爲に畫いたのは寛政六年の福壽海無量品玉で、馬琴廿八歲、北齋卅五歲の時である。黃表紙插畫は右の四種のみで、文化八年以後北齋は何人の作にも黃表紙、合卷類の插畫を止めて、讀本の方に移つた。而してそれは享和三年馬琴の小說比翼文が始である、これまでの江戶讀本の插畫は殆ど北尾重政の獨占であつた。それを今度北齋が書くやうになつたのは、馬琴の目鏡であらうと思はれる、これは頗る注意すべき點で、それから以後續いて文化十年まで、十三種の讀本を引受けて居る、さて其後ぱつたりと北齋との關係が絕えたのは、いかなる故であらう。馬琴は人も知る我意の强いやかましい男で、何事も自分で指圖して人を

随へねば氣のすまぬ性分である。重政に頼んだ加古川本藏綱目寛政九年刊の畫稿に「人物の居所すべてのとり合せは、この下書に拘らず、かつこうよろしくねがひ上候」とか、歌川豐廣に誂へた武者修行木齋傳文化三年刊に「畫は下書に拘らず、思ひ付も御座候はゞ可然御書つけ可被下候、とり合せ等とかく可然御工夫ねがひ上候」とか書いたのを「浮世繪」第八號參照見ると、至極穩當な樣であるが之は通り一遍の挨拶で、且草双紙であるからいくらか寛大な態度に出たので、自家獨壇の讀本に至つては其干渉頗る甚しい。畫工が注文以外の意匠を出せば、餘計な世話だと怒り、唯々諾々惟命是奉ずれば働きがないと言はれる。柳川重信の如き、傘をさゝせろといへば傘ばかり書き添へて、履物は依然として草履のまゝである、殆ど始末にをへぬ愚物だとまで詈られて居る、日記天保三年二月十一日の條にも「柳川畫三の卷さし畫の二、諏訪湖邊馬上旅人きせるを持居り、きせるは今めかしく不宜に付其段申遣し直させ可申の處、とり紛れ不及、追つて申遣し直させ可申事」と

ある、是等は時代錯誤ゆゑ尤な言分であるが、すべてが此調子で些細な事まで却々やかましい。　重信は馬琴には最も不評判で「畫も重信は多病且不實等閑の本性にて出來かね候間、半分は英泉に畫せ候」天保九年六月篠齋宛書簡とある。晩年眼を疾んで殆ど視力を失つた時でも、畫工まかせにするを厭うて、不自由な目でさぐり〳〵下畫をかいて渡した。「口畫さし畫なども同樣にて、薄美濃へ毛の如く細く書き候人物の面貌手足衣裳のもやう等、都て一向にわかりかね候間、人に見せてこゝは何々といふを聞き候のみに御座候、尤不便の至、履を隔て痒を掻き候思ひをいたし候事多く御座候」天保十一年二月篠齋宛書簡「當春二三月迄は只今より少しは(視力)殘り居候間、畫稿抔もかなりに出來候へ共、此節に至り候ては人の首を書候ても、其首見えず成候間、手足を付事も成かね甚困り候事に御座候、畫は書と違ひ筆をはなし〳〵形をなし候物ゆゑ、筆のあて所見え兼ねては、何分にも出來兼候」天保十一年六月同書簡代筆「畫も同樣にて板下はさら也、彫立候ても其大方はおぼろげに見え候へども、

こまかなる事は少しも見えず候間、傍之人に見せて云々と聞候のみにて、自見候事無之候間、書にもあやまち可有之哉計難候」（同年八月書簡代筆）「金瓶梅八集も同様に候へども、是は平假名故に、二冊目ゟ下は拙媳に代筆致させ、どやらかうやら六月大暑前に綴遣候、書割は代書の者無之候間、手さぐりにて書がき候に付、頭二ッ有人抔出來、或は襟胸に目鼻有人抔いでき候へども、さすがに國貞故、板下は如例宜敷出來」（同上）などある、藝術的良心の强いのと其精勵とは、誠に尊敬すべきであるが、それだけ干渉の嚴しさも察せられる。傲岸なる馬琴と負けぬ氣の北齋との衝突は到底免れ得ない所である、文化四年新編水滸畫傳の挿畫から諍論を生じ、互にすね出して、彼書かば我畫かじ、彼畫かば我筆とらじと閙著の末、二編以下は高井蘭山が譯する事になつた。此水滸傳の挿畫は衣服家屋調度すべて和漢混淆で、頗る變なものであるが、馬琴はその如何なる點に故障を唱へたのであるか、一向知られない。これについては文政十二年二月篠齋宛の書簡に次の如き文

何がある。

高井蘭山あらはし候水滸畫傳第二編舊冬出版、當早春借りよせ候て致一覧候貴兄は未被成御覧候よし、如貴命畫はさすがに北齋に候へば不相替よろしく候、乍去作者より畫稿を出さず、畫工の意に任せかゝせ候と見えて、とかく畫工のらくに畫れ候樣にいたし候間、初編には劣り候樣に被存候、著述は手みじかに綴り候故、通俗本（岡島冠山の通俗忠義水滸傳をさす）同樣の處多く、一向に骨の折れぬものに御座候、あの通りに候はゞ百囘早速滿尾可致候、只水滸傳のすぢのみ書つらね候までに御座候（中略）且亦水滸傳を今の草ぞうし合卷やうの物同樣といはれしも、あまりすまし過たる事にて、中々水滸傳の作者の深意は夢にも思はぬやうに被存候、ケ樣の心もちにて水滸傳を譯し候へば、ほねを折らぬもそのゆへありと、返す返すも嘆息にたへず、わづかに一の卷ばかりよみて、大ていの樣子しれ候間、畫ばかり熟覧して早速返し候也、いかで一わたりは御覧あれかしと

奉存候、但し世評にも口繪なき故さみしく、且一冊にさし畫三丁づゝなるも、畫傳といふにたがひてすけなしと申もの多く有之候、なれども百八人の像は半丁に二三人づゝ別に一卷といたし、これははなしても賣り候よしにて、只今彫刻最中と及承候、この出像の卷はさすがに北齋筆なれば評判よろしく、度賣れ可申と存候、出板の節見候ていよ〳〵よく出來候はゞ、その所計求置可申存候事に御座候。

喧嘩はしてもさすがは北齋と其技倆に感服して居る、北齋も亦譯者が蘭山になつてから張合がないと、歎息したさうである。正に是惺々惺々を知り、好漢好漢を知るといひつべしだ。水滸傳中止を北齋との衝突に歸する說は、飯島虛心の葛飾北齋傳に據つたのであるが、是には大に疑ふべき點がある。馬琴の匿名著作なる作者部類には、水滸傳の版元丸屋甚助が、板木師米助といふ者前借凝滯して約を果たさゞるを、馬琴の尻押なりと信じて奉行所に訴へ、馬琴は米助と共に法廷へ召喚された、元より無根

の誤解で事なく濟んだのであるが、馬琴は非常に立腹して、版元が人を介しての詫言を退け、「吾は素より人の借財の保人になりたる事なし、まいて人に金錢を借りて返さゞる事なければ、後安しと思ひたるに、甚助理不盡に連訴したる恨、生涯忘るべからず、千萬言を盡さるゝとも、其儀決して無益也」とすさまじい險脈で、手をかへ人をかへ、いかに頼んでも續稿を受けひかなかつたと、詳細に述べて居る。　北齋とも或は多少の衝突はあつたかも知れぬが、大原因は自らいふ所に相違あるまいと思ふ。

翌文化五年の三七全傳南柯夢で亦一問題起つた。　三勝半七が心中にゆく途上の背景に、稲叢陰に野狐を點出したのを、馬琴は無用の蛇足なり、斯くては此二人の男女は野狐に誑かさるゝやうなれば、速に除き去るべしと息卷き、北齋は餘情を描く畫趣なりと、固く執つて下らず、版元は迷惑して、百方奔走の末漸く和解した。　それからこの後篇南柯後記の挿畫についても、亦爭が起つて遂に絶交をしたといふ說が北齋傳に見えるが、絶交

といふことは無いらしい。何となれば其翌文化九年には青砥藤綱摸稜案、十年には皿々郷談の挿畫をかいて居り、日記文政九年四月八日の條に「畫後畫工北齋來る云々」とある。絶交説はその比から馬琴の作に畫を書かなくなつたから起つた臆測であらうと思はれる。併し文化十年以後は八犬傳や巡島記や美少年錄などの、前から引續いた大作の完成に從事したから、北齋の畫くべき新規の作物は殆ど無かつたのである。馬琴が晩年嗣子琴嶺を失ひ家政整理のため、從來蓄積した藏書や自分の稿本を伊勢の小津桂窓や殿村篠齋に讓つた時、南柯夢の稿本について篠齋から刊本と草稿とに畫の相違ある理由を問合せた返事に、

南柯夢稿本之義云々被仰越忝奉存候、未だ望人も無之候はゞ、價は何れにても苦しからず候間、宜敷御世話頼奉候、右稿本といん本と御引くらべ被成御覽候處、ほく齋さし畫稿本と同樣には候へども、人物之右に有をば左りに直し、或は添もしへらしも致候此心じつを以云々被仰示候

御猜之趣少しも無違、流石に君なるかなと堪心仕候、小生稿本之通りに少しも違ず畫がき候者は古人北尾並に豊國今之國貞のみに御座候、筆の自由成故に御座候、北さいも筆自由に候へ共、己が畫にして作者に隨はいじと存候ゆゑにふり替り候ひき、依之北さいに畫がゝせ候さし畫之稿本に、右にあらせんと思ふ人物は左りに繪がき遣し候へば必右に致候、實に御推りやうに相違御座無候、御一笑〳〵。（天保十一年八月書簡代筆）

意地になつて反抗した北齋も、これには一杯くはされたのである。筆の自由なる事は飽くまで承知ながら、己が畫にして作者に隨はじとするが馬琴にとつての大苦痛で、鈍物でも重信などの方が使ひよかつたのであらう。藝術の士自ら高うして相下らざる東西古今同一である。餘談ながら二代目北齋について、馬琴のいふ所は次の如くである。

繪本三國志の事は略評被仰示忝承知仕候、その書出板の事はじめて御狀にてしられ候、右畫工の事第三編は葛飾戴斗とあれば、桂窓子は云々

被申候へども前の北齋也と思召候よし、それは乍憚思召ちがひにて可有之候、後の北齋は俗稱近藤伴右衛門と云、麹町平川天神前高家衆京極飛驒守殿家臣也、文化中金七兩を以その師に葛飾北齋戴斗の名號を譲うけ候者是也、この後前の北齋は爲一と稱し候、これらにて御了然たるべき歟、その畵の拙、彼近藤伴右衛門ならばさこそと致想像候。（天保九年二月六日篠齋宛書）

浮世繪類考とほゞ同樣で、只彼に小笠原浪人とあるが、此に京都飛驒守家臣とあるだけの違ひに過ぎぬ。然るに葛飾北齋傳には此說を非として、弘化三年四月書肆嵩山房小林新兵衛へおくつた北齋の手簡に、戴斗の號は三十年前新吉原龜屋喜三郎に譲つたとあるを引用して居る。弘化三年から三十年前は文化十三年であるが、馬琴が文化中金七兩で譲りうけたといつて居るのと照合すると、龜屋喜三郎と近藤伴右衛門とは異名同人であるやうにも思はれる、或は全く別人で北齋が名號の二重賣をやつたものか、さう見るのは北齋に氣の毒でもあり、馬琴の聞き間違として

餘り念が入り過ぎる、尚十分研究を要する問題である。

馬琴の書簡

一

近頃某氏所藏の馬琴の書簡約四十通を見ることを得た。年代は文政十一年から天保十一年にわたり、いづれも伊勢松坂の親友殿村篠齋に與へたものである。

文政十一年は馬琴六十二歳の時で、前年の夏は自分の大病、當年の夏は息子の重患で、大に弱らされたが、それでも勢力尚旺盛で八犬傳七輯石魂錄後集、傾城水滸傳、漢楚賽擬選軍談、金毘羅船、風俗金魚傳等讀み本合卷の作頗る多く得意の時代である、それから八年目の天保六年には老後只一本の杖と頼んだ嫡子宗伯を失うて失望落膽、さしも勤勉な翁も、茫然として百日間は全く筆を執り得なかつたといふ大打撃をうけ、九年から左の眼

が次第に惡くなつて、十一年には兩眼とも殆ど用をなさぬやうになり、六月以後の書簡は媳婦路女の代筆となつて居る。

書簡の名宛人なる殿村篠齋は名を安守といひ、宣長の門下であるが、大の小說好きで支那小說などいろ〳〵買込んで馬琴に貸し、その弟の琴魚は馬琴の門人格になつて居る。馬琴の小說を愛讀して、一篇いづる每に批評を書き送つて、著者と意見を闘はした山亭の三知己――木村默老、小津桂窓と篠齋――の中では、篠齋が最も親密であつた。そこで是等の手簡は文學上の事のみならず、家庭の瑣事にまでわたつて、詳密を極めたもので細字で一丈にも餘る長文が多い。ざつと讀んで見るにも、小一時間はかゝる手紙を、繁忙な著作の間に、殊に目がわるくなつてから探り〳〵書いたと思へば、今更ながら根氣のよさに驚嘆するばかりである。單に筆まめといふ點からだけでも、古今無双の剛の者である。五十年間閑居客を謝して、筆硯に親んだとはいへ、家事の切り盛りから、娘の店の帳尻勘定

まで手傳つてやつて、あれだけの著述をし、こんな長々しい手紙を繁々書くとは、返す〳〵も驚くべき精力で、薄志弱行粗放怠慢を特權のやうに心得て居る古今の小説家は、正に愧死すべきである。

馬琴の傳記は可也詳しいものも既に出てをり、二三年前にその日記の鈔錄も公にされたが、書簡は國書刊行會の馬琴遺稿に、越後の鈴木牧之に與へた六通を收めた外には、餘り發表されぬやうに思ふ。一體日本ではまだ世間一般の人が書簡集といふものに興味を感ずるに至らぬと見え、彖山書簡集以外に此類の編纂はないやうであるが、傳記の材料としては、是程正確なものは無いのであるから、偉人名士の手翰を蒐集刊行する風を盛に與したいものである。

談少しく岐路に入つたが、前申す如く馬琴の傳記は割合によく世に知られて居るので、この四十通の書簡によつて、全く耳新しい重大な事實が發見されるといふ譯にはいかぬが、これまで大體知られて居る事實を、尚一

層詳密にし、推測說の當否を判定し、表向のかきものには現れて居らぬ馬琴の心事を窺ひ知る等の功は十分にあると信ずる。例へば一時馬琴の匿名作であらうと疑はれた事のある「しりう言」が全くさうでなかつたり、種々の方面から考證して、此翁の著述ならんと推測された「作者部類」がいよいよ推測通りであつたり、著作の用意態度、晩年寂寞の家庭における懊惱が明に窺はれるのである。雜誌の原稿として長文の手紙を一々紹介する事は不適當であるから、その中で興味もあり史料ともなるべき部分を抄出し、まゝ解說を加へて發表せうと思ふ。

（文政十一年五月二十一日付書簡）

一石魂錄後集之御地え本廻り候はよほど日も可有之存候ニ付云々と申上候處、此節當地御店ゟ被登候仁も有之旁右之本差登せ候樣被仰下承知仕候、然ル處下帙も段々製本及延引漸此節賣出しニ相成候間、少し見合せ下帙うり出し次第上下一處ニ爲差登せ可申候存候而及只今申

候、下帙も節句後三四日已前ニ賣出し候間、上下二帙取揃今日傳馬町御店迄差出し申候、着之節御熟覽御手透之節御高評被仰下度奉希候、かねては上帙仲ケ間うり直段十二匁位と申事ニ承り居候處、引請人丁子や平兵衛大慾心にて中ケ間うり正味十五匁ニうり出し少しも引不申候付、高イ〳〵と申評判のみにてやうやく本貳百部捌候よし、下帙はとぢわけ同樣ニ候へども、これも同じわり合にて拾壹匁貳分五厘のよしニ御座候、是迄拙作にこれほど高料の本は無之哉ニ覺申候、登せは多分本かへニ成候間、上方ニて引請人却て下直ニうり渡し候哉難計候、此板元素人故自分にて賣捌キ候事不叶、丁子やは書林なれどもかし本問屋にて此もの引受賣捌キ候故凡五六わりの高利を得候はねば引請不申候、此義かねて存居候故先頃勘定いたし見候へば、江戸賣四百部登せ貳百部六百部うれ不申候ては板元之板代かへり不申候、七冊ニて總元入七十金かゝり申候、依之本は板元ニ壹部も無之、板元ゟ丁子やに申遣し本

とりよせ差越候事ニて直段も板元自由に成り不申候、其上丁子屋申候は此本いまだ登せ不致候ニ付、他郷へは壹部たり共ちらし候事不相成候趣申、板元へ本わたし不申候ニ付板元大ニこまり、右之趣申ニ付これは他郷へ遣し候てもうり物ニいたすにあらず素人方のなぐさみニ見られ候事故、障りニは不成候、尚又本廻り候迄は秘しおかれ候樣申可遣間、心おきなく本遣し候樣だん〳〵わけ合申聞ケ、已來登せの障りニ成候はゝ屹と可承候間、本遣し可申旨一兩度及懸合やう〳〵本差越し申候、ケ樣之わけ合ニ御座候間當分御ひめ置被下、琴魚樣などの外は本御手へ入候事と申義先御遠慮可被成下候、種々の意味合御座候而作者の自由にも成かね板元の自由にもなり不申候、御一笑可被下候、かやうの板元ヲ杜鵑本やと可申哉、自分ニてほり立てもうることならず人にうりてもらひ候故利分は人ニ得られ、やう〳〵板ヲ自分の物ニいたし候が所得ニ御座候、それでもほりたがり候ものおほし、畢竟板ヲ株ニせん

と思ふ見込ニて、うり出し候節損さへせねばよいと申了簡ニ御座候、しかれども四百部賣捌申さねば急ニ元金かへり不申候、四百部は丁子や引請候へば二三年かゝりてもせひ賣拂可申候へども、此四百部不殘出拂ひ迄は板元ニて壹部もすり込候事ならぬとり極メニ御座候、素人方の御存なき事板元の樂屋の店おろし外々へは御噂被下まじく候、直段もあまり高直ニて御せわがひも無之奉存候へども、仲ケ間正味と申事故不及是非候へども、序ヲ以丁子やニ對面いたし候事も候はゞ、直かけ合ニいたし内々少々も引せ申度奉存候、代料急ニ被遣候ニも及び不申候、とりニ參り候はゞ拙者方ゟ取かへおき候ともいづれとも可致候、其內ニ直段の事も今一應可及懸合候、此段御承引可被成下候

一八犬傳七輯は三月中貳の卷迄ほり立校合いたし遣し候處、三月二十六日板元參り候後、如胡越疎遠ニて今以不參候、いかゞいたし候哉と存疑念不晴候處、此間噂ニ承り候へば本家の弟不埒ニて身上立行がたき

わけ合有之、本家のせわいたし多用の上駿府迄參らねば不叶用事出來候て、三月下旬急ニ旅行いたし節句前ニ歸府いたし候よしニ候へ共今以校合乞ニも不參候、ケ樣之わけ合候へば右うり出しはいつ頃に候哉難計奉存候、見物いづれもまちわび候事ニ御座候

一傾城水滸傳よみ本にしては云々との御高評、至極御尤ニ奉存候なれども、よみ本にしても相應ニ捌ケ可申候、かく申せばをこがましく候へども、すぢのわろき水滸傳の勸懲を正しくして見せ候のみ作者の專文ニ御座候、すぢは同樣ニて勸懲の場ニ至りては庭遥あり、よみ本にして永くのこし不申が殘念ニ奉存候はひがことにや

一金毘羅船の高評日本の山々にして云々と申候事、この義は最初の愚按ニ候故一咋年御下りの節物がたりいたし候樣ニ覺申候、それヲ御失念にてふと御胸中ニうかみ候には無之哉、最初ゟ何分天竺ニては婦幼のうれしがらぬもの、日本國中巡歷ニいたし可申と存考候へども、さや

ういたし候ては事の外むつかしく、大ほね折レ候事故やめ申候、作者の了簡はとかく少しもほね折薄くて相應ニ賣捌ケ候様ニ工夫いたし候事ニ御座候、それヲむつかしく考候てひまを入れヤンヤとほめられ候ても、そろばん玉にのらぬ事はいたし不申候、見物の了簡ト作者の了簡の相違こゝらに御座候、本文のまゝの化物ニても相應にうれさへすればば理屈なし、合巻などにほねヲ折候は大キナル損也、水滸傳などとり直しものニて面倒ニて候へども、すぢヲ本文にあづけ置追々ニ引出し、煮ても焼ても自由ニ遣ひ候故又樂(ラク)の場も有之候而速ニ出來申候、さのみほね折不申候て大流行いたし候は、神物あつて祐るかと被存候程の事ニ御座候、よみ本とてもよき趣向ありてもむつかしく急ニ出來かね候やうなるすぢはやめてつかひ不申候、渡世人のわる功如此御座候、それヲとやかく宣ふは至極よろしく可有之候へども引合不申候、御一笑可被成下候

一宗伯事四月九日夕より大病ニて五月節句前後は既ニと存候程之事、此節とても同様ニは候へ共まづ危窮の場をのがれ候故、當分氣遣ひあるまじく存候へども何分にも大病ニて安心不仕候、就右日々醫師の來診見舞の人出來多く且心痛も御座候故、此節は廢業同樣ニてはか〳〵敷著述も出來かね候へ共、さればとて打捨置候ては先ヲあんじられ候まゝ、透さへあれば机ニかゝり候へども何分おちつき不申候、彼もの病症六ケ年前はじめて發起いたし、凡一ケ年程療治いたし平癒はいたし不申候へどもわるがたまりニかたまり、折々持病差起り候事ニ御座候、養生すゝめ候へども藥嫌ひ灸治ぎらひにていふかひなく打過候處、痛火の邪火年來腹中ニ充滿いたし終に脾胃を犯し候故、脾胃虛の症ニ變じ、四月九日より下痢一日ニ七八十度ツヽ此節は減じて二十度三十度位ニ成候へ共、臍下の動氣甚しく按手いたし候へばホキ〳〵響キ候程之事ニ御座候、小便閉ニて宿水胸膈に滯り腹中雷鳴甚しく、何分安心な

らざる大病ニ御座候へども、食事は病人不相應ニ粥二碗ヅヽも三度かゝさずたべ候故、露命ヲ繋ぎ候事と見え候、何分とも藥のきかぬ症ニてこまり申候、去年愚老大病の節は家内手アキ故看病行とゞき候へ共、當年は小兒出來候故看病も行とゞき不申候、老年ニ及び一人の悴如此ニ御座候へば苦ニいたし候へば限りもなき事ニ候へ共、苦にしたればとて詮もなき事何事も天命に任せ候より外は無之候、かく諦居候へばうしろやすく候へども、さすが七情のいれ物たる人身候へば折々胸痛の事も多く御座候、御賢察可被下候、只さいはひなるは媳が乳汁澤山ニて小兒は尤健ニ御座候、三法師丸ヲ得候へば少しは慰め候方御座候へ共これも却而ほだしニ御座候、大部の小説を作り初め候頃末々迄は考ずに書おこし候へ共、しかれども始終はかやう／＼と大づもりのくゝりをつけぬ事はなし、しかるにわが生涯の小説はこの末いかやうのすぢになりて及團圓候哉、實ニはかりがたく奉存候、先夜老婆ニ不斗此義申

出し候故此處へ書くはえ申候、をかしからぬ咄にてめいるやうニも可被思召、御遠察可被成下候

一漢楚賽擬選軍談

袋入合卷三本初編八冊

これは漢楚のすぢにて、より朝よし仲兩雄のあらそひニつゞりなし候當冬二編引つゞき出版

一風俗金魚傳　右同斷

これは金翹傳ヲ日本の事ニつくりかへ申候、初編八冊當冬出板

右兩樣とも此節板下過半出來、追々ほり立申候、けいせい水滸傳流行ニ付合卷ものゝ趣向一變いたし諸板元かやうのものを歡び申候、新趣向より作者は樂ニてよろこび申候、士君子はうれしがらぬものニ可有之候、但し漢楚はむりこじつけにせず、和漢有來りのすぢをよく綴り合せ候處が作者のはたらきニ可有之歟、出板之節御高評可被成下候、金魚傳

はやはり金瓶傳ニて、彼すぢのわろき處ヲ少々ヅヽ補ひ候のみニ御座候、かやうのもの永くはやらせたく祈り申候、大ニらくニて趣向を案じ候苦ヲのがれ候御一笑

一雅俗要文　　間形本百十七丁

これは書札ニ多く雅文をまじへ候用文章ニ御座候、此節脫稿いたし候ヽ近來の人氣眞片カナ物でもよめ候て、はいかい狂歌ヲよみ習ひ候人々ヽ雅文ヲ書たがり候へども本なきにくるしみ候よし、依之板元の思ひつきにて拙著ヲ乞候て急ニ出板いたし候、出板之節御高評可被成下候

一美少年錄は外題計にていまだ趣向は立不申候へ共、わか衆の八犬傳のやうなるものとわか衆の水滸傳のやうなる物ニ可致存候事ニ御座候、これも流行を追かけ候板元のこのみニ御座候、先便恩借之小說ものは此趣向に用ひ候事も可有之候、何分病人と著述ニ手透無之候故いまだ熟讀不仕候、土用休みの內拜見可致たのしみ罷在候

一水滸傳云々被仰下、三十年程まへ尾府にてあらまし見候、久しき事故大すぢは存居候へども過半忘却いたし候、何さまなつかしきもの、いつぞ御序ヲ以拜見いたし度奉願候

右の第一項で當時出板界の內狀や、讀本の價や、賣行部數を知ることが出來る。江戶賣四百部上方登せ二百部の比例は、今日の狀況と比較してどんなものであらうか。杜鵑本屋といふは、子で子にあらぬ杜鵑、親ならぬ鶯の親に育てられるといふ意味合であらう。

自著の出版を待ち設ける心持は、利得を離れて言ひ知れぬ樂しさのあるものである。況や半生の心血を注いで完成を急いで居る八犬傳の版元に、故障が出來ていつ出るか分らぬとなつては、見物よりも作者のまち詫びる心元なさが察しられる。傾城水滸傳は水滸傳の人物を女に翻案した合卷の長編で作者得意の作で、これを婦幼の玩弄に供する草双紙として、やがて紙屑籠に投げ込まれるを見るは、作者の忍びぬ所で、中流以上の

讀者をあてなるよみ本にしたかつたといふのも、尤な愚痴である。その埋合せといふ譯でもなからうが、西遊記を種にした金毘羅船は骨折少くて相應に捌けるやう、十露盤玉に合はした渡世人のわる功者を、みづから嘲つた戲言の中にも、しみ〴〵とさびしさを覺える。(第二、第三、第四項)虛弱な息子に散々心を痛めぬいた末、七十に手の屆く時これさへ失ひ、とつて八歲の三法師を新規にもり立てねばならぬやうになつた翁が生涯の小說は、誠に不めでたい團圓であつた。

二

つぎの書簡は松浦佐用媛石魂錄後集の批評に對する答辯を主として、八犬傳出版の蹉躓、美少年錄の種本、檢閱係の干涉、狂歌師宗匠號免許の珍聞などを述べたものである。以下便宜上項を分つて例の蛇足を加へる事とする。

石魂錄は文祿征韓の役に名古屋の陣中にあつた潮川采女に、其妻菊女が

送つた痛切な思慕の文に秀吉が感動して、釆女を歸國せしめたといふ話に基いて種々の脚色を附加した作で、文中に吉次(よしつぐ)とあるが釆女、秋布(あきしく)とあるが菊女の事である。　前集は文化四年書肆雙鶴堂より出板したのであるが、板元死去して長く中絶してゐたのを、千翁軒といふ本屋が前集の板木を讓り受けて、著者に迫つてその後をつぎ完成せしめたので、其間二十一年を隔てゝ居る。「木に竹を接ぐ心地して一向感興が乘らなかつた」とあるは、尤もな次第で同情に堪へぬ。　しかし「一場も得意の段はない」といひながら篠齋の批評に對して、一々反駁の態度を示したのは、乃ち馬琴の馬琴たる所以で、いつもやかましく批評を督促しながら、それが來ると、ヤレ見方がわるいの、ソレ作者の本意がわからぬのと小言を並べ立てる、よく〲參つた時で「近來は御評大分御上達」といふやうな御挨拶、篠齋も再三の往復に草臥れて「屈服々々」と手短く切上げようとすると、これはけしからぬ、一體屈服といふ文字は、心中には不服でも相手の威力に壓迫され

て已むを得ず服從する意味である、親友の間に屈服といふやうな事はあるべきでない、どこまでも來い、どこまでも御相手仕らうといふのであるから、大抵の者は引下らざるを得ない。剛情我慢は厭ふべきであるが、封間肌の戯作者に伍して、これだけの自信と威嚴を以て立つたのは、此翁の偉大なる所以である。

(文政十一年十月六日付)

(前文略)

一石魂錄後集夏中當地御店迄差出候處、相違御覽被成候由にて、貴評之趣御面話同樣承知仕候、右御答は次ニしるし備御笑候、右本代やう〳〵壹わり引せ、當盆前傳馬町御店ゟ受取申候、是又御承知ト奉存候、京師(大阪の誤ならん)の書林河内屋茂兵衛此節出府、石魂錄後集上方筋うり弘引受、やう〳〵此節積下し申候、左候はゝ當暮ならでは御地えは本廻り申まじく奉存候、走りヲ入御覽、貴評もはやく承り、本望の至奉存候

一石魂錄貴評、吉次ニさせる功なし、乍併秋布がシテにて吉次はワキなれば云々、なれども少々は功あらせ度との事

吉次に功なきが趣向にて實は大功あり、後集初卷に吉次は嘉二郎に討れたらんと思はせて、ふせておくが作者の趣向ニ御座候、最期ニ至り經高ヲ滅スが則大功也、それヲ秋布同樣ニ前〻働せては、秋布ヲいつぱいニ遣ひ候事なりがたく候、實錄の瀨川采女の事もその妻菊の貞操ヲ專文ニ世俗申傳候故ニ、その心もちを第一ニ綴りなし候、但しひが事にや一輪栗が秋布を勾引の段、秋布輪栗に手もなく短刀を打おとされ、手ごめ(に脫カ)なる立まはりあまりよはし、少しは太刀打させたらばよからんとの事

これは只その皮肉ヲ見て作者の骨髓を見玉はざる故、左思召候なるべし、君のごときよく稗史ヲ見る人すらかくの如し、況只死眼ヲもて見る人には、いよ〻さおもふべし、彼段ニ秋布ヲよはく綴り候も、作者の意は

不然候、輪栗の巧言秋布をわが女兒也といふ、この事すべてさもありけんかと思ふばかりなれば、秋布も虚實ヲ定めかねて、胸塞り落涙に及びよゝト泣き候事、本文ニ見えたり、然ルに俊平と角口つのり既に闘諍に及ぶニ至り、秋布こらへかねて轎子ヲ切破り出る時、輪栗息ふきかへしてうちむかふ程に、既に說迷されたる半信半疑の秋布は、面ヲ對するも不意故猶豫せしヲ、輪栗がいちはやくその短刀をうちおとし、笠にかゝりて手ごめにせし也、秋布にこの迷ひなくば嘉二郎ヲすぐ討んと思ふ念力あり、いかでか輪栗におめ〳〵と手ごめにならんや、これこの作意のおくの院ニて、當時秋布の心もちになりて綴りたるにて、所云骨髓也、君すら貴評こゝに及ばず、誰かよく拙作ヲ見るものぞ、實ニ嘆息のみ、御一笑〳〵

一糸萩が妬み餘りニ癡ニ過たり、かやうなる痴女はあるまじきとの事、これも今時の只のむすめにして見れば、一向に辨へもなき痴呆に似た

り、然ルに糸萩が亂心は前世の因果ヲ引くゆゑにて、はじめ今理の段の糸萩とおなじからず、譬ば吉次と出あひし後は物の怪のつきたるものと一般也、則是が趣向ニて左なくては結局の因果物がたりニ都合しがたく候、父母も人々も見物もしれ易キ事に、糸萩ひとり迷ひの解ざるは故ある事にて、痴といふべからず候、且三年前に吉次は弟浦二郎と稱して今理へ行し事なども、みな前因の係る所ニて糸萩の業ヲ果すべきよしあれば也、但ひが事にや

一龍神ヲあまり遣ひ過たること の事、この龍神を酢ニも酒鹽ニもつかひ候は、魚蔬の用意すくなきに、本膳にとり硯蓋、吸物迄、只一枚の鯛かひらめにて、いろ〳〵にしてくはせるが如し、これら尤作者のはたらきと見る人もあり、但しひが事にや

右後集は二十餘年後の急案、木に竹ヲ接ぐ心地して一向ニ綴り候心もなきに、年々板元に責られ已むことを得ず、とやらかうやら尾ヲ附候も

の故一場も得意の段は無之候へども、さりとて用心せざるにもあらず候、人物は前集の外ニ多く役者ヲふやさぬが、作者の苦心ニ御座候、これは貴評にも御察しの趣よく聞え申候

八犬傳七輯出板の遲滯を氣にして、板元の消息を待ちわびながら、從來の致し方不實なりとて、斷然面會を拒絶したのも、翁のきかぬ氣象が現れて面白い。

妙々奇談は鵬齋、詩佛、米庵、五山、文晁等の惡口を綴つた物で、爾來此類の書が續出して、互に樂屋さがしの惡口雜言を鬪せたのである。　黨同伐異の陋弊を歎息して、求めて見たくもなしといつた此翁も、當世奇話といふ小册子の最先に評二水滸一羅貫中罵二馬琴一の見出しで、槍玉にあげられて居る。儒者の番付も種々あつて、そのいづれであるかは不明なれど、多分溫知叢書第三編に收めた妙々奇談の後に附したものを指すのであらう。　こんなたはいもない物に自分の名を入れて貰ふ爲に、壹朱づゝ入銀するとは

隨分安直な名譽である。

山崎美成の文教溫故は文學の沿革を簡明にしるした好著である。それを好古餘錄と外題をかへた本のあるのを、何故だらうと疑つてゐたが、此手紙によると、賣れなかつた爲に、書肆が勝手に改題したものらしい。

一八犬傳七編め之事、先便にも如得貴意候、三月中旬後板元より付不申候、四五月の間兩度迄人遣し安否尋候へども、いつも主人他行のよしニて不沙汰ニ打過候、風聞ニは弟方本家立行がたく、右之義ニ拘り不得寸暇と申候へども、實は夫のみならず、自分の內證も甚むつかしく、八犬傳前板は多く質入いたし有之、處々より注文有之候へども、右之仕合ニてすり出し候事も不叶、剩此節右之板流れ賣ものニ出候よし、如斯仕合故七編彫刻は大かた揃ひ候へども、製本の元入差支出板延引のよしニ御座候、二の卷迄は校合いたし遣し候へども、三の卷〻末は校合すり本未見候、先月中板元參り候へども、是迄のいたし方不實ニて平生の口さち

がひ惜く候間、對面不致候、とかく八犬傳は板元むつかしく御座候、金主なき芝居ニて立ものゝ引とゞめられ候と一般、是も又板元でもかはり不申候はゞ引つゞき出板無覺束奉存候、見物は待かね飯田町舊宅抔へ度々出板の有無ヲたづねニ被參候仁も有之よし、武家方なは當春中前金ニ板元へ代金わたしおかれ、うり出し之節一番ニ遣しくれ候樣にとたのまれ候も有之由ニ候へども、右之仕合故いつ頃出板歟難計候、前板も只今すり出し候へば渇し候處故、二百部ツヽ屹とうれ候よし書肆等申候、をしき事に御座候

一妙々奇談御覽被成候よし、これは素人の藏板ニて壹人前壹朱ヅヽの入銀にて出來のよし、老拙はいまだ見不申候、最初の番付やうのものは只今一向無之、醫師の番付は所藏いたし候へ共、儒者の番付は出るよりはやくもめ合出來、早々かくし候よしニて不分見候キ、いにしへより唐の黨錮、宋の三傑のごとき宿儒先生の威勢爭ひめづらしからず、東坡な

ごは伊川を罵るに疫鬼をもてし候へども、程氏のみ一言あらそひ不申候キ、業はもの〳〵しく候へども、地がねは大俗ニて候もの世に多く有之候、尤にが〳〵しき事なるに、梓行いたし候て後世迄ニ恥を遺し候事、いかなる心ぞや、實に嘆ずべき事と存候へば、求て見たくもなく打過申候

一水戸ニて御梓行の臺灣鄭氏紀事は、あはれめでたきものニ御座候、山崎美成が文敎溫故は一向うれ不申候よし、兩書とも當年出板、被成御覽候哉

美少年錄の檮杌閻評に依つたことは、木村默老の國字小說通にも一寸いつてあるが、此書面によつて其の由來が精しくわかる。檢閱官に對する不平は今日でも絕えぬ事であるが、幕末の窮屈さは思ひやられる。賄賂とか贈物とかいふ文字を頻にやかましく言つて、取除けさすのは、我身に後暗い覺えがあるからで、それがために文章を害ひ前後の關係を失ふな

ゞの迷惑を訴へた文句は、この後の手紙にも往〻見えて居る。

一過頃御允借之檮杌間評綠牡丹兩部、當盃休中繙覽仕候、檮杌のかた文章も宜候、明末の魏忠賢が事を旨と作り設候ものニて、二十四五囘迄は一向の作り物語ニておもしろく覺候、末に至り明史の趣ニ合せんとせし故、其事實に過テ却おかしからず候、綠牡丹のかたも相應ニ出來候ものニ候へども、兩作ともつゝまやかなる事は無之いづれ(も脫カ)大放しの事のみ多きは、唐作者なればなるべし、檮杌のかたよき所半分と思(マヽ)牡丹と春ませ美少年錄の趣向ニ取組、此節晝夜共右よみ本著述ニ取りかゝり、三の卷ノ上まで稿之候、板元せひ／＼正月中ニ出板と急ぎ候、私方は隨分間ヲ合せ候へ共、畫工ト板木師ニて毎度慕支候故、正月のうり出し心もとなく奉存候、三四月ニ至り候てはうり出し時節あしく候間、もし正月製本の間に合かね候はゝ秋ニ至りうり出し候樣談じ置候、然ル處又壹部よみ本の作無據引受ケねばならぬ義理合も出來そうに

候、もし左候はゞ黒牡丹の方は引放し、別の物ニいたし取直しつゞり遣し可申哉とも存候、とてもつき崩しこの方のものにせねば用立不申候へども、乍去少しにてもより處有之候へば、さらすぢより樂に御座候故、御借書ニて大に資を得悦び申候、今にろく／＼不被成御覧候書を、久しく引留借用仕候事、無心之至り恐入候へ共、右之仕合に御座候間、今姑く御かし置可被下候、飜案ものヲ先ニ被成御覧候而、後原本ヲ御覧被成候方、却御たのしみニも可成抔と手前勝手のみこぢつけ申候、御一笑可被下候、檮杌の方美少年錄の書名ニは不都合のものに候へ共、無理ニ合せ候つもりニて綴りかけ申候、いづれ大部もの七八編ニも至り不申候はゞ全部致まじく候、來春四冊（上下分巻）ニて五冊出來、引つゞき二編めも綴り來秋二編め出板、夫より年々二編ヅヽ出板いたし度よし板元申候、うまくその通りニゆけばよいがと存候事ニ御座候

一檮杌間評前の藏弃のぬしの所爲なるべし、檮機間評としるし有之候、

是は唐山にて機字ヲ省文ニ机とも書候により、杌ヲ机とよみて機とし
るし候事と見え候、書名は檮杌に御座候、窮奇檮杌はわる者の事ニ候、檮
杌の熟字すら知らでは此小説いかゞよみて解し候哉無覺束候、前のぬ
しのわざなりとも是は御書直しおかれ候樣ニと奉存候、くれ〴〵も御
蔭ニてよほどの資を得候て、感戴奉多謝候

一傾城水滸傳六編上下二帙先月中旬致出板候、定而被成御覽候半と奉
存候、同七編並ニ漢楚賽初編も五六日中ニうり出し可申候、當年は改方
ニて彼是禁忌を被申、賄賂などいふ事、或はひとやの事、役人庄官などい
ふ事も忌れ、甚困り申候、彫刻ニ出し候ものは入木直し等いたし候間不
都合之事も可有之候、其思召ニて御覽可被成候、近來彌拙作流行、諸板元
の責を請候上、悴久病ニて家事外事共老拙一人の身上ニかゝり、大抵明
六時より夜は亥中迄寸暇無之、いかなれば如此被役候事哉と、われなが
らあやしく候、來春は諸板元へかたく斷候而、著作の數を減じ折々息ヲ

吻く心がけニて罷在候、金翹傳抔も處々禁忌を申立られ困り申候、改方小說物抔は夢にも見たる事なきにや、何事も當世と自身のうへに引くらべ、やかましくいはれ候、かやうの事も候へば一向戲作は止メて、折々たのしみに書林ニてのみ致候まことの著述のみニ可致哉とも存候程に御座候

俳諧營業者が花の下の稱號を難有がつたやうに狂歌全盛の時代には、宗匠號の金看板も營業上必要である。かね〴〵此事に熱心な眞顏がいよいよ其目的を達した得意さは想像に餘りある。藤色の裝束をつけて笙篳篥の音樂入りで、しかつべらしく披講をやつた眞顏の樣子が、目に見るやうで噴飯に堪へぬ。しかもそれが實は詐僞師に一杯くはされたのだとあつては、いよ〳〵以て前代未聞の珍說だ、了阿は村田了阿である。

一當地狂歌師四方歌垣（眞顏）事六樹園（めし盛）事、當秋中京都二條樣より宗匠號御免許補任之やうなる奉書を被下、御自詠御自筆の御歌ニ各々藥玉

ヲ添被下、其上水干烏帽子差貫等一式之裝束ヲ被下候よし、眞顔側狂歌師點者萬象亭は准宗匠、其次々もの四人は宗匠格とやら申事、眞顔飯盛は藤色、准宗匠は極薄藤色、宗匠格之ものはトキ色とやら申事ニ御座候、願ひ候ニもあらず、かの御方之思召ニて被下候よしなれば、進上物も手がるく太刀馬代銀馬代等ニて事濟候よし、六樹園は九月中旬兩國大のしニて宗匠弘の會いたし候へども、裝束は不着用、上下のよし、眞顔は龜井戸天神別當所ニて弘メ會いたし、おの〳〵裝束ニてねり候て座敷入いたし、御書幷ニ連中の歌披講の時、うしろニて樂を奏し候よし、前代未聞の珍説ニ候、あさくさの了阿法師がわるくちに

アヽラようがましや宗匠なりの翁たちめんばこありと思ふばかりに

彼人々は徒弟を集め門戸を張候て、渡世ニいたし候事故さもあるべく候へども、隱逸の心より見れば風流はうせてきのどくなる事に思ひ候、

あなかしこ(以下四項省略)

がいづれも委曲を悉した詳密な長文であるのは、當人の根機强い事を證すると共に、今日のやうに三錢の切手一枚で何處へでも飛んでゆくとい ふ譯にいかず、一々飛脚を賴んで江戶から松坂までに二週間もかゝる程億劫なものであるから、自然あれも是もと慾張つて書いたものであらう。馬琴の手紙

三

我々の手紙は極文句の時候の挨拶などは候文で書いても、少し面倒臭い用件になつて話がこみ入つてくると、いつのまにやら言文一致になつてしまふのが常であるが、馬琴の手紙は流石にそんな事はない。別に骨を折つて書いたものではないが、始終文體が一貫して、しかも痒ゆい處へ手の屆いた行き方で、言はんとする所を言ひつくしてゐるのは、書簡文の標本とすべきである。

以下書中の事實について多少の蛇足を加へて、江戶時代の文學史に疎い

人々の理解に資する。尙々書の所にある傾城水滸傳は合卷の草双紙でその初編は文政八年正月の出版である。水滸傳の人物を勇婦烈女に翻案したもので、此冊子は金瓶梅と共に馬琴が合卷物中の大作で又當り作である。

水滸傳の評論云々といふのは馬琴が最も得意な十八番で、水滸傳の隱微を解したものは、天下只吾輩のみだと常に誇つて居る。傾城水滸傳八編の序に、宋江は逆賊なり、それを忠義といふは解し難しといふ或問を設けて、之に答へて、

子は只水滸の皮肉を見て未だ骨髓を知らざるのみ、宋史に載せたる宋江は逆賊にして降りしものなり、かくて水滸傳を作りし者、這賊の字を反覆して、宋江をもて忠義とす、よりて彼稗史なる宋江は初は循吏、中は反賊、後に至て忠臣たり、反詩の趣向は天罡地煞の惡星出世の應験にて、則宋江が眞面目總て奸邪の條にあり、かくて石碣天降りて、再び妖魔を

鎮めしより、獨宋江のみならず、凡一百零八賊皆忠義の良士となれり、かゝれば勸懲正しからず、善惡無差別の趣向多かるは、妖魔出現の間にして、最後の宋江最後の百七人と同じからず、浮居家の所謂卽心卽佛、反覆すれば非心非佛、成佛は得易くして、無成佛は最得がたし、是に由て觀るときは、水滸の忠義は虛名にして、妖星も又空兆なるを、金聖歎すら尙曉らで、多く評言を費したり云々

傳馬町御店は殿村家の江戸出店をいふ。新藏といふはこれも松坂の豪家で、同じく江戸に店をもつてをる小津桂窓の事である、桂窓名は久足、又與右衛門とも稱し、百足町小津家の主人で、文雅を好み馬琴と親交があつた。馬琴が篠齋への手紙の中に小津氏は太平の樂民、羨しい身の上だといつて居る。

殘櫻記は南朝方の事を記した伴信友の著述。屋代翁は藏書家として有名であつた屋代弘賢のことである。

馬琴が方位家相をやかましく言つた事は、人の知つてゐる所であるが、此信仰は晩年の不幸つゞきで、いよ〳〵甚しくなつたやうである。併し最初はこゝにいふ如くほんの道樂から起つて、それが段々深入りしたものと見える。

水滸畫傳は初編十册だけが馬琴の翻譯で、二編以下は蘭山の翻譯である。馬琴がこれを中止したのは、南柯夢(水滸畫傳初編の翌年刊行)の挿畫の事で北齋と不和になつたからだといふ。二人共負けぬ氣の、爭論の末物分れになつたものゝ、互にその技倆を認め合つて居つたのも面白い。北齋は馬琴が一々口やかましく指圖をするのが業腹であつたと見て、いつも作者の下繪通りには書かず、强ひて反對に書いた。そこで馬琴も後にはこの呼吸を飲込んで、この人物は右にかゝせようと思へば、わざと下繪には左にかき、上にと思へば、わざと下に書いたといふ事が、別の手紙の中に出で居る。

琴魚樣とあるは篠齋の弟で、櫟亭琴魚といつて馬琴の門人となつて刀筆青砥文、窓螢餘談等の小說を著した人である。琴魚はこの翌々年、天保二年十一月二十一日四十四歲で亡くなり、馬琴の忰宗伯は、天保六年五月八日、三十八歲で歿した。

傾城水滸傳初篇ゟ三編迄此節再板に取かゝり候、板元物入をいとひ初板をおつかぶせぼりに致し度存候へ共最初のすり本板元に無之、依之先年娘共へ遣し置候校合ずりをとりよせ、ほり極わろき所は書直させ候つもり筆工え談じ遣し置候、昔ゟ草ぞうし合卷類の再板は、無之、板元の僥倖古今未曾有と申事に御座候

(前文略)

○拙著新作傾城水滸六七八三編、漢楚賽、金毘羅船、金魚傳、殺生石二編悉御手に入被成御覽候よし御路評被仰下忝承知仕候、其内水滸八編金魚傳殺生石は近頃打廻り候由に付いまだ御熟覽は無之よし追々御覽之

上貴評くはしく可被仰下候、唐山小說の譯文とのみ御見なしなき樣に奉希候、傾城水滸も此節に至り云々と思召候よし本望の至に奉存候、右評論八編之序にチヨツトあらはし候所、如貴命大眼目にて和漢とも人の氣のつかぬ所に御座候、右水滸傳の評を別に綴り候樣御すゝめの趣忝承知仕候、かねては水滸書傳を著し候節附錄と可致存居候へども、近來見識かはり書傳之譯文をことわり候ていたし不申候故、せめてもの事と存、傾城水滸傳の自序に少しづゝ書あらはし候、されぱとてこの評を別に一書にいたし候ては中々多くうれ可申品に無御座候、藏板抔にいたし候はゞ格別、何分賣物にはなりかね候故、何ぞ隨筆物でも著し候節その內へ書あらはしおき可申候、乍然近年板元の利德になり候合巻ものゝ作に追れ一日も寸暇無之候間、隨筆物等あらはし候事も成がたく何事も生活の二字に羈せられいななる著述のみいたし居候事に御座候、御賢察可被下候(三項中略)

一美少年錄第一輯五冊當月八日にうり出し申候、かねて御約束に付板元えは去屋敷ゟ被頼候と申、壹部とりよせ候に付同九日傳馬町御店迄差出し候、其段昨日新藏殿え及物語候處、右代金取替勘定爲濟申度よし被申候、只今にて無之候とも不苦候間いづれ本着の上五月前迄にても御序の節にて可宜旨申候へ共、小津ぬし被申候はヶ樣之事かねて被頼候間、とり替出銀之方勝手よろしく候、かやうの慰ものは店中へも遠慮のすぢもあるものに候へばと被申候、その義も可有之事に候へば則小津ぬしゟ代銀請取之爲念書付わたしおき候、委細は小津氏被申候へ共爲念如此御座候〇扨右美少年錄早春多務中夜々せわしく校正いたし壹部打つゞきてはよみ不申候間、此節再閲いたし候處ヵヶ候所句讀の〇等、多くほりおとし候處直らざるはさら也、徘徊を俳個とほりちがへ獨女ヲひとりむすめとつけがなあやまり、然さらんにはヲ然しらんにはトあやまり候、書ちがへたる歟ほりたがへたる歟ヶ樣之誤り多く有之、こ

れらは備書幷板木師の所爲に候へば、さのみ作者の咎にも成るまじく候へ共、五の卷十二丁めの左り阿夏が珠之介に過來しかたを示す條に然《さ》る程に瀨十郎ぬしは德る事ありて、そなたか三歲《みつ》の秋捌《は》月《つき》に主君の氣色を蒙りて周防へかへされ給ひしかども云々

とあり、是は作者の大あやまりにて瀨十郎が周防へ追かへされしは夏肆《う》月《づき》也、遠くもあらぬ四の卷のはじめに此事あれば、御見物も大かたは心づきて日月ちがへると難じ可申候、冗紛多用中夜々せわしく校合いたし五六丁づゝむしり取にもてゆかれ候故、此誤一向心づかず此度はじめて見出候、然れどもはや及出板候故いたし方なし、これらの義は第二輯にことわり置可申存候へども、他人はとまれかくまれ貴兄は早速御心づかれ候て御評中に云々と可被仰下候義と奉存候、右之本五の卷十二行●(丁の誤か)ノうら秋捌月ヲ夏肆《う》月《づき》と御はり直しおき被下候て、扱御懇友がたへも御見せ可被下候、何分おち付候て校合もなりかね每度

かやうの誤有之候事に御座候、夏四月を何とて秋八月とは書候哉と再按いたし見候へば、阿夏幷に木偶介父子がみやこをたちて、かまくらへ赴んとせしは秋八月也、それを不圖思ひたがへ候て瀨十郎が周防へかへされ候時日にあやまり候事と被存候、勿論別に稿本と申ものなく心一つにたゝみこみ腹稿のみにてぶつ付ケ書に綴り候一本のみに候間、かやうの思ひちがへも有之候、御一笑可被下候、追々長日にもなり候間御手透之節御熟覽の上御高評くはしく御聞せ可被下候、尤も美少年錄すり本板元ゟ大阪へ登せ候は三四月比にも成るべく候、夫ゟ大阪にて製本いたし賣出し之時節を見計ひ候事故、當秋か冬ならでは御地へ本廻り申まじく哉と奉存候、その節迄他鄉へ本まはり候事は板元幷に引請江戶より捌き候もの甚厭ひ申候、然處内々にてはやく被成御覽候樣取計候事に付、此義御心得被下あまりハツト本御手に入候事御噂被下まじく候、就中御地の本や抔に聞せたくなき事に御座候、此段御承知可

被下候、老拙手ならはやく他郷へ本遣し候など申事、流布いたし候ては後日に口がきゝにくき筋も有之候也（二項略）

一平山冷燕、四才子傳、去秋中被成御覽候付、石魂錄前集の本居（本據カ）御見出しの由さこそと珍重に奉存候、四才子傳は能文にて詩句聯句抔妙也、乍去趣向は淡薄にて今の流行ニあひ不申候、文人の歡び候小説にて御座候、石點頭は未被成御覽候哉、これは一トきりものながら、よほどおもしろく覺候

一殘櫻記之事去年十月申上候處、御藏書御かし可被下候よし被仰下忝奉存候、然處舊臘屋代翁よりやう〳〵允借せられ候間早速寫し取申候、此段先便狀中に得貴意候故御承知と奉存候、依之御かし被下候には不及候、萬々奉謝候

一方位宅相之事近來迄老拙は一向眷念不致候處、近ごろ追々流行に付ちと見たく存、三四年己來追々その筋の書を買取熟讀翫味いたし候へ

共よみ易く解し難きものにて、一朝には自得いたしがたく候處とかくいものいを極メいい申さいねばい濟さいぬい辦故、多用中夜々熟讀或は老のねざめの曉毎に工夫を凝し、やうやくその方にわけ入り發明いたし候事も有之、依之自試み或は人にも施し候處、實にい有驗いの事多いく禍い福い的い然いあいらいそいはいれいぬいい事いいにい御い座い候い、陰德にもなり可申事故方位宅相手引草の書を著し可申候と思ひおこし候、是迄處々にて出版の書によきものも有之候へ共、その術を惜み素人にはわからぬ樣に書あらはし候故、世人一統の爲になりかね候、拙者はその術を惜まず、たれにもわかり候樣いたし度存候事に御座候、これらの筋ニ入用の書

協紀辨方

これは康熈帝欽差の書にて天朝にももちわたり唐本にて流布いたし候、先比ゟ當地書林を穿鑿いたし候へ共、只今右之書多く無之よしにて未入手候、御地並に津の山形屋など御序に御尋可被下候、代金貳兩ゟ

貳兩貳分位迄に候はゞ御買取可被下候、もし御地に無御座候はゞ當年抔若山へ御出かけ被成候はゞ定て京攝にも御逗留と奉存候、其間京大阪にて御とり出し被下候樣奉願候、尤老拙方にても愈〻江戶に無之候はば大阪懇意の書林へ可申遣候へ共、左樣いたし候へば高料にても買取申さねばならず、こゝらの意味も御座候間、不圖心付願置申候、此外崇正通書通德類情なども入用の書に御座候、是は江戶にも可有之存、先日鶴やえ申遣し置候へども、いまだ本差越し不申候、協紀辨方は江戶書林處々たづね候へ共、無之樣子に付御勞煩奉希候、されば迚只今差急ぎ候事にも無之、御失念なく御便り宜候節より〱御穿鑿被下候樣奉希候也、又一ッ申試み度事御座候、高井蘭山あらはし候水滸畫傳第二編舊冬出版、當早春借りよせ候て致一覽候、貴兄は未被成御覽候よし、如貴命畫はさすがに北齋に候へば不相替よろしく候、乍去作者より畫稿を出さず畫工の意に任せかゝせ候と見えて、とかく畫工のらくに畫れ候間

初編には劣り候樣に被存候、著述は手みじかに綴り候故、通俗本同樣之處多く一向に骨の折れぬものに御座候、あの通りに候はゞ百囘早速滿尾可致候、只水滸傳のすぢのみ書つらね候までに御座候、唐山にては李卓吾本の姿よく似たるものに候、をしき事かな、あたら水滸傳を略文にせしことよと存候事に御座候、且簡端に作者譯文の大意を述候處に字音は韵鏡に本づき假名は古假名によるよしにて、酒食をシユシイ蓑笠をサリウとするよしなどことわりおかれ候、尤なる事には候へどもそれは物にもよるべき事にて、迷惑の惑も音コクにてワクの音はなきを古人久しくわくとよみ來たり候、さればとてメイコクとかなつけ候ては婦幼には何のことやらわかりがたく候、且假名は古假名をもてするよしなれど、いゐひのかなづかひすら多く錯亂いたし候が見え候、故あるかな彼人著述是迄あたり作なし人情をよく解さぬ人歟と存候、只これのみならで水滸傳に見え候事の或問をのせられたる條に、宋の徽宗

欽宗の時秦檜といふ惡宰相ありて云々、朱子程子も宋人也云々と書れ候、徽宗欽宗の時には蔡京童貫等が政を亂りし由は水滸傳にも見えたり、これが水滸傳の趣向の出る所なるに何とて秦檜とは書れしにや、秦檜の政を執りて多く善人を害せしは南渡の後高宗の時にあり、徽宗の時は秦檜は微官にてなかなか政事に口出しする者にあらず、金國へとらはれて年經て逃て本國に歸てより、そろ〳〵立身して宰相になりし事、通俗本でもよむ程のものはしりたる事に候、然るを蔡京童貫が事をいはずして秦檜と書れしは暗記の失か老耄故か、これら就中きのごくに存候事に御座候、且亦水滸傳を今の草ぞうし合卷やうの物同様といはれしも、あまりすまし過たる事にて中々水滸傳の作者の深意は夢にも思はぬやうに被存候、ケ樣の心もちにて水滸傳を譯し候へば、ほねを折らぬもその故ありと返す〳〵も嘆息にたへず、わづかに壹の卷ばかりよみて大ていい樣子しれ候間、書ばかり熟覽して早速返し候也、いかで

一わたりは御覽あれかしと奉存候、但し世評にも口繪なき故さみしく且一册にさし畫三丁づゝなるも、畫傳といふにたがひてすげなしと申すもの多く有之候、なれども百八人の像は半丁に二三人ヅヽ、別に一卷といたし、これははなしても賣り候よしにて只今彫刻最中と及承候、この出像の卷はさすがに北齋筆なれば評判よろしく乾度賣れ可申と存候、出板之節見候ていよ〳〵よく出來候はゞその所計求置可申存候事に御座候

(三項中略)

一琴魚樣とかく御病身のよし、いかで御壯健にいたし度祈申候、悴抔廢人同樣にて何事も出來かね候、とかく壯健長壽ならでは思ふ事も成がたきもの、天性とはいひながら生涯の損に御座候、御保養專一、いつぞや進上の養生訣などご御翫味あれかしと奉存候 (以下略)

四

篠齋の答書中に屈服の文字あるをいたく氣にさへ、屈服の字義から說き始めて、一々その批評を辯駁して「かくても僻事に思召候はゞ御屈服なく御教諭奉希候」と執念深くいやみを並べ、唐山の批評法を說いて篠齋に致へ、金聖歎も水滸の骨髓を悟らず、その隱微を洞見したるは乃公一人のみとの大氣焰、篠齋ならざる者も屈服せざるを得ぬ次第である。

第一項のでく介云々は、美少年錄一輯第五回に「木偶介(お夏の夫)は又小夏(木偶介の携子)を將て、四條河原に赴きつ、吹皷し舞踏らして、僅に其日を送る程に」云々とあるに對して、篠齋は舞踏をして錢を乞ふものと認めて評したるを、馬琴は飴を賣りその餘與に舞踏する意なりとの答辯なれど、この文章だけではさうは受取れず、馬琴は飴といふ詞なくて、只四條河原に立つとのみありても、江戸人は皆三吉飴の類と思ふべしといへど、これは隨分無理な强辯で、篠齋はいさ知らず、吾輩は到底屈服する事は出來ぬ。

曲亭の小說に芝居がゝりの趣向多きは何人も認める所で、それを今更ら

しく辯解するも野暮なり、文句いさゝかも淨瑠璃本を借らぬといふもいかゞ、彼の七五調が淨瑠璃に負ふ所多きも明白な事實で、例を引くまでもなけれど、美少年錄の瀨十郎お夏後朝の所に「下屋に到る宮階子の、手摺も高き足音に、踏覺まさるゝ折介は、稍身を起し見かへりて、慌てふためきそと直す、足駄は雨後の且開、天は晴れてものち濕る。笠屋お夏が別れ路の名殘はをしや鴨川原、おもう郎はゆく水ととゞめかねつゝ見送りけり」とある類、純然たる淨瑠璃の段切ならずや。又これ程淨瑠璃めき正本めくが嫌ひならば、其作が直に芝居に移さるゝを好まざるべきに、それは又大得意のやうである。何でも人の言ふことには一往楯をついて見ねばすまぬが、此人の性癖と見える。

(文政十二年三月二十六日付)

八犬傳七輯上帙並に美少年錄初輯木偶介小夏を將て四條河原にて云々等の貴評の御答等、御懇友の義故心事無覆藏申上候處、逐一御再答承

知仕候、如貴命面談ならば一句にても事濟可申處、筆談にては何か物々しく聞え候ものの故きびしく中斷候樣にも可被思召候、乍去御再答の御文中に屈服々々と多く御記し被成候、是は懇友の間にてはいかにぞやと奉存候、すべて屈の字は寃にも枉にもかよひ候事也、屈服といへばわれには理あれどもその理を枉てかれに從ふの義なれば、何とやら耳だち候て無理にたしなませまゐらせ候樣に聞え、限りなく遺憾之事に奉存候、から國にて寃ある罪人廷尉の面前へ出るとき、叫屈とあることなどは君がつねに見給ふ俗語小說にも多し、何分已來は無御屈服、汝はしかおもへどもわれはしかおもはずと被仰下候方忝可奉存候、懇友の間にて屈服は勿論すべて人を寃屈いたす事尤冥加おそろしく存候故、先此義より中斷り奉り候、御再答に云々と風柳のごとき御答も屈服の二字にかけて見れば御內心にはさは不思召よしはしられたり、懇友中に介意ありては不快候故、かへす〳〵も中斷りたく不省失敬及此義候也、

但し今の俗語に退屈又屈たく抔といふ屈はかろく聞え候へども、それは人に對していふ義にあらず、人に對して屈服といへば寃枉と同義也、遺憾々々

一でく介四條がはら云々の事、らうのすげかえにもいたくおとり候樣に思召候故蕭落せず、御地にも地げいしやあればその徒の事御存の事云々と蒙命候故、尙又奉盡心緒候、でく介小夏を將て四條河原云々とある故、乞兒のゐせさるがうして錢を乞ふものと同樣に被思召候ての貴評なるべし、四條河原に立て世をわたるものゝ素人あり非人乞兒もある事そのごとくなるべし、この差別をはやくしらせんには、云々の猿がうして飴をうりて活業にすといはゞ、かやうの貴評はあるまじけれども、いかにせん當今三吉あめ抔唱て親はあめをうり、すり鉦を鳴らしゐせ歌を唄ひ、をさなき女兒におどりをおどらせ緣日のさかり場に立つゝ生活にするものあり、木偶介は則これ也、かくつゞりなせば禁忌にふ

れてむつかしく、且三吉あめの類もしこの書を見ば、でく介は癡漢にて且枉死する故よろこぶべからず、文化中大雨車力を流すといふ地口あんざうノ出しヲ見て、車力共大に怒りその家を破却せし事あり、かゝるためしも候へば飴をうるといふことはかくして書ぬ也、飴といふことなくて只四條がはらに立とありても、江戸人は三吉飴の類と誰も思ふべく候、兩國にて軍書講釋をするも新内ぶしをかたりて人をよするもかげ書をして人をよするも、みな兩國橋邊にたつといふべし、薺落せぬは禁忌によつて飴といふ事をかくせしにもあらん歟、勿論お夏は高名の妓也とも美少年錄にてはこよなき淫婦にて、只珠之介を引出すまでの道具につかひしものなれば、たとへしみたれ候樣に聞え候ても疵にはならず、周防にて門づけをするに至りては論なし、愚はかやうに思ひ候て綴りなし候へども、此處御氣に入不申ば是非なし、かゝくてもひがごとに思召候はゞ御屈服なく御教諭奉希候

一八犬傳赤岩の段、一角は鄕士なるに童僕從は過分のよし貴評に付、云々と御答申上候處、なほ男の童とあるかた可然思召候よし一トわたりは聞え候、乍去愚意はしからず候、一角の妖怪たる事は諸見物のしる處、その相手は名におふ八犬士の一人たる現八也、かゝれば一角が景樣をいかにもおもくれて物々しく書なさゞれば、看官見つゝひや〳〵するやうには思はぬ也、童僕從をつかふに格式の差別なくば疵になるまじく候、後の打扮の長絹長袴も右の意にてつゞりなし候、しかるを芝居に似たりとて嫌ひ給ふはいかにぞや、縱(たとひ)其打扮立まはりは雜劇の趣を寫しても、文句いさゝかも淨瑠璃本を貸らず芝居の正本めかぬ樣に書とるを、作者のはたらきと見てもらはねば骨折がひなく奉存候、拙作には每度此ふり合多し、これら御氣に入らずは是非もなし、淨るり本と正本めかぬ文辭をうれしがり候人も往々有之、世にいふ千差萬別なれば一人の好憎は公論にあらずと申せし也、かくても猶ひが事に思召候はゞ

御教諭所仰に候

一雛衣が疵口より玉の出る事云々と蒙命候に付、しか計にてはバツとしたる事也、玉の出る所以もあらまし考得させられ候て御示し被下候様申上候處、亦云々と被仰下候、なる程芝居など見物してをるとき、そのもやうによりおし付ケたれば殺さるゝであらふ、こゝではおし付鐵炮を打かけるであらふなど思ふとき、果して推量のごとくなる事あり、其たぐひにて御推量被成候事と得心仕候、むべなるかな君が拙作を見給ふ事すべて芝居役者の立まはりの巧拙をのみ評して、狂言の出來不出來に拘らぬたぐひと相似たるやうに奉存候、芝居はかたちをもて人に見するもの故十に八九は看官只その役者の巧拙をのみ論じ申候、俗語小說は文のみにてかたちを見せぬもの故、よく見るものは第一に趣向の巧拙と文章の巧拙を論じ申候、金瑞が水滸の評、張竹坡が金瓶梅の評などに御心をとめられ候はゞ、愚が言の誣ざるを思し召あてらるべく

候、唐山の評者に作者の瑕疵をのみあなぐり批評するもの一人もなし氣に入らぬ處は措て論せず、只その作意の隱微をよく見とゞけて論ずるを評者の手がらにいたし候事也、今のよみ本を評する人は乍憚君御一人に限ず、唐山の評者とは見ごころいたく異にて芝居役者の評判記のごとく、只その立まはりの巧拙と文中の瑕疵をのみあなぐりて、わる口いふを專文とするのみ、書とりがたき所抔をうまく書とりたる事などは却て措て不論候故、から國の批評とはうらうへにて作者の面目を失ふこと多し、犬夷評判記のころにも此斷を申上たく思ひ候へども、指圖がましく失敬にはゞかりて得不申候き、ねがはくばから國の評者の目のつけ所を御合點被成候はゞ實に御見巧者に可被爲成候、先便の御答にきびしく申せしにあらず、此義を御さとりあれかしと思ひ候老婆親切に御座候、畢竟作者は御懇友にて貴評毎に及御答候故、埒も明候へ共古人の佳作を後生の評したらんには、その作意の隱微を得見とゞけ

ずその骨髄を得不極して、愨なる批評せば是古人の佳作を誣る也、依之金瑞が水滸の評其外の人々の批評にも聊なる疵をあなぐりて評する事は一句もなし、氣に入らぬ所は措て不論、只その隠微を見あらはすを専文にいたし候也、それすら金瑞が水滸の評に宋江を始終大奸賊と見て彼一百八人に初中後三段の差別ある骨髄を得悟らざりし故、佳作を誣たることなきにあらず、一句もわる口をいはでも猶見ちがへあり、金瑞といふとも見物魂にてシテならぬ故也、かくいへばとて已後をたしなませ奉り貴評の口を鉗るにあらず、ねがはくば役者評判記の趣を捨ておんめのつけ處を易給はゞ鬼にかな棒にて、第一の御見巧者に至り給ふべし、飽まで小説ものを御好きにて吾黨の爲第一の知己と奉存候間肺肝をあらはし候て忠告仕候、護短は賢不肖ともにあるべき人の癖也、西遊記にも悟空が長老護短といふこと多く見えたり、金瓶梅にも金蓮護短の題目あり、所云護短はまけをしみの事也、愚老もこの癖あるべ

けれどもわが事はしれ易からず、人の護短はよく見ゆるもの也、しられまゐらせしごとき生物しりにて秀才上智にはあらねども、小說は四十年一日も廢せしことなく三百種の著述にわるごうを歷たれば、その內に出來のよきはまれにて拙きが多くとも、見物に難せられて指をくはえるまでの大あやまりはすべくもおもはず候、勿論年中數種の小說を著し候故近年ふかく考候事もなく多くはなまがみにて書ちらし、加之板元の居ざいそく、その責をふさぐを第一の手まはしにいたし候へば、思ひたがへ見おとすこと多かり、それは一時の失なればいかゞせん、學問の要は理義に通ずるをもて第一義とす、その書となりいたく義理にちがひ候事をつゞり候しそんじはあるまじく思ひ候、水滸傳のごときは奸賊を忠臣とす、理義にちがへるやうなれど彼初善中惡後忠の三段ある隱微を見とゞけて味へば理義にあはぬ所なし、趣向の理義にかなへる哉不叶やを見とゞけて、作の巧拙を論ずるをよく評する人と申す

べく候哉、尤をこがましく失敬至極、釋加に法問孔子に說經にひとしくことをかしく可被思召候得ども、ケ樣の折ならでは申がたき事なれば肺肝を吐候までに御座候〇木工作がてつぱうにてうたるゝ處の御評は琴魚樣御發言のよし、さすがに著述御手かけ故、作者の苦心を思ひやらせ給ひし事と奉存候、本紙にしるし候たね彥並に眞顏の評論は一トわたりの事にて、よく拙作を見とゞけ候事とは不存候へども、しかれども目のつけ所諸見物と異也、琴魚樣もこの兩人のたぐひと申べし、あなかしこ〳〵

(以下金瓶梅の梗概及び西廂記の解題百數十行略之)

五

今回の手紙は著述進行の樣子や支那小說の批評が大部分で、さまで珍しい事もないが、篠齋、默老、桂窓の身上に關し、三人の交渉が窺はれる所がめつけものである。　默老は高松藩の家老で木村亘(名は通明)といひ、國字小

說通、京攝戲作者考の著あり、これは馬琴の物本作者部類から思ひ付いたらしく其の補遺と見るべきものである。此他女仙外史の翻譯や、聞くまゝの記といふ著述がある。安政三年十二月十日八十三歲で歿した。桂窓名は久足、松坂百足町小津家の主人で本居春庭の門下である。殿村と共に松坂では有名な素封家本町小津の別家で、馬琴の書簡中にも小津氏は太平の樂民羨しい身の上であると言つて居る。桂窓は安政五年十一月十三日五十五歲で歿した。三人の中默老が一番年長で馬琴とは七つちがひの弟、篠齋は十二ちがひ、桂窓は三十七ちがひの最年少者である。三人の中馬琴が篠齋と最も親密であつたのは此書簡に見ゆる如く、萬事に行屆いた緻密な性質が馬琴と意氣投合したものと思はれる。

作者部類は「天保五年甲子の春む月七くさはやすあした、蟠行散人蚊身田の龍脣窟に稿す」とのみ序文にありて、著者不明なりしが、十數年前伊原青々園氏なりしか、種々の點より考證して馬琴の著述ならんと推斷されし

が、此書簡に「中本作者の編末へ少々分註加入いたし候云々」とあるによつて、愈〻明白疑ふべからざるものとなつた。

「しりうごと」は平田篤胤、海野幸典、小山田與清、石川雅望、岸本由豆流、屋代輪池の六人の惡口をいつた小冊子で、著者は小説家主人の匿名を用ゐて居る。百家説林の解題には、大槻修二氏の説なりとて、小林歌城の作に擬したれど、歌城は八十五歳までも生きた人である。馬琴は此書の作者を知つて居たと見えて、「作者長壽ならば後年昨非をさとりて實學者の域に入るべからんに短命なりしは惜むべき才子」といつて居る。歌城の作でない事は明かである。百家説林「鳥おどし」の解題に或人の説として、しりうごとは駒込西敎寺の住職某及淺草田圃の西德寺の住職某の筆になれるを、川崎重恭の助筆せるものなり、但し重恭の助筆は篤胤以外の事なるべしとある。重恭は江戸の人、篤胤の門人で、天保三年三十三歳で歿した人だから、馬琴のいふ所と合うて居る。

又列傳體小說史の馬琴傳に之を馬琴の作としたのは飛んだ間違ひで、地下の馬琴も定めて呆るゝことと半晌ばかりであらう。

篠齋の媳婦が十三年振に妊娠した悦びもしばらくの間で、このつぎの手紙によると、正月二十日に月足らずで生れて、間もなく死んだとある。桂窓は文通くはしからずと稍不平のやうであるが、年若な桂窓のなげやりが、八犬傳九輯に入れる長歌に行違ひを生じて、馬琴の肝癪玉を破裂さす一件は後日の手紙に見えて居る。

(天保六年正月十一日付)

(前略)

一作者部類二部之筆耕料差引御勘定拾三匁三厘七毛、此銀三朱ト玉銀貳ッ被遣候、被入御念に候義憹に落手仕候、玉銀掛目少々餘分に候へどもそのまゝ收候樣被仰越是亦承知仕候、右兩玉銀かけ見候處貳匁貳分五厘許有之、則兩替いたし候へば右の錢貳百貳十九文に成候、右を以勘

定いたし候へば、四拾五文過に御座候へば預り置候、巽日八犬傳俠客傳本代御勘定之節、右四拾五匁御引落し被遣候樣奉存候、右作者部類一本は桂窓子へ被遣、且先本之事云々御こゝろ得被下候よし安心仕候〇扨右壹の卷中本作者の編末へ少々分註加入いたし候、則別紙にしるし上候間御藏本へ別紙之通り御書入被成候樣仕度奉存候、尤此段桂窓子へも申遣候事に御座候

一(松蔭日記の事云々略之)

一舊冬より夜分は不眠且寒氣に堪かね候故、薄暮ゟ每夜倚爐安閑と亥中迄罷在候故、かねて借用の兩婚交傳並に隔簾花影を每夜披見、かねても申上候ごとく花影は先達而四五冊よみかけ候處、其後久しく成候而忘れ候處も有之に付、先づ兩婚交傳ゟ看かゝり候處、此小說奇妙の珍書にて且筆工ハキ〳〵といたし、燈下にても至極よみ易く事の外おもしろく覺候故舊冬全部看訖り候、是迄恩借の小說中かばかりめでたき妙

作は未覺候、尤前編平山冷燕に似かよひ候處なきにあらず候へ共、其筋よく通り且巧に御座候、但し詩は前編に劣り候樣に覺候、譬ば平山冷燕は造化天然の名花の如く、兩交婚傳は其をにせて上手の作りし綵剪花(つくりはな)に似たり、勿論二才子二才女も平山冷燕の二才子二才女に劣り候故也、此四才子の外黎妓は拔群の才女に候、是等は觀音の化身とか文昌星の化身とかせばよからんと存候、又强婚の段に綠綺をにせ物につかひ候もいかにぞやと存候、これも皆前編に不及故に御座候得ども、是は慾目にて後編にかばかりの物多く得がたく候、いかで御秘藏被成候樣奉存候、尙異日寸暇もあらば略評御めにかけたく今〻心がけ候事に御座候、一隔簾花影兩三日已前やうやく看をはり卒業いたし候、此小說も仕入本にあらず、作者こゝろありて作り候は勿論也、畢竟因果應報と色卽是空の四字を說廣め候のみ、新奇の趣向は見えず候得どもその中にはよろしき事も往々有之候、抑金瓶梅は唐山にてことの外歡び候小說に候

へども愚眼などにはさばかりにも不存候、それを蒸かへせしもの故、實は勞して功なき場にも候はん歟、譬ばよき梅也とも桃臺に接ぎ候へば花も實も佳ならざるごとくに候、看官がたは何によらず未見の小說に候へばあかずして御覽候へども野生がごとき年中小說に倦候上多用中に看候へば作り物がたりは和漢とも拔萃のものならねば眼にとまり不申候、實錄に候へば巧拙によらず速によみをはり候へども、小說の中ぐらゐなるは心不進候故長引候事に御座候、御一笑と奉存候、なれども此書も亦珍奇にて世に多かるまじく存候、いかで御秘藏可被成候樣奉存候

右兩書も三四月比返上仕候樣被仰越承知仕候、其節迄に序目はさら也奇字抔抄錄いたし、暮春の比返上可仕候間かねて御承知可被下候

一八犬傳九輯の事先便云々中上候處、云云被仰越承知仕候、舊獵よほり立校合に取かゝり二三兩冊は校合をはり唯今すり込居候、壹四兩冊は

初校のみにていまだ校合相濟不申候、板元は當月下旬せひ〳〵うり出したいとせり立候へども惡ばり多くまじはり、就中壹の卷は以之外ほり崩し中々筆も入れがたく候故、板元方にて下直し致させ十一月中ゟ下直しにいたし、一昨日やう〳〵初校すり本差越候へども、ほりちがひ等多く有之兩三度にては手をはなちがたかるべく候、ケ樣之始末に候へばうり出しは二月にも成り可申哉、なれども遠からず被成御覽候事は一定に御座候、出板之節如例二部飛脚へ差出し直段等の事は別紙にいたし、御賢息樣迄可得貴意旨承知仕候

一俠客傳は舊冬追々に板大阪へ登せ候得ども、此節右の板不殘坂着いたし候哉難計候、とびらは彫工にて故障有之、板登せの節間に合不申候故すり本にて登せ候よし、此節やうやくすみ板出來、わくのいろ板はいまだ出來不申候、ケ樣之勢に候へばうり出し八犬傳ゟ後れ可申候、なれども是亦當春中に被成御覽候半は一定に御座候、是亦かねて御承知可

被下候

一新編金瓶梅は舊冬申上候ごとく昨年は休筆の心得にて罷在候處、九月中ゟ板元度々願出候故、十月上旬當座のがれに書稿十丁いたし遣し候處、右の書も出來候得ども何分かく氣無之候故十一月に至りかたく及斷候、然る處板元泉市伴頭儀兵衞といふもの又願出候は、主人え御斷の上に又願候は恐入候へ共、金瓶梅は諸方へ看板も引き申候、且舊板も五百部すり込仕入置候、新本の紙も多くかひ取置候處、當年出來不申候ては外聞内證とも極て及難義候間、おそく成候ともいかやうにもいたし早春うり出し度候間、御聞濟被成下候へと被口說候、且種々おくり物等いたし候へども、おくり物はおしかへして一ッも不受候得ども、板元難義に及び候ては不本意に付、書わりと筆工と別にいたしかきかけ見候處、それにては工合不宜候間、書わり計二通り書稿いたし一本は畫工へ渡させ一本は筆工つゝやり立候へども、夜分燈下にては細書出來かね

候故ことの外くるしみ、十二月十七日八之卷迄書をはり十八日夕筆工出來、十二月下旬廿一丁不殘彫刻出來、大晦日四ッ時二度めの校合相濟正月二日にうり出し候、その神速おどろき候程之事に御座候、勿論板は二ッにわらせ彫刻料壹丁例より一倍にて金貳分餘とやら申事に御座候、二日に貳百部出來うり出し同七日迄に千四百部製本出來、處々へ配り候へ共遠方へは尙行わたらずとて、小うりよりさいそく被致手廻りかね候間、板元見せにてはうらずに小うりへわたし遣し候よし、正月八日に板元年始の禮に罷越、右之趣申述大悦びに御座候、依之松坂抔へは本おそくまはり可申候、例の方よりもし不差越候はゞ右之御心得にて御催促被成御覽あれかしと奉存候

一大坂若太夫芝居八犬傳狂言之事先便云々得貴意候處云々被仰越、其後桂窓子より右狂言書本差越し被下大悅不少奉存候、早速默老へも見せ候、此狂言の事當地にても存候もの折々有之候、御禮申つくしがたく

忝奉存候、かの狂言之事實に貴評の如くたるべく致想像候事に御座候
一俠客傳三集默老子評書入御覽候處、めで度思召候よし件々御譽詞の
趣早速默老子へ通達仕候處、彼人內心は鼻おごめかし候て歡れ候はん
歟、ことの外卑下の趣にて幼年より武藝にのみ出精いたし詩歌抔は尤
も不得手に御座候、且風流は餘事に候へばいよ〳〵及がたき事勿論に
候、只松坂の兩才子の妙評を引出さん爲の筆ずさみに候處、意外の賞褒
にあづかり當りがたく候、此よし宜傳へられ候得と被申越候。
一女仙外史之事先便云々申上候處右は御藏弆被成候よし、よく御行屆
成候事と奉感候、默老俠客傳の評中に被引候鐵花仙史の事承知仕候、此
義は後條に又可申上候、御照覽可被下候
一瓊浦通の事尙又云々得貴意候處、可被成御覽思召候よし承知仕候、い
つなりとも御都合よろしき節早速貸進可仕候間、其節又被仰越候樣奉
存候、しかし己のみ有用の事と存候ても御氣に入可申哉難計奉存候

一しりうごとの事先便云々得貴意候處、右之書は先年平田氏より御もらひ被成候て御藏弆に候へば、いまだ手に入不申候はゞ差上候に不及趣被仰越承知仕候、彼書于今手に入不申却て幸ひと存候、平田氏の答書烏おどしも大かた同人より贈られ御所持と奉察候、屋代翁の答書金剛談も右同斷歟と奉存候、それを今更云々得貴意候は遼東の豕にて恥入候事に御座候、いぬる比右屋代平田の答書一本合卷、默老子外よりかり出し候よしにて見せられ候間早速寫させ置候、その比默老云しりうごとの書は好で人の非をいふたれば、よからぬ事は勿論なれども、中にはその大家の病ひにあたり候事も見え候、畢竟この答はなくもがなと存候とありしに、愚答て云貴意のごとく君子は好で人の惡をいはず、かゝるたはぶれぶみを作りて剞劂にゑりて流布せし事言語同斷の事歟、就中輪池翁の書をそしりて、キセルでもとほしたがよしといひしは忌憚らざるの甚しき也、書は巧拙によらず人によりて好キ不好あるものに

候、殊に彼翁の書はやんごとなき御かたにもとり用ひさせ給ふよし承り候事もあるものに候、乍去しりうごとの作者のよからぬ事は勿論に候へ共、大家としてかゝる誹謗にあひ候事、畢竟浮華の高名の祟に候へば實にこの答書はなくともしるべく候得ども、門戸を張り徒弟を集め候人は門人のおもはん事もうしろめたければ、立派答なくてかなはぬ事に可有之候、扨その解嘲も悉くあたれりや己等ごときはわきまへがたき事もなきにあらず、さればしりうごとの作者長壽ならば後年昨非をさとりて實學者の域に入るべからんに短命なりしは惜むべき才子と存候と申遣し候キ、平田氏抔は御懇友の事故快くは思召まじく候へども外見にはかく思ひ候事に御座候、この一條ははゞかりあり御他言御用捨可被成下候

一八犬傳の長歌舊冬御腹稿の思召候よし尤よろこばしく奉存候、前條得貴意候仕合に候間、九輯下帙は二月比より稿を起し可申哉、尤六冊に

てはをさまりかね候半歟、九輯拾遺トいたし二三卌ふやし結局の胸だくみに御座候、左候へば尙しばらく程有之候へども御歌はいかではやく拜見仕度奉存候、御油斷なく御秀詠あれかしと所希に御座候

一先便貴問に任せ機變の事、乍失禮御懇友甲斐に申試候處御海容のよし、件々御賞美のよし被仰越本望之至に奉存候、就て御致諭の孫行者は功成て正果を得たり、紅孩兒は事ならず降伏せられて正果を得たり、佛と成ると役使となると高低貴賤はあれども機變は同じ、正果も亦同じ云々の御辯論承知仕候、乍失禮かゝる御論はいまだ西遊の骨髓を得給はざる故にこそ候へ、抑三藏孫行者等が九九八十一難の魔障は別物にあらず、三藏は卽功を貪ると守短の祟りによりて魔障あり、孫行者は亦才を負みてその神通を賣弄せし祟によりて魔にあへり、畢竟その魔は三藏行者の心術より惹出す物にして別物にあらず、畢竟形と影の如し去るときはその影いづくにあらんや、この故に孫行者正果を得るに及

びて紅孩兒も亦正果を得ざることを得ず、孩兒牛魔王なンど差別ある に似たるも魔も亦佛也佛も亦魔也、この理を推すときは紅孩兒と孫行 者は一心一體也別物とすべからず、されば世にある人機變によりて事 をあやまるとも、その機變の非を悟るときは成佛の域に入らざること なし、年來の催債種々の口說はみなその人機變の心術より惹出したる ものなれば、既に機變の非をさとりて縒をもどし、遂に自然に任すれば 催債口說も隨て消滅せずといふものなし、是西遊作者の大意也と愚は 思ひ候也、一笑千笑

一若山え御退隱之事舊臘十日過頃に御出立のよし、この餘之義共あら まし被仰越承知仕候、然らば舊臘いよいよ御移徙と想像仕候、寒中の御 道中御苦勞とは奉存候へ共、南海は寒中とはいへども江戸抔とちがひ 溫暖にも可有之候へば、御凌ぎ易き方ならん歟と奉存候、姑く御經營の 御苦心を御のがれ御心地も長閑やかにて、御面影もわかの浦ちかくあ

ら玉のとしを迎へさせられ候はんと、いと〳〵めでたく奉賀候、御媳婦様御孕身のよし十三ヶ年その御氣色も無之處、此節右之趣にて御子孫御繁昌の御吉瑞さこそ御惣容様の御悦申ばかりなく蔭ながら珍重奉存候、右に付御内政様は御附添の爲當年四月頃迄松坂に御殘り、貴君御壹人まづ若山へ御發駕被成候て當三四月比又松坂へ御立かへり被成候節、御令政様御同伴可被成よしさこそと奉存候、それ迄御一人にて御不自由にもあらせらるべき歟、乍然外ならぬ御歡びの筋なれば御不自由も亦御後たのしく思召候半と奉存候、若山御寓居の御主人御姓名幷御居宅の街名等くるしからず候はゞ心得の爲承り置たく奉存候、若山へは年來度々御出かけ被成候事故、さすがに他郷へうつらせ給ひしごとくにはあるまじく候へ共、なほ故郷にますべくもあらず、四五年も經候へば江戸へも御出かけ可被成思召候よし、それまで命めでたく候はゞ得拜顏候て心緒を盡し申たく奉存候外無之候、只是迄とちがひ拙翰

抔も速には達しかね候半と是のみ遺憾不少候、御地の趣後便にくはしく御しらせ可被下候

一先便一寸得貴意候キ、默老子去冬十二月上旬いよ〳〵國勝手被申付姑く在府大義のよしにて御主君より金百兩賜り候よし、依之二月は妻子を引連レ高松へ歸り候よし舊冬被申越候、是迄とても面會は只一度にて月々文通のみに候へ共、さすがに江戸を放れて遠く讃州へ被歸候てはおのづから疎遠に可成候、且同人息女十五歳に被成候を同藩へ嫁し候故、舊臘はことの外多用のよしに付、鉄花仙史の事も右之仕合に御座候間遠慮いたし未申遣候、是は彼人高松へかへられ候後、彼地より御かり受被成候方便利に可有之奉存候、藏書も悉携られ候よしに御座候

一默老高松へ移徙致され候ては同好の友も無之よし、貴老わか山御退隱之事舊冬御噂申遣候處、いまだ御目にかゝらず候へども御同好之御事に候へば、已來文通いたし御心易く藏書など貸借いたし度候、紀州讃

州は隣國の事に候へば文通はさらなり、書籍の貸進もたやすく候、左候へば愚老と交遊の心地にてなぐさめ申度候間、紹介いたしくれ候樣舊臘一兩度被申越候、野生答に篠齋と友垣結ばせ給はん事於愚老忝奉存候、乍去平生多用の仁に候へども是迄年々三四度の不過文通、申遣し候ともいかゞ可申越哉難計候へ共、若山え退隱いたし候ては松坂に在し日より寸暇を得候半歟、遠方の事紹介いたし先方の返事を得て云々いたし候ては、その內に貴翁の御發駕にも及び可申候、則紹介の義は心得候間篠齋へ御狀可被遣候、早春拙翰中へ入封いたし松坂迄可遣旨を及返事候へば、早春書狀一封被差置候に付御屆ケ申候、右之趣に御座候間此段御承知可被下候、書籍はことの外好み候人にて奇書多くとり入候、書籍御貸借には至極可然候、外にはさばかり有益之事も無之候へども高ぶらず謙遜正直のかたに近き性質の樣に被存候、第一節儉家にてよく家を成し候人に御座候、御承引に候はゞ默老へ御回報一筆被遣可被

下候、夫迄に出立被致候とも引つゞきそのもより迄指出し可申候、何分貴君の御才學と御風流を慕ひ被申候故に御座候、同好にして知己も亦得がたく候へば聊御詞敵には可被成候得ども、此老何事も精細なる事は不得手にて文通などもくはしからず候、されば簡略にて亦よき事も御座候、此義かねて御承知可被下候

一桂窓子は御本家の御事にて多用のよし承知仕候、彼人はとしもわかく候へば俗事第一に出精被致候事めでたく存候、これも文通はくはしからず候へば又申す事も省略いたし候、只介意なきは貴君の外無之候

一拙病痊可の御悦び御叮嚀被仰越忝奉存候、去年の大病はいよ〳〵おこたり果候、眼病はとかく同様にてあしくもならずよくもならず、少々毒をたべ候てもふかくあたり候事もなし、又藥を用ひ候てもきゝもいたし不申候、これは老病にてせんかたなく候、左眼此分に候へば用は辨じ候間今は懸念不致候、只腰痛にて歩行は勿論家内のたちまはりも不

便にて困り候へども、是は老人のあたりまへと存候間ともかくもいたし罷在候間、乍憚御安慮可被成下候○悴事去春中より去年一ヶ年引籠罷在候、寒に入別して不快、下部の腫氣まし或は暴瀉いたし、痰咳幷に喘息つよく度々危殆に及び候へ共又もち直し申候、別人に候へば一トたまりもあるまじく候へども、それが持まへのやうに成候故凌ぎ候事に可有之と懇意の老醫も被申候、只廢人同様に御座候、愚父存命の間はそのはさらなり妻子どもをやしなひ候得ども、ゆくすゑはいかゞ致し候哉、心ともなき事ながら苦勞にいたし候ても詮なき事故天命に任せ候、御憐察可被成下候

一(時候物價の事略)

六

尙々書の中に見える關濆南は名は克明、通稱忠藏、其寧の男で業を父に受けて書家として名高かつた人である。天保六年四月二十八日歿、年六十

八。此人も馬琴と同樣晩年不仕合で、出藍の譽あつた長男思亮は三十四歳で歿し、孫女に養嗣をしたので、馬琴は名家に嗣子の幸なき一例として後の爲の記の中に出して居る。

古人常久樣とある常久と篠齋との關係は不明であるが、此人も馬琴と交際あり、八犬傳八輯の始に常久が、八犬士を詠じた歌八首を載せ、其後に蟹麻呂者伊勢松阪人、殿村常久ニ稱也、別號巖軒、善研究國學、而所發明不尠矣、是以其著述宇通保物語年立、千種根左志、各一卷有之、皆刻于家、然性謙讓而不遊於名利間、是故其書雖刻成、而自非知音之友未嘗與諸人、嗚呼可惜焉、文政十三年庚寅秋七月十六日病沒、享歳五十二、是歌易簀之前月所咏云、因附錄簡端楮餘と識して居る。常久も篠齋同樣本居門下である。

馬琴が衣食の費を節約して多年貯藏した書籍は、此手紙には「予が身後速に沽却いたし候樣申付置候」とあるが、是も豫期に反して六七十日後に宗伯を失ひ、家計上の必要から、藏書は勿論自著の稿本まで一切沽却するの

已むなきに立ち至つたのは、誠に氣の毒なことで、返す〲同情すべきである。「壯年に後年をはかり候事は皆畫餅に成候、世の中皆かくのごとくなるべし」と悟り顏にいうては居るものの、まさか其時機のかくまで早く到來すべしとは思はなかつたであらう。

（天保六年二月廿一日付）

尙々關濱南方へ參候かし本や茉今早朝八犬傳かひ取に丁子やへ參候處、はや百許人つきかけわれ先にと急ぎ只ハア〲と申內、又あとゟ追々つめかけ誠に火事場のごとくにてより付かね候よし、只今關氏ゟ文通の序に申來り候、勢ひかくのごとくに御座候間御よろこび可被下候

（前略）八犬傳九輯彫刻春正月に至りやうやく六之卷迄揃ひ候、已前二ゟ五迄は追々に校合いたし右六之卷は二月七日に校合いたし終り候、尤校合濟候分は追々すり込候故、手廻しはやく則今日うり出し候よしに

て、昨夕板元ゟ本差越候間御兼約のごとく貳部壹包にいたし今夕飛脚へ出し候、松坂御賢息様ゟ御届可被成候間、添狀認代金等事御賢息様へも御案内申入候、此度のは六册にて紙數も例ゟ多く候間おろし直金壹分貳朱にうり候よしに御座候、依之貳部代金三分也、此段御承知可被下候、よほど炭も有之よみでも有之候故、直段板元氣ばり候事と存候、但し此本に限らず改名主へ出し候本と拙者方へ遣し候本は、紙すり等えらみ三十部許別に製本いたし候よしに付、並うりの製本とは少しはちがひ可申候、いかゞ可有之哉、得と御覽被成候樣奉存候

一(借用書返却の件略之)

一俠客傳四集は舊冬校合いたし終り、右板木追々船づみにて大阪に登せ候處、海上の事故正月下旬迄も大阪へ着不致候板も有之候よし、正月二日うり出しになり不申候ては、いつとてもうり旬あしく候間、半紙下直の品出候節ゆる〳〵とすり込うと板元河茂申候より、是迄のごとく

江戸にてすらせ候へば隨分正月二日のうり出しにも成候處、聊の勘定合に拘り板木を船づみにてとりよせ候故右之仕合に御座候、依之いつうり出し可申哉難計候、もし來正月迄もちこしてうり候哉、しからば四年越しに成候、寔に沙汰の限りに御座候、大坂板元には前に懲り候へども丁子や彼是取持候間、無據つゝり遣し後悔いたし候、如此勢ひに御座候間一向はり合無之候御賢察可被下候

一(奇魂、行在或問二書の事略之)

一舊冬ゟ雨一向に稀にて寒氣例ゟきびしく、春も餘寒甚堪かね風烈猛風日々の樣にて早春ゟ江戸風邪流行、輕重は有之候へどものがるゝもの稀に候、野生は正月六日七日比ゟ感冒にて三四度再感いたし、中比はよほどもつれ五六日病臥、此節とても起出居候のみにて快然の日一日も無之候、服藥將息いたし罷在候へども、悴事今以同樣に候間所要多く保養も出來かね候、去年大病後何となくよはく成行候、七十に足をふみ

かけ候ては一身の工合大にちがひ候事にて、朽をしく存候事のみに御座候、實に桑楡の暮景せんかたなき事に御座候、二月に至り近隣に三度小火災有之、幸ひにその節は風なく大火に至らず候得ども、拙家は病人と老人と小兒のみに御座候、かねて覺悟の事ながら近火には當惑いたし候事度々也、右に付恩借の唐本松蔭日記一日もはやく返上いたし安心いたし度存、今便返上仕候事に御座候

一（神田明神前火事の事略之）

一（牛込赤城火事の事略之）

一前文にも得貴意候ごとく當年は著述出精いたし可申存候故、八犬傳九輯下帙七の卷二月六日ゟ病中ながら筆とりはじめ、第百四回本文十三丁半は稿本出來、兩三日前筆工へわたし候、百五回本文二十五丁終迄書おろし候へども補文つけがな等いまだしに御座候、夜分燈下にては出來かね候故晝の内のみに候へば格別はかゆき不申候、一日或は壹丁

半貳丁位稿し候三丁と稿し候事は稀に御座候、五六月頃に六册つゝり
をはり、水滸傳金瓶梅をその間へはさみつゝり遣し度あせり候へども、
何分老病にて存候樣には出來かね可申候得ども、先其心づもりに御座
候、御同好之事故樂屋の趣御聆に入置候、只々年中せわしくのみ致消光
候、歩行出來かね候間看書のみ樂みに候へども看書のいとま無之候、美
少年錄も今年はぜひ〳〵と被賴候故甚心せわしく候
一かく認居候處え二月十二日之貴翰大封壹通、飛脚問屋ゟ屆來候に付
早速折封拜見仕候、不相替年始御狀被下殊に御としゐ玉朱墨壹挺御投惠
被成下、寔に重寶之品千々萬々拜戴いたし候、御試筆の玉詠御聞せ被下
餅は餅やにて又格別の御しらべ、勿論のことながら甘吟仕候事に御座
候
一自是正月十二日書狀同二十九日に着、被成御覽候よしにて件々御細
答之趣承知仕候、試筆拙詠つくばの山可然よし忝承知仕候、但しふたい

ろきぬよ〳〵此よ〳〵はは〳〵の方可然哉と存候、又うぐひすの歌しら梅梅がえの御評甘服仕候、げに歌にしら梅とは不讀候事勿論ながら、なきそむるといふなしら梅とせしはなづみし也、とくと考見候へば梅がえおだやかなるべく候、又つくばの歌も後に雪も今朝淺むらさきにかすみけりまだふたいろの春のつくばねとも致し見候、いづれか可然哉御示教奉希候

一かく申せば尤をこがましく聞え候はん歟、詩は天朝にも今昔その人多く候へども唐人の右に出るもの一人も無之、實に詩は皇國の風土にあはず只唐人の口まねをすのみ也と弱官な存候間不學之、興に乘じて賦する事稀に有之候へども、やうやく平仄をならべ候のみに候へば、そのみちの人の爲にはものわらひに可有之候、歌は御存のごとくこのみ候へども、是亦達意を旨として思を述るのみに候へば、歌よみ達の目にはいと〳〵をさなくてをかしかるべく候、但しことばをえらみ苦吟し

て此一すぢにのみつながれ候も、胸廣からぬ樣に存候へば師に就て學び候事なく獨學孤陋勿論に御座候、これ亦御一笑と奉存候

（二項略）

一默老子書狀も被成御覽候得ども云々、御心むつかしき折に候へばわか山へ御移徙御おち着被成候上にて御返事可被遣候よし承知仕候、默老子も高松へ出立二月中と聞え候處、高松ゟ代りの家老衆交代いたし候上迹引わたし罷歸候樣被爲命候よしにて三月四日頃出立と申事に御座候、御別紙に右一義被仰越候趣早速默老子へ通達可致候、追て御返事は此方へ被遣候に不及候、直に讃州へ御出しの方便利に可有之候、此段も默老子へ可申入置候、江戶へ被遣候は迂遠に候、默老子高松の住處右のごとくに御座候

讃州高松御城近邊濱町にて

高松御家老　木村亘

一舊冬若山え御出立御延引は古人常久樣御子息二十一才と成らせられ候處、大病にて御見はなち被成がたく思召候內、終に大晦曉御遠行當正月四日御送葬被成候よし、尙わか〱敷御人のかくならせ候御事御愁傷奉察候、然處御媳婦樣御臨月ゟ一ケ月はやく正月二十日に御安產被成、御產婦樣は御恙もなく御肥立のよし、御出生は御男子にて御よわくは見えさせ候へども御七夜には御名進せられ、御一同御歡び御鍾愛被成候處、御月足らず故歟御殤損のよし御なげきの程さこそと奉察候、世に八月子は育てども九月子は不育と申候如く、九ケ月にてうまれ候はいづれも生育無之樣に存候、乍然殤損の後は程なく又御懷孕あるものに候へば來年頃は又御歡び可有之奉存候、拙家媳婦も四ケ年前八月傷產いたし候へども、上に男女二人の小兒あればさばかりをしみ候ものも無之、翌年又女子出生是は丈夫に育候殤損の後は大かた如此に候へば、ゆくものはかへらず唯後年を御たのしみ被成候樣にと奉存候悴、

へも申聞候處何分宜申上くれ候樣申候、これらの駭嘆千萬言にもつくしがたく御座候まゝ省略仕候、御惣容樣へよろしく御傳聲奉願候

(三項略)

一八犬傳九輯校合一人一眼にて甚せわしく候故見おとしも可有之候御覽の節御心づかれ候あやまり有之候はゞ後便に御しらせ被下候樣奉希候、貴評勿論奉待候

一兩交婚傳大奇書のよし先便得貴意候處御滿足に思召候よし、右之唐本は先持主秘藏と見えて間紙を入れ仕立直し帙も拵直し候樣に見え候、しかれどもその人沒し候へば忽他人の物と成候事珍らしからず、野生抔近來寫本多く寫させ四五年の間に四五百冊出來、年々これが爲によほど費し候、但し老後のたのしみは看書の外無之候、殊に書淫に候へば生來衣食を省き書を貯候處、悴は病身にて中々看書出來かね候故、予が身後速に沽却いたし候樣申付置候、しかれば今しばらくの間に可有

之候間、當年ゟ寫本ハ一向ニ止め可申存定候、見候へばつひ寫させたく成候故見ぬがましならんと存候、御憐察可被下候、人の了簡もさま〳〵に成行候ものにて、壯年に後年をはかり候事は皆畫餅に成候、世の中皆かくのごとくなるべし、然るを愛惜すべからずと存候へども、さすがに年來苦心して貯候へばをしからぬこともあらず、うりて錢に成候物は書物にましたる物なし、燒けさへせねば少々は子孫困窮の凌にもと存候て貯候へ共、媳婦抔は草ざうしも嫌ひ候故いつもにが〳〵敷顏いたし候もきのどくに存候間如此了簡いたし候、御一笑可被下候

一若山御居宅はいまだ詳ならざるよし御主人の御姓名等御しるし被下忝承知仕候、いよ〳〵御落つき被成候はゞくはしく御樣子御しらせ可被下候、拜顏のこゝろにてなぐさめ可申候、右今便の御答旁如此御座候　恐惶謹言

七

こゝに掲げた二通のうち前者は松坂の方へ送つたのを、篠齋は既に和歌山へ出立後であつたので其息子から同地へ轉送したものである。篠齋が和歌山行の用件は不明であるが、後の手紙にあまり繁々文通することを遠慮する旨を記してある處を見ると、何か紀州の家中の財政向の顧問にでも聘せられたのではなからうかと想はれる。前者の八犬傳賣行の盛況と貴人に知己を得たのを誇る得意のさまに引きかへ、後者の晩年愛子を失うた悲愁の境は一字一涙卒讀に堪へぬものがある。

さて茲に貴人とあるのは、後々の手紙によつて見ると石川疊翠といふ旗下の事をさしたのであるが、三十五六萬石の大諸侯は毛利侯でもあらうか、長州の老女がわざ〳〵馬琴の家を訪問した事が後の書簡中に見えて居る。

（天保六年三月二十八日付）

（前略）

一八犬傳二月二十一日うり出し候節、三百部製本いたし少々不足には可有之存候へ共、急候故その通りにてうり出し候處、本日八時頃にうり終りあとより參り候者に本無之、彼是被申甚こまり候に付二十一日夜は諸職人不睡、終夜すり仕立等一時ニいたさせ翌二十二日晝時迄に五十部製本出來、右あとより參り候ものへわたしやう〳〵息をつき候由丁子屋申候、右之趣故何分板元下稿(畵の誤か)稿本をせり立候得ども、野生事當正月七種頃より流行の風邪しもつれ、今以折々惡寒いたし外邪ヌケかね候故服藥いたし罷在候仕合にて、筆硯はか行き不申候得ども一日も休筆は不致候故、八犬傳六冊の內二冊半百八回迄稿本出來、追々に筆工畵工へ稿本わたし候へども板元猶不飽候て、筆工一人にては埒明かね候と申生筆工道友といふものを同道いたし、二人に引わけ書せ度よし申候へども、左樣には作者の稿出來かね候故甚せわしくこまり候、御一笑可被下候、右八犬傳九輯御覽被成候はゞ御手透之節貴評御しらせ可

被下候、只今ゟ奉待候、乍然御地只今の御樣子くはしく不承候間、日々心にかゝりいかゞの御樣子に御くらし被成候哉と奉存候、松坂に被成御座候ゟ御安樂に候哉、主客の勢ひは御懇意の御中にても可有事に候へば少しは御介意の筋もあらん歟、度々書狀差出し候もいかゞと奉存候へども、今便桂窓子へ書狀差出し候に付御安否伺度呈拙翰候也

一默老子三月七日に江戶出立被致候、京都に七日許逗留いたし大阪にも三日許逗留のつもりのよし、左候はゞ四月上旬ならでは高松へ着致まじく候、二月二十八日にいとま乞に來訪候間、暫時淸談いたし貴兄の御噂抔も申出候き、老人も六十二歲のよし此後江戶出府は致すまじきよしに候間、生涯の別に御座候、送行拙詠

なげかじな身は老ぬとも玉くしげ

ふたゝびあはぬわかれならずは

又さぬき高松といふことを

あづまにはいまさぬきみをふる鄕に
　たかまつらんとおもふわかれ路

默老かへし

なげくぞよわかれのことの玉くしげ
　ふたゝびあはん時しなければ

貴兄同人へ御返翰の事、五六月比松坂へ御立かへり萬事おち付候上ならでは出來かね可申候、それ迄彼人の返事とも被成御覧候へと申示し先便被遣候彼件の御別翰を遣し候間大に歡れ候樣子に候、高松へ御返翰被遣候はゞ大阪藏やしき役人中名當に被成、藏やしき迄御差出し被成候へば、高松船平生參り居候間早速屆可申よしに御座候(以下略)

一默老人高松に離別後は江戶にて知音の友はなくなり候處、又一人是は貴人にて和漢の小說を好れ、殊に謬て老拙をとし來信仰のよし、舊冬懇意の一儒臣紹介にて自筆の作文等度々被賴候故、無是非きぬ地二三

幅ふくさ扇面等多く書ちらし進じ候所、是非面會致したいと被申越候
貴人に咫尺いたし候事甚いとはしく存候故、かたく斷り候へども何分
きかれず、三月二十日乘物にて迎られ又乘物にて送られ、當夜四時歸宅
いたし候、それ故又風を引兩三日なやみ候、屋敷は麻布にて拙宅ゟ二里
許御座候、猶賴れ候きぬ地抔多く參り居、著述に暇なき折から甚こまり
候得ども、貴人の事故つれなくも申がたく、知己の事にも候へばよろし
くあしらひ候事に御座候、此外三十五六萬石の大諸侯ゟ御使を給はり
拙藏の卷物をかりて見たい、その代りには蘭物多く所持被致候間、何に
ても可被貸よし被仰越候、是も大諸侯の事つれなくもいなみがたく甚
わづらはしく候、何分虛名の崇にて今さらせんかたなく候、御一笑可被
成下候

一（略）

（追書四項省略）

（天保六年五月十六日付）

（前書略）

一俠客傳四輯大阪は三月中旬にうり出し候よし、例の浪速人の不實にて江戸下しすり本は彼方にてうり出し候後、板すり壹人にだら〳〵とすらせ兩三度に出し候由に候へども、そのすり本久しく着不致、丁子や甚心勞いたし罷在候處、五月節句前さやらにやう〳〵すり本着揃ひ候故、晝夜とりいそぎ製本いたし昨十五日に江戸うり出しに御座候、十五日は飛脚休日に候間、今日右の書二部外に新編金瓶梅三集の下一包にいたし今夕飛脚へ出し申候、代銀の義は三輯迄は江戸にてすり込うり出し候處、此四輯は大阪へ板を登せ又大阪よりすり本差下し候故、脚ちん等雜費多くかゝり引合かね候間、一部につきおろし直拾六匁五分にわたし候よしに御座候、依之二部にて三拾三匁金瓶梅は一匁二分に御

座候、〆三拾四匁二分に御座候、此段御承知可被下候、三月下旬大阪にてうり出し候間、若山へも本廻りとくに被成御覧候半と査し奉り候へ共、御兼約に付二部速にさし出し申候、但直段前々ゟ少し登り妙ならず候へ共、一同之義にて少しの事をねぎり候もいかゞに候間、右之通りに御座候、如例校合見遺し等も可有之候、御覧の後御示教可被下候、尤貴評御手透の節承りたく所仰に御座候、うり出し夏氣に成候故、折あしく捌ヶ方いかゞと存候處、看官まちかね候事故かし本やの勢ひよろしく、十四日に上ぶくろのみを乞、先づ袋を得意へ見せ候半抔と申やから多く有之よし、丁子やの話に御座候、十四日より入梅ふりくらし十五日晝前迄以之外の大雨中にうり出し候故捌けかたいかゞと存候處、十五日晝ゟ雨止み夕方ゟ晴候、左候へは遠方のかし本やも晝ゟ必出かけ候半と存候、十五日板元之樣子は未聞候得ども勢ひは右之通りに御座候故、三百部製本は當日出しつくし候半と猜し候事に御座候、只入梅中故道中川

支等も可有之、定て延着に及び可申哉と胸ぐるしく、本意ならぬ事に御座候

金瓶梅は去冬十一月の急作にて、校合大晦日夜四時比いたし畢り、正月三日より出し候、かくのごとき仕合故校合直し行届不申候、合印のもん所等にも筆工の間違ひ有之、意庵へ念としるしつけ候もあとにて見出し候故直し候處、早春板元へ申聞ヶ候へども返事のみいたし今に直し不申候、新板の方おろし直壹匁二分、三集の上古板は壹匁づゝのよしに御座候、誤衍は二三ヶ所御座候、右之思召にて御覽可被下候、先便此義得貴意候、御注文は無之候得ども三月中越後より被頼候而、四五部とりよせ候序御座候、貴家樣分一部餘計にとりよせ置候、桂窓子も手に入かね候よしにて被頼候故三月中一部遣し候、貴兄も同斷御手に入かね候事と存候故、如此取計ひ候へども、もし御不用に候はゞ無御介意御序に御返し可被成候、其後御返事不及候間心事如此御座候

一八犬傳九輯桂窓子の評一冊つゝり立先便に見せられ候、彼仁追々見やう功者になられ、略評には候へども大に感心の事も御座候、その中作者の專文を見おとし一字も評なきもあり、なれども全體之評至極よろしく出來申候、いかで貴兄も手透之節御評あれかしと所仰に御座候
一每度被掛御心頭御尋被下候悴宗伯義、長病終ニ療養不屆候て五月八日朝五時致死去、同十日四時過御菩提所小石川茗荷谷淨土宗傳通院末清水山深光寺え爲致安葬候、享年三十八歲に候、法號
玉照堂君譽風光琴嶺居士
年來御面識之御事故此段御承知可被下候、かねて覺悟の事ながら今更當惑いたし候、命の長短は天命に候へばをしみも不致候へ共、老後如此不幸にて後の事いかゞ可致哉、嫡孫瀧澤太郎甫八歲に御座候、次は女子にて六歲、これは四歲春長女方に子ども無之候故養女に遣し候、その次も女子にて三歲に成候、息婦は三十歲にて壯年の事故、始終之事無覺束

候、且媳婦兩親心術氷炭のけぢめ有之、一向に不合候故悴も生前この事をのみ歎息いたし候き、いかで嫡孫をとり立候半とは存候へ共、予が餘年たのもしからず、悴年中病身といへども貧に成候事多かりしに今は貧候もの一人も無之候、老婆は予が齡と三四歲の姉にて七十二歲に候が兩三年來以之外老衰いたし、且癇症にて一向に用立不申候處、此節の悲愁にて又一しほおとろへ候、悴が喪事は婿共打よりせわいたし候へども、萬事の差配皆予が指揮により候事故殆つかれ果候、此節は喪中故廢業廢筆に候へども尙日々多用に御座候、只事々物々困じ果候事のみに御座候、御憐察可被下候、悴病中のあらましは今便桂窓子へ得御意候彼仁ゟ御聞可被下候、長文同樣之事を二通認候事最懶く且氣力も無之候故、乍略義右之通りに御座候、貴兄は年來の御知音故、貴兄へ得御意候、て桂窓子へ傳達可奉賴候處、何事も只今は手遠くならせられ候故、御歸宅の否(マヽ)はかりがたく無禮の事ながら右之趣に仕候、悴身存(マヽ)之一條

は桂窓子への文通矢張貴兄へ得貴意候と思召可被下候、尙色々申試度事有之候へども、此節方寸亂れ筆とり候も物うく覺候へば勉て如此御座候、日がらたち心中穩に成候者尙追々可得貴意候、追々赴暑可申候、御自愛專一に奉存候、恐惶謹言

八

畢生の大作八犬傳の結尾に近づいて目を惡くした事は、最愛の一子琴嶺を失うたと共に、馬琴に取つては晩年の最大不幸で、人間果報の厚薄を思ひ世路艱難を大息した其悶々の情は察するに餘りある、それでも意志の堅い彼は猶屈せずして探り書きの原稿を書き、相變らず要用以外の雜談を交へた長文の手紙を草して居る、最後に紹介する天保十一年正月の手簡の後四月十一日付の書中には、

一八犬傳九輯三十六七貳卷の稿本は舊冬綴り畢候よし先々便申上候通りに御座候、三十八以下二月中旬又筆を起し候處、先便得御意候如く

老衰眼去冬十二月中旬以來月々日々にかすみ多く成り候に付、只手さぐりにて書候へども、よみかへし候事は一くだりもいたしがたく候、譬ば書かけて外用事有之、筆を閣き程經て又書んと欲するによめず候間、急ニ媳婦を呼よせよませ候てそのあとを書つぎ候事に御座候、それ故つけがなも本文と同時ニつけ不申候はねば、あとにてつけ候事成りがたく候、卽時に一行づゝつけ候かなすらとりちがへ候事多し、如此に候へば文を補ひ候事などは一向に出來かね候、それも書後に至り候ては眼氣も氣力もつかれ果候て、くるしく堪がたく候間そのまゝに倒れて氣力を養ひ候故に、六行の大字稿本にしても一日に何ばかりも不出來候、しかれども三十八三十九兩冊は綴り果候、四十の卷をつゞり候へば稿本五卷に成候、此五卷は當秋冬の內出版可仕候、四十一ゟ洲崎の船軍に成候、四十一已下何冊にて滿尾いたし可申哉はかりがたく候へ共、大抵三四冊の外を出まじく候、それも眼氣只今ゟ又おもくかすみ候はゞ

綴り候事成がたく候間、甚心いそがれ候へ共右之仕合にて出來かね候、よみ候事は小字によらず一行もよみがたく候間、外ゟ到來の書札ゝ人によませ候て、回翰は自筆にてつかはし候間、しらぬ人はよめると思ひ候へども實に少しも見えず、書候事も手さぐりにて此位には出來候へども、よみかへし見る事一行もいたしがたく、書に隨て朦々朧々に御座候、此分にては來年は書候事も成りかね候事と是には大よはりにて、只々當惑此一事のみに候へども今さらせん方無之候、かへすぐも御憐察可被成下候、八ヶ年(前)不斗右の瞳子のひらき候を今おもひ候へば、五十年晝夜眼氣を勞し候故に瞳子の破れし也、此義はやく心付候はゞ怕れて左眼を養ふべかりしに、其頃は八犬傳美少年錄俠客傳三部を同時同年に稿し、夜も亥中まで燈下細字をかゝぬ日なかりし故に、八年の今に至りてかくのごとく成り行候、今さら後悔そのかひもなく只天命を怕れ先非を懺悔の外無之候、あなかしこく、小生ごときもの厚質故に

命はいまだ不死して眼氣と足と先に盡き候、是五十年以來閉居して晝夜眼をつかひ盡し候不養生の祟に御座候、是弱冠より五六十迄愆も少からず、故にこの憂にあへるなるべし、もて警となさまくのみといつて居る、それから約二ヶ月を經た六月六日付の手紙からは、いよいよ自分で書けなくなつたと見えて、媳婦の路女の代筆で、宛名の殿村篠齋大人と著作堂解との十字丈は自分で入れて居る、それが八月になると「解」の一字だけが自署になり、十月からはその一字すらなくなつて全部代筆である。その代筆が又例の長文で文字を多く知らぬ媳に漢字を敎へながら書かせたのであるから誤字が多くて、中には「病氣勝れ不申」とあるべき「勝れ」が「且れ」、「赤松滄洲」が「濊洲」となつたやうな悲哀な滑稽が見える、スグレはカツ(勝)の字、ソウは三水に倉と敎へたからである。後の文中に見える石川殿は旗下の石川左金吾(號疊翠)といふ馬琴の信仰家で、天保六年閏七月十二日付の書簡中に次の如くある。

かねて御噂入御聆候疊翠子石川殿も俠客傳四集の評を被成候て、是亦評答を被乞候間同斷頭書いたし差進じ候………先便に得貴意候石川殿に三月二十日に迎られ一面識に罷成り、種々物がたりいたしこゝろみ候、至極風流の御人にてことの外のよみ本好に御座候、書は米庵弟子にて書も少々出來候、漢學も立まはり候處は學び得られ候樣子にて、詩は五山に被學候よし、但和學はなし、又唐山の小說抔は多く見られぬ樣子に候、水滸後傳の拙評をかして見せまゐらせ候より後傳を購求めて見られ候、年中野生所藏の寫本奇書珍籍を借覽いたしたがられ候故、尤熱心を感じ月々に多く貸進いたし候を、みづからも寫し近習にも多く寫させ候、先づは同好と申しても憎からぬ才子に候、旬殿實々記の序文のおくわくの內に有之候廻文の詩の解抔を被尋候間、心を潛めて見られ候と察し候、但し評は尙初心故さまでの事も無之候へ共、執心の事故その中にはよき評も少しは有之候云々

とある、長府の宮樣とあるは前掲書簡のつゞきに

一長州の前の大夫人は何がしの宮樣に被成御座候よし、この宮樣野生作のよみ本御愛觀被成候よし、就中美少年錄ことの外御意に稱ひ、花實共に具足せしもの外になしと仰せられ候よし、右給事の老女藤浦といふが、その兄何がしを介としていぬる日訪問せられ候へども、病著の折に候へば辭して對面に不及候、その折彼藤浦󠄀おくられ候書に御亡弟琴魚子の事を尋られ、いづくの人にてとしはいくばくなるや、犬夷評判記に金魚とあるは同人の事歟などたづねられ候故、くはしく注して進じ候、是も彼宮樣の御意のよしに聞え候、且又江戸名所圖會の畫者雪旦の悴今の長谷川雪旦は長州の御畫師のよし、江戸名所圖會の畫をことの外御賞美のよし、右雪旦を案內に被成候て蔽屋へ御出被成度よしなど聞え候間尤恐入、貴人と申殊に御夫人に拜顏の事抔甚いとはしく擧存候間、此義は何分宜く御斷り被下候へとわび候て歸し候也、近來折々

貴人ゟ訪問せられ難義至極いたし候、御一笑可被成下候

とある外、所々に長州宮樣、貞操院宮樣へ著述を献上したなどいふ事が見えて居る、彼首尾如何を氣づかうた八犬傳も、天保十三年二月に完結して漸く宿望を達し得たのは、彼の爲にも世の爲にも大に慶すべきである。

劣孫云々とあるは琴嶺の長男太郎が幼少で出仕が出來ぬから、次郎といふ者を養子分にして番代に出して置いたので、太郎の成長と共に次郎を離緣する爲に種々費用が入るので、藏書や小說の稿本などを友人間に沽却するに至つた。之についての委細は次の書面で分る。

愚孫御番代願之事御尋被下忝奉存候、此義存之外家障（故カ）出來、今以埒明兼甚心配致候、併乍（マヽ）來月頃ゟ伺書差出し當冬迄には可被仰付也と奉存候、右に付種々散財多、藏書抔沽却致候事に御座候、愚孫何分にも幼年に而且內ゟ邪魔致候者有之候間如斯延引に及候、老子に名と器物とは借すべからずと有事、かねて知らざるにあらず候へども、よもやと存候て今

更後悔之外御座無候右に付ても彌心急がれ候、餘は御賢察被成可被下候(天保十一年八月二十一日付代筆)

拙孫番代願之事當七月下旬ゟ頭江伺書差出し候處、頭奥方大病にて十月ニ至り死去被致、引つゞき頭小堀織部殿も大病にて愈延引に及、漸々十一月上旬願書出し候樣頭ゟ申被付、願書差出し候處、十一月二十一日朝御城中の御門御番所に太郎ヲ召被出、與力組頭差添罷出候處、頭小堀殿同役高木內藏頭殿被仰渡、御書付以願之通り二郎儀は病氣に付御暇被下、太郎へ番入被仰付候、先例ハ頭の宅に呼出し申被付候事に候、頭病氣ニ付御城御番所にて外之頭被仰渡候、此義珍敷事の由に人々申候、二十一日に此儀被仰渡、翌日二十二日の曉に頭小堀殿病死被致候、若二三日も前に死去被致候はゞ來春三四月頃ならでは被仰付ズ候由に御座候、是迄延引とは申ながら土俵際にて心願成就致、大慶至極難有奉存候、依之二郎儀は先如約瀧澤の姓名取戻し、十一月晦日に身分片付金並に

新夜着等遣し、如元之中藤晉重に成歸り同人兄鐵次郎と申者に引渡し遣し候、是にて小子先祖への孝道も立、且故兒琴嶺末期に申聞候儀もむなしからず、正敷家督を定め候て安心致候事に御座候、十一月上旬右願書差出し候日ゟ俄に騷立、太郎衣裳之儲等にて思𢜟儀晝夜暇なく、代筆之者無之候ゆへ先便之御答延引に及候、只今とても太郎勤近く假り頭三人にて、一人は麻布市兵衞町、一人は湯島、一人は小石川馬場にて尤はなれ居候を折々禮廻りに囘勤致、且組與力十軒仲間五十五軒ゑも同斷に付、當番ならぬ日も走り廻り候事のみに御座候、何分太郎小粒にて十七歲と申立、一人前之御奉公勤候事故、五十五人の仲間に藥をふりかけ候ハねバ憐くれ候ハず候間、初存候ゟ散財多く且二郎に遣し候身分片付料も上役之者を賴、色々ねだり事致候故、兼テ存候ゟ是又散財多く成候云々(天保十一年十二月十四日付代筆)

四十囘本平妖傳賣却の事は默翁へは遠慮していうてやらぬといふには

仔細のある事で、篠齋が之を買ふ事に決つた時やつた手紙にその事實を暴露して居る「右四十囘平妖傳先年端本にて浪花某の書肆に有之よく聞知り候、其砌はさばかり世に稀なる書とも不思候間、默老人に見せ候半と存候而、默子へ云々申試候へば、同人渇望之書に候間かひ取度よし被申候ひき、價は五十匁のよし端本にしては甚高料也と思ひながら、とりよせて見候處唐本は稀なるよしも知られ、見候へば何分藏書にいたし度存候に付、老人にはその書外へうれ候よしにて手に入りかね候よし申斷候て、手前へかひ取秘藏いたし候、脚ちん共に金三分許費し候ひき、其後桂窓子右の寫本を購得候よし申越し候間、則かりよせ唐本に不足之處をかりよせ上筆工に寫し足させ則校訂いたし、帙をつくらせ製本二帙にいたし秘藏いたし候事に御座候、尤桂子所藏の寫本借出候節に校訂いたし返し候ひき云々」（天保十一年二月九日付）

（天保十一年正月八日付）

（前文略）

扨八犬傳貴評並に御細翰は節季に着に付今般一緒に御答仕候、乍然野生老衰眼三四年來年々月々衰候而、執筆も讀書も甚不自由にて候へども□（一字不明）也に辨用いたし候處、舊冬十二月中旬ゟいよ／＼ます／＼眼氣おとろへ書を見候事一向に成りかね候、書候事はかばかりには只手加減にて書候へ共、一行書て先の一行を見候へば朧々として見えわかず候、凡朝ゟ晝までは見えぬながらも些しは辨用致候へ共、晝後ゟは必眼氣つかれ候てよみ候事はさら也、書候事も不自由に御座候、しかれども好み候事故打捨がたく、八犬傳御評は正月二日ゟよみはじめ六日迄五日の間に卅五六丁よみ候、それも見えかね候處多し、一二行づゝよみては吐息をつき眼力を養ひ、又二三行づゝよみ候内に眼中痛を覺え候間、巻を掩ひ候故一日によくよみて七八丁、不出來の日は貳三丁の外よみ得ず候、强てよみ候ては翌日いよ／＼孤眼用立かね候故に、六日までにて

右八犬傳御評拜見は休み候、其内そろ〳〵と養ひながらゆる〳〵拜見可仕候、誰ぞによませて聞度存候へ共家内によく〳〵よみ候人無御座候、愢婦によませ候へば雅言漢字うとく候間、さし支候處多く矢張わかりかね候、俗文の書狀は長歌短カともによめによませて、返事は野生自筆にて書候、手さぐりながら書候事ハこの位に出來候へども、よみ候事は一行も甚得がたく成行候、御憐察可被成下候、そはとまれかくまれ御評半册拜見仕候分、實に御細評にてよくも御心用させ玉ひにけり尤廿心少からず、其中には例の御我慢評も交り候へども、それ除き候ては世上一人の御知音とたのもしく奉存候、才(わづか)に半册よみ見てすら右の如し、二册不殘拜見仕候ハヽさぞ〳〵御佳評あらんとおくゆかしく存候へども、前文の仕合に候間中々急に卒業いたしかね候、まいて拙評答抔はいよ〳〵おそなはり可申候、去年初冬の比被賜候桂窓子の短評すら今に拙答出來かね候、御評は十倍二十倍の長編に候へば評答は眼氣の故に延引是

非もなき仕合に御座候、まづ何かなしに寫させ候半と存候、寫させよみたのしみ候事成りがたく候間、俗にいふ猫に小判に似たれども、當地石川殿又長府の宮様の御覽に入候料に一本はとめ置たく存候、此御評去年秋冷迄に拜見成候へば、中冬迄は眼力尙辨用せしに、十二月中旬ゟ眼氣衰へ果候處へ御評柬着、さて／＼遺憾の仕合に御座候、かへす／＼も御憐候可被成下候、先便差出し候八犬傳九輯三十三ゟ三十五迄分五冊は九月節前につゞり終り、又金瓶梅七集上下帙四十丁も九月ゟ十月上旬迄につゞり終り候間、衰眼ながら尙つゞり易く候ひしに、後板に至りては此仕合故可致成就哉われながらはかりがたく候、その內三十六卷百六十三回百六十四回の本文書畫共二十六丁は九月節句迄に綴り候故、猶さばかりかたからず覺候、三十七卷百六十五回は只この一回にて書畫共に二十六丁也、これは十一月ゟ日にまして眼氣おとろへ候故に思ひの外長引、歲抄二十六日に書畫とも稿し畢候、是にて後板分二冊は

稿成り候、この二册犬川犬田行德口の戰ひ軍功全備いたし候、三十八卷百六十五囘百六十六囘は國府臺の戰ひに成り候、しかれども是迄のごとく十一行の細字には稿しがたく候間、五六行の大字にいたし稿本二丁を板下の寫本には一丁にかゝせ候つもりに板元に申示し置候へども、それ將つゞり果さんやわれながらはかりがたく候、しかれどもうち見は兩眼ともにわろくも見えず、足は不行步なれ口は達者に候へば板元丁平抔はさまでに思はずや、舊臘來陽の時八犬傳全部九十一册にては都合あしく候間、錢百にて全部九十六册にいたし度いかで〳〵など申候、野生內心には一丁にてもすけなくしてつゞり果し度思ひ候に、俗に云親の心子しらずに似たりと一笑いたし候ひき、さりながらあと五册にてをさまるべきや否、その義は我ながらはかりがたく候へども、よみかへして補文することも成りかね候、故に搦き上に猶搦く不如意の筆に候へば册數のふえ候事はこのみ不申、いかで〳〵團圓まで全備いた

し候はゞ此上の幸ひと存候、嘆息のあまりに

書寫の海よるとし波のくやしくもみるめはかれつそこひやはする

昔より墮獄おふし(瘂子)のそしりあればわれあきしい(青盲)とかずまへなせそな

ごつぶやき候

是全く五十餘年日夜讀書と細字の著編のつかれにて、かく成行候へば今さら後悔そのかひなく候、見ルコト久シケレバ必曇ルと呂氏春秋にいへるが如し、皆我からなし事ながら著編出來ずなりては一家兒六七口の旦暮に給するに足らず、是のみ胸安からず候へばそれ(ざカ)將天命と思ひ候へば嘆くは愚也慾也、今ゟして眼の用不用は天に任する外無之候、ハレやくたいもない新春早々老のくり言御覽もいとはしかるべし、但しこれらの趣は桂窓子へも申遣し候間かれ是出入あり、これにもれたる事は桂子ゟ御聞可被下候、おなじ長文二通は書得がたく候、且已後はかゝる長文もかき得がたく可有之候へば、この後は雜談なしに要用をの

み亂筆に可申上候
一御禮申おくれ候、かねて被仰示候名筆龍爪十管被賜下、遠方御深志御禮寸楮につくしがたき迄に忝拜戴仕候、お文の通八犬傳九輯三十八の卷ゟ稿本大字に書候心づもりに候間、この筆恰好ふさはしく重寶可仕候先一本試におろしこの拙翰をかき見候、いかにもはやくキレ候へどもさしも名筆故めくらさぐりにも仕ひよく覺候、かへす〴〵も奉多謝候、右御答禮までに舊冬外にて再板いたし候文化中の野生舊作合卷まがひ八丈三冊物二部進上仕候、一部は例の御方へ御進物にもと奉存候、再板かねてその聞えありながら作者に校訂を乞はず恣に書をかへ、わり外題をつけまし且新板に紛らして賣候事、甚不埒に候へども既にうり出し候上はいふかひなく候、本文も必原書とちがひ增減可有之候へども、細字は一行もよみ得がたく候間そのまゝにて進上仕候、御一笑と奉存候、然れども金瓶梅の外拙作の合卷物無之候間、甚しくよくうれ候

よしに御座候、寔に〳〵にが〳〵しく厭しく候へども今さらせん方なく、永日媳婦によませて聞候半と存候のみにて書もしかと見わかず、老たるばかり朽をしきものは無之候

一金瓶梅廿集上帙二十丁は去秋九月中稿シ遣し、下帙七丁も十月中板下書畫共出來之處板木師にて遲滯いたし、その上口ほり筆工ともほり崩し、かねての日限約束とはちがひ候に付、上帙二冊はやう〳〵十二月二十六日にうり出し候、下帙二冊大晦日の朝ほり揃ひ同日夕方迄板元の小もの拙宅に三度往來いたし、殘り五丁の校合居ざいそくにて校合をはたし候、但し合卷は寫本すり本とも老眼に一行も見えわかず候間媳婦によませ聞候而、ちがひ候處あれば直させ候、しかるに大晦日は媳婦多用之處朝ゟ夕方迄引つけられ、校合の手つだひを致させ間を合せ遣し候、依之下帙は當正月六日にうり出し候、上下共不相替甚しくうれ候へども製本合に合かね、すり候まゝぬれたるすり本に表紙とぢ糸を

添候而、小うり店へ渡し遣し候よしに御座候、五日ニ二郎を年禮がてら
板元へとりニ遣し候處板元ニ一部も無之、六日ニ至り出店に少し有候
をかきさらひ持參仕候よしニて板元の小もの持參いたし候、價を問候
へばたしか去年の通りに候處と申候、しからば上下帙二通りニて五匁
に候はむ、しかと覺不申候、其御方ニ去年の御控候はゞそのごとくと御
こゝろ得可被下候、もしちがひ候はゞ又可申上候、但しこの分の脚賃は
野生進上物と同封ニて勘定いたしかね候間、此脚ちん御差出しニ不及
候、野生方ゟ一緒ニ差出し候也、右御黍約のごとく二部封入仕候、着候上
は御落手可被成下候、價銀は少しの事故御序之節ニて宜く候、速に被遣
候に不及候、御覽後貴評承りたく奉存候、野生只今の蔽屋は茅葺ニて所
云伏屋に候へば晴天といへども薄くらく候、況雨天には老眼ニいよい
よ不便也、依之舊冬ゟ今以日々坐敷の縁頰（れんづら）へ坐敷の障子を建させ机を
直し縁頰に小蒲團を布せ、終日縁頰にて辨用いたし候故あと先つかへ、

緣頬の透間ゟ寒風を吹上げ脚いたみ膝ひえ、たへかね候を忍び〳〵筆をとり候、しかるを世の看官は炬燵ニ足をさし入れ仰臥しつゝよみ見て、よいのわるいのといはるゝ也、果報の厚薄世ニはかゝる事多かり、吾のみならねど世路艱難大息の外無之候、御憐察可被成下候

一劣孫當年は十三歳に成候、全體大がらに候間普通の十五歳位には見え候、依之當年ゟ二郎を退け暇遣し、太郎に御番入を願候心づもりニ御座候、野生追々老衰ニ及候へば一日もはやくあとを踏固め度、一日千秋の思に候處、竟に五ヶ年を經て時節やう〳〵到來いたし候、右に付二郎へ手當金も餘程遣し候處、番入の費用と太郎衣服によほどの散財ニ候へども、借財いたし候ては身後ニ憂を殘し候間、無是非愛書を沽却いたし候、この義舊冬默老人ゟ申遣し候處、默翁も十月二男枝之助妖傷被致且いろ〳〵物入多きよしに候へども、同好知己の爲に憂をわかち悅を共ニせずハあるべからずと云義俠を以、十五六金の書を購ひくれられ

舊冬前金ニわたし越され候間、手當金半分程は速ニ整ひ悦び候、彼翁の情義二人と得がたき好友と存候、桂窓子へも舊冬申遣し候へバこれも三部計の書を被購候間、今般右之書を送り遣し候、貴翁は連年御儉約中の御事かねて存居候得バ、これらの義不及御相談に候へども、さしも四十年來御懇友の御事ニ候を、不申上候も今さら隔候樣ニも可被思召候へバ申上候のみに御座候、是迄殘し置候ハ皆愛書ニていとをしく候へども、野生老眼□□（二字不明）ますく衰候而讀書の樂み成がたく、嫡孫は幼弱ニて且讀書の好みは親にも祖にも似ざる樣ニ見え候へバたのもしからず、もしこのみ候ハヾ書なくとも見べし、不好候ハヾ遣し置候ても益なし、同好の友人の藏ニいたし候が、せめてもの事と思ひ候故の所爲に御座候、それともし思召候ハヾ猶少々ハ奇書珍書も有之候間□□（不明）御めにかけ可申候、四十回の平妖傳抔ハ實に得がたき珍書ニ候へ共、寫本を桂窓子所藏ニ候へば御借覽にても事すみ可申哉、さりながら平妖傳

ハ貴翁の御所藏にいたし度思ひ候事ニ御座候、默老人え申遣し候ハヽ早速かひ入らるべく候へども、この書の事ハちと彼翁へは遠慮ニて不申遣候也、この餘撰擇物の通書の上寫本も當今得がたき物御座候、貴翁ハ御宗旨ちがひに候へ共、撰擇學を好み候人あらバ御媒介被成下候樣ねがはしく候、畢竟は只この義を御聞ニ入候のみ、强て願ひ候義には無之候

一舊冬十二月朔日未牌ゟ拙宅近邊大火、內藤新宿杵屋といふ妓樓より失火云々(略之)

(以下時候物價の話等二條略之)

正月八日

著作堂解

篠齋大人

玉机下

尙々前文ニ申上候ごとく朦々朧々ながら朝ゟ晝迄の內ハ手さぐりニて書候事ハかばかりにハ書候へども、よみかへす事成りがたく候間、定て誤脫ハさら也、よめかれ候くだり多く可有之候、可然御猜覽可被成下候、已後要用のみ得御意候間雜談迄ニハ及かれ可申候、此義かれて御許容可被成下候

式亭三馬

「江戶の文客」「浮世風呂」の作者式亭三馬、通稱を西宮太助といふ。姓は菊池名は泰輔、字は久德、安永四年淺草田原町三丁目に生る。父は八丈島爲朝大明神の祠官菊池壹岐守が庶子にして、其名を茂兵衛と呼び、剞劂を以て生業とせりき。遊戲堂、洒落齋、哆囉哩樓、四季山人、遊戲道人、戲作堂、滑稽堂、本町庵等皆三馬が時にとつての別號なり。西宮を屋號とするは、茅場町なる地本問屋春松軒西宮新六と懇意なりしより、其名を貰ひうけたりともいひ、或は總角の時より、此家に仕へて手代となりたりともいふ。前說信なるが如し。

三馬が生れいでし頃は、未だ作者といふ專門の職業なく、只風流才士の戯れのすさびにて、朋誠堂喜三二、戀町春町の二人、專ら草雙紙の全權を握りたる時にて、彼の青本の趣向を一變せしめし春町の「金々先生榮華夢」は、三馬が生れし前年に出で、袋入本の元祖たる「新板桃太郎」は其翌年安永六年喜三二の著述する所なり。

幼にして家を出で、本石町四丁目の書賈翫月堂堀野屋仁兵衞(一說に中橋の書賈北林堂)が丁稚となる。　思ふに父は板木師なれば、少しは文字の心得もありて、實語敎商賣往來は、既に家庭にありて學びたらむが、此家に來りて、ます〳〵算筆を習ひ覺え、天稟の英才に加ふるに、文字の知識を得しかば、藏の隅より古繪本を引出し、さては店頭に曝したる見本本を辿り讀みて、夏の日の長きに晝寢を忘れ、冬の日の短きも使行(つかひあるき)の隙を偷みて、ひたすら之に思ひ入り、世の中にこれほど面白きものはあらじと仇氣なき小兒心に、早くも「戯作魂」の乘移りしなるべし。　後山下町の書林蘭香堂萬屋

太治右衛門が婿養子となりぬ。年齒既に長じ、且前の丁稚とは境遇自ら異りたれば、番頭殿の小言におづ〳〵燈暗き隅の方に書見する氣兼もなく、天下晴れて店先の書を、何彼と讀み散らして、大に獲る所ありしや疑なし。

然るに程なく、其妻なる娘も病死し、離縁して萬屋を去り、日本橋十九文横町に寓し、四日市に古本を商ふ小店を出し、この頃より漸く戲作を始めたり。三馬が初作「天道浮世之出星操」(三冊豐國畫 西宮板)といふ黄表紙は、寛政六寅年の刊行にて、彼が十九歳の時なり。京傳の初作「御存知商賈物」(天明二年刊)に後ること十三年、馬琴の初作「二十日餘四十兩 盡用而二分狂言」(寛政三年刊)に後るゝこと四年なり。戲作六家撰に三馬が著作の經歷を記して曰く、

また、一時大人(三馬をさす)自ら物語りていへらく、おのれ幼き頃、伯母なるもの、その太守公の奥殿に仕へまゐらせければ、をり〳〵伯母へ對面のため、奥殿へ到るごとに、好む所なれば傍にあり合ふ册子をとりて讀

むを、此席へ來合す仕女たち、此童は歳にも似氣なく、書をよむことの拙からず、今の程よりかく文才に長じたれば、後々には如何なる者にかならんずらんなど言はれしが、十三四歳の頃までに、數多の戲曲をも悉く見盡し、十六七歳の頃戲作の志あり、十八歳にして獨立にて、初めて「天道浮世之出星操」といふ黄表紙を著し出板しぬ。此冊子を作るのはじめ、夜寢にも衾の袖より手を出して、稿を成したり。草成つて後、自ら戲號を名づけんとて、さるべきと思へる兩三名を、小き紙に書付け、その紙を小さく押捻りて、手づから傍に投げてそれを又拾ひとりて、得たる所の捻紙を披き、書付けありし戲號は則ち式亭三馬にてありしかば、之にて心を決し、遂に此號を用ひたり、云々、

而して其三馬と稱する所以は、「江戸物本作者部類」に「自らいふ、吾は唐來子(唐來三和をいふ天明四年より寬政の中頃まで年々二三部づゝ著述ありその中「きるなの根から金のなる木」といふ廻文の外題殊に名高し)の才を

慕ひ、烏亭子（談州樓焉馬、戲作と落語とを兼ぬ）に忘形の友とせられしより三和焉馬の一字をとりて、三馬と號す」と記るせり。

寛政六年、「天道浮世之出星操」及び「人間一心覗替繰」を出し、それより年々相次ぎて著述多し。芝全交（安永の末より、寛政の中頃までに有名なる滑稽作者にて、「鼻の下長物語」を其當作とす）の趣を慕うて、世俗の風を穿つを專らとせり。三馬が全交を尊奉せし一斑は、「芝全交夢、寓言（なだがき）」といふ黄表紙を著はし、又一時二代目全交と名乘らんとせしにて知るべし。「著述の俳優家最屓氣質」及び馬笑（門人）が作の廓節用に、式亭三馬儀、古人芝全交の遺言につき、此度より二代目の全交と可相成筈に候へ共、いやしき妄作を以て、古人の高名を汚すは、恐れ有と存じ、未だ改名は仕らず、差控へ罷在候、尙相變らず全交俤と被思召、御一笑奉希候」と記して未だ決せざりしうちに自己の名聲、漸く世に高くなりけるより遂に思ひとまりたりとぞ。

寛政十一年己未の春、前年火消人足等が鬪爭の趣を仕組みて、「俠（きやん）太平記向

鉢卷」といふを作り、西宮新六より出板したるに、よ組の人足大に怒りて、正月五日に三馬及び板元の宅を破却し、之より裁判沙汰となり、板元は過料を出し、作者は手鎖五十日の刑に處せられたり。されど此禍は却て三馬が名を揚ぐるの幸となれり。次で文化三年春、「雷太郎强惡物語」を著し大に世俗の喝采を博し、名聲彌益に高うなりぬ。蓋し當時滑稽の黄表紙は、漸く「成長したる小兒」の飽く所となり、浮靡淫猥の洒落本は、寛政政府の禁ずる所となり、人々何がなかはりたるものをと望みたるに、適ゝ南仙楚滿人が敵討義女英（寛政七年刊行）出でゝ、大に此人氣に投じ、之より敵討本はすさまじき勢にて世上を風靡し、京傳馬琴すら此風潮を支ふる能はず、相率ゐて人氣の陣頭に降參し、文化元年より敵討本の筆を執りはじめたり。三馬が才は固より之に適せず、自らも嫌ひしが、書肆西宮の勸めに乘りて「天明水滸傳」といふ俗書を粉本となし、殘忍殺伐なる敵討物、卽ち「雷太郎强惡物語」を合卷二册となして賣出したるに、恰も其年（文化三年）は敵討本の

流行其頂上に達し、著作は盡く敵討物なりし時とて、夥しき人氣にて、大當りなりき。されど此等の著述は、如何に流行すればとて、到底三馬が本領を評價すべきものにあらず。

されど三馬は此人氣に狂喜し、且合卷の制を刱めたるを、大に榮なりとし自ら誇つて曰く、「合卷とは五册物を一卷に合卷として賣るなり。されば合卷の權與は作者にて予が工夫、板元にて西宮の家に發る………表紙外題の數も繁からず製作も便利なればとて、其翌年(雷太郎物語發行の)より草紙問屋殘らず合卷となりて、今茲文化七年に至れど今に流行す、相撲取おのが勝ちたる話ばかりするに似たれども、合卷繪草紙を世に流行させしは、予が一生の譽と思へば、老後の思ひで潔く侍り」と其得意想像すべし。文化三年三月四日、芝高輪牛町より出火して、三馬が日本橋の寓舍も類燒し、それより本石町四丁目新道の裏屋に轉居し、こゝに住むこと五年、浮世風呂の初篇は、此所にありける折の作なり。然るに大阪の町人某そが江

戸掛店の中絶したるを再興すとて、之を三馬に委ねしかば、文化七年十二月、本町二丁目に移り、仙方延壽丹の賣薬店を開き、此に京傳の讀書丸、馬琴の奇應丸と好三幅對をなせり、然るに年來の大酒、健康を害して、此年の春三ヶ月ばかり腫氣にて大病、又九月には痛風にて行歩も叶はず、漸く其翌八年正月に全快し、爲に著述も少く、賣薬も捗々しからず。借財嵩みて家計不如意なりければ、江戸の水といふ白粉下を工夫して、硝子詰箱入を、小五十文、中百文、大百五十文に鬻き、其功能を浮世風呂の女湯に吹聽し、尙次次の著述にも書きたてゝ、大に婦女子の愛顧を得て多く賣れたり。それより金勢丸、玉樞丹等の家製の妙薬を初め、艶拭巾齒磨粉を商ひて、著述の片手業としたり。「浮世床」の序に曰く「本町延壽丹、並に江戸の水の買客雨扮式亭三馬」と。

三馬が一生の傑作浮世風呂は、全く十返舍の「道中膝栗毛」が大人氣を得たるに、刺戟せられて出でたるものなり。初篇は文化六年の著にて彼が三

十五歳の時なり。然るに其板木燒失したるより、文化八年夏四月、增補して再板世に行へり。此書膝栗毛と鴈行して評判高く、板元は次篇を三篇をと居催促して、其四篇(文化十年刊行)まで出さしめ、尙飽足らず、一方にて同じ樣なる「浮世床」を出ださしめたり。「大道直うして、髮結床必ず十字街にあるが中にも、浮世風呂に隣れる家は、浮世床と名を呼びて」といふもの卽ち之れなり。その初篇を文化八年五月に、二篇を文化十年正月に出しぬ。尙此間に、滑稽四十八癖(文化九年)早替胸のからくり(同上)等の著述あり。本町轉居以來の作こそ、殊に三馬が長處を發揮したるものなりけれ。文政の初頃より病氣勝にて著述を廢したり。文政五年刊行の浮世床三篇に曰く、

(上略)文榮堂に賴まれて、柳髮新話(浮世床)の三編目を本町庵へ言入れしは、三年已前のことなりしが、近來先生多病にして風呂の加減も床髮も暫く筆を留置くのみ。何なら今年は、下剃で束ねて貰うて置給へと敎

の儘に、筆探るは瀧亭鯉丈が床預、其證人に罷立、序文の一札如件、云々

癸未の春　　南仙笑二世楚滿人

文政五年閏正月六日、年四十七にて歿す。深川雲光院に葬り、法號を歡譽喜樂奏天居士といふ。一子虎之助、文化九年の生にて、三馬が三十七歳の子なり。門人益亭三友等相謀り、幼子を助けて、賣藥店を相續せしむ。文政十二年、十八歳にて「三國妖狐殺生石」の初作あり、小三馬と號し、著書數十部あれども、平凡傳ふるに足らず。嘉永六年正月十一日歿す年四十二。門人益亭三友、古今亭三鳥、德亭三孝、春亭三曉、福亭三笑、樂亭西馬等十餘人いづれも草雙紙の作や師の著述に序し、挿繪に狂歌を題して、漸く其名を遺すの類に過ぎず。爲永春水三鷺と呼びて、一時式亭が門人中に名を列せり。

以上諸書を參酌考定して、ほゞ三馬が一生の經歷を悉くしたりと信ずれば、之より更に其人物性行の上に就いて、少しく言ふ所あらむ。その肖像

を見れば眼光鋭く一癖ありて苦味走りたる面構、才を負うて人を凌ぐ癖ありて交友甚だ少く、文化八年書畫會を兩國中村屋に開きたるに、京傳兄弟と門人の他に、會するもの少かりきといふ。其人に愛せられざるや知るべきなり。就中馬琴とは氷炭相容れず、互に相忌むこと讐敵の如し。尊大自重繁文縟禮の簑笠翁、いかでか負けぬ氣の才子と、相容るゝことを得ん。其友として親しかりしは、焉馬、豐國、眞顏、三鳥の數人に過ぎず。眞顏とは山下町にある頃より往來して、之に狂歌を學び、眞顏も其己を愛敬するを欣びて、常に人に對して、三馬の才子なるを歎賞せりき。篁村氏がいへりし如く、馬琴との仲は之が爲に一層氣まづくなりたりと思はる。蓋し馬琴は眞顏の敵たる六樹園の信仰者なればなり。

馬琴が「南柯夢」にて北齋と衝突せし如く、三馬は豐國と爭ひたり。當時の草双紙には、挿繪の勢力多大なるより、畫工が作者を掣肘し、我意を通しずるけをおこし、板元と作者とを惱ますこと往々にして珍しからず。馬琴

が一徹、三馬がきかぬ氣、衝突は其所なり。「阿古義物語」の稿成つて一陽齋の許に托したるに、繡繪半ばにして、ふつに其後を描かざりければ、式亭大に怒りて日頃交際遲きに、己を蔑視することそ惡けれと自ら豐國の許に至り、大に之を罵る。豐國陳謝百方なれども、式亭の怒解けず。此方にて、向後我が作りたる草紙には彼をして畫かしめじと言へば、彼方にても、彼が作りたる艸紙には、吾決して筆を執らじと罵り合ひしが、後書肆文龜堂が扱ひにて漸く双方和解し、文化七年、文龜堂上梓の「一對男時花歌川」に豐國其初篇六卷を畫きたり。

性「酒を嗜み人と爭鬪せしこと屢聞えたり、絶えて文人の氣質に似ず、又商賈の如くにもあらず、世の俠客に似たること多かりしに、初老に及びてより、醉狂を愼みて、渡世を旨とせしといふ。そが中に一事賞すべきは、其親茂兵衛も酒を嗜むにより、月毎に酒錢として、南鐐三片づゝ餽ること、數年來間斷なかりしとぞ。(茂兵衛は始終三馬と同居せず、別宅に在りて、剞劂

を職にしたり」又藏書を好み、製本をよく仕直し、表紙裏などに其故由を記し、藏書印をおす、常に家人に示して、予も書を作ることを業とすれば、其苦心を思ひやりて、人の作りし書も、大切にすといへりきとぞ。又貨殖の才ありて自著の書は弟左助の入婿となれる書肆三浦屋平八より出版して利益を分ち、晩年には相應に有福なりしといふ。

金龍山人が、浮世風呂四篇の跋文に曰く、

（上略）性素拙辯、生平の茶譚殊に鈍し、故に人呼んで面白くなき人とし、且話のなき人とす、賈客にして騷人、野暮にして在行、居は市中にありて自ら隱れ、身は俗間にありて自ら雅なり、言語を通めかさず、妄に陳奮翰を吐かず、形容を粹がらず、假にも理屈臭きを論せず、ごせへすの結交敬して遠け、來玉への招待辭して到らず、云々

「居は市中にありて自ら隱れ、身は俗間にありて自ら雅なり」といふは、例の文士が油にて過稱敢て當らざるは論なし。されど圓轉滑脱の文章家、必

ずしも快辯滔々の談話家にあらず。形容を粋がり、理屈臭きを論ずるは三馬の最も厭ふ所ならん。
三馬を才子なりといふは、其當時にあつて、既に人々の許可せし所、只才子なるが故に讀書勉强せず、聽取傍問の四寸學を、縱横自在に振り廻はし、孫引玄孫引の故事來歷を、勿體らしく手際よく取りまはけし、知つたかぶりに世上の白痴を嚇しつけたり。戲作六家撰に曰く、
又一時、おのれ大人に語りていふ、頃日吾友なる光房といふが、講釋にて源氏物語末摘花の卷をきゝつるが、これは聊か戲作の扶助にもなりなんやと問ひたれば、大人答へて、もと物語物の隨一なれば、諸人多く和文辭をつらぬるに、助とせざるものなしと雖も、戲作者の素意は、さるむつかしきものにあらず、貴君今より戲作をなして、心を慰めんとの思あらば、源氏一部の講釋を漏らさずきくに及ばず、源氏の事も、水滸傳のことも、少しづゝ聞きはつりしことあらば、似つこらしき事を取成して、知つ

たかぶりに書んこそ、戯作者の專らとする所なれ、餘り源氏に凝りすぎて、かや〳〵と笑ひ、さや〳〵と繰ひらきなどの類、生ごなしの源氏風は、聞くもうるさし、戯作者の腹といふものは只屋臺店の賣物に等く、手裡劔打つたる唐茄子も、蒟蒻の田樂も、曲はせも何でも四文と、取雜せておかんこそ、本意なれとて、手を拍ちて笑はれたり。

浮世風呂の開卷第一に、「春は曙やう〳〵に」と枕艸紙を引きいでたる、「白雲の色になづむは鼠とる思案の外の猫の妻戀ひ」といふ狂歌の詞書に、「唐猫の人なれたるは、怪しうなつかしき物になん侍る、云々」と源氏物語を結びつけたる、いづれ此手段より獲來りたるものならんが、絕えて破綻を露はさゞる、流石に才子の手際甘きものなり。

又其筆を下すの敏捷なる、平常はずるけにずるけて、いざとなれば、咄嗟の間に忽ち稿を成ししこと、驚嘆すべし。

大人が冊子の稿を草する時、三日三夜に凡そ六七卷、或は八九卷の物を

既成すること屢ばあり。故に巻尾に三日三夜急案とことはりたる部子も多くあり、文化の初合巻讀本共に流行せし頃は、三馬豐國等は、諸方の書肆に種本寫本を乞需めらるゝに、其約束の期に後れ、責らるゝに苦みて、五日或は七日ばかりづゝ、書肆の許に至り、一間をかりて草稿をなし、又繪をかきぬとなり。たとへば今日までは某甲が二階に在れば、翌日は某が離舍にゆき、彼方此方に廻り〳〵て、尚それにても手の屆かで約束の期に後れたる書房には、責めらるゝを苦しみて、其行先を知らせず、後に漸くにして、それが方に廻りゆく程なりし、云々

「酩酊氣質」は一晝夜にかき散らし、浮世風呂初篇は文化六巳の重陽前後五日の急案になり、其三篇上は文化八年四月三十日一日に作上げ、其餘は五月八日の夜を徹し、九日の明六つまでに、跋文をも作りそへたりといふ。

著述百四十餘部、大作はなけれども、十八より四十二三までの間にしては決して僅少なりといふを得ず。されど創拗の才に乏しく、常に人の趣向

を摸擬剽竊せること多し。田舍芝居忠臣藏は萬象亭の田舍芝居に、日本一痴鑑は全交の鼻下長物語に、無根草夢談は同じく親敎現夢也に、腹鼓狸忠信打諢譚は同じく引返狸忍田妻に、腕雕一心命は同じく俵藤太振出藥に、浮世夢助魂膽枕は京傳の盧生夢魂其前日に、稗史臆說年代記は杜芳の草雙紙年代記に基き、讀本は專ら京傳を摸擬したり。浮世床の始にある閔子騫の笑話も聞上手二篇(安永二年刊)に出でたるものなり、其他この類甚だ多し。門人益亭三友の、三十間堀の新室成れるを祝して贈れる狂歌は、夫子自らいふものとやいはん。

近道をしらば戯作も京傳の

うらを廻れよ三十間堀

書は惇信樣にて拙からず、畵は學ばざれども巧なり。狂歌の作は多けれども、俳句狂詩は作らざりき、と見えて存する者少なし。書畵會の席上にて、當意即妙に畵贊の狂歌をつくること、當時三馬と焉馬とに及ぶものな

かりきとぞ。されど三馬の狂歌は理屈多くして、流暢輕妙なる者更にな
し。

村雲よ邪魔がしたくばかけぬけて
　月の入るべき山にふさがれ

人とはゞ息をもいとへ白玉か
　何ぞといはゞきえたがる露

家と子を守袋ぞあらたなる
　氏神よりも内のかみさま

鐵中の錚々と思はるゝものにして尙かくの如し、餘は推して知るべし。
されど狂文の手際に至ては殆ど古今獨歩にして、和漢雅俗を取りませ、切
盛り色付の器用なる、例の屋臺店主義その頂上に達せりと謂ふべし。

達磨贊、

如何祖師西來意、九年面壁は何ざんす、苦界十年お客を壁と睨破る身は

蘆の葉のそれならぬ、浮節しげき川竹の、流れに立つる眞實は、色客への操にして、不立文字の切文あれば、直指人心の指切あり。以心傳心の格子頭、見性成佛の床の內、はまるは本來無分別、きれるは心外無別法、迷へば通も不通となり、悟れば不粹も粹となる、柳巷花街翠帳紅閨、柳はみどり花はくれなゐの、禪味に通ひくるはのならひ、たとひ禿は緣と呼ぶとも、花もくれないは、客の心の色々か、呼、駒下駄の呵囉々々喝。

達磨さん腰から下は作麼生

女をたらす一物もなし

演劇は彼が頗る好む所なりきと思しく、著述中、芝居の噂、役者の評判、到る處に散見し、又俳優細見記、俳優節用集、戯場訓蒙圖彙等の如き、斯道專門の著述甚だ多し。役者評判記に擬して作れる「客者評判記」は得意の作にて自ら其當りを期したりしに、出板の後、評判さまでならざりしかば大に不平なりきといふ。

「浮世風呂」と「浮世床」

三馬が著作中、最も有名にして、又最も其長所と特色とを現はしたるものは、言ふまでもなく浮世風呂と浮世床となり。こは共に中年以後の著述にして、從來の黃表紙仇討物より、一轉して此に一新紀元を開き、純然たる言文一致をもて、中等以下の社會の日常生活を可笑的の方面より極力描寫し、京傳馬琴以外に一旗幟を樹つるに至りぬ。

一九と三馬とは等しく滑稽作者を以て稱せらるゝも、其間大に徑庭あり、一九の笑ふは、恰も機嫌上戶の譯もなく獨り悅に入りて啞然たる者の如く、三馬は酒席の事なれば、交際に笑うて置くといふ氣味合あり。彼は奥底もなく只陽氣にして、此は眞からは浮かぬ色あり。創造の才に乏しく趣向人物の常に同一徹に出づるは、兩者粗ゝ相同じけれど、學問文才は三馬素より數等を越えたり。

三馬が採つて以つて材料とする所は、全く日常平々凡々の生活にありて

趣向を構ふること極めて少く、書中に現はるゝ人物(性格)極めて少く、其云爲する境界、亦隨うて狹隘なれども、言語動作をありのまゝに寫し出だして、躍々其人を目睹するが如くならしむるは、及び易からざるの技倆といふべし。卷舌の勇肌、デグスの半可、山出しの下女、饒舌の婆樣、其語を聽いて其人を思ふ、年齡衣服の如何を問はずして、其容貌動作、歴々として目睫の間に在り。彼が言語に據り人物を表はすの秘訣に於て、造詣する所深きは、屢〻其著述中に言語論を擡き出し、讀者の朗讀法に注意を促がし、浮世風呂にも、浮世床にも、「四十八癖」にも、上方語と江戸語との比較をなし、又「小野𢲵嘘字盡」に、「かまど詞大概」と題して、下等社會の訛語を集め、(錢せね、迷子まひご、磁石ぎしやく、圍爐裏ゆるり、芝居しばや等)浮世風呂に、豕七といふよい〳〵病人の語を寫して、番頭ばんたん、南無妙法蓮華經なもほうねぎよ、御題目おでもくといふが如き、其注意の精細なるを見るべく、浮世床に「ねエお前さん」を、何度となく繰返す「金鳴屋のお袋」、「浮世風呂の門先に」

子供を集めて、盆踊の眞似事する、「おてんば、おやッぴいと名うての子守」が「意地悪根性の八百屋のお大根」との爭論の如き、婉轉滑脫、其場に臨みて其語を聽くが如く、圓朝の落語尙遜色あるを覺ゆ。

書中の人物に至つては、大抵七八人の種類に過ぎず、女にては、やかましやの婆々、豐何とか何文字とかいふ女、山出し下女、金棒ひきの上樣、男子にては、面白く氣の好き隱居、大きな聲で妙といふ素人幇間、膝をとんと打つて反りかへつる半可通、出遊のみして、よその障子を張つてやる怠惰者、言葉生溫くて吝な上方者等、此等の外に出づると極めて稀なり。「四十八癖」も「嘘計」も床も風呂も、名こそ變りたれ、皆此等の人々の集會場たるに過ぎず、例へば浮世床の主髮五郎と、京都江戶の自慢競べする上方商人作兵衛は浮世風呂の向ひに住みて、十で三十五文の茄子を、半値に直切りて二ッ買ふ上方者客兵衛となり、浮世風呂の上り場に、若者を捕へて「面白可笑しく敎訓する晚右衛門は、其名を變じて、四十八癖に「言語に興味を含み敎訓す

る老人」となり、流行の「綿頭巾にありさうな、黄色な聲の」馬陰といふ「風流倭雅の才子」は、「通人になりたがる」癖となりて、再び現るゝが如き、其他一々言はむも五月蠅し。

而して此等の人物を寫すに當り、細を爬し微を捜り、極めて其短所僻所を抉出すれども、之を以て三馬に嘲世警俗の意ありとは言ふべからず。只所謂「穿ち」を言ひて自ら喜び、人を悦ばしめんとしたる者に他ならず。之を諷刺なりと見るは單に讀者の心鏡を以て、迎へ見るの妄想なり。諷刺の本體彼にあるに非ず。三馬と時を同うし、狂歌を以て其名高き蜀山人の如きも、人或は目して、諷刺家となせども、余は悉く然りと同ずる能はず。天明の飢饉天災も太平に慣れたる大江戸の通人才子には、遠方の火事位としか感せられず。寛政の改革も親父の小言程に聞流し、文化文政の小康に太平樂を歌ひ、地口滑稽を闘はし、昨日は狂歌會、今日は茶番狂言、花に浮かれ月に嘯き、色酒の樂悠々たり。塵界の樂園、斯の如くそれ樂し、惡口

もあらむ、皮肉も交らむ、されどそれは醉うての上の冗口にて、何の底意もなく、藥とも毒とも本人は思はぬなり。三馬敢て富裕なりといふに有らざれども、世渡る業にかしこく、家業も相應に景氣よく、書肆には先生と立てられ、當り祝に酒色を振舞はれ、著述の賣行よければ實入もよく、酒を飲めば世間は一層面白く、何の仔細も理屈もなし。もし强ひて當世流に事々しく三馬の理想を何ぞと問はゞ、兎角浮世は金次第、金を儲けて、よき程に暮らすがよし、といふに過ぎざるべし。

浮世床のあるじ鬢五郎が、「何でも商買に精出して見ねへ、親がにこ〳〵すれば、かゝアも燒餠を燒かず、物前も苦勞は薄くて、壽命が伸るやうだ」と、のらくらの惰け者を戒め、浮世風呂の朝湯に、樂天家の姑婆が、

「ハテそんな事に苦勞をするは、おめへの損だよ、氣で氣が休まらねへのだ、後生を願はずと、此世を極樂としなせへ、おめへが修羅を燃やすと、內中が治らねへから、矢張地獄の苦みだはな、己がやうに氣を持つても、是

でも姑はやかましいといはれ勝だ、おめへも五十年跡は、二十歳だのう、そんなら五十年跡の氣になつて、おめへが嫁で、嫁を姑のやうにあしらふ氣になれば、七面倒な事はねへ………おめへ死たい〳〵といふから死だ氣になつて居れば、何もやかましい筈はねへ

と厭世主義の老婆をさとしたる、男湯の上り場に、飛八、鐵砲作等の若者が

「なぜ私等には金がもてやせんね」といふ問に對して、晩右衞門が

「ハテおめへ方は、麁末にしなさるから、金が迯げて行きます、奉公人をおけばとて其通り、主人が憐まずに無慈悲をやつて、麁末な取扱をすればどのやうな者でも、辛棒氣が失せて、遂には主を見限つてでる、ハテ萬事がそれに順じる、………金銀は神佛より利生が目前だ、神佛の御利生はよく〳〵信心したら有らうが、まづ目に見えぬが多い………金が持たい〳〵と口でいふばかり、金を信心せねば、金の御利益はない………神佛の御利生は有て目に見えず、金銀の御利生は忽ち目下(めのさき)に顯はれる…

……何とやら寺の、何とやら堂建立だの、再建だの、と氏子や檀方はいふもさら、無縁法界ひつくるめに、一切衆生に救はれて、漸々居所をこしらへて貰つしやる、爰が即ち金銀の御利生を、神佛も信心し玉ふ所だ、しからば凡夫に於ては、金銀を信心し奉るが、第一の近道さ………

と金銀の有難味と浮世の面白味を説き、四十八癖中の老人が、

「後生は願ふがよし、後生も女郎買も、はまらば家業の妨げ、深くはまらず相應に願ふがいゝ、近松が「宵庚申」の淨瑠璃に、油かけ町八百屋伊右衛門淨土宗の願ひ人、大阪中の寺狂ひと書いたが、是は名言だ。大阪中の寺狂ひといふ一句で、信者はまりに深入をした所が見えすく、さすれば後生願ひに餘りはまるも色狂ひ同然、家もいらぬ身もいらぬと此有難い世の中に住みながら、濁世を遁れたいといつて、阿彌陀樣と心中仕兼ぬは大俗の生悟り、ハテ家も身も入らぬといふは、出家沙門の行ひ、其坊樣たちさへ出世を願ふものを、況や町人百姓に於てをや、町人百姓は今日

の家業を勤め掟を背かず、一家を安泰に養育するが行ひだ。其間には神佛を信心するがいゝ、御先祖菩提、我身の後生、一家繁昌祈禱の爲、一遍も餘計に念佛申すがいゝ………

と説くが如き、三馬が著述中最も眞面目なる部分にて、敎訓の意を含める者なり。彼が飽くまでも、現在に滿足して、面白可笑しく浮世を暮らし、輕薄の幇間も、齒のうく如き半可通も、吾材料として穿ちはすれど、其間に愛憎の念を交へ、諷戒の意を挾むことなし、只當時の和漢學者に對する口吻は、何となく嘲笑の氣味あり。これ蓋し彼が性質として學問上の嫉妬心に出づるものか。浮世床の序文中に曰く、

過日も或儒先生、隣の糟粕の最屓に、大淸中華と譽むるの餘り、いらざる隣の貨を數へ、人の國の大きい自慢、唐詩の白髮三千丈、廣いに緣つて、個の如く髮の毛までが長いである、と見て來た樣なる國字解、いかに人まで大きくいふとて、大體程もあるべきに、額の亘が一尺で、眉間尺と呼ぶ

ならば、鬢が四間で、閔子騫歟と訊ねたれば、先生これには默してやみぬ。其傍に國學者の在りけるが、彼髮長姫から引出して、我大御國の古事來歷、お市が髮の毛、金山を七卷ばかり、ひんまいたる童謠をさへ考訂して論ふ歟、と思ひの外、聽耳をつぶしてゐたるは流石に雄々しき日本魂、吾皇國の國風とは知られたり。されどこれにも、考へたがる癖ありて、國學大人示していへらく、「かみひごん」とは髮結殿の訛れるにて、これをしも「ひつじ」と呼べるを、羊のかみをすくといふより、稱へ來るとおぼえたるは例の漢籍に泥める說歟。今按ずるに、ひは日なり、日髮にゆふに據る物ぞ。つは月の下略、こは月究に究置く故なり。偖又じとは是如何、其時先生些も騷がず、チト假名は違へど、日髮月究の客多くて、朝から晩まで立續けに、結うてゐる故、痔のない者も痔持になる。これに依つてひつじなるべし。又一說に業のしの字といへり。油だらけになるを思へば、穢れたるは是れ濁るなり。其濁りをビヨイと打つて、じの字な

んぞはぞでごんすと意味深長なるお考…………

當時漢學に太田錦城、龜田鵬齋、朝川善庵等あり。國學に本居宣長、塙保己一、淸水濱臣等あり。各門戶をたてゝ一方に雄視し、世亦畏敬して、先生大人を以て之を呼ぶ。而も同じく文筆に衣食する群小說家は、殆んど幇間落語家と伍を同うし、彼等の著述を鬻て、渡世とする書肆をして、「汝が如き戲作者を先生とは職過ぎたり、大人などとの空拜は、早く書いてもらひたさ尻食觀音やら、呉音で先生とやらかすも、金がほしさの尊稱也、誠はどうだの冠辭をつけて、どうだ先生といふ奴にて、彼の川柳點に、先生といつて灰吹すてさせる、といへりし屬にひとし、仍て蔭では、めの字をそへて、三馬めが、と人皆いやしむ………」と言はしむ。傲岸高く自ら標示する馬琴すら、尙自ら謙して、婦幼の爲に書を作るといひ、敢て當時の學者先生と肩を並べんとせず、自餘の小說家自ら學者先生の類に非るは、百も承知なれども、文士といふ點に至つては一なり、其間如何ぞ些の不平なきを得ん。況

んや才に誇り能を嫉む喧嘩好の才子、いかでか癪にさへざるを得ん。浮世床に「殘念閔子騫」といふ口癖ある儒先生をして「おれは清貧を樂む氣だから早く起る氣もないが、家鹿(鼠の異名)の爲に起されやした」といはしめ、主人の髪五郎に「嘉六が酒にでも醉つて來やしたかね」と一言の下に嘲り飛ばし、向うの壁に張付けたる寄席のびらを見て「ハヽア竹本祖太夫、鶴澤蟻鳳、ハテおつな事があるの、漢には賈太夫などゝいふもあれど、日本には奇しい、尤も秦の始皇帝が松に太夫の官をば與へたが、竹に祖太夫の官をやつた古事も覺えず」と扨又鶴澤と置いて、蟻鳳と對をとつた心は、どういふ意であらうな……」と疑はしめ、それより一世一代といふは、重言の誤にして、一世一度と改むべきを說き、更に咄家といふの湯桶訓なるを辨じ、宜しく笑話家と改むべしと論じ、さらば酒屋は酒家、豆腐屋は豆腐家、馬によく騎る人は馬家、香をかぐ人は香家かと冷かされ「イヤ〳〵愚人と論は無益なり」と立歸るを、其跡にて床に集れるものども、互に當世儒者の高慢に

して俗事に通せず、風流八人藝の文字すらえ讀ます、「風流レテ八人藝ス」といふが如き、「論語讀の豐後知らず」なりと洒落散らし、「あいらはおめへ、孔子の道ばかり知つても、脇道へそれると、ぬかるみへ踏込むのさ」といへば「孔子の道はおいて、王子の道も、ろくそッぽうにやア知るめへ」といひ、唐の事ばつかり探して、足許の事に疎いのだの、惡い病にとつかれた、あの人は物識ぢやアなくッて、只の人より不足だぜ」、「そしてあのざまを見ねへな、廊下へ轉ぶと、直に雜巾だ」と嘲笑す。

又國學者の妄りに古文辭を綴り、古言を穿鑿するを罵つて、聖吉といふ若者に遊里より來りし艶書を浮世床の店頭にひらかしめて、

「コレ〳〵ゆふべの玉章を見せてへ、己にはどうも分らねへ事がある、爰はまづよしよ、ソレ此よ、おとゆふは御約束の黄金いつひらサ、これはそれ讀本の文句にあるから、大抵覺えてゐる……「ソコデ爰を聞きねへ早速おいおいやを申たく存候へ共、昨日は風の心地にて、役所をも引き居り

しまゝッサ、爰だて五兩無心を言てよこし乍ら、早速おいやとはどうい
ふ氣だらう、否(いや)なら言てよこさねへがいゝ、それとも又己が御否ともい
はず、早速やッたといふ事か、「何さ少しは本の端をも讀むと分るといふ
事さ、其中に書いた、いやといふ事は、和文にいふ禮の事さ……早速御禮
といふ心意氣だらうが、可愛さうに其婦人に罪はねへ、文の手本を書い
た奴が惡い「ハヽア、それで分ッた「全體文の手本を書いてやる者がある
かの「あるとも〳〵狂歌や俳諧を四文計する人や、瀧本流をごまかす人
などが、手本をかいて渡すのサ「それでわかり〳〵、コレ見な、お定りの目
出度かしくも、もう古いといふ氣ださうで、此中の文には、あなかしこと
やらかしたが、此文には又それも端折(はしよつ)たかして、何もなしさ、コレ見ねへ
孰れ近きに御見のふしを、ねぎまぐろになむとやらかした「ハテナ、ねぎ
まぐろになむと言ッては葱まぐろを拜むやうだが「わかるめへが「わか
らねへの「コレサ〳〵そこ達は讀まぬ同士、書かぬ同士だせ、それだから

俗物だといふ事よ。餘り情けねへ、もちッと譯を知ッて吳れねへぢや、あやまる「それだッて、何處へでも通じるやうに、書いたがいゝはさ、之ぢア、うぬ一人承知で先へ通らぬへ、此位なら白紙をよこす方が、遙にましだぜ。

一人は葬りに萬葉家の貴ぶべきを說き、他は十四五年跡の事だに知れ難きに、大昔のいかで萬葉家に知るゝを得ん、論語讀の論語不知たらんよりは、寧ろ論語不讀の論語不知たらむと論じ、遂に字は知らずとも、金さへ持てばよしとの本音を吐き、浮世風呂三篇に、「玉垂の奧深く、侍るだらけの文章をやりたがり、几帳の陰に、檜扇でもかざして居さうな、氣位」の「けり子」「かも子」といふ二人の女に、本居加茂の噂をさせ、其頃清水濱臣が校正して世に出だせし「庚子道の記」を評して、かの頃未だ古言の開けざりしに、かく使ひ樣の誤なきは、校合者の添削もあらんなど、饒舌りちらして、さて、

かも子「此間、餘り卑い題でござりますが、おかちんをあべ川に致して、去

る所で戴きましたから、取敢えず一首致しました、

うまじものあべ川餅は朝もよし

黄粉まぶして晝食ふもよし

けり子「うまじものあべ川とかゝり、あさもよしきと受けて、晝食ふもよし、ごうもいへません、云々

何ぞ其諷刺の鋭利機敏なる。されど此の如き諷刺は只折に觸れて、現はるゝのみにて、二書中此に抄出せる他に、多く見出さるべくもあらず。之を要するに、三馬が長所は、言語を直寫するの巧妙なると、一種の人物を穿つの微細なるとに在り。唯其人物の偏癖ある三四の人、所謂本町庵の食ひ物になりさうな人に限られたると、趣向の屢〻同一轍に出でゝ、浮世床の「関子蹇」と、浮世床の生酔武士と、同一の話頭を反覆し、上方者の鄙吝を前後に繰返すが如き、其短所なり。されど、苦心して趣向を設けざる所、却て實際を寫すに便宜と餘裕とを與へしや疑なし。

浮世風呂と浮世床とは、三馬が双生兒にして、面貌年齡全く相等し。されど其間自ら多少の軒輊あり。床は此に出入する人物の、大抵町內の惰け者、用のなき隱居などいふ一局部に限られたるに、風呂は朝湯の早きより仕舞湯の遲きに至るまで、老弱男女貴賤賢愚の入込、引きも切らず、俳諧好の老人、藪醫者の詩人、不案內の西國者、下女、奥樣、山の神、人物雜多にして、變化自ら生ず。髮結店に本田髷の順番を待つ退屈凌ぎに、各一條の說話を語り出づるが如く、平板單調ならず。彼が著作中比較的に人物多く、變化に富みたるもの、此篇を以て第一とす。

あしの葉わけ

國學者が雅言もて小說やうの文を綴りしは、荷田在滿の白猿物語(元文四年作)落合物語(寬保二年作)などや始なるべき、ついで眞淵の由良物語、綾足の西山物語、秋成の春雨物語、くせものがたり、春海の竺志船物語などあり

やゝ後れて狂歌もて著れたる六樹園は、國學の素養も深く殊に戲文に長せしかば、讀本體の近江縣物語、飛驒匠物語なども、かいなでの作者に免れ難き「ふつゝかなる團子の横ぐはへ」てふ不調和の譏もなく、今様をいにしへぶりに寫したる都のてぶり、北里十二時のたぐひ、さがなき浮世の隈々をあなぐり求め、あまさかる鄙のさへづりをみやび言に綴りものして、聊か滯れるふしなきは心憎き業なりかし、かくて我も〳〵と事好みなる人の才を競ふあまりに、安南遠可志、藐姑射秘言、はなの幸なざいふあらぬ書さへ、つぎ〳〵に出で來にけるなめり。

こゝに掲ぐる葭の葉分の卷は源氏物語評釋の著者として、はた俠客傳の續編を物せし作者として、普く世に知られたる萩原廣道(備前岡山の人葭沼と號す)が三十三歳の時の作にして、難波の風俗人情をいとをかしく書きなせり、これや東なる都のてぶりに向へて、蘆がちる難波の手ぶりともいひつべく、文章の自在はた彼に勝るとも劣るべくはあらず、彼が僅に兩

國橋、博勞町、藥師堂、夜鷹の四章に過ぎざるに、是の八卷二十四章の目次を揭げ出せる、まづ其意氣を壯とすべし、只惜むらくば今傳はれるもの一卷三章に止りて、全豹を見る能はざることを、此書もし完備したらんには、大阪風俗志として絕類の作たるべし。

大正元年十二月

あしの葉わけのまき

難波江のしげきあしの葉かきわけて
　くまばやくまん底のこゝろを

難波田舍といはれしはいひ知らぬ昔の事なりけん、都ひきみやこびにけりとよめる頃よりは、又千とせばかりの年月を經て、豊臣の大殿の時めき給へる御世のさかりに、天の下の力をつくして營み立て給ひつる大城のいみじく彌々なりけるにあはせて、まちかき國々より人あまた來集ひ住

みて、かつ〳〵賑ひそめたりしを、それはた見果てぬ夢となりはてゝ、今や穩かなる大御代の光に、よもつ海の波騷ぐことなく、普き御うつくしみの忝さに乘りて、千船百船絶ゆるひまなく出入して、再び榮えまさりたる御津の里のにぎはゝしさこそ、言はんかたなく花やぎたれ、二十萬の竈の煙は大空に薫り滿ちて、高津の天皇の大御心をいたましめ奉るべくもあらず、こゝに生りいでたる壯人などは、日の本の御厨なンどぞ誇りいふめる、げにや薩摩潟みちのおくのはてばては云ふも更にて、琉球と聞ゆる蕃國蝦夷が千島の隈々まで、御德化にまつろひて貢つかうまつる頃ほひなるに、猶いと遙かなる西のもろこしの國々よりも、盡きせずもて運ぶ財貨どものまづ集ひ寄る所なれば、かの庭訓往來新猿樂記なンどいふめる書に骨々しくしるしつけたンなる國産のことどもは、兎の毛ばかりにもあらずとや言はまし、此頃片田舍よりのぼり來しえせ學生の某の掘りきとかいへる川づらの家に入りゐて、彼是見驚きたる繁昌の有樣を、筆の行くへに

まかせつゝ片端づゝしるしつけたる事とて、人の語り聞かせるまゝに、こゝにも寫し出すなり、さるはまちかく打見たる川のべの有様を始めにてつぎ〳〵に聞き集め見集めんまに〳〵、歌舞妓観せ物なンどいふ、はかなき事ぐさに至るまで、漏さずしるしつけてんとて、まづその標目をこゝに揭げつ、漏れたるは思ひいでんまゝに加へてん、皆このめでたく辱き大御代の、廣らけき御蔭にたち隱れたる四種の御民のほかなる人どもの上なりかし

弘化二年といふとしの夏みな月とをかの日

吉備の葭沼

たはぶれにしるす

一の卷　物あらひの女　船をさ　さみせんざうろり

二の卷　かし舟　家かり　とみ人

三の卷　旅人やど　かみゆひ　湯あみや

この段はたはぶれながら此書のみたまさあるべき事なれば、まづ言ひおくべけれど聊か思ふ旨もありてしりへには附けし也

すべて八まき二十餘り四くだり、添へごと九くだり、つけぶみ一まき、合せて九まき三十あまり三くだりにして終るべし

ものあらひの女

さがなさの罪も川瀬に消えぬべし

潮の八百あひに流れいでつゝ

近江の海の溢れいづるを源に、加茂川桂川なンどの末々おち集ひたる流れを淀川となんいふ、それが後瀬を分ちて幾條ともなく引きもて來たるはこの難波津の命なりけり、とある川づらを切りならして物洗ふ處に定めたるに、あしたよりゆふべまで立替りくる人を眺むれば、色々のさま形してくさ〴〵の物どもを持ちいでゝ來なる、若きあり、老いたるあり、男あり、女ありて、相識りたるは詞をかはしておのがじし物語どもするを、耳とゞめて聞きたるに、をかしくも悲しくも傍痛ぐも心苦しくも、とり〴〵感ぜらるゝ事なん多かりける、何がしと名に立てつばかりの家に仕ふる婢女どもなるべし、二人三人並びうつぶきて、洗ひたる衣を桶に入るゝあり、晝食の料の魚どもの大きちひさき、籠に入れ來りて調じつゝそゝぐあり、今ひとりは既に聊かの物を洗ひ果てゝ歸らんとしけるが、又立戻りて物いひかくれば、さながらに手をやめて打笑みつゝ、軒端の日影に寄合ひた

り、おの〳〵家の内の讖言ごともするなるべし、衣洗へるは裳の裾高くかゝげて久米の仙人のはふれぬべきさまに白き脛あらはに搔出したるが、簪とうでゝ亂れかゝりたる鬢のあたりを搔上げつゝ、小梅よ、まだいとねむたげなるよ、うちかたも（しうの家をうちかたといふはかゝる者どものおしなべたる詞なり）よべは客人のおはして、例の茶の湯といふことの始まりて、子二つまでも歸らざりき、それ果てゝ器物洗ひなンどしつれば此程の夜の短き、鳥さへ鳴きぬ、かくてねぶるとしも無きに、ばんとうぬしの（あき人の家のをさを伴頭となんいふは仕ふる人のとものかみといふ意なるべし）おざろ〳〵しう詈りて起したり、おのれこそ宵の程よりいね飽きたらんを、人の上をばえしも知らず貪睡とて呟くよと言ひさして、あくび長やかに打ちして目をしばたゝけば、年の程二十には足らざるべし、河内にかあらん、播磨にかあらん、まだ鄙びたる衣きたる女の、此程やう〳〵里馴れて、さかひといふ詞も舌短くなり、かきくけの濁れる聲も鼻に洩らしなンどするまゝに、元よりの里人にも劣らじと思ひあがりたりげなるが打聞きて、げにさこそ、いづこ

も主人は心長きものぞかし、こゝには歌の會とかいひて、同じく夜半すぐるまで起したりき、いかではねぶたからざらん、歌會といへば此頃をかしう耳馴らしつる清元とか江戸節のたぐひにこそと、夕暮より下待ちしたる甲斐もなく、たいふは（浄瑠璃かたる者を太夫といふこゝは下に詳にいふべし）六十あまりの法師にて、名をばそうしやうとなんいふ、その宗匠法師飽くまでに酒うち飲みつゝ、何にかあらん打傾きては紙にかくよ、さる程に飲みさしたる盃はいつも〳〵さめ果てゝ、たび〳〵煖めに立たせたる、いと憎しかし、をり〳〵はてんちの天皇よむがごとき聲して、いたう感で覆りなゝざしつ、今ひとりの小松わこは腹を痛め打臥し居り、せんかたなく酌にさゝれていでつゝ居る程の詫しさ、千年を歷ぬる心地なんせし、さるは主人は益なき物好みし給ひぬなり、二七とか、三八とか、人の名めきたる日にこそは、又かの法師來つべしと契りたれ、いと困じにたる事、さはいへど家君の心なだらかにて、勞たき者に思ひ給へれば、けさも自らは起きいで給ひても、我をばさてなん臥

せ給へりき、されば只今の程に起きいでつるなり、この辱き御心一つに絆(ほだ)されて、かのと言ひながら片頰に笑みつゝ、とばかりありて、人のあたりへ來(こ)かしといへど、猶こゝに仕へつゝあゝなりといふに、さはそこの家君は佛なりけり、こゝのはこよなく腹黑き人にて、口のさがなくきたなげなることは、難波のうちに又やはあるべき、猫の嫗(おうな)に（これは衣を洗ふとてなり〳〵くる嫗なるを、常に猫を飼ひつゝめづることの餘りなるまでなりければ、かく仮名つけたるなり）聞きたる事あり、必ず人にな洩らしそよ、もと家君は新町(にひまち)のあそびなりけるを、あるじの若かりける程通はれしを打惑はして、遂に家君にはなりぬとぞ、其折も親族(うから)方(がた)の人はうけがはれざりしかど、主人(あるじ)の強ひて物せられけるまゝに、いづれも皆そば〳〵しくなりて、誰ひとり訪ひ來られしことはなし、さばかりの人なればこそ、腹あしきもことわりとは思へど、もとより大き屋の娘めかしたるなんいと傍痛き、過ぎし日も我を乞兒(かたゐ)と詈りたり、今こそあれ國がたにては庄屋(さうや)の支流(わかれすゑ)なるを、しか詈られたる腹立しさはいかばかりなりけん、されば彼のえせ遊女(あそび)と言はんとま

では思ひしかど、これなん辛抱といふものなんめりとてこそ、さてすぐいたれ、げにいと奉公といふものは苦しかりけりと、打歎きつゝいへば、今ひとり魚洗ひはてたるが、籠ながら置きて、あなかま、何がし屋の近かゝなるにと、手掻きつゝ寄り來りて低語く、これは今すこしねびまさりて、三十に近からんと見えたる、着たるものどもの流石に垢つきてもあらず、髮さへ難波風によしめきて、打亂れても見えざるは、主人に人知れず思はれたる故なるべし、いでその茶の湯こそ今の世の流行事なれ、わが主人も元は知られざりつるを、何がしの御館の官人たちにまじらひ難しとて、此頃俄に始められたり、その師をも亦宗匠となん云ふめる、茶の湯なるも同じ法師なり、何事をするかと見もてゆくに、先づその器物こそ胸潰るばかりに價高けれ、蹇の乞兒がもたらんやうなる陶物の碗一つを、三十ひらの黄金に買はせたり、諸々それに次ぎて皆いと高かりきとぞ、かの宗匠坊はいとよき黄金をこそ貪るなれ、彼が妻になるはいかなる幸福人なるらん、羨しと

て打笑みながら、そは猶さてもよかンめり、食物の怪きはいかなる業ぞや、食らふべくもあらぬ物どもを取集めて、小き器物に出のくふばかり盛りたるを、一つ〳〵賞めながらたうべぬること、思へば〳〵をかしかりけり、それをもあろじは云ふがまゝに行ひて、我等をも男どもをも責めはたりつゝ嚴におきてらるゝよ、いと詫しくはたあり、それが中に茶挽くとかいひて、臼といひさして、舌をそと出だしたるが、打笑みかゝる口もとに袖をおほひて、それに入れて廻すなり、俄にものすればいかなる事にか、いたう戒めらるゝからに、蟻の這ふ如くなん引きめぐらすめる、これを始にて、さまざまの戯事どもせらるゝに案内は知らず、此頃は家のうち擧りて騒動きつゝあンなり、それに比ぶれば小梅がかたのこそ勝りたるらめ、詫しくとも酌にたてば折々は肴をもくれぬべし、杯盤のおりたるには食らふべき物もなきにはた有らぬを、茶の湯は元より少しく調じたるを、餘さぬやうにたうべぬるが法なりとかいふめる、いと味氣なく辛き事をと、いまだ

言ひも終らざるに、いち早くさし出でゝ、うべ然り〳〵、いづこも違はぬ味ひにこそ、されどいと人わろき物語なり、誠やわぬしはさばかり羨しくばなどその法師打惑はして、そが家刀自にはならざると云ふに、眉根をよせ頭を振りて、いであなかたは、骨々しき老人まうけて何にかはせん、三途の川の案内習はんよりほかの事なし、わぬしたちに見せたらば何とかいはん、さるはいとよくさしおびたるよ(マヽ)とて、おのづから聲も高くなりつつ、皆はと打笑ふに、小梅といへるがあたり〳〵見めぐらしつゝ、語れる聲を強ひて乙らせて、さはわぬしは主人の君に思はれて何の足らはぬ事もなくあればこそ、わがともがらの貧しきは、帯一筋も恵まれなば居兒にも嫁ぎぬべしと、さかしだちて言ふに腹をきりてとよみ笑ふこと限なし、あなうたて、その主人も主人ぞかし、おのが如き醜女にだに言問ふ程の人なれば、あながち心多くて、新町にも新地にもこゝかしこあくがれありかるる上に、某の裏屋に妾をさへ隠しすゑて、隈もなく忍び渡らるゝなり、そは

さてもあゝべかゝめれど、日高の川をも越えつべき家君の角めだゝるゝおどろ〱しさは、木の根岩角も裂けぬべくなん、山祇の命とはうべも云ひけり、その間に立渡りて虚言をしつゝ枕とる憂身の危さは、いかばかりとは思ふ、今はや荒波に打砕かれて底の水屑となりなん心地ぞするや、此の程も彼のおもひ人の腹ふくよかになりたりとて、媒したる髪結の來て、いといたうおどしゝかば、金を十ひらやられたりき、誰が夕露のしたゝりとも知られぬものを、眞めかしたるもをかしかりけり、これを思へば富みたる人ばかり愚なる者はあらぬぞとよ、其事程もなく顯れて山祇の鳴りはためかれたること想ひやるべし、されどあるじは、流石に男なるからに一言も返しはせで友だちの方へ出で行かれぬ、讒言のついでなれば、日頃の腹立たしさ現心もなく皆おしいでゝ數へ立てられたる苦しさ、身も消えぬべくなん思ひたりし、されば心だに安き方あらば、襤褸の衣を纒ふとも乞兒が妻にもなりつべくあが思ふよと、しみ〴〵言へば又諸共にうち

しめりて、げに〳〵様々の世の中なりや、かたち人にてとみ人にてと東諺にかたらふやうなる主人に仕へて、さこそは樂かるらめと思ひつるを、業平の朝臣は色好みなりけり、さればよそに思ひ測りしには大方は似ぬものになん、こゝに繫がるゝ白痴漢は賭博の幸なければとて、晴の衣二つながらもて行きて二月になれど返さぬなり、一昨日も家君の供にたつべき事ありしかども、せんすべなければ、俄に頭痛しとて打臥して止みぬ、いたづら者はたうしろめたうこそ、さても行く先は誰も〳〵いかなる瀬にか寄りつくべき、大方は此川水のやうに海にこそ流れいづらめなゝど、流石に漂はしき身のよるべ定まらぬ事をいひ歎きつゝ、柱に倚りかゝりて襷をまさぐり塵を捻りなゝどして、やう〳〵あはれに語らふ程に、打續きたる五月雨の空なごりなく晴れ渡りて、照り輝きたる大空に消ぬかに舞ひ昇りたる大きやかなる鳶の、いつしか舞ひさがり、つと身をかはしておとし來つ、矢よりも早く横切り飛びて、かの洗ひたる籠にさはるとぞ見えし、

大きなる鱸一つかい摑みて、川を竪様に逃げてゆく、羽風の烈しきに、やとおびえつゝ見やりたれば、遠からぬ程の屋の上に物干といふ物の勾欄にもてゆきて、腹のあたりを引裂きつゝ食ひて居り、くはや身の上の大事なンめりと慌て惑ひて、黄ばみたる聲張上げて、かたへに見ゐたる童子を呼びいぞかして、てふきち吾兒よ（あきなひだなに仕ふるわらべたなべて蝶吉さいへり）いかにせん、早く歸りてはやもて來、衣干す竿をなンぞおほせ付くめる

雲に飛ぶ藥もがなや天がけり
あたらすゞきをとりてこましを

なンざ蹉跎をしつゝせめて云ふも、彼の山祇の祟をのがれんとのみ、まづ思ふなるべし、

ふなをさ

かぢ枕そこはかとなきうき身をや

なげのあはれにかへんとすらん

いにしへに舟君といひ、漢土にも舟子なンどたゞへしは、波風の恐しさに尊びあがまへたる名なるべし、今は字音に船頭といひて、物のあはれ知らぬ一種に數へられたるものにも、又樣々の世界ありて、乘物の大きさを、積むなる米の數に名づけて、千といひ百といふに品わきたり、上の品なるはうまき物飽くまでにくらひ、よき衣温かげに着て、泊々の遊女にたはぶれ、湊々に隱妻まうけて、帆柱の梢よりも遙かに思ひのぼりたりげなるは、公だちたる贓物の光なンめれど、二世はゆかぬ現身の命を、はかなき棹柁にかけたるが可憐なれば、主も知らず顏つくるなるべし、それより次々に品くだちて、いさいと下の品なるは、藺蓆を帆にあげなンどして、碇綱の心細げに渡らふめり、いとやすき片縒の玉の緒と見えたり、茲に寄り來るはそれにはあらで、川尻にて國々の大船小船どもより、物を移し取りてもて運び、あるは淀川を溯りて、都はさらなり大和河内近江丹波の國々へ遞りも

て行くたぐひなりけり、水夫どもは國々の亡命者なりければ、とり〴〵をかしく珍しき事どもをぞ囀り合ふめる、何とかや名づけたるいと細く長やかなる舟に、苫ひきく葺きかけたるが何を待つにか昨日より纜を解かで、つれ〴〵と磯邊にある、それに並びて聊か劣りざまなる舟に、物高く積みたる片つ方にかごとばかりの日覆をして、舟繋ぐべからずと物々しく書きたる家の柱に、骨なく繋ぎとめたり、菅原の神に惡まれ奉りたるをのこよと、ふと先づ目とゞまる、これらに乘りたる者ども、いづれも〳〵生れながらの赤裸にて、掛卷くも畏き大日女の尊の御影かうぶりてふすぼりかへりたるに、八重の潮風に吹かれたれば、うはべは白けだちて鯰とか魚の名めきたる紋こそ出で來にたれ、飛蓬の如しと昔のから歌にいひけんやうなる髮の元結の絕えたるを藁のしべにて補ひたる二十餘りの若人舳前に立ち顯れたるが、只今あみてあがりたりと見えて、濡れたる手巾を犢鼻褌に卷きかへ、手には枕繩の當る所に物すべき藁の編みさしたるを

持ちて、ゆるらかに編みながら、さすがに聲はいとよくて歌ふ、されど古(ふる)めきたる夷曲(ひなぶり)なりけり

いざや漕げこげ〳〵こゞも赤間まで（サンサオセ〳〵シモノセキマデモ）
こがば港ぞちかづきぬらし（オセバミナトカチカクナル）
こといへざ行かれんものか荒波の（コイトイウタトテユカレヨカサドヘ）
佐渡は八重だつよそにありけり（サドハ四十五里ナミノウヘ）
せこが來るよひはしるしも背戸のとの（サマノクルヨハヨヒカラシレル）
はちすの池に鴨さわぐなり（ウラノハスイケノカモガタツ）

ひたもの績けて歌ふ程、竈の前に踞(あぐ)みゐて賤しげなる器物(うつはもの)に飯(いひ)おし入れて、うまげにくらひをる六十(むそぢ)ばかりの翁(おきな)、この隣れる舟長(ふなをさ)と似氣なき物語ごもすなり、片船(かたふね)にを〻と呼びか〻れば、かの日おほひのしたに午睡(ひるね)せんとて腹當(はらあて)といふ物をして方(けた)なる木を枕にしたるが、を〻と答ふ、權三をぢよ、聽けかしな、こはいと内々(うち〳〵)の物語なれど、一昨日(をとつひ)の夕暮に川尻にさしか

かる程に、例の新堀のかたきどもなん（遊女を敵といふはかゝるもの、おしなべたるはやり詞也）逸早く見つけて招く程に、空嘯きてのみありしかど、屢聲たてゝ知らず顔はいかになンどいふ、さすがに憎くはたあらざれば、終には負けてなまめきかはすに、必ず今宵はなどいひけれど、過ぎし頃の過失に親方に（業の長とある人を親方といへり）いたう戒められて、辛き目見たりし程に、いとよう念じかへして忍び過ぐしゝを、悲しきかな、一盃の酒に醉ひたる餘り、湯あみせんとて陸の方に行きたりしに、彼の敵ゆくりなく來會ひて、いと睦じげに肩の垢を搔きなどするを見るに、つぶ〱と肥え脂づきたるもゝのあたりの白やかなるに、忽ち胸走り火の燃えあがりて、忍び果たすべくもあらざれば、よしさらばいかゞはせんはと、俄になよ〱と引きもて行かれて、又一方の上荷うちたり（舟の波風に沈みぬべくするなり、積みたる物を海にすつるを、上荷うつといふなり、それにいひよせたる詞なるべし）あなまが〱し、彼を敵とはうべこそ名づけたなれとて、餘波なく打笑ふに、そは辛く面白き目を見たりけりな、ここにも同じ樣の事ぞとよ、何がし屋の荷積のいとまいる程に訛へられた

る書簡つてんとて、堀江の方へいで立ちたる道に、新町をよぎりたれば、晝間の如くともし連ねたる火の光に、只ならず浮かれありきて、ゆくりなく奥まりたる方に迷ひ入りにしかば、とある家より女どもの群立ちいでゝ強ちに引き入るゝを、こはいかにするとて抗爭ひしかども、手に袖にひかれ肩に腰におされなンど、心ともなく引きのぼせられつ、かくて猛き様すれば放つ事と聞きたりしかば、さはかくして我をいかにすると、腕を扼りて嚴きさまにうめきしかば、家刀自なンど出でゝ様々にすかしこしらへ、艶めきたる敵ども立替りつゝ追從するに、終には膂の力も拔けて、命をさへに取られんとしき、碇繰りても櫂取りても人には劣らぬ權三の大人も（みづからいふなり）ひめには（あそびなひめといふも又此頃のはやり言なり）いたうおくれにけり、さる程に今朝ははしたなく明けはなれて歸りしからに、彼の文をだにえもて行かで、こゝに在るよとて、又かや〱と打笑ふは、今少し若やかには見ゆれど、こゆるぎの五十ばかりなるべし、五つ六つばかりに見えたる幼き兒をゐてきたり

けるが、旁の家に法師の經よみたる聲を聞き居りて、棄恩入無爲信實報恩者なもあみだぶと繰返しつゝ口眞似をぞすなる、それに打合せて彼の舳前なる男の唄に

オヤハ女郎買ヒ子ハ後生子ガヒうかれ女に親はうかれて後の世を
今ノ浮世ハサカサマニ子はかしこめり世もや逆ゆく

澄みわたる水鏡にさし合せたれど、頭の霜の影恥かしとだに思はず、やをら飯くひ終りて、舟端よりうつはものさし出して、さながらに滌ぎ收め、煙草くゆらしてなほぞ語らふ、さては和主も奢りにけり、親方の常に奢りとておごそかに戒めらるれども、つら〳〵考ふればかばかり價賤しき物は又あらじかし、僅ばかり代をいだせば、まづいときら〳〵しき家にうるはしき杯盤置き並べ、飽くまでに酒打飲み肴とりくらへども、又誰にかは憚るべき、今少しの物を增せば天つ乙女のくだりたらんやうなる唄女の來て、聲なつかしく掻彈きもぞする、それ過ぎて見も知らぬ桑蠶衣の衾のう

ちに、玄孫女といふともふさはしき乙女をむだきて、腐鷄にも病鵲にも驚かず、埋れ寢たらん樂しさは、如何ばかりとかは思ふ、昔蓬萊とかいふ國へ行きたる浦島の子が心地ぞするや、をのが縣の地頭ぎみもいかで是には勝り給はん、和主はいかに思ふぞといへば、げに叟か說はそら言ならじ、まことは是に息をのばへて遙々こゝには通ふなり、村に歸ればさすがに家一つのあるじとて、里正のぬしに聞えんも所せく、子共の思ふらん事さへなまはしたなうて、愼みをるも味氣なし、さればぞ舟乘の味ひは、幾世を經ても忘れ難しとはいふぞ、されど又難波江の濁れる水のしみつきたるけにや、歸りたる卽ちは何物もきたなげに見ゆる中に、稻舂き秣草刈る家刀自がまめだちて待ち欣ぶも、なか〳〵憎くさへ思はるゝよ又來ん世には鶴池氏のあろじにも生れ替はりて、風流なる家刀自よびすゑてんをと、さしも口堅めつる秘事の漸うそゞろぎまさりて、壹越とかいふばかりの聲音に喚ばはれば、川波に響きてあたり〳〵人の耳をも貫きぬべうぞ、聞ゆ

る、若人は舷を敲きたてゝ、碎けよかしと張上げたるは、おのが妻こそとい
ふ心にか

　にひまちに葦火たく屋をくらぶれば（オサカヂヨロカウテウチノカ、ミレバ）
　奥山にすむ古狸かも（千里奥山ノフルダヌキ）

禿狸かもと折返して

さみせん　附ざうるり

忍びねに立てゝもなかん今琴の
　こまのあがきにおくれゆく世を

中昔に催馬樂なンど聞えしは、唐土の樂の音を移して、大和言の葉を歌ひしものなり、その流の末に今樣といふものゝ興りしは、そのかみの今めきたる童謡をいへるなるべし、永祿といひける御世の頃、琉球のから國より三味線といへる琴を渡しおこせけるを、和泉の國堺のめしひ法師仲小路

といへる人、かの今様歌に合せて彈きそめけるより始りて、虎澤澤住なンどいへる法師ども、次々に委しく彈きなしつゝ、やうやうをかしうさだめけるなかに、寛永の頃難波の津に柳川八橋といふめしひの出でゝ、いみじき上手にてなんありければ、それが流國々にひろがりて、只下様の樂のやうになんなれりける、この柳川八橋を加賀都城秀なんどいへるにや、今もめしひ法師の名に何都城某と付くるは、それが筋にかたどるなるべし、いさやくだ〱しき講說は止みてん、或町に住ひて家のおもては格子をもて打堅め、犬垣といふもの仕廻らしたる門に、事々しき札をうちて某氏の檢校としるしたるは、いと〱貧しき人の子なりけるな、瘡の神に救はれて、今は錦の帳にも起臥しすべき程(に脱カ)なりたる某の都といふ筑紫琴と三味線とを教ふる師なりけり、いとのどやかなる本性にて、しれ〲しき女の童をもさるかたに心長く教へたて、事とある折をすぐさず世の務をもなしければ、此所にも彼所にも又なき師ぞと褒め騷がれて、富みた

る人の娘あまた數の子にもちたれば、家の内もいとにぎはゝしく、暮ると明くと客人の絶間なき程なり、此頃は堪へがたげなる暑さの頃ほひなれば、並々の師は所勞なンど言ひ立てゝ事やむべけれど、例のさかし人なれば朝疾くなンど契りつゝ、まだ未明の程よりさらへといふ事をぞすなる、廣らかなる家の前栽のかたなる障子を悉く明け放ちて、朝顔の瓶に植ゑたるが匂ひやかに咲きたるを、傍に置たるは人の賞づるを聞きめでにするにかあらん、何とかや名づけたる唐蓆を敷きたる上に、越の國のうす物の帷子を著て美はしう押直り、古近江とか昔の名匠の作りたる、由めきたる三味線に滋賀の松と銘つけたるを斜に取りて、所せげに集ひたるわらはべを、一人々々呼びいでゝ敎ふめり、塙の何がしが志を聞き慕ひて、大和歌をもよみければ、かく風流たる名をも付けぬるなるべし、問屋といふものゝ子はたび／＼彈き止みて物を問へば、相場師とかいふ人の娘はわれさかしらに節を定めてかゝはらず、藥店のいときなきに香しき聲あれば、

白粉賣のわらはべは艶めきたる調べあり、鑄物師の響われたらんが如きは、いつも〳〵笑はれて涙をおさへ、紺搔の糸につかぬは、おのれと心焦燥れして袂を絞るもありぬめり、とり〳〵様々立替はる程に、奧まりたる方より淸らなる女の、杏の赤く照りたるを籠に盛りてもて出でつ、千早振るわたりの名に負ふ茶を煮て、師のもと近うおし据うれば、とばかり彈き止みて汗おしのごひながら、一つ〳〵與へさせたり、かくの如く心を碎きてよそに見るだに、もどかしく煩はしげなる事を堪ふるにこそ、妻子も奴婢も物思なげに思ひあがりて過活ふらめ、されどうち〳〵の心づかひは、又並々の事にしもあらざるべし、富み榮えたる人の子は出で入る諸人に褒め立てられて、おのづから誇りかに己がまゝなるも猶すぐして心とらるるが何わざにも怠りがちにて、とにもかくにもせんかたなく愚しきが多かるを、親々の心は表裏にて、いかで世の人に勝らせばやと思ふより、師にも折すぐさぬ情をかけて、珍かにをかしき物を贈りなゝごしつゝ、只善く

も惡しくも打憑みまゐらすなりなゝど、穩に物せらるゝに、いかばかり平穩ならんとする人も岩木にしもあらざれば、終には心苦しうなりて、いかにもして勝らせてしがなと、力の限り敎へ諭せども、本性の敏からぬをばいかにとかせん、是にかはりて貧しき人は習はせまくも思へども、さし當りて物のいりめの多かゝなるに困じて、さてのみすぐいつゝさし置くをこゝにも同じ程の友達の物するを羨しがりて、ねだりかゝりなゝど、辛うじて出で來る程なれば、親の心痛さも却りては心苦しうて、あらずもがなと思ひながら、なま〳〵に敎へなゝどすれど、おのれとすき好みて心入るゝからに、大方すく〳〵と學び取りて敏く勞々しきも少からす、されば初めこそあれ、しか心入れて年月怠らぬ志にめでゝ、定りたる儀式なゝどもさし措きて、いみじき許手習はせなゝどするを、彼の富人なゝどおのづから漏れ聞いたらんには、己が子の癡たるを言ふべしや、あな怪し、いかでかう偏頗ては物すらん、逸早く拔け出でねとこそ二なう心をもつくいたゝ

なれ、よしさらば今より後はなンど目を側めて、魚心あればなンどいふ淨瑠璃の語をも引出づべかンめり、さる事聞きたらん折の心苦しさは、又いかばかりにかあらん、世の中の道理をありのまゝに述べて、おこたりを言はんにも、ます〳〵憎みもて行かれて、はて〳〵は此所彼所悪しうのみ取りなされつゝ、終には業を失ふ媒ともなりぬるぞかし、かゝる配慮の片時だに離れぬを、あしたより夕まで面白くをかしげなる様にもてなして、琴の調べに浮かれ乗りたらんは、げにもいと堪へがたげなる業なるべし、手書くことを教ふるも同じ筋ながら、それは猶かゝるしれ人をも筆柄に指くはへて書かせつゝ、赤き物して賞めたる詞なンどおほく書きたつれば、さても恨負ふばかりあらざンめるを、これは必ずまねび取らせて、親おほちの御前にも、歌ひ彈きなンどせらるゝばかりには授けざれば、なか〳〵習ひ甲斐なしとて、師に咎をぞおほせらるべき、さりとて獨りにのみかゝづらへば、この數多ある教子をまたいかにせん、返す〳〵勞がはしくて、い

といたう思ひ屈じたらん折なンどは、などかく大丈夫には生れいでながらなンど、はてばては身の幸なき歎息とぞなりなましかし、かくて花を見すてゝ歸る雁なンど、あてやかなる言の葉も、鼠ぐわた〳〵なンどつきなく俗びたるも、おほやうは彼方の物好みに打任せて、四たび五たび搔き返しては、賞めはやしつゝ退かする程に、日影もやゝさかのぼりて、此所彼所の乳母や婢女や、日傘なンど持ちて迎へに來集ひたり、そなたざまの一室所にて、これには家刀自いでゝなつかしげに物打言ひ、木のめ啜らせ、けぶり草くゆらしめなンどして、髮のゆひざまを賞めたて、衣のあやがらを算みたてなンどする、これはまた大方ならぬ煩はしさなるべし、かくの如くしておもむけ悟したる人も、漸う大人しくなり行くころほひよりは、よろづいと疎々しうなりて年に一たびの音信をだに、間近き程にありながらせず、路のほどに行き合ひたらんにも物見えぬをよき事にして、詞をかはさぬ人もありげなりや、いと賴み少き心淺さなンめり、人に嫁ぎて嫁君な

ンごもて囃されん者の、庚申まもりに集ひたらんにも、人並々に聲たてゝ親里の恥をさへ彈き隱すなるは、そも〳〵誰が功にかあるらん、之れを言ひいでんは殊更めきたれば「軒のしのぶの音もせで 頭註〇新古今集、深き夜の窓うつ雨に音のせぬはうき世を軒のしのぶなりけり さてすぐす程に、生れたる女子やゝ十ばかりにもならん時に、又ふと俄に思ひいでつゝ殊更に心とり騷動きて、つき〴〵しう昔の惠のよろこび言はるゝを、嬉しとや聞くらん、悲しとや聞くらん、あな「玉襷 頭註〇古今集ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世の中の玉だすきなる「武藏鐙の世の中なりや 頭註〇伊勢物語武藏鐙さすがにかけて頼むには問はぬもつらしとふもうるさし 昔忘れざる人ありて、煩はしくともおふな〳〵訪ひ音づれたらんを思ひ比べて味ひなば「袂ゆたかに裁ち縫はしめて、涙の玉を包み餘すべくなん 頭註〇古今集、嬉しさを何に包まん唐衣袂ゆたかに裁てといはましを かや〳〵とさやめきて暇告げつゝ歸りにし後は、野分の風の吹き止みたらん心地して、さながらうつぶし臥したるを、按摩取といふ同じたぐひの盲法師待ちつけ居りて、肩のあたりにかゝぐり寄り、のぼしかゝりて打捻るべし

なでしこの色のくさ〲集めては
　露も心のおかれざらめや

○五徳の冠者とか云はれにし人の、平家の物語作りいでしを、盲法師のうけ傳へけるより、次々にもてはやして、足利の世の末まではさかりなりきとなん、それが餘波に說經といふもの出できて、昔の軍の事共をとりなして歌ひありきけるを、薩摩淨雲といふ人、聊かおし直して淨瑠璃姬といふ物語をなん作りいでける、それより今に至るまで、かゝるたぐひをば總て淨瑠璃といふなり、それが末々に一中、都、和泉、土佐など聞えしはいかなる物なりけん、元祿といひける御代の末に、義太夫といふ者いでゝ、上の聲どもをあやどりかへつるに、近松といふ人、言の葉を作りて語らせたり、この近松聊か才ありける上に、人の心の行方をもくはしう辿り知りてければ、初めありける物には勝りて、世の中なべてもて騷ぎけり、この流今に絕えせず傳はるなかにも、彼の義太夫は竹本とて難波に住みし者なれば、これ

はたこゝなる聲を祖として、それに打合はぬをば、總てよこなまれりとなん云ふ、之を語りて業とする者を太夫となんいふめるは、上にいへる都和泉などいひける者ども、いづれも皆しか言ひし故によりて、おのづから何となく傳へ來ぬるなるべし　續世繼に伊賀太夫六條太夫などふき物ひき物する人などいへるところ、玉かつまに引出られたれど、それは實に花園の左大臣家の大夫なれば別なり、其後猿樂などはしかつきたるもあれど、其程は亂世の中にて假につけたるなれば、實の五位にはあらず、都太夫和泉太夫なども、只何となく猿樂にならへるなど、今のはそれとも又別にて、その語る者などうちまかせて太夫といふなるは、かの都和泉さては義太夫などに習ひて、みづからもしか付るなど、他よりも亦しかよぶにぞありける、因云、豐後は豐後太夫といふ者の始めける故にしかいふとぞ　此太夫につきて學ぶともがら、直人にも多かれど、珍しきふしもなければ省きて言はず、この義太夫がざうるりの道行といふくだりを本にて、享保の末つ方より豐後といふもの起れり、初めはこゝにて作りしを、都にもて行き江戸に移してもはやしけるを、江戸にて常盤津富本なにがしくれがしなゝどいふ者共次々にをかしう作りかへける儘に、今はほと／＼江戸の淨瑠璃となりて、こゝに起りける事をば、をさ／＼知らぬ人さへあゝめり、さる程に茲には久しう絕え果てたり、言はまくもいとかしこけれど大江戸のみいつい

みじく著明くましますに因りて、江戸の風俗年々に國々へ移りもてゆくを、都浪速の人どもいつも〳〵うけがはずげにてありしかども、いつしかと移りゆきて、今は大方かしこの習俗なん多かる、それがなかに歌ひ物の一すぢは近き年比殊にさかりに移り來たりとおぼしく、かくいふ學生のいつとせばかり前に上りこし程までは、巷に歌ふ聲々のなほ彼の義太夫のざうるり、扨はこゝの三味線に物する長唄端唄などいふ物ばかりなりしを、今年はそれには引きかはりて、彼の豊後を初めにて、杵屋とかいふめる者のたてゝ物する歌舞妓の舞といふものの歌、さては新内といふものゝ聲なん多かりける、今様のはやり歌といふのは猶こゝの聲なれど、心利し風流たりなゝど、みづから言ひ誇らふはぶれ者共は、必ずかしこのふりに似するを、よしと思へる有様なり、されどそれは皆下つ品の界にのみむねと玩びて、人がらとか（中品より上ざまなるさみ人を人がらさいふこゝの方言なり）唱ふる人の家々には、をさをさみづからは猶歌はぬやうなり、三味線に物する歌も、此人がらのと盲

法師のさばかりは、まがはぬ此の物なるを、歌女あそびめより下は大方あづまの聲を交へていと異様なり、こゝのみにも限らず、之を移して玩ぶ西の國々の港々なンどおしなべて一様なるふりなンめり、扨このあづま歌教ふるは、いかなる人にかとて、音するあたりを栞にて訪ひ聞けば、元はかしこにあり佗ぶる浮浪人なるが、世のならはしに引かれて、只一人子のまな娘に、常盤津のざうるりを心入れつゝ習はせけるに、勞積りて文字某とかいふあだ名さへ許されて、また人に教へつゝ渡らひけるを、富みたる家の息子なる人、ゆくりなく想ひ懸けて通ふ程に、遂に事遂げて間近う隠しするつゝ、うつし心もなく立渡るに、やがてそのわたりの謠はれ草となんなれりける、之を聞きて親はらからいたう淺ましがりて戒めつれども、つやつや聞入るべうもあらざりければ、人知れずいくそひらの黄金を其親に與へて、夜の程に追ひ遠そけたるによりて、この浪速潟にはなづみこしなりけり、初めの程こそは彼のいくそばくの金あれば、かくても喜びつゝ

ありけるを、とり立てて習ひ得たるはかぐ〳〵しき生業もあらねば、いつしかそれも皆になりてせんすべの無きまゝに、膝を容るばかりの怪しげなる家を借りてすまひ居り、間近きわたりの若人どもを集へて、又かの三筋の絲を彈きいだして、世をあやどりつゝあンなりとぞ云ふなる、或は又歌女の流なるを、此頃の世に業を失ひてはぶれたるなンども云ふにや、きはやかには知られ難しとぞ、あしたの程はわるびれたる人の子三人四人來て學びけるをば、こゝかしこへ走かして、よろづ調じて過ぐるなり、飯たうべたる後は飽く迄に晝寢して、夕影になりたる比、やをら起きいでゝ湯あみなどしつゝある程に、黄昏すぐる比より、彼の若人ども來集ひたり、あろじの太夫は二十に一つ二つ足らざるべし、玉川の筧の水にあつごえたる脂を洗ひ落したる髮を、こゝにても猶改めざればにや、晝寢の枕に打亂れて、愛敬づきたる眉目のあたりに、やう〳〵と懸りたるを煩はしがりて、耳挿みしたる、倘そぼれつゝ夕風に戰ぐめり、白金にかあらん、何にかあらん

小き簪一つをさしたる、顔の色雪の如くつやめきて、緑の眉の太やかなるを、消えぬばかりに剃り細め、白粉なンどは聊かも施さず、有松染といふ大紋の浴衣をないがしろに著なしたるは、上りくる道の程にて、物めでして買ひたるなるべし、紅の纐纈のちゞみぎぬを帯にかへて、胸乳あらはに出だし、右の腕は肩のあたりまで捲きあげて、象の撥ひらめに取持ち、左は大指に袖を加へて、三味線とりたるさま、泥の中より生ひいでたる蓮の花の、夕風に咲きこぼれたらん夕映の心地して、澄めらん水に寫して見ばやと、あたらしう見えたり、よろづしどけなうもてなしたるに、氷欺く膝にそはりて、何とかいふ下の衣の、紅ほのかに綻び出でたるを、今少しなンど胸轟かすすき者もあるべし、母の親ひとり具したるが、まめ／＼しげに厨の事をとりもちて、娘をばなか／＼主の如くにぞ冊きたンめる、寄り集ひたる人ども、小き紙の札をいだしてさてさし置くは、幾片に價幾干と定めてまづ賣り置きたるを、それもて來れば三度五度ひきかへし歌ひ授くるな

り、いかで聲よく歌はんとて、汗もしとゞにうなりをる人の有樣くさぐさなれど、さのみはとて例の漏らしつ、一めぐりし果てたるころほひより例の如く酒をぞ飲むなる、近きあたりの富人の(子の二字脫歟)此頃怪しう世心づきて、忍び〳〵這ひ渡るをそゝのかし來て、大人したゝへ君と仰ぎて、此酒肴のいりめをなん課せ付くめる、酒屋の走奴のしれたるを、この出でくるを、いつもそこゝ走らするに、おのれが方へは立ちも歸らで、遙なる家まで買ひに行くなり、母嫗はたまめだちて肴調じきて歸るべし、其程に彼の走奴が持て來て隱しおきたる物を、ひとりの若人探しいだして、これは如何にといふを見れば、此程鉢に水を湛へて山などつくり、それに立つべき舟橋、あるは屋形人がたの小き陶物にて作れるなり、これは太夫がいといたう物めでする本性なるを量り知りて、心とりがてら買ひもてきたゝなれども、人々の笑はんかとて隱し置きたるなりけり、今ひとり傳へ見て、いであなをさなの物もちけり、何にかすらんとて打傾けば、いたう賢しが

りさし過ぎて楠木と渾名おふせられたる男のをこがましう進みいでゝ、こは先生の御心とりにとて、痴漢が奉る家苞ならんといふに、さは十四五の錢にかへて、あはれにも虎の鬚ひかんとしけりとて、皆聲たてゝ轉びつべく打笑ふ間に、かの痴漢歸り來り、あはやと慌て惑ひつゝ走りのぼりて引合ふことかしがまし、太夫はこを取りて、例の物めでなれば、流石にをかしと打見たり、楠木は諸人をやう〳〵に鎮めて、いとのどやかに語りて曰く、昔なにがしの名妓に懸想しける鐵工ありけれど、貧しき身にてせんかたなし、されども心一つに思ひ止みぬべくもあらざりければ、年ばかり經て、辛うじて一夜逢ひぬばかりの代調へて行きたるをば、かの名妓いたく憐びて、心ゆくばかり語らひて歸しゝをば、後の世まで有難きためしにこそ云ひ傳ふなれ、いかでか人を思ふとて貴き賤しき位にはよらん、いや高き松の木末にも這ひ上り、花さく藤もあるものをと、物々しく說き成すは、かねて此君に心をかけてかきくどけども、口のさがなくねぢけがましき

を憎み厭ひて、言ひ殺しつゝ辱しむる程に、さは我が貧しきを疎むなゝめりとおしあてに僻心得して、かく餘所ながらさとし顏するにぞあるべき、道理のさしあたる所なれば、げにとばかりいらふるもあれば、例の楠木がえせ講釋とて笑ふもあり、その中にひとり猿樂がましき男の膝をうちて、げに君は物知り人なり、楠木の判官とはうべこそ申したれ、唐土の子房もいかでかは勝らん、されば謀を口まきのうちに運らして、口つことをと言はんとするを、言はせも果てず、しやかうべはたと打懲らせば、そがまゝに頭をかゝへて立ちあがり、歌舞妓の舞子が振などするに、いづれも興に入ること限なし、かくする程に酒もあたゝまりて、肴所狹く置き並べたるを見て、かうやうのさがな人も、流石に心恥しうやあるらん、俄に骨なげに居直りて、かの富人の子を太夫に並べ上座におし据ゑつゝ、まづ大人の君より事始め給へ、御あろじにこそなゝど讓りかゝれば、大人とまうし先生といひ、いとよき一双の雛にますなゝど心にもあらぬ追從をさへいふ、盃の

めぐりも重なれば、それもいつしか打亂れて、おのればかりいみじき者は又あらじと、おのも／＼思ひなりぬ、指の數をよみ競べては、まけわざに酒を飮ませなンど、聲もいといたう高うなりて、紙ひとひらだに習ひあへぬ淨瑠璃を、さながらみだりがはしう打ちをめくも傍痛ければ、太夫は再び掻合せして、やよ暫し靜まり給へ、ならひもあへぬすさびなれども、新内少し御肴にせんといへば、そはよかなりと諸聲にいらへて、ひしと言止めで打守れば、左のかたに顏をそむけて、秋さぶく驚く風も身にしみてと、歌ひいでたるいみじさ、夏ながら頸のあたりそゞろ寒う覺ゆべし、すべて新内といふものは、豐後節の流の末に鶴賀といひける者のいで來て、今一際人の心をとらんとて、なまめきたる限の事を綴りたるに、言葉はた一向に腐爛れてのみもあらず、切なる心にあるべきさまの事を、愁はしげに歌ふものにて、儒者などのいたう忌むなる鄭聲とかいふものゝ極みなれば、いみじき世の人のあやまちもこそとて、官よりもたび／＼禁め給へれど、とに

かくに人の心に染著きて、今はた憚らぬさまにもて騒ぐ程のものなるに、太夫は打解けてをかしと見ゆるたをやめの、櫻の花の如く醉ひすさびたるが、年月の勞を積みて、聲ささやかに歌ふなれば壹越より盤渉に移るほどは、廣からぬ家の障子の紙に響合ひて、梁の塵の舞ふといひけん唐土の故事も何ならずと見え聞えたり、さればこの騷ぎき人どものすきがましき心肝を刺貫くが如くにて、咳一つするもなく、打傾きて額を鳩め、涎を流して聽く

はかもなくあだなる糸の音にかけて
鬼ひきしろふ聲ぞあやしき

ひきやみたる頃しごろに聲を立てゝ、やゝと賞め罵りつゝ、始めて人心地つきたるやうなるに、なかなか醉ひも醒めがたになりて、夜も子二つばかりに更け渡りぬべし、富人の子よりまづ驚きて逃ぐるが如く歸り行くにさそはれて、彼是伴ひいづるなかに、きぬ賣る棚のてだい かはりてものつかさむる者を手代といふ事足利のこ

ろにも見ゆといへる人、年の程は二十(はたち)に一つばかり餘りてやあるらん、色白くまなじり清げに、なよ〳〵と細やかにのびらかなる貌(かほ)したる、初めより我は顔に物をもいはず、人の物語をのみ大方(おほかた)は聞きてをる人のあるを、太夫は暫しと呼びとゞめて、やよや祭の近かゝなるに、帷子も帯も物せんとするを、此頃は珍しきはやり物は侍らずやとて、かれはよし、それはあしなゝどいと長やかに論(あげつら)ひて誂へつくめり、さるはいと多く入りくる人の中に、此人のみ實様(じちやう)の情(なさけ)ありて、誇りかなる所は露ばかりだにあらず、をり〳〵家の内の足らぬ物なゝど人知れず心をつけてつき〴〵しくとり行ふに、母とうじより先づめでそめて、になき者に思ひいへば、おのづから娘もなづさひ付きて、いかで旅寝の心細さを此人にまかせて見ばやと、一たび思ひよりにしを初めにて、再び三たびと近勝(ちかまさ)りしつゝ、見れば聞けばありとあらゆる事も業もはかなき事だに、皆がら身にしめてめでたうのみ思ひ進みぬ、いかにもして動かさんと思ふに、忍草さへ枯れ果てゝ、尾花が穂にも

いでつべき氣色なれば、さすがに若き程の心すさびに、いかでかは堪へすぐすべき、さてなん餘所ながらも打語らひて、力の限後見ばやとしたに思ひかはしたるを、たれも〳〵あなぐり悟りて、嫉きこと限なければ、妨げせんとて立ち代りつゝ執念くもつき纒ふなり、誘はんとて二人三人待ち居れども、事果つべうもあらざれば、さのみはとて歸りゆく中に、例の楠木いち早く謀をめぐらして、人々に囁き示し、只ひとりひそやかに歸り來て、物洗ふ水を走らかしいだす物の穴につきて、瞬きもせで垣間見をり、かくてやう〳〵誂へ事も果てければ、暇を告げて歸らんとするを、奥まりたる樓のうへより母とうじの聲たてゝ、夜もいたう更け靜まりて侍るを、難波は盜人の多き所にて、道の程も覺束なう侍るに、今となりては、主の門たゝかんも人わろく心苦しうこそ、いぶせくとも今宵はこゝに明させ給ひつゝ、つとめて疾く歸らせ給へ、老人はいぎたなからざればなゝごいふに、天の川に渡舟えたる心地して、女は恥しげに袂をさへひかへたり、番頭の腹黑

きもかねて恐しけれど、この際になりて歸るべしやは、しかのたまへば實にこそ、此程何町のそれの屋に盜人の入り來てなゝど語らひながら、表の入口をとざして、引かれつゝ入りたる明障子の紙に、おもてをさし合はしてまがふべくもあらぬ姿の、ほのかなる燈火にうつろひて見ゆれば、楠木は松浦佐用姫にあらねど、石にはたやすうなりぬべき心地して、妬きこと言ふばかりなく、そゞろに憤れる身のおもりかになりて、溝の上にはつかにかけ渡いたる覆の板を、あやなくも踏みくつがへして、二尺ばかり掘り深めたる泥水の穢げなる中に墮ち入りぬ、あなやといふべき聲をだに立てえず、舌忍音に打鳴らしつゝ、辛うじて這ひのぼれば、履はぬがれてとゞまりぬ、内にもいざとく聞きつけたりけん、くは盜人よ、あな恐しと、女の聲してしめやかに言ふ

つひにこの引く手あまたの三つの緒も
たゞ一すぢの誠にぞよる

西村定雅

西村定雅は月居百池等と共に京都の俳人として可也世間に知られて居るが、戯作者としての粋川子は其わりに知らぬ人が多い、樗良の門人で蕪村派の人々と交際し、晩年下河原に俳仙堂を建て、幻住庵址の椎の木で造つた芭蕉の像を安置し、又岸駒に芭蕉涅槃圖をかゝせて年々その忌日を修した。されば表向はどこまでも俳人であるが、俳人の性質が大分變つて來た。蕪村の始めた高雅な天明調は早くも衰へて、遊里劇場を詠ずる酒落俳諧が文化頃に流行した、その僞をなした一人は慥に定雅である。月居が芝居の評判記を書き、大江丸が「七夕の今宵大星力彌かな」とか、「吉田屋の蚊にくはれけり伊左衛門」など詠む時勢だから、一般の風潮ではあるが、定雅はまづその先聲をなしたもののやうに思はれる。定雅はみすや針の一族で相應な資產家であつたが、遊蕩のため產を破り、中年知恩院門

前に退隱して、俳諧と戲作とで口を糊するに至つた。その最初の戲作は徒然睟ヶ川で天明三年の出版である。これは兼好の徒然草の文に擬して粹道を說いた隨筆體の戲著で、序跋には存在とか艶好法師とかいふ假號を用ゐた。然るにこの書思ひの外好評であつたので夫子大に得意になり、天明五年にその後編眞々の川を著し、それから大びらに粹川子と名乘を揚げ、翠川子、睟川舍猴猿などとも稱した。今左にその著述を揭げ、猶その漏れたるを大方の示敎に待たんとするものなり。江戶後期の京阪小說家參照

徒然睟ヶ川　五冊　天明三年

仕方俳諧　一冊　同

遊廓と芝居とを題材とした俳句集。

眞々の川　四冊　天明五年

睟ヶ川の後編なり。

椿花文集　二冊　天明七年

上卷は俳文下卷は俳句を收む。

養漢(をとこめかけ)裸百貫　五册　寛政八年

女子同盟して權力を張り、男子の妾や藝者が出來るといふ話。

當世噓の川　五册　享和四年

他所行、風呂屋、小樓館、中宿、妾宅の光景。

外國通唱　一册　文化元年

花街語を題材としたる俳句。

古今馬鹿集　二册　文化二年

古今和歌集をもぢりたる狂歌。

そのとなり　一册　文化三年

知恩院町に住みし時、その近隣の人々の有樣を描寫せし俳文。

遊女文章大成　一册　同

遊女大學　一册　文化四年

女大學に擬せしもの。

足毛識　二冊　同

膝栗毛を摸して江戸者の東山見物を記す、此書後に脚栗毛と改題して、小鹽山人の續編大阪見物と合せて六冊とせり。

反古瓢　二冊　文化七年

古今名家の句を集む。

文集反古瓢　一冊　文政五年

長唄馬鹿集　一冊　文政七年

甲は自己の俳文集、乙は狂體長歌集なり。

洒落文臺　一冊

市井の人物を題としたる俳句を客仲居幇間藝妓等の打寄りて評する體にせし洒落本、外國通唱以後の作たる證跡あり。

百人裕　一冊

これも市井の人物を題詠せしものにて、著者名なけれども、定雅の句と認むべき證あり。

當時京都にて出版された戲作には大抵粋川子の序文をつけてあるのを見ると、まづ京都では此方面で一番有名であつたものと思はれる。終に外國通唱から此類の句の標本を少々出して置く。

雜喉寢

夜もすがらあぶなき物やぬくめ鳥

再勤

引鶴や又舞ひもどり〳〵

退代（のきしろ）

あちら向く時に見えけり雉子の爪

一見

春の雨芝居話をよるべかな

蛙子ややはり蛙になるつもり

重箱

月は一つ影は田毎のいくつでも

漢學先生の通人

コップには酒、册府には瓢公といふ瓢輕な先生がゐて、毎度鼻唄まじりで面白をかしい氣焔や、さては俳文もどきの引札、長唄まがひの御祝儀と追つかけ引つかけおつりきなものを聞かせてくれる嬉しさに、拙者も一つと咽まで出かゝつたが、いや〳〵年寄の冷水、風でもひいてはお陀佛陀佛ふッつと思ひとまつて、相も變らぬ古本搜し、四角な文字の窮屈に行詰つた漢學先生が、陘へ煙管のやにさがり、一段位をおとして、洒落れた所をちよつぴり一寸並べ立てゝ、ふるい頭の老人が例の昔びいき、昔の人はかく

逸早きみやびをなんしけると申すにこそ。

朝　　顏　　　　　　　　　　賴　山　陽

朝顏がたよる竹にも振り放されて、うつぶきや涙の露がちる。

春　の　袖　　　　　　　　　中　島　棕　隱

今は思ひのまゝにもなりて、昔に匂ふ花の袖、誰とかさねん行丈も、ちやんと揃ひし箸紙に、お客の名をば書初の、春のなさけの結び昆布、緣と月日を待ちおほせたは、嬉しからうぢやあるまいか。

白髮三千丈　　　　　　　　　忍　海　和　尙

わが黑髮も白糸の、千尋々々に又ちひろ、憂さやつらさの增鏡、いづくよりか置く霜。

打起黃鶯兒　　　　　　　　　秋　山　玉　山

たぞやあの花踏み散らす鶯を、いなせてたもれ鳴かすなよ、鳴けばぞ賤が目も合はず、戀しき人を夢にだに見せぬわいな。

老人曰、夢にだにとくると、周公をといひたくなるね。

陌頭楊柳枝　　岡多仲

里の柳の枝たわみ、ふれ春風が吹くわいな、わしが心のやるせなき、君が心は知らずへ。

老人曰、此歌の作者については異説が多い、岡多仲とするは蜀山人の一話一言に依つたのであるが、津坂東陽の夜航餘話には柳里恭の作とし、初句を「まちのほとりの枝さへ」、末句を「思ふ殿御に知らせたい」とあり、山崎美成の海錄九巻には服部南郭とし、歌詞は「道のべの青柳すがた、風に吹かれてゐるわいの、わしが心はやるせなし、ぬしが心は知りはせん」とある。

棹の露　　柳里恭

よるべ定めぬ舟なれや、いづくとまりと白波の、うつゝに過ぐる身の程に、つけて戀しき古里の、風のつてだに思ひ寝の、枕の花にかをれども、夢

はかなき春の夜の、あけて垣穗の卯の花も、あやめもわかぬ五月闇、花橘のかをとめて、昔偲ぶの摺衣、袖のみぬれてほしかぬる、棹の露にも涙にも、玉の緒かけて賴みつる、契りし人はふみにのみ、宿世いかなる報いかは、よしや吉野の、よしや吉野の花も雪も、雲も波も、あはれ世に、あはゝや。

長相思　　同

にくからぬものとていとゞ詫しきは、ひとりながむる閨の月、草のいほりの夜の雨、山ほとゝぎすの一聲、夢ばかりなる手枕の、したぎに殘る移り香。

月の枕　　同

空さだめなき秋の夜の、月が隱れて入る雲か、雲が月をば隱すのか、こがれ〲て逢ふ今宵、なぜにお前はそのやうに、背いてひとり寢さんすへ、枕ばかりがかわいゝか。

よゝの星

皆川淇園

玉櫛笥ふたゝびみたび思ふこと、思ふがまゝに書きつけて、見すれど蛩のかづきして、刈るてふ底のみるめにも觸れぬをいたみ、頼みにし筆にさへだに恥かしの、軒のしのぶに消えやすき、露の身にしもならまほしならまく星の光すら、絶えてあやなくなるまでも、八夜九夜と思ひあかし、雲ゐをながめすべをなみ、袖の雫にせき入るゝ硯の海に玉や沈めん。

酒德頌

龜田鵬齋

劉伯倫や李太白、酒を飲まねばたゞの人、更科越路の月雪も、酒がなければたゞの里。

東山ゝ

頼山陽

蒲團きて寢たる姿はふるめかし、起きて春めく知恩院、その樓門の夕暮に、すいたお方に逢ひもせで、すかぬ客衆に喚びこまれ、山寺の入相告ぐる鐘の聲、諸行無常はまゝのかは、わしは無上にのぼりつめ、花の頂ざら

いて見よう、花はうつろふものなれど、葉こそ惜しけれ、をしけれ葉こそ、綠の芽だち色ふかみ草。

置火燵　　田能村竹田

此世はあだの假枕、むすぼれ易き櫛の齒に、ほつれて見する洗ひ髮、惚れたといへば、べつたりあつい厚化粧、いやぢやといへば、どうやら小褄の水淺黄、したでもよしせんでもなき、ゆふべ結んだ一重帶、長い詮義はまあおいて、これこゝに蕪がある飯あがれ、雜魚がある酒ひとつ、氣の合うたどし寄合うて、膝と膝とをかう摺合せ、火鉢の不祥ぢや、こらへてくれと寄りかゝり、ちよと話してさつと笑うて、あとはなんにも置火燵。

老人曰、こは恐らく祇園の妓ひさに與へたものであらう。　文政七年竹田が京都より歸國せんとする際、彼女に與へた手紙に、「きのふはわけてせわしきお日柄の由にわざと御文、ゆふべは殘燈の影にて繰返しくよみあかし候、淺ましの田舍人をかくあはれと見給ふは、嬉し

きようにてなか〳〵悲しく覺えて、そゞろに涙こぼれ候、氣のあうた
どうし膝と膝とをすり合せ語らふは、をのこだにたぐひなき事にこ
そ侍ふを、かゝる打とけたる御詞を承らんとは夢にだに思はずかし、
此度急に國に參り候も、又々上り申候心組故、せひことしのうち上り
て、花を見月を眺め歌よみ酒のみ御あそび申さんと、今より樂み申候、
此頃の文句のはしに申上候やうに、此世はあだの假枕、思ふまゝなら
ぬは常の習ひに候へば、只御心安らかに御渡り候へかし、御病のかさ
なり候はんかと、それのみ御案じ申上候(中略)

夢に見る人はあやなし春の夜の
　おぼろ月よりなほ朧にて

今一度すひがらの火でお顏見たし、御しらべの聲もきゝたいナア、なん
とせう舌皷

今までかけてある三味線の絲を、ちよとはづして御貰ひ申上度、新しき

はどこにもあり、手なれたがほしゝといふおやすくない手紙が殘つて居る。又こんな傳說もある、或時山陽がひさの才色を愛して挑んだ所が、彼女は更にうけつけぬ、それからは山陽も只酒の相手とのみして呼んで居たが、或日その三味線箱の中から、新曲をかきつけた紙片を見つけて、その詞の巧なるとその書の妙なるに驚いて、强ひて作者を問ひつめると、竹田だとの白狀に、さすがの山陽も竹田の多藝に感服したといふ事である。此話の眞僞は知らぬが、置炬燵の一章はひさに與へたものなる事は、「此頃の文句のはしに申上候ように」云々と手紙の中にあるので明かである。

花ごろも　　中島棕隱

たのまれぬ物とはいへど我心、げに浮雲のありし世に、さそはれ馴れて花鳥を、よそにもせまじ身にもせじ、たゝきそはぬを鴨川の、水くさい氣をつめられて、ゆかりの色は見えながら、肌にはづかし老の波。

「四書をよみ〳〵吉原通ひ曰は格子のうちにある」といふ都々逸も、棕隱の作だと傳へられて居る。「白い花咲く櫻の幹に赤い心を墨で書く」は河野鐵兜の作だといふ。寶暦前後から漢學者もしかつめらしい治國平天下修身齊家一點張からやう〳〵離脱して、文士氣質の風流才子が續出するやうになつて、わが俗曲を漢詩に翻したり、漢詩を俗曲にやはらげるやうな事も可なり流行した。孤立道人(釋大我明和四年著)の「春遊興」や烏有子(安永五年刊)の「豔歌選」や、四時堂無跡子(安永四年刊)の「やまとたちばな」などが其標本である。

『大隈言道』を讀む

我國の歌人には一家の特色を發揮したものが極めて少い、時代の特色はあつても個人の特色は殆ど現れて居らぬ、此點に於ては俳句の方が比較的に勝つて居る、叙情を旨とした和歌が叙景を主とする俳句にも劣ると

いふことは不思議な現象のやうであるが、歌人には先例舊慣を墨守する傾向が俳人より甚しい爲であらう。然るに幕末に至つて極めて個人的特色の著しい歌人が二人出た、それは曙覽と言道とである。

此二人はその歌風に於て、一は雄健粗朴、一は溫和纖巧、趣味好尙の相反せるに關らず、寫生の忠實、題材の擴張、用語句格の自由に於て共通せる者あり、又境遇に於ても、いづれも富裕なる商家の出にして、幼時父又は母に別れ、一は廣瀨淡窓に一は兒玉士敬に就いて漢學を修め、家業を捨てゝ詠歌に專心し、郊外に寒素なる生活を營み、その歌は異體異風として當時に容れられず、僅に鄕閭の間に多少の知己門人を得たるのみなりしが、明治に至つて俄に其聲價を高めたるが如き、興味ある類似といふべきである。

曙覽が歌人の狹量姑息を罵つて「諺にいはゆる正月詞といふ物のやうに、いつも定りて早春には朝日のどかに霞たなびく、歲暮には寄する年波、春ぞ待たるゝ、花には雨の惠、家苞に折る、月に隈なき影、雪に跡つけわぶるな

ごやうの詞の外には世に歌詞はなきものゝ如くになり、百人が百人、一昨年も去年も今年も同じ事のみ言ひ並ぶることの淺ましさよ、近き頃廣瀨旭莊といふ人が、享保元祿の頃ほひの詩人の琴柱に膠すといふやうなる風體を嘲りて、白雲明月句、多於魚卵繁といひたりしも、蘆庵翁のいきどほりに(蘆庵の歌、古へは大根蕓菲茄子瓜のたぐひも歌によみけりを指す)等しき心ばへと見えたり………かく寢言のやうなる事のみ詠み耽る歌人の多き、より、少しも學才ある人などは歌は只はかなき物に思ひ疎んじ、たけき事とは詩にのみ赴くめり………歌人とあらん者いぎたなくする目を能くさまし、此に憤を發し思を凝らして、よみ口の鋒を鋭にし、其事に隨ひ其物に因り彼方此方の嫌ひなく、幽玄洒落麗妍澹泊殷富凄凉勇壯溫柔變化自在の臂を張りて、毛唐人の糟粕なむる詩人の陣を突崩し、戎語囀りちらす舌引抜きくれんと、國風の旗さしたて、古言の皷打響かせて、後向かじ背見せじと、進まざらめや勇まざらめや」と大聲疾呼せるは、言道が「すべ

て先哲がた、歌をよむ詠み方をのみ、とありかくあり、或は花山一條、又は萬葉がよし、古今がよし、何の時代はわるし、某の代は手本にならずなどゝ、その詠み方をのみ云ふは、家を作るに家はいはで材木のみの詮義なり」といひ「(歌は)物に觸れ事に因りて卽座に感發する咏嘆なり、詞の近古など撰む暇あらんや」といひ、「古人に似ざるを以て古人に近しとす、古人に能く似たるを以て古人に遠しとす」といへると、同樣の思想にて、倶に廣瀨兄弟の詩論より感得し來りし所あるらしきも、奇しき因緣である。只古言の皷打響せて後向かじと傲語した曙覽は漢語俗語を用ゐながら、目標を萬葉に採り、言道は我は天保の民なり、天保の歌を咏むべしといひて、一切の準據を排斥したれど、猶古今を離れざる氣分あり。用語の新古を撰ばざるは共通なれども、雄健を好む曙覽は漢語を採り、溫雅を喜ぶ言道は之を用ゐず、漢詩の趣味も彼に多くして此に少し、題材は共に廣きも、曙覽は卑近の事物を詠ずるにも、萬葉の高古を失はざらんと力め、言道は安らかに思ふ

まゝである。　曙覽は雄壯、淸雅、高古、姸麗、諸體兼ね備ふるに似ず、言道は輕妙瀟洒の一點張である。　彼は多少の覇氣衒氣を免れず、此は和平樂易なり、一を漢詩人氣質とすれば、一は俳句趣味俳人氣質ともいふべきか。　何れも自信深く、新體の歌風が世に容れられなかつた不平は同じ事でも、その洩らしざまに兩家の氣象風格が歷々として窺はれる。

たゞ人の耳には入らじ天地の心を妙に洩らす我歌　　曙　覽

燈火の下に夜々來れ鬼我ひめ歌の限きかせん

人臭き人に聞かする歌ならず鬼の夜ふけて來ば告げもせん

舌たゆく物言ひ習ふたわらはや言ひも叶へぬ今の歌人　　言　道

百鳥に聲打ちませず鳴く雲雀心一つに思ひあがりて

世の中に靡きげもなき一つ松譏らるべきも本よりぞかし

隱蓑隱笠こそもたらねど人知れぬ身を高しとぞ思ふ

友と思ふ友は此世にたえてなくわれたる硯一つなりけり

只一人我をよく知る人しあらば千々の謗は土塊ぞかし

春嶽侯の知遇を辱うした曙覽は、黑田家の藏屋敷の接待役——體のよい幇間を勤めた言道よりは遙かに幸福であつた。曙覽は「花めきてしばし見ゆるも鈴菜園田伏せの庵に咲けばなりけり」と詠じて國君の召辟を辭し、言道は鴻池鹿島屋の御機嫌をとつて「まな鶴の群れたる空に交りても身の嬉しさに鳴く雲雀かな」といはねばならなかつた。言道が荷揚の人足を詠み、曙覽が鑛山の工夫を歌うたのも、二新歌人のよき對照である。

ふた俵三俵をさへ肩にあげて藏を出で入る若男ども　　言　道

赤裸の男子群れゐて鑛のまろがり碎く槌打振りて　　曙　覽

貧乏で酒ずきな二人の境遇は、とりどりに面白い。

親泣けば子さへ泣くなり世の中のせんすべなさも何も知らずて　　言　道

やがて又底あらはれてあじきなし鼠もはめる米の白櫃

合せては又解き放つ古衣かくてぞ春も秋も經にけり

今日は今日あらん限は飲みくらし明日の憂は明日ぞ憂ひん

わが酒の限見えたるフラスコに人の命も悲しかりけり

わが如く酒に醉ふらし音たてゝ打てば打つ手をまぬる山彦

樂みはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時　曙覽

著る物の縫目〳〵に子をひりて虱の神代始りにけり

とく〳〵と垂りくる酒のなり瓢嬉しき音をさする物かな

吹きおろす風の松の葉髯につけ手ふり顏ふり歸る醉人

蕭散閑寂の境に處しては

目の前に一つ落ちくる松の實の更にも落ちず暮るゝ今日哉　言道

蜘のいにかゝれる木の葉數ふれば軒の松の葉梅櫻の葉

山里はましこつゝ鳥庭たゝき居ながら樂し目の前に見て

むつかしき世の中知らで山里の冬の榾火のあたりぞちかな

雨づつみ日を經て編戸あけ見れば標ちて梅ありその實三つ四つ　曙覧

風の梅斜に吹きて散りぞ入る藁打つ戸口牛吼ゆる窓

山雀と雀と二つ今一つ何鳥なれか竹くゞり居る

よそありきしつゝ歸れば淋しげになりて火桶のすわり居る哉

寫生の精細なるものは

疲れたる老の親猫仰ぎ寢ておのが乳房を子にまかすなり　言道

そよといふ笹のさ音に引き入りてなきから顏になる蝸牛

流れくる花に浮びてそばえては又瀬を上る春の若鮎

今までにありし梢を玉椿仰ぎ見顏に散れる一花

ゆく方におのがたづきのなければや空に抱きて纏ふ葛花

秋風に門田のいなご吹かれ來て折々あたる窓の音かな

水鳥はたちて跡なき川の面にやがても落ちず舞ふ一羽かな

生き殘る淺茅が中のいなごまろ身も枯草の色になりつゝ

雛のかたみに雛の盜みばみ見ながら親はよそ目のみして

影垂るゝ星に迫りて薄黑き色たゝなはる朧夜の山　曙覧

窓に入る雨夜の螢しめ〳〵と照りて簾をおりのぼりする

莖折れて水にうつ伏す枯蓮の葉裏叩きて秋の雨ふる

霜の上に冬木の影を薄黑くうつして更くる庭中の月

稻子丸うるさく出でゝ飛ぶ秋の日和喜び人豆を打つ

すく〳〵と生ひ立つ麥に腹すりて燕とびくる春の山畑

羽鳴らす蜂あたゝかに見なさるゝ窓を埋めて咲く薔薇かな

蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに走る西へ東へ

句法の斬新奇拔なるものは

引きつれて大路いづなり馬車また馬車牛車牛　言道

港べはあした賑ふ競ひあひて帆あぐるさぐる入る出づる船

走りてはとまりとまりては行く千鳥ゆく時にこそ人に見えけれ
衰へて咲く朝顔のおくれ花さく日さかぬ日今日は咲くかも
きこり歌鳥の囀り水の音ぬれたる小草雲かゝる松　曙覧
こぼれ糸纜につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす

眞率と自由とを尙ぶ餘り、時に只言に陷る弊あるも亦同様である。

二日三日降れば降るとて嘆きけり雨待遠にいふかと思へば　言道
雨にあひて又風にあふ櫻花さては散らではならぬなりけり
人の身にまたくかはれる事もなく夕げにいづる軒の群鳩
死ぬる病藥のまじと思へるをうるさく人の藥のめといふ　曙覧
死ぬる命とりかへさるゝくすり師は世は廣けれどあるべくもあらず
くひ飽きてありつる物の味ひも煮やうによりて新しく食ふ

輿に乘つて覺えず二人の比較に饒舌を弄し過ぎた。　いざ言道の本領に急がう。　彼の特色は著想觀察の斬新微細なる點にある、從來の歌人が等

閑に看過し、或は心づきても詠まんと企てなかつた情景を、巧みに取入れて新方面を開拓した。俳人が自然を觀察せし如き態度を以て、草木禽虫の特質を注目し精細に之を寫した。されば俳句と比較すれば、さまで珍しき著眼とはいひ難きも、和歌としては誠に新しき試である。辭句も通俗易解を主として俗語を厭はず、場合によりては新造語をも試みた。俗語の使用はその選擇に留意して、曙覧ほど大膽ならねど、景樹や文雄に比べては數歩を進めた。聲調は内容の充實を力めたる結果、稍暢達を損した傾がある、當時その體の野卑なるを謗られたのも、一はこの爲であらう。彼が俳句の感化を受けしや否やは、十分知る由なきも、その伯父言苗が俳諧を好み遺詠若干卷を家に傳へたりといひ、又彼自ら「ひとりごち」の中に、去來の句を評して肯綮に中れるなど、全くの門外漢とは思はれぬ。有意にもせよ、偶然にもせよ、その結果より觀れば、俳人的の觀察を以て、自然人事の些細なる局面に注目して之に感興をもち客觀的に詠嘆した人であ

る。俳諧よりいへば、稍月並的たるを免れざるものもあれど、それすら和歌としては從來例のなき目新しきものとして、其功を認めざるを得ない悠揚典雅——たけたかき歌——を理想とした和歌界に輕快平易な一味の新風を起した。集中の多數がいかに其俳味に富めるかを見よ。

歸りて來てねたる童の袂より頭いだせるつくつくしかな

駒曳きてゆくゆく人もねぶるなり春の繩手の長々し日は

長き日を向ひあひたる狛犬のいつまでとなき神の廣前

春の日の長々しきに佛達打向へれど言問もなし

ちる花に目をも迭らず佛達並びおはする峰の古寺

はしたなき片山里のはね釣瓶はねたる空に三日月の影

見るものは柿一つになりにける梢空しき秋のくれ方

山寺の秋さびしらに佛達立並びてもおはすなるかな

ふりきぬと沈み果てたる鴉鳥の又浮び出てあふ時雨かな

浮び出て見てはかづけど水鳥の沈めるまにも變る世の中

冬立ちて風寒からし奈多の磯の足高げなる濱の松原

雨やみし軒の廂にすがりゐていつまで待たば落つる雫ぞ

これのみや今日はありつる事ならん松の實一つ落ちし夕暮

飛びにぐる翼頼みの山鳥人あなづりのわざのみぞする

雨ふらぬ木の葉がくれの蝸牛いつ引出づる車なるらん

はちす葉の上にけさゐる蝸牛こはいかさまの佛なるらん

儺の川の蓼の穗つみて酒のまんをかしき友を一人見出でば

つく〳〵と見れば面白し我園のひともじの實の一つ一つに

水にだに浮くかろ石の輕ければ沈む時なき身の安さかな

人心いらのいらだちあるは又海鼠のなめら骨なしにして

いづくにか我身來ぬると思ふらん市にまろべる灘の蛤

旅人の道ゆく空の上にさへあなづらはしく居る蜻蛉かな
落入ると見れば浮みて樫の實の數も知られず寄る汀かな
少女等が箕をひる風にちる籾の寒けくみゆる秋のはてかな
掃溜の塵の下なる芋すらも子は親にこそつきてありけれ
散り浮ぶ松の一葉に驚きて蚊になる虫の沈む水底
おのが子の巣立さそひて野の雲雀手も及ぶべき空にてぞ鳴く
釣りも得で歸る筐の空しきをかろめ顏にも吹く嵐かな
猫の子の首の鈴が音かすかにも音のみしたる夏草のうち
わりて見るたびに面白しいつ〳〵も並べるさまの同じ莢豆
夏川のくづるゝ岸の危きに生ひて咲きたる撫子の花
ゆきかひに憩ひなれたる道の邊の石や遲しと待ち渡るらん
先だちて山路過ぎゆく牛の親に子牛よりくる村時雨かな
概して句調の引きしまりたると名詞ごめや名詞に「かな」を添へたとまり

多きが、俳句調を思ひ起さしめるのみならず、中には直に古人の俳句を聯想せしめる者がある。

我門のいさゝ小川も流れきぬ春は樂しき物にぞありける
元日やされば野川の水の音

咲く梅の花すゝろひも憎からで身を逆にすがる鶯
鶯の身を逆に初音かな

川岸に浮べすてたる舟にだに綱手繋ぎにきぬる葛花
朝顔に釣瓶とられて貰ひ水

里遠き野に咲きいでゝ只ひとり親もなげなる撫子の花
撫子や夏野の原のおとし種

花の枝手折れば騒ぐ胡蝶かな己をさへにいかゞなるかと
我事と泥鰌のにげる根芹かな

初秋の梢を渡る風の上に散るかと見ゆる三日月の影

木枯に二日の月の吹き散るか

所せく草の上葉に端居してまろびも落ちぬ露の白玉

　白露や無分別なる置き所

夕暮の野をすぎ行けば斜なる日影まじりに秋の山風

はてもなき山の裾野の薄原遠くゆけるは夕日のみして

　あか〳〵と日はつれなくも秋の風

今日見れば大人になりぬ去年までは一足しても飛びしならずや

　羽子つくや世心知らぬ大またげ

春の野に橋打渡る我身をば霞にそへて人や見るらん

　馬ほく〳〵我を繪に見る夏野かな

踏まるゝも今かと思ふ春駒の蹄がもとの土筆かな

　雀の子そこのけ〳〵御馬が通る

雀の子親にかはらずなりぬれどまだしき姿猶殘りけり

雀子や並び居つゝも黄なる嘴

暮れぬべきみ空になりていや繁に今又あがる夕雲雀かな

二つ三つ夜に入りさうな雲雀かな

すべもなく長き春日の暮れかねていつまで今日は今日にかあるらん

遲き日や暮れなんとして今日もあり

松杉の影こと〴〵にうつりたる庭めづらしき宿の月かな

名月や疊の上に松の影

たが里も聞え合せて打つばかり打てばいづくも打つ砧かな

よその音聞いてこちにも砧かな

清ければ尙淸かれと秋風に塵をもすゑぬ白菊の花

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

山鳩の只一つがひ枝にゐて淋し顏なる秋の夕暮

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

立つ波のたちの騷ぎに友千鳥雲居に高くあがる一むら

　浦風やおのれとくづす群千鳥

磯の上を走り〳〵て群千鳥とゞまる所なげにもあるかな

　荒磯や走り馴れたる友千鳥

見渡せばさも長々し平戸より對馬の沖に渡す白雲

　荒海や佐渡に横たふ天の川

さし柳さして幾日も經ぬものを根ざし引き見る友童かな

　ついたかと兒の拔き見るさし木かな

草木禽虫小兒等に深く同情をよせた點と同一著想を種々の形式に試みた點とは、俳人一茶に類似を求むべく、人の言語をそのまゝに詠み入れたる技倆の巧なるは、そゞろに太祇の長所を思はせる。

こゝにもと人にいふまに早蕨のありか失ふ春の野邊かな

さらばとて一枝たをれば櫻花又今一人我もらふなり

まづ〱とゆづらふ程に杯のうちにも散れる花櫻かな

さればこそ霜ふりぬらし人起きて雪の如しといふ聲のする

古市に今幾程かあるといへばその古市ぞこゝといふなる

聞えずば猶聲高に道問はんこなたに行くや志賀の山越

老いぬれど又此春も咲く花の散る花のとも言ひくらしけり

み山邊の花の咲きぬと告げくなりさもあるらんか今日の日影に

これ太祇の慣用手段たる「な折りそと折りてくれけり園の梅」「あなかまと鳥の巣見せぬ庵主かな」の類と並べ見て、その手腕を窺ふべきである。「寢ぬくめの麻衾」「疲れ眠りの埋火のもと」「畑菜の冬の引乾し」「乘合の舟疲れ」「畑も田も賣りぐひ虫」「まが(馬把)ひく特牛」「板負ひの牛」「道のぬかりのうはところけ」の如き新造語も、俳諧にはさして珍しからねど、和歌には思ひ切つたる勇氣を多とせねばならぬ。

擬人法を多く用ゐたのも言道の特色で、何人も一見心づくべき所である

が、非情無心の物に魂を入るゝ爲に、「けしきして」「さましして」「げにて」「何々顔」等の語を盛に使用した。而もその用法が極めて適切に氣のきいたものである。今その顔の種類のいかに多きをか左に示さう。

散り逃げ顔、數あり―、時―、知らぬ―、笑み―、物―、あり―、知り―、仰ぎ見―、心得―、催し―、よそ―、疑ひ―、ねぶり―、さびし―、疲れ―、見いで―、しぞき―、晴れ―、なき殼―、人―、行き―、異物―、殘り―、もたる―

此の如く擬人法を好んで用ゐた結果、中にはあまりこしらへ過ぎ考へ過ぎて、イヤミになり俗惡に陷つたものも無いではない。例へば

行く春を遠くも追はで木の下に散れる櫻の疲れ顔なる

さそひ行く力疲れて散る花を流るゝ水にゆづる山風

あまりにも走り漂ひ疲れてや高根の松にとまる白雲

泣くばかり雨に萎れてある花を慰め顔の鶯の聲

人の如手を出すとはなけれども身を引立つる梅が香ぞする

盃をさしたる人もなきものを空醉したる花の色かな
　手向ひもせぬ顏にして中々に折る袖はぬる花の枝かな
是等はさながら貞徳派の句や天保調の俗俳を見るやうで、長所即短所の憾に堪へぬ。
最後に言道の感情の極めて尖細鋭敏であることを示すべき數首をあげておく。
　落ちやみて竿に並べる雫見れば何ともなしに物ぞさびしき
　數知らぬ魚の命は板の上の刀の跡にしるしぬるかな
　繩のごとたわめる山路見るまゝにその如くゆく我心かな
　沖邊よりあとおひ〳〵て來る波の碎くる見れば何故となし
　まふ獨樂（こま）のよろぼはしくもなるを見て我もやがてと思ふ悲しさ
　まふこまのめぐり〳〵て末遂に疲れ見えくる老ぞ悲しき
言道と曙覽とは吾輩の最も愛好する近世の二歌人である。曙覽は子規

子の推奬に因つて頗る有名となり、その後曙覽全集も出來た。言道は佐佐木博士の續歌學全書にその草徑集を紹介されたのを始とし、この度その遺稿に梅野氏の傳記佐々木氏の評論を添へて、大隈言道と題する册子が新たに出來たのは誠に喜ばしい事である。子規子に志濃夫廼舍歌集を見るべく其書を貸與したのは、佐々木博士であつたと記憶する。さらば曙覽も亦博士に負ふ所あり、博士が顯揚の功大なりといふべきである。

江戸文學研究 終

大正十年四月廿五日印刷
大正十年五月　一日發行

江戸文學研究

定價金五圓

不許複製

著作者　藤井乙男

發行者　内外出版株式會社代表者
京都市下京區三條通御幸町西入
大谷仁兵衛

印刷者　京都市下京區北小路通新町西入
須磨勘兵衛

發行所
京都市下京區新町七條上
内外出版株式會社
振替大阪 三二九五五番

内外出版株式會社印刷部印行